

# アラスカ譚奇

◆ 新しい風俗文獻誌

6



昭和四十六年五月二十日印刷 昭和四十六年六月一日発行 六月号第二十五卷第六号(毎月一回)日発行 昭和二十一年四月二十日第三種郵便物認可 昭和四十二年四月二十日 且同紙大島特別夜水誌雜誌第二〇号



奇譚クラブ 臨時増刊

女体緊縛写真集 V 定価一〇〇〇円(送30円)



天然色写真

柔肌に喰い込む麻縄 前田真知子  
首縄横臥二態 前田真知子  
典型的後手縛り 前田真知子  
自由な肢のもたえ 前田真知子  
麻縄と続肌の明暗 前田真知子  
厳しい縄目を味う 前田真知子  
準備態勢OK 前田真知子  
股間縛りの表情 前田真知子

女体緊縛の華 本誌写真部構成

金髪碧眼の美女	シラ・ケイ
答打ちの態勢	関谷富佐子
鞭撻の痛苦	関谷富佐子
浣腸責の序曲	長井葉津子
亀甲縛りの美態	左近麻里子
麻縄と白肌の対照	中河恵子
陽を浴びた柔肌	左近麻里子
猿ぐつわに喘ぐ	中河恵子
緊縛裸身の露り	中河恵子
責め疲れの放心	梨花悠紀子
没我の心境	中河恵子
痛打の末の悦虐	関谷富佐子
沖縄美人の緊縛	座間富明子
剣玉子の縛り	佐々木真弓
狂変する裸女	川路叢子
責めくたびれて	佐々木真弓
紅毛碧眼の白人を責める	シラ・ケイ
海老責の狂態	川路叢子
鞭打の下の挑戦	座間富明子
祭壇の人身御供	関谷富佐子
稚妻は縄を知りぬ	渡部好美子
開股の正面と背面	金原加奈子
華麗な開股責め	中河恵子
イルリガートルを前に	中河恵子
非情な責めの終末	長井葉津子
両手吊りの晒し	中河恵子
柱縛りの完了	川路叢子
処女縛りとまどう	三浦純子
麻縄に身をゆだね	中河恵子
盗視するSMの目	佐々木真弓

緊縛女体の光と影 編集部構成

両手挙げ棒責め	川路叢子
柱宙縛りに浮く	長井葉津子
後手吊りに苦しむ	中河恵子
どこでも責めて	佐々木真弓
鞭の法悦境	関谷富佐子
ムチが痛い、許して	関谷富佐子
柱を挟んだ連縛	関谷富佐子
花と蛇の静子です	中河恵子
針責めをして頂戴	渡部好美子
二つ折りの女体	長井葉津子
猿ぐつわの哀歓	中河恵子
日本式縛りの白人	シラ・ケイ
マソの女王に答	関谷富佐子
柱しばりの恥らう	金原加奈子
夫婦相の艶姿	渡部好美子
長襦袢の艶姿	花坂道美子
豊満ボインを誇る	愛川悦子
美女今縛られる	梨花悠紀子
受入態勢に充てる	関谷富佐子
折檻にも汚れず	前田真知子
責めてみたい碧眼の女	佐々木真弓
日本式高小手縛	シラ・ケイ
猫の目のような風景	絹川文代
足吊りの媚態	中河恵子
亀甲縛りの花	中河恵子
M女二輪の黒髪	渡部好美子
苛責に乱れた黒髪	中河恵子
開股縛りの幻想	中河恵子
鏡の前での放恣	前田真知子
愉悅のひととき	川路叢子
ハリツケ晒し	左近麻里子

これから、どうするの?	長井葉津子
美しき吊り	前田真知子
苦痛か悦楽か	関谷富佐子
一筋の縄の魔術	中河恵子
逆エビ縛りに入る	三浦純子
愛撫の責め	渡部好美子
俯瞰撮影	前田真知子
黒縄と白肌	中河恵子
身動きできぬ境地	座間富明子
浮上した女体	中河恵子
麗しき背面	中河恵子
汚辱の縄	金原加奈子
高手の手縛り	佐々木真弓
責めの陶酔	川路叢子
失神したマソ女	関谷富佐子
前手縛りの天国	関谷富佐子
柱の彼方の責	中河恵子
荒縄の海老責	三浦純子
美と縛の女神	梨花悠紀子
可憐な置物	長井葉津子
ながし目の天使	佐々木真弓
酒の肴になる	川路叢子
妖蛇の洗礼	関谷富佐子
奔弄されるまに	前田真知子
海老縛りの妙味	川路叢子
柱につながれた女	長井葉津子
痛さをこらえる異国の女	前田真知子
責の果の諦観	シラ・ケイ
痛打の一瞬	関谷富佐子
ホステス裸人生	佐々木真弓

カメラ・ハント楽我記 辻村 隆  
女体緊縛の醍醐味を語る 塚本 鉄三







奇譚クラブ

昭和四十六年五月(十日印刷) 昭和四十六年六月一日発行 六月号(第二十五巻第六号) 毎月一回(一日発行)  
昭和三十一年四月(十日第三種郵便物認可) 昭和四十二年四月(二十一日国鉄大局特別掛札承認第210号)

# THE KITAN CLUB

Published Monthly By Akatsukisyupan

Osaka Japan



雑誌コード 2805

6月号 ¥350



本誌愛読者の美女たちの緊縛責め姿態

離島の乙女浩子嬢

芳紀まさに二十才の穢れなき乙女の肌に妖蛇の縄はからみつく。

膨満なる乳房責め

大手札三枚一組 四〇〇円  
高村 浩子 略号△ひら

片足吊りにもだゆ

大手札三枚一組 四〇〇円  
高村 浩子 略号△ひむ

初縛りの羞らしい

大手札三枚一組 四〇〇円  
高村 浩子 略号△ひな

縛りは大好きなの

大手札三枚一組 四〇〇円  
高村 浩子 略号△ひれ

二十才の羞恥縛り

大手札三枚一組 四〇〇円  
高村 浩子 略号△ひつ

恥しき緊縛ポーズ

大手札三枚一組 四〇〇円  
高村 浩子 略号△ひよ

あどけなき妊婦

五月号のカメラハントで紹介された稚妻富田由美子さんの初産の妊婦腹とその縛りを開陳します。

臘燭責めの妊娠腹

大手札三枚一組 四〇〇円  
富田由美子 略号△へえ

これが妊婦縛りだ

大手札三枚一組 四〇〇円  
富田由美子 略号△へふ

前手縛りの太鼓腹

大手札二枚一組 三〇〇円  
富田由美子 略号△へら

臨月腹を縄で縛る

大手札三枚一組 四〇〇円  
富田由美子 略号△へれ

稚妻の太鼓腹観賞

大手札三枚一組 四〇〇円  
富田由美子 略号△へあ

妊婦全裸の羞らしい

大手札三枚一組 四〇〇円  
富田由美子 略号△へう

メロンのような腹

大手札三枚一組 四〇〇円  
富田由美子 略号△へよ

糸まとわぬ妊婦

大手札三枚一組 四〇〇円  
富田由美子 略号△へや

ベテランと新進

Mの快味に慟哭する谷山久美子とほのかなSMに憧憬する美女前

田真知子の最新縛り責め紹介。

強烈エビ縛り地獄

大手札三枚一組 四〇〇円  
谷山久美子 略号△ひあ

麻縄開股責め地獄

大手札三枚一組 四〇〇円  
谷山久美子 略号△ひて

開股縛りの強烈さ

大手札三枚一組 四〇〇円  
前田真知子 略号△ひえ

白肌に喰い込む縄

大手札三枚一組 四〇〇円  
前田真知子 略号△ひま

後手吊上げに呻く

大手札三枚一組 四〇〇円  
前田真知子 略号△ひの

開股責めの醍醐味

大手札三枚一組 四〇〇円  
前田真知子 略号△ひこ

縄で汚す清纯乙女

大手札三枚一組 四〇〇円  
前田真知子 略号△ひふ

エビ責に映える肌

大手札三枚一組 四〇〇円  
前田真知子 略号△ひう

捕われの美女泣く

大手札三枚一組 四〇〇円  
前田真知子 略号△ひや

夫婦プレイの華

男性のSに馴致された女性の第1回は本格的なSMプレイへと移行して絢爛たる春の花を咲かせる。

惨酷海老胡坐縛り

大手札三枚一組 四〇〇円  
三浦 純子 略号△ひす

亀甲と後手柱縛り

大手札三枚一組 四〇〇円  
三浦 純子 略号△ひせ

足挙げ開股を拒む

大手札三枚一組 四〇〇円  
三浦 純子 略号△ひし

臀部責めの悦楽境

大手札三枚一組 四〇〇円  
三浦 純子 略号△ひみ

胡坐縛りで責める

大手札三枚一組 四〇〇円  
三浦 純子 略号△ひも

髪を掴んで苛める

大手札三枚一組 四〇〇円  
三浦 純子 略号△ひさ

化粧室とトイレ責

大手札三枚一組 四〇〇円  
三浦 純子 略号△ひん

股間縛りと臀部責

大手札三枚一組 四〇〇円  
三浦 純子 略号△ひゆ

◎お申込方法◎御注文は前金にて(送料は当方負担)大阪市阿倍野郵便局私書箱14号天星社宛へ略号を記載してお申込み下さい。



## 徹底の自誌本

一、本誌は特殊な風俗文献を研究する平和で  
 穏健な社会生活を営む真面目な成人を対象  
 として編集しておりますが、青少年の保護  
 育成に関する条例には抵触しないよう、十  
 分な配慮を今後更に徹底いたします。

一、本誌では従来巻頭を飾っておりましたグ  
 ラビア写真並に口絵を全廃し、文中の挿絵  
 の削減に努め、読む雑誌としての体裁を順  
 次整えて参りましたが、更に挿入写真の検  
 討及び見出し、キャッチフレーズの改訂な  
 どによって煽情性を排除してゆきます。

一、本文の内容についても、刺激の強いもの  
 は極力掲載しないようにするのは勿論、掲  
 載した文章は十二分に検討を加え、いやし  
 くも青少年の健全なる育成に支障を与えな  
 いよう努力いたします。尚、本誌の発行部  
 数は最低限度にとどめ、その増大を企るた  
 めの努力はいたしません。



## 奇譚クラブ

△第二五卷 第六号・通刊第二八〇号▽

(昭和四十六年) 六月号 目次

△本 文▽

扉で一言「不可解な女性心理」	金岡 謙吉	(9)
レポート「二度目の撮影行」	城 章夫	(10)
懸賞入選『深夜の下着』	工月 洋一	(16)
短篇創作「甘いゲーム」	藤村 優士	(25)
連載小説「大噴火」	△第三十回▽ 千葉 青鬼	(28)
SM界の女帝「モニク・ヴァン・クリーフ」	三原 寛	(36)
告白「浣腸プレイに魅せられて」	渡部 好美	(42)
感想と念願「四月号を読んで」	羽鳥 水江	(45)
連載・アブ紳士行状記「M派交友録」	(17) 鬼山 絢策	(46)
懸賞入選「瓦礫の塔」	巷野悪太郎	(56)
随筆「禪美絶唱」	不二 天流	(65)
連載小説「パノラマ島秘譚」	(4) 藤見 郁	(68)
短篇創作「下宿人勧誘」	伏虎 久作	(84)
被虐の実例に想う「吊るし責め」	(下) 柴 利好	(88)



# 奇クサロン

(232)

SMに対する情念

小杉 千恵

愛妻こそ無二のプレイメイト

小田原 一郎

サロン楽我記 八十八十四回

辻村 隆

イメージ画 「招待客室」

宮城 昌子

フォト 「捕えられた花嫁の哀美」

山本 五郎

短信往来 おめでとう、みさ子さん

中宮 栄

懐昔記 二つの菱縄フォト

早木 夢二

イメージ画 「調教師ご入来」

志羽 利也

最近のニュースから

奈 生介

フォト 「幸福なる白馬を羨望する」

佐野 寿

ショートショート 「スピードの5」

小倉 幸男

スワッピングとSMプレイ

野村 忠

編集部だより

編集部

自慰夢想 四月号を読んで

椿 雄二郎

千代奥様への手紙

北川 まりこ

フォト 「深夜の奴隷犬」

犬 畜生

五月号読後感想

乃美 対造

イメージ画 「空気を裂く喰り」

川口 たえこ

わが毒舌 SMはイメージの世界

山川 清

イメージ画

緑 JOE

「ブランコって楽しいでしょう」

兵庫 H・H

交換SMプレイ初歩者の願い

峰 真琴

SMいろは唄ごよみ

新田 英雄

フォト 「わが妻ゆう子」

末広 平三

よみがえれSM時代劇映画

城二・

イメージ 「赤ちゃん責めの構想」……………城崎 狂介……………(98)

女責め図絵の系譜 “女体拷問具のいろいろ”……………南 彦造……………(100)

晴着奇譚 「無残の刑」……………牧 高志……………(108)

連載M小説『則天武后』(2)……………真砂十四郎……………(122)

告白 “奴隷牝みさ子の過去”……………佐野みさ子……………(133)

水田真紀子 花の蕾の散るとき……………水田真紀子……………(136)

告白 “おむつ・おしめの社会性”……………岩手 信夫……………(146)

SMカメラ・ハント八范恵栄の巻

タイペイシヤオチエヘンハオ

『台北小姐很好』……………辻村 隆……………(154)

おお・ウーマンリブ アブの記事スクラップ……………虹丸 虹吉……………(187)

連載小説『花と蛇』 八統篇第七十五回……………団 鬼六……………(190)

告白「妄想の自画像」……………高村 浩子……………(201)

創作連載 “幻想帝国” (3)……………花影 叢……………(208)

セミ告白 忘れぬ被縛女体……………青井 松造……………(218)

青春の陥穽 (10)『二つの鍵』……………芳野 眉美……………(220)

読者通信……………編集部選……………(252)

読者ギャラリ―「アニマル」室井亜砂路・「白鳥

の苦悦」生吹寿々夫・「褐色の誘惑」豪 城二・

「若き頃を偲ぶ」岡 たかし・「お流れは？」「給

食水」春川ナミオ

目次カット……………「もの想う乙女」……………あらいかず

扉カット……………「ハリツケ願望」……………越原 秀美



△最新撮影▽異色美人モデル緊縛フォト選

Y組新百態 大手札型印画紙 (9×13 極鮮明焼付)

各組 一枚一組 (送料共)

四組四枚	五〇〇〇円
十組十枚	一〇〇〇〇円
二十組二十枚	一八〇〇〇円
五十組五十枚	四〇〇〇〇円
百組百枚	七〇〇〇〇円

(郵便番号 545-91)

いずれも直接印画紙に焼付けた極めて鮮明美麗なフォトで複写ものは一枚も含まれていません。貴重なコレクションとして永久に保存して頂くに足る優秀品であります。お申込みは大阪市阿倍野郵便局私書箱第十四号天星社宛へ前金にて願います。

☆

10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
痛苦に耐える女(三浦純子)	喘ぐ縄猿轡痛め(三浦純子)	正面エビ強烈責(三浦純子)	海老縛り閨責め(三浦純子)	エビ責め縄猿轡(三浦純子)	麻縄強烈柱縛り(三浦純子)	二つ折り腎挙げ(三浦純子)	尻挙げ開脚責め(三浦純子)	開股パイプ責め(三浦純子)	台上に晒す全裸(三浦純子)

37	36	35	34	33	32	31	30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12	11
全裸緊縛の愉悦(渡部好美)	閨中の股間縛り(渡部好美)	悦虐の開股縛り(渡部好美)	蛾涙責めに哭く(渡部好美)	開股責めの序曲(渡部好美)	責に諦観の美貌(前田真知子)	逆反り弓吊り責(前田真知子)	光に映える白肌(前田真知子)	裸女を押込める(前田真知子)	柔肌に喰い込む(前田真知子)	首縄菱亀甲縛り(前田真知子)	純肌を柱に晒す(前田真知子)	全裸の美女に縄(前田真知子)	鏡に映るエビ責(前田真知子)	白肌をくびる縄(前田真知子)	緊縛に悶える足(座間明子)	開股縛りに諦観(座間明子)	後手縛りを誇る(座間明子)	美しき全裸縛(座間明子)	股間縛りに喘ぐ(座間明子)	高らかに笑う顔(座間明子)	沖縄美人の表情(座間明子)	豊満を縛る魔手(座間明子)	開股正面逆立責(三浦純子)	二折りの引直し(三浦純子)	驚づかみの黒髪(三浦純子)	

68	67	66	65	64	63	62	61	60	59	58	57	56	55	54	53	52	51	50	49	48	47	46	45	44	43	42	41	40	39	38
羞恥に悶える女(叢子・好美)	連縛双丘の珍景(好美・叢子)	椅子開股の二人(好美・叢子)	高手小手を開陳(好美・叢子)	全裸の二女陳列(好美・叢子)	責め疲れた二女(好美・叢子)	柱に二女の連縛(好美・叢子)	女性自身を晒す(谷山久美子)	哀憫非情な麻縄(谷山久美子)	条痕を尻に残す(谷山久美子)	ムチ打ちに泣く(谷山久美子)	徹しき後手縛り(谷山久美子)	情容赦ない麻縄(谷山久美子)	大の字開股縛り(谷山久美子)	強縛愉悦の極み(谷山久美子)	椅子開股で晒す(谷山久美子)	苦悶の末の頂点(谷山久美子)	責めるの許して(谷山久美子)	齒で咬んだ猿轡(谷山久美子)	緊縛最高の悦楽(谷山久美子)	悦虐悶えの果て(谷山久美子)	極限の苦痛襲う(谷山久美子)	苦痛に反る足指(谷山久美子)	アニマルの表情(谷山久美子)	赤裸の尻を暴く(谷山久美子)	強烈二折り責め(谷山久美子)	海老責に喘ぐ顔(谷山久美子)	股間縛りの正面(三浦純子)	愛妻飼育の過程(三浦純子)	ムチ打ちの洗礼(三浦純子)	爛熟した女体責(三浦純子)

100	99	98	97	96	95	94	93	92	91	90	89	88	87	86	85	84	83	82	81	80	79	78	77	76	75	74	73	72	71	70	69
縛った異国の女(シーラケニ)	暈の上に転がる(シーラケニ)	卓上の一輪の花(シーラケニ)	投げだした全裸(シーラケニ)	諦観白人の表情(シーラケニ)	高手小手に縛る(シーラケニ)	金髪碧眼の女性(シーラケニ)	白人の肌を縛る(シーラケニ)	碧眼に驚きの目(シーラケニ)	日本式胡坐縛り(シーラケニ)	両手挙げ美肌晒(シーラケニ)	後手縛りで開脚(シーラケニ)	金髪は縄に動く(シーラケニ)	白肌と汚れた縄(前田真知子)	美は麻縄を超越(前田真知子)	無垢の肌に麻縄(前田真知子)	Mを恋する表情(前田真知子)	灯籠の前で縛る(前田真知子)	一糸まとわぬ女(前田真知子)	伸びやかな肢体(前田真知子)	麗しき首縄旅情(前田真知子)	三本の棒で拘束(川路むら子)	棒縛り羞恥責め(川路むら子)	足挙げ正面棒責(川路むら子)	点火した蠟燭責(渡部・川路)	一体にした緊縛(渡部・川路)	捕われの全裸像(渡部・川路)	尻も何も丸出し(好美・叢子)	股間縛りの併立(叢子・好美)	正面相對の連縛(叢子・好美)	羞らう美女二人(叢子・好美)	美しき床の飾り(叢子・好美)





越原 秀美・画

K.K

## 不可解な女性心理

「いや、いやは好きのシノニム」と云われるように、若い女性を後手にして縛り上げようとする、本心は縛ってほしいと思っけていても、口では「いや、いや」と云う。それを本気にして、縛るのを止めてしまうと、「なんと気のきかない男なんだろう」と云われることになる。

昨今、気のきいた若い女性だったら、口では「いや、いやッ」と云っておつても、身体を悶えさせるようにして両腕を自然に背後で縛り易いようにぐらひはするものだ。本当に八嫌やVなものか、単にゼスチュアだけのものかの判断は、少し慣れてくれば良く判るものである。八お芝居Vである「人生」以上に、男女間の密事こそは『演出』のテクニクが大切である。ましてやSMに関しては、如何にうまくお膳立てをし、それを筋書き通り運ばせるかにある。

一見不可解に見える女性心理も、その要点さえ掴んでしまえば、あとは応用動作で如何様にでも意のままに誘導してゆけるのであるから、先ず縄を小道具として彼女の心をしっかりと引きつけ、その上でゆっくり女体を縛る甘美な楽しみを噛みしめながら味わえばよいのである。

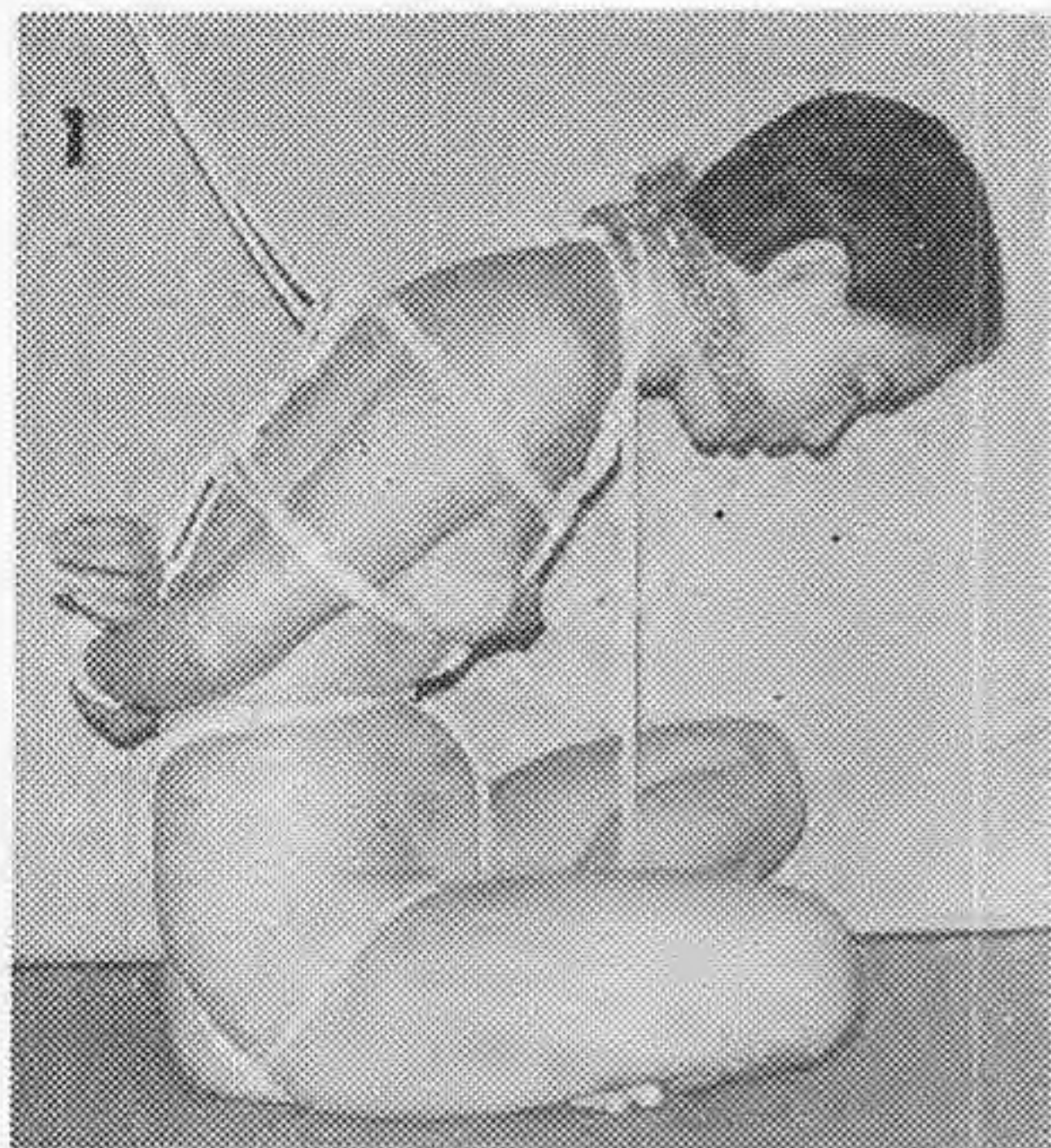
(金岡 謙吉)



## 二度めの撮影行

城

章 夫



旅行シーズンではないとはいえ、  
 気持よく晴れあがった土曜の午後。  
 それなのに、伊豆急の電車からその  
 駅に吐きだされたのは、ぼくらの他  
 に、ほんの三、四人だった。駅前に  
 は一軒の店も家もなく、荒れた草原  
 を横切って小さな川が流れているば  
 かり。

こんな穴場が伊豆の温泉地にあろ  
 うとは……。予想もなかった鄙び  
 た風景に、ぼくらの旅情は、いやが  
 上にも、かきたてられる。

時代劇のシーンにふさわしいよう  
 な、古色蒼然とした木の橋を渡って

少し行くと、やっと舗装した広い道につき当  
 たる。下田街道である。さすがに車がせわし  
 く行き交っている。

ぼくらの今宵の宿は、その街道に臨んで建  
 っていた。しかし、くねくねと曲る廊下を上  
 がったり下がったりして案内されたのは、奥  
 まってひっそりとした部屋だった。

ぼくらの旅の目的には、おあつらえむきの  
 部屋だ。案内してきた番頭のうしろで、ぼく  
 と那津子は目を見合わせてニコツとわらう。  
 旅の目的——いうまでもなく、那津子をモデ  
 ルとしての第二回目の緊縛写真撮影である。

三カ月ほど前の撮影行は初めてのせいもあ  
 って余りうまく行かず、四時間ほどかかった  
 撮影に、カメラマンのぼくもモデルの那津子  
 も、くたくたにつかれてしまった。だが、今  
 度は二度目だ。きっと、いい写真をとってや  
 るぞ。……ぼくは大いに張り切って一週間も  
 前から、例のとおり、細かい撮影コンテを練  
 りあげていた。

これが実は楽しみなのだ。縄は、こんな形  
 にかけてみよう。猿ぐつわは、どんなふう  
 に噛ませようか。それから、こんなポーズをと  
 らせてみよう。いや、こっちの角度から撮っ  
 たほうがいいかな。ああでもない、こうでも



ないと散々考えあぐね、その時その時の那津子の姿態を脳裏に描いては消し、消しては描いた末、ようやく書きあげた撮影コンテ——

それによると、撮影枚数は五〇枚ほどになる。とても、ひと晩では、とりきれまいとは思ったが、フィルムは三六枚撮りフジ・ネオパンSSを一本と二〇枚撮りを一本（ロスを見込んでも、これで充分すぎるほどだろう）用意した。それと、前回はフラッシュ・ガンがうまく作動しなかったし、一枚とるたびにタマを入れ換える手間が案外バカにならないので、こんどはストロボを借りてきた。それと約一米の長さの竹の棒を2本。猿ぐつわ用には、海老茶の地に桜の花を点々と白く染め抜いた、ぼくのお気に入りの手拭い。湯上がり

の那津子の全身に塗りこむオリーブ油。……これが、ぼくの用意してきた品々である。

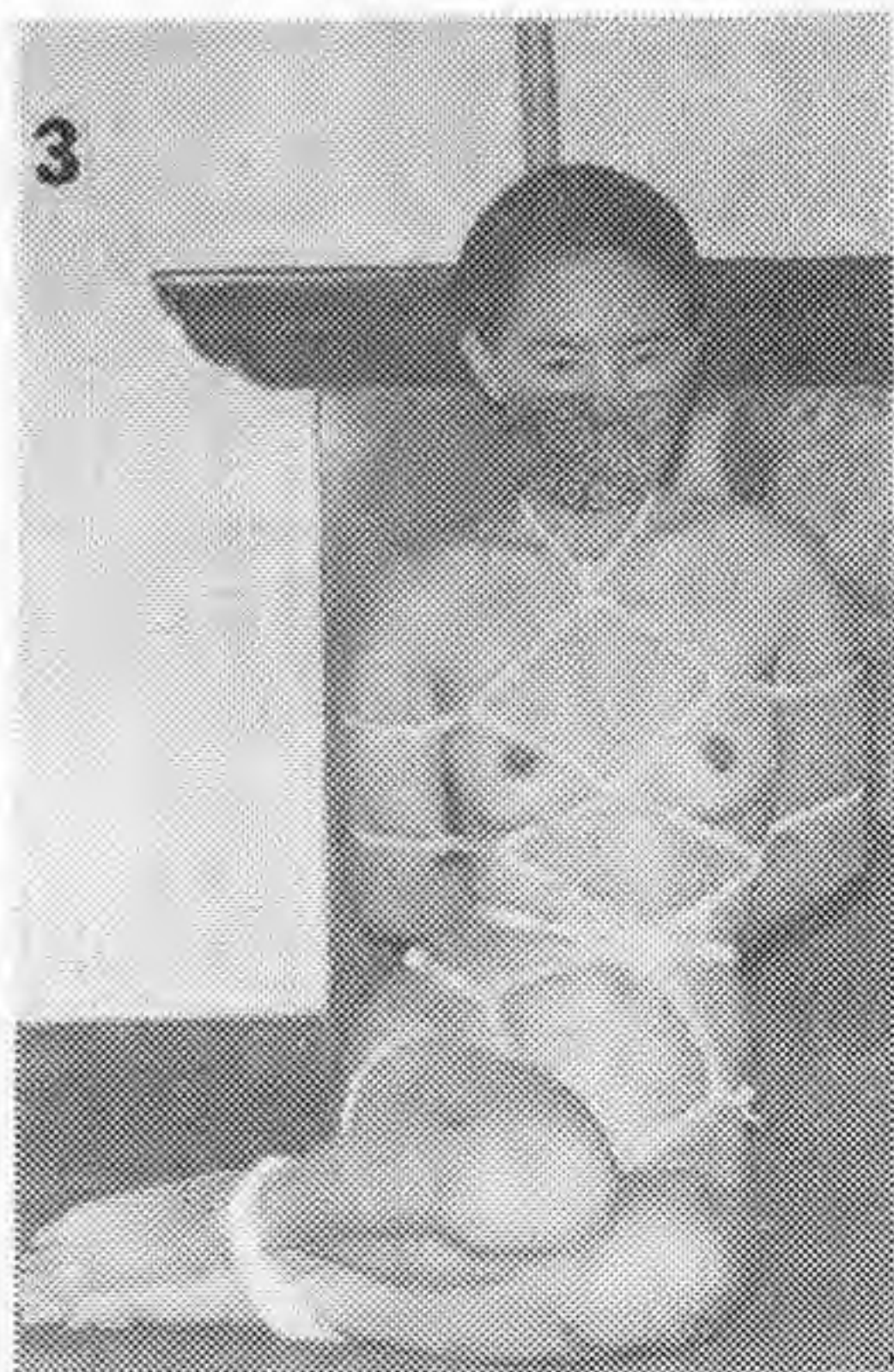
順序が逆になったけれども、カメラは日頃愛用のキャノンP。これはキャノンの普及型ともいうべきもので、レンズもF二・八と、あまり明るくないし、露出計もついていないが普段のスナップ撮影には、これで充分だ。しかし、狭い室内での、こうした緊縛写真撮影で、モデルを画面いっぱいうまく納めるには、一眼レフがほしいと沁々思う。

那津子の方の用意は縄が四本である。これは、ずっと以前、デパートの雑貨売場でぼくが買ったものだ。

荷造り用か、あるいは洗濯物を干す紐として売られているのだろう。長さ六米ばかりの白い木綿を編んだ縄である。二本は、そのまま他の一本は丁度、半分に切って長さ約三米のものを二本。長短二本ずつ、計四本の白い縄なのだ。

ぼくは、この縄を那津子に預けてある。二人が逢うときには、必ずそれを那津子に持ってこさせる。しばらく使うとオリーブ油が泌みこみ、それが酸化して、ちょっとにおうようになる。そこで別れ際に「こんど逢う時までに洗っておけよ」と言いつけておく。そんなことを繰り返しているうちに、初めは真っ白で、いささか硬かった縄が、薄ずんだ灰いろになり、やわらかく、しなやかになってきた。その四本の縄を、今日の那津子は旅行用の肩掛けカバンに入れてきている。

こうして那津子に縄を預け、管理させてお



くについては、もちろん、それなりの計算があるのだ。自分の手首をくくり合わせ、二の腕にまといつき、首を、乳房を、胴を締めつけ、股間を割り、太腿を縛りあげる縄——それを洗濯し、干し、きちんと束ね、つぎの逢う瀬のときまで手もとにしまっておく。そのプロセスのひとつ、ひとつが那津子の心情に被虐の欲びを泌みこませて行くのだ。

けさ、東京を発つときに、那津子は、どんなおもいで、この四本の縄を旅行カバンの底に入れただろうか。ぼくは、それを聞きはしない。那津子も、それを語りはしない。しかし、ぼくにはよく判るのだ。カバンに縄を入





れるとき、それが自分の裸身にからみつく刹那を思い描いて、那津子の手が妖しい快樂の期待にふるえたであろうことが。

ところで、ぼくらの通された部屋だが、これが、ちょっと変わっていた。炬燵のおかれた四畳半の座敷。一段さがって暖炉のとりつけられた一〇畳敷ほどの広さの洋間があり、その横に浴室がついているという間取り。ひと目みたたん、あ、この暖炉は、いい背景になるな（ところが、結果的にいうと、これはかえって失敗だったのだが、それはもう少し、あとの話）と思った。

そこで、撮影は座敷と洋間の両方でとることにしてまず座敷のほうで胡座縛り海老責めのポーズ。

素裸で立ったまま後ろにまわした那津子の手首を、短い方の縄で縛り合わせ、余った縄で乳房の下をふた巻き、つづいて、上をふた巻き、長い方の縄で腰をふた巻きすると、那津子のからだには二条の縄がかかったことになる。それから、

もう一本の長い方の縄の真中を那津子の首に掛け、その三条の横縄に、つぎつぎとからませながら縦に縛ってゆく。三番目の横縄にからませた縄はそのまま下に延び、股間を抜けて双丘をさかのぼり、腰を縛った横縄に連結そこで左右に振りわけられて双丘を、それぞれ斜めに横切り、腿のつけねを縛り上げる。

ハンカチを口におしこみ、手拭いは西洋風に口を割って噛ませる。それから、あぐらをかかせて、残った短い方の縄で足首を縛り合わせる。余った分は、上半身を前にかがませた那津子の首にかけて引き絞る。あんまり深

く前かがみにさせると痛がるので、海老責めというには、ほど遠いが、——苦しめるのが目的ではないのだから、今夜はこの程度で、まけておいてやろう。慣れてきたら、そのうちに本格的な海老縛りをやってみよう——などと考えながら、シャッターを切ったのが第一図と第二図の写真である。

そのあと、仰向けにひっくり返したり——こうすると、交叉して縛られた手首に体重がかかって、ひどく痛がるので、不本意ながら手首の下に座布団をあてがってやる——あぐら縛りの縄を解き、竹の棒を足枷として八の字形に縛り直したり、とうてい、人には見せられないようなポーズを幾つかカメラに収めた。

それが終わると洋室におりて、暖炉を背景に撮影を続ける。コンテに従えば、こんどの縛り方は三重菱縛。これは左右のシンメトリ——が比較的うまくいって、まずまずの出来栄えだ（と、その時は思ったのだが、写真ができあがってみると、乳房の上下、そして腹部に描いた三つの菱形が、かなり歪んで、シンメトリカルな線を描いていない。左右均齊よく綺麗な幾何学的模様を女体に描きだす縄のかけ方こそ、ぼくの理想とするところなのだ



が)

それから竹の棒を背中の縄に縦に通して、ちょうど棒を背負ったような具合にする。猿ぐつわは鼻まで覆って強く引きしぼり、手拭いの端を、その棒に結びつける。こうして下にも横にも向くこともできなくなった那津子を横坐りにさせて両足首を揃えて縛る。このポーズでまず前から一枚。

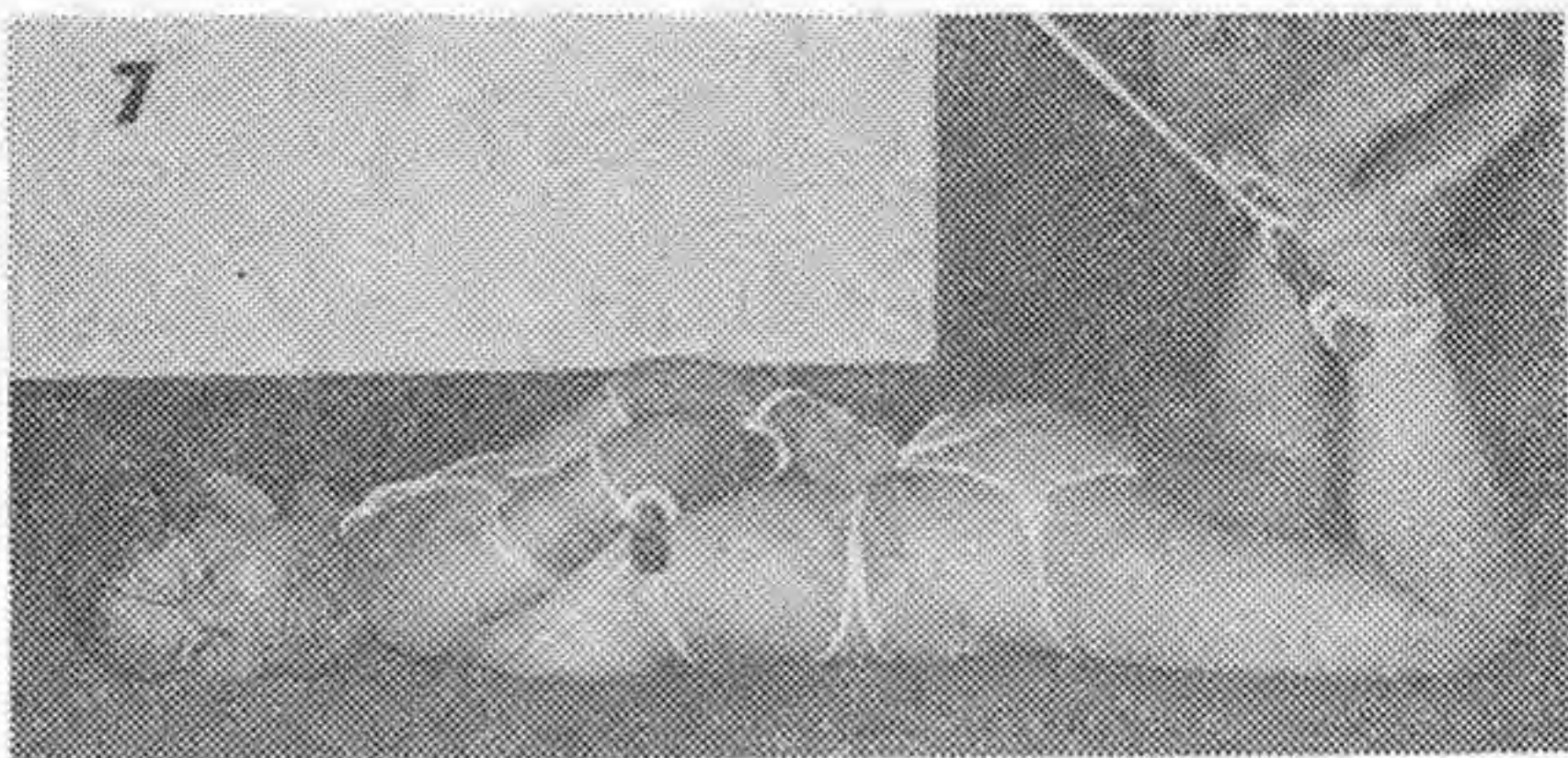
## (第三図)

猿ぐつわの手拭いを余り締めすぎたので那津子の顔がゆがみ目がひきつれて変な表情になってしまった。

やはり、リアリズム一辺倒では駄目なところだ。緊縛

感はあるても、モデルの美しさが損われては何にもならない。日常生活における真実が、

そのまま舞台の上の真実とはなり得ないこと——些末主義的な現実模倣を放棄して、全く次元の異なった舞台の上での現実を創造しなければならぬことを、ぼくはすっかり忘れて



いた。緊縛写真だから、ただギリギリと縛り上げればいいというものではない。そこには、やはり美しさがなければならぬと思う。モデルの顔を「醜く」ひきつらせるほど強く猿ぐつわをかけるのは、これはやはり糞リアリズムというものだろう。

それと、暖炉のことだが、先にもちよつと触れたようにこの背景は失敗だった。小道具やゴチャゴチャした背景は一切、不要だと思う。薄い茶褐色か灰色の無地の壁——縄をかけられた女のからだはクツキリと浮かびあがるようなそんなバックが一番いいのではないだろうか。このへんは人によって異見のあるところだろうが、ストリー性のある小道具、なにかの物語へと連想をいざなうような背景などは、舞台写真ではあるまいし、緊縛写真の撮影には、なくもがなではないだろうか。必要なのは、縄で縛り上げられた美しい女のからだだけである。

ここで大切な役割を演ずるのは、臨終の床に横たわったゲーテの言い草ではないが、「光を！」であろう。つまり適切、効果的なライティングである。

こうした点で、本誌一月号と二月号に掲載された朝野祐氏の所説には、傾聴すべき点が少ない。たしかに同氏の指摘を待つまでもなく、瞬間的に強烈な光を浴びせかけるフラッシュの照明では、モデルの描写が平板になるのは当然といえよう。フラッシュ・ガンやストロボで我慢しているのは、今のところ必要な器具や資材をもっていないからにすぎない。いや、それと、もう一つ。少なくとも今のぼくの段階では朝野氏の謂う「芸術的な写真よりは、平板でも鮮明な、いわば標本写真的なものを求めているせいもある。例えば蝶の収集家が、捕えた蝶の翅を綺麗に広げて、標本箱にピンで留めておくように、ぼくの場合、さまざまに工夫して縄をかけた女体を「克明に」描写した写真をこそ、求めているのである。

その限りでは、朝野氏の示された作例の如く、画面の半ばが暗闇にクエード・アウトしているような写真は、失礼ながら、ぼくにはあまりアピールしないのも致し方あるまい。



(むろん、これはぼくの現在の段階が、朝野氏の到達された段階より、はるかに低いせいでもある)

次に足首の紐を解いて、ちょうど仏像にみられる結跏趺坐に似たポーズをとらせる。つまり、あぐらはあぐらだが、足の裏と裏とを合わせるような坐り方をさせて両足の親指を縛り、余った縄を左右にわけて、太腿にぐるぐる巻きつける。(第四図)

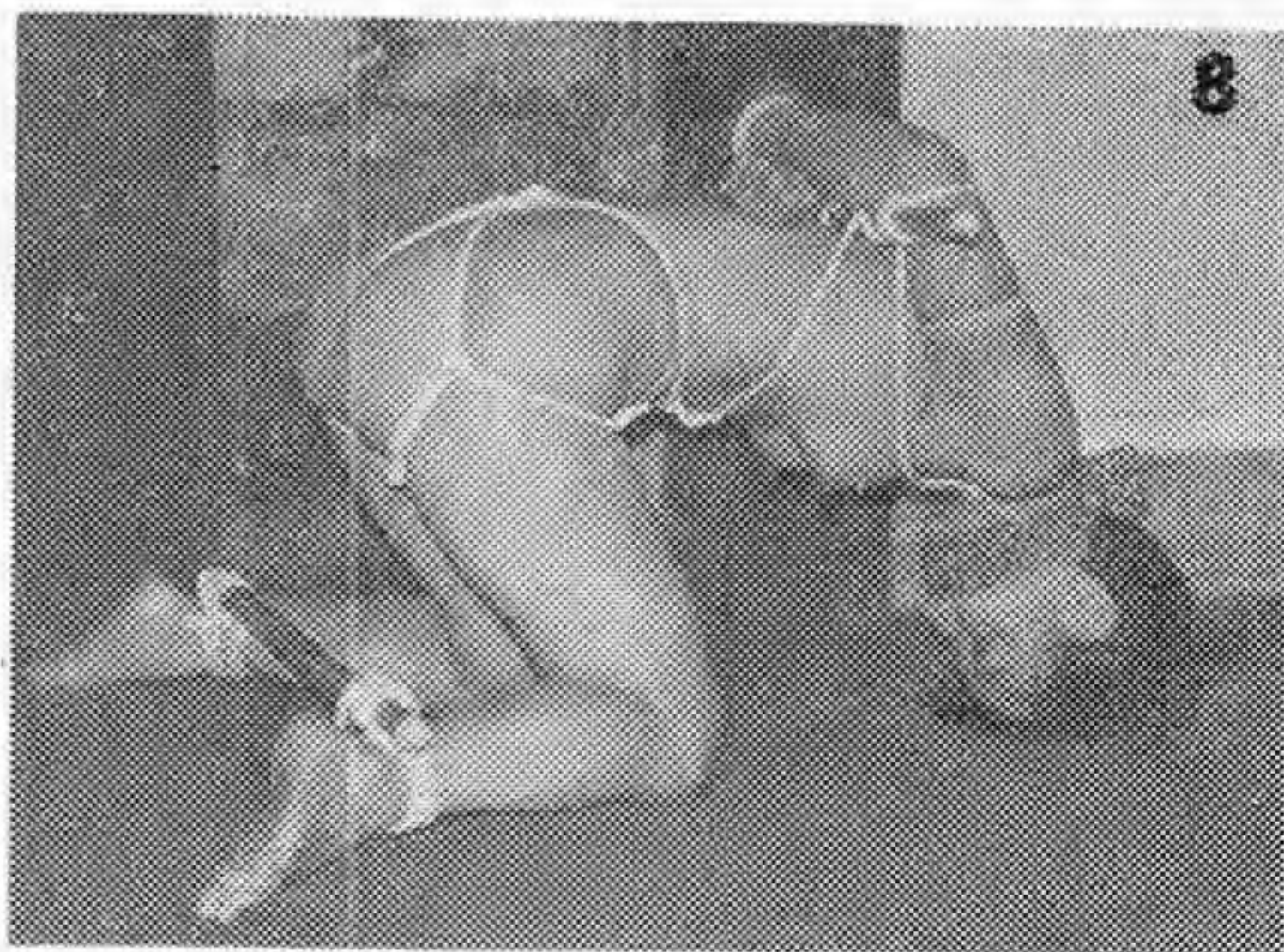
そうこうしているうちに、那津子が寒いと言いだした。だいたい、この部屋の暖房が余りよくない上に、暖炉が形だけの飾り物ではなく、今こそ、まるで使われていないようだが、ちゃんと煙出しの穴が外へ通じていて、そこから冷たい風が吹きこんでくるのだ。撮影を始めてから、もう二時間はたったろう。それじゃあ、ちょっとあったまっておいでとそこはバス付きの部屋のありがたさ、那津子がお湯に入っているあいだ、あり合わせの包み紙で暖炉の奥の煙出し口をふさぎ、それから炬燵に足をつこんでコンテを検討する。いままでに、ようやく一六枚、撮ったばかりだ。コンテの五〇枚は、とうてい無理とは思っていたけれども、この分では三六枚撮りのフィルムを一本とり終わるのが、精一杯だろ

う。プランを大分、変更しなければならぬ。あの縛り方はやめにして、今度はこれにしようなどと考えているところへ、那津子がお湯からあがってきた。

お茶をいれ、お菓子を摘まみ——それからしばらく、ぼやっと顔を見合わせていると、いままで気がつかなかったが、水の流れる音がする。湯船をあふれる温泉が、小さな流れとなって窓の下を走っているらしい。まだ九時を少々回ったただけなのに、広い宿のなかは森閑としますまいかえている。

ストロボの調子はいいし、とにかく二度目とあって、二人とも最初の時ほどの疲れは感じない。それにしても、縛っては解き、解いては縛り、動きのままならぬ那津子を、抱きかかえるようにしてはポーズを変えさせなければならぬカメラマンのぼくは、まさに重労働だ。何を好き好んでと、我ながら苦笑せざるを得ないが、これも少数異端の病いにとり憑かれた故とあれば仕方がない。

さあ、次へ行こうと那津子を促して再び洋間に降り立つ。こんどは手慣れた乳房を中心としての一重菱縄縛りだが、竹の棒を一本、後手に縛った肘と肘の間を横に通して変化をつけようというアイデアだ、両肘の外へ、は



8

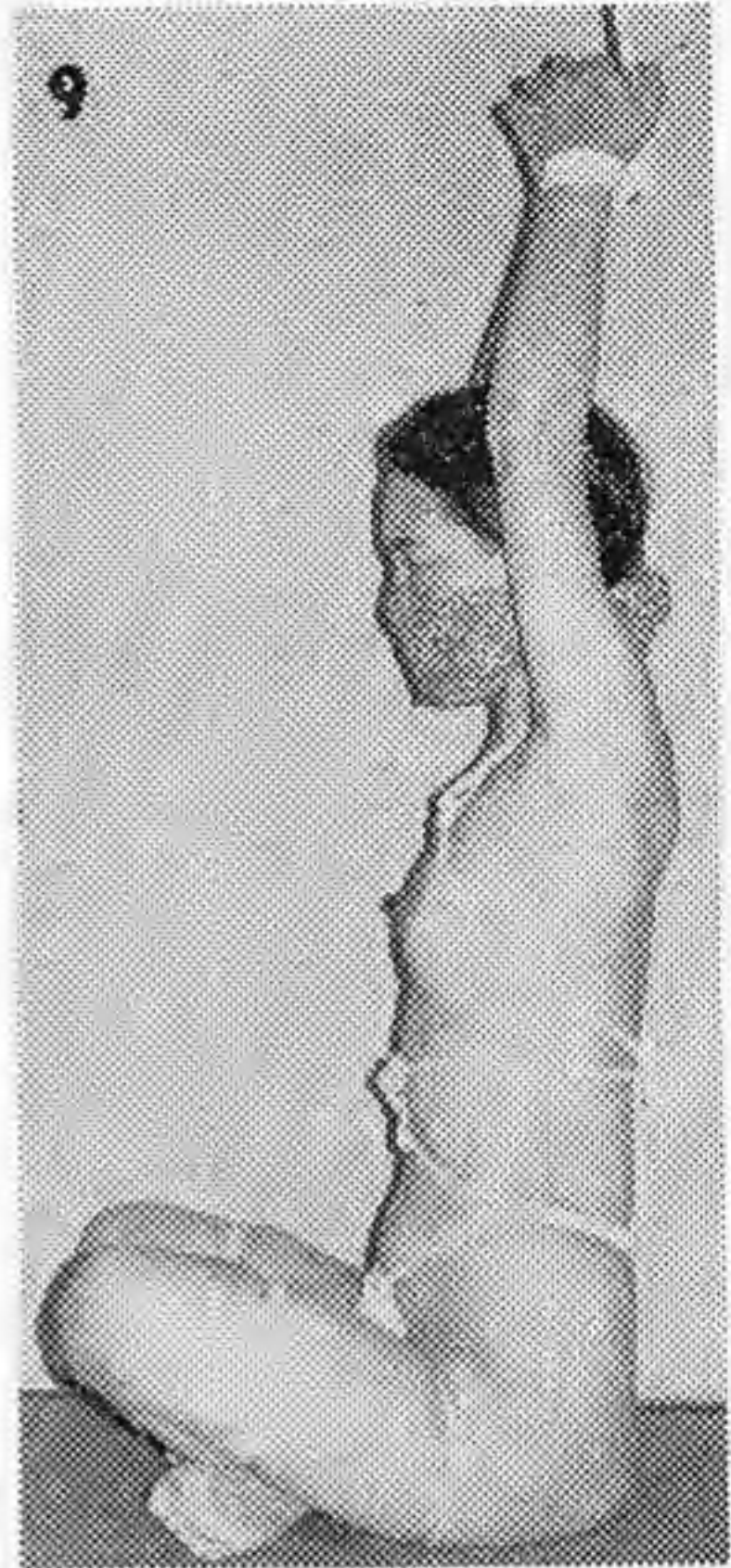
みだす棒の長さが、正面から見ても均等になるようにからだにかかった縄が、すべて左右均斉の線を描くようにと、注意に注意をかさねながら、慎重に縛って行く。それから猿ぐつわ。こんどは手拭いを鼻までかけず口だけを覆う。実際なら、こんな掛け方では、いくら頬がくびれるほど手拭を引き絞っても、すぐに外れてしまうのだろうか——。



片膝を立てて坐ったポーズをとらせ、正面から、横から、背面からと矢継早にストロボの光を浴びせかける。(撮五、六図)

続いて、うつむけに押し倒し、開かせた両足首に、もう一本の竹の棒を縛りつけて足枷とする。その棒の真中に縄を結びつけ、鴨居に引っ掛けてグッとひっぱると、那津子の足首が持ちあがる。縄をもっとひっぱれば逆海老になるのだが、あまり痛めつけるのも可哀そうなので、下脚部が垂直に立つ程度でやめる。背中にも竹の棒を一本、背負わされているし、これだけでも那津子は結構、苦しそうな顔をしている。頬に髪が乱れかかり、被虐ムードたっぷりの写真がとれた。(第七図)

足首を吊り上げていた縄を解き、那津子のおなかの下に両手を入れて抱き起こし、尻立



ての姿勢をとらせる。頭を床にすりつけて、苦しそうに眉をしかめている那津子。その表情が、よく見えるようなアングルを選んで、シャッターを切った。

(第八図)

一〇時も半ばを過ぎていく。フィルムも残り少なくなっただし、あとは一瀉千里に撮りまくろうと、大急ぎで那津子の縄を解く。縄がぐいこんで、からだのあちこちに赤黒く縄のあとがついている。そんな縄のあとを那津子がこすろうとするのを、「さあ、もうちょっとで済むから我慢して」と、せき立て、和室にもどって、あぐら縛りの両手吊り。猿ぐつわは目の直ぐ下まで、たっぷり覆う。顔の半分を手拭にかくされ、目だけがキラキラ光って全裸にむかれ、ひしひしと縛りあげられた女の哀切さが、最も痛切にしみ渡る。やはり猿ぐつわのかけ方は、これが一番いいようだ。

(第九図)

カメラのフィルム指示盤を見ると、もう二枚しか残っていない。たった二枚のために、

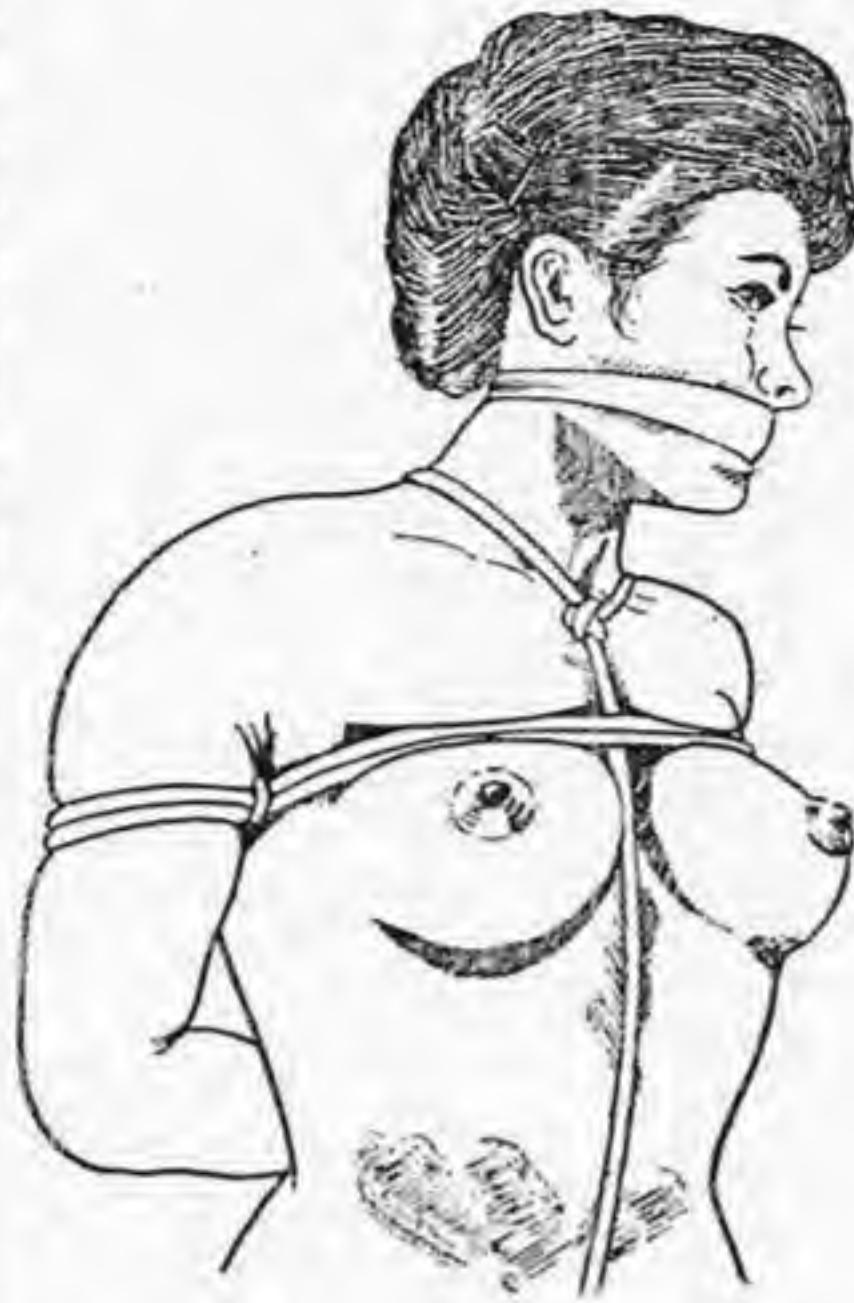
また縛り直すのも面倒とは思ったが、折角ここまで撮影に来たのだ。今後は、いつ撮影に出られるかも判らない。そう思い返して縄を解きいちばん手慣れた一重菱縄に縛り直す。猿ぐつわも——そう、緊縛写真にとって猿ぐつわは大切なアクセントだ。猿ぐつわのない縛りなど、ぼくにとっては考えられない——解いて、新たに口を割って手拭を噛ませる。膝を思い切り開いた坐り方をさせて、最後の二枚を正面と側面から。(第一〇図)

三六枚のフィルムを一本撮り終わると、やっぱり疲れたなという感じが、わきおこる。撮り始めてから四時間はたっぷりかかった。那津子のからだから解いた縄を束ねるのさえ臆却でそのまま部屋のすみに丸めておき、ぼくらは出で湯のあふれる湯船にとびこんだ。お湯のせいで、いっそう、からだの軽くなった那津子を膝の上に乗せ、(アルキメデスの原理!) 手首に赤黒く残った縄のあとを揉んでやると、那津子はそのまま頭を、ぼくの方へ、もたせかけてきた。直夜中に近い冷えた空気の中を、湯気が真白に立ちのぼって行く。ぼくのからだの中で、つかれが物憂い満足感にかわって行くのが、その湯煙よりも、もっとはつきりと見えるようだった。——完——



懸賞入選創作

カット・柏木真佐男



深

夜

の

下

着

工 月 洋 一

寝化粧をして、花の薫りを漂わせながら、私の寝床の側に立った妻の玲子は、するすると全衣服を脱ぎ終えると、私に白い背中を向けて、しゃがみ、むっちりとした背肌の上両手を合わせた。私は、その柔らかな白い両手を握ると、

「すまないね」と、小声で言うなり、ゴムびきの縄で、きつくはないが、外れないように、しっかりと後手に縛り留めた。

この縄は、白木綿の縄で、それに沢山のゴム製品を巻きつけ、接着剤で貼り付けたものである。独特のあめ色で、すべてしたゴムの感触で被われた十米ばかりの木綿縄である。

後ろ手を留めたゴム縄を股間から背後に回した時、妻のむっちりしたヒップが僅かに震

えた。私は妻を後ろから軽く抱いて、肌に唇を当てた。温かく、やわ餅のような感触であった。玲子の前に回った私は、その縄を呼吸のため上下する、へその上を通し、さらに大きく呼吸している胸の双丘の間を通して頸に巻き付けた。玲子は一瞬、悲しそうな表情を見せた。私は、そのゴムの頸縄を、きつくはないが外れないように、しっかりと留めた。そしてゴム縄の嵌まった頸に唇を当て、顎の裏を軽く撫でてやった。温かい生ゴムを撫でたような感じがした。それからゴム縄連結拘束姿の妻の体を横たえ、布団の中に入れ



てやった。玲子は、

「抱いてくだらない」

と、甘えるようにいった。

その柔らかいゴムまりのように弾力のある  
躰と共に、ゴム貼りの縄の滑らかさと堅さが  
伝わって来ると、ぞくぞくするような喜びが  
私の全身に漲ってきた。

よくここまで、きたものだと思った。つい  
この間まで、誌上に、夫婦プレイの写真や記  
事が載っていても、羨ましさを通り越して作  
りごとのような気がしていた。でも、それら  
を羨ましいとは少しも思わなくなった。妻の  
玲子が喜々として、私の好みに従って緊縛さ  
れてくれるのだ。

一カ月ほど前だったか、機嫌のよい妻に、  
私は勇を鼓して頼んだ。

「躰を痛めるようなことはしないから、縛り  
遊びをさしてくれないか」

妻は、私がこんなことが好きなのは、以前  
からよく知っていた。私の願う気持が強い  
のを知ったらしく小さく頷いてくれた。

「そうね。仕方がないわね。でも、ひどくし  
ないでね」

私は初めて、妻を木綿縄で軽く後手に縛る  
ことが出来た。

次の日、私は肌を痛めないようにとの考慮  
から、ゴムびきの木綿縄を作ったのだ。

「まあ、いやらしい縄ね」

と、妻はいったが、大切な肌だからという  
私の言には頷いていた。変な小細工をしない  
で、真心をこめて、正面から縛らせてくれる  
ように頼んだので、妻も好感をもって承諾し  
てくれたのだらうと思った。

そして、今日の緊縛に発展したのである。  
さらに、今後のゴム縄縛り遊びの一層の発展  
が予測され、期待に胸が、はずんだ。

「キスして」

玲子は、喘ぐように言って、後手の体を自  
分でねじ向けてきたが、そのはずみで、どこ  
かの縄が締めすぎたらしく、

「うーん」

と、唇を僅かに開けて喘いだ。そんな玲子  
が、私は可愛いくて堪まらなかった。

ワンワンと吠える犬の声で我に返って、ふ  
と、枕許の時計を見ると夜中の十二時を指し  
ていた。

「貴方、もう、解いてくだらない」

「うん。よく我慢してくれたね」

と頷くと、私は、玲子のゴム縄に絞り上げ  
られている乳房に、感謝の意味をこめて軽く

唇を当て、後ろ手の縄を解いた。

「ああ、楽になったわ」

玲子は可愛く微笑した。私は、その微笑に  
ひき込まれるような嬉しさを覚えていた。

「今度は、僕を、これで縛ってくれないか」

「貴方は、ほんとに縄が好きなのね」

玲子は呆れたように言ったが、それでも私  
の回した後ろ手を縛り始めてくれた。ねっち  
やりしたようなゴムの縄が私の手首に巻きつ  
いて締まった。

「あまり、きつく縛るなよ。血が通いにくく  
なるから」

「判りましたわ」

玲子は優しく言って、その通りにしてくれ  
たが、手を動かしてみても、とても解けそう  
にはなかった。私が玲子を縛る時と同様に、  
柔らかく、しかも外れないように縛ったら  
しい。玲子の柔らかい、すべすべした手は尚も  
活躍をつづけて、ゴム縄は、後ろ手から股間  
を通して胸へ回された。まだ縛りつけていな  
いゴム縄の端が擦った。私は躰を振った。  
玲子は、そんな私には構わず、縄をぐっと引  
き絞った。

「痛い」

私は思わず叫んだ。玲子は、その声で、急



いで少し暖めてくれたが、胸を締めつけている縄と連結させて、更に頸に巻きつけた。私は身動きも出来なくなった。

きつくはなかったが、こうして頸まで縛られると、急に不安になってくる。妻が、さっき頻りに抱いてくれといった気持ちが解るような気がした。しかし、同時に私には突き上げてくるような快美感が湧き起こってきた。だが後ろ手を少し動かしても全身が圧迫され、体を曲げてみると圧迫が酷くなり、息苦しかった。でもついさっきまで、妻もこんな圧迫を感じていたことだろうと思うと、この縄目が余計に、いとおしく思えるのだ。

○

数日後、寝化粧をした玲子を、例によってゴムびきの木綿縄で縛った後、布団の中に残して階下に降り、ゴム製品を取り出し、その中に、ポットの温ま湯を入れて、口を木綿糸で幾重にも括り、温ま湯が漏れないようにした。

二階の寝室に戻ると、玲子は目を閉じて眠ったようになっていた。私は前日に用意した直径十センチくらいの、あめ色の円い生ゴム板を取り出し

「玲子、口を大きく開けてごらん」

妻は言われるままに、かわいらしい赤い唇を静かに開けた。私は、

「噛んではいけないよ」

と言うなり、すばやく温ま湯入りのゴム袋を口の中へ押し込み、円い生ゴム板で、玲子の口を覆った。

「うー」

と玲子は苦しそうな声を漏らした。玲子の口を覆った円い生ゴム板を、これもちかて用意していた生ゴム帯で、外れないように確かりと縛りつけ後頭部で留めた。玲子は一瞬、私を恨むような目付きで睨んだが、すぐその目の陰はなくなった。私の心がときめいた。

「噛んではいけないよ」

と、もう一度、念を押してから、私は玲子を優しく抱いてやった。玲子は、後ろ手や足を頻りに動かして、何かを訴えようとしているようだった。

私はしばらくしてから、玲子の唇を覆う生ゴム帯と円い生ゴム板を外して、口中からゴム袋を静かに引き出してやった。べっとりと唾液で濡れてはいたが破れてはいなかった。「苦しかったわ……その袋には何が入っているの？ 破れはしないかと心配だったわ」

私は微笑するだけで答えなかった。苦しい

のを耐えていたせいか、玲子の白い、むっちりした肌は汗ばんでいた。

「風呂に入ろう。さっぱりするよ」

「ええ」

玲子は喜んで賛成した。そして、早く縛ってある縄を解いてくれと、せがむような目付をした。しかし、私は、そんな玲子の甘えるようなそぶりには構わず、階下に降りて電気温水器の湯を湯槽に入れてから引き返した。縛られたままの玲子は待ちかねたように、

「ねえ、解いてよ」

と、せがんできた。

「いや、解かない。このまま入れてやるよ」

「いやですわ、縛られたままなんて……」

と、玲子は尚も、せがんだが、私は取り合わなかった。そして、いやいやをするゴム縄拘束姿の玲子を抱いて階下に降り、浴室に入った。玲子は観念したのか、それとも駄を動かすとゴム縄が締まって痛いためか、じっとして動きを止めていた。

「これでは風呂に入った感じがしませんわ」

可愛い赤い唇が嘔くと、あめ色のゴム縄が頸に少し食い込んで、その傍の肌を、むっちり盛り上らせた。湯槽から抱き上げ、洗い場に坐らせる時、玲子は眉をしかめた。駄が



動いたのでゴム縄が肌を責めたのだろう。

私は、洗い終わって、改めて玲子の縛られた姿を眺めた。温もりのため、ほんのりと桃色になった玲子の柔肌を、あめ色のゴム縄は、きっちり拘束していた。玲子が軀を動かすたびにゴム縄が締めつけるためか、縄の傍の肌が、むっちり盛り上がった。その肌からは、ゴムと石鹸と湯上りの女肌の薫りが、仄かに漂ってきて、陶醉境とは、こんなことかと思うほどだった。

○

通勤の途中は勿論、時には会社での仕事中でも、暇さえあれば、今夜はどのように縛ってやろうかと、私は考えた。ゴム縄は気に入っているし、後手、股間、頸の縄の連結も好きだ。口中にゴムを入れるのも、よい思いつきだった。いろいろ楽しい想いに耽っているうち、よいことを思いついた。

夕食後、階下で妻がテレビを見ている間、私は蚊帳の取っ手の鉄の輪を外し、ゴム縄の中途に取り付けておいた。それから、私の体に円い生ゴム板を生ゴム帯で固定した。就寝時間が待ち遠しかった。

やっと寝化粧の薫りと共に、寝室に來た妻に、縄遊びを頼む。妻はにっこりと笑って承

知してくれた。もう当然のことのように思っているらしい。私は鉄の輪を、妻の肌に当てた。

「冷たいわ。何なの、それは」

「いまに判かるさ」

と私は言いながら、鉄輪に繋がるゴム縄を胸を通して頸に巻きつけ、他の一本は背中に這わせて後手に縛り留めた。鉄輪が計画した位置に固定するまでには、三回も頸縄と後手を縛り直さねばならなかった。

「面倒臭いのね。こんなのは止めにしたら」

と、妻は言っていたが、遂に、ぴったりと計画位置に固定出来た時、私は、技師が取り付けにくい部品を本体に設定した時のような晴ればれした気持ちになれたのだった。玲子は後ろ手と鉄輪と頸縄で、ぴっちり連結拘束されたことになる。

階下から、温ま湯入りのゴム袋を持って来て、嫌がる妻の口中に押し込み、私の体温で温めておいた円い生ゴム板と生ゴム帯を外して、そのゴムで妻の唇を覆い、枕の下に込みに、バスタオルを二枚敷いて、しばらくは妻の縛られ姿に私は見惚れ、いつも変わらぬ桃源境に遊ぶ気持ちを噛みしめていた。

「う……」

と、急に妻が呻いた。

「破れたの？」

と、聞くと、あめ色の生ゴム嵌口具の上の目が、今にも泣きだしそうだった。

「ただのお湯だから、差し支えないよ」

それでも、妻は悲しそうにゴム縄付きの頸を振った。私は、そんな妻が、いとおしくなり、口枷を解いてやった。妻の口から、お湯が溢れ出て、枕と、その下のバスタオルとを濡らし破れたゴム袋がペツと吐き出された。

「貴方。私、こんなのは、嫌ですわ」

私は、大急ぎで妻を抱き起こし、手早く頸と後ろ手のゴム縄を解いてやった。そして、妻の体温を吸い温かくなったお目当ての鉄輪を急いで煩張るように含んだのであった。

○

二日後、後手になった妻の両方の中指の根元をゴム縄で縛り、そのゴム縄を一つに合わせて股間から前面に回し、胸を這わせて頸に巻き付けた。

「両手でお尻を抑えているようで嫌ですわ」妻は、このポーズは嫌なようだ。私が見てみると、なるほどそんな形にならざるを得なくなっている。私は妻の軀を廻してみた。痛いとか擦りたいとか言って、妻は不服を示し



た。しかし、俯伏せにした時のこのポーズは白い腕がぴんと伸び、両掌が、むっちりしたヒップに密着し、しおらしい女性の姿を象徴しているようで、美しい、よいポーズだと思つた。

○

三日後、私は寝室で妻にせがんだ。

「今夜も、やろうよ」

「またですか」

と、玲子は拗ねたように言ったものの、

「あまり、酷いことをしないでね」

と、いいながら裸になって寝床のそばで後ろ手に背中を向けた。頸の付け根に、ほんのり縄の跡が附いているのが不憫だった。

「今夜は後手にならなくてもいいよ」

と、いって、妻の片手だけをゴムびき縄で縛り、そのゴム縄を股間に潜らし、前に回して引っぱった。

「あー」

と、玲子は体を振らせた。

残った玲子の手首を取って、引っぱっていたゴム縄をその手首に巻きつけて、きっちりと留めた。妻は自分の手で、前後から自分の体を挟みつける形となった。

「今夜のも、嫌な縛り方ですわ」

不平を言う妻に構わず、私は布団へ運びこんだ。

「どうして変な縛り方ばかり考え出すのよ。いつものでは駄目なの？ 私……」

言いかけて言葉を濁した玲子は、後ろ手、股間、頸連結縛りの方を、むしろ望んでいるようだ。私が、妻のむっちりした手を少し引っぱると、

「あ、あ……痛いわ」

と、呻いた。

○

翌日、私が妻へ縄縛りを頼むと、

「今日は駄目」

と、あたまで断わられてしまった。

「どうして？」

「始まったのよ」

「あ、そう」

私が頷くと、妻は、

「その代わり、きのうの嫌な縄を今夜は貴方に嵌めてあげますわ」

「うん……」

気のない返事はしたもの、私は、むしろ喜んでいた。

「でもね。僕の机の引き出しの上から二番目の奥に、ゴム手袋があるから、それも嵌めて縛ってくれよ」

と頼んだ。妻はゴム手袋を出してくると、

「これは、お医者さまが手術の時に嵌めるものですよ」

と、暫く珍しそうに弄っていたが、

「貴方も、さうとう変な趣味ね」

と、言いながら私に手袋を嵌めてくれ、ゴム縄で片手を縛り留めた。それから、その片手に繋がるゴム縄の、つるりとした感じが股間に移り、次にきりっとしたゴム縄の引き絞られる痛みが襲ってきた。ぬめりとしたゴム手袋が腹を圧した。妻は、私の残りの片手を後ろに回し、もう一度ゴム縄を引き絞った。

「あ……」

と、思わず私は声を漏らした。妻はそのゴム縄を後ろに回した手首に留めると、

「こんな恰好をされると、どんな気持ちがするか判ったでしょう」

と、悪戯っぽく笑った。私は、ぬめぬめしたゴム手袋が体の前後に密着し、却って快かった。

「まあ痛くないようね。……きつと、男性と女性の違いからだわね。憎らしいわ」

といいながら私の横に、しゃがんだ妻は、月経帯の中から、白とあめ色のものを、さっ



と取り出すと、それを、いきなり私の唇に押しつけた。

「口を開けなさい」

私は言われるまでもなく、口を開けたが、たちまち口の中は押し込まれた綿に占領された。甘ずっぱい味が口の中に漲った。唇を、ぬめりとしたゴムで覆われた。下目使いに見てみると、あの円い生ゴム板のようだ。私にはぬめぬめとした生ゴムは快かった。妻の気持にも、S気が増えて来たようだ。私のせいではあるが……。

「まあ、喜んでいるようね。それでは、もっと喜ばせてあげるわ」

と言うなり、月経帯で覆われた、むっちりしたヒップが私の顔を襲ってきた。重いけれども、柔らかい温みが伝わって来て、私は、ぞくぞくとするような喜びに浸った。

「こうしてあげると、もっと喜ぶわね」

妻はヒップを、ゆさぶりだした。鼻が折れ曲がりそうに痛かったし、息も詰まりそうになった。ぬめぬめした生ゴムも唇を圧迫して苦しかった。しかし、いつまでも、こうしていてももらいたいような気もした。だが、少し後に重圧から解放された時は、ほっとした。やっぱり、この方がよいと思った。

「あら、唇から生ゴムが外れそうだわ。こうしてあげましょうね」

妻は余っていたゴム紐を何回も巻いて、生ゴムを私の唇に固定してしまった。

「貴方の好きなように考えて、こうしてあげているのだからじっくりと味わいなさいね」

と言いながら、妻は私を柔らかに抱いてくれた。私は応えようとして、痛さで自分の拘束された姿を再確認させられた。

妻は、すぐに抱擁を解き、くるりと背を向け、灯りを消してしまった。しばらく待ったが、解いてくれそうもないので、不自由な肩で妻の背中を押して合図したが、妻は知らん振りである。少しの間なら喜びであっても、長い間となれば、苦しみとなる。とても寝られはしない。

長い長い苦吟の後、尿意が襲って来た。妻に合図しても、相変わらず背を向けたままに知らん顔の半兵衛である。私が今まで妻を縛りつけた復讐かもしれない。だんだん尿意が我慢しきれなくなってきた。

すると、背を向けたままでも、私の、その様子が見えるかのようになり、  
「トイレに行っていらいっしやい。その姿のままでも行けますわ」

無情な妻の言葉であった。立ち上りにくかったが、妻の言うように、一人で起きられたし歩けもした。しかし、両手が使えないためガウンを着ることも、できない。仕方がないのでそのまま、一段一段、用心しながら階段を降りる。もし、小学三年生の女兒が起きて来て、この私の姿を見たらと思うと冷汗が出る思いだった。

トイレでは、少し散ったけれども、何とか用を足すことはできた。とぼとぼと寝室に帰ると、灯かりがついており、妻が、こちらに顔を向けて、にこにこしていた。

「ご苦労さん。少しは苦しかったでしょう。よく我慢したわね。こちらにいらっしやい。解いてあげましょうね」

妻は優しく口枷を外してくれた。私は涙が出てしまった。

「まあ、赤ちゃんみたいね。ほら、手も外してあげましょうね」

私は、自由になった両腕で、しっかりと妻に抱きついた。

○

翌日、会社から帰ると妻は何故か陽気に、はしゃいでいた。月経中故、妻にゴム紐をつけることもできず、私は、何か物足りない気



持と、不充足感のなかで、眠りについた。

朝、何かが軀に触わるのを感じて、目を覚ました。頸に手を当ててみると、既に、すべすべしたゴム縄が巻き付いていたし、かやの鉄輪がついたそのゴム縄は体を縦に走っていた。妻はぎゅっと引っぱったらしい。痛みが襲った。寝起きで、まごまごしている私を尻目に、背中に回したゴム縄を頸縄に留め出した。

「朝早くから、どうしたの？」

私が尋ねると、妻は、

「きのうから、私考えていたのよ。まあ、私に任せなさい」

私は何を任せるのか、よく判らなかつた。

妻は、きつちりと頸に縄を留めたらしい。

「今日は、貴方はその姿で過ごさなさいね」

「でも、これでは、大便にも行けないよ」

私は、すべすべした縄を、こすりながら言つた。

「その時には、解いてあげるわ。貴方は、いつも、寝る前に行くものね」

妻は、嬉しそうに言つた。

「今日は日曜ですので、百貨店に行く予定です。沢山、買い物をお願いしますので、貴方もついていらっしゃい」

「こんな姿でかい」

「当たり前ですわ」

妻の語調は厳しかった。反対は出来ないような気がした。今まで、私が妻を縛って来たのだ。これ位のことは我慢しようと思った。それにしても、妻の玲子のS度も上昇したものだ、嬉しいような悲しいような複雑な気持だった。

小学三年生の女兒と妻との三人で、百貨店内を歩きながらも、時おり、鏡に写る私の姿は、ワイシャツの襟の内側が、ゴム縄で脹れていた。きつちりとした背広姿の内側は、この縄縄を軸として、鉄輪と縦縄で、荷物のように固定されていようとは、店内に集めく人達の誰も知るべくもないだろう。人間は、外見と内側とは違うという代表者のような気がした。

歩く度に股間が痛み、変な気持だった。私の歩く姿が、ぎこちないのか妻は時々、私を振り返っては悪戯っぽい微笑を送って来た。特に軀を前後に曲げにくいので苦しかった。その上、重い買物を持たされているのだから正に苦業であった。インドのヨガ修業僧のさまが、脳裡に浮かんで来た。もし、こんな姿で交通事故に合ったら、どうだろうと思うと

ちよっぴり、心配でもあった。

「こんなにちわ。おそろいで買物？」

三年前に結婚した玲子の妹が、赤いミニのワンピース姿で私達の前に立った。

「お兄さん、足を怪我でもされたの？ 歩き方が変ですわね」

と、尋ねて来た。私は、縦縛りのゴム縄を装着されているとは、言えないので、

「いや、なんでもないが……」

妻は、そんな私を悪戯っぽい笑顔で見ている。

「ゆうべ、寝ちがえをしたらしい」

私は苦しい言い訳をした。体を動かさなくても、口をきけば縄に響いて、拘束の身を自覚させられ続けた。

妹と別れた後、両手に荷物を持って、電車の乗り台に片足を掛けた時、後ろから急に押されて頸縄が締めまり、私は咳き込んだが、その咳さえ満足にできなかった。私の苦しみなど、おかまいなしに群衆は、ぐんぐん後ろから押して来て、電車が揺れる度に、縄目は、ひりひりと痛んだ。早く装着されたゴム縄と鉄輪を外してほしかった。

やっと家に辿り着いた。子供のいないところで、外してくれるように頼んだが、



「まあ、お待ちなさい。ついにて、夜、寝るまで、おあずけよ」

と、つれない返事だった。私の両手は自由なのだから、私が自分で解こうと思えば解けるのだが、そんなことをすれば、妻は今後、私の縛りの願いなど受けてくれなくなりそうなので、それはできなかった。

就寝の十一時までは長かった。なるべく躰を動かさないようにして待っていた。子供も寝静まった後、

「はい、いらっしゃい。お待ちどうさま、外してあげましょう。はい、ここにしゃがんであーんと口を開けて」

その口調に釣られて、私は、妻の言葉通りにしてしまった。それがいけなかった。口の中に、どぼっとしたゴム袋を入れられたようだ。同時に、まるい生ゴム板で唇を押さえつけられ、生ゴム帯で、しっかりと固定されてしまった。

「噛んではいけませんよ。袋の中のものは貴方が入れたような、ただの湯ではありませんからね」

強い締めつけに、思わず手を生ゴム帯に当てようとすると、

「触っては、いけません」

と、ぴしゃりと言われてしまった。ゴムのぶよぶよした袋は、口中を完全に占領して、しかも、ぐにやぐにやと動いた。今にも破れそうで気味が悪かった。

それから、頸縄と鉄輪と縦縄を外して呉れた。躰が急に楽になったようで、私は躰を前後に曲げていると、妻の手が私の両手を後ろに取り、

「やっぱり両手は、こうしといてあげましょうね」

と、言いながら、例のゴム縄で後ろ手に縛り始めた。

「この手が、口のゴムを外してはいけないからね」

女は残忍だというのが、やっぱり、そうだと考えた。

「これでも大便に行けますわよ。後ろ手で、ペーパーを持てばいいもの」

私は、こんな姿では、その気にならず、後ろ手、嵌口具、全裸姿のまま布団に入った。

「行きたくなるように、浣腸をしてあげましょうか」

と、妻は恐ろしいことを言いだした。私は急いで、首を振って断わった。

「遠慮なんかしなくてもいいじゃない。やっ

てあげるわよ」

私は恐ろしくなって、布団から逃げ出そうとした。

その時、ぱっと口の中に、いいようのない水液が漲った。口中のゴム袋が破れてしまったのだ。

「まあ、破ったのね。注意しておいたのに、駄目な人ね。それは、私の処理したものを絞り込んであるのよ。でも、貴方は、そんなものが好きだから、丁度、良かったかもしれないわね」

妻は愉快そうである。妻のS性が私以上になりそうで気味が悪くなった。

それに今は、私は後ろ手、ゴム嵌口具の身の上だ。どんなことでも妻の思いのままである。でも、気味悪さとともに、ぞくぞくするようなスリルも感じられた。

口中のゴム袋が破れたのに同情してくれたのか浣腸はされなかった。しかし、私がいくら目顔と仕ぐさで頼んでも、朝までゴム嵌口具も後ろ手も外してくれなかった。

やはり女性のS性の方が、厳しいと痛感した。

妻の、六日間の月経期間も、やっと終わっ



た。

私は、いそいそとして縛り遊びを頼んだ。妻は、それを承知してくれたので、正常位の縛りで固定した。

正常位の縛りというのは私だけが決めたものだが、即ちゴム縄で後ろ手に縛り、股間を経て、腹の上を通し、乳房の間を通して頸に巻き付けて終わる、私のやる、いつもの縛りのことである。

私は、その正常位縛りの深夜の下着姿にした妻を、じっくりと観てそのまま、しばらく放っておいた。

「もう、外して」

と、せがむのにも知らぬ顔で、私は暗い階下に降りた。そして、ビールを出そうとして冷蔵庫を開けた時、後ろに、何か動く気配を感じた。

ハッと振り向いて、男のような影を感じたとたん、ガーンと頭に強い衝撃を受け、そのまま意識がなくなった。

気がついた時、妻が私の頭を膝に乗せて頬を叩いていた。

「大丈夫？」

妻は心配そうである。

「うん、まあね……」

私は、頭を振ってみて答えたが、ふと、正常位で縛っておいた妻が、自由な姿になっているのに気がついて、急に心配になり、どうしたのかと尋ねた。

「ええ、寝室のタンスの戸を開ける音がしたので、目を開けてみると、誰か男がいたので思わず、どろぼうと叫んだの。そうしたらその男はとび上って、逃げ出したわ。それから縄を解こうと後ろ手を動かしてみたら、手首が抜けたの。タンスに入れておいた二万円ばかりは盗られてるわ。まだ、警察には連絡してないけど」

私は、きつくはないが、しっかりと妻の後ろ手の縄目は留めていた積りだ。そう簡単には解けないはずである。

もう一度、尋ねてみても、やはり、妻はケロリとして、うまく手が抜けてよかったと繰り返した。

「どろぼうの男は、若い男だっただろう」と、聞くと、

「若い男だったわ」と、答えた。

私は、もくもくと湧き上ってくる疑惑で、ますます心配になって来た。

あめ色のゴム縄で、すべすべした白い頸を

拘束され、白いぷちちりとした乳房の間を通る縦縛りで後ろ手に固定されている全裸女体なのだ。

どろぼうが見て、変な気にならないほうがいいか。妻は、変なことをされたのではないか。

「何もされなかった？」

「ええ、何もされませんわ。すぐ逃げてしまったので」

そう聞かされても、私は納得がいかないような気がした。

調べてみたゴム縄には異常はなかったが、結び目がきれいに解かれているのが、却って奇妙な疑惑を生んだ。

ひょっとして妻が、私に秘密で、あの若い男を呼び寄せていたのでは？……というような飛躍したカンぐりまでが起こってくるのだった。

○

それからは、なんとなく妻を縛る気になれなくなってしまう、あれだけ夢中になっていた縛り遊びも止めてしまった。

しかし、妻の体臭を吸い込んだゴム縄だけは、大切に保存している。

——（おわり）——



## — 創作短篇 —

## 甘いゲーム

藤村優士



カット・あらい・かず

私と水川明子は、払曉の井之頭公園の朝霧の中を散歩していた。

ゆっくりと歩を進めながら、私はチラッチラツと明子の表情の変化を窺み見る。この薄ら寒い朝の空気の中を歩きながら、明子は美しい顔面に、脂汗を浮かべているのだ。

「あと五分」

私は、ストップ・ウォッチの針を確認してゲームの残り時間を明子に告げる。

そう、これは唯の気ままな散歩ではなく、私の考えついた、実に愉快なゲームなのである。そしてゲームには、賞金として二百七十万円が賭けられていた。

「十分間の辛抱で二百七十万円は君のものになる。一分間で二十七万円、一秒の我慢が四千五百円だ。だが、約束の十分より一秒でも早く君がへたばったら、それまでの努力は水の泡だぞ」

この私にとって愉快なゲームのルールを決めた時、明子は黙ったまま、こっくりと頷いた。

賞金というのは現金ではない。ひと粒のダイヤモンドなのである。

そのダイヤは今、明子の体内にあった。五分前、私は脱脂綿にくるんだダイヤと一緒に

二百CCの石鹼液を用いて、彼女に浣腸を施したのである。

十分の間、彼女がダイヤを体内にとどめておくことが出来れば、そのダイヤは彼女のものとなるという約束が、彼女に脂汗を流させているのであった。ただし、その十分間は、どんなにゆっくりでもいいから、歩き続けていなければならない規定がつけられている。

公園の大きな池のほとりを私と明子は、ゆっくり歩き続ける。昼間は、池の点景として愛嬌を振りまく鴨や家鴨は、まだ眠っているとみえて、首をすくめたまま動こうともしない。代わりに、あちこちの木々の間からは、賑やかな小鳥の囀りが聞こえていた。

だが今、時間と共に高まる苦痛を抱えている明子には、どんな風景も目に入らず、どんな物音も聞こえないだろう。彼女は下唇を強く噛みしめ、迫り来る便意を一心に耐え抜こうとしていた。顔からは、とうに血の気が退いて、青くなっている。

「あと四分」

私は残り時間を告げながら、(もしかしたらモタないかも知れない)と思った。緊急の場合を考えの中に入れて、彼女はミニスカートの下に何も着けていない。が、もし彼女が



十分の耐久時間を保ち得ずして、公衆トイレへ駆け込むか、耐えかねて路上へ粗相するかしたら、それは、ダイヤを賭けている私にとっても、非常に残念なことなのである。

明子の体内にあるダイヤは、私の長年に亘って大切に出来たコレクションの一つには違いないが、彼女にならなくてやっても惜しくはない、いやむしろ貰ってもらいたいすら思っているのだ。

宝石マニアとして、執着心の強いことを自認する私に、そう思わせるだけの魅力を、確かに明子は備えていた。顔と体軀の視覚的な美しさ、女性にとって最も大切な優しさ、性的な魅力は……もし私が今より二十数年若ければ、あるいは美貌や優しさよりも先ず、そちらの魅力の方に、いち早く虜になったかも知れない。だが、今や五十歳になんなんとし極度に精力の衰えてきた私には、明子の優れた性的機能をどう活用する術もない。

それから何よりも私に明子を、いとおしく思わせるものは、只今現在、私の不埒な提案を真に受けて応じ、何とか耐え抜かんものと脂汗を流していることにみられるような糞真面目さであった。

私は自分からこのゲームを持ちかけはした

ものの、(そんなにダイヤが欲しかったら、私に睡眠薬の服でも盛って、隙を見て、かつさらって行けばよいものを)と、心中で思い、その素直さに感心しているのである。

私は明子の氏素姓も、住んでいる所さえも知らない。とあるバーで知り合ってから、そういうことの出来る隙を充分、見せながら、私はこの一カ月、明子と交際してきたつもりである。が彼女は、まだ一度も私を裏切っていない。あるいは明子はダイヤ一個などというケチな考えではなく、私の財産の洗いざらいを狙っているのかも知れないが……。

「あと三分。どうだ、我慢出来そうか？」

「ウムム」と明子は声を漏らしたが、それは私への返事ではなかった。もう歩き方も妙にぎこちなくなってきた。顔面蒼白になったのは、とうのこと。今にも、しゃがみ込んでしまいそうな気配だった。喋りかけていれば気分もそれで、幾分、長持ちさせるのに役立つかも知れない。

「ダイヤは無色透明なものと思い込んでいる人もいるようだが、決してそうじゃない。実際には、炭素以外に極微量の金属元素が混っでいて、僅かだが色の着いているものが殆どなのだ。完全に無色透明のものは百個に一個

ぐらいの割でしか、出て来ないんだよ。今、君の体の中にあるヤツは勿論、完全に無色透明の石だ。君にも見せた鑑定書の通り、南アフリカのキンバリー産、重量は三カラット、ブリリアントカットの最高級品だ」

「アアッ、あと何分？」

「ウム、あと二分の辛抱だ」

行く手の十メートル程先に、どうやら新築されたばかりの、公園のものにしては珍しくタイル張りの、塀の色さえ清潔そうなトイレが建っていた。

「よし。ゆっくり、あそこへ歩いて行きなさい。もうひと息でダイヤは君のものだ」

だが明子は、既に忍耐力の限界が来たのだろうか立ち止まって動こうとしなくなった。

「アアッ、もう駄目ッ。こんなゲームするんじゃないかったわ」

「今更、弱音を吐くんじゃない。君のような可愛い娘が野糞を垂れるなんて、見られた恰好じゃないぞ」

私は努めて下品な言葉を明子に浴びせた。

その言葉は意外に効果があつたらしく、一旦はゲームを投げようとしたらしい明子は、最後の精神力を奮い立たせたかのように、再び歩き始めたのである。明子の苦しみが極限に



高まり、ゲームの終わりが近づくにつれて、私もまた、心臓の鼓動が早まる程に興奮してきているのに気付いた。

やっと公衆トイレの前に辿り着いた時、まだ約束の時間までに一分を残していた。

「あと一分、最後の一分だ」

私は自分が持っていたストップ・ウォッチを明子の手に持たせてやった。秒針は、遅速なく一秒一秒を実に正確に刻んでゆく。

「少し甘い様だが万一、粗相されても困る。」

最後の残り時間をトイレの中で待つことを許可しよう。這入りなさい」

明子は婦人用トイレのドアを開けた。私もその後に従って中に這入る。だが人間の精神力は脆いものであった。便器を目の前にした途端、

「もう駄目ッ！」

と、泣き叫ぶような声を上げると、明子は石鹼液の混じった排泄物を一斉にぶちまけてしまったのである。

ストップウォッチは明子の手の中で、残りの四十五秒間を空しく刻んでいった。

「ウーン」

自分で、そうしようと思わなくても、自然下腹に力はいるらしい。白い便器の内外に

堤を押し切った濁水の如き奔流が、どっと溢れ落ちた。……と、その時、明子も私も全く予期しなかったことが起こったのだ。

『ザーッ』という音と共に、便器の後ろから物凄い勢いで水が迸り出し、一瞬のうちに明子の排泄物を流し去ってしまったのである。

「あっ！」

明子は電気にでもかけられたようにピョコンと立ち上がり、私を振り返り、

「あはあん、流れちゃったあ」

と言うと、痴呆のような顔つきになって、再び、しゃがみこんでしまった。

これには私も、すっかり度胆を抜かれた。明子の足の所を見ると、一面のタイル張りのその部分だけが金属で出来ている。そして普通のトイレにあるような水を流すためのレバーやボタンや鎖などは何処にも見当たらなかった。今、明子の踏んづけている金属板がレバーやボタンの役目を果たしているらしいのだ。恐らく金属板の下にはマイクロスイッチでも仕掛けてあって、人が便器に跨がるとつまり金属板にいくらかの重量がかかると、一定の時間をおいて自動的に水が流れ出る仕組みになっているのだろう。

そう気付いても既に遅いのだ。さっき明子

の出したものは、みんな地下の大きな浄化槽に流れ込んでしまった訳である。

「便利にさえなりゃあいい、なんて思ってる奴が、こんな訳の分からないものを作りやるから始末が悪い」

私はそんなことを呟きながらも、自分のちよっとした配慮から、大切なダイヤを浄化槽に流し込まなくて済んだことにホッとしていた。というのは、もし万一、明子の飛び込んだトイレが水洗式でなく、日本古来のカワヤ式だった時のことをフツと考えて、ダイヤを脱脂綿にくるむ時、小豆粒にすり替えておいたのである。おかげで本物は私のポケットの中に、ちゃんと納まっていた。

「仕方がない。早く後始末をしなさい」

私は、ひと足先にトイレから出た。後ろでもう一度、ザーッと水の流れる音がする。

明子は一体どんな顔をしてトイレから出て来るだろう？

四十五秒、足りなかったとはいえ、明子もよく頑張った。ちよっと、がっかりさせてやった後で、本当のことを喋って、やっぱりダイヤは明子に進呈しなくてはなるまい。

今日のゲームは本当に素晴らしかった。

——了——





第三十三回

## スツテン

ドツと嗤う声が起こった。誰かが、わざわざ卑猥な言葉でジャンヌの恰好を批評したのが面白かったらしい。

だが、今のジャンヌには、それを憤る余裕さえなかった。激しい匍匐運動は、彼女に、死ぬほどの苦しみを強いていた。

床に埋め込まれたレールは、うねうねと蛇行して彼女の苦行を一層、激しくしていた。レールの中を這る滑車に首輪をジカに固定されたジャンヌは顔を床におしつけながら這っ

て進むしかない。しかも、入牢のとき、一旦ほどこれた手首は、再び後手にくくり合わされてしまっている。こうなっては柔らかな乳房もザラザラなコンクリート床から離すわけに行かない。そして、せい一ぱい臀部を打ち振り、膝を交互に繰り出して前へ出るのである。ともすれば進むことはおろか、いたずらに、もがくばかりになってしまう。

ここ懲治檻は雑居牢である。憎悪と陰謀が渦巻いて、お互い同志を貶し、陥れる仕組みになっていた。徳川時代の牢を連想されればば間違いないであろう。女囚たちは不可避免的に、赤裸々な人間性を露呈させられてしま

前号まで「有明を絶対君主といただく秘密の地下国家では世界中から美女を捕獲蒐集し、五段七階級、即ち物や家畜にあてはめるのから始めて、各位の高官にいたるまで、すべて全裸の隷従を要求している。和製ジャンヌとアダ名された全学連の女ヒロイン、又、麻薬シンジケートの少女ボス林美玉と渡りあったF-七五三号（小林敏子）はB B A A dと判定され規定通り一時、懲治檻に送られることになる。有明本陽三重菱縄を打たれた彼女は、アマゾン女兵に引き立てられて行った。



う。

牢内には形式的な自治があった。特別な訓練を受けたカボが牢名主となって、百名を越す女囚を統制している。大部分の女囚たちがここで一定期間を過ぎ、様々のテストをパスして銅のクラス以上に任官すると、ここを出て行ってしまうのに、これらカボには、その希望がない。昔の軍隊で下士官たちが任官前の見習士官をイビつたのと同じ様にジメジメした嫉妬と虐待が牢を特徴づけている。

言いかえれば、この懲治檻は人間の最も陰惨な、いやらしさを吐き出させる場所であった。ここでは、猫をかぶって逃げる余地は全然ないのだ。そして、各所にセットされたテレビカメラと集音装置が、どんなヒソヒソ話でも明瞭に録画録音して別室でのチェックを可能にしている。ついでながら、この国では自由人といえども、不必要なオシャベリは禁止されている。特に夜八時から朝四時までは有明に関する者以外の会話は、封止される。一切の物音は、集音装置の完全な網によって監視され、コンピューターが選択して録音と警告を出すシステムになっている。

懲治檻の入口は頑丈な鉄格子で、その中に

看守の溜りや病室があり、更に、この奥に日本式の角材で組んだ牢格子がしつらえてあって、その奥が雑居房になっている。

鉄格子の中に連れ込まれて、漸く有明本陽三重菱縄を解かれたジャンヌは、ホッとして痺れた手首をさすっていた。美しい上半身には、判で押したような縄目痕がつき、赤く腫れ上がって、いたいたしかった。お定まりの肉体番号確認の儀式があつてステンレスのカプセルが没収される。受牢人台帳が読み上げられて再確認されると、いくつかの格子戸をくぐって、戸前口に正座させられる。牢名主と、その子分が格子の向こう側に来て、同じく正座しているのが見える。鍵役と呼ばれる看守のアマゾン女兵はよく透る声で言った。「牢入りがある。肉体番号F一七五三号、俗名小林敏子。捕獲地、東京。十八才。BBAAd」

すると格子の奥から、「おありがとうございます。確かに、お受け取りいたします」

という声がハネ返って来た。陰にこもった牢名主のものである。

留め口の錠前が外され、ギイーツと開かれる。分厚い格子戸は極めて低くジャンヌは這

って入るのが、やっとだった。ちょっと首を差し入れた途端に、たちまち首輪をひきずり込まれる。

「さあ、こいっ」

と牢名主が叫ぶと同時に、いきなりジャンヌの尻が思いきり叩かれた。同性によって加えられる、あまりにも理不尽な行為に、アッと驚くジャンヌの背後で、閉ざされた留め口に古風な錠前の落ちる音が冷たく響いた。

江戸時代の小伝馬町の大牢を忠実に模したという、この懲治檻の牢房は、五間に三間、すなわち三十畳の広さで、これに一坪の落間（土間）と半坪ほどの便所が附属している。三十畳といっても、畳は全部あげてしまつて牢名主、その他、牢内諸役人の所謂「見張り畳」として、格式に従い十枚まで積み重ねられているから、部屋の真中はムキ出しのコンクリート床が寒々と拡がっている。

ジャンヌは、その真中に引き据えられた。うす暗い房内には百名を超す先輩たちが周囲を黒々と取り巻いていた。

目が、くらやみに馴れるにつれて、正面、畳を十枚も重ねた上に、さっきの牢名主が女だてらにアグラをかいて、ジャンヌを見下ろ





取りあげてしまうので、残り十一畳に九十名以上が坐らなければならぬ計算になる。畳一枚に平均九人以上がつめこまれ、これがジャンヌの左右に目白押しに居流れている。

「おい、新入り」

高い処から、牢名主の冷たい声が降った。

「オイッ、額を床につけて平伏するんだよ」

当番がとんで来て、ジャンヌの首を掴むと頭をゴツンと床に押しつけた。ザラザラのコンクリートが額を擦った。牢名主が続けて

「新入り。お前の肉体番号、俗名、年令五段七階級、シャクリ、ハッキリ申し上げろ」

ここでも又、わかりきったことを、われとわが口で述べなければならぬ。声が小さいと当番が小突いて言い直させられる。その上「命のツルを持ってきたか」

持って来られる筈がないのに、ワザと質問がくる。

「ツル——って、何でしょう」

「だまれ、しらばっくれるんじゃないよ。ス

ッテンテンで、ここを一体、どこだと思っていいるんだい。ナメるんなら、ナメるで覚悟してきたんだらう。オイ、当番。新入りにスッテン踊りをさせてやれ」

バラバラッと当番が駆け寄って、後手に縛りあげられる。そのまま引きずられて下手の羽目板まで運ばれると、床に埋め込まれたレールに首をつながれてしまったのである。

「オイ、平の女囚共、おまえたちの金栗まなこヒン割いて、その新入りのイレズミを覗いてやんな。怠けていたらケツとばしてやれ」  
牢名主がケシかけるものだから、百人が百人ともワツと立ち上がって（それだけ正座させられるのは辛いのだ）床上で、もがくジャンヌをとりまいて押し合い、へし合いするのであった。中には、尻をピシャピシャ叩くものもあるし、レズっ気のあるのは、素早く妙ないたずらをする。さすがのジャンヌもオイオイと泣き出したけれど、そんなことで手心を加えるような雰囲気はない。

全身を汗でズブ濡れにしながら、ヤツと牢名主が畳十枚を重ねて坐っている下にたどりつくつと、牢名主は激しく苦悶する背中に、上からペツと唾を吐きかけて、

しているのに気づいた。その両側に、こちらは畳を二枚、重ねて控えている二人は、あとで知ったことだが、戸前役、二番役と呼ばれる助手であった。この他、三番役から五番役までの中座の三人は、畳一枚の上に坐っている。更に交替でなる当番は下座と称して二人で畳一枚を占有する。数は四名である。占めて三十畳のうちから、これで十名が十九畳を



「思い知ったかッ」

と、大見得をきる。そばから当番が、

「さあ、早く、おそれ入りましたと申し上げるんだよ」

と耳打ちをする。心ならずもジャンヌは、

「おそれ入りました」

と幽かながら答えた。すると戸前役が、

「おかしらまで、お願い申し上げます。新入りもおそれ入った気配でございますので、この辺でお貰い致したいと存じますが」

牢名主がうなずいて

「戸前役に免じて仕置きは、これで負けてやる。では、こいつを便所へブチ込んでしまえ」

と指図する。首輪を床から外されたジャンヌはそのまま手取り足取り、便所へ。

便所といっても扉はなく、一間半に一間の落間の奥にある長さ一間、巾三尺程の石棺状の石がそれだった。用を足すときは、縁に渡した巾十五センチ、長さ一メートルほどの厚板二枚に跨がってするのだ。新入りは、その石棺の底に投げこまれ、繋ぎとめられて朝までジッとしていなければならない。同囚の用便を、振りかけられるのは勿論のことであった。

女囚は夜八時に消灯、就寝。朝四時に起き

なければならぬ。不寝番に立った者が時間を戸前役に告げると、戸前役が女囚役人を起こし、五番役に詰めを命令する。五番役は

「詰める詰める、表通りへ」

と怒鳴る。寝ていた女囚たちは、この声で起き上り、争って羽目通りの格子から、外鞘

(外の通路)へ首を突き出して、

「ハー、ハー、ハー」

と口々に怒鳴らなければならない。五間の巾に四寸角の格子が二十九本、隙間が三十あるので百人が首を出すには、凡そ三重になるほかない。この場合でも、牢名主その他の諸役が上に跨がるのである。この朝声に応じて不寝番の鍵役が外鞘(ソトザヤ)という格子外の土間に出て、赤いチョークで女囚たちの額に×点を画きながら員数を勘定して行く。印をつけられたものは黙る。だからハーハーいう合唱は次第に細まって、最後の女囚が×点をつけられたところで、全く静かになる。そして、鍵役が

「人数数え、間違いない」

というと牢名主が、

「お改め、ありがとうございます」

と答えて朝の点呼が終わるのだけれど、こ

の朝はジャンヌが「雪隠潰け」になっているので、どうしても一人、足りない。鍵役がこれを指摘すると、牢名主は

「新入りの一名、不馴れのため、発病。休ませております」

と説明する。鍵役は判っていても、

「よろしい」

といって不問にするのが仕来りだった。

こうして鍵役が当番所の方へ出て行ってしまふと、交替で上座役から手水を使い、所定の席に着く。これを「座を張る」というのである。

食事は午前八時、午後五時の二食で、予め牢房内に持ち込んでおいた乾燥食品を、盛相(もっそう)と呼ぶ金属椀に盛り、熱湯に溶いて配給するのである。美味ではないが、栄養はちゃんをとれるようになっていた。ただし普通の食事と比べて量が少ないから、空腹感は甚しい。

毎日、正午に看守長の見廻りがある。このときは畳を一面に敷き、甲乙なく、その上に坐るが、それが終わると直ぐ元通りに積みあげさせてしまふ。これも平女囚の労働で、遅いと仕置きをされるのである。およそ意味のない単調な作業を繰り返させるのが、この懲



治檻の特長であつた。毎日やらされる畳のあげ下ろしも、その一例といえよう。

## 入牢儀式

朝の便所は、いつも大変な混雑を来たす。夜間は、余程のことがない限り、用便は許されない。だから、我慢に我慢を重ねた連中がわれ勝ちに殺到するのである。六尺巾の石棺では、どう詰めても一度に四人がやっとだ。ところが、待っているのは百人が百人といてよい。その上、上座は一人、中座は二人、悠々として用を足して行くのだから、下座の番は余計、おそくなるわけである。

あらかじめ便所係りの当番（詰番という）が二十四時間、三交替で定められていて、いつも落間の前に坐っているのだが、誰でもまず、大きな声で

「詰めをお願いいたします」

と叫ばなければならない。すると上座の役人が、

「詰めだよ。いいかい」

と詰番に、たずねる。あいていると詰番は「よろしうございます」

役人が、

「詰めのアマ、名乗れ」

と怒鳴る。そこで自分の肉体番号を大声で名乗って便所に入るといふややっこしさである。

朝など、詰めがつかえたときは、役人が適当に順番をきめて並ばせておく。それを、つぎつぎに詰め番が、さばいてゆくのである。用を足し終わったものは、

「ありがとうございました。お先に」

と叫んで石棺をおりる。牢内には紙がないから、落間の流しに置いてある洗い桶の水で洗う。それから落間の隅、一間の間に張つてある、木綿を柔らかく綿った直径一寸ほどの注連縄を跨いで、ゴシゴシと拭くのである。

この時は、両手を高くあげていなければならない。落間を出るとき、正座して落間に礼をして用便を終わる。落間の鴨居には有明の自筆で「不掬糞水、不能全能」（糞尿を手に掬うぐらいの気持がなくては全能となることはできない）という木額が掲げてある。これに敬意を表するのである。

便器の底に繋がれていたジャンヌの全身に無残にも黄金の雨が降り注いだ。入れ替り立ち替り、尽きることもなく垂れ続くのであつ

た。そのために、彼女の肌は黄色く染まってしまった。いや、それどころではなかった。何しろ百人近くの人数である。黄金水は彼女の裸身を、ひたひたに包んで、次第に量を増して行つた。ジャンヌは肥だめに落ちて溺れ死んだ酔っぱらいの話を思い出した。不快とか不潔とかいうよりも、溺れはしないかという恐怖心の方が、よりひどく彼女に迫っていた。

「詰め、すんだかい。もう、ないかい」

詰め番の女囚が大声で叫んだ。

「ありがとうございます」

女囚たちが異口同音に答える声が、ワンワンと、こだまして、ハネ返つて来た。これでジャンヌは、やっと救われたことになる。

当番の女囚が二人、石棺便器の中に水を入れた。はじめた。牢内にはホースがないので、落間の水溜から手桶で汲み入れるのである。底にある栓を抜いたらしく、汚物は、みるみる流れ出して行つた。ふたたび、ジャンヌの美しい柔肌が輝きはじめた。それはゴールド・ラッシュの時代、汚れた岩石の中から純金を洗い出す作業に似ていた。

ようやく石棺から出されたジャンヌは落間

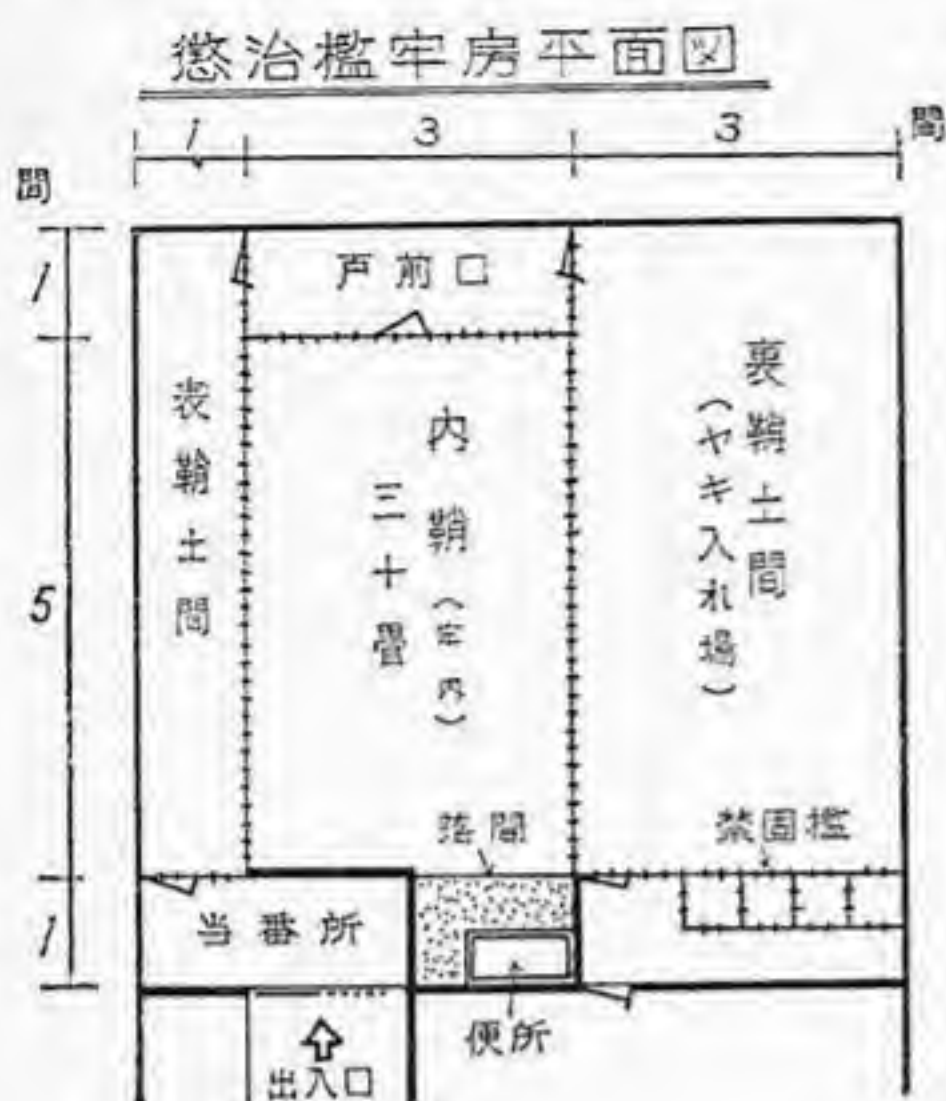


の流しで、もう一度、全身を清められた上で再び牢名主の前に引き出された。依然として後手は自由にされていない。

牢名主は例によって正面一段と高い座を占め左右に戸前役、二番役をはじめとして、上中下座の順に座を張って居並ぶ、その真中のコンクリート床に、丁度、昨夜と同じ場所に正座させられたのである。

当番の一人が、ジャンヌの髪をシツカリと掴み、もう一人は便所に渡してあった巾十五センチ、長さ一メートルばかりの厚板（これをキメ板という）を持って立っている。

「ゆうべ来た、新入り」  
牢名主が呼びかけた。



「ご牢内の規則を申しつける」

これに応じて、五番役が

「新入り、よく聞け。ご牢内は、畳一畳一畳にまで格式があつて、むずかしいところだ。

おまえが、ゆうべノメリ込んだところは お戸前口ともいうが、又の名は八獄門口といつて、一度入ったら百年目。どんな金持の令嬢や奥様でも、シャバの地位教養などは屁にもならない。ぶって、ぶって、ぶちまくて、そのまま叩き殺されても文句の言えないところなんだが、おかしら様始め、お役人方のお情けをもつてお貰いいただいたのだよ。

それに、おまえが、ゆうべ、ひと夜をあかした所は、この大牢の落間というんだ。あそこへ入れたら、十日や、二十日、五十日が百日でも揚げてやるところじゃあないんだが、これも下座の牢人を憐れんで下さる、お戸前役さまがお願い下さつて、おかしら様のお許しを得て、畳の端に出してやる。畳の端に出していただいたら、おかしら様始め、お役人方のおっしゃる通りに、ハイハイといつて一生懸命、働かなくっちゃあならない。働くといつたってシャバで汚ならしい着物をきて、くだらない書きものをするのとは訳がちがう。今夜にも当たるが、夜は交替の寝ずの番、昼

は飯盛り、畳のあげおろし。スツパダカでキリキリ這いずり廻れ。シャベルなっていわれたら、口がさけても声をたてるな。その代わり、お願いするときは、アリッターケの声をはりあげろ。とはいつても、ご牢内では同座のものとかケンカ口論は固く、ご法度だよ。ご牢内は、いろいろと仕置きが多いところだ。もつそう仕置に、雪隠漬け、逆さ磔、背割り責め、とにかく、ぶってぶって、ぶちまわすから、よくよく性根を据えて覚悟するがいい。と、まあこんなところよ。マスターさまから出牢証文が出るまで、日に二本のもつそうを食つて、神妙にしているんだよ。いろいろ言つても、まだ新入りのこと、白い黒いのお礼の申し上げ方も知るまい。おまえの掛かりの当番さんのお手引きで、お礼を申しただくがいい。お手引きのしるしに、キメ板で尻ペタを一回、敲いてやれ」

すべて仕来たりとして定められた文句だから暗記していてスラスラと言ってしまう。キメ板を持って立っていた当番が、それを力いっぱい振りおろした。真っ直ぐたたくと背骨を痛めるから、横にはって臀部、一番肉厚のあたりに当てる。普通の女だったら、屈辱と痛みに失神するほどの騒ぎになるのだが、そ



こはジャンヌのこと、唇をかみしめて、こらえる姿は、むしろ健気なものであった。それが、かえって牢名主を不愉快にってしまったのは、此所が余程、一般の常識とはカケ離れた世界であることの証拠かも知れない。

当番の女囚が、ジャンヌの髪をつかみその額をゴツゴツと床にすりつけて、代わりのお礼を申し上げる。

「おかしら様まで申し上げます。ここに控えております新入り、Fー七五三番、だんだんとご牢内の規則、仕置きを承り覚悟して、神妙に勉めると誓っております。おなさけをもちまして畳の端にお加え下さいますお許しをいただき、まことに有難うございます」

と大きな声で唱えた。同じことを、役人方、一人一人の前に出てやらされる。

そこで漸く後手が解かれ、畳の一番下座の端に坐るように命じられた。何しろ末座は畳一枚に十二、三名が坐らされているのだから大変である。膝を立てて、入り組んで、身動きも出来ない。いやでも肌と肌がビッシリと密着する。ふと、ジャンヌの脳裏に、あの麻薬組織の美しい女ボス、林美玉と



交したレスボスの想い出が過ぎ去った。恋しい相手が、思いがけず姉を殺した鬼畜のような女だったとは。彼女は今思い出しても慄えるほどの憤りが、こみあげてくる。今度、会

ったら一寸だめし五分だめし、苦しみ抜いて殺してやると、瞋恚の炎を燃やすのである。

「新入りに運動をさせてやろうじゃないか」  
昼の見廻りが終わると、再び畳を積んで座を張った牢名主が言い出した。キメ板を受けても声一つ出さなかったジャンヌの、しぶとさを牢名主は忘れなかった。そして、それを憎らしくさえ感じていた。残忍な、たくらみであった。

「新入り、出てこい」  
当番が叫んだ。

「はい」

といって立ち上がろうとしたが、窮屈な姿勢で坐っていたので、痺れて思わず倒れてしまった。

「バカッ。仕置がほしいのかえ」

と、あざ笑う牢名主の前へ、当番がジャンヌの腰を蹴とばすようにして曳き出した。

「新入り、おまえに初仕事をさせてやるよ」

高いところから見下ろしている牢名主の顔に不気味な薄笑いが泛かんでいるのを、ジャンヌにはハッキリ分かった。彼女が与えられた仕事とは、何のことはない、一種の拷問であった。一間半ある落間の両端に木桶を一つ



ずつ置いて、ジャンヌには、もう一つ、水のなみなみ入った同じ桶を与える。四、五歩あるいて、一方の桶に水を入れかえ、空の桶を置いて、水を入れた方の桶を反対側の桶のところまで運んで行って、又、水を入れかえ、その桶を持って、こちら側へくる。こうして絶えず往復しながら無限に水の入れ換えを繰り返すのである。

「いいかい。あとで水が減っていたら、こっぴどく、お仕置をされるからね。大事に、こぼさないようにするんだよ」

当番の女囚が、それでもソツと、ささやいてくれた。木桶自体が水を吸って重いのに、水を張ると二十キロにもなる。たかが、一間半の往復なのだけれど、それだけにかえって水桶を持ちあげて水を注ぐ動作が頻繁になってくるわけで、数回、繰り返しているうちにジャンヌの呼吸は、次第に苦しくなってきた。来はじめた。

薄暗い牢内だったが、日中だけは落間に太陽灯と殺菌灯がつけられている。女囚たちの健康管理上、こうしているのだけれど、牢内からみると、丁度、舞台を照明しているようであった。

もう二時間近くも、ジャンヌは単調な作業を繰り返させられていた。ガタガタになった筋肉は空ツポの桶だって持ち上げるのが難かしい程であった。それでも、二人の当番に叱咤激励されて、あえぎあえぎ、やつのことで水をあげかえている。誰の目にも、限界にきていることが明白だったけれども、牢名主の声がかからない限り、止めさせることは出来ない。それなのに、

「Eの三三六番」

と、牢名主は全然、関係もない女囚を呼んだ。向こう通りの末座から、小柄な女が転ぶようにして、とび出して来た。平伏する女に牢名主が言った。

「新入りが、もうクタビレている。おまえ、ウタでも唄ってシャンとさせてやんな」  
「ア、ありがとうございます」

何をいつつけられても、こういうのが仕来たりだったけれど、その女は忽ちガタガタと慄え出したのである。これには訳があった。

E—三三六号は両親とも、まぎれもない日本人だったけれど、アメリカで生まれアメリカで育った二世だった。その娘が日本語を話せないのは極めて当然のことだった。彼女の所為でもないのに、今、それが彼女を苦しめて

いた。カリフォルニア、サン・ディエゴの成功した花造りの令嬢だった。キャシイ・ナカガワは、自分が紛れもないアメリカ人だと信じていたから、いまさら日本語など習おうとは思わなかったのである。しかし、有明に捕獲されたときから、それがとんでもないハンデイになったことをイヤという程、思い知らされている。懲治檻から、なかなか出られないのも、それが原因だったし、この牢内生活でも、何かといえど皆の笑いものにされるのも言葉の点であった。とはいえ、拒むことは絶対に許されない。彼女は落間の前に正座して唄いはじめた。

「お嬢さん、お嬢さん。ブランコ遊びはよいけれど、チラリと見えたは……」

皆がゲラゲラと嗤った。屈辱を噛みしめたくても、唇を止めることは懲罰につながる。

口惜し涙をポロポロ流しながらF—三三六号は唄い続けなければならぬ。ジャンヌは、その歌声に合わせて動作することを命じられた。疲労でクラクラして来るのを必死でこらえながら、ジャンヌは辛うじて歌のテンポに乗った。牢名主がストップをかけてくれるまで、二人の苦行は、いつ果てるとも知れなかった。

(未完)



カット・岡たかし



# モニク・ヴァン・クリーフ

三原 寛

Translation from "Bizarre life"

私が初めてモニク・ヴァン・クリーフ<sup>パロネス</sup>男爵夫人に会ったのは、五年程前になる。

勿論、その時には、彼女が私に快樂、あるいは拷問の苦しみを与え、法律屋や法律の執行人達と面倒を起こすなどとは予想もつかなかったのである。それに私は、自分がそれ程までに彼女の魅力の虜となり、彼女に魂を奪われ、そして彼女の気まぐれに従従することになるとは、信じてもみななかった。

私が彼女に会うことになったのは、タイムスクウェアに近い新聞売場<sup>ニュース・スタンド</sup>で偶然に求めた、薄っぺらなタブロイド版の通信欄を通じてである。そこには、男性の「愛」を求める多くの女性の通信文が掲載されていた。

私は、何か恋愛遊戯の楽しめるような魅力

的な女性が少なくとも一人ぐらいは、いるだろうことを期待して、それらの通信のうち、半ダースほどに返信を出したのである。

私は知らなかったのだが、それらの通信文の中の 하나가、モニク・ヴァン・クリーフによるものだったのである。今でも、どの通信文が彼女のものだったか、確かではないのだが次のものではなかったかと考えている。

「六フィート、ブロンド、素晴らしいスタイル、支配的容貌、男女の交際を求む」

私は返信料をつけて掲載番号宛に送りつけた。そして三通の通信を受け取った。その中の二通は性に飢えた主婦からのものだった。こういうものは私には無縁である。三通目は手書きの短文であった。

「火曜日の午後二時三十分、私のアパートを尋ねること。私が、かねがね目をつけている革製の衣裳—胴着<sup>ボディスーツ</sup>とブリーチーがあるの、それを私へのプレゼントとして買うこと。私のサイズは店が知っている。（ここに彼女は店の名前を書き、後日、知ったことだが、それは変わった衣裳の店として有名なところだった）私がお前にさせたいことを、お前がやるだろうことは、私には判っている。（彼女はここに傍線していた）」そして最後に「モニク・ヴァン・クリーフ」と、署名されていた。アドレスはニューヨークのイースト・セヴンティの高級地域で、電話番号が附されていた。

私はその手紙に奇妙な興奮を覚えた。<sup>セクシュアル</sup>性的



冒険と快楽を仄めかし、力強い角ばった文字でまた言葉の撰択においては一種の脅迫じみた口調で、私の踏み込んで行くことになる禁断の冒険<sup>アドベンチャー</sup>を匂わせていた。私の胸は高鳴り、得体の知れない不安で気もそぞろだった。この興奮の瞬間こそは、その実、後ほど私が経験することになる嵐の前の静けさの、最後の瞬間であつたとは露知らなかつたのである。

私は彼女の与えた番号に、その雰囲気にしては、しっかりした手で電話をかけた。殆ど直ぐに彼女の声が答えた。その声は深く性的<sup>セクシイ</sup>でまた支配的<sup>ドミナント</sup>で、尊大であつた。私は、アクセントを辿つた。ドイツ人か？ フランス人か？

「誰？」

彼女は、ぞんざいに尋ねた。

「手紙は届いたわね？ だったら、どうして電話するの？ 私がして欲しいことは分かっている筈。お前は革製の衣裳<sup>レザー</sup>を買って、次の火旺日に私のアパートに来ること。時間は正確に。いわれた通りにした方がいいわね」

それは、人を夢中にさせるような台詞<sup>セリフ</sup>とは程遠いものだったし、声の調子も快いものではなかつたが、私が自分が彼女の支配的な態度に、すっかり魅せられ虜にされているのに

気がついた。

思うに、それは私が五才の頃、私の母や、その友人達の恐怖の下に暮らしていた、今から三十年も昔の時以外、女性から、こんな風な言い方をされたのは、初めてだった。それは確かに、大金融会社の副社長の地位にある私に、女性が話しかける態度ではなかつたし、また私がデイトをしようとした女性達から聞き慣れていた種類の声でもなかつた。私は彼女に何かを尋ねたかつたし、もっと会話を続けたかつた。だが、尊大なモニクは、受話器を鋭く切ってしまったのだった。私は彼女がこんなが無礼で傲慢なのなら、もう彼女とはおしまいだと決めたのだが、その反面、彼女の声が一日中、私の胸の中を、かけ廻って、興奮のため、仕事にも手がつかない有様だった。

帰り途、私は胴着<sup>ボディス</sup>とブリーチを買うため、革製品の店に立ち寄つた。それらの製品は、見るからに華美で刺戟的な贅沢品だった。私は、美しい肉感的な金髪女性<sup>ブロンド</sup>が、この衣裳に身を包み、それに合わせて鋭いヒールのブーツをはいているのを想像してみた。しかし、店員から百二十ドルを要求されると、私はそれを払う気にはなれなかつた。私は言い訳け

の言葉をつぶやいて店を去つた。

だが私は、その夜、殆ど眠れなかつた。

次の朝、店が開くのを待ち兼ねて、私はお金を持って、その店へとび込んで、一番近いドラッグストアからモニカに電話した。私はもう死ぬほど、彼女に会いたいと話した。

「今朝、お伺いしてよろしいでしょうか？」  
彼女の容赦のない「ノウ」が私を慄え上がらせた。

「じゃ、午後でしたら？」

「ノウ！」

そればかりでなく、私の無礼さのため、火旺日の約束は次の金旺日まで延期すると言われたのだ。

八日も待つなんて！

私は彼女に思い直してくれるよう哀願し、泣きついた。私は彼女の氣に入ることなら、何でもすると約束した。

ようやく彼女のお情けが出た。

「じゃ、私の氣に入ること教えて上げる」と彼女は言った。

「私にブーツをお買い！ ヒール六インチ、膝までの高さで、前が編み上げになっているブーツ。サイズは店で知っているわ。そうしたら今日の夕方、六時半に来ることを許して



あげるわ」

私は店に、とんで返った。彼女のサイズのブーツがあった。手作りのため、私は更に六十五ドルを払うことになった。

その日は、もう仕事どころではなかった。私は秘書にも訪問者にも、当たり散らした。

六時半、私は彼女のアパートのドアの前に立っていた。二つの重い包みが私の腕の下で高価な革の匂いをさせていた。私は、まるで子供のように慄え、汗びっしょりになっていた。私は、すっかりおどおどしていた。こうした興奮は、すべて、まだ会ったこともない女性に対してであり、そして私が良く知っている女性に対してであり、まる一週間かけて使う以上のお金を、みじめに費やせられた女性に対するものなのである。

そして私は、奇異な畏怖と恍惚感を以て、この会ったこともない女性が、その声と短い手紙を通じての、ほんのほめかしだけで、すでに完全に私を支配してしまったことを思い知らされていたのである。

呼鈴には答えがなかった。私は、だまされたのだと思い込んで、怒りと恐れを混同させながら五分ほども待ったが、やがてドアが開き、彼女が私の前に立っていた。

これが、私の最初の、そして二度と会えそうもない、少なくとも一万人以上の男達を奴隷にして君臨している女性に出逢った、いきさつである。

彼女は、まさに彫像のように、いかめしく美しい金髪女性だった。<sup>ブロード</sup>私は彼女の年令を二十八才ぐらいと想像した。（後で知ったのだが、実際は当時三十五才だった）彼女の肌は柔らかく青白くて、殆ど透明にすら見えた。

彼女は無気味な、それでいて誘い込むような微笑を見せた。意地の悪い表情は、興味とスリルと危険を約束するようで、お相手をさせられた上に、食べられるために招きこまれる男を、誘惑している魔女を思わせた。

彼女は手を差し出し、私はそれを力なく握った。彼女は強く、それをねじり上げた。私は彼女が何と言ったか記憶していない。彼女は贅沢な覆いをしたダブル・ベッドのある部屋に私を導いた。壁には、風変わりな写真が掛けて並べてあり、また、革鞭、ロープ、手枷、手錠、鰻などこてが揃っていた。

彼女は私からプレゼントを受けとり、それから、私の屈服を示すための貢物を求めた。私がおずおずと取り出した札入れを取り上げた。彼女は、そこから五十ドルを抜きとって

残りを返した。

「お前の持って来たものに着更えてくるからお前もそれまでに準備してお置き！」

五分後に彼女は戻ってきた。完全に私は圧倒されてしまった私は、ぼーっとなってしまう。オーバーコートすら、脱いでなかった。

彼女は六インチのハイヒール・ブーツをはき足の爪先から首まで革に身を固めて、私の前にそびえ立っていた。

私は強烈な快樂の欲望に燃えた。

「服をお脱ぎ！」

彼女に一喝される。私は唯唯として命令に従い、私の高価な衣服を床に脱ぎ捨てた。

「どうされたい？」と彼女が尋ねた。

「お前は九十分間 ブレイク 快楽」と「お仕置」を受けることが出来る。どうされたいか、言つて  
ごらん！」

私は口ごもりながら、どうされたいか判らないと答えた。

「とんでもない話だわ！」

彼女が声を荒げた。私は貴婦人に失礼を働いた子供のようになつた。

「お前には何が相応か私知ってるわ。お前は女性への尊敬が足りないのだから矯正がおしおき必要だわ」



私は、おどおどと、うなずいた。

モニクは熟練した矯正士<sup>おしおき</sup>だった。彼女は私を床に這いつくばらせて、ブーツのヒールと革鞭の柄で小突きまわした。彼女は私に、私自身、そして私の男性としての人格を愚弄し傷めつけるような、あらゆることを口にさせて、それを嘲笑した。彼女は私にブーツを舐めさせて、お許しを乞わせた。それから、黒いゴムの球<sup>ボール</sup>になった、さるぐつわをかませてそれを、しっかりと締めつけた。その上で、私に床にひざまずかせたまま、両腕を後ろに回して手錠をかけ、両足には足枷をはめた。これで私は、全く身動きも出来なくなった——ただ一カ所を除いて——。

私には自分の身体の反応を、どうするすべもなかった。間違いなく私の身体は、この異常な立場が引き起こした強烈な欲望を如実に示していた。

「お前は変な気を起こしてるね！」

彼女は冷たく言って、鞭で指し示した。

「無礼な思い上りだわ！」

彼女は、それ以上、口をきかず、私の背中を鞭打ち始めた。私の悲鳴は声にならなかった。私の口の中は乾き、かたくはめこまれたゴム球<sup>ボール</sup>が全く声を塞いでいた。

彼女は打ちに打ち、そして時々、私の買わされたそのブーツで蹴りつけた。やがて彼女は、鞭打ちの場所を除々に移していった。鞭の痛みは耐え難く、それでいて説明出来ない我慢のならないような快感を与えた。

ひと鞭！ ふた鞭！ 三つ！

私は、もうそれ以上、押えることが出来なくなった。私は、耐えに耐えていたものを、一気に吐き出した。恰も上からぶら下がったケープルの端に吊られてのたうっている様に身をはね上げ、もがいた。その時までには時間は半分しか経ってなかった。モニクは更に私に屈辱的なお仕置をした後に、私を天井と床の環<sup>リング</sup>に縛りつけ、はりつけにした。それからまた鞭打ちを再開し、その合間に、蹴りと、ののしりと、そして彼女の革に包まれた腕と身体での恐ろしい締めつけを混じえた。また前と同じことが起こった。私はもう一度鞭によって叩き出された快感と苦痛と興奮の激発に呻かなければならなかった。

私は、その後、高価なプレゼントと貢物を惜しみなく費って、何度も彼女に会った。私は完全に身も心も彼女の虜<sup>とりこ</sup>となったのを知った。

偶には趣向を変えるため、私はガールフレ

ンドの一人を同伴し、モニクは、ある時は私達二人と一緒に仕置をし、ある時はガールフレンドと一緒に私を痛めつけ、恥かした。

私は普通の意味でも彼女と親しくなり、しばしば夕食や観劇を共にするようになった。彼女は驚くべきほど、教養のある女性で、また非常に会話が巧みだった。彼女はオランダ人で、看護婦の資格を持っていると言った。多くの外国語をこなし、そして非常な読書家でもあった。彼女は心理学の大家であり、学術語を使って彼女の沢山の顧客達の欲望の満足について語った。彼女のリストには一万人以上が連名されているとのことだった。その中には著名な法律家、科学者、教育者、医学者、政治家、それに宗教家までが含まれていた。彼女は何百件もの結婚申し込みを断わり続けていた。

「私は、ずっと、ひとりだちしていたいし、それに私がお仕置してやらねばならぬような男と結婚するなんて、考えてもみないわ」

彼女は、有名人、金持連からの、召使い、旅費、その他、彼女のしたい放題の費用一切持ちの専属の提案をも断わり続けていた。

「私は、もう既に欲しいものは全部、手に入



れてしまっているわ。これ以上、何があるっていうの？」

彼女は、唇に冷酷な笑みを浮かべた。

「私を娼婦と思っている男達もいるわ」

彼女は憤慨して抗弁した。

「でも、それも私を知るまでだわね。私は、お客と性をしたことなんて一度もないんだから。でも本当に気に入った男に、苦痛を通しての快感<sup>セックス</sup>を与えてるといふような時には、私も性的に満足するわね」

それから一年ほど経って、私は結婚した。私の妻は、私が彼女を愛しているほどには、私がモニクの手慣れたやり方で体験したような快感を私に与えてくれることが出来なかった。私は妻に、私と一緒にモニクを訪ねて、彼女のテクニクを学ぶよう提案した。そして私の妻もモニクの虜<sup>とりこ</sup>となってしまうた。それは文字通り、そういうことになったのだ。妻は、私が初めてモニクに会った時のように完全にモニクに支配<sup>ドミネイト</sup>されたいという欲望を体験したのだった。私達夫婦ともモニクの虜<sup>とりこ</sup>となってしまう、あるときに個別に、またあるときは一緒に彼女の「快感とお仕置」を受け益々親しくなった。

その後、一九六五年、モニクはニューアークに素晴らしい十八部屋のマンションを購入し、そこを、ありとあらゆる道具を備えた「拷問による快感」の豪華な宮殿とした。顧客は遠近をとわず訪れ、また時には、特別の顧客の「拷問とお仕置」のために国中を旅行したが顧客達は唯々諾々として、特別料金に彼女の旅費を加えて支払ったのである。

処がクリスマスの一週間前、屋台が崩折れたのだ。

ニュージャーシーの風紀取締班長アーサーマニユソン刑事がモニクとの「デート」を取り付け、そしてモニクが、まさに彼の裸の背中に鞭を振り下ろそうとした瞬間、警官がなだれ込んだのである。

あらゆる、すばらしいゴム及び革製の道具類、仮面<sup>マスク</sup>、乗馬靴<sup>ブーツ</sup>、鞭、手錠、足枷、それに彼女の顧客達が「快感とお仕置」を受けらるために隷属すべき「契約書」やその名簿が差し押えられた。彼女は逮捕され、家を破廉恥な目的で使用していたこと、及び、わいせつ物の陳列、ということとで起訴された。

FBIは彼女の名簿にたいして直ちに興味を示した。政府要人の多くは慄え上がった。モニクの知り合いや讚美者達が、彼女を支持

するために集まった。

——だが、それも自分達に圧力がかけられてくるまでのことであつた。ある者は、国税局が自分達の納税記録を調べ出したのを知り、ある者は自分達が誰かの監視、または調査の対象にされているのを知った。このような圧力をかけられては、余程、忠実な友人であっても耐え得るものではなかった。

ニューアーク・レーク・ストリート八五〇番地のマンションでの彼女の施<sup>オペレーション</sup>は当然、結末を告げた。モニクは極く素性の知れた顧客のみを、それも非常な用心深さをもってしか相手にできなくなった。彼女は、選ばれた極く少数の顧客と、その自宅とかホテルとかで会うことを続けてはいたが、それもニュージャーシー州外でもあった。

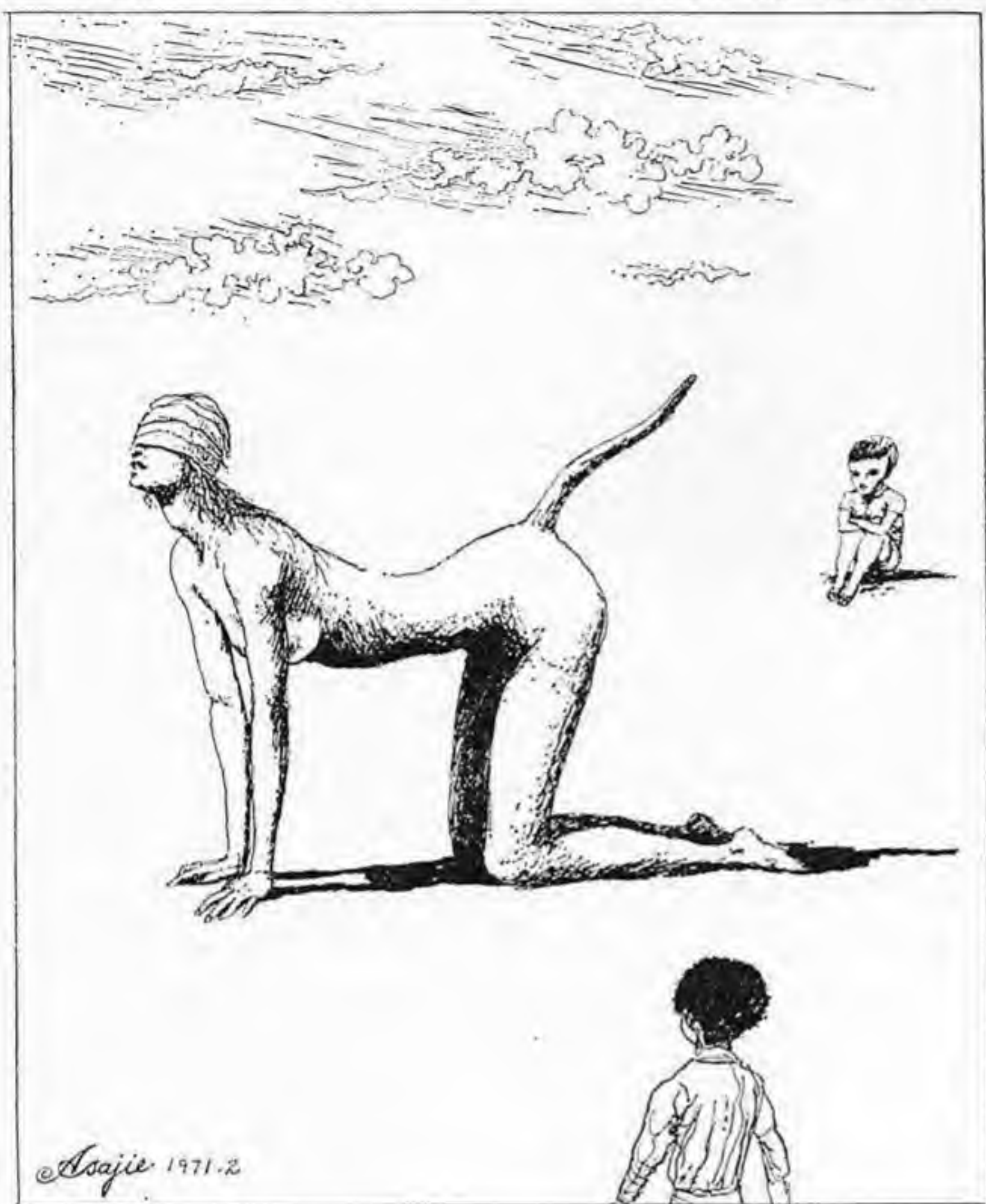
一方、彼女はサド、マゾヒズム界の無冠の女帝であるという歴史的、心理学的な意味を以て、乗馬靴と革に身を固め、鞭を鳴らしてナイト・クラブに出演していた。

私や、その他、数千の男達が敬愛し崇拝していた、この素晴らしい女性にとって、これは悲しむべき成行ではあった。

法廷では、検事側の、あるいは弁護側の陪審としての精神病医達は、サド、マゾヒスト



僕のイメージ画集『アニマル』室井亜砂路



傾向の人達の特殊な関心、彼等の人生において「お仕置」がどういう意味を持っているかまた拷問、緊縛、鞭打ち、乗馬靴、そして革やゴムの衣裳が彼等に与える魅惑についての証言を行なった。

モニクは有罪となり、十二カ月の禁錮、八カ月の執行猶予を宣言された。上訴すべく、あらゆる企てがなされたが、モニクはもう戦う意志を失くしていた。法は彼女に厳しく、彼女の会った殆どすべての人達が、たとえそ

れが、ただの社交的交際であってすらも、調査の対象とされた。移民局はモニクを送還審問に附した。一カ月前にモニクは国を出た。皮肉にも彼女が国を離れた、ちょうどその日に最高裁判所は、猥せつ物を個人の自宅で所有し、あるいは見ることは犯罪を構成しないと判決したのである。

恐らくモニク・ヴァン・クリーフが上訴していたら、彼女は無罪放免となっていただろう。他の起訴事由は、すべて根拠薄弱なものだったからである。（売春容疑での起訴は、既に裁判の前に取り下げられていた）

モニク・ヴァン・クリーフは今、彼女の母国アムステルダムに居る。彼女は代々の男爵夫人の称号を引き継いだ。

合衆国の何千人もの彼女の崇拝者達は、彼女の出国を悔み、彼女の逮捕から出奔につながるに至った法道徳の偏見を嘆いた。もしこの夏、アムステルダム行きの航空座席が混み合うことになるとしたら、それにはモニクの吸引力が少なからず預っていることだろう。私には判るのである。私自身——そして私の妻も——私達の敬愛すべき矯正士であるモニクを訪ねにアムステルダムに向かって飛び立つ乗客の中に混じることになるのである。



——＜告白＞——

# 浣腸プレーに

## 魅せられて

わた 渡部 好美



弥生三月も早や上旬になりましたが、まだまだ春は遠く、毎日、寒い日々が続いております。編集部の皆様はじめ、S Mプレー同好家の皆様、お元気にお過ごしのことと存じます。

光陰は矢のごとしと申しますが、月日のたつのは本当に早いものです。私が、奇クにあの、つたなく、そうしてとても羞かしい告白文『私は、どうしてこんな女に』を発表致しましたのは、昨年の四月号のこととございましたので、あれから一年が夢のように過ぎて行ったことになりました。

主人から縛られ、責めを甘受する中で

私が、ふともらした「あなた以外の男の方から、こんなにしてもらえたら、どんなに素晴らしい刺激になるでしょう」という言葉が、いっしか現実のものになり、辻村さんを知りましたことは私にとって、かぎりなき幸せでございました。ハントのモデルとして奇ク誌上に二度も登場させて戴き、その度に多くの同好者の皆様から心あたたまる、お手紙を戴き本当にありがたく思っております。

あれ以来、私は、新しい刺激の中に身をゆだね、身と心に灼きついたマゾ願望のそれはいつも、熱く燃えつづけ、よりM的女性として成長したく、主人はもとより辻村さんにも飼育をうけております。

私共夫婦にとって最も刺激的であり、また心から求めて参りましたことは、私が主人の見ている前で他人に緊縛され、いろいろと責めを甘受し、やがて激しく燃えることとございましたが、未だ、そんなチャンスにめぐり会えず、どうしても辻村さんと二人のプレーが多く、いささか主人に申しわけなく思っております。

でも、私は、飼育を受けて参りました後は主人に出来るだけ、くわしく報告するようにしております。いつ、どこで、どんな飼育を



受け、私は、今どんな気持ちでいるかを、報告致します。それを聞きながら、ある時は、満足げに、また、ある時は、シットに苦しみ、主人は、私を責めさいなみます。その時、私の心は、自分の心ではなく、何もかも忘れてマゾ女とされます。責めて責めぬかれることに、私は、幸福を感じるのです。ごさいます。

始めて辻村さんにお会いした時、私はエネマシリンジでの浣腸を受けましたが、あの時の、たてようのない、お腹の中を、えぐりとられるような便意の中で、やさしく愛撫を受け、始めてバイブ併用をして戴きました時の興奮が、どうしても忘れられなくなり、あれ以来、私は、プレー中に主人に浣腸をねだるようにになりました。

主人から、飼育を受け始めた頃、浣腸プレーは、とてもがまん出来ず、それほど興奮しなかったように思っています。それより、筆の先やヒマヤスギの針の葉でくすぐられたり、軽くつつかれる方が刺激がございましたし、ある時期には、注射針で、お尻をつつかれることや、乳首をつつかれることに、たまらぬ快感を知りました。

また、今でもそうですが全身にローソクの雨を降らしてもらうことも、私の大好きな責

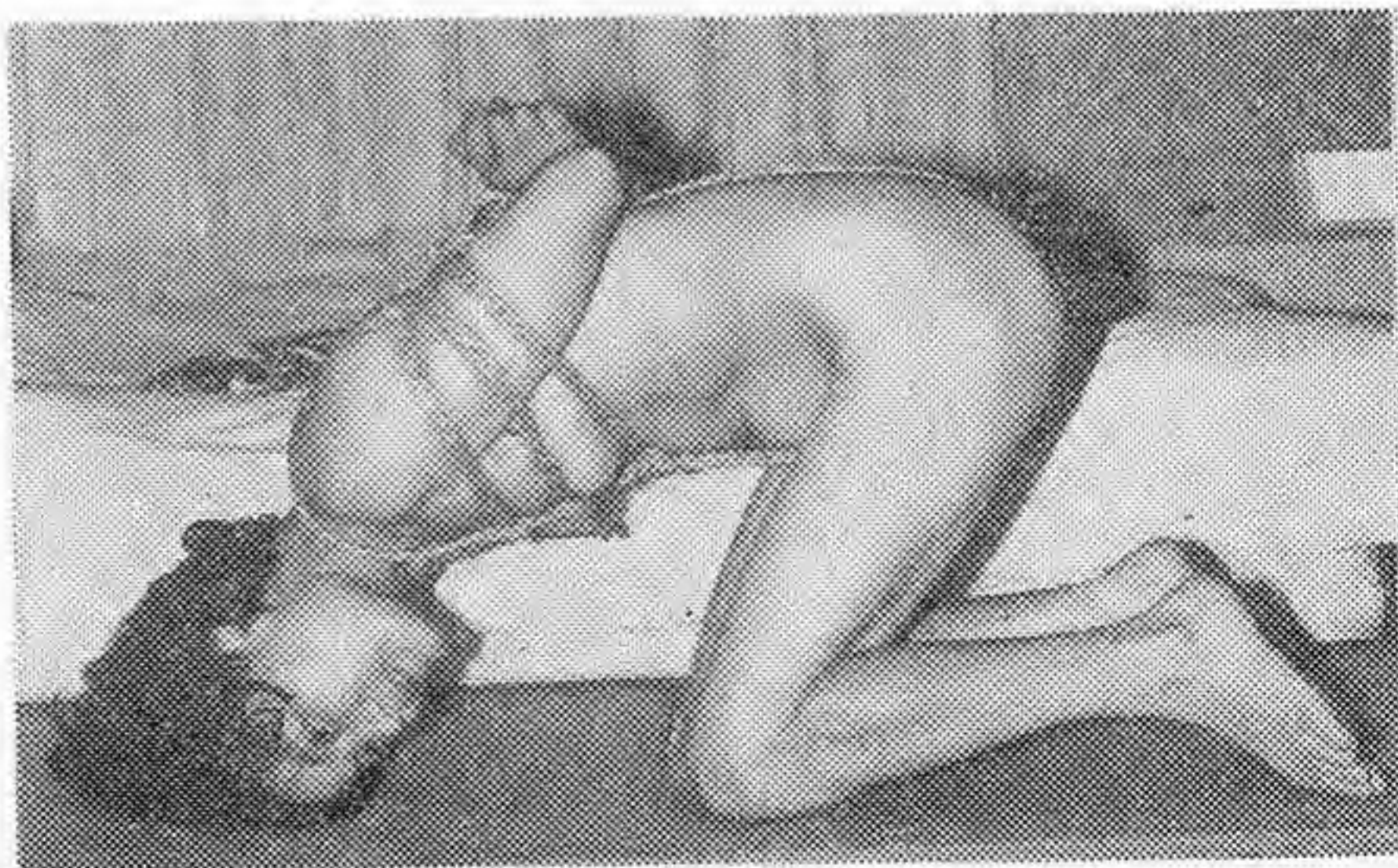
め方の一つです。それにも増して浣腸責めがこんなに刺激があり、私のマゾ願望を満足させてくれるプレーとは知りませんでした。

今も、主人に命じられれば、どんなに寒くても、全裸になり、ぎりぎり巻きに緊縛され熱い涙を甘受し、とても羞かしい言葉を口走することを強制されたり、バイブの洗礼を受けておりますが、責められながら、いつ主人が、あの羞かしい、あられもないポーズを命じてくれるか私は待ち遠しくなりません。もちろん、浣腸を受けるポーズです。

主人は、このポーズを『静子夫人』と名付けております。奇巧の『花と蛇』よりヒントを得たと申しております。私が、いつも浣腸を受ける恰好を少し説明させて戴きます。

主人から責めを受けます時は、一切の着衣は許されません。全裸で、しっかりと後手高く緊縛され、口にはロープかゴムテープで、さるぐつわをかけられます。そうしてテープルの上に顔と両膝で身体をささえ、両足を大きく広げ、お尻を高く持ち上げる恰好です。

浣腸を受けるには、あるいは自然の型かもしれませんが、「おい、静子夫人をしろ」と命じられた時、やはり私もマゾ願望の女ですが、羞かしさがこみあげて参ります。それが



浣腸液注入を受け始めますと、快感に変わって参ります。

浣腸液には、今までグリセリンや石ケン水など使ってきましたが、私の一番好きなのは食塩水を注入してもらうことです。今、私は





ガラス浣腸器三百CCで、注入を受けておりますが、一回、二回、主人の入れてくれる回数数を数えながら千二百CCほど入った頃、私は、グルグルグルという音と共に、お尻を左右にふりながら「もっと入れて、パイプを使って」と主人にせがみます。こうしてこの手紙を書きながらも、私のお腹の中に食塩水が入って来るように思われ、自分で浣腸という言葉を使うだけで、私の全身が熱くなって参ります。千五百CCほど入れてもらおうと、私はとても嬉しくなります。そうして、激しく腰を左右にふりながら、つきあげて来る便意とパイプの快感に我を忘れ羞かしい言葉を自然と口走り、主人を求めるのです。

二千CCぐらい注入を受けますと、もうとても、がまんできませんが、まだ排便は許してもらえません。ゆっくり緊縛を解いてもらい、何度も何度も羞かしい言葉を主人にお願い

いしなければなりません。そうして、パイプを使ってもらい、とても苦しい。そうして、たのしい時間がつづきます。やがて、主人にだかれ、この世で一番素晴らしい時をつきあげて来る便意の中で迎えるのです。

全てが終わった時、私は我に返り、トイレに走り、排便の楽しみを味わいます。それも主人の命令で、トイレに行かせてもらえず庭先や板の間で用をたさなければならぬこともあります。とても羞かしいことですが、私は今、浣腸とセックスを切り離して考えられず便意性もあって三日間ぐらいは、がまんして主人から命じられるプレーに出来だけ多く注入してもらい、苦しみを感じ、快楽をより強く求められるようにしております。

私がもし主人の見ている前で、だれかにこんなことをされたら、主人は、どんなに欲んでくれるだろうと思えますと、私のM性は、

四月号を入手しました。

まず、目を見張らないではいられないのは読み物が非常に充実して来たことです。私の△期待と随想▽など、他の読み物に圧倒されてしまつて気がひけますが、妊婦に関する記事がそう多くないことから、私のつたない発言もいくらか意味があるような気がします。

この手紙を書かずにおれなくなりました。

SMプレー同好者の皆様、どうか私を主人の見ている前で緊縛し、浣腸責めにして下さい。そうして、私のマゾ願望を満たして下さい。浣腸マニヤの方や、谷山久美子様のように、それほど多くはまだ経験もございませんが、二千CCぐらいなら、がまん出来ますし排便の恰好も、同好者の方々の命じられるままに致します。そうした、あられもない私の姿をカメラに納めて戴ければ、この上ない幸いです。また、同好者の皆様と広く文通などを通して、親しくお友達になつて戴きたく思っております。夫婦SMプレーの同好者同志、また、SMプレーを楽しんでおられる方々に心からの呼びかけを致します。二十五才ぐらいから四十才前後の方で、私共夫婦と御交際していただける方がおられましたら、ぜひお手紙を下さい。

奇クサロンで、阪東太郎さんが、八六カ月

腹をさらす「妊婦責めプレイ」▽を投稿されていますが、いずれも縛られた三枚の写真のうち、右側の、横から撮ったものの、腹がプツクリと丸く飛び出ているのが、一番印象的です。妊娠六カ月でこうなのですから、月が進むにつれて、いよいよ大きく見事に膨れ上



## 感想と念願

## 四月号を読んで

羽 鳥 水 江

ということですが。

次に見のがせないのは、同じサロンの新人富田由美子さんの「初産の記」で、本年十九歳の少女妻。当然、初産で、現在、妊娠七カ月。五カ月頃からの記録フォトがあり、今後辻村さんにハントしてもらって、堂々と誌上に登場してもいいというお話です。

若いから勇気があるというのでしょうか、ここまでハッキリ申し出られたからには、辻村さんが出動されなくては、かえって失礼という位のものです。「浣腸も経験済み」で、「妊娠六カ月の折、二度ばかり吊り責めを受け」られたとのこと、場合によっては、同伴希望のご夫君の助けをかりて、逆さ吊るしの責めを実行することだって、不可能ではないでしょうし、次に発行される臨時増刊号の、いわば目玉商品として、カラー・グラビアなどにならないかしら、と考えています。

これは是非、実現して下さいませ。

辻村さんのハント、相かわらず旺盛で、四月号は少し毛色の変ったS女性ですが、このところ殆ど毎号、大いに浣腸づいておられたのが、今月は、「是非というなら構わないわ」と言われているのに、おじ気づいてしまわれたのは、どうしてでしょう。辻村さんだけに、読者へのサービス精神を要求し過ぎて、いけないでしょうが、惜しかったと思います。

それにしても、次々に、それこそ何十人という女を、誘導され、あくなきSM心理を、ますます追求されて止まない辻村さん。これが男というもののなのでしょう。全く感心してしまいます。女の方から言っても、それが隠れた願望ではないと言い切れないでしょうけれど……。

最後に、これは「サロン楽我記」で辻村さんも、おっしゃっていることですが、巷間のSMブームで、あれもこれもと出る出版物の氾濫の中で、アヌス・プレイとか浣腸プレイが、面白おかしく、これでもか、これでもかと採り上げられているのを見ると、私のように昔から、そちらを探求している者は、かえって白々しい気持ちになってしまうことを、どうすることも出来ません。

はじめのうちは、そのような記事を見るとうれしく、集めて紹介などしてみたく思っていましたし、また事実、いくつか紹介したりもしましたが、こういろいろ出ると、いずれも底が浅く、つまらないものばかりであったような気がします。

ただ、△妊婦△だけは、まだまだ奇ク独自の領域であると思われるのですが、どうでしょう。

毎号、妊婦のヌード写真が続々誌上に発表されることを、大いに期待し、念願するものです。

ることが予想されて、今後がたのしみです。

しかし、あえて注文を言わせていただくならば、前から希望して来たことですが、

一、やはり、ストロボかフラッシュによるベタ光であることが物足りない。

二、背景に障子などが写っていて、整理された画面になっていない。出来れば、やはり黒一色であってほしかった。

三、これは無理からぬことかも知れないが、下腹部でカットされているのが残念。





## 忘 我 の 瞬 間

現代の女性でクンニリングスの経験をもつ女性には、恐らく60%を越えるであろう。

クンニリングス自体、愛情を表現するひとつのテクニックである。もはやアブノーマルでも何でもない、極めて平凡な前戯の一種である。

私等の少年時代、戦前の日本は男尊女卑の風習が強かった。セックスのあと始末ひとつを例にとってみても、女性が先ず男性を拭い

連載・アブ紳士行状記

## M 派 交 友 録

玉井ひろ美の巻 (2)

鬼 山 絢 策

(17)

それから自分を始末するのが例であった。

たまに親切心から、男性がこれを代行しようとする「お手が汚れます」と言って、させないのが婦徳というものであるとされていた。

そのくらい、男女の格差があったのだ。

これも少年の頃、私はどうして寿司を握る職人に女性が居ないのかと父に質問したところ「冗談じゃない、女の握った寿司など汚らしくて食えるか」と一言で片づけられてしまった。どうして女の手が汚いのか、男だってトイレに行けば女より汚い手をしているの

ではないかと思ったのだが、父に対して突っ込んだ質問もできずに、疑問を残したままにしてしまっただが、女の手は汚いもの、手ばかりに限らず、すべて女は男より汚いものであるという風に、男性も女性も感覚的に、そういう精神を植えつけられてしまっていたのである。

そういう時代の常識からすると、クンニリングスという行為は、男性から見ても不潔極まるものと嫌悪されていたのではないかと、想像していた。

だが、それは少年時代の、まだ社会の裏側



を知らぬ頃の想像であつて、クニニリングスも結構、行なわれていたのであらうことは、壮年になってから察知しえたことである。

しかし何と言つても戦後、アメリカの風潮が流れこんで、女性上位時代と言われるような現代では、戦前に比して、その比率は、ぐっと高くなつてゐるであらうことは言うまでもない。それとセックスのテクニックなどが公に発表され、人々が関心を深めたことも大きな原因の一つになつてはゐるだろう。

だから前にも言つたようにクニニリングスそのものは、SでもなければMでもない。

だが、それも体位の、いかによつてM的ファクターが濃密に加わってくる。

「岩清水」というスタイルが四十八手の中にあるのは衆知のことであるが、このような体位は、かなりM的ムードが強い。

それと、もう一つ、精神面から見ても違つてくる。女性が受動的であるか、能動的であるかという点で大きく左右されるのである。

男性が能動的に、愛の表現として行なう場合は屈辱感がない。

だが、男性の自由を拘束し、男性の意思を無視して行なわれた場合は、強烈なMの芳香を放つ。

いま、玉井ひろ美がつてゐるポーズは、M派喝仰のポーズであり、M派の最もオーソドックスなスタイルであつた。

ヌード・ダンサーという職業柄、経験豊かな彼女も、このスタイルでの行為は初の体験かもしれない。つけまつ毛をした瞳がスーッと細まって、定まらぬ視線が、あらぬ一点を凝視してゐた。

だが十秒ぐらゐで、我に返つたように視線を、捕獲した獲物の上におとした。もうその時は、舞台上演技してゐる時と同様な余裕をとりもどし、カメラを意識した表情に戻つてゐた。

その機会を待つて、少しずつ違つたポーズをつけた。たとえば右足を立てるとか、左膝を立てるとか、腰を浮かすとか、ドッシリとおしつけるとか、ごくほんの僅かなアクションであるが、全体から見た画面構成の上からは大きな変化が見られた。

しかし主役はいつも女王さまのみである。動きのとれぬ奴隷の、唯一の自由に動く肉体の部分は、六センチほどの肉片のみである。しかも、それは外部からは見えぬところで動いてゐるのだから、第三者には、はかり知れぬことである。ただ、女王の満足そうな表情

から推して、奴隷としての勤めに最善をつくしてゐるであらうことが想像されるだけである。

たちまちにして、二本目のフィルムがきれた。

だが私は前のように休憩を欲しなかつた。ライトを二つ消し、黙つてフィルム交換を急いで行なつた。その間、モデル二人の間がどういふ態度に出るかを観察してゐた。

モデルは全然、休まなかつた。ライトが消えカメラの視線から解放されて、より激しい動きが繰り返されてゐた。

あれは一体、どっちの意思だろう。ひろ美の意思か、阿麻君の希望か、はたまた、両者の一致した意思のものか、恐らくは両者の意気投合したものと察せられた。

フィルムの入れ替えが終わつたころ、ひろ美はチラッと振り返つて私を見、ニツと、いたずらっぽく笑つた。

「あんまりハッスルして、潰さないで下さいよ。まだ、次の仕事が残つてゐるんだから」「ウフフフ、このひと、うまいわねえ」「うまいでしょう。バツグンでしょう」

阿麻君の錬磨されたタングの奉仕を受けた女性は、大抵、びっくりする。



## 張子の虎

三本目のフィルムからは非常にリラックスし、好調に運んだ。

ひろ美は暑い暑いと言うので、着物一枚、脱いで長襦袢姿になってもらい、数カット撮ると更に、それも脱いで腰巻一枚になった。

「アハハハ、ちょっと待ってよ。なに、この顔は。アハハハハ」

見ると阿麻君の顔は、ひろ美が入れてやった眼ばりの墨がとけて、顔中まっ黒になり、汗でベトベトに光っていた。

「まるで、張子の虎みたい。アハハハ」

ひろ美は、阿麻君の上で身体をはずませて笑った。

私は浴室からタオルを持ってきて、ひろ美に渡した。

その時阿麻君が下から始めて声を出した。

「どうぞ——お先に——」

ひろ美は阿麻君の目の前で濡れた身体を拭いた。タオルから、はみ出すような弾力のあつた太腿の白さが、エロティックであった。

タオルは、目ばりの墨で薄黒くなった。

拭き終わったひろ美は、タオルを部屋のど

こへ投げようかと、チラと浴室の方を振り返った。

その時、下から二本の手が出て、

「どうぞ、私に——」

と無言のまま、求めていた。ひろ美は、その両手にタオルを落とした。阿麻君は、そのタオルを、うやうやしく捧げ持つ恰好になった。部屋中に、ひろ美の体臭が立ちこめた。阿麻君は捧げたタオルから芳香を吸いこみ、それから顔を何度も拭いた。

ひろ美は、うすい笑みを浮かべて見下ろしていた。

「もうメーカーキャップは要らないわね。どうせ目ばりを入れたって、引き立つ面<sup>ツラ</sup>じゃないもん。ハッハハハ」

と、男のような太い声で笑った。

いままでに倉田由紀さんや、鷹野めぐみさんなどの女王さまを写してきたが、ひと区切りついたところで女王さまは「ごめんなさいね。苦しかったでしょ」とか「痛かった?」とか、奴隷に対して、なぐさめの言葉をかけたものである。その時だけ、女性のやさしさ<sup>ツラ</sup>が、にじみ出るのだが、今夜の玉井ひろ美は阿麻君とは初対面だと言うのに、あわれみの言葉を与えず「引き立つツラじゃない」と罵

って笑っているのである。そこに私は強烈なSを感じたが後日、阿麻君と話した時、やはり、その点に触れていたところを見ると、M派の感受性というのは、傾向が同じだと、同じところに感応するものだなあ、と思った。

フィルムを四本、撮り終わった時、一時を過ぎていた。二時間という約束が一時間もオーバーしてしまつたが、ひろ美は後半になるほど調子に乗ってきて、こっちの注文を、よくのみこんでくれたので、ポーズをつけるのも楽だった。

まだまだ撮りたかったが、文句も言わずに時間をオーバーしてまで協力してくれたことを感謝して、今夜は、これで、ひとまずキリをつけた。

「お疲れさん、どうもありがとう。素晴らしい傑作ができたと思う。あなたは、ほんとに得がたいひとだ」

私は心から御礼を述べた。ひろ美はニッコリ笑って、汗を流すべく、浴室に消えた。

「ああ、疲れた!」

阿麻君は、かつらを脱いで蒲団の上にひっくり返った。

「どうも御苦労さま。今夜のは、すばらしいのができますよ」



「ああ、くたびれた。今夜三人で、ここに泊まって行きませんか。帰る気力がなくなっちゃった」

「そうですね、私は帰らなきゃならない。彼女は、どうかな。無理だろうな。まあ一応、聞いてみますが、よければ二人で泊まってらっしゃい」

阿麻君は虚脱したように、言葉も少なく、目を閉じた。

ひろ美の風呂は、さすが芝居者だけに早かった。入ったと思ったら、もう出てきた。

「くたびれたでしょう。遅くなって済みませんでしたね。お宅は、どちら？」

「四谷ですわ」

「遅くなって、旦那さんに叱られないかな」

「あら、あたし、そんなの居ないわよ」

「じゃ泊まってゆきますか。私は帰るけど」

「いえ、近くだから——」

四谷じゃ目と鼻の先だから、泊まるわけがないが、阿麻君のために一応、聞いてみた。

「また、お願いできますか」

「ええ、でも三日間は仙台へ行くから、その先ならいいわ」

「お宅に電話、ありますか？」

ひろ美は気軽にアパートの電話番号を教え

てくれた。

「十一時から、お昼ごろまでなら大抵、居るわよ」

ひろ美も私も帰るので、結局、阿麻君は帰ることになり、それぞれ車を拾って別れた。

### 下駄のあじ

四、五日たって春木君から電話があったので「こないだ、すばらしいひとを見つけましたよ」と言うと、すぐ飛んできた。

「写真、撮ったんですか」

「ええ、時代物でね、男も女も、かつらをつけて撮ったんですよ」

「へエー、女の人って、どんな人ですか」

「女優さんですよ。ヌード・ダンサーでもあるんですがね」

「写真、うまくできましたか」

「とてもすばらしい傑作ができましたよ」

春木君は写真を見たそうな気配だったが、見せてくれと言っても私が見せないことを知っているの口には出さなかった。

「その女優さんに是非、会いたいですね」

「ああ、そりゃ簡単ですよ。新宿三丁目の内外ミュージックに出ていますよ。ああ、ちょう

ど今日あたりがラクの日になるかな。面白い芝居だから一見の価値がありますよ」

「それじゃ、見に行きます」

と言ったが、翌日また電話がかかってきて「昨夜、見てきました。あの中に綺麗なひとが二人、居ますね。美山ありさと、玉井ひろ美というひとでしたか」

「その玉井ひろ美ですよ」

「エッ、あのひとですか。あのひとなら、申し分ないですね」

「どうです。あなたもやりませんか」

「ええ、お願いします」

話はトントンと決まったので、早速、彼女のアパートに電話を試してみた。

「ウン、いいわよ」

話をビジネス的に持って行った方が彼女の場合はスムーズに行くので、その点、世話がやなくて都合がいい。

「今度はね、芸者姿でやって見たいんですがね。つぶし島田のかつらと、裾をひきずるような着物があったら、持ってきてくれませんか」

「探してみるわ」

この前は小屋の入口で待ち合わせたのが、帰りぎわの俳優達にジロジロ見られるのは、気



持のいいもんじゃないし、彼女の方も迷惑ではないかと思つたので、新宿三丁目の「山紫香」という鉄板焼で、待ち合わせることにした。

その夜は霧雨がしとしと降っていたが、かえって落ちついて、いいムードだった。

春木君はいける口なので、十時に山紫香にやってきて、先に一ぱいやっていた。

ひろ美は十時半頃、息せききって、やってきた。

「衣裳が、なかなか見つからないのよ。苦勞しちやうたわ」

この前の阿麻君と違って春木君は、かなり恰幅がいい。相手が変わつたことは、ひろ美には話してなかつたので、簡単に紹介した。

素人の女だと相手が違つてゐることに相当神経を使うし、場合によっては嫌だなどとダダをこねる場合もあるが、ひろ美なら大丈夫だろうと前もって知らせなかつたのだが予期した通り、ひろ美は、ちよつと会釈しただけで一向、氣にとめてない様子に安心した。

ひろ美は相当、飲むと聞いていたので、飲むだけ飲ませて見ようと思つたが、案外、遠慮したのか、二本も飲むと、

「もういいわ。行きましょ」

話をさせると、全国をわたり歩いて相当ずれていように見えるが、存外、氣のいいところがある。山紫香は彼女のお氣に入りの店で、ちよいちよい来るそうだが、それでも、「御馳走さま、おいしかったわ」と、ちゃんと挨拶するところが、しっかりしている。バーの女など連れて行つて奢つてやつても、まづそうに食べたり、礼も言わず、「奢らせてやつてゐるのだ」というような恩きせがましい態度に出られると癪にさわつて、二度とその店に行かない氣になつてしまう。そういうのが本当にすれつからしの女であつて、そこへ行くと、ひろ美は邪氣なく喜んでくれたので氣持がよかつた。

大体、ひろ美の氣心がつかめたので、ホテルへ着くと直ぐ仕事にとりかかつた。

今日の衣裳は苦勞したというだけあつて、紫色の裾模様豪華なものだった。

どういふつもりか、ひより下駄まで持ってきていた。

「ホウ、下駄まで揃えてくれたんですか。こりや面白いな。じゃ、その下駄から行きましょ」

だが下駄を使うには、畳の上というのでは

不自然である。

幸いこの部屋は和室で、玄関のところに半坪ほど、玉石を敷いた土間があつた。

「ところで今日のテーマですが、現代の悪女というものの魅力を、断片的にとらえて行こうと言うのが狙いです」

「悪女の芸者っていうわけ？」

「芸者姿は仮の姿です。ただし、ここで言う悪女とは、悪い女という意味ではない。善悪は対象外です。『悪』とは『強い』というイメージを指している。昔でも悪源太義平などというのは、豪傑という意味の『悪』でしょう。あれと同じ意味です。セックスの世界ではモラルはない。モラルを取り除けば善も悪もない。だます女が悪いのではなく、だまされる男が悪いのです。男を裏切る女は、愛情を失つただけのことで、極めて自然の現象でしかない。要するに、強いものが勝つ。強者が弱者を餌食にして、ますます強くなる。そういうイメージをバックにして、撮って行きたいと思います」

「演説は、それくらいにして早くやりましょうよ」

春木君はニヤニヤ笑っている。

「すみません。では先ず座敷の方から、素足





で蹴とばして行って、土間へ蹴落とす——という段どりで行きましょう」

いつもは、男のどこを蹴って下さいと必ず指定したのだが、今夜は、わざと指定抜きで行ってみた。土間の方にカメラを構えた。

「じゃ、行くわよ」

着物の裾と腰巻を捲って、足をあげやすいように準備していたひろ美は、至極、無造作に片足をあげると、正面から春木君の額のあたりを蹴りあげたのである。

もちろん、力が入っていない。蹴られた春

木君は足が額に当たった瞬間、目をつぶったが、倒れもせずに、ひろ美を見上げて、サッと顔が紅潮した。

「あつ、こまるなあ。春木君、蹴られたら、倒れて下さいよ。ハイもう一度」

春木君は、肉体的のショックよりも精神的なショックに酔い、ポーツとして、ひろ美の凄艶さに見惚れていた

が、私に注意されて目がさめた。

ひろ美は再び前より高く足をあげて、今度は少し強く蹴ったようだ。ペタン！というような音がした。春木君がオーバーにひっくり返る。いっぺんにカメラに近づいてしまったので、ピントを大きく修正する。

「ハイ、もうひと蹴り。春木君、右手で蹴られるのを防ぐ態勢をとって。そこを構わず腕の上から蹴りつける」

たった、ふた蹴りで、春木君は土間に蹴落とされてしまった。

「あいてッ！」

自ら土間に落ちた春木君は、腰を打ったと見えて悲鳴をあげた。

「フフフ。何も、ほんとに転がり落ちなくていいのに、バカねえ」

「ハイ、土間へ降りて下駄をはいて下さい」私の方も忙しい。今度は座敷の方から撮るために、ライトの方向を全部、変えなければならぬ。ひとつのライトは玄関の上の方から、モロに下を向けた。

春木君の倒れた位置を決めるのも、一回や二回では、うまく行かず、頭をあっちへ向けたり、こっちへ向けたり、狭い土間で春木君は大きな身体を折り曲げて、きゅうくつそうにして、やっとライトの真下に顔の位置がくるようにした。

「ひろ美ちゃん。頭の向こう側へ立って」

「狭くて入れないわよ」

春木君の頭と玄関のドアとの間は二十センチぐらいしかない。春木君の顔を跨いで、その狭いところへ立った、ひろ美は

「もう少し、頭をそっちへやってよ」

と、下駄の先を、春木君の頭へかけて押した。春木君の顔に又、あか味がさす。

私も内心、感心した。



いかにSの女といえども、春木君とは初対面である。しかも春木君は、阿麻君とは違って四十代。中年太りか、この頃、腹が出てきて、見たところ、課長か部長タイプの堂々たるおし出しである。それを屁とも思わずに、最初から頭を蹴とばしたりして、ものおじしないところは、大した度胸だと思った。

素人の女だと、いかにSっ気が強くても、最初は一応、儀礼的に女らしく遠慮する。それを一々「いいんです。構わず、やって下さい」と注釈を何回も繰返さなければならぬのが面倒だが、彼女の場合は、その手間が省けるので、まことにやりやすい。

「さてと、その位置で、下駄で喉首の所を踏んでみて下さい」

ひろ美の顔に始めてサジスチックな表情が現われた。上から春木君を見下ろして、片足をあげて喉のところに日和下駄の齒をあてがった。

「ここね」

春木君は目をつぶって観念している。

「ちよっと力を入れてみて下さい」

足先に力が加わる。ひろ美の口がへの字にゆがんだ。春木君が痛そうに顔をしかめた。

「ハイ、次は顔の真上から踏んで下さい」

「フフ、痛くても我慢するのよ」

と春木君に言い聞かせて、ひろ美は下駄を持ちあげると、ゆっくり顔の上に下ろした。前歯は額のあたりに、後ろの齒は、口の上を踏んでいる。

「ウン、こりゃ凄い。もう少し捲って、足を上の方まで出して下さい」

それは凄まじい一幅の絵になっていた。

「下駄の方向を変えて踏んで下さい」

ひろ美は足先だけの方向を変えて、顔を縦に踏んだり横に踏んだり、斜めに踏んだりした。春木君は元来、苦痛を受けることは好まない質である。

ひろ美は、いろいろ角度を変えて踏んでいくうちに、

「この野郎」

と調子をつけて、思わず足に力が入ることがある。春木君は顔をしかめて苦痛に耐えている。苦痛の演出は、あくまで擬態であるべきなのだが、ひろ美は興がのってくると、本気で踏みつけてくる。春木君が、その痛さをこらえるのは辛いだろうが、それを救ってくれるのは、ひろ美の美しい足が下から眺められることと「この野郎」という野太い、ひろ美の声が、はげましの言葉になっているのだ

った。

## 魔女の呪縛

「痛かった？ よく我慢したわね」

ひとわたり踏みつけシーンが終わると、ひろ美は春木君に対して、ひと言だけ、声をかけた。

これは舞台稽古の時などでも、終わったあとにする儀礼的なもので、ひろ美にとってはさして深い意味はない。慣習的に口から出ているのだが、春木君にとっては、このひと言を聞いただけで痛みは忘れ去ってしまったようだ。

春木君は顔の汗をハンケチで拭いた。そして、ひろ美に気づかれぬように口の中に入った僅かな土を舌で押し出して拭いていた。下駄は舞台用のもので、ほとんど土はついていなかったのだが、口を踏まれると、やはり少しは泥が入るのだろう。

白いワイシャツの背中に、かなり泥がついて汚れてしまったので、宿の浴衣に着替えてもらった。

さて、つぎは春木君が坐っている前に、ひろ美が立ちあがって、片足をあげて春木君



の膝へのせる。裾から捲れ出た太腿へキスするシーンを撮った。

普通、素人がこういうポーズをとると、いかにも、とってつけたような、ぎこちなさが目立つものであるが、さすがにひろ美は、手ひとつのさばきでも形がよい。例えば、片手を、ふところ手して胸から手首を出すポーズを注文する。そこまでは、こっちの注文だが胸から出した手首の形をどうするか、それは彼女が、ひとりで形をつけるのである。人さし指を、おとがいにくくあてた姿が、いかにも妖艶であった。

膝へ乗せた足が、ぐっと上がって男の肩を踏んだ。

偏平だった太腿が、ふくら腿と重なって、まるで大きく膨らんだ。女の体重を受けて、男は両手を後手について支える。のしかかるような豊かな女体。微笑を含んで見下ろす、ひろ美は、充実した女の貫録が、にじみ出ている。

はなやかな裾模様をおしわけて、化粧されであるのではないかと思われる真っ白い肌の太股が、赤い蹴出しの色どりもよく、ほんとはカラーで撮りたいところなのだが、カラーでは自分で現像ができないから、私はモノク

ロで通している。

肩にかかった足が、それを踏み越えて背中の方へおとし、肩を跨いだ恰好になった。

春木君は陶酔の境地に入ると目をつぶる癖がある。あとで仕上げてみると、どの写真も目を閉じているので変化がない。で、目をあけて視線を遠く上に、或いは近く目の前に、という風に変化することを注意した。

そして、いよいよ悪女の魅力を最大限に発揮する男性圧服のシーンに入った。

玉井ひろ美は、すでに二度目なので、前回よりも余裕がある。

狙った獲物は、必ず征服してしまう——。といった、悪女というよりも悪女の魅力を発散して、春木君は完全に虜にされてしまった。

魔女は尻の下の哀れな奴隷の表情の変化をたのしみながら責めている。

女郎蜘蛛の尻から放出する糸を身体中にかけられて、身動きできなくなった、とんぼのように、哀れな奴隷は目ばかりキョロキョロ動かしていた。

魔女の妖美な呪縛に、身も心もとろけさせられて行く。犬派の本望ともいうべき陶酔に浸っていると、魔女は突如として惨酷さを現

わしてくる。やわらかな肉環はグイッと強く締めまり巨大な象牙の塔の重味がのしかかってきて、奴隷を苦しめる。あわてふためく奴隷の顔を上から眺めながら、魔女は楽しんでいるのである。

前回の阿麻君の場合は、いかにも、ひ弱そうな身体つきであったが、春木君は、その点ガッチリしている。

ひろ美も、それを知って、春木君とは初会でありながら、かなり苛酷な責めを試みた。

時々ポーズの変化があるたびに、そこで辛くも奴隷は息がつけたのである。

弛めたり締めたり、楽しませたり苦しめたり、そのイニシアティブは、ひろ美が握っている。意の向くままに弄んでいるのである。

一連のポーズは、すべて男の方が受け身でジツとして女性のなすがままになっていればよいのだから、さほど、あらわに感情の高まりを示すわけではないが、額にクッキリと静脈のふくらみが、みみずばれのように浮かんでいるのは、演技ではできぬ表情である。

ひろ美は時々急所で、

「この野郎ッ！」

とか、

「これでもかッ！」



とか合の手をいれる。これがまた、よく効いていた。

三本のフィルムが切れたところで、ひとまず休憩することにした。何せ一時間以上も六十キロ近いボリュウムを顔の上に乗せられていたのでは、かなりの重労働である。

さすがにタフな春木君もグロッキーになってきたから、ひと息つくことにした。

酒と料理を注文して、ひろ美は風呂に入り私と春木君は、ライトやコードのあとかたづけや移動した鏡台やテーブルを元の位置に直すなど、これがまた、かなり手間のかかる仕事である。

風呂から裸で出てきたひろ美は、私達の目の前で、みごとな肉体の正面を向けて、バスタオルで身体を拭いた。

彼女は小声でジャズを唄っていた。その曲は聞いたことがない曲だった。私はジャズは好きだったから、大概の曲は聞き覚えがあったが、その曲だけは始めてだった。ハミングで唄うその声は、地声のガラガラ声とは全然違って、すき通るようなアルトで、ヴァイブレーションも自然で、すばらしい声だった。「その歌、何ていうの？」

ペラペラと、かなり長い単語を羅列したが

私には分からなかった。だが、そんな時のひろ美は、さっきまでのガラガラ声の悪女振りとは全然違って、知性があふれていた。

過去に、彼女はアメリカ人と暫く同棲していたことがあるという噂だったが、それ故に英語が堪能なのだろう。

それにしても、この歌は本式の修業をした声だ。私の期待は違わず、後年、彼女が日劇ミュージックホールに一枚看板のスターとして登場し、その歌と踊りは群を抜いて、観衆を魅了したのである。

私はこの歌を聞いた時から、彼女を場末の三文芝居の小屋などに出ている女優ではないと思った。彼女の才能には、まだ、はかり知れない深さを持っていることが分かった。

タオルからプリンプリンと、はじけるような肉体を見ていて、私は始めて欲情らしきものを感じた。カメラのファインダーから覗いている時は、どんな激烈なシーンを見ても、「仕事」という観念が先に立って、欲情しないのである。モデルが興奮すればするほど、私は冷静になって行った。

やがて、ひろ美は裸身の上に宿の浴衣を着て細紐を締め、鏡台の前に坐って化粧のくずれを直した。

「いいお風呂だけど、入らないの」

「入りたいけど、風呂へ入ると、くたびれちゃうからな。春木さん、あんた入りますか」

「いや、ぼくも結構です」

春木君は、まだあとを期待している顔だ。

「もうこれで、お終まいなの？」

クルッと振り返って私と春木君を見た。

「サア、どうしましょう。やりたければ続けますよ」

ひろ美は春木君の方を見てニッと笑った。

春木君は、ひろ美のはだけた胸のあたりに視線をチラとやって、万更でもなさそうな顔だった。ひと休みして疲れが抜けると、また気分が変わるらしい。

そこへ女中が料理を運んできた。隣の寝室にはライトやコードが出しっ放しになっている。唐紙は閉めてあるが、見られたらまずいとヒヤヒヤした。妙なところに私は臆病さが出る。

「まあとにかく、一ぱいやりましょうや」

私は、ひろ美と春木君にお酌した。

「ねえ、センセ。こんどマンションの一部屋借りない？ みんなで共同出資して借りるのよ。こないだ、春田六郎だの堅川段志だの来たパーティーで、そういう話が出たのよ。そ



うすれば麻雀もできるし、映画も見られるし  
 こういう撮影もできるでしょ」

「そりゃ、面白いね」

とは言ったが、大勢で出資して部屋を借り

毎月確実に入手されるために

本誌予約購読者を募る

毎月二十五日確実発売！

一月分	1冊	三五〇円(送20円)
三月分	3冊	一〇五〇円(送共)
半年分	6冊	二一〇〇円(送共)
一年分	12冊	四二〇〇円(送共)

郵便番号  
558

○本誌の入手がなかなか困難であるとか、  
 或は地方のため、入手することが出来ないとか、  
 かいとう声を聞きます。又、毎月確実に、早い  
 目に、手に入れたらという御要望をよく承り  
 ます。そういった方々は、どうぞ是非月極御  
 予約下さるようお願い致します。毎月製本完  
 成と同時にお手元までお届け致します。

○直接予約購読のお申込みを下さるのには  
 大阪市住吉局私書箱第四十一号暁出版株式会  
 社宛(郵便番号五五八)表記予約購読料をお  
 払込みの上、何年何月号より何カ月分と御指  
 定下さい。

○三月分以上お申込みの節は、送料、包装  
 代などは、総べて当社にて負担致します。但  
 し一冊毎お申込みの方は、送料として一冊分  
 二十円の御負担を願います。

○御送金下さる場合は、『現金書留、小為  
 替、定額小為替、(切手代用は一割増)振替

ると言うのは、実際問題としてうまく行かな  
 いのである。部屋を使いたい日時というのは  
 奇妙にかち合って、どちらかが譲歩しなけれ  
 ばならず、そんなことが続くとイヤ気がさす

(大阪四二七八三番)のいずれかをご利用  
 願います。現金の場合、普通郵便封入は違法  
 です。必ず『現金書留』にして下さい。

○予約お申込みの方には、毎月二十日、印  
 刷完成と同時に、外部から見えないように厳  
 重包装の上、一斉に発送申し上げます。

○毎月一冊お申込み下さる方は、誌代送料  
 三七〇円をなるべく毎月十五日頃までに御送  
 金頂ければ、印刷完成と同時に、予約購読者  
 の方の分と一緒に発送致します。

○予約購読のお申込みの際は、必ず何月号  
 から何カ月分送れとお書き願います。第一回  
 分発送の際、明細を雑誌に添付致します。何  
 月号からとお書きにならないときは、重複や  
 欠号をきたしますので御留意願います。

○予約金が切れましましたときは、封筒の上に  
 〆本号にて前金切の判を捺印致しますから  
 継続お払込み願います。継続のお払込みでも  
 何月号からと御明記願います。

○局留にて雑誌をお受けとりになられる方  
 は、毎月二十五日頃、局へおいで下さい。局  
 留郵便物の受取り方は、先ず御注文の際にお受  
 取りになりたい郵便局(特定郵便局でも結構  
 です)と受取人のお名前とをお知らせ下され  
 ば、当方では御指定の局留としてお送りいた  
 します。数日後その局で御受領願います。  
 局での留置期間は十日間でその間にお受取り  
 にならないときは、発送人に返戻されます。

ものなのだ。

「ねえセンセ。南さんが仲間に入れてほしい  
 って言ってるんだけど――」

ジュリー南は、ストリッパーとしてはベテ  
 ランで、最近はずヒズムをテーマとしたシ  
 ョウを売り物としている異色のストリッパー  
 である。

「え？ だってジュリー南はMだろう」

「ウン、だけど、しょっちゅう男に虐められ  
 てばかりいるから、たまには虐めてみたい  
 って言ってるのよ。二人がかりで虐めるのも面  
 白いんじゃない？」

春木君を見ると、早くも目をかがやかせて  
 いる。

だが私は、ひろ美が「まずいことを、しゃ  
 べってくれた」と思った。そのアイデアは賛  
 成なのだが、春木君の耳に入れたことが、ま  
 ずいのである。

それは、次のモデル候補者が別に予定され  
 ていたからだだった。

玉井ひろ美については、まだまだ資料があ  
 るが、来月は荒木氏と、ひろ美の項について  
 荒木氏を主体として書いてみたいと思う。

――(この項終わり)――



## 懸賞入選創作

瓦

礫

の

塔

巷野悪太郎

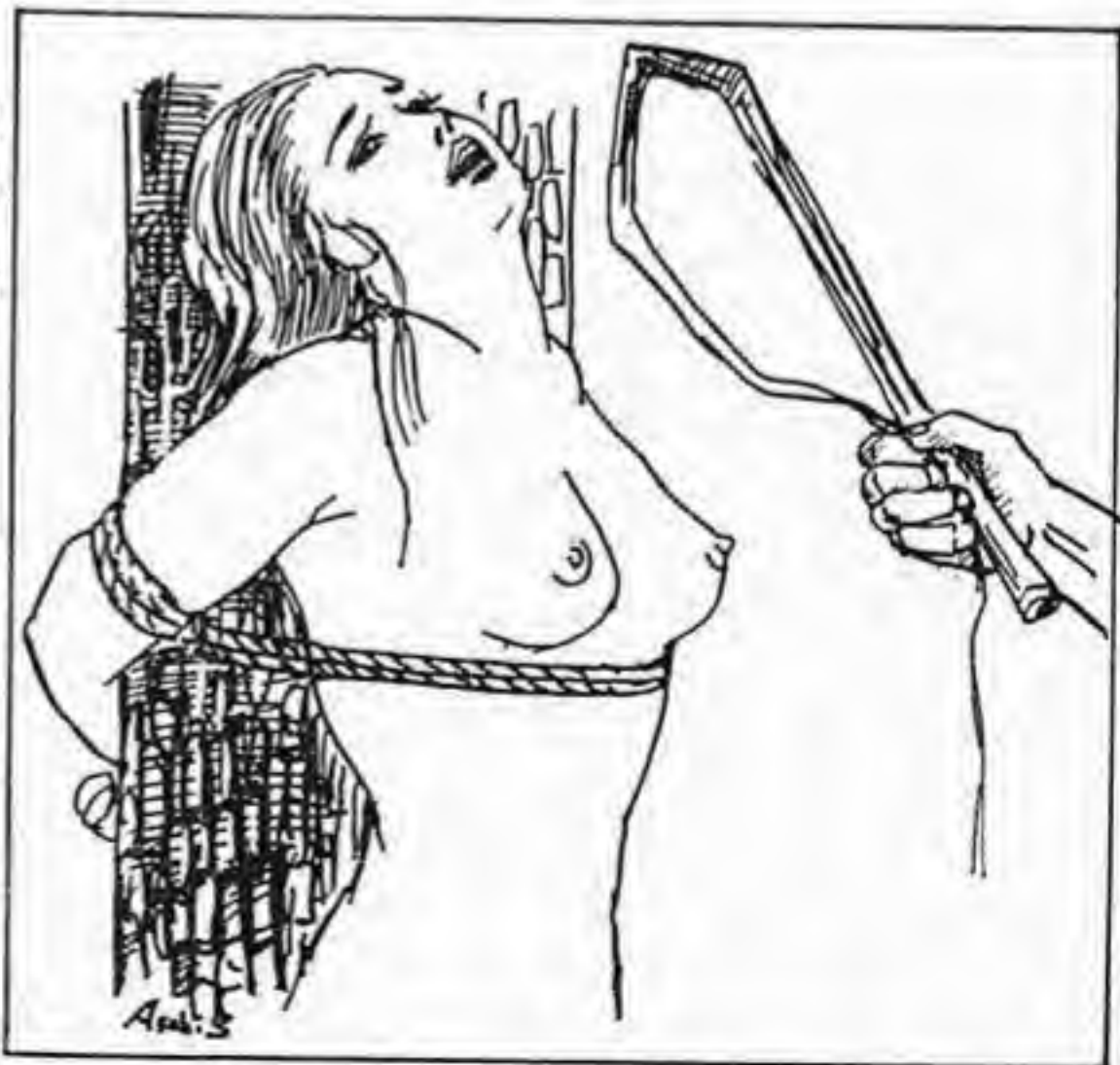
「全学の学友諸君に告ぐ……我々は先日来より明らかにされた学部長、及び教授会による不正入試事件と理事会の使途不明金問題を徹底的に追求し、さらに授業料値上げに断乎反対し、学生会館の自主的運営を勝ちとるまで闘いを高めねばならない。……さらにこの闘いを単なる学園斗争に終わらせず、他の大学にも共闘を呼びかけ、学生、労働者、市民が一体となった幅広い斗争とし、七十年安保以降の沈滞した民主革新勢力の発展の足がかりとせねばならない。……」

新学期に入り、若々しい新入生が行き交い

活気づいた明るいN大学のキャンパスの中、時計台の下の広場に机やイスを並べた上に立ち、かん高い声を張り上げているのは九条円<sup>マドカ</sup>である。

マドカは本名よりも、むしろゲバルト・ローズという名で親しまれ、N大学だけでなく他の大学やマス・コミに知られている。

マドカが有名になったのは、それまでに最過激派である赤核派の拠点になっていたN大学の学生自治会を、比較的温健な民赤派の手にもどし、ともすれば分裂しがちな学生運動を、一応まがりなりにもまとめ直し、七十年



カット・須坂 旭

安保斗争以来打ち沈んでいた学生運動を立て直し、昨秋の一〇・二一の国際反戦デーには各派閥を越えて、日比谷に全国から五万の学生を動員し、整然としたデモをやったのけたからである。

それまで過激な焼き打ち事件などで、うんざりしていた世論やマスコミは驚きの目で見守り、学生運動に無関心なノン・ポリの学生までもが、ゲバルト・ローズを見たさに集会に参加するというシマツであった。

九条円<sup>マドカ</sup>はもともと斗士というよりは、ごくありふれた女子大生で、海が好きで、女子学



生の少ない海洋学部三年に籍を置いていっているという点が、変わっていると言えは言えるぐらいのものである。

父は商船会社の重役で、何一つ不自由なく育ち、母ゆずりの色白で上品な顔だちとスラリとしたプロポーションは、すれちがう男を振り向かせずにはいなかった。ただ、父親の激しい気性が引きつがれたと見え、不正なことは黙っていられない男勝りの気の強さをなよやかな外見の内に秘めていた。

集まった学生を前にして、熱弁を続けるマドカ。さかんな拍手。巻き上る声援。

だが長い間、内ゲバを続けた各セクトの間のシコリは、すぐ溶け合うほど甘くはなかった。さかんな拍手のカゲで、ジッとマドカを見つめる冷たい目が、いくつもあることをマドカは知らない。

白日の下で見る共闘会議の姿は美しく、マドカはその象徴のようであった。しかし、その美しさは薄氷の上の均衡でしかない。次の斗いのために主導権を握れと命じられている各セクトのリーダー達にとっては、マドカが目の上のタンコブであり、かっこのエジキであった。

「ねえ、ローズさん、このあとの大衆団交の持ち方や新入生の力をいかにして結集するかについて少し検討しない？」

演説が一段落した時、赤核派の白峰明美がマドカに声をかけた。

マドカの属する民赤派が、理工学部や海洋学部などをバックに男子学生が多いのに対して、明美の属する赤核派は女子学生の多い文学部を主体として、経・法・商などに幅広くシンパを持っている。

「そうねえ。今日の集會も、今一つ新入生の反応が薄いようだし。じゃあ、今日の集約と今後の斗いの進め方ということで、共闘会議の執行部のメンバーは午後の授業が終わってから、民赤の室に集まってちょうだい」

「アラ。この前も民赤の室におじゃましたから、今日は赤核の室にしましょうヨ。新しい斗士も紹介したいし、今日のために少しカンパしてお茶とお菓子くらいなら用意してあるのヨ」

明美がニッコリ笑いながら言う。

「イヤ、共闘会議の議場は、民赤の室と決めてあるのだから……」

と、さえぎったのは、民赤派の深海静夫である。深海は実は以前は赤核派の一員で白峰

明美の恋人でもあったのだが、今はセクトを変わり、マドカの陰のフトコロ刀として働きの献身的な協力でマドカの今日が支えられていると言ってもいい。

「まあ、そんな固いことを言わないで、たまには私達の好意を受けてヨ」

と明美。

「深海さん。こんなに言うてくださるんだから、おじゃましましょうよ」

と、マドカに言われては、深海も少しおかしいと思いつつも承知せざるを得ない。

「それでは……。しかし民赤派としては、共闘の執行部メンバーである九条さんと俺の他に、二三人のガンジ、ウな男子学生がいっしょに行くことになりましたが、いいですか」

「ええ、けっこう。それでは都合、五人くらい、お客様というわけネ。……アラ、いけない。もう比較文学の始まる時間だわ。あの先公、出席うるさいんだ。それじゃ」

とあわてて、文学部の建物に走る明美の背に、時計台が午前十時を告げる音がのんびりと響く。

○

マドカは、無重力の空間に浮いているような気持だった。乳白色の霧の中をフワフワと



まるでスローモーションの映画のように動いている自分の手足。この霧を抜けて、どこか見通しのきく処まで出なくてはと思うのだが行けども行けども霧は広がって果てしなく、自分の心は焦るばかりで身体が動いてくれない。

どうしよう、どうしよう。

何かが、速いスピードで近づいてくる。逃げなくては！ しかし一体どうしたというのだろう、この体のだるさは……。

「ギャーッ」

耳のすぐ横で突然に挙げた、怪鳥の鳴くような、けたたましい叫び声で、マドカは目を覚めた。

少し頭が痛い。周囲を見回す。ソファの上に寝ている自分。そうだ、あのコーヒーを飲んでから眠ってしまったのだ。体を起こしてみる。周囲の事物にだんだんと焦点が合ってくる。うめき声が聞こえる。ハッとなって眼を走らす。

何ということ！

深海君が上半身裸で、イスに後ろ手に縛りつけられてうめいている。その横に、深海が連れて来た若いガンジョウな男子学生二人もイモ虫のように全身をぐるぐる巻きにされた

上に、サルグツワをされて転っている。

今、自分の眼を覚させた「ギャーッ」という叫び声は、夢ではなかったのだ。深海君の悲鳴だ、とすると……。

「フン、どうやら、お目ざめになったようですな、ゲバルト・ローズ様」

声のした方をふりかえって見ると、そこには赤核派の猛烈な斗士として有名な、又、深海の去った後の、明美の今の恋人としても知られている荒垣が、タバコを指先でもてあそび乍ら近づき、ポイト、マドカの足元に捨てた。

荒垣はそのタバコの火を、今、深海の掌の上で、もみ消したばかりなのだ。

「なんということをするの！ これは一体どういうわけなの。貴方達は同志を裏切ろうとしているのネ」

マドカはシャンと立ち、毅然とした態度で荒垣に向かい合った。

荒垣はその勢いに少し気押され乍らも、ズルそうな目でニヤリとした。

「イヤ、裏切りはしないさ。これは、つまり初めっからの我々の計画だったわけさ。学園の改革や、社会の革命は、お嬢さんの甘っちょろい感傷やヒロイズムでは達成できないの

さ。世論も背を向け出したし、一般学生は日和見ってやがるし、商業マスコミは体制についてベツタリだ。そこで傷ついた我々は少し体むことにし、その間、ゲバルト・ローズさんに踊っておいてもらって、陣容を立て直しただけのことさ。そろそろ、一段落した我々は元の通り、主導権<sup>ヘゲモニー</sup>を返してもらい、その間のシンパの名簿や資金源を教えてもらおうと思ったのだが、この深海君は、どうもそれがお気に入らないらしいので、思い直してもらうように頼んでいるだけのことさ」

と言いながら、荒垣は又、新しいタバコに火をつけると深く煙を吸い込み、マドカに向かって吹きつけたが、マドカがむせている間に、又もや深海に近づいて行った。

「どうだ深海、まだ吐く気にはならねえか。

おめえも用心深くしてたつもりだろうが、俺達が飲んでみせたコーヒーで、まんまと二杯目には引っかけたな。あれじゃ失格だ。革命には広い心とともに細心の注意も必要だつてゲバラも言っているじゃねえか。ええ、もういいかげんに吐けヨ」

深海は、憎悪のこもった目で、ただにらみつけているだけである。

「フン、まだタバコが欲しいっていうんだな



ローズという美女の尻にひつついてると、へんなものがお好きになるらしいな」

ニヤリと笑って、タバコの火を深海のワキ腹に、じわじわと近づける。

「待って」

マドカが、荒垣の手にしがみつくのより早く、火は、容赦なく深海のアバラ骨のくぼみに食いこみ、よじられた。

「ギャーッ」

と叫び、気絶する深海。

○

「貴方達は気が狂ったの？ 今ここで元のように分裂すれば学校当局の思うツボじゃないの。セクトが何よ。派閥や主導権が何よ。敵は一体どこにいてると思ってるの。共斗会議を信じている学生達をどう思ってるのよ」

マドカは荒垣の襟をつかんで、ゆさぶる。

荒垣はその腕をゆっくりと払いのけ、

「ヘン、甘いよ。学生だけで何ができると思っているんだ。学外の団体とつながり、資金と同時に指令を受けて動いているんじゃないか。腐った〇〇党や、転向した××党にふり廻されているのが、学生運動の現状じゃないか。その腐れエンを切り、真の革命を一気にやりとげるには俺達の方法しかないんだ」

荒垣は、どなるようにそういうと、気絶した深海を靴先で小突いた。

「チェツ、おネンネかい、ダラシのねえヤツだ。……それではゲバルト・ローズ様じきじきに教えてもらおうとするか」

と言いつつ又、新しいタバコを抜き出す。

「そうなの。そう聞いているは、よけいに主導権と議長席は渡せなくなったわ。このことは全学集会の場であばき、全学の学友の名で赤核派を共斗会議から除名するわ」

「フッフフ。その全学集会を開く前に、主導権を受けとり、シンパの名簿と資金源をいただいたらどうするんだ。……なあ、お嬢さんよ。早くすなおになった方が利口だぜ。たしか、A大の清野が、拷問で殺されて死体がおっぱり出されてたってことだねえ。今だに犯人が挙げてないっていうじゃないか。そうそう、あの死体にはタバコの火の跡がいっぱいだったってことだが、まさかアンタもタバコの火が好きってんじゃないだろうな」

背広を脱いで近寄る荒垣に対し、マドカはさっと壁にとびさすると、隅に置かれてあったゲバ棒を一本、手にとって身構えた。

その時、声が掛かった。

「ちよい待ち」

黄色い声をとばして荒垣を制したのは、それまで二人のやりとりを、室の隅で黙って、面白げに見ていた白峰明美である。

○

「女には女同志で、弱いところが解るのよ。

ローズは私達に任せて荒垣君は深海と残り二人のイモ虫野郎をしめ上げてよ」

「なるほど。よし、それでは、どっちが早く吐かせるか競争するとうしようか」

と、深海の方に向き直る、荒垣の大きな背中。その背中に向かって明美の声がとぶ。

「ねえ、忠告しておくけど、反抗心のある人間は、ただなぐったり、痛めつけるだけじゃしゃべらないわよ」

そうでもないさと言いつつ、又々、新しいタバコに火をつける荒垣。

それを横目にしながら、明美はマドカと向かい合った。

「サアテと、ぼちぼち、お相手しましょうかね。でも、こっちは、あんな手荒なことはいわ、ローズ様。学園の憧れの的、女王ですものネ、ていねいに扱わなくちゃ。ちよつとユリとミサ、手を借してよ」

「アイヨ」と、とび出してきたのは、大柄で大食漢のユリと、ゾツとするほど美しい顔を



していながら、残忍なことを平気でするミサの二人である。

「白峰さん。貴方は、自分のしていることが反革命的な、汚い恥ずべきことだと思わないの。寄らないでッ。一步でも近づいたら、許さないわよ」

とゲバ棒を前に構えるマドカ。

「なっちゃいねえな。口先だけで、体張ってゲバの修羅場、踏んだことねえから、ゲバ棒の持ち方も知らねえんでやんの。貸してみろ使い方、教えてやっから」

と、ユリが無雑作に手を伸ばしたところにピシッと小手が決まった。

「アイタッ、チキショー」

予期せぬ抵抗に手首を押さえて、かがみ込むユリ。そのスキに、隣室にとび込み、ドアに走り、ノブを回して脱出しようとしたマドカ。しかし、ドアはビクともしない。

「ダメだよ。そこは年中、錠がおりてて出口は、さっきオメエが入って来たところしかねえんだよ。それにねえ、この文学部の地下室は少々の声を出しても外には聞こえねえよ」

すごみを利かせながら、ジリジリ近づいたミサの手から、旗ザオがふり下ろされる。除けようとして、ゲバ棒を上にも構えた時は、す

ばやくとび込んだミサの拳がマドカの胃に強烈に入っていた。

「グウーッ」とうめいてくず折れるマドカ。

「ソレッ」と三人で手足を押さえ込み、すばやく、デモの時、顔を隠す手ぬぐいで手足を縛ってしまう。

ホッと一と息ついた三人は立ち上り、マドカを見下ろす。

肩で息をしながらも、目だけはランランと輝き、少しでも手を触れたら、かみつかんばかりのマドカ。くくられて転がされても、ジパンからはち切れんばかりの肢体と、くびれた腰、セーターを突き上げているバストはみごとなプロポーションを示している。

さっき、ゲバ棒で小手を打たれて逆上しているユリも、何か気品に気圧された感じで、すぐには手を出しかねている。位い負けというヤツか。

そんな気配を、す早く察した明美は

「なにを、ボケーッとしているのよ。こいつは民赤の敵だよ。真の革命の敵だよ。気取った顔をしていても、一皮むけば、同じ女だってことを思い知らせてやるんだ。さあ、女の責めは、まず裸にしてからだよ」

言われてユリが、マドカの上に馬乗りにな

ると、三人が一斉にむらがり寄り、セーターを脱がせ、シニミーズを引き破り、ブラジャーを外すのに三分とかからなかった。

コリンとまだ固い乳房に、明美の手が伸びギューッと、にぎる。

「ヤメテーッ」

死にものぐるいで、当たるを幸いに明美の腕に爪を立てたが、すぐ床板の上に押しつけられる。

無防備の乳房の上に明美に代わって、ミサの手が伸び、ユリの手も加わる。何とも言えぬおぞましさにマドカの唇はぶるぶるふるえ肌は鳥肌立っている。この突然に降って湧いたような危機に、マドカは気が動てんして思考が錯誤してくる。

やがて三人は、マドカの手首をくくった手拭いにロープを通して天井に引きあげ、足がやっと床につくくらいに吊り下げた。手首が千切れるように痛い。

「サアテと、これから女王様に一つずつ質問をします。答えていただかないと、どんどん羞かしい姿をさらすことになりましたが、悪しからず」

と言いつつ明美はマドカの伸び切った体を回して裸電球の方に正面を向けさせる。



かつこの良い乳房が二つ、ツンと上を向いている。

「先ず、今のところ民赤の資金はどこから出ているのですか」

この問いに対して、マドカは何も答えず、さげすみの一瞥をくれると、明美の顔にペツとツバを吐きかけた。

「ヤローッ」

と、ユリがなぐりかかろうとするのを制した明美は、ハンケチでゆっくりとツバをぬぐい、ツと手を伸ばして、マドカのジューパンのジッパーに手をかけ、静かに引き下げた。

「バカッ。ヤメテ。ヤメテッ。イヤッ」

とマドカが乱れるのもかまわず、ユリとミサが足元にかがみ込み、ジューパンの両端をつかんで一気に脱がしてしまう。残るはパンティ一枚のみ。これからどうされるかと思うと気が弱くなったマドカは

「ナニをバカなことをするの。ネ、お願い、許して。ヒドイことをしないで……」

「ソラ、やっ和高慢ちきな女王が助けを求めて来たわ。それでは質問に答える？」

「私、本当に知らないの。深海君達にすべてを任せてあるので、私は何もくわしいことを知らないの。ネッ、許して」

「アッ、そう。あくまでシラを切るのネ。それでは、しょうがないわネ」

明美は両手を伸ばし、パンティの上のゴムに指をかけると、ゆっくり外側にめくりかえしていくように引き下げる。

「イヤッ、イヤ、それだけは許して。本当に知らないの。アアッ」

泣きさげ腰を引き、足をバタつかせるマドカ。裸電球の下、完全に裏がえしにひっぺがされ、太モモの中ごろで止まっているパンティ。激しく全身をゆすり、身悶えして泣くマドカ。

クツクツとうれしそうに笑っていた明美は勝ちほこったように、マドカの顔をのぞき込み、太モモを突つつきながら、あざける。

「どう？ もうツバを吐きかける元気はないの？ フン、なにが女王さ。一と皮むけば全く普通の女じゃない。それにナニさ、これ。女として身だしなみがなってないじゃない。

これじゃ深海君にキラわれるヨ。いくら斗争中とは言え、毎日とりかえなきやダメヨ」

「それに意外と濃いじゃねえか。どっちかってと、テメエも好きな方だな」

と、ユリが下品に顔をゆがめて笑い、追い打ちをかける。

マドカはガックリと首を前に落とし、涙をポタポタと床に落とし乍ら、それでも太モモをしっかりと合わせて、ふるえている。

そんなマドカの前に立った明美は非情に、髪をつかんで、顔をまっ正面に向けさせる。

「どう、これでも、まだ答えられないの」

「でも……私、本当に知らないんです。ネ、信じて」

と蚊の鳴くような声でマドカが答える。

「チェッ。もうアタマに来た。遠慮しないぞ赤核の恐ろしさを味わわせてやる。徹底的に責めてやる。責められてから答えると言ったって、もう遅いヨ。ミサ、サルグツワかまして、ユリ、そのゲバ棒一本、持っといで。それから、マドカのパンティ完全にとり外してヨシ、二人で股を引っぱるのヨ。セーノ」

テキパキと指示した明美はゲバ棒の一端を持ち、マドカの足元にしゃがみ、マドカの右足を棒のハジに縛りつけた。

左足はユリとミサが握ってジリジリと開かせていく。マドカは額や全身に汗をしたたかせ乍らけんめいにこらえるが、馬鹿力のユリには敵わない。やがて描き出された電灯の下に美しい人の字の無残絵。これが午前中、リリしく演説をしていた時のゲバルト・ローズ



だとは想像することもできない。

隣の室からは、時々、荒垣のどなる声と、深海らのうめく声が聞こえてくる。

○

「サアテと、これからが本格的なのだが、どうしてやろうか？」

と明美は乳首をひねり悲鳴を上げさせ乍ら言う。

「フフフッ、明美、深海をとられた口惜しさを考えれば、まだまだだヨ」

冷たい笑い顔でミサが、からかう。

「ナニッ、ヘンなこと言わないでよ。私は我々の真の革命のための使命として、働いているのであって、個人的な感情は……」

「モウいいよ、能書きは」

ミサは明美の言葉を途中で切る。

「ところで、生物学の研究によれば、動物は高等になればなるほど遊びを楽しむってよ。クマやイルカはどんなものでもオモチャにして喜ぶことを知っていやがるってヨ。そこで我々人間はもっと頭を使わなくちゃと思うわけよ」

「と言いつつ、ミサは三つのマッチ箱を掌の上に並べた。」

「このマッチ箱一つだって、頭の使い方によ

っては、けっこうマドカを泣かす責め具になるわけよ。ハイ先ずアナタなら、どうする」

マッチ箱を一つ手渡されたユリは、いきなり、一本マッチ棒をとり出すと火をつけて、マドカの無防備の左ワキに近づけた。大きく目を見開き、サルグツワの中で助けを求めるマドカ。毛糸のこげるような臭いが、あたりに漂う。

「どうする。まだ焼くところはタントあるんだけど……」

とユリはふりかえって鼻をうごめかす。

「女のくせに殺伐だね。私はソフト・タッチでいくわ」

と明美は両手にマッチ棒を一本ずつ持ってマドカの汗の光る乳房に顔を寄せ、マッチ棒の先の、硫黄のついたザラザラしたところで軽く、乳頭を突つくと、マドカの体がビクンと反射的にそりかえる。さらにソーツと乳首の周囲から体の側面にマッチの先が責めながら移動する。マドカは腰を後ろに引き、呼吸が荒くなる。明美はここで今までのマッチ棒を捨て、さらに新しいマッチ棒を両手に二本ずつ持って、しゃがみ込む。

汗を流し、うめき、悶えるマドカ。しかし明美の左足は、マドカを開かせているゲバ棒

をしっかと踏みつけ、固定させて、逃がさない。

「やるわね、それじゃ私も」

と言ったミサはマッチ棒の束を握ると、マドカの体の後ろに回って、ツと手が伸びる。

「いっぽーん……にはーん……さんぽーん……」

後ろに引かれ気味のマドカの腰が前に逃げように出る。

「オヤ、もっと責めて欲しいのネ」

前に逃げた腰は待ち受けた明美の攻撃に遭い、又、後ろに逃げる。

あっけにとられて見ていたユリが我に帰り燃えさしのマッチ棒を捨てると、別のマッチ棒に火をつけ、右ワキの方に目を向ける。

ジジジッとこげる音を楽しむユリ。

何の音もさせないで、目だけギラギラ光らせて、マドカには辛い静かな責めを続ける明美。

「じゅーいっぽーん……じゅーにはーん」

数えながら攻撃を楽しんでいるミサ。

三人の責めを同時に受けたマドカは屈辱のドン底で、全身を波打たせふるわせ、小鼻を開き、うめき、泣き、悶え、今はもう恥も外聞もなく、のたうち廻りたい裸身を揺り動かすのが精一杯だった。



「オイ、そっちはまだか。俺の方は吐かせたぜ……ムッ……」

額の汗をふきながら室に入って来た荒垣は三人にまとわりつかれて半狂乱になって悶えさせられているマドカの姿を見て、一瞬、声を飲み、棒立ちになる。

裸電球の下、美しくも妖しい人柱の悶え抜く裸身は、残酷というより幻想的でさえある。

その時、マドカの全身が硬直して伸び切ったと思うと「クウッ、アアッ」と、一と声、この世のものとは思われぬうめき声が猿ぐつわからもれ、手首に全ての体重をかけて生贄の体がガクッとブラ下った。ついに失神したようだった。

「ヤッターッ。ヘン、ザマ見ろってんだ」

グッタリ垂れた頭を持ち上げ、マドカのホッペをつついて喜ぶユリ。

「喜んでる場合じゃないよ、ユリ。向こうの室の男子学生の方が先に吐かせちゃったらしいよ」

と明美。

入口には、まだ自分の目が信じられないという姿で立っている荒垣に、ミサの声。

「ナニ、ボサーッとしてるのよ。入って来なさいヨ。この女、意外としぶといから、少しかわいがってやっただけよ。おかげでノビちやって吐くどころじゃないけど、深海のヤロ、どうしたの？」

「ウン、とうとう吐かせたよ。しかし、資金源とシンパの名簿は吐いたけど、まだ主導権を渡すとは言わないので、今一と休みしに来たのさ」

「そうすると、私達の負けね、マドカに吐かせることできなかったもの。チクショー」

と床を蹴る明美。

「イヤ、そうでもないよ。互格だ。今、俺はその女の姿を見て、久しぶりに写真を撮りたいて気がしたんだ。俺は、芸術学部・写真科の学生で、カメラマン志望だってことを思い出したんだ。解からないかい。このマドカ即ちゲバルト・ローズの今の写真を撮っておくんだよ。これのネガがこっちにある限り、主導権はこっちのものだよ」

言うより早く、カメラをとり走る荒垣。

○

さっきと打って変わって明るい室。荒垣が三人の女を使ってライトをあちこちと動かししているからだ。そして自分は三台のカメラを

首から下げて、床に転がったりイスの上に上がったリレンズを替えたりして、色々の角度から、マドカの悲惨な姿を撮りまくる。

「荒垣さんのそういう姿、被写体を追う時の目の光り、ステキだな」

と、ミサが熱っぽい目で荒垣を見つめている。しかし荒垣は、

「よけいなこと言うな、ミサ。それより、もう少し肢をもち上げて、そう、それから腰の下にヘルメット一つ入れてくれないかな」

とカメラに熱中でソツ気ない。

「なによ。偉らそうなこといって、ホントはマドカの裸に夢中なクセに……フン」

と言うと、ミサはマドカに手を伸ばした。

「キヤッッ」

どこをどうつねったのか、それまで、グツタリと失神状態で、なすがままになっていたマドカが、悲鳴とともに、意識をとりもどした。

「オヤ、お目覚めかい。ようし、なら、もう一度、悶えてもらおうよ。マッチ棒は、まだタップリあるからサ」

と、ミサは乱暴にマッチ棒の束をつかむ。

「マッテ。今度はマッチなんかより、これが良いんじゃない？」



と明美が笑いながらさし出したのは、火炎ビン斗争の時、ニトログリセリンなどを計った太い試験管である。

「いや、いやよッ！」

それを目にしたマドカは、余りのことに思わず叫んだ。自分でも気付いていなかったが悶えているうちに猿ぐつわがゆるんでいたらしい。声が出たのだ。

「ヤメテ。もう、いくらでも主<sup>ヘゲモニー</sup>導権は渡します。だからヤメテ、イヤッ……ヒイッ」

「口だけでは信用できないのでネ。だけど我乍ら少し悪のりしたかな」

と立ち上る明美の手にある試験管がブルブルとふるえている。

「かまわねえや、悪のりついだ。もうメッタメタやっちゃえ」とユリ。

その言葉に勢いづけられたように、ミサが冷たい笑いを浮かべながら、赤インクと筆を持ってマドカに近づいた。

不自由な体をよじって、逃げられないのに逃げようとするマドカ。それを押えつけて、白い腹から胸に書かれた文字。

「プチ・ブル、エセ革命家・九条マドカ」

フーッと嘲笑するユリ、ミサ、明美。

顔を右に左にふり、身も世もあらず、屈辱

の中で泣き悶えるマドカ。

ギラギラと血走る目で息づかい荒くシャッターを切り続ける荒垣。このあとマドカは改めて縛り直され、「連帯の挨拶」と称して、荒垣ら男子学生らの欲望のエジキにされた。マドカは、もうろうと薄れゆく意識の中で、『もう、私はダメになった』と思った。

○

それからのN大学の学生運動は変わった。病氣ということで全学共斗会議の議長が代わり、執行部の幹部も入れ代わった。一般学生がアレヨアレヨという間に他の大学の外人部隊が入り込み、忽ちに学校が封鎖され、機動隊が入り、毎日ヶガ人の出る激しい斗争が、又、始まった。大学の周囲の道路は通行止めとなり、う回路が作られた。

今、小雨の中のそのう回路を通る一台の乗用車の窓から、くい入るように時計台を見つめている一人の美しい若い女がいた。九条<sup>マドカ</sup>円である。マドカの車は、晴海埠頭に向かうとしていたのだ。父の会社の南米行きの貨客船が、あと一時間で日本を離れようとしているのだ。

家族が引き止めるのをふり切り、マドカは新しい海外の土地で始めからやり直そうとし

ている門出であった。まどかの短い学生生活の間に、色々なことがあった。しかし、あの一日ほど、彼女の運命に、決定的な変路をもたらした日はなかった。

彼女の女としての誇りがズタズタにされた後、報復を誓い、深海らと計画を練り、荒垣ユリ、ミサ、明美らを、海洋学部の実験室に一人ずつ引っぱり込み、水槽やアクアラングや色々な魚、貝を使って皆を発狂寸前まで責めた。しかしマドカは空しかった。本来、そんなことになんの意味があるのだろうか。同じ学生同志で、同じ左翼同志で、さらに同じ日本人同志で……。見つめる時計台からは時々火炎ビンの火の手が上り、ガス銃の発射される音が小雨の音とともに聞こえる。

『もう大学は象牙の塔でも、学問の府でも、革命の発火点でもないわ』

とマドカは思った。

『あれは既に瓦礫の塔よ。瓦礫を越えて、新しい緑のある生き方を見つけなくては』

まどかは時計塔から目をそらした。

「運転手さん、急いで……」

大学を後に排気ガスと共に小さくなる乗用車が向かう晴海の方には、ほんの少し雨が切れ、美しい虹が光っていた。——(完)——





筆 随

## 唱 絶 美 禪

流 天 二 不

『禪に男を見せている湯屋の中』と江戸古川柳にあるが、三助のことを言ったものである。うが、なかなか、うがった名句である。

「禪」……辞林によると「犢鼻禪、男子の陰部を掩う布」とある。

禪の歴史は古いが、天平時代から戦国時代前までは、モッコ禪というのが普通だったらしいが、あまり体裁のいいものでなく、その後、徳川初期あたりから六尺禪となり、中期に至り越中禪が用いられたようであるが、越中は町人に多かったという。

武士は六尺。この六尺というのは尺貫法の前、つまり昔の鯨尺の一尺（カネ尺は八寸）で六尺の寸法になるもので、現在のメートルなら二メートル半ぐらいになるか。が、必ず六尺ときまったものでなく、本人の体格にもより、肥満体には四、五寸、余計に長くなることもある……。

とにかく純白の晒布で、股間を締めあげる緊縛感は、六尺禪だけが持つ性的自虐への誘致とも言えようか。学校の水練では全員に禪を締めさせられた、少年時代を遠く追想したくなる私――。

生まれて初めての禪。締めかたも知らないのを先生が手をとって教えてくれた。もちろ

ん子供のこと、大人並の六尺では長すぎるし横巾も細くした。

「これが禪というものか」私は子供心に、ぞくぞくして自分ながら、陶然としたものだった。水練は初級をパスして三級になると赤い禪に変わった。これは多人数の中でも直ぐ分かるように色を代えたまでで、別に赤でもかまわなかったが、やはり白がいいようにも感じた。

九月の中旬頃まで、禪の白い跡は消え去らなかつた。そして親に隠れて常時、禪を秘かに締めるようになった。別に悪いことではなし、堂々と見せてもいいが、子供心に何となく羞かしかったのだろうと自覚した――。

そして成人後も禪に、いよいよ愛着を感じいつしか禪の緊縛感から、軽いマゾを覚えたようになり秘かにエレクトする時もあった。禪を締めると妙な気分になる……となると、相撲取りなどは困るだろう。取り組み用の、あの黒の大禪の下には自分の禪を締めているのだろうが、おそらく勝負になんぞなるまい……と、わが身にひき較べて真剣に考えこんだこともあったが、その人間によるのだと思いついて、大発見でもしたように妙な安心のしかたをしたものだ。



いなか町、この避暑地にもドサ廻りの小屋がけ芝居が、よくやってきた。

『……女歌舞伎』などと、名乗っていたが、一時流行した、いわゆる節劇<sup>ふしげき</sup>なのだ。つまり浪花節に合わせた芝居、所作で、いなかの好劇家には、けっこう受けるらしい。

節劇のおもしろさなども分からないが、上演芸題の中に興味をひかれるものがあった、入場した私。

筵席と立見席で百人そこそこと思われる狭い場内。涼をとるといふより、簞蚊を避ける団扇の音が乱れる中に、肅々と浪花節が舞台下手で語られている。敵とした紋服姿の先生も、専門家はいない。みな役者の二足草鞋<sup>わらじ</sup>。しかし、なかなか達者なものであった。

『孝子五郎正宗責めの場』という、雪中、禪一本の五郎が縛られて、継母お秋の折檻を受ける絵看板（これに惹かれて木戸銭を払った私）が出ていたが、舞台もそのとおり……である。名匠正宗の孝子伝、誰もが知っている有名な話であるが、節劇に戯画化されたとはいえ、私には興味ある舞台である。

庭の築山の書割り、雪と見せる白布や紙を敷き、天井から降り落ちる白い細紙など……情景よろしく、白の禪一本、高手小手に縛ら

れた五郎がお秋に縄尻を取られて出てくる。

乾坤を謀殺、霏々と降りくる白妙<sup>たえ</sup>の、哀れにも五郎の命も奪っても、心恐ろしきやお秋の打擲に今日此の場の責め苦

節にのって、二人の所作が、手ふり身ふり始まる。五郎は男の児だが、芝居では女が演<sup>や</sup>るのがこの場の見せどころか。十八、九才にもなろうか、この五郎の役にぴったりな女役者。両の乳房は珍しく平らで男のよう。お目当ての白晒の細目の禪がキツチリと締めあげられている。

女体に締められた禪美……というものを、まざまざと見せられた思いの私。それだけではない。お秋（これは冬のような衣裳をまとっている）の容赦ない責め打擲に、全身を赫々と燃やすように転輾、苦しむ五郎のからだが大きくアップされて私の網膜にとび込む。私は思わず、浴衣の下へそっと右手をくぐらせて、わが禪に触れてみる……。

この五郎の女役者。……女役者の五郎。責め苦の中の禪一本の裸像は、鎌倉時代の孝子であろうが、演ずる者は現代の女子。時代の錯覚など超越したわが昂奮……。『これでも懲りぬか、懲りぬか』

お秋が、雪まじりの桶の冷水を、五郎の肩

から、ぶっかける。

「アッアッ……」

冷氣にふるえるような五郎の絶句。（ほんとうは、いい冷房だが……）

水を吸った禪が、ぴったり尻へ食いみ、悶える姿態は煽情的にも見える。

忘れられぬ禪美。

次の日も観ようと思ったが、演題は一日替りで残念。翌朝、小屋の裏を覗くと、五郎の禪が竿に干してあった。

あの物語りが、真実ならば、五郎という少年は、マゾヒストの卵であろうと想像できるのである。継母の日夜の折檻責め苦が、発育盛りの少年の肉体に自然、被虐の快感を与えていったのではあるまいか。

以来、禪美に憑かれた自分は、夢想と現実を追うように、あらゆるものを漁<sup>あさ</sup>った……。飽くところを知らなかった。自分の禪などには、かえって憎悪すら感じ始め、他人の映像を追いつめたのである。

晒の切り立ての六尺禪を締めこみ、男を立て派に見せてくれる雄姿。拷問責めに遭う筋骨逞しい男の禪美こそ、得がたい一幅の名画ともいえようか……。

女の禪美は、また別の感覚だが、ほのぼの



とした気もちになる。女役者の五郎の禪姿を思い出すと、四、五年前の誌上を飾った山原清子の禪美を髣髴させるようである。

さて追想に還って……偶然ながら責めの禪美を、この眼で見たのであった。

大陸での事変。日本が出兵していた時である。体育に精神に、国家の青年教育が盛んに叫ばれていた頃だ。

近畿の靈山、高野山に近い五条の町の修業僧堂。これは高野山の管轄で、ここから修業成った若僧が山に登り、金剛峯寺こんどうぶじの分寺に入るのであるが、小人数のこの僧堂は規律も大まかで、秘かに町の私娼窟に、潜入する者もあるぐらい。しかし堂長ともいえる岳念は、厳格であったが、なぜか身み最さい眞しんする性格であった。

秋雨の日私は吉野からの帰途、この僧堂の新入僧の硯道という知己と五条の町はずれで会い、異なることを聞かされた。

それは今夜、僧の懲罰折檻がある。どんな凄絶なものか見学の価値もあろう。外来者の隠れて覗ける場所もあるから、と誘われた。もちろん私の心はずんだ。

夜の僧堂の板の間に、厳肅に十人の若僧が立ち並んでいる。

中央に天井の梁から、高手小手に油縄で縛られた男。筋骨隆々と浅黒く、五尺九寸はあろう。巨軀が宙吊りになっている。しかも、腰には純白の六尺禪がキリッと締めあがり、私の求める恍惚美を鮮烈に見せているではないか。

凄い、禪美。

それが折檻に苦しみ跪くと、更に渴仰していた禪美となつて、私の胸を衝くだろう。

その僧の名も罪名も、どうでもいい。ただ必死に苦悶する肉体に附着している、たった一本の六尺の白布が、どのようにねじれ、音をたてて皮膚に摩擦するか、或は白布は千切れるかもしれない。しかし六尺禪美は、男性美の極致であると思う私。

岳念の憎悪の皮鞭が、飛竜の襲いかかるように唸った。

「見せしめだ。この帝国の非常時に、従順性のない反抗者は死んでもかまわぬのだ」

勝手な理屈だろうが、岳念にとっては、この僧は目の上の瘤らしく、生意気に六尺禪を締めているのも毛嫌いのタネらしい。

「てめえの好きな禪一本のままで、責められりゃ本望だろう」

たちまち、薄血が染み、肉体が揺れ呻く。

鞭の音が堂内を劈き、不気味な拍車をかけるよう。僧は黙々、唇を噛み無念の相。ただ苦悶を五体いっばいに見せている。

「逆吊りだ」

今度は岳念自ら吊り縄を降ろし、僧を床に転がすと両足を縛り、五、六人に手伝わせて天井へと吊り上げる。他僧は、命令に仕方なく動くだけで、気がのらない様子。

吊り上げられた肉体に、また下から鞭がとぶ。全筋肉は下へ弛みがちだが、禪は固く締めつけられていて、いささかの弛みもないと私の目には映った。

私はカメラがあつたら盗み写ししたいと思つたぐらい、遅いこの禪美であった。

次に見たことは、岳念が長い荒削りの棒を持ち、憎々しげに禪の前袋に差しこみ、ゆっくりねじりあげるといふ残酷さだった。

さすがに僧の口からは「く、くやしいッ」と、声が吐き出された。

無残、白布はねじれはずれ、たち切れそうである。僧の必死の悶えも、凄絶そのもののよう。もう禪美は消え去った。ただ、この禪責めが変形禪美と思えば、思えようか……。

今も、限りなく、禪美を追い求める私なのだ。

(終)



カット・岡たかし



## Qの策略

「ウフフフ……女ども、なかなか、やるな」

Qは微笑をもらし、思わずつぶやいた。

協力一致した五人の女が、ひとりの美少女を残忍な方法でいじめている「黒い部屋」の天井裏の小部屋に、Qはひそんでいた。

黒い部屋の天井にとりついていて、空気調節装置の窓の上に、Qはいるのだ。この四角い形に区切られた窓には、マジックミラーとレンズを使った巧妙な仕掛けがあって、室内の情景は、楽に見おろせた。無論マイクロホンも、精巧なものがひそかに装置されている。

……六回完結S小説△その四▽……

## パノラマ島秘譚

……藤見郁……

Qは、六人の女が演ずるショウを、はじめから終わりまで見物していたのだ。文字どおり、高見の見物であった。

——女どもだけでやらせるのも、また、味のあるものだ。

Qの口もとから、微笑が消えない。

きょう一日、パノラマ島を留守にするといったのは、Qの策略だった。

美香をことさらに「優遇」して、シコに嫉妬させれば、シコはかならず自分が居ないときをねらって、美香をいじめるに違いない。

そう計算したQの、いたずらっけの多い策謀だった。

Qはシコに見送られて、そ知らぬ顔で、朝

「パノラマ島」から出ると、島の周囲をモーターボートで一周した。

一時間ほどのち、ふたたびボートを波止場につけて、また「夢の城」へこっそりもどってきたのである。

そして、自分をまったく第三者の立場において、窃視の愉悅に浸っていたのであった。

シコの性格を知りぬいているQの策略は、みごとに成功して、なんともなまぐさい、女同士が演ずる陰険なショウを見物できたわけである。

むろん、シコも四人の美しい女奴隷も、自分たちの頭上に、Qの好奇にみちた視線がそそがれていようとは、夢にも思っていない。



「まあまあ、あなたのからだも、ずいぶん汚れてしまったわね。いくらめす犬でも、それじゃ、かわいいそうだわ」

美香の首輪の鎖をひっぱって立たせながらシコがいった。

立たせると、尻や太腿ばかりでなく、腹部にも乳房にも股間にも、斑点になって砂がこびりついていった。

「一階の温水プールへ行って、そのからだを洗ってあげるわ。それがすんだら、ベッドへ寝かせてあげますからね」

シコはいいながら腕時計をみた。午後四時になっていた。

——社長が帰ってくるまでには、あと六時間も、あるわ。このお嬢さんのからだは、それまでに、ちゃんとベッドに寝かせておけばいい。当人には厳重に口どめしてあるし、きょうのことは、社長には絶対にわからない。

シコは、そう計算した。

きょうのことを社長に告げ口したら、きょうの数倍もおそろしい復讐をしてやる、とあらかじめ美香を脅迫しておいた。だから、美香の口から、きょうのいたずらがもれる心配はないとシコは信じている。

A子をはじめとする四人の女たちは共犯者

だから、彼女らの口から発覚することは絶対にない。

Qの本当のおそろしさを、シコにしてさえも、まだ百パーセントわかっていないのだ。

「あなたがたは、お部屋の、あとかたづけをしておいてね。私は、このかわいい、めす犬さんを洗いにいくから」

シコは、四人の女奴隷にいった。

「わかってるわよ。一階のプールで、またこっそりといじめるんでしょう」

A子が、笑いながらいった。

近視の細い目が、だまっただまま、女たちに笑いかえした。

「さあ、おいで」

シコは、はずみをつけて、首輪の鎖をひっぱった。

同時に、右手にもっているムチで美香の尻をたたき、また四つん這いにさせた。

「お願いです」

四つん這いのまま、顔をあげて美香は、あえいだ。

「なあに、めす犬さん」

「立たせてください。這って廊下を歩くなんで、私、いやです」

屈辱と怒りに、美香の首すじは赤い照明を

浴びたように色が変わった。

「だめよ。だって、あなたは犬なんだもの」

シコは突っぱなした。

「いやです、立たせて。立たせてください」

美香は、犬がチンチンをするように身を起こし、顔を左右にふりながら泣き叫んだ。

「そんなに大げさに泣くことはないわ。どんな恰好をして歩いて、だれに見られるわけでもないのに」

シコは見おろし、冷笑した。

「だれに見られなくても、私はいやです。あなたとはちがいます。私は、高宮家の娘なんです！」

首をしめつけている鉄枷や鎖にひるまず、

美香はこの一瞬、胸を張った。愛らしいふたつの乳房が、誇らしげにふるえた。

あなたとはちがいます——という一語が、

シコの神経を、カミソリで切ったように傷つけた。

シコはムチをふりあげて、美香のふっくらした乳房を、形がゆがむまで打ちすえようとした。しかし、シコはその怒りを、自分の胸のなかへしまいこんだ。そして、無理に微笑をつくっていった。

「フフフ……恥ずかしがっているうちが、花



なのよ。あなたに、まだ人間の感情が残っている証拠よ。その心が残っているうちは、まだまだ、社長がかわいがってくれるわ」

「お願いです、もう立たせて！」

「うるさいわねえ、おだまり。だまらなと箝口具をはめるわよ！」

「もう、ゆるして。美香はなんにも悪いことをしていません。いじめるのは、もうやめてください！」

美香は両手を合わせ、乳房をふるわせて哀願をつづける。

「しょうがない。やっぱり箝口具だわ」

シコはジャンパーのポケットから、例の精巧な舌ばさみ箝口具をとりだした。そして、その奇怪な道具を、美香の顔の前で、ぶらぶらんさせて、なぶった。

「ゆるして！」

その箝口具の効果を知っている美香は、たちまち悲鳴をあげた。

「だめよ、あなたは私を侮辱したんですからね」

シコは激しく美香の胸をムチで打って抵抗を封ずると、背後からのしかかるようにして美香の口にその革製の箝口具をはめた。

「お願いです、それだけはやめて。もう、し

やべりません！」

美香は首をふって哀願したが、さらにムチで背中を五度ばかりたたかれると、もうあばれるのをやめた。

「舌をおだし。長くだすんだよ」

「う、わ、わ、わ……」

舌の上下に、細い革のベルトがくいこみ、しめつけた。美香は完全に沈黙した。目だけが、まだ哀願をつづけていた。

シコは美香の後頭部で、しっかりと革のベルトをしめ終えた。美香の下唇の裏側から、早くもよだれが流れはじめた。

「フフフ……。やっと、おとなしくなったわね。それでいいのよ。さあ、その臭いからだを、洗いにいきましようね。あなたは、静かに、じっとしていればいいのよ。なんにも心配はいらないの。私のいうとおりになっていればいいのよ。そうすれば、もとどおりの、きれいなお肌にしてあげるわ」

シコは、ムチで軽く美香の尻をたたき、首輪の鎖をひっぱると、黒い部屋を出た。美香は鎖にひきずられるようにして、四つん這いで廊下へ出た。

美香は泣きながら必死に手足を動かした。すぐに両膝が痛くなった。しかし、休むこと

はゆるされなかった。鎖をひっぱられて、すぐに首が締まるのだ。

両足首の鉄枷のあいだには、まだ二十センチばかりの鎖がついている。だから、立って歩いたとしても、不自由なことに変わりはない。しかし、這うのはいやだった。自分が本当に犬になったような気がする。

美香は、まるい尻を左右に動かしながら、廊下を這った。昇降機の前までくると、シコが首輪の鎖をひいて、美香の動きを停止させた。

「さあ、のりなさい」

あかるいクリーム色にぬられた昇降機は、ボタンを押すと、かすかなうなり声をあげて軽快におりていく。

五秒間で一階についた。昇降機をでると、廊下を左にすすんでいく。

温泉プールは、一階の北側にあった。

「こっちよ。さあ、ぐずぐずしないで」

ドアをあけると、脱衣室であった。全裸のまま這ってきた美香には、脱衣室の必要はなかった。美香の心は、完全にうちのめされていた。

シコの手が、脱衣室の一隅にある、スチール製のロッカーをひらいていた。



ロッカーの内部には小さな棚があり、その棚の上に蛇のようにくねった、細い革紐がはいっていた。さらに下の段には、精巧な革の搾衣がはいっていた。

美香をここへつれてきたのは、単に、からの汚れを洗うためではなかったのだ。

まず細い革紐で美香の両腕をうしろ手に縛りあげて肌を洗い、さらに、なめし革の搾衣を着せて、このプールのなかに浸そうという陰險な計画だったのである。

「さあ、首枷や手枷をはずしてあげようね。長いあいだ、つらかったでしょう。のびのびさせてあげるわ。立っていいわよ」

シコは、スラックスのポケットから、小さ

「伝言板」○本誌では、寄稿家執筆者投稿者やモデル嬢などの住所氏名の照会には一切応じておりません故、御安心の上御送稿下さるようお願い致します。尚手紙の転送なども原則として取り扱いは致しておりません故御了承下さい。○如何なる理由に拘らず直接発行所への訪問や電話は固くお断り致します。御用件はすべて書面にてお寄せ願います。○編集者に面会を求められる方は、住所氏名職業を明記の上、用件を附してお申込み下されば、電話番号、連絡場所などを御返事申し上げます。予告なしに突然訪問されてもお逢い致しかねます。

な鍵をとりだし、美香の首枷、手枷、足枷の錠をはずした。

「それから、箝口具もはずしてあげるわ。苦しかったでしょう」

シコは、美香の後頭部に手をまわして、箝口具の錠を解いた。美香の鼻や口の周囲が白っぽくなっている。

すべての枷をはずされた美香はよろよろと立ちあがり、思わず胸をふくらませて呼吸した。たしかに、心もからだものびのびした。

しかし、その自由は、わずかの時間であった。ロッカーから取り出した細い革の紐を持ったシコは、改めて美香の背後にまわった。

「こんどは、両手を背中にまわすのよ、お嬢さん」

「なにをするんです？」

美香は、おびえた声をあげた。

「縛るのよ。だって、あなたに逃げられでもしたら、私、困るじゃないの」

「私、逃げません。逃げないから、もう縛るのは、かんにんして。くるのはやめて！」

「だめよ。わがままをいうと、またムチをあげるわよ」

新しい絶望が、美香を襲った。

なんのために、なんのためにこの人は、こ

んなに私を苦しめるのか。美香にはわからない。この悪夢は、いつさめるのか。私は、いつ、父や母のもとへ帰れるのか。

「なにをぼんやりしているの。早く手をうしろへまわしなさい」

シコの声が、美香の耳もとにきこえた。

催眠術師にあやつられる人間のように、美香は自分から両手を背後にまわした。

## 水遊び

シコは、背中にまわした美香の両手首を、ひしひしと縛りはじめた。細い革紐は、おもしろいほど、美香の白い手首に深くくいこんだ。

手首をひとつにくくりつけてから、その革紐を前へまわして胸を縛る。乳房の上を三巻きして、それからまた背後へもどし、手首を縛った紐にからめる。

シコは慣れた手つきで、しかも楽しくてしかたがないといった表情で、その面倒な作業をつづけた。

チョコレート色をした革紐は、生きているように、きりきりと白い皮膚へくいこんだ。

美香は、うつろな視線を下に落とし、ほと



んど無抵抗だった。シコが力をいれるたびに上半身が、ふらふらとゆれた。

乳房の上へ革紐がくいこんだとき、美香は眉をしかめたが、そのほかは人形のように黙って縛られていた。

「すてきだわ、美香さん。この強い細い紐でうしろ手にくぐられたあなたって、ほんとに可憐で美しいわ。女の私がみても、ほれぼれするくらいよ。首枷や手枷も悪くないけど、こうして一本の紐で縛られた姿も、情緒があっていいものね」

シコはお世辞をいうように、やさしく美香へ言った。

余裕を一メートルほど残して、革紐で完全に美香を縛り終えたシコは、片手にまた銀色のムチをにぎり、そのムチの先で、背後から美香の肩を軽くついた。それは、前進せよ、という合図だった。

自分の両腕を背負ったようなポーズで、美香はのめるように、よろよろと前へ足をふみだした。

脱衣室をぬけると、シャワー室がある。

温泉シャワーと、冷水シャワーのコーナーがあった。シコは美香を冷水シャワー室のほうへ連れこんだ。

「さあ、よく洗いましょうね。ちょっとつめたいけど、きれいになるのだから、がまんしてね」

シコは、コックをひねった。こまかい水が美香の頭上に、勢いよくふりそそいだ。

シコは意地悪をするつもりで、わざと冷水を浴びせたのだが、美香の羞恥にほてった肉体は、かえってつめたいほうが気持ちよかった。美香はすこしのあいだ、やわらかいブラシが肌をこする感触を楽しんだ。

ブラシは美香の肩から背中へ、尻へ、そして前へまわって乳房をこすり、脇腹から下腹部を洗った。ブラシが股間に触れたとき、美香は反射的に全身を硬直させたが、すぐに足の力をゆるめて、シコが洗いやすいように身をひらいた。

内腿のあたりをシコはていねいに洗った。ていねいすぎる洗い方だった。太腿から白い腹部へ、逆撫でするようにしてブラシを使った。瞬間的な、そして淡いものだったが、不思議な快感が美香を襲った。

あきらかに、シコはいたずらしているのだった。美香はその快感に思わず溺れそうになり、ブラシを避けようと尻をよじらせた。

「だめよ、じっとしていなくちゃ。そんなに

動いては、きれいにならないわ」  
シコが叱った。叱りながら、なおも執拗にブラシをこすりつけるのだった。

しかし、そのために、砂にまみれた美香の肌は、たしかにきれいになった。もと通りのなめらかな一点のシミもない白い皮膚になった。上質の香料がはいった石鹸のにおいに包まれて、美香はふと人間らしい心を取りもどした。これで、うしろ手に縛られていなかったら、どんなに楽しいだろう、と美香は思った。

シャワーの水がとまった。

「よくおとなしくしていたわね。ずいぶんきれいになったわ。じっとしていたごほうびにプール遊びをさせてあげるわ」

ブラシと石鹸をもとの場所にもどしながらシコがいった。

「いいえ、もうけっこうです。私、もう疲れました。すこし休ませてください」

細い声であえぎながら、美香はいった。本当に疲れていた。足がだるく、立っていても膝が折れそうだった。

しかし、シコはゆるさなかった。

「せっかくの私の好意がわからないの。そんなわがままは、ここではゆるされないのよ」



美香の尻に軽くムチをあてて、シコはふたび脱衣室へもどった。

そして、美香を縛った革紐を解くと、ロッカーのドアをひらいて、こんどは革の拘束衣をとりだしたのである。

それは、美香がこれまでに見たこともないような、無気味な形をしていた。

コルセットに似ていたが、肩から袖口にかけて、柔軟ななめし革が使われている。

首や、胴や、袖口のところに、こまかい金具や、小動物の触手のような細い革紐が無数についていた。

「さあ、いままで裸で恥ずかかったでしょう。これから、こんなにっぱなジャンパーを着せてあげますからね。おとなしく着てちょうだいね」

両手でその拘束衣をひろげながら、シコがいった。

ひと目みて、その奇怪な革製の服が、また自分の心や肉体をいじめるものであることを美香は、さとった。

「いやです。いや、いや、もうゆるして。休ませてください！」

美香は、早くもおびえ、泣き声をあげていた。革紐の肉を切るような、するどい束縛か

ら解放されたというのに、すぐにまた新しい束縛にとりかかろうというのだ。

美香の哀願に、しかしシコは意地の悪い微笑をうかべて、容赦しなかった。

「まだ、そんな勝手なことを言ってるの！」

わめくと、つづけざまに、激しくムチで美香の尻をたたいた。

美香は悲鳴をあげてのけぞり、抵抗力を失った。ちょっと感情をこめただけで、シコの銀色のムチは、おそろしい威力を発揮するのだ。尻だけでなく、脳天にまで、するどい痛みが突きあがり、手足の指さきまで、しびれるのだった。

シコはムチを置くと、拘束衣を美香の素肌に直接、着せはじめた。

まず、左右の腕から通す。長袖である。革特有の異臭が、美香の鼻孔を襲った。

湿っぽく重い革の感触が、肌につめたくまつわりつき、美香は戦慄した。たちまち毛穴の呼吸がふさがれた。香料入りの石鹼で肌を磨いたばかりなのに、あまりにも残酷な枷具だった。

シコは美香の前で中腰になると、拘束衣のウエストのベルトを、ぎりぎりと言をさせて締めつけた。

「あッ、うッ、ううッ……」

美香は、うなり声をあげて腰をかがめた。

拘束衣のコルセットの部分にしめつけられ、腹の筋肉がよじれたのだ。

美香のウエストは六十センチある。この拘束衣は、それを五十三センチに縮めたのである。

「いい形になったわ、美香さん。ますます、すばらしいスタイルになったわ。うらやましいわ」

腹部のもっともくびれたところにしっかりと革紐を結び終えたシコは、わざとらしく目を細めて感嘆した。

蜂の胴のようにウエストが細くなったかわりに、ヒップと乳房が誇張されて極端に盛りあがった。

左右の乳房の位置は、そこだけまるく窓のように穴があいているのである。つまり、乳房だけはしめつけずに、解放するようになっているのだ。

いや、解放というよりは、やはり誇張というべきであろう。ウエストが縮まるに反比例して、十七歳の清純な乳房は、すばらしいボリュームと変化して、革の拘束衣のまるい穴からとびだしたのであった。



チヨコレート色の拘束衣からむっくりとはみだして盛りあがった白い肉塊には、鮮烈なエロチシズムがあった。米粒ほどの小さな乳首が、豆粒ほどにふくれあがり、やや赤みを増して固くなった。

「ウッ、ウ、ウ、ウ……」

美香の表情が、苦痛のために赤くなった。

ウエストを五十三センチまでしぼったシコは、つぎに美香の両腕を背中にもわして、左右の手首を直結した。

拘束衣の長袖の手首の部分に装着されている細い革ベルトで、それはかんたんに終了した。美香の両腕は背後で一本の棒のように固定された。

そして最後にシコは、拘束衣の下腹部についているベルトを、美香の股間にまわして、ヒップの上部の止め金にがっちり結びつけたのである。

それは『股間ベルト』とよばれていて、その三十センチばかりのベルトに使用している革は、水分を吸収すると、とくに縮小する性質をもっていた。

美香は、ハンカチ一枚ほどの下着も着せられずに、その股間ベルトを締めつけられたのである。

「ああ、なにをするんです、なにを……あ、あ、あッ、やめて。痛いわ、こわいわ！」

美香は叫んで腰をひいたが、すでにその細いベルトは固定されていた。美香の神経のすべてに、悪寒が走った。

あばれようとしたが、両腕の自由はすでになかった。胸部のまるい穴から、突きだしたふたつの乳房が、いたずらにふるえるだけである。

拘束衣の装着は、こうして完了した。シコは美香の背中についている縄尻のような革紐をつかむと、また右手に銀色のムチをもって美香の尻をたたいた。

背後から眺めると、白くやわらかく盛りあがったヒップの丘の中央に、チヨコレート色をした股間ベルトが、縦にまっすぐに走っている。

それは、妙にユーモラスな風景であり、そして、かなり卑猥な感じであった。清純な十七歳そのものの、つやつやと光る愛らしい色とふっくらした魅力的な形をして息づいているだけに、縦にくびられたヒップが、いっそう卑猥に感じられるのかもしれない。

「さあ、プールへはいりましょうね。気持がよいわよ」

ムチで軽く美香のその突きだしたまるい尻をなぶりながら、シコがいった。

「いやです、こわい。こんな恰好でプールなんかへはいれません。溺れてしまうわ」

美香は、おびえて尻ごみした。

「だいじょうぶよ。私がついているんですもの。たいせつな美香さんを、溺れさせるようなことは、絶対にしないわ」

シコは、かまわずに美香をせきたてた。

奇妙な拘束衣を上半身に着せられた美香は不安な足どりで歩きだした。ヒップの革ベルトが、歩きたびに微妙にこすれて、美香はときどき、つらそうに立ちどまった。

シャワー室の横を通りぬけると、すぐにプールサイドであった。

プールといっても、縦二十五メートル、横十メートルほどの、小さなものである。常に二十度前後にあたためられている水は、青く澄んで天井からの淡い照明にのどかにゆらめいていた。

小さいが、壁の色彩や照明に凝った、しゃれたプールである。飛び込み台はもちろん、水中トランポリンや、すべり台なども設備されている。

シコは、プールの端から、いきなり美香を



読者ギャラリー『白鳥の苦悦』生吹寿々夫

水中へ突き落とした。

「ああ！」

恐怖の悲鳴をあげて、美香は転落した。水しぶきがあがった。

美香は高校の水泳部では選手だった。しかし、両手を背後に固定された拘束衣を着せられていては、恐怖のために青くなるのも当然だった。

いったん水の底に沈んだ美香のからだは、しかしすぐに引きあげられ、頭が水面に浮か

び出た。シコが拘束衣の背後についている革紐をつかんで、ひっぱりあげたのだ。

足をのばすと、わずかに底にとどいた。美香は水のなかで両足をそろえ、つまさき立ちで立った。

「たすけて、たすけて！」

美香は夢中で叫んだ。ぬれた髪の毛が、顔に貼りついた。

「だいじょうぶよ、心配しなくても。安心して水遊びを楽しみなさい」



生吹寿々夫

プールのふちに立ったシコが、手にもった革紐を引いたりゆるめたりしながら声をかけた。

しかし、楽しむどころではなかった。革の拘束衣を着せて、水のなかへ突き落としたシコの目的を、美香はすぐに知らされたのである。

上半身の筋肉に、無気味な圧迫感が襲いはじめた。水を吸って、革の拘束衣が縮みはじめたのだ。ウエストがぎりぎりとなり締めあがった。つづいて乳房の根もとが、タガでもはめられたように縮まり、ふくよかな肉塊が強くなりしぼりあげられた。

そしてつぎに、股間ベルトが無気味な力でじわじわと縮んできたのだ。巨人の掌のなかに包みこまれて、押しつぶされるような恐怖だった。

「うう、うううッ……」

美香は腹をよじって、締めつけてくるその苦痛とたたかかった。唇が紫色になった。乳房は、さらに盛りあがって前方に突きだした。股間ベルトが、生きているもののように、じわじわと締めあげてくる。

苦痛をやわらげようとして膝を縮めると、顔が水面から下へ沈んで呼吸ができない。美



香は、ぬれた顔をくしゃくしゃにして、あえいだ。

「たすけて、たすけて、お願いします。もうゆるして！」

美香は絶叫した。わずかに残っていたプライドをすてて、死に直面した恐怖の声をあげた。

股間ベルトは針金のように固く縮んで、ぐりぐりと責めつけてくる。脳天にまで突きあげてくるような苦痛と羞恥だった。

「うう、ぐうッ！」

美香は、その突きあげに思わず、のどの奥からうめいた。ウエストはいよいよ締まって心臓まで圧迫してくる。

「ほら、楽しいでしょう、水遊びは。泳いでもいいのよ。足を使って泳いでごらん」

シコの残忍な声も、もう美香の耳にとどかなかった。いくどか水をのみ、いくどか吐きだしながら、美香は哀願をつづけた。

「お願いします、あげてください。ここから出してください！」

美香の顔は、ますます蒼白になった。乳房のふもとを締めつけた革のタガが、鉄の輪のように固く縮んでいた。

「やめて、もうやめてッ。ゆるして！」

美香は血を吐くような絶叫をつづけ、あまりの苦痛と恐怖に、ふうッと気が遠くなっていった……。

## バラ色のつぼみ

意識をとりもどしたとき、美香はベッドのなかにいた。

自分にあてがわれた部屋の、いくらかは皮膚に慣れた寝具に包まれていた。

人の気配を感じ、目をあけると、すぐ前にQの微笑があった。

「いま帰ってきたよ。きょうは一日、よく寝ていたかね」

と、Qがいった。美香はぼんやりと、Qの大きな顔をながめていた。

きょうという日がいつなのか、わからなかった。美香は、目ざめたことをたしかめるように、深く呼吸した。すると、腹部の筋肉が

えぐれるように痛んだ。同時に、からだの深部にも、にぶい疼痛が走った。プールのなかでのおそろしい経験は、つい数時間前のことにちがいない。

「なんだか元気がないな。どうかしたのか、頭でも痛いのかね」

Qは、なおも美香の顔を上からのぞきこみながら、やさしくいった。

その声音に、美香はふと、父の体臭を感じた。父を思いだし、家族を思いだして、美香は涙ぐんだ。

「顔色がよくないようだな、なにかあったのかね？」

と、Qはしつこくきいた。美香は目をとじた。

シコたちにいじめられた、とは言えない。それを言ったら、もっとひどい目にあわせる、と彼女らは脅迫した。

「いいえ、なんでもありません」

と、美香はこたえた。また涙がにじみ出てきた。なんのために、こんなにいじめられるのか、美香にはまったくわからない。あまりにも残酷な体験ばかりがつづく。

「そうかい、それならいいけど」

Qはうなずいた。自分の不在をいいことにシコやA子たちが、陰險な手段でさんざん美香をいじめたことを、もちろんQは知っている。

知っているが、知らないふりをしている。

そのほうが、あとの楽しみが大きい。シコやA子たちに対する仕置きの方法を、Qはゆっ



くりと考えているところだった。しかし、そんな仕置きは、あとまわしだ。

「今夜はこれから、わたしと美香とで、とても楽しい赤ちゃんごっこという遊びをしようと思うんだがね」

と、Qは微笑していった。

美香の表情に、新しい恐怖がよぎった。

赤ちゃんごっこという遊びが、どんなものか、むろん美香は知らない。しかし、それがまた自分を苦しめるものであることを、美香は直感していた。ここにいる男や女たちは、自分をいじめることだけしか考えていないのだ。

「私、本当はとても疲れているんです。もう寝かせてください。お願いします。私、眠いんです」

寝たままで、美香は哀願した。Qはゆっくりと首を横にふりながら微笑した。

「しかし一日じゅう寝ていたんだらう？ それなら、疲れているはずはない。うそをいってはいけないよ、美香」

「本当です、本当に疲れているんです」

いいながら、この哀願が無駄であることを美香は知っていた。

「だめだよ、美香。わたしは、やると言った

ら、かならずやるんだ。わたしはやりたいんだ。今夜は美香と一緒に赤ちゃんごっこをして遊びたいんだ」

ああ……と、美香はうめいた。

いまベッドの上に横たわっているのは、自分であって、自分のからだではないのだ。ここでは、自分の意志というものは、完全に無視されているのだ。自分はただ、一個の愛玩物にしかすぎないのだ。

Qは、壁際のボタンを押して、シコを呼んだ。

「これから赤ちゃんごっこをするから、その用意をしてくれ。赤ちゃんになるのは、もちろん美香だけだね」

シコは機械的な動作で頭をさげ、無表情にその準備をはじめた。

美香の両手を上にあげさせ、バンザイ型にして、左右の手首をベッドの金具にくくりつけた。

美香は抵抗しなかった。手首に革細がからみつき、しめつけてくるのを、目をとじて耐えていた。耐えるという感情も、いまはあまりなかった。心身ともに疲労しているのだ。

そのあきらめきった美香の表情を上から見おろして、Qはまんぞくそうな微笑をもらし

た。

まつ毛がくっきりと黒く、長い。すっきりと高い上品な鼻。そして愛らしい鼻の穴。

あきらめて目をとじた灰色の表情にも、Qの心をそる魅力があった。小さくひらかれた愛らしい唇に吸いつきたくなる欲望を、Qは、かろうじて耐えた。

この咲きかけたバラの花びらのような唇をいま、なめたり吸ったりしては、あとの楽しみがうすらいでしまう。こういう貴重なたべものは、すこしずつ、惜しみながら、賞味しなければいけない。

美香の両手を、バンザイ型にベッドの金具にくくりつけたシコは、つぎに、美香のからだの上にかかっているクリーム色の毛布をはねのけた。

美香は淡いピンク色のネグリジュを着ている。これは、美香が失神しているあいだに、シコやA子たちが着せたものだ。パンティははかせていない。

「オシメの用意はできているね」

Qが、シコにきいた。

「はい、ここにそろっております」

シコが事務的にこたえた。

「よろしい。お前はもう、この部屋にいては



いけない。お嬢さんが恥ずかしがるからな」

Qは命令した。

シコは固い表情でだまって一礼すると、美香の顔にチラと視線をむけてから、部屋を出ていった。

Qの目が、Q本来の好色な光を発して、美香の下半身にそそがれた。いまはネグリジェにおおわれているが、それは手をのばせば、すぐにでも剥ぐことができる。

サイドテーブルの上に、シコが用意していたオシメにするための白いガーゼや、オムツカバーなどが置かれてある。

「さあ、ふたりきりになったよ、美香。これからゆっくりと、ひと晩じゅうかけて、赤ちやんどっこをしようね」

Qは美香の耳たぶに口を近づけ、やさしくささやいた。

美香は目をとじたまま、死んだような乾いた表情をしていた。

「フッフッフ、いいかい、あばれてはいけないよ。あばれたら、またシコを呼んで、ひどいお仕置きをするよ。あばれても、結局は無駄なんだ。痛い思いをするだけさ。もうわかっているだろう？」

いいながら、Qは美香のうすいネグリジェ

の裾に手をかけ、そろそろとまくりあげた。

「ああ」

と、美香は低い力こもったうめき声をあげ、わずかに膝を縮めた。自分はもう死んだのだ。死んでいるのだ、と思ってもうとしたが、まだ汚れを知らない十七歳の心は、どうしても死んだ心になれなかった。

ネグリジェは、じわじわとまくりあげられた。そしてQは、美香の下半身のすべてを、自分の目の前にさらけだしてしまったのだ。

きめこまかな、白いふくやかな内腿が、つやつやと、輝いていた。膝から上の太腿近くになると、健康な少女らしい肉がゆたかについて、あきらかに成熟した果実の証拠をみせていた。すべてが優雅である。

「やめて……」

美香は、いかにもつらそうな、かれたような声をあげた。Qの目が、自分のどこを見ているか、少女は本能的に知っていた。キリで突きさされるような痛みと羞恥を感じて、少女は膝をまげ、腰をくねらせた。しかし、くねらせるだけで、逃げることはできない。

Qの両手が、美香の両足をつかんだ。Qのてのひらは汗ばんでいて、妙に熱かった。

「さあ、美香は赤ちやんだから、オシメをす

るんだよ」

Qは、ガーゼのオシメを手にとると、美香のまるだしになった尻の下に、ていねいに敷いた。わずかのあいだ、少女の腰部は宙にもちあげられたのだ。

美香は抵抗しなかった。足をまげてさからうことも、もうしなかった。

美香はおどろいていたのだ。Qは本当に自分の腰へオシメをあてるつもりなのだ。それは、まったく想像できない行為だった。

なんのために、この男は、こんなことをするのか。美香は混乱し、どう反応したらよいかもわからなくなった。Qの心に恐怖をおぼえて、本当の赤ん坊のように、じっとしていた。

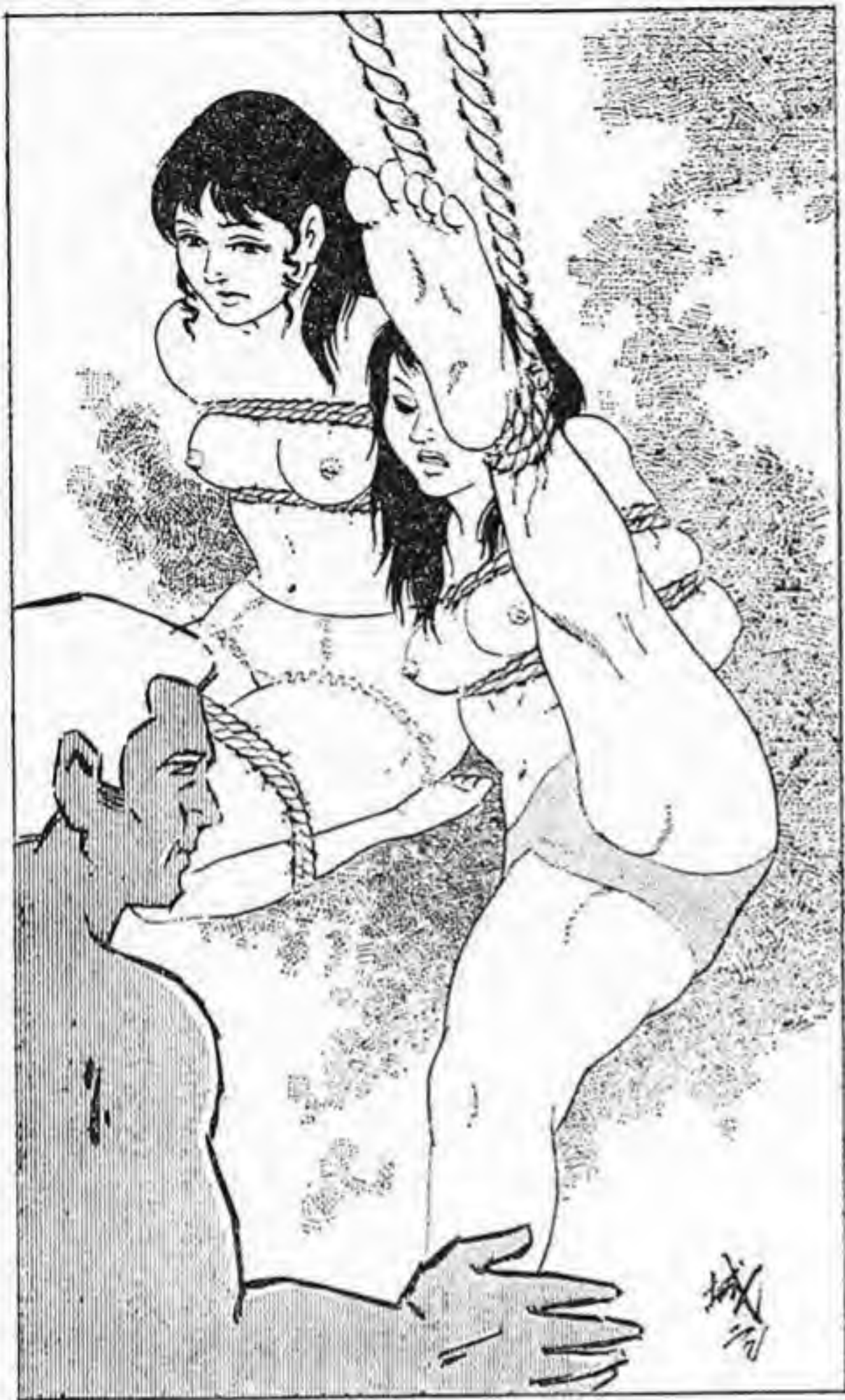
「いい子だ、いい子だ。そうやって、おとなしくしているんだよ」

Qは上機嫌でいうと、こわれやすいものに触れるように、美香のすべすべした内腿を、右手の指の腹で、なんども軽くさすり、押したり、つねったりした。

Qのそれからの行動は、おそろしくのろのろしたものだった。美香の表情や、下半身の筋肉の微妙な反応を、いちいちたしかめながらの、にぶい動き方だった。



## S・コレクション『褐色の誘惑』豪 城二



しかし、Qの動きには一定のリズムがあり弾力のようなものがあつた。

美香は、むきだしにされた下半身の皮膚がややつめたく空気にふれるのを感じていた。尻の下へ十分にガーゼを敷くと、つぎにQの手は、美香の足首をもういちどつかみ、左右にひろげた。

美香はかたく目をとじた。自尊心が激しくよみがえり、心臓に痛みを感じた。

十七歳の赤ン坊は、すぐにオシメがおおっ

てくれるものと思っていた。しかし彼女は、かなり長いあいだQの視線を受けなければならなかった。

いや、受けなければならぬのは、視線だけではなかった。美香はふたたび強い恐怖と屈辱に襲われた。Qのなまあたたかい吐息が直接、皮膚をなめてきたのだ。

「ああ、かわいいなあ。たべてしまいたいほど、かわいいなあ……」

Qの目が赤くうるみ、しらじらとした天井

からの照明の下で、美しい赤ン坊に視線を接近させ、しばらくのあいだ、感心したような顔で眺めていた。

「きれいだ、本当にきれいだよ、美香。どこからどこまで、みんな清潔で美しい！」

赤ン坊が感じたのは、最初ごく軽いくすぐったさだった。それは無気味なほどやわらかく、そして巧妙なテクニクをもっていた。

はじめ、羞恥と同時に、くすぐったい、という感覚が、赤ン坊の全神経をつらぬいた。

歯で下唇をかみしめ、赤ン坊は耐えていた。触覚はやさしく近づき、ゆっくりと動いた。

細心の注意を払っていることが、赤ン坊にもおぼろげながらわかった。

やめて、くすぐったいわ、と訴えようとしたが、舌がもつれて声にならなかった。美香は屈辱とたたかった。しかし、その感覚は、やがて、重く、けだるく、どこまでもひろがっていた。

おそろしいことだが、それは快感に近いうずきだった。触覚には魔法の力がこめられているように思えた。美香は噛みしめていた歯を思わずゆるめ、それに気づいて、あわててまた固く噛みしめ直した。その魔法の力を彼女は意志の力で、ふせごうとしていた。



両手をバンザイ型にくくりつけられたまま赤ン坊は耐えつづけた。

「美しい。生きているもののなかで、これほど美しいものが、ほかにあるだろうか。美香のような女の子とめぐり会えて、わたしはしあわせだ」

うわごとのようにつぶやきながら、Qの魔力はとめどもなく執拗に注ぎかけられた。それは、たしかにやさしかった。乱暴なところは、ひとかけらもなかった。愛情すら感じられた。

そのやさしい柔軟な世界へひきずりこまれていくことに、美香は屈辱を感じた。

ちがう、これはやさしさじゃない、愛情なんかじゃない、と美香は思った。

いやッ、いやッ、という叫び声を胸のなかであげていた。しかし、のどがよじれ、それは声にならなかった。

拒絶の意志とはべつに、白い肉の起伏が、乳を欲しがる赤ン坊のようにくねった。いくら歯をくいしばっても、どうにもならなかった。Qはどこまでもやさしく、飽きることを知らなかった。

「かわいいなあ。なんという肌の白さ、やわらかさ、このしっとりした弾力。夢をみてい

るようだ。美香、わたしの美香。いつまでもこの若さのままできてくれ！」

赤ン坊の歯のあいだから、声がもれはじめた。それはすすり泣くような、なにかを訴えるような、そして、どこか動物的な息使いもまじっていた。

太腿がよじれ、腹部が波のようにせわしくくねった。ベッドにくくりつけられている両手首の先が、白っぽく変色していた。ネグリジェは胸もとまで、まくれあがり、乳房がさらけだしていた。左右の乳房のあいだに、いつのまにか、こまかい汗がにじんでいる。

美香は、くたくたに疲れた。三十分の時間が経過している。

汗にぬれた十七歳の赤ン坊に、ようやくガーゼのオムツがあてられ、さらにオムツカバーでおおわれたのちにマジックテープでとめられた。

同時に、睡気がどっと美香に、おおいにかぶさった。美香は、黒い泥のなかへひきずりこまれるような重さで、眠りに落ちこんだ。

## 反省室のうめき

その翌日――。

Qは「夢の城」地下二階にある△反省室▽にシコを呼び、それからのに、女奴隷のA子、B子、C子、D子の四人を呼び集めた。

Qは、ただちにシコを除く四人の女のコスチュームをすべてぬがせ、あらためて、一部分をくりぬいた色つきパンティをはくことを命じた。

A子は赤、B子は黄色、C子は緑、D子は水色のパンティである。それをはいた四人の女のヌードは、奇妙でエロティックなものであった。

この反省室は、むろん洋室で、縦横二十メートルずつの広さがあり、四方の壁に沿ってそれぞれ形の変わった拘束機や責め具が並んでいた。

絨毯は敷いてない。床には青みがかったグレイの塗料がぬられてあった。そのあかるい色彩が、無気味な道具類にかこまれたこの部屋の暗いムードを、いくらか救っていた。

ちがった色のくりぬきパンティをはかせられた四人の女は、Qとシコの手によって、各種の懲罰機にくくりつけられたのである。

A子は白木の柱にロープでうしろ手に縛りつけられ、さらに両足をあぐら縛りにくくり合わされた。



左右の足首をひとつにしたロープが首のうしろにまわされ、さらに強くひきしめられていた。組み合わせられている足首が、床から浮きあがっている。

尻の部分だけがわずかに床についているだけで、あとは宙に浮きあがり、A子は苦しいポーズを強制されているのだった。このあぐら縛りによって、一部をくりぬいた赤いパンティの効果が、強烈に表現されていた。それはA子の羞恥を拡大し、誇張する役目を果たしていた。死人のように蒼白な顔色になってA子はうめいていた。

B子は両手首を革手錠でくくられ、その革手錠を天井から垂れさがっている鎖に結びつけられていた。

足は左右ぎりぎりまでひらかれ、一メートルほどの金属棒の両端に、その足首が縛りつけられていた。B子は足を左右にひろげた恰好で、天井から吊り上げられたのだ。足さきが、やっと床にとどく、ていどだった。

白い肌の中央に、黄色いパンティがくいてある。黄色いペンキを直接肌にぬりたくったような、鮮烈な色彩の対照であり、効果をあげていた。

その黄色パンティのくりぬき部分が、どこ

かユーモラスな、そして卑猥なムードをあふれださしめていた。

C子は、B子とは逆に、天井からさかさ吊りにされていた。

左右の足首を思いきりひらいて金属棒の両端にくくりつけられ、両腕はロープでうしろ手に縛りつけられてあえいでいた。緑色のパンティが、ここでも強烈な効果を發揮していた。そのくりぬかれたパンティが、ちょうど立っているQの目の高さになるのだった。

足首を固定した金属棒の中央から鎖がのびて天井へつながっている。頭を下に、足を上にしてのさかさ吊りのために、髪の毛が垂れて床を掃いていた。

C子の顔は、トマトのようにふくれ、赤くなっていた。血がさがっているのだ。この懲罰の方法は、あまり長時間はつづけられないだろう。

D子は、責め馬マシンの上に、両足をひらいた姿で、くくりつけられていた。

責め馬マシンというのは、プラスチック製で、馬そっくりの形にできている。細い四本足がついていた。遊園地やデパートの屋上などにある児童用の木馬を、ひとまわりほど大きくしたものである。

遊園地にあるものとはちがうのは、その馬の背中にあたる部分に、乗り手を苦しめる突起物が出ていることであつた。ただし、その突起物は、D子がくくりつけられているためにいまは見えない。

その突起物のやや後方に、垂直に立てられている一メートルほどの細い柱が、D子の背中を支えていた。D子は落ちないように、幅の広い革ベルトで、上半身をその柱にくくりつけられているのだった。

責め馬マシンは、軽い震動を始めていた。むろん、電気モーターによる始動である。D子は歯をむきだすようにして耐えていた。

「よろしい」

と、四人の女のそれぞれの状態を見渡し、やや胸をそらしながら、Qはいった。

「お前たちは、自分がどういう理由で、この反省室へつれてこられたか、知っているはずだ。知らないとは、言わせない」

Qは、A子の前にあゆみ寄ると、室内靴のさきで、軽く蹴りつけた。

「ひいッ」

と、A子は首を縮め、みじかくうめいた。本能的に防備の姿勢になり、足をすぼめようとしたが、あぐら縛りにされた上、ほとん



どが宙に浮いているため、蹴られっぱなしでいるより仕方がない。目の前に、ひとつにくられた自分の両足首の指がふるえているのだ。

二度三度と軽く蹴りつけながら、Qは顔をシコにふりむけた。

「シコ、お前はどうか。女たちが、なぜこの部屋につれてこられたのか、お前は知っているな？」

シコはぎくりとして全身の筋肉を硬直させた。顔から血の気がひいていく。

Qは知っているのだ、とシコは直感した。きのう、Qの留守に、五人で美香を責めさ

いなんだことを、Qは知っているのだ。しかし、なぜ、どうして知っているのだろうか？

四人の女のうちのだれかが密告したとは考えられない。それは、自分で自分の首をしめることになるからだ。

すると、やはり美香が訴えたのか。

そうとしか考えられない。

あれほど口どめしておいたのに！

シコは奥歯をかみしめた。怒りがこめあげてくる。美香に対する憎悪である。どうするか、おぼえているがいい。そのうちに、また

かならずいじめてやる。もっともっと陰險な方法で、声もあげられないほど意地悪な報復をしてやる。

シコの胸中とはべつに、それぞれの苦しいポーズを強制されているA子、B子、C子、D子の四人は、自分たちを訴えたのはシコだと思っていた。

シコのほかに、きのうの行為を密告する人間はいない、と信じていた。

いつかならず、この苦痛に対する復讐をしなければいけない、と心に誓っていた。

時間がたち、苦痛が増してくるにしたがつて、シコに対する憎悪が、四人の女の胸のなかに、火のかたまりとなって燃えた。

「だまっついてはわからないな。この四人の女は、どういう失敗があつて、この反省室にいれられ、きびしい懲罰をうけているのか、シコ、お前は知っているはずだ」

A子を、なおも室内靴のさきで、やわらかく、こねるようにして蹴り続けながら、のんびりした口調で、Qはいった。

「いいえ、知りません」

小さいからだを、いっそう小さく縮めて、シコは、おどおどと答えた。

「知らないのか」

「はい、知りません。私、きのうは地下室で一日じゅう、枷具の手入れをしておりましたので」

シコの声はふるえ、顔色は蒼白になっていた。

Qは、そのシコのこわばった表情を、しばらくなぶるような目でみていたが、案外に軽くいった。

「まあ、いいだろう。いまはお前を追究している場合ではない。あの四人に罰を加えなければならぬからな。そのためには、お前が必要だ。わかっているな、シコ」

シコは、複雑な困惑を顔にうかべてうつむいた。

きのう、美香をリンチした首謀者は、もちろん、シコであった。あとの四人はおもしろがつて、シコに同調しただけである。

それなのに、首謀者は罰せられず、追従した四人がひどい目にあわせられているのである。四人の女奴隷が、シコに対して深い恨みを抱くのは、当然であった。

しかもシコは、あいかわらずQの片腕としての優位な立場で、これから仲間の女たちを責めつけようというのだ。

すでに女たちの苦痛は、かなりのものにな







カット・春川 ナミオ

短篇読物



# 下宿人勧誘

伏虎久作

焦点の定まらぬ視線を宙に投げた彼の、ブルブルと小刻みに慄える手には一通の手紙があった。

私の家は、都心のオフィス街まで僅か二十分余り、K電鉄M駅の直ぐ近くで、バス停も歩いて二分とはかかりませんから、場所的に実に恵まれていることは、貴方も既に御承知の通りですが、この度、私の家に永く下宿して、会社勤めをしていた独身サラリーマンのKさんが、近く転勤とかで、しぶしぶながらも私の家を引き払うことになりましたので、代りに貴方を、Kさんと全く同じ条件で下宿させてあげてもよいと思います。

Kさんが私の家で、どんな条件で、どのよ

うな生活を送っていたのかは、貴方も大体存じておられることと思いますが、念の為、いまだ一度ここで、はっきりと申し上げて置きますから、よくよくお考えになった上で、二度とは巡って来ないようなこの幸運を見逃すことなく、出来るだけ早くお決めになられた方がいいのではないかと思います。

先ず、私の家族ですが、永年の化粧品セールスという職業柄、娘の私から見ても、到底四十才を超えているなどとは思えない程の美しいママ。そしてT商事にOLとして勤めている私。更に私より四歳下で今年高校二年生の妹、と全く女ばかりの親娘三人家族なのです。

下宿料は一カ月四万円、毎月末に翌月分を

前納して貰うことにしています。と同時に、ママに七千円を、私には五千円、そして高校生の妹には三千円のお小遣いを、下宿料とは別に頂くことに決めています。更に年二回のボーナス時には、私達三人に対するお中元、お歳暮として、装身具、靴、時計といった雑貨品から流行の服地などまで、それぞれ特に私達が指定したものを、貴方は贈ることを義務として約束して頂かねばなりません。参考までに昨年末、Kさんに届けさせたお歳暮の中味は、ママがワニ皮のハンドバッグで三万円、私には金側腕時計で二万円。妹は修学旅行用のハーフサイズカメラでこれも二万円とあったところでした。

部屋は、やはりKさんの使っていた三畳を



提供してあげることになっています。この部屋は、小さい高窓が一つあるだけなので日中も薄暗く陽当たりも悪いので物置きに丁度良かったのですが、Kさんが来たので空けてあげた部屋です。古い板壁一枚でトイレと隣り合っていて、老朽木造家屋なればこその特徴がありまして、風のない日や蒸し暑い雨の日などは、板壁越しに特有の臭気が貴方を包みこんでくれる筈です。それに私達が用を足す時は殊更に気を配って派手にしてあげますから手にとるようなあの独特の水流音を、Kさんが楽しんでいたように貴方にも楽しんで頂くことが出来ると思います。

次に食事ですが、これもKさんがそうであったように、貴方にも朝夕共に私達親娘のお余り、つまり残飯を、食べさせてあげることになります。ママの齧ったトーストや、私の食べかけのハム。そして妹の飲み残しのコーヒ―が貴方の朝食であり、お皿に残った魚の骨や揚げものの屑、中味のない余り汁が、冷たい昨日の残り御飯と共に、貴方の夕食となるのです。

どんな食べちらかしようにした残り物でも喜んで口にする、もの食いのよいKさんに面白がって、妹が味噌汁の飲み残しの中に、唾ばかりか啖まで吐きこんであげたり、足の爪を切って、それを、しらす干しの中に混ぜてあげたりしたのですが、それを美味しそう

に食べていたKさんの幸せが、貴方に移行することでしょう。

なお、これは余談ですが、そんなKさんに好奇心を持った私と妹が、面白半分で「Kさんなら私達のおトイレでするあの汚いものでも平気で飲めそうね？」とからかったことがあるのですが、とたんにKさんは、ぼっと顔を赤らめ乍らも目は、いきいきと輝かせて答えました。

「美人の貴女たちのものなら喜んで……」

「まあ、呆れた。……ママのでも飲む？」

「勿論ですよ」

「本当？ 本当に飲ませるわよ」

そして縁の下から引っ張り出してトイレの床に置かれた古いガラスの金魚鉢の底に三分ばかりの、上層に白い泡の立つ妹のそれを、Kさんが二度、三度息を詰め乍らも自分の喉に送り込んで了うのを見て、私も夢中で、その空になった金魚鉢に温かい生ビールを注ぎかけていました。これは、その後も時々、私達が興に乗った時の遊びになったのですが、私達に勧められてママも、お歳暮返しにと、Kさんの為に例の金魚鉢の中に小用を足したのは愉快でした。Kさんに聞くと、私や妹のものは臭気が少ない代りに苦味が強く、反対にママのそれは、味は比較的淡泊だが匂いが高いということです。貴方も御希望というのなら飲ませてあげます。但し、その為にお

腹が痛くなったり、体をこわしても私達は関知しません。

次にお風呂のことについてですが、貴方はいつの場合も私達三人が済んでから入って頂きます。私達の肌の汚れや残り香を味あわせてあげるためにも、これは絶対に守って頂かねばなりませんし、湯槽の中に体を入れることは、間違ってもしないという誓約をして頂かねばなりません。貴方の入浴とは、私達の使った後の湯を浴びるだけということをお忘れ頂いては困ります。その代りに、Kさんがよくしていたように、自分の入浴前に私達の垢の浮いたこのお湯を飲むのは少しも差し支えないということにして差しあげます。そして貴方が入浴するしないにかかわらず、最後に湯を落とし、美しく掃除をするという生き甲斐の一つの機会を貴方に差し上げることになります。そしてこれもKさんと変わらないことなのですが、その都度、私達家族の誰かが検査して、若し未だ汚れている所があれば何度でも、やり直して頂きます。Kさんが、ママの検査で七回やり直したことがありますが、私達の素肌を洗う場所ですから、当然美しくして置くべきだと貴方もお考えになることと思います。

掃除と云えば、貴方にいろいろな幸せをもたらすトイレのお掃除も、大切な条件の一つであることはいままでもないと思います。K



さんはその為に、自分が汚すのは嫌だと雨の日も風の日も、ずっと駅前の公衆便所を利用していましたが、私の方でも男の人には、おトイレを使って貰いたくないので、貴方にも公衆便所に、通って頂くことになると思います。もちろん、使うことは遠慮して頂いてもお掃除は毎日させて差しあげます。ママは免も角、慌て癖のある妹や私は、よくトイレの床面を濡らしたり汚したりしますので、し甲斐のある日課となることでしょう。

一度Kさんが「今日は汚れていないから」と、お掃除をしようとしなかったことがありました。丁度日曜日でKさんはどこかへ出掛ける様子だったのです。すると寝巻きのまま用足しに来ていた妹が、おトイレ中から申しました。

「そう。汚れていないとお掃除が出来なくて云うのね。いいわ。待っていらっしやい。直ぐお掃除が出来るようにしてあげるから」  
激しく板壁にぶつかる水音がして、床にはね返る気配がし、床一面が洪水を起こしたのは、間もなくのことでした。

Kさんは嬉しいのか悲しいのか、さっぱり分からないような複雑な顔をしていましたがきつと妹の、掃除のし甲斐のあるようにしてあげようという配意に感極まっていたのだと思います。ともかくもやっと美しく拭き終えたところを見計らって、今度は私が汚してあ

げました。

「Kさん。汚れているわよ」

Kさんは再び、一旦片付けたバケツや雑巾を手にしてトイレに入って行きましたが、出てくると次はママでした。

「Kさんご免ね。濡らしちゃったのよ……」

「いいのですよ奥様。直ぐお掃除しておきますから」

調子のよいKさんが、それでもやっとママの跡始末を済ませると、妹がまるでとどめでも刺すように、無理をして、床や便器を大きい方で汚したようでした。

こうしてKさんは私達によって、遂にお昼過ぎまでトイレ掃除を楽しむ結果となり、出掛けるのは取りやめにしたようでした。どんな予定だったかは知りませんが私達の汚してあげたおトイレ掃除に勝る楽しみが、そうざらにあるものではない筈ですから、Kさんは私達三人に感謝していたに違いないと思っています。

最後に、Kさんの一日の日課を知って頂くことによって、或いは貴方が、更に何かの日課をつけ加えるための参考となるといのであれば、これに越したことはありませんから一通り書いて置きましょう。

四季を通じ、Kさんの起床は朝五時です。そのKさんに提供するお仕事は、まず私達三人の下着の洗濯です。これは、前日の入浴の

際、脱いで丸めた俵のブラジャーからスリッパ、それにパンティ、靴下までをお任せすることにしていました。お断りしておきますがこれはあくまでもKさんの希望なのです。貴方もきつとそうであるように、私達の素肌につけた汚れ物を洗うことが、Kさんには楽しみなのです。それはKさんが絶対に洗濯機を使用せず、普通に一枚一枚、手でもみ洗いすることを実証されています。もっとも洗濯以前にその汚れた私達のパンティに、何度となくKさんが自分の顔を近寄せ、唇を埋めていることは知らない訳ではありません。でもそんなことすら、特に私達は許してあげていたのです。貴方にも、ママや私の、そして妹の匂いを楽しみ、味わい乍らパンティを洗うことは、見て見ぬふりをして差しあげましょう。

洗濯が終わると庭を掃き、打水をして次はトイレの掃除です。床を拭き陶器を磨く。何しろ先にも述べた通り私達三人が入替り立ち替り、乱暴な使い方をするので、張り合いのあることだと思えます。そして七時半、私達のお余りをお腹に入れてKさんは出勤します。

帰るのは大抵六時半頃です。しかし、私達親娘が揃って夕食を済ませるまで、Kさんは空腹でも、いつも廊下でじっと正座して待っていたことにしています。そのあと、御



飯も、おかずも、お汁の余りも、ごっちゃにして一つのボールにあげ、Kさんの食事時間ということになるのですが、この時、テレビで面白い番組がない限り、私や妹が、お相手をしてあげることになっているのです。箸を使わずに、ボールを床に置いて犬のような恰好で食べて貰ったり、ペツとKさんの見ている前で、啖や唾などを吐きかけて差し上げたりするので、Kさんが、折角の私達にしてあげるお相手に、不服そうな顔をした時は、私でも妹でも、思い切り叩いてあげることにしています。容赦なく平手打ちを喰わせ、足を上げて蹴ってあげると、Kさんは大抵の不満は解消するようですから……。ママも時々私達の仲間入りをして、踏み潰した足の裏の御飯粒を、Kさんに唇で舐め取らせてあげることがありますが、その舐め方が悪いと、Kさんの顔を蹴飛ばすというルールになっていますから、Kさんは、わざと下手にすることが多いようです。

その後は、私達が果物などをむき乍らテレビを見たり、寝転んだりしている間に、Kさんは風呂を沸かし、明日にそなえてママや私達の靴を磨くという順序になります。磨き足りないいと、汚い皮靴やブーツの裏を、そして美しく磨き上げれば、私達の食べたリンゴの皮や、蜜柑の袋皮が、それぞれのお札ということに決めていますので、どちらを選ぶかはKさんの、ご自由というわけなのです。

最近になって、私達は入浴の時、Kさんに三助を、勤めさせてあげるようにしています。シャツ、ズボンを着たままで、粘着テープをしっかりと両眼に貼り付け、完全に眼隠しをしたKさんに、体の隅々まで洗わせてあげるのです。視力を遮ってもらうのは、私達が気楽に、のびのびと入浴するためですが、その代り、Kさんには私達の裸身をくまなく洗わせてあげられるのです。

Kさんは、この私達の入浴時の三助の役が大変に気に入っておられる様子で、いつも入念に洗ってくださるのですが、手を滑らせたリタオルを取り落したりして、瞬間的にですが肌に掌が触れることが少なくありません。触れるといっても石鹸が一杯ついているから、直接とはいえないのでしょうが、私には気持がよくありませんので、妹と相談して入浴時用の手袋でも買って貰って、三助の役の時には、それを穿いてもらおうかと話し合ったこともあるのですが、母は、そんなことは一向に苦にしていけないようで、はんたいに掌をタオル代りにして洗って貰う時もあるらしいのです。その洗い方のほうが、Kさんとしてはお得らしいといっていましたし、手袋どころか、ズボンだけぐらいいは脱いでもらってもいいような口吻りですので、まだ手袋の件は実施していませんでした。

でも一度、タオルを持っていない筈のKさんが、それでも手を滑らせて、へんな洗い方をしたことがあったそうで、さすがに寛大な母も頭に來たらしく、すぐKさんに洗い役を中止してもらい、腰掛け代りになってもらったとか、いつていたこともありました。

そして、私達は、就寝しなければなりませんので、Kさんの日課としては、私達の足の手入れと、マッサージしか残らないことになってしまいます。足の爪を切り、ヤスリをかけ、足裏まで丁寧に手入れをし、脚線美を保つ美容の為のマッサージを、Kさんにお任せするので、Kさんの一日最後の日課ですから、足首から太腿まで何度も何度も繰返してやらせてあげることになっています。でも、Kさんの手加減ひとつで察しをつけ、私達はKさんのお望みどおり、終わるまでには三度や四度の平手打ち、足蹴りをしてあげねばならないのですが、私達三人共、そのくらいのことには少しも苦にはおりません。

大体以上ですが、細部は貴方が越してこられてからのことに致しましょう。では、ご返事を……。

× × ×

彼は再び読み終わった手紙を仕舞うと、はじかれたように立ち上がり、荷物をまとめ始めた。

(完)



## ＝被虐の実例に想う＝

## 吊るし責め

(下)

—その実際とプレイの限界—

柴 利 好



7

両手吊るし。この方法は我国よりも西欧でよく行なわれているようである。両手首を合わせて一括りにして吊るす仕方と両手首を別縄でそれぞれ縛ってY字形に吊るす方法とがある。吊るし責めとしては一番単純なものか

も知れない。とはいえ、手首だけに体重の負担が掛かる訳だから手首に受ける苦痛は甚だしく、この吊るしも長時間続ければ手首や肘肩が脱臼する。果してどれくらいこの吊るし責めに耐えられるものか、プレイとしての限界を見究めることは至難である。吊るし時間

が短かければ、この両手万才の吊るしより逆さ吊るしの方が辛抱し易いのは、この両手首に感知される苦痛の激しさに原因する。誌上に両手吊るしに関するタイムの発表が見当たらないのも多分吊るし時間が余りにも短か過ぎるからではなからうか。フィクションなら幾らでも好きなだけ吊るし続けていられようが、実際のプレイでは左様は行かない。

谷山さんは、この両手吊るしを、両手首を一括した吊るしと、別縄によるY字形吊るしの二種を同じ折檻日に実行されているが、矢張り時間的記録は見当たらない。

西部劇映画などで、両手首を細い革紐で縛ってY字形に吊るし上げ、戸外で一夜を過ごさす拷問や刑罰が行なわれている処を見る。吊るした当初は足先は地面に届くか届かないかの状態だが、夜露が革紐にしみ込んで夜明けとともにそれが乾く。柔軟な革紐は自然に収縮して寸法が短くなるから、両足が地面から離れて被虐者は半吊るしから完全な宙吊りにされてしまう。こうしたことは、飽くまでもプレイを離れた真性の加虐実刑だからこそできることであろう。

この両手吊りが、南米アマゾンの奥地ではインカの末裔、チャマ族の間で、刑罰として



ではなく分娩の一習俗として実行されていることは、予々文献上で知っていた。それが、

「太陽の帝国」という記録映画中に、その実景を見ることができたのは大きな収穫であった。妊婦の両手首がどのように大木の枝に連結されているのかカメラは描写してくれなかったのは残念だったが、吊り下げられた妊婦の両足先が明らかに地面から四、五十センチは離れている事を示していた。少なくとも彼女の属する部族の全ての妊婦達は、分娩の際に両手吊るしを受けて出産を待たなければならぬのだから酷い慣習もあるものだと感じさせられる。プレイとは全く性質は違うが両手吊るしの一例として付記させて戴いた。

手足による吊るしは両手、両足に同時に縄掛けしない片手吊り、片足吊りと称せられる方法もある。この吊るし責めは被虐者にとって文字通り地獄の責めともいえるほど苦しい責め苦であることは容易に理解できる。これらの吊るしの様態は文献上でこそ見られるものであっても、一般的プレイとしては適当とは思われない。それかあらぬか誌上でも未だかつて、この片手吊り、片足吊りの實際例を拝見したことがない。それはこれらの責めが局部に与える苦痛度の凄まじさもさること乍

ら、その姿勢そのものに美しさを感じることができないからであろう。

谷山さんは、片足逆さ吊り責めを敢行された類稀な経験者の一人である。その時、彼女は吊るしに先立って両手を後ろ手高手小手に縛られ、首縄さえ打たれた。そして吊られないう方の左脚は膝で折り曲げ、腿と腰とを一緒にして三カ所を六、七巻き固く括り合わされた。こうして右足首に四、五巻き細引を巻き絞って片足吊るしに吊るされたのであった。

「女は呻き、泣き喚き、嬌声をあげ、肉をくねらせ、刻々鬱血する脳裡を被虐の歓喜に疼かせてぶら下っていた」と、実験者の手記はある。この姿勢でどれほど辛抱し続けられるものか分からないが、彼女の場合は少なくとも何十枚かの写真を撮されている筈だから、五分前後は吊られ放しであったと思われる。

## 8

胴吊るし。この場合も痛さが先行し、苦しさが遅れてやってくる。胴吊るしでは仰向けにした吊るしの方が、俯伏せの吊るしよりも苦痛度が幾分マシなのは腰椎骨によって体重が支えられるからである。勿論、腰椎骨は逆に折れ返る訳だから苦しいに違いない。しか

し腹部を下に向けた胴吊るしの方がこれより遥かに苦しい。それは全ての体重が柔軟な腹部の一局部に集中して痛みと苦しさと同時に到来するからである。それに加えて自体が仰向けの時より以上に真二つに折れて頭が下がるため苦しさも一入といえる。只単に胴に縄を回しただけでなく緊しく締め上げた上で吊るされれば苦痛はなおさら激しさを増す。胴絞りの苦しさは昔の佐渡ヶ島流人の公刑として知られる瓢箪責めの故事を例挙するまでもない。しかも特殊な性向としてこの胴締めに限りない陶醉を感じるマニヤの存在もあることを見逃がせない。これは古留節人氏の領分なのだが西欧風俗に見られるコルセットの緊搾もその嗜好の顕著な一例である。胴中つまりウエストを緊しく縛り上げると血行が妨げられる結果、ウエストを境として下半身が鬱血する。反面、上半身に貧血が起こる。胴吊るしは特に胴中を緊しく締めつけた吊るしではなくても胴縛りと同様の効果を肉体に及ぼす。それが俯伏せの時は特に著しい血行循環の不調をもたらすから、締めつけられた腰部の局所的苦痛と同時に、この苦痛が加重合併され、一層酷い責め苦になるものである。



## 9

頭髮による吊るし責めは、その惨虐性に於いて他の吊るしの比ではない。この位置は風習として頭髮を長く伸ばしている女性に対してより多く行なわれていたであろう事は想像に難くない。この責めは古来実刑として多くの国々で行なわれた実績があるが殊に私刑として痴情関係の悲劇的結末として採用された場合は、その残虐度は一層凄まじかったであろう。伊藤晴雨氏の著書の中にもこの髪吊りのリンチについて語られた一節がある。姦婦の髪吊りが寺の本堂を借りて行なわれ女は終夜、高梁から髪の毛だけで吊るされる。翌朝吊るしの現場に行つて見たら女の頭の皮が剥がれて床上に落下して息絶えていた。そして梁には血糊に染まった一片の頭皮の付着した黒髪がぶら下っていたとある。身の毛もよだつ話とは、このことだろう。

サディズムショーとして高名のローズ・秋山夫人の髪吊り写真が出されているが、未だ実演を拝見していないのでその詳しい様子は判らない。処でこの髪吊りのみを生計の業としている女性が現実に現われた。この人に就いては数年前、一度、誌上に報道したことがあるから、記憶の方もあるかも知れない。

クリス・ホルトと呼ばれるこの婦人は未だ

二十代の若い母親のだが、一昨年わが国にも来朝して、各地でその神技とも思われる秘芸を、われわれの眼のあたりに披露してくれた。しかも彼女は単に吊り下げられているだけではなく、振り子のように大きく振られたり、腕や脚に大きな輪を入れて全身の力を込めてこれをグルグル回したりする演技に至っては、正にショック、といわざるを得ない。その演技時間は最長限度十五分間である聞く。如何に生業とはいへ、宙吊りの後段になると、口辺のわざとらしい微笑とは裏腹に、両眼はキリキリと引きつって痛ましさを感ぜずには、いられないショーである。世界で只一人と呼号するのは、あながち誇大宣伝ではなさそうである。

「顔吊り」という言葉は、誌上で田宮寿子夫人の話を知るまでは未だかつて聞いたことがなかった。実見記によると、夫人はその顔面を（当然、頭部をも含めて）ロープでグルグル巻きに縛られる。額から眼の上、頬、口、顎に至るまで、顔面を殆ど余す所なく縄掛けされた上、後頭部で縄止めをし、吊り縄で吊り下げられるのである。夫人がこの顔吊りに耐えられる限界は数十秒であると報告されて

いる。仮にその宙吊り時間が一分足らずであっても、両手が自由の俛で吊るされた場合は苦痛を避けるために手を上に伸ばせば吊り縄を握ることもできる筈であるのに、夫人は敢えてそれをするこゝとなくして、この吊るし責めに耐えておられる。

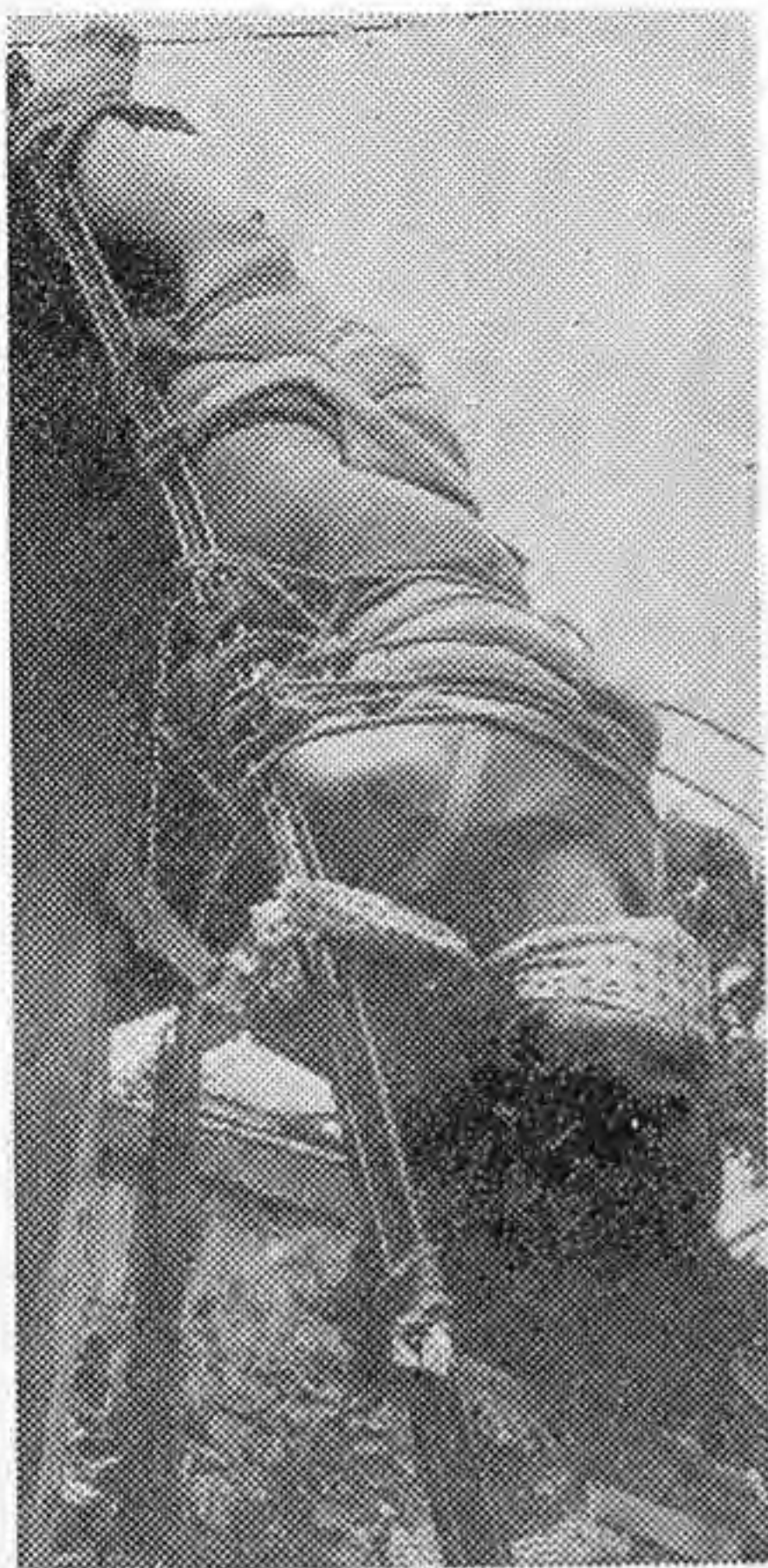
この顔吊りは恐らく夫人の発案ではなからうから、夫君の意に逆らうことなく、地獄の責め苦にも等しいほど過酷なこの吊るし責めを、甘愛しておられる夫人の心情に思いを馳せる時、陽性なクリス・ホルトの髪吊りでは感じられない女の業の哀れさ、切なさを覚える。髪吊りといい、顔吊りといい、何れも想像を絶した無慈悲さからして、明らかにプレイとしての一般性を欠いているということが出来る。

## 10

吊るし責めには、以上、述べた他にも色々な方法がある。例えば、手足を身体の背面で一つに縛って、重石を背中に乗せて吊るして置いて廻転さす「駿河問」など、昔の実刑として余りにも有名である。

谷山さんが掛けられた駿河責めは、全くのトリックのない縄だけで吊るされた。写真の





示す所によれば、先ず吊るされる準備として彼女は後ろ手高手小手に縛られ、両肘までも縛られた。そして上体は二の腕から胸にかけて四筋の縄が走り、胴中には別縄で五筋、二つに折り曲げた両脚部は、これも別縄で九筋（何れも換算）もの細引が、皮肉も切れよとばかり嚴重に荷造りするように掛けられた。その時、彼女は「さも嬉しげに前条の縄を甘受した」と記されている。

扱て、手首、五体、胴中を縛り上げた縄を一括した別縄を脚部を縛った縄に結びつけ、この縄に吊り縄を繋いで鴨居から吊り下げたのである。こうして空中に浮かんだ体を大きく揺さぶり、ぐるぐると数回、体をねじって転回させたりし乍ら、革鞭でビシビシ打ち続

けたのであった。実刑と違って背中に重石こそ背負ってはいないが、頭部を下に両膝を上にして約三十度ほど傾斜した彼女の吊るされる姿は、全く凄絶そのものという他はない。その姿で、どの位吊るされていたのか滞空時間は不明だが「胸がしめつけられて息が止まりそう」だったそうである。

私刑的なものとしては海老縛りに吊るしを加味するとか、後ろ手に縛った上体を、正座させた両膝に密着するまで折り曲げて一つに括り合わせた上、丁度、亀の子を吊るしたように吊り下げることもある。増田みゆき夫人佐倉絹子さん、谷山久美子さんにその事例が見られる。圧迫刑と吊るし刑との複合刑であるこの亀の子吊るし（或はZ吊るし）は、その姿は面白いが苦

痛の実際はどれほどのものであろうか。谷山さんは直線逆さ吊るしから降ろされた直後、縛った縄をそれきりで解くことをせず、縛った縄目をその尽で体を二つ

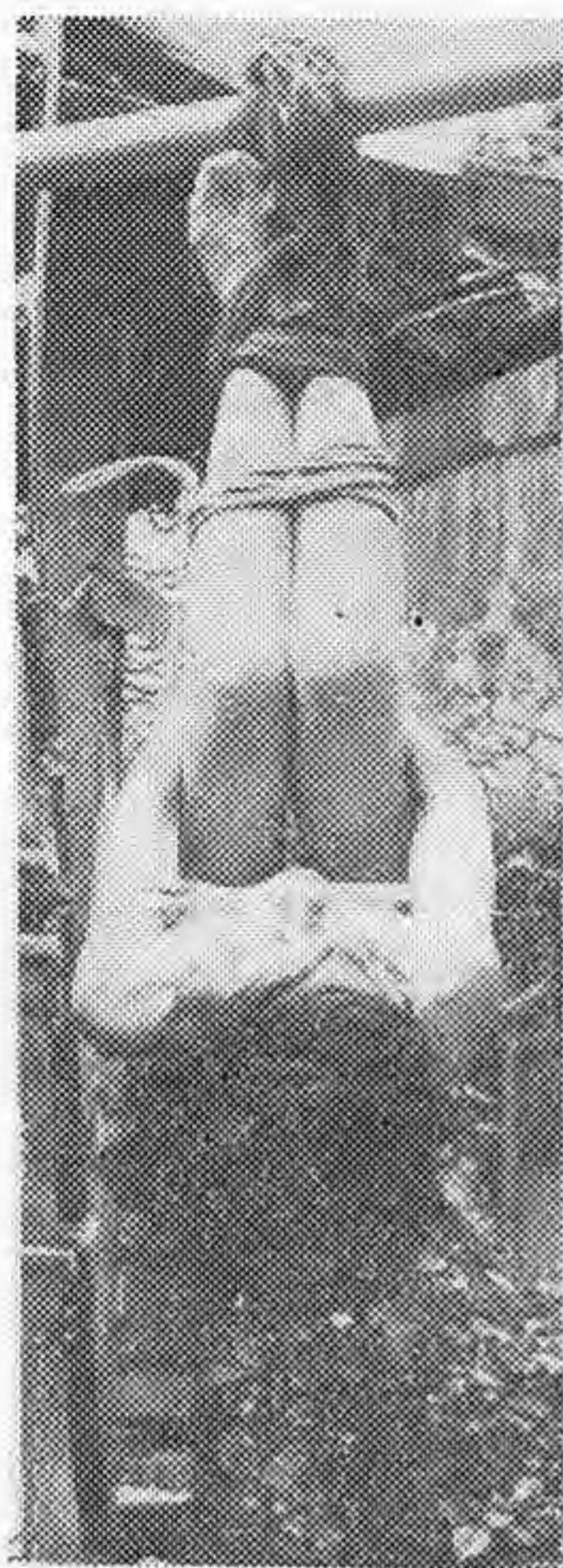
折りにして別縄でその上を更に縛り上げてこの亀の子吊りを受けたのであるが逆さ吊るしに較べると比較的、楽らしく膝に顎をついて吊りの感触を愉んでいる風であったことが報告されている。いかにも逆さ吊るしと違って血液の頭部への逆流はないから、吊るされた時、暫くは楽であるかも知れない。けれども写真に見られるように数本の縛り縄で全身を殆ど限なくガンジ掬めに縛り上げ、二つに折り曲げられた上の吊るし責めなんだから、（両脚を正座位にして、縛れば三つ折れとなる）それが長時間に及べば自然、全身麻痺に襲われることは自明の理である。この麻痺状態が被虐者にとって陶酔の境地であることも考えられはするけれども、そこに至るまでに縄目が全身に喰い入る苦痛、降ろされた後、麻痺症状が覚醒する過程の苦しきなど図り知れないものがあると思う。吊るし時間の限界は見当もつかない。

晴雨好みの方として、後ろ手高手小手縛りの上体を曲げて、大腿部に嚴重に縛り合わせ、頭部と足部とを下にし、臀部を上にして吊るす責めもある。これを俵吊るしと呼ぶ人もいる。この責めの吊り縄は、両脚の付け根に掛ける方法と、腰縄に脚部の縛り縄を連結



して吊るす方法の二通りがある。こうした変形的な吊るしとしては、誌上で拝見した笹原八千子さんの実験による吊るしなどもあるがその一つ一つを列挙する必要もあるまい。要はプレイとしてならば人それぞれの肉体的条件と嗜的、それにその折々の雰囲気とは合致した仕方を採用すれば良いのだろう。

扱て吊るしの中で頭部に縄を掛けて吊るすハンギングに就いては、前にも一言した通り極刑の一つである点で、同じ吊るしでも全くその意味が異なる。これは既に責めとか折檻の範疇に入れることはできない。しかし乍ら、SMプレイとして絞首の経験者は結構数えられる。頭部を縄で緊しく縛りつけて、窒息寸前の恍惚状態を楽しむマニヤすらあるのである。この種のマニヤにとっては、絞首こそ吊るし責めの最高度のエクスタシーを感じさせ



る極楽の仕置とさえ評するかも知れない。吊るし責めの嗜好が一層嵩じてくれば、最終的にはこの首吊りプレイにまで発展するであろうことは理解される。現に独国でかつて発生した事件として、一兵士が自虐の果て、全身をコルセットなどで装い、自縄自縛した揚句縊死した実例が、マゾヒズムの好個の例証として古典的性科学書に掲載されている。その詳細に関しては誌上にも引用解説されてあった。或は中学生辺りの少年によって行なわれる全く原因不可解な首吊り死亡事件の発生を新聞報道で見たことも二、三に止まらない。これらの事故の理由として「悪フザケが過ぎた」「当て身の快楽」などとまことしやかな憶測が行なわれているのが毎々なのだが畢竟当人のマゾ性の現われ以外何ものでもないと断言できると思う。しかしプレイの場合はそ

れを飽くまでもプレイとして楽しんでこそ意義があるのであって、それが為に直接、生命

に危険を及ぼすような恐れのある手段方法は厳に慎むだけの理性と節度を持ちたいものである。

## 11

以上、列挙した吊るし責めの様態は皆、宙吊りの状態、即ち空間に一つ離れて宙ブラリにされた場合である。これに対して、身体を何らかの責め具に縛りつけられた結果、身体が吊り上った状態が、別途に考えられる。「縛り吊るし」がこれである。この吊るし方は身体が責め具に密着して縛られている点で同じ吊るしでも前記の一般的宙吊りとは区別される。以下順次、縛り吊るしの様態を述べて見よう。

プレイとして一番実行しやすいのは柱縛り吊るしである。何故なら普通の日本家屋なら一本か二本かの独立した柱があるから、簡単に利用できるからである。但し近頃の団地建築やマンション風の建物では洋風が一般的になって、独立柱がない場合が多いのは、縛りマニヤに取って一つの痛恨事であるといえるだろう。しかし洋間は、密室として完全ならば、鞭打ちその他、音響を伴う仕置を行なうのには便利であることは利点である。



扱て、仮に柱に縛りつけられた場合、足が床に着いていれば普通の柱縛りである。足が床に届いていない、床から幾らかでも距離がある場合を縛り吊るしと呼ぶ。柱に縛り吊るしをした当初は一応、身体が宙吊りの状態を保つことができて中河恵子さんの例のように、しばらくすると体重で身体がズリ下がって足が床に届いてしまうことが多い。こうした身体の下降を防ぎ吊るしの目的を達成するためには、予め、柱の要所に縄止めのための刻みをつけて置くとか、釘、木片の類を打ち付けて置くといだらうし、或は生ゴムを柱に巻き付けるのも一方法であると思う。

宙に吊り上がった足(爪先)と床との距離が多くても少なくとも吊るしの効果は変わりない。肉体的苦痛に関する限り、吊るされた高さ低さは関係がない。これは敢てこの縛り吊るしに限ったものではなく、本吊るしの場合も全く同様である。只云えることは精神的に被虐者に一層恐怖を感じさせるといふ点で、高々と吊るされればそれだけ責めとしての効果があるには相違ない。

因みに吊るし責めに限らず、一般論として全ての責めのプレイに際して被虐者にメンタルな効果を与えるためには

一、裸体の儘か、珍奇な衣裳着用

二、屋外

三、衆目に晒す

などの演出が考えられる。室内の柱にばかり縛りつけていたものを、庭樹、裏の物干柱などの利用を手はじめに、山林の立木、水辺の杭など、利用できるものは幾らでもある。殊に水辺の杭は晴雨翁が好んで使われた責め具であった。赤い湯文字一枚に剥がれた美女が、後ろ手高手小手に縛られて、川面に佇立した二本の杭に左右の脚を別々にギリギリに縛りつけられている情景は、全く責め絵美の極致といえる。がしかし、現代社会では所謂絵空事として眺める外はないだらう。

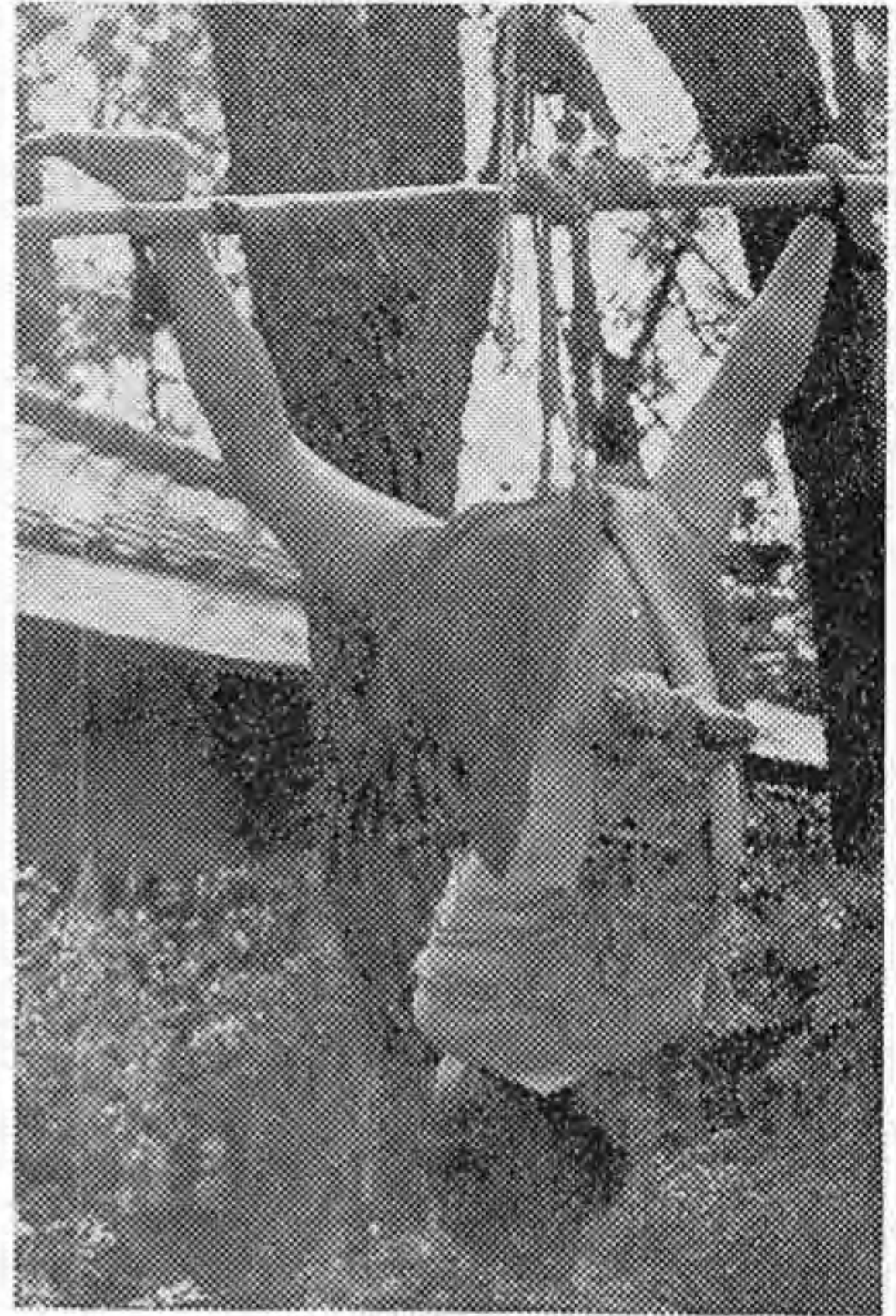
処が一昨年、横須賀の公園で起こった某自衛隊員の宙吊り事件には驚かされた。事の次第は新聞紙上や雑誌で詳しく報道解説されているから詳述は避けるが、映画「徳川女刑罰史」を見てM情を刺戟された件の青年が、公園の鉄柵に裸体で自分で宙吊りとなり、失神している所を早朝通行人に発見されたのである。一時は刑事事件ではないかと大騒動になったのも無理からぬことだが、M性もここまですれば立派なものである。この青年は、この時の自虐宙吊りで一晩中を過ごしたことに

なる。救助されて病院に担ぎ込まれた後も、なお長いこと意識不明の状態を続けていたというから、肉体的消耗は極限に達していたであろう。プレイとしては、その実演舞台も経過した時間も、正に記録的できごとであったといえよう。

## 12

磔柱、木馬などの責め道具を使つての縛り吊るしも忘れてはならない。磔(はりつけ)は足が床(地面)に届いた姿勢でも実施できるが、それでは単純な縛り責めに過ぎなくなる。足が床から離れた状態ではりつけられる。縛り吊るしになる訳だ。磔刑で身体を支えるための副え木があるかないかで、被虐者の苦痛は著しく違ってくる。十字柱、×字柱、キ形柱そのどれであっても、足を乗せる支えが使われた場合は純粋な意味での縛り吊るしではなくなる。キ形柱の下横木に両足を乗せて縛っても吊るし刑の価値は失われる。この場合、横木に足を乗せないで縛りつけられれば縛り吊るしになる。縦柱の中程に副え木を打ち込んで股間を支えた場合は、なお下半身が宙吊りの状態で残されている訳だから、不満足ではあるが一応、縛り吊るしといえる





だろう。

この副木用として、長釘に布を巻きつけて使用したことが誌上で見られたが、どれほど厚く布を巻いたとしても釘一本では被虐者の苦痛は並々ではなからう。ましてこの格好で磔柱の上で一夜を過ごしたようにも記されていたと記憶するがフィクションでもなければ、あり得べからざる残忍さであり、若しあったとすれば、プレイとしてではない、実際のリンチとしてしか考えられない。

自宅内に磔柱の設備を持たれる増田みゆき夫人は、副木にまたがった磔縛りで（当然、

両足先は、床に届いていない）二十分は辛抱できるそうだが、いつも磔刑でこんなに長い仕置を受けておられるのだろうか。普通の縛り吊るしと磔刑とでは肉体上に受ける損傷の程度や苦痛の所在、或は麻痺症状などにも相違いがありはしないかと思う。こうした諸点に就いて具体的な

経験話をお聞かせ戴ければ有り難い。いつか増田みゆき夫人と一緒にプレイされた時の木村洋子さんにも、磔刑と普通の柱縛り吊るしとの差異や、肉体上の感じ方などに就いてのご感想を是非ともお聞きしたいものである。

13

柱縛り吊るしと同じ要領で、梯子縛り吊るしその他同種の吊るしも考えられる。この縛り吊るしは身体を正常位で縛りつけるだけとは限らない。磔刑の場合にも、現に逆磔刑などという酷刑すらあるのだから。

縛りつける姿勢も身体を横たえた状態で吊るすのも面白い。例えば一本の棒とか竹竿や梯子などに身体の要所要所を縄掛けして縛りつけた上、その責め具を横に渡して横吊りにするのである。この縛り吊るしならば、縛り方次第で十分や二十分なら案外、楽にプレイを楽しむことができるようだ。

この横吊るしに使った責め具は単に水平に掛け渡すだけではなく、様々にその傾斜角度を変え、普通の方法であろう。直立させて置けば、普通の柱縛り吊るしだが、これを頭を下にして立てれば、逆さ磔と同じ効果をもたらす。梯子縛り吊るしを受けた佐々木真弓さんは正常位と逆吊りと両方の責めをされているが、惜しいことにその時間的記録がない。彼女の細腰の素肌に深々と喰い込んだ緊しい縄の縛り目が印象的であった。田宮寿子夫人には逆さ梯子の縛り吊るしで四分間の実績がある。右に挙げた二人の梯子縛り吊るしは何れも屋外で行なわれたプレイである点まことに意義が深いと思われる。

14

どんな縛り吊るしでも、身体に掛けた縛り縄の縄数が多ければ多いほど、肉体的な局所



的苦痛は幾分か和らぐ。これは先に本吊るしの項でも触れた通りである。但し、吊るされる時間が長引けばこれは論外である。一般的にいえることは、この縛り吊るしの方が、本吊るしよりも比較的楽であることで、一本の縄で梁から宙吊るしにされるのと数本の縄を使って身体の方々を柱に縛られ吊るされるのでは苦痛の度合いが異なる。本吊るしでならものの五分とは耐えられなくても、縛り吊るしだと二十分は優に辛抱できるのである。

吊るし責めの場合、縛り方がどのように身体に影響を与えるかということは、縛り方の厳しさよりも、縛る場所、つまり身体の何処に縄を掛けるかが重要なポイントとなる。吊るしを伴わない普通の縛りならば、縄目さえ緩くして縛れば、縄数が多くても、縛られている時間が長くても、苦痛はさほどに感じないで済む。縛られて苦しいのは、嚴重に力いっぱい締めつけられた場合なのである。これに反して吊るし責めでは縄目の緩い、厳しいはさして問題にはならない。何故なら吊るされば体重が全て縛り縄を通じて肉体の表にも裡にも加重されるから、縄がユルクてもキツクても体重の重圧そのものには影響しないからである。つまり、仮に緩く縛られても、吊る

されれば皮肉に喰い込む縄目の苦痛は、キツク縛られたのと変わりはない。むしろ時間が経てば経つほど吊るされた支点に当たる縄目は次第に激しく皮肉に深々と喰い込んで苦痛を増加させずには置かない。

毎々述べる通り、その縄数を増やし、重心の掛かる支点を多くすれば、苦痛を分散できるという意味で、幾分か忍び易くはなる。縄掛けする場所、すなわち何処を縛るかによっても随分、苦痛度が違ってくる。両腕だけに全体重が掛かるよりも縦縛りの縄に吊り縄をつなぐとか、補助の縦縄を用いて横縄の各所に連結さすとかの工夫を凝らすと、これによって吊るし責めの悦楽を少しでも長く、楽しく味わうことができるようだ。映画や舞台で見る吊るし責めの演技は、全てこうした補助縄使用という細工が用いられているからこそできることは、先刻ご承知の通りである。

## 15

以上、さまざまな吊るし責めに就いて被虐者の苦痛とを併せ考えてみたが、吊るし責めはどの種類のものであれ、肉体上に及ぼす影響が非常に大きいことは誰でも知っている。従って、プレイ実行者は耐え得られる限り悦

虐プレイを継続したいというS・M的慾求に燃えながらも、その結果するであろうところの悪影響を防ごうとする自衛本能が、実験の結果の追及を自制させる。それ故、プレイの実際には苦痛の極限に到達するより遥か以前に、その実験が停止されることになる。

例えば後ろ手、高手小手に縛られて、背中の縄尻で吊るされたとする。すると二つの腕つまり、高手部分の極度の緊圧によって、両腕の血行は著しく不調となり、意外に早く神経麻痺が襲ってくる。麻痺は先ず指先から始まって掌の表裏に進み、小手から肘を越えて高手へと及ぶ。仮に吊るし時間が僅か十数分であつたとして指先の麻痺が起こった場合、それが完全に回復し、元通りの正常な感覚を取り戻すまでには、何時間かの時の経過を待たなければならぬ。また、両腕の外側に深く刻み込まれた縄目の跡が完全に消滅するにも、優に半日以上は掛かるのである。

こうした症状は、鍛えぬかれた強健な肉体と、柔軟で未成熟な身体とでは自ら差異があることだから、被虐者の健康や肉体的条件によって明確にその状況を決定づける訳には行かない。が、どのように訓練された強壮な身体でも、長時間のプレイでは損耗を免れ得な

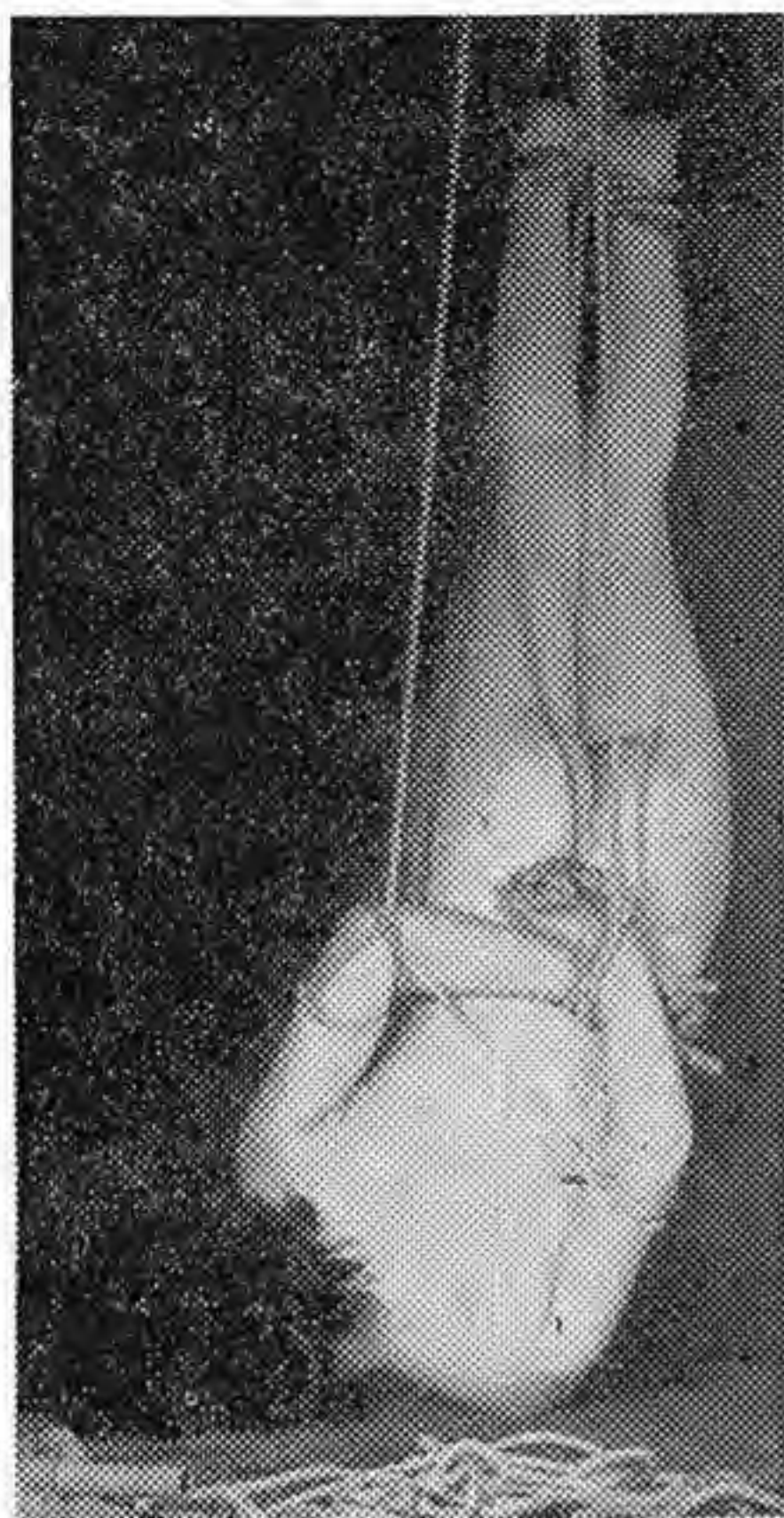


いことは、前記の自衛隊員の事例を挙げるまでもなく理解される筈である。縛り縄の条痕を例にしても、その跡が浅く、皮膚の変色が薄い場合はよいが、皮下出血が甚だしくて、一旦、皮下に色素が沈着してしまった条痕が元通りの肌色に復原するまでには半年以上を経過しなければならぬ場合すらある。

右のような神経麻痺、皮膚の変色など初步的な事項についてさえ、プレイ当事者としては、責める者も責められる者も、充分の注意を怠ることはできない。尤も人間とは良くしたもので、訓練次第では或る程度肉体上の抵抗力と順応性が備わるものである。即ち始終、縛られつけて被縛生活を続けていると、自然その人の身体に縄に対する習慣性が備わ

ってくることは考えられることだ。これは吊るし責めに限られたことではないが、小竹雪枝夫人のM生活の一端を窺うと、こうした事実が或る程度、理解される。

夫人は買物、映画、パチンコなどにお出掛けの時の着衣の下で、素肌のバスト、ウエスト、ヒップに縄目が皮肉に喰い込むまで緊しく縄掛けされて行かれていたらしい。後ろ手、高手小手に嚴重に縛り上げられた後、午後の半日を一室に放置されたり十二時間も立て続けに縛り責めを受けておられるという。逆さ吊るしの準備として上体を雁字搦めに縛られた時は、その縄をその夜から翌日の夜まで即ち二十四時間全く解かれない筈、縛られ通して過ごされている。



後ろ手に手首を縛られ、その縄を二の腕から乳房の上下に二重に巻いてから小手縛りの縄を引き締め、縄尻を左肩から前に回してバストを走る高手縄を引き絞って右肩から背後に戻し、背中中縄止めをするという完全な高

手小手後ろ手縛りが、彼女の受ける普通の縛られ方である。この程度の縛りなら相当強く縛っても、数時間なんらの苦痛をも訴えないし、この尽の姿で、眠ることもあるほどである。彼女の場合は、その縛られている時間が極めて、長時間に亘っているのが特徴的である。先号の日記の中で示された一宵の外出プレイでも、肌の全身を雁字搦めに緊縛されてその何時間も過ごされている。しかも夫君の思いやりから、長時間の外出を顧慮して腹部の亀甲縛りを手加減されたのに対して彼女は「中途半端に括られると却って痛くて擦れるから思いきり締めて下さい」とせがみ、彼女自身で自縛された股間縛りでは、流石の夫君さえ大丈夫かと心配されるほど、嚴重に我れと我が身を縛り上げておられる。夫君の説明によれば、これは夫人の疼痛嗜好が昂まつてきた結果であり、十余年の慣性からであるという。真に夫人の肉体は、こうした長年の緊縛生活によって、その苦痛に充分耐え得られる鍛練が完全に出来上っているものと解される。

夫人に於ける緊縛の度合は、多くの実況写真に見られる通り、全て縛り縄が皮肉に埋没するほどの小竹一浩式ぎりぎりの緊縛なのだ



が、こうした場合、夫人の四肢や胴体などに麻痺症状が起こってこないのだろうか。生理的悪反応が、肉体の内外何れかに起こってはこないものだろうか。夢野徹男氏の投書の中に、同氏が女性を縛る場合、身体まで変色するくらい嚴重に締め上げた縄掛けが好きで、ぎりぎりに縛り上げて置いた女の、その縄を解くと身体中が麻痺しているので、一寸、女の身体に触っただけで飛び上るほどだと記されてあった。雪枝夫人の場合は果たしてどうなのだろうか。長い縛り責めを許されるや否や、直ぐさま、酒肴の仕度などに、いそしんでおられる様子なのだが。

或いは肌上に残った縛り縄の跡は、どんな具合だろうか。肌色の一時的変色は愚か、肌に深いレールのような条痕が刻み込まれているのではあるまいか。これらの諸点に就いて實際例に即した具体的など説明を小竹氏ご夫妻から承りたいと願う。

## 16

毎日を多忙のうちに活動し続けなければならぬ、われわれ社会人にとっては、悦虐プレイによって不可避免的に生ずる肉体的損傷は実生活の上で多大のマイナスである。従って

こうした結果を予め予想し、それに対する配慮に努めることは、常識的に当然過ぎることである。先にも一言した通りS・Mプレイに於いては、実際に苦痛に耐え得る限界を極めたい慾望は抱いてはいても、いざとなるとそれが出来難いのが通例である。これこそ社会生活を営む上での、現実的考慮の現われであり、これがS・Mの願望に先行するのが人間の本性の本筋だと思う。

小竹夫人が開股逆さ吊るしで十分以上の実験をされた時は、時間的に逆吊り責めの限界を得る目的で実行なされたのであった。夫人の天性的資質と、訓練によって鍛えぬかれた肉体とからすれば、その低吊るし続ければ十分以上は愚か二十分、いやそれ以上でも逆さ吊るしの苦痛に耐えぬかれたかも知れない。それにも拘らず敢て十分余りで中止されたのは、その極限を究めようとする願望に先立つ人間性、社会性の然らしめた結果であろうと解釈される。

被虐者が社会生活から全く隔絶した生活者である場合には、結果を全然顧慮することのない極端な仕置の実行も可能であるに違いない。これはプレイではないが、事実、戦前の官憲による拷問では、被虐者の肉体的損傷が

完治して蛮行の実績が消滅してしまうまで外見に触れさせなかったもので、どのように非行を訴えようにも、これを立証する手段がなかったと聞く。しかし時代は変わった。そうした残酷無惨な環境に置かれている者を現実的に求めることは最早至難のこととなっている。

山本富子夫人は飼育完成後というものは、お二人で行なう旅行やレクリエーション、S・Mプレイ以外には一切夫君以外の男女とも付き合いもできず、またしようもしないで、ひたすら奴隷妻としての生活に安住しておられる。その上、やがては専用の奴隷室建設のご計画もあると聞く。奴隷妻に徹した夫人の心根をいじらしくも尊いものと思う。仮令このように世間から隔絶したS・M生活であっても、それが深い愛情と、固い信頼に根ざした悦虐生活である限り、それを非難し糾弾すべき筋合はなからう。

それにつけても、一方では、鬱噎という二重苦を背負われ乍ら、折檻を受け続けておられるX夫人の哀話を忘れることができない。夫人がその不自由な身体で、さまざま責め道具を使つての、過酷とも思われる仕置に常時呻吟しておられるありさまを、誌上で涙して読んだのは何年か前のことであつた。そこ



には被虐者と加虐者との間にどれだけの合意が、どれほどの意志の疎通が行なわれているのであろうか。夫人が聾啞者であるという事実からの独断的推測からではあるが抵抗のない弱者に対する一方的蛮行が行なわれることはないのだろうかとか心配でたまらない。耳で聞くことも、口で物いうことも出来ない不具の身の悲しさ、苦痛を訴える手段とてもなく、両眼のみを異様に見開いて、喘ぎ苦しむ夫人の痛ましい姿が切ないまでに胸に迫る。夫人の幸せ薄い境涯に心からの同情を禁じ得

ないと同時に、右に述べた根拠のない憶測が全く事実と反した、単なる杞憂に過ぎないことを、ひたすら念じて止まない。法によって確立された筈の人権尊重の精神は、全ての社会の上に平等に適用されなければならない。これは仮に完全に飼育された奴隷妻の身の上にも当然生かされなければならぬ鉄則であると確信する。これを要することS・M生活を極限まで徹底的に追及することは、常識的家庭人や一般的社会人であるわれわれに取っては、それを希求しても及ばない

夢想の境地ではないかと思われる。最後に一言。本稿中に、かつて誌上を飾った関谷夫人はじめ多くのM女性、並びに山口兄等諸先輩になんのお断わりもなく引用させて戴いた非礼を、心からお詫びする。これら諸兄姉に関する記載内容に、万一事実に相違した箇所のある場合は、それは全て筆者の無智と誤解に基づく筆の足りなさ起因すること、全く他意のない点をも併せてご諒解戴き度い。

——(完)——



イメージ

## 「赤ちゃん責め」の構想

城崎 狂介

いささか旧聞に属するが、11PMで、赤ちゃん人形を溺愛するOLや女子学生の話を書いた。われわれ男性から見ると、人形に、ほんものの産着をさせたり、ミルクをのませたりする女性心理は、不可解千万だが、可憐なものを自分の意のままに専有しつづけたという心情は、わからぬわけでもない。

生来のSであるわたしは、生身の女性、生きた人形を専有したい。肉体のみならず、その意志、願望、羞恥、哀訴、熱涙、あらゆるものを、独占したい。それは、十分に成熟した女性を、赤ん坊にしたて、一切を自分の意のままに愛玩する「赤ちゃん責め」を措いてないというのが、わたしの夢想である。

### ○産湯

「いやん！ どうして、目かくしなんかするのよ？」

「赤ちゃんは、まだ、お目々があいてないのさ。さあ、ダッコだよ。よっこらしょッ」

「重い？」

「発育がいいねえ。どうだい、このお尻。くりくりふとって、健康優良児だぞ」

「アチチ……熱いわ、このお湯」

「文句いうんじゃありません。キレイキレイしてあげますよ……お顔がすんだら、お次はアンヨ……」

「うふん……くすぐったい！」

「こらッ、あばれたりしたら、オレの目にシ



ヤボンが入るじゃないか！ ようし、いうこ  
ときかないなら……」

「あッ、また縛るの。イヤ、イヤ、そんなに  
脚ひろげちゃ！」

「ふうむ……この赤ちゃんは、ちょっと発育  
がよすぎるようだな」

「あ……ああ!!」

「いい子だから、おとなにするんだよ。ホラ  
カミソリを持ってるんだから、あぶないじゃ  
ないか！ あ、こんなところにも、のこってた  
……さあ、キレイキレイにして、生まれたま  
んまの赤ちゃんにしてあげましょうね……」  
「イ……イ……」

### ○哺乳瓶

「こら、どうしてもものまないのか！」

「ゆるして……あなた……」

「さ、いい子だから、アーンして、アーン。  
このミルク、お父さんの身体からの出たてな  
んだから、とっても栄養があるよ。オッパイ  
のんで、大きく大きく、大きくなあれ！」

「あなたッ、く、苦しい！」

「あんまりダダこねると、洗濯バサミだけじ  
やすまさないよ。鼻の中に、綿つめちゃうか  
らね……ホーラ、ちゃんと、のめるじゃない  
か」

「うふッ……うふッ……うふあッ！」

「おっとっと！ 味わいながら、ゆっくりの  
むんだよ。どうだい、おいしいだろ……ハハ

ハ……ヒマシ油もたっぷり入れておいたから  
今日のミルクは、特別おいしいはずだよ」

「たす……たすけて！」

### ○浣腸

「おやまあ、おしめカバーまでよごして……  
いつまでたっても、世話ばかりかけるんだ  
ね、この子は……」

「いじわるウ……あんまりヒマシ油のませる  
もんだから、お腹が痛くなっちゃった」

「おうおう、そりゃあ、いかん。ポンポンこ  
わしたら、お浣腸しなくちゃね」

「いいの、いいの、お腹いたくない！」

「嘘ついてもだめ！ お尻をキレイキレイし  
たら、お浣腸ですよ。エエト、アルコールに  
……綿棒はどだったかなあ」

「ああ、あなたア……だめだってば、そんな  
のひどいわ……」

「消毒がすんだら、クリームも、たくさん塗  
ってあげようね。この子は、イタイ、イタイ  
って、すぐ泣くんだから……」

「いたい！」

「ホラ、云ってるしりからそれだ。こんなち  
っぱけなイチジク浣腸、痛くもかゆくもある  
もんか。泣きベソをかけた罰にこんどはガラ  
スのお浣腸……」

「うーん、うーん」

「こら、まだ早い！」

「だってえ……さっき、くだしたばかりだか

ら……あ、ああ!! おしめ、早くおしめをち  
ようだい！」

「がまんしなきゃだめ！ このまんま、五分  
間、じっとしてなさい」

「だめよ……がまん……できない」

「ようし、そんなら、これで栓をしてと……」

「ああん、なによ、それ？」

「赤ちゃんの好きな、おしゃぶりさ」

「あ、駄目。だめだってば……」

### ○乳母車

「寒いかい？」

「ううん……ちっとも……」

「さっき、どこかの小母さんが、中をのぞい  
ていったよ。こんな箱みたいな乳母車に、赤  
ちゃんがのせられて、夜中の公園に放り出さ  
れてちゃ、すてごとまちがえるだろうな」

「あたし、赤ちゃんにみえる？」

「ハハハ……特大にはちがいないけど、赤ち  
やんの帽子かぶって、この箱に入ってりゃあ  
どうみたって、赤ちゃんさ。哺乳瓶に、お人  
形さんまで一緒だから」

「お星さまがきれいよ、あなた……」

「子守うたでも、うたってあげようか？」

「うん」

「人にみられても、羞かしくない？」

「ちっとも……だって、あたし、あなたのか  
わいい赤ちゃんでいたい、これから、ず  
ーッと……」

——THE END——



## 女責め図絵の系譜

## 女体拷問具のいろいろ

文と絵

南彦造



私が、まだ子供の頃——近所に可憐な少女がいた。その家は中流のサラリーマンの家庭であったが、彼女の母親が若くして亡くなり、まだ三十才代の父親は馴染みの中年増の芸者を、後妻に迎えた。その頃から彼女の不幸な生活が始まった。彼女は、まだ小学校の六年生だったが、体格の發育はよく、所謂——第二性徴期になっており、私がかい間、見ただけでも、はっきりと分かるくらい豊かに胸を押し出していた。

私は子供ながらに、彼女のその美しさの虜になっていた。しかし、どうしたことか——彼女の新しい母親は、彼女に憎しみの拷問を加えた。最初のうちは、叩いたり、抓ったり、引っ搔いたり——の軽い加え方だったが、次第に火箸で叩くようになり、

毛抜きで先で皮膚をはさむようになり、簪の柄で突くように変わった。それから後は、兵子帯で柱に縛りつけたり手足を縛った俚——動けぬようにして置いてから、様々な苦痛を加えていたのを覚えてゐる。

私は、彼女が何の理由で叩かれ、苦しめられなければならないのか——どうしても分からなかったが、彼女が美しい少女だと思っていたし、ピンクに燃える健康そうな肌がピチピチしていて、見飽きなかった。しかも、その肌も露わに彼女が七転八倒する様は、見ものだった。

後妻は、後妻で、そんな彼女の肌を惜しげもなく剥き出しにして叩くものだから、近所の悪童連は面白がって覗きに行ったものであった。素手では痛いので、手頃な物を掴んでは



叩く方法とか——抓るやり方は、誰でも簡単に思いつく拷問の方法で、それに飽きると、後妻は、次々と拷問の方法を変えていたように、私は、その飽くなき責め方に恐れをなした。乍らも、じっと見つめていたのを想い出す。

私は女の責め図絵を想い浮かべると——決まって想定するのは、子供の頃——よく眺めに行った彼女の苦痛に歪んだ顔とか、恐怖にパツクリと見ひらいた両目。はてはバタつく両足のたたずまい——などであった。

それは、想像を絶した女体の構図であり、女の号泣であった。女体とは、かくも敏感に反応し、美醜を越え、神経に反射し、のけぞり反転し、含羞もなく、泣き叫ぶものなのか——そして拷問具は、最も原始的な人間の手指によるもの、物差、簪、火箸など身近なものばかりだったが——日用品が、いとも簡単に拷問具化する魔術のような妙は、誰しも一度は体験する幼い頃の恐怖であろう。

○

私は横浜で小学二年生だった頃、左の顎下に拳大の腫瘍が出来た。キヤラメルを食べすぎで、臼歯から化膿菌が歯ぐきに侵入したためだ——とは、医院の診断で判ったことなのだが、早速、手術することになった。いまの

ように麻酔薬の発達していなかった昭和初期の頃だったので、局部麻酔が効かず、術中の苦痛は、非常なものだった。私は再三に亘って、看護婦さんを引っ掻いたり蹴ったりしてバンドで締めつけられながらも抵抗をしたが多勢に無勢の弱さで、どうにも暴れられず、結局は悲鳴をあげながら、切開手術も無事終わった。

だが、それからの数週間が大変な苦痛地獄の連続で、私は通院治療を嫌って、しばしば母を悩ませたものだ。切り傷の部分からガーゼを挿し入れ、翌日には、取り出して、新しい消毒ガーゼに替えるのである。入れる時はまだよいとして、取り出す時になると、ピツタリと附着してしまっているの痛くて堪らないのだが、看護婦さんたちは、ビジネスでもあるし、また他人の苦痛だから、というわけでもなからうが、情容赦なくピンセットで引き剥がすのだった。

大の男でも泣き叫ぶ始末だから、子供の私など、とても我慢なんか、出来たものではない。思いきり、泣いたり喚いたり引っ掻いたりで孤軍奮闘するのだが、忽ち、手取り足どり手術台に押しつけられ、遅い看護婦さんの腋の下で、黄色い悲鳴をあげ始める。

それが毎日のことなのだから自然、馴れてくる。そのうちに看護婦さんの体臭やら、部厚い胸の膨みとか、体の遅しさとかがジカに私の未完成な官能を刺激するようになった。私は次第に、担当の看護婦さんを憎しみながらも、その甘酸っぱい体臭に憧れるようになり、彼女の重圧で手術台に押し潰されている間を、温かい倅せだと感じるようになり、苦痛の瞬間になると、彼女に確かりと抱きついていたのを想い出す。

その彼女とも、いよいよ別れる時が来た。退院の日、彼女は私を見送りニコリと美しく微笑んでくれた。そこには、やはり看護婦さんとしての役目を果たした満足感があったのであろう。

私の学友で医者を開業している者がいる。彼は「外科」を専攻しなかったが、その述懐によると、医学にたずさわる者は多かれ少なかれサディズムの傾向があるというが、他人の苦痛に無関心になれない者は、外科とか産婦人科医には不適當だそうで、外科手術の器具とか、産婦人科の検診具が、どう見ても、中世紀代の拷問具に見えて仕方がない——特に、産婦人科のものは「魔女裁判」に於ける女体用拷問具にも等しいので、やり切れなか



ったのだ——ということである。

私も、かつて新聞社主催の『オランダ医学渡来記念展』なるものを東京のKデパートで見学したことがあるが、その展示品の中にシーボルトが使ったという『外科器具』に興味を持った。器具そのものは、現在の小中学生用の『解剖具』にも等しい幼稚なものだったが、そんなチャチ性よりも、その原始的な形態の武骨さ——逞しいほどの強靱さ——兇器的な鋭利さ——などを眺めていると、私はつい、器具の洗礼をうけたであろう——当時の貴婦人たちの様々な姿体を想像していた。現在のようにスマートで、繊細な形態と、金属メッキの効いたピカピカした冷徹な感じのする器具とは全く違って、錆ついて赤い鉄製の材質まるだしの形態——恐らくは鍛冶屋で製造したであろう鍛錬された鉄質の太くて逞しい形態は、当時の拷問具屋の製造になる内助的遺産の片鱗ではなかったか——とさえ想像された。

切創刀、ピンセット、鉤針、鉗子——などなど、人間の文明は進んでも、人体そのものが、原始の俎で変わらぬ限り、外科用具も変わらぬものだ——と、変に感心もしたものだ。それは拷問具にも繋がるものだと思う。

人間と、それにまつわる官能が原始の俎に

同じである限り、医療器具とか拷問器具の形態も、永久に変わらぬものだ。しかも、より便利に、より専門的に改良されて来たに過ぎない。したがって機能の根本原則には変わりはないものだ。医療器具の製造者は、医師にとって、より便宜なもの、使い易いものに改造しようとしているけれど、同時に患者にとって、より安楽に手術とか検診が出来るよう細心の注意をはらっているものなのだ。

しかし、どんなに文化的になっても、人間が生きている限り、手術時の苦痛からは解放されまい。それだけに拷問具的な概念から離れることは出来まいと思うのである。

○

余談になるが——私は『終戦時に於ける在満邦人の受難記』をコレクトしていた二十数年前——特に婦女子に関する受難の告白をメモ取りした。

紹介されると当の婦人に会うのだが——痛ましい事実だけに、なかなか真実を語ってくれない。殊に遭難した時に「性的」な面で非常に苛酷な、仕打ちをされている場合は特に——女性としての羞恥心と本能的な自己嫌悪に襲われるらしいのだ。

男から見れば大変、興味深い話なのだが、

当の被害者にとっては語り得ない辱かしさが先に走ってしまうのだろう。しかし、雑談しているうちに次第に心のつながりが出来て、ポツリポツリ話し出してくれるようになったものだ。

その一つであるが、ある北満での僻地で起こった、妙な受難者の告白がある。

それはソ満国境に近いハイラル地区の鉄道沿線で、南下中の婦女子の群れがソ連軍の追及を受けた。満人の知らせで捕まった老幼婦女子は鉄路附近の空地に珠数つなぎとなり、順番(?)を待っていた。所持品の検査に続いて起こる女性ならではの受難を、である。

しかし、その日のソ連兵士は、狼のように牙をむいて即座に飛び掛かって来るようなことはしなかった。その代り——一人ずつ近くの治療所跡の日本家屋に連れ去るのだ。初めのうちは人道的な処遇の現われと安堵していた婦女子だったが、帰されてくる仲間たちは苦痛に顔を歪め、両肢にどすぐろい血液を点々とたらしめているのだった。しかも黙して何も語らない。じっと苦痛を我慢している様子なのであった。老女は割に早く帰って来るのだが、若い女性ほど、帰されるまでの時間が



長いのであった。

その診療所跡というのが、もともと日本人医師が開業していた『全科』の診療所だった建物で、敗戦のドサクサで人間だけが逃げて薬品も器具も検診台もすべて、そのまま残されていった。婦女子たちは、その診察室に入ると、異音同音に悲痛な叫び声をあげた。他の女たちが覗こうにも一人宛の連れ込みだから当事者でない限り現場の模様は全く分からないのだ。

被害者の一人だった彼女の告白では、熊のようなソ連兵士に寄ってたかって、手術台に押し上げられ、医療器具の洗礼に見舞われたという。どんな方法で——どんな器具を?——は公開を憚る部分が多いので、割愛させて頂くが——賢明な読者諸君なら想像もつくのではなからうか。

あの無気味な医科用手術器具の数々や、産婦科用の検診具の露骨な形態。女体に合致するように拵えた、まことに便利な器具も、使用方によっては、苛酷な拷問具化することも可能な機能の恐ろしさに、戦慄と、ある種の憧憬を禁じ得ないのは私ばかりではあるまい。

○

拷問具の連想が、婦女子に限られてしまっ

たようだが、無残絵的に想像する拷問に関する限り、男は女の場合より、本来、興味が薄いものだ。

それは性のなりたちが男性は攻撃的であり女性を受動的なのだからだ。時にはその逆もあろうが、そこには不思議なムードがなりたち、甘美な倒錯的男責め図絵を展開する。

しかし常人は、倒錯的な責め図を欲ばないものだ。おおよその好事家は「山賊に襲われる女将」とか「奉行所の女囚責め」はては、「連合軍女スパイとゲペウとの対決」など、決まって美しい女体に対する醜い男たちの加える拷問図を好むものなのだ。そして、その拷問具の種々相も、変幻万化——その日、その時により違ふし、考案者の性格、変質振りによっても多分に相違点のあるものだ。

友人の一人に、その方面のアイデアマンがいた。彼は常に愛人を喜ばす方法に熱心であった。彼のアイデアは愛人の弱点を刺戟する用具の考案であった。不思議なことに、女性の快美点は痛苦点と一致するものだ——という。

ある夜——彼は、ある刷毛を造っていた。その刷毛というのは伸縮自由で、濡れても乾いても変化のない、トカゲの膀胱をなめした

スキン（なめし期間は八秘<sup>まる</sup>とか）の周囲に雄馬の尻尾を数百本も植えつけた円い皮筒を造ることだった。彼は根気よく一本一本、厳選した馬の尻尾を、丹念にニカワでその円筒に巻きつけるように貼りつけて、その先端は計算された寸法だけを残して鋭利な鋏で切断していくのであった。

そんな奇抜な拷問具で、愛人を喜ばせる彼は、やっぱり正常な異常人といわなければならぬのであろうか。女体を責めるのに快美的な責め具を使う——ユーモラスな男性——もし、このような刑事が存在したら、女囚の責め図絵にも陰惨さがなく、愉快な構図で描けるのではないかと思う。そうした意味で、想い出すのは、明治の広沢参議殺し事件に於ける『愛妾かねの拷問図』である。

このかねという美女の受難の一件は有名であるが、当時の警視庁では、生証人である彼女の証言を求めたが、調べに対してかねは全く知らないことだ——といった。そうなれば当時のことだ、決まって酷い拷問図が展開するのだった。むつつりと厳めしい顔だちの上級警吏の前で、素裸に剥かれた女体が、あられもない格好でも責めたてられるのだ。



男というものは、得てして他人の女には酷い拷問を加えたがるものだが、警吏とて一般の人間と得てして変わらないものであるうと思われる。

かねを責めるのに手段を選ばないつもりだったろうが、かねは少なくとも重臣との関係を持つ貴婦人なのだ。普通の女囚とは違うから、当然のように上司からの「注意書」が出ていた。

——身体を毀損せぬよう。苛酷に責めるも、後日の問題とならぬよう……云々。

といったものであった。当事者の警吏は困惑した。最初のうちは——天井に吊り上げ、尻を竹べらなどで叩いていたが、尻は腫れる——充血して、雪膚は茹で蛸のように真赤になる——だが、かねは「ヒイヒイ」泣くだけである。そうなれば、ますます興にのって責め叩くのが警吏の常識であった。

現代とは違うから、警視庁の裏庭で松の木に吊るされた美女が、尻や背中をピシリと叩かれて、泣き喚いている。見るは法悦、聴かざるは莫迦……とばかりに、よけいな者まで集まって見学する騒ぎに、もて余した上司は何とか深く静かに責めたてる方法を考えざるを得なくなった。

それが「くすぐり責め」であった。

警吏の考え出した「はりつけ柱」もどきの「緊縛台」に、かねは豊満な裸体を大の字なりに縛りつけられた。

女体だけに、流石に両足を拡げて縛るようなことはしない。貧賤の女囚ならともかく、参議の愛妾としての体面だけは保つように心掛けられたが、「それッ！」という命令いか、数人の警吏は、思い思いに女の弱点を、グイグイと擦り始める。

女は俄に暴れ出し、唇から泡まで吹いて狂い始め、笑いに笑う——

「それッ、もっとやれッ」と上司は性急に命ずる。警吏も必死だ。命令のままに擦りつづける。

かねの笑いが途切れ途切になると、動物的な喚声に変わり、続いて号泣となり、やがて声も嘎れて喘ぐだけとなり、美しい顔はチアノーゼを起こし、呼吸困難を訴え始めたことであろう。

大仰な時代ではあった。考え方によってはユーモラスな時代であったともいえよう。髭を八の字にのばした、しかめ面の大の男が、数人して美貌の元芸者を押えつけ「それ、白状しろ！」と一生懸命、汗を流して、くすぐ

り続けているのだから——はたで見ている者も、妙におかしくて変にくすぐったくなったに違いない。

私の知る処では、戦前の刑事部屋には手製の拷問具が、いくらかもあり、たとえば、「擦り責め」には「歯ブラシ」とか「亀の子タワシ」「書初め用の太い筆」「日本画用の細い面相筆」「糊刷毛」——など、何でも揃えてあった(?)から、女囚の擦り法も想像がつくというものだ。

そう思ってみるせいが、拷問具の範囲は広く、なお歴史をたどれば、話題は尽きまい。欧米では、バラの小枝を利用したり、鋭い猫の舌を応用したりもしたというが、日本では、それと似たような方法として、犬のチンの舌を利用した、江戸城大奥の私刑(りんち)などがあった。女体のすみずみまで知り尽した、女同志の責め方だけに凄まじい限りであった——と伝えられている。

昆虫や動物の習性とか、嗜好を利用する方法は、昔から盛んに使われていた。本能的な恐怖心を起こさせる単純なものから、噛みつかせたり、肉体の一部に住み込ませ(?)たりする方法も多く行なわれた。

有名な加賀騒動の『浅尾の蛇責め』などは



よくよく考えたもので、浅尾という女は、よほどの確かり者が豪傑だったから、あんな酷い方法でもしない限り、どうにもならなかったであろうかと思われる。また浅尾という女は我慢強かったが、きっと蛇ぎらいだったのではなからうか？

それにしても、蛇の習性を利用した女責めの方法には、考案者の変質的な好みも、うかがえて面白い。穴という穴から侵入するであろう蛇が、胃や腸や膀胱など他人の見えない内部を抉り、破り、裂き、呼吸困難から硬膜粘膜、皮膚を喰い破り、遂には体外に排出されるまでの経過を——考案者は興味津々たる想いで描き、その成果を夢見たに違いない。特権者というものは、何時の時代でも他人の女の迷惑など、おかまいなしに自分の醜惡な欲望を達成しようとするものだ。

映画や芝居などには、倫理規定があり表現の自由が束縛されているので、綺麗ごととして「女の責め場面」などは描かれているが、それは男性の劣情を刺戟したり実行させたりしないためであるという。

とすれば、如何に『女の責め』というものが男にとって魅力的であり、セックスを刺戟するか(?)は語るまでもあるまい。

従って、実際の浅尾の責め場——その苦しさの限度は酷いものであり、殆ど正視するに耐えなかった状態であつたろうことは頷かれるのだ。

かくして、浅尾は死んだが、彼女の死は、その拷問具の奇抜さと、非道な考案者の卓抜なるアイデアの故に、後世に残るほど有名になった。

## ○

西欧諸国の中世紀には、これとよく似た方法として「ネズミ」が、よく使われた。文獻によれば、豊満な女体の臍の上に、大きな壺を口を下にしてかぶせ——その中に、歯牙の鋭い大きなネズミを二、三匹、入れる。

ネズミは暗黒の視界と空腹と恐怖のため、逃れようと臍を掘り始める。ネズミの危急本能によって掘り始めるのだ。ゴマを取っただけでも腹痛を訴える者があるほどの敏感な場所を、鋭い歯牙で喰い破られるのだから、苦痛地獄に違いない。

洋の東西を問わず責めのアイデアマンの脳味噌の素晴らしさに驚嘆せざるを得ない。

大映映画『兵隊やくざ』（勝新太郎主演）で有名になった、戦場慰安婦の「へそ酒」などは、酒を女の臍の穴の中に注ぎ込み、数人

で、チヨビリ、チヨビリ……とすすり合うだけなのだが……人間の舌の先と微妙な唇の接吻などをし乍ら、歯刷毛やブラシの代りに舌を使って、女の臍の穴をアルコール消毒するようなものだから、むしろ、女にとっては快楽であり「樂り責め」にあっているようなもの——クッククック……と野鳩のように呻き抵抗するだけ。場合によっては男は、女の声聴くだけで、ある場面のエクスタシーを連想出来るというもの——残酷さはない。

こつてりとしたビフテキとおさしみの差で淡泊な美食を好む日本人らしい軽快な女責めの方法で、愉快だ。

思ってみれば、直接人間が、人間の弱点を狙って責める——とか、客観的に眺めたいと思う、ずるい心理から、他の動物を利用する方法など——女体責めの仕方には千差万別、タネが尽きないと思うのだが、現代のように極度に機械文明の発達した時代ともなれば、「カーセックス」などと騒がれるように、文明の利器を応用して、さまざまな拷問具が、時と場所をえらばず存在するようになった。

女体を吊り上げるのにクレーン車を利用して屠場の牛馬よろしく簡単に吊り上げる。ブルトローザーで押し潰すのも簡単だ。人間の首



を胴から引き離すのにも動力モーターを使ったら、ウナギの首を引き裂く板前より簡単に処理出来る。そんな時代だ。

何時だったか、東京の素晴しく巨大な牛馬の屠場を見学したことがあったが、共同浴場のように、周囲をタイル貼りめぐらされた四角四面の箱のような部屋に、裸馬が手綱をとられて追い込まれると、野球のバットの先に五寸釘を打ちつけたような形のキネで、いきなり馬の眉間の急所を叩く——あっけなくドサリと重量そのものの響きをたてて巨大な肉の塊が、ぶっ倒れる。すかさず、鉄のかなり太い針金を、叩かれて穴のあいた眉間に挿し込む——グイグイ脳味噌の中を突き廻しておいて、更に押し込んで行く。針金は、馬の背骨の中を通り、肛門から顔を出す。その瞬間まで、倒れて失神した馬の神経は生きていたので前後の四本肢を、ばたつかして空しく宙を蹴っている。

神経を、すっかり殺さぬうちに解剖でもしようものなら、あのデカイ後肢で人間なんか蹴殺されて終わっちゃうかもしれないのだ。その危険から逃れるために針金で失神馬の神経を、すっかり殺してから仕事に掛かるのだ。

あの人間の何倍もある、牛馬の、あっけな

い死。その倒れた馬の両肢を左右に出来るだけ拡げておいて、牛刀で円々とした太鼓腹の上の方から下腹部の方へ向かって、ズバリズバリと切り開いて行く。

湯気をたてて血漿が奔出し、内臓がドサリとタイルの床に落ちる。皮を剥ぎ、胴体を真二つに引き裂く。四本の足首だけは関節の先の方から切断し、それがみるみる天井に吊り上がっていく。頭部の方も咽喉の辺りから適当に切り取られ、枝肉となった生肉は冷蔵庫行きだ。

検査にあたる獣医師の話では——牛よりも馬のほうが神経が過敏で、殺されるのを知って、体中の筋肉がピクピク恐怖に震えているものだ——という。なかには失禁して、尿を水道のような勢いでたれ流したり、クソを排泄したりするのがあると述べた。

僅かな屠殺数だが、羊にいたっては余計にみじめなもので、羊は眉間の骨が硬いから、キネは使わずに、首を抱いて頸動脈を、いきなり切断してしまうのだ。

いずれにしても牛馬羊だからよいようなものの、人間で、しかも女体だったら……と想像、ゾーッとする反面、奇妙に感慨無量である。

殷のチュウ王や、関白秀次が、好んで行なった妊婦の腹裂きや、睾丸挾出の刑罰など、牛馬の屠場もどきの惨酷な仕打ちが、古来、人間の世界にも多かったが、想ってみれば人間も高等動物なれば、いろいろ考え出すのも止むを得まいと思う。

大量殺戮の場である戦争ともなれば、人間の醜悪さが思い切り曝け出され、知能をかたむけた殺戮行為をあえて行なうのだ。そこには文明を忘れた動物的な暴虐だけが露骨に展開されて、神を怖れない。

ベトナム戦争、然り。日夜をこめて人間同志の屠場が展開されているのだ。

私も戦場の体験はあり、戦場での兵士の無軌道な暴虐の現実も直視して来た。

ある兵士は戦うよりは女性を求めて、部落をさまよい、婦女子の隠されていそうな場所ばかりを狙い攻撃を加えていた。しかも、発見するや、鬼畜にも等しいサディストに変貌する。故国に住む自分の妻や娘にも似た、異国の婦女子を赤裸に剥ぎ、号泣し、許しを乞う女の乳房を切断し、内臓を挾去する——などといった凄まじい行為さえも、あえて辞さないのだった。

敵国の兵たちも同じく邦人婦女子に、忍び



難い恥辱を加えた。それもすべて、戦争という極限の世界が生んだハレンチ的所産なのだから仕方がないのだ——と片付けられてしまふ。

太平洋戦争フィリッピン戦線の隠された話だが、バギオの山中で敗走中の日本軍従軍看護婦が水を求めて谷川のせせらぎに出た処をアメリカ軍兵士に捕まり、赤裸に剥かれ、大木を背に両手足を逆に拡げた形で、縛りつけられたのだ。そして、兵たちは、もう、これ以上の表現は出来ないような、サディズムの限りを尽した後、谷間に捨てた。

女に対する拷問——その原始的で、常に生々しいのが、「女体刑罰」だが、何の罪もない善良な婦女子が、拷問以上の拷問を受ける戦争とは憎みても余りある人類の罪悪である

と思う。

女体拷問具のいろいろに就いて——思い当たるままに雑然と書きならべてしまったが、私は「女責め」の図絵を描く時に、決まって新しい趣好を考案しようとしてしまう。映画や絵画の資料などを、つとめて見るように心掛ける。

が、なかなか変わった拷問具に、ぶつからないのだが、二、三の記憶をたどってみれば同じ「足枷」にしても、日本古来のものはかなり実用本位であり、西洋のそれは、芸術的だ。バターとゴマ油の差違のようなもので、日本のは、何らの扮飾も見られないが、西洋のは、男たちが眺めて楽しむというような処が多分にある。

○

従って、その道具には、凝った、なかなか見捨てがたい趣好のものが多し。

女の指を締めつける方法にしても、日本の特高が、好んでした、鉛筆など、その場にあった筆記具を、女の指の間に挟んでぐいっと握り、締めつけたり捻ったりするような方法でも西洋の場合だったら「魔女裁判」の時などに見られる、万力のような木挟みを使い、ラセン状のネジをクルクルと回転すれば、指は次第に圧迫されて、悲鳴をあげる結果となる——。

「水責め」また然り。日本では、頭から井戸水を手桶で汲みとり、ザブリザブリとかけ、寒さや羞恥心に、アピールしようとするのだが、西洋の場合は奇抜で、長い柱の端に女性を縛りつけて一方の端に男が乗り人間の重みでギッタンバッタンと上下運動を川べりの衆人環視の中に催す。

数えあげれば、キリのない東西の差違である。

拷問具の研究——それは女体ある限り、永久に続けられ、タネも尽きないのではなからうか。

## 天星社刊

### △限定版グラビア写真集▽

### 在庫案内

山原清子「刺青の魅力を探ぐる」一部一〇〇〇円（送共）略号「美7」

◎刺青の女王の魅力を決り出し、その美しさを最高度に発揮した緊縛フォト結集版。

M写真集「女王様に飼育される日々」一部一〇五〇円（送共）略号「M特」

◎男性が色々の女王様に奉仕し、飼育される生態のかずかずを網羅した写真資料。

◎以上の写真集は一般の書店にては一切販売しておりませんから、直接、大阪市阿倍野郵便局私書函第十四号天星社に代金同封の上、お申込み下さるようお願いします。





☆晴着奇譚・大地に散る乙女桜☆

無

残

の

刑

牧

高

志

(カットも)

「どうして？」

「というのは、今の処、どうも判つきりした経路で入手した品物でもなさそうだし、ただ何とかブームに乗って、珍しい掘出し物があるよと、そそのかされ、そもそも購入した、

いわば闇の商品なのだから、真偽の根拠は甚だ以て薄いんだ」

「でも一通り筋が通って、これだけ鮮明なら真偽なんて、どうだっていいじゃありませんか」

「まア、そうともいえる。ただ、あとで気付いたんだけど、この古典的古物フィルムには

一筆、但書が添えてある。日本語に意識すると、つまり、こうなんだ。

一、本映画は如何なる理由があろうとも、諸外国へ輸出することを禁ずる。

一、上映に当たっては万全の慎重を期し、いやしくも営業のための利用は堅く禁ずる。

一、被写体となった二十数名の亡き日本女性に対しては、制作者一同、深甚なる弔意を表する。

…だから、見方に依っては初めから真っ赤な作為的な偽物であるとも受け取れる」

「色付の画面で、ともかく何語とも判らぬ音が出るのは、少し眉唾ものかも知れないけど

「とっても凄いわネ。怖かったワ。背すじが、まだ、むずむずして……。だけど、これ本当なのか知ら？ どうなの？ ねえったら……」

「どうも満更、嘘でもなさそうだね……かといつて一から十まで、すべて真実、偽りなしとも断定出来ないんだ」



それじゃ、一体、誰が撮ったンでしょうねえ？」

「初めのタイトルに一寸、出てくる羅紗商の——外国人とあるだけで名前は伏せてあり、当時シルクロードを行ったり来たりしていた国際商人某氏らしい。フィルムサイズは、あとで今式に直したものだろ」

「青空が映って風塵がビューンと舞い上るところを見ると、すっかり秋ね。映画のあの方方は、ひどく暗くなって、とうとう雨が降り出して来たようだけど……白昼、外人なら無条件で撮影を許可したンでしょうねえ」

「きつとそうだろう。当の執行人だって多少金銭的な下心があったかも知れない。当時は何といっても殺伐だったからね。だから映画の初めの方のカット・シーンは、瓦礫の中から急造作りの収容所が見えて、ふだん着を着た日本の女のひとが洗濯物を干す風景もスナップ的に撮られている。」

数え切れない程の白い肌着や真赤な腰巻がカラーで、へんぼんと纏っているのは、寧ろ哀れだが、それから矢つぎ早に数カット、我軍大勝利だの、日本敗残などのポスターが連続映って、そのあと、いきなり赤煉瓦の収容所の一部が、今でいうズーム式にクローズア

ップし、門の扉がギイッと開くと、二十名余りの着飾った日本女性が、ぞろぞろと出て来る……」

「あたしね、この場面は同性でも、ひどくエクスサイト物と思ったワ。第一、縛られているっていう緊縛感よりも、着物の色彩の方が圧倒的ね。思い思いの胸高帯で、皆んな観念して両腕を後ろに回わし、長い振袖と白足袋がとてまた印象的……死出の旅路に出るって感じは少しもないのね。丸でロケーションにでも行くような……でも最後の二、三人の女のひとの顔は、どれも哀願に満ちた眼差しでこちらの方を、じっと見ていたワ」

「広い処だから、処分とあらば何処でもよさそうなのに、どうも外にトラックで運ばれたらしいネ。何マイルか離れた城外某といっているが、録音が悪くてよく聴き取れない。そこに急拵えながら特設の処刑場を造ったのだろう。風のひどく吹く日と見えて、日本の女のひと達は、例によって裳裾が大分、気になったらしい。」

當時は、こんな出先でも、お腰の下には、何も穿いていなかったから、和服で、しかも白足袋一つになってトラックに乗せられたり降ろされたりするたびに、裾が無情に開くン

だ。それを外国製カメラは、すかさず見事にとらえている」

「珍しいからでしょ。きつと、浮世絵の素養がカメラマンにあったのよ。ズバリ本番でリハーサルも効かぬのに、根気よく長襦袢から赤いお腰まで、それも一人、二人でなく殆ど全員を、オーバーラップのように念入りに撮っているのね。今でも、それが生きてる見たい……」

「まア、写された幕末」じゃなくて、写された敗残の日本」という処だろう。トラックが街角を曲ると、現地人がワアワアいって一斉に追いついてくる処がある。憎しみか好奇心か判らぬが、中には小石をひろって投げる奴もいた。この数カットは、執行人の車に便乗して撮ったものに違いない。」

そうこうするうちに、日本女性を乗せた大型トラックは城門からいったん外に出て、高い丘の上に停まった。真黄色くカチカチに乾燥した土と、真青で抜けるような空の色はコントラストが、どぎつくて、寧ろ凄惨なフイーリングだね」

「それから一寸ばかり徒歩で歩かされて、待ち受けていた観衆のすぐそばを通り、荒っぽい凸凹した織り方の蓑がズラリと一面に敷い



である処まで、ぞろぞろと連れて行かれる。さしずめ、青天井下の控え室といったところなのね。ここで一人一人、縄を解かれ、一同に弁当が配られる。今更、食えといわれたって食べられるもんじゃないワ。それを司令官見たいな小さい肥満男が強要的に、あちこち威しているのが、ロングショットで一寸、映る……でも、そんなことより、そんな、やっぱり日本女性なのね。乱れた裾の間から赤い長襦袢やら、お腰などが見えているのを、いそいで、かくしたり、帯揚げの緩みや、ほつれた髪の毛を直したりして……もう間もなく刑の執行が始まろうというのに……」

「しかし、ここが世にいうカメラマンの泣きどころさ。ここで下手に憐憫の余り、持ち前のカメラを放棄したり自分自身、逃避したりすると、九仞の功を一簣に欠いて、この希少価値的、動く文献は未来永劫、絶対に産まれないことになる。」

だから彼は、想像以上に一ふん張り頑張ったに違いない。恐らく身心共に半狂乱に近い——つまり、憑かれた鬼にでもなったつもりで、撮影機を縦横に駆使したのじゃないかと思う。

誠に惜しいんだけど、これから先は画面が

ブレている場面が割方、多いのが何よりも、その証拠だ。してみると、初めから演出されたドラマティックな、刑場物では決してない……ということにもなる」

「いよいよ、時間が来たようだワ……少し影が長くなって、釣瓶落としの心持ち陽が西に傾きかけた頃のように……午後二時過ぎか知らねえ。あの男よ、ホラ、また出て来たでしよう。今度は青っぽい名簿見たいなものを、おッ披ろげ、一人一人、点呼が始まったワ……怪しげな日本語で職業、姓名、年齢などを確認しているようだけど、風に流されて声が、よく聴き取れないのね。浅岡静子、ホテル事務員、二十二才……と音解？ できるのが精一杯……」

「途中で、また映画を繰り返し映写するのは少々おとなげないが、納得がいくまで、まアやってみよう。ひとことに、あの男、この男というけどさ、ホラ、あの先生がいないことには、この映画の場面は一向に進行しないんだよ。してみると彼自身、甚だ貴重な存在でもある、この映画のポイントでもある。この世界一憎い男は、プロフィールが原始人にそっくりで、しかも眉毛濃く、目が千両だ。だから、振袖のままや赤い腰巻一つで、壕の中へ

蹴込まれていく女の胴体を、みじろぎもせずじっと眼を据えて眺めている恰好なんぞは、正直いって閻魔大王以上の貫録があるというものさ」

「でも、その閻魔大王がここでは（直々の）指揮官兼処刑の司令官なのでしょ。だから人一倍、無茶苦茶に威張り散らして、まるで虫けらのように日本婦人を取り扱っている……御覧なさい、あんなに怖れおののいて、ふるえている日本女性の前で、平気で鞭のようなものを振りかざして、何か一発、宣告してるじゃありませんか。」

つまり諸嬢に対し、残念ながら処刑の時刻が遂に来たといっているみたい。その形ばかりの宣告が終わると、指揮官直属の介添役員が二人、あんな風に、つかつかと前に出て来て素早く日本婦人の背後に回り、いったん蓮の上へ坐った女を、その場で一人宛、立たせて介添役の男の一人が、まず女の両腕を掴んで後ろに回わし両手首を重ねると、別の役男が麻縄のようなもので両手首を、しかと縛り、その縄尻を両二の腕にひっかけて三角形に締めあげ、次に別の麻縄で胸部の前は丁度帯揚げの真上から、後ろは、ふくら雀結びに結んだ帯の両羽根のすぐ下あたりにかけて、



二巻きないし三巻き締め上げて胸を縛って、その縄尻を両手首の縄とからめて結んだ……ようね。だから、どの娘さんも若妻も両手がひとりでに上へ上へと捻じあがったような恰好にされ、一つ一つ、縄で縛り上げられていく間中、さも苦痛に耐えられぬような顔が画面一杯に映る……どうして、そんなにまで、きつく固く縛りあげるンでしょうねえ？」

「長い歲月、日本人が男女共に威張りくさっていたからさ。土着現住民である彼等は、その罪の償いとして当然、男のすっかりいなくなつた日本人街から、敵視する日本女性ばかりを丹念に探し出し、ひっ捕え、人身御供的に充分、納得させ、刑場で思う存分、弄り物にしてやるんだッ、に対し、それで一切が済むことなら、あたし達、日本女性は、ここで骨も折れる位、縛りあげられ、その挙句に首を斬られ、紅槍で滅多突きに突かれようともぐちはおろか不平不満は一切、申し上げません。どうぞ罪の償いとして、存分にご成敗なさいませ……の一語に尽きるだろうと僕は思うんだ。

事実、この写された処刑風景は身も心も動転して泣き叫ぶといったシーンは、ほとんど見られず、寧ろ自虐的に大衆の面前において

身を苛まれることに喜びを感じるといふ、諦観的な雰囲気の方が強かった。もっとも、いざとなれば多少の例外はあるようだがね……」

「ああ……あの時のことですよ。いよいよという最期の段になって、何を思ったか突然、肩を押えている刑卒人の手をはね返し、重い振袖の右膝をガバと立てて、その場に立ち上がるうとして思わず『お母あさん……』と叫び声をあげた令嬢風の美しい娘さんと曙街の最近一本になったばかりの若いピチピチした芸者さん。この二人は、結局あとの方で、あつてなく処刑されたンですけど、後者の芸者が淡い若竹色のお座敷着を脱がされた時、真赤な長襦袢一枚で目かくしのまま、突如あらぬ方へ逃げ出そうとしたンです。勿論、取り押えられ、その時に、これもよく聴かないと判らないが、音訳すると善三郎何某かという若旦那に、ぜひ一目、逢わせて頂戴……といったようなことを声を限り絶叫した、あの二つの場面でしたね」

「誰だって、十分、覚悟はしていても、いざという時には少なからず逆上するもんだよ。それよりか、その場面を逐一、無情にとらえているカメラ技術は非凡中の非凡といわねばなるまい。終始、冷静に断罪のテクニクを

残らず描写している。だから今、映っている処刑執行の準備万端が終わってさ、指揮官が細身の指揮刀を青空高く上げて、やおら降ろすと、最初の犠牲者——料亭花むろの看板娘とうたわれた一人娘の恭子さん二十才が、本振袖姿で白い目かくしをされたまま、静かに曳き出されて来たじゃないか……。その前に肝心なことを忘れていましたッけ。例の司令官の宣告が終わって、罪の償いとして断罪の御供となる日本婦人は、一人残らず介添人によって再び厳しく後ろ手に縛りあげられた後、白い布で一斉に目かくしをされたのは今更、申すまでもない。

実をいうと、こうした処刑の手廻しをめぐって、執行者達の間に何かと異論があつたらしく、何回か顔を合わせて事前の打ち合わせや物いいについて協議する場面が、ちょいちょいと映る。だから、そのまま一本の映画に継ぎ合わせると、ラグビーの試合のようにチグハグな場面がピョピョイと飛び出して、その都度、説明に苦しむことになるが、下手に編集し直すよりも、時折、生の映画をとめては、その中の一駒を凝視し、あれこれ想像した方が、一段と娯しさが倍増するかも知れない。



さて、白布で目かくしをされた日本婦人達の控え場処から、およそ三十米位離れた下方に、無残に断罪される仕置場があり、その前に深さ三米ばかりの壕が無造作に掘られていた。このあたりは、なだらかな緩傾斜で障害物とてなく、小砂利まじりの一面の禿山。その小高い丘陵の地の利のよい処を早々と占領して、柵外には万余に及ぶ観衆が、朝から今か今かと固唾を呑んで待ち構えているといった一連の情景である。

ところで、後ろ手に高々と縛りあげられた振袖姿の恭子さんは、白布で目かくしされた顔を、幾らか前へうつ向き加減にし、頬に垂れる髪の毛も哀れに、その真横には介添役員の一人が恭子さんの肩のあたりを、ぴったりと押さえ、それより二米位離れて恭子さんの縄尻を持った男と一緒に連なって歩いて行く。薄いグリーン地に牡丹と菊を配した御所解き調に金糸を使った鳳凰の刺繍入りの本振袖……その振袖に喰い込み、没せんばかりの縄目のひどさ、無情さ。もともと、きものが似合う生来の美人だけに前、横、後ろと、いずれの方向から見ても、痛々しい裡にも日本婦人独特の妖艶さが匂うようにただよっていた。金通し地に重ね亀甲の袋帯を胸高に、ふくら

雀結びに背負いあげ、きびしいまでに縛られた両手首の指は（後手の大写真）早や血の気が失せて白蟻のように白かった……といったも、決して過言ではなさそうだ」

「すると、これを遠目で眺めていた群衆は蟻がたかるように周りからワァッと集まって来て、恭子さんめがけて目と鼻の近くまで遠慮会釈なく近寄って来る。これを慌てふためいて制止する監視兵の一人は、遂に発砲するという始末。しかしギリギリの線で群衆は追いつめられるように後退させられ、巾十米ばかり空いた禿道を後手に縛られた日本娘が二人の男に小突かれながら、下方へ下方へと降りて行くのネ。

そこへ、また嫌な突風が無差別に吹くんダワ。すうッと何かを掬うように下から裾を、さァッと持ち上げて、ブルンブルン……と裾廻しのあたりを左右に開かせ、中の緋縮緬の長襦袢から真赤なお腰巻までをパタパタと披けるので、恭子さんの真白いふくら脛から股のあたりまでが、見えたりかくれたりするのよ……。その無情な突風が何度も吹くたびに恭子さんは立ち止まって、くると横を向いて風を避けようとするが、その都度、二人の介添えの男に制止されて結局、もろに風を受

け、赤いお腰の中まで群衆の目に存分、晒す有様……ここは勿論、カラーで詳細に撮っているの、その色彩は一段と鮮かだわネ。このシーンも惨めなだけに刺激的ね。処刑とはいえ、丸で、死出の旅路を地で行ってるみたい。それに恭子さんの髪形が、どういう訳か折角、結い上げたのを、わざと御殿女中風に崩して垂髪とし、途中を縄でくくってあってこれは、さっき目かくしをする時に大急ぎで髪を崩したものの、収容所を出る時に既にこうされていたのかは判らないけど、いずれにせよ、万が一、逃亡しようとする時には、すぐこれを掴んで元へ戻せる、唯一の手だてなんだでしょう。

もっとも、どの部分を掴んでも女を意のままに出来る髪形は、高島田雷の曙街の三人の姐さんと、桃割れ風に結った半玉の舞妓さん位なもので、このひと達は一応、乱れ髪でなく、ほぼ原形のままで処刑されたようだったワ」

「さァ、どんどんフィルムを追って行かないと補足説明の方も遅れていくよ。

で途中、何度か突風に吹かれて、少なからず砂や泥を浴びた振袖姿の恭子さんは、ようやく仕置場の定位置に着く。すると、いつの



間にやら、さいぜんの閻魔の指揮官が、何処からか忽然と姿を現わし、小走りに走り廻って、あれこれと指図を下している。

その部署付も、ほぼ終わったと見えて、つかつかと長靴をはいた小男の指揮官が、恭子さんの処へやって来る……そして背伸びしながら、恭子さんの頭のとっぺんから足袋の先まで逐一、撫で廻わすように眺めて真実、本人であることを、まず確認する。そして、おもむろに、たどたどしい日本語で、

「貴女を民意に基づき、処刑します。よろしいですね……」この伝達に対し、恭子さんは目かくしをされたまま頷いて、

「ハイ……どうぞお気の済むまで……」どのような、ご処分も、お受け致します。存分に、ご成敗、下さいまし」と返答をしたようだ。

ニヤリと、ほくそ笑んだ指揮官の顎が上下に動いたかに見えるや、兼ねての手配通り、縄尻を持った男は、恭子さんの手首をぐっと前方に押して女を仕置場の薙の上へ突き出す。

そして、肩を掴んで来た別の役男は、恭子さんの身体が薙の丁度、真ん中にくるように微動させ、壕との間を五十センチ位空かせて今度は両肩を下方に押しながら、恭子さんを薙の上へペタンと坐らせた。

長い袖がパタパタと折りたたまれたような恰好になったので、二つの振袖を、いずれも後方へ曳いて行き、喰み出した緋の長襦袢を袖の中へ入れて程よく前を揃えた。乱れを防ぐ、せめてもの武士の情けなのだろう。

すると、禿山のど真ん中に建った彼等のテント張りの控え場所と思われる処から、ギラギラ光る肉太の青竜刀を片手にひっさげ、鼻水を吸りあげながら一人の屈強な男が現われて来た。さしずめ紅毛？ 浅右衛門というところであろうか。

手慣れた仕事とはいえ、この世紀の処刑をいやしくも同族の群衆の面前において万が一にも、不手際をやらかすようでは、自分達の面目、丸潰れだとばかり、またまた指揮官を加えての四者協議が始まった。念には念を入れは、この際、大変結構だが、被刑者側である恭子さん達に取っては、甚だ以て迷惑至極といわねばなるまい。ひまのかかる蛇の半殺しは、場合に依っては本番の死刑よりも辛い苛酷の刑と同じなのだから……。

果せるかな、見物の群衆の方から、何をぐずぐずしているんだ。早くやれ！ もう待ちくたびれちゃったぞ。秋の日が暮れちまうぞ。高が女じゃねえか、やっちまえ。もう税

金、納めねえぞ。 (個人別には何をいつているかよく判らないが、恐らく一括して意識すると、こんな風にも受け取れそうな) けんけんごうごうたる非難の声が一斉に上った。

確かに陽は、そろそろ傾きかけている。風も冷たく、もう一刻の猶予も許されない。

「ようしッ、実施用意！ 施行開始だッ！」で仕置場は再び、妖し気な活気？ を、もり返して来た。

恭子さんの縄尻を持った男は直ちに左側へ肩を押さえて終始、付添って来た別の男は右側の、いずれも恭子さんの後方に陣取り、中腰になって、しめし合わせたように片方の手で恭子さんの土下座した上半身を前方へ、ぐうっと押し出すようにし、片方の手で両足の白足袋のすぐ上部を掴んで後方へ引くような素振りを見せた。一見していうなれば、異国風とは申せ、日本式伝馬町牢獄の打首型の方法を採ったのである。

恭子さんの身体は徐々に前のめりの、やや不安定な恰好になったな……と思った瞬間、またも待ったの声が掛かった。

何を思ったか例の閻魔大王は自ら、つかつかと恭子さんの前へ近寄り、嚴重にくくった白い目かくしを、さアッと剥ぎ取った。そし



て、ステッキのような指揮棒の先で、坐っている恭子さんの膝前の振袖の裾を何度もつつき、左右へ裾を捲らせた。燃えるような緋縮緬の長襦袢が、やや大巾に三角形を描いて、あらわに露出した……その情景は痛々しい中にも一抹の艶麗さを呼び、ぐるりと囲んだ観衆から一斉に拍手が起こった。

これは湧き起こる拍手に内心、寧ろびっくりしたような指揮官は別として、彼等が振袖や訪問着などの和服を知悉しているとは思われず、原始人に近い色彩感覚から、単なる原色的赤に惹かれ、反射的に小躍りして、どよめいたものと思われる。その証拠は、あとの方で映る処刑者の衣類即売の場面を見ると、概して赤系統のものを運び出し、室内装飾や孫や子供の物にと競って買い漁っているのを見ても判る。

さて、恭子さんの裾を捲って赤い長襦袢を出させた指揮官は、恭子さんの顔を下方にうつむかせ、グリーン地の振袖の裾の間から、妖しくも色っぽくのぞく緋縮緬の長襦袢を、しばしの間、見させて、もう、それも見納めだよ。よく穴のあく程、見てお別れするんだネ……と、暗に強要したゼスチュアを採る——その言葉の裏は、お前の胴体とも永久に

離ればなれになるんだよ……を遠まわしに、ほのめかしたに外ならない。

自分の丸まっちい、ひざを包んだ赤いお腰巻と緋色の長襦袢、本当にさようなら……。そうか、もういいのか？ それでは別れを告げ終わった処で、もう一度、目かくしをして貰おうか。

恭子さんは再び嚴重に目かくしをされた。青竜刀を軽々とひっさげ、真黒に日焼けした精悍な半裸体の男は壕の淵に、やおら突立った。指揮官のキラキラ光った指揮刀が高く上げられると、その合図で恭子さんの上半身は再び不安定な形を取らされ、今にも前へ転がりそうな恰好になった……。

ぐあッという半裸体の男の、どら声で青竜刀が半円を描いて閃光的に地上へ振り降ろされると、恭子さんの黒髪は宙間に浮いて飛んだ。と同時に、赤い流体が直線的に噴き出しやがて間歇的となり、そして停まった。

観衆は熱狂した。手を振り足を鳴らして、長年の殆ど不可能に近かった復讐が、ここに報いられたことを心から喜んだ。

やがて、前もって当局に願ひ出て屍体処理の許可を貰っていた連中が、三々五々と群衆の中から飛び出して来て、壕の前に馳足で集

まって来た。

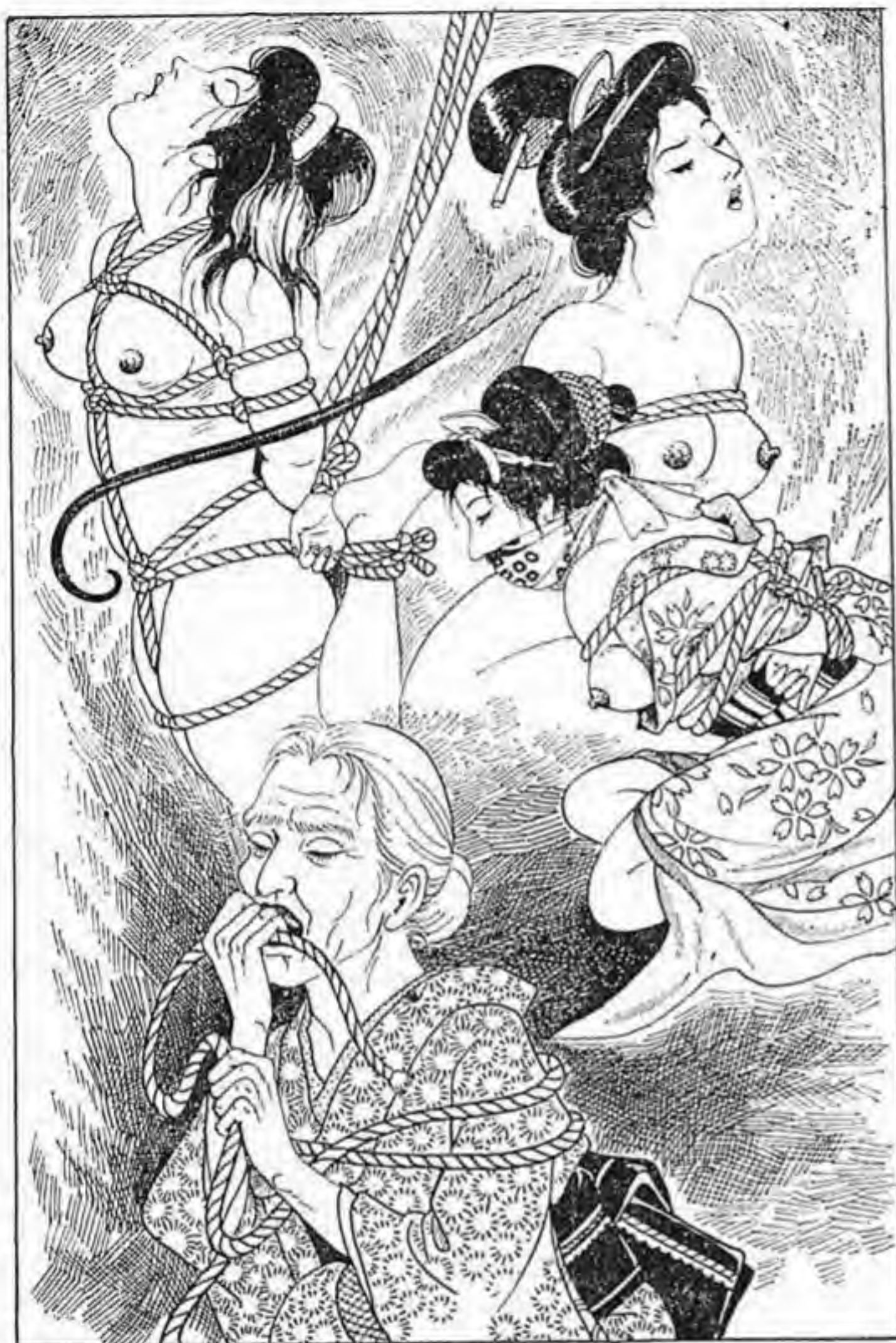
恭子さんの胸から下の胴体は、やや斜め仰向けに庭の横側に倒れて膝前が開き、長襦袢がひろがって真赤なメリンスのお腰の間から真白な、ふくら脛が、なまめかしく、のぞいていた。

興奮して幾分、赤ら顔になった指揮官の命令で、兼ねての規定通り、恭子さんの胴体は即座に壕の中へザアザア……と蹴落とされた。すると、これを一部始終、凝視していた処理班の連中が競って、いきなり壕の中へ飛び込もうとしたので、こら待たんか、規定方針を遵守するんだぞ。処刑の順序を乱してはいけない。違犯する者は、その場に射殺するッ。という当局の厳命で、ようやく元の静けさに戻ったという訳さ……」

「随分と時間がかかったわネ。このあと、名前の姓を省略すると、左千子、百合子、沙織真由美の振袖娘四人が、順々に全く同じような方法で処刑されていったわ。古代紫地に三蓋松模様の付下げ風の振袖を着た左千子さんは、駅前デパート経営主の娘で、ファッション・モデル（当時はマネキンガールといったんですって……）を兼ねており、百合子さんは、あとの方で、あらぬ風に素裸にされて処



読者ギャラリー『若き頃を偲ぶ』岡 たかし



刑された同僚と当時、隆盛を誇っていた割烹<sup>かつぼう</sup>旅館菊水に勤めていた、見るからに明朗な女性で、クリーム地に金銀糸で縫い取った大きな揚げ羽蝶と組紐を配した振袖と、千鳥結びに胸高に締上げた金箔丸紋の袋帯が、本当に痛々しい程、よく似合っていたワ。

どうだ、怖いかネ？ 何あーに一寸の間の辛抱だからな。すぐ済む。それでは目かくしを脱<sup>は</sup>ずしてやるから、よく見な。あれが、あ

んたのすぐ前で貴い罪の処刑を受けた娘さんだよ。あんたも罪の償いとして、今すぐ、あんな風になって貰おう。いいかね？ 判ったら少しでもキモノが汚れないように、やっぱりこんな風にな……といいながら、例の如く左千子さんの膝のあたりに棒を突込み、裾を左右にひらかせた。赤く燃えるような錦紗縮緬の長襦袢が最早、羞恥を越えて男達のまなこを一点に蒐める、その惨めさ……司令官殿

もう少し、このあたりまで思い切って捲ったら如何です？ いや、この位でよからうて。どうせ屍体処理班が、遅かれ早かれ剥いでしまんだから。では、刑を執行します。よろしいね？

ハイ……お願いします、と左千子さんは答えた(らしい)。

第一、そんな近くまでマイクを持って行くことは不可能だから、幸いパントマイム調に映った映画に、適当に日本語でアフレコしたものと思われる。

壕の中には恭子、左千子、百合子の三人が覆いかぶさるように重なった、その上に更に紋どんすの生地にも扇面を散らした友禅染に刺繍と箔を加えた本振袖姿の沙織が、白足袋を半分、乗せたような恰好で仰向けに倒れ、またまた、その上へ小石を交えた土砂を蹴散らし、紋りんずの白生地に、さび朱一色の大輩菊花を染めあげた振袖姿の真由美の胴体がドタッドタツ……と落ち込んで来た時には、それまで長い柄のついた鳶口のようなもので帯や帯締め、さてはお端折などといったところに、ひっかけては屍体の始末をしていた処理班の連中が、てんでに鳶口をさし上げて急拠何やら訴願を始めた……。



つまり、急場の処理班とはいうが、実働は処刑後の穴埋め位なもので、本当は商売柄、衣類を剥ぎ取ってセリ市にかけて競売し、その資金の一部で難民を救済するという一石二鳥のお題目で、その筋から特別に認可された古物商の連中なんです……。

司令官殿！ ご覧下さい。これでは、どうにもなりません。あちこちドロだらけです。折角の綺麗な日本婦人のキモノ、使い道にもなりません。

然らば、どうするンじゃ？ 端的に申し上げます。処刑の前に上着だけでも剥がさせて下さい。観衆の皆さんも、そういつています。ぜひ、そうさせて下さい……。

また何人か集まって協議ね。よっぽどその都度、民意を尊重する処刑場と見えて、咄嗟ではあったが、被刑者側の日本婦人の名誉も充分、考慮して、やっと妥協の線が出てきた……。

つまり、今後のテストケースとして、兎に角、処刑直前に現在まとうている振袖、訪問着、お座敷着（出の衣裳）、舞妓着、などのいわゆる上着の衣裳は、すべてその場において脱がせる。然る後に処刑担当者は、日本婦人を処刑していく。一方、始末処理班は直ちに

衣類を所定のセリ市場（といっても映画で見ると露天ですけど）に運び競売する……ということになったんです。時間が無いのに、取りきめが段々先に行く程、面倒になって来たわねえ」

「そのあとは、わしが替って映画説明をやる。今度は一寸、若干、刺激的となったね。やがて、その華やかなトップ女性として呉服老舗の姉妹娘——純子に澄子。それに日本舞踊の名取りを姉とする姉妹娘の志津と志麻子に今一人、書肆大和書房の娘聡子の五人の美女が先ず選ばれ、群衆の面前において、丸帯や袋帯を解かれることになった。

今度のやり方で違っていることは、限られた時間の関係もあって一人一人、曳き出さずに五人を連縛して、仕置場の近くまで目かくしのまま連れ出し、一列横隊にならばせた上、一人宛、帯を解いて行ったことだ。先ず最右端に純子さんが京染特有の地色ぼかし、金銀糸で刺繍した花模様の振袖に、グリーン地に菱取りの菊と桐小花散らしの袋帯を、五枚羽根という一番豪華なひまわり結びに胸高に締め、両手を後ろ手に縛られ、目かくしのまま立っていると、例によって係の男が二人、その内の一人は、純子さんの後ろに回って動か

ないように女の身体を両手で支え、今一人の男は正面から丸組みの帯締め、紅の総絞縮緬の帯揚げから、まず解いていくが、複雑に結びあげた豪華な帯には、ほとほと困惑したらしく、いったん、純子さんの縄を解いた上、あちらこちら触っては折り目結び目を探して遂に長い帯が地面にドタリと落とされた。

後ろの男は、純子さんの両腕を、ぐっと掴んで動かぬようにし、前の男は固く結んだ伊達じめを解き、続いて外内の腰紐二本を取り脱すすと、お端折が伸びて長い振袖がパリリと下り、白い足袋を上から覆ってしまった。

さア脱いだッ。脱ぐんだよ。これをさ……と、せかすように肩の処から振袖を、するりと脱がせた。濃いピンク色に赤い小桜を散らした錦紗縮緬の長襦袢が、荒涼とした露天下に艶めかしく光彩を放った。

続いて妹娘澄子の、一段と華やかな朱色の緞子地に鳳凰の柄を配した、ふくら雀結びの袋帯を解きに廻った、さいぜんの男二人は、今度は少し手慣れたと見えて、澄子の赤い羽二重の絞りの帯揚げから要領よく脱すしかかった。

処が、一番目にあられもなく派手な長襦袢一枚にされた姉妹の純子の方には、素早く別



組の男が二人、現われて来て、麻縄のようなもので薄い長襦袢の上から、純子のすんなりとした両腕を、先ず後ろにぐっと回して、両手首を重ねて固く縛り、その縄を二の腕に巻きつけて再び締めあげ、両端を交叉して結んだ上、更に余った縄で胸部を二巻き、縄目が見えない位に固く固く縛りあげた。

縛り終わったあと、恐らくこれが生涯にたった一度の縄目であろうけれど、上半身は、まるで、遠距離行の荷物でも梱包したようにギョウギョウに縛られ、目かくしでその惨めさを自分の目で確かめ見るすべとてなく、純子の息づかいが大きくハアハアと波を打ったように乱れていた。

描写の説明を早めるならば三番目の若く美しい踊りの師匠志津は、踊り帯のような麻の葉模様の袋帯を解かれ、妹娘の志麻子と同様燃え立つような紋綸子縮緬の長襦袢一枚のまま、両手を後ろ手に固く縛りあげられた。五人の内、最後の聡子は袋帯を矢の字型に結んだ際、中で十文字にかけた紐が固くてなかなか解けず、男達は面喰いながらも、ひどく手間取ったので、聡子を赤い長襦袢一枚にして縛りあげた時には、四人の女達はもう痛くて痛くて肩で息をはずませながら、最後の聡子

の仕打ちを待っていた。

五人の半裸にされた美女達は、時折、砂塵を巻きあげて襲って来る突風の中に、前に曳き出されて来た時と同様、一列の横隊にならばされた。

濃いピンクが一つ、あとは赤い長袖の長襦袢ばかりで、時折ピュウッと耳元をうなつて通り過ぎて行く突風は、遠慮会釈なく無防備な裾を捲り上げ、その都度、薄ピンクの蹴出しや真赤なお腰が、ヒタヒタと脚にからみついたり、股のあたりで翻ったりした。

何しろ、厚目の振袖と違って袖は振袖用として長いが、生地は薄い長襦袢のこととて肉体の線も一段と、あらわに、上半身を、それこそ目茶目茶といってもよい位にギョウギョウに縛りあげられた女達の処刑が、いよいよ開始されたのである。

一塊の火の玉が、一つ一つ焰をあげながら穴の中に放り込まれていくような情景を、このカメラマンは初め処刑者の坐り姿をアップで撮り、直ちにズーム式にロングで大急ぎで逃げている。

道義上、やむを得ず、彼をそうさせたのかも知れない。

すると、しばらく立って、またまた壕の内

外から物言いが挙って、薄い本絹の長襦袢は尚更、土で汚れ、下手をすると破損する恐れがあるというので、処刑のコスチュームを至急、お改め願いたいとの、たつての訴願には当局側も再度、折れたと見え、朝三暮四の諺ではないが、爾今、日本婦人達から、きものと長襦袢は相方とも撤去した上で処刑を続ける旨、伝達された。観衆は、またもや一斉に拍手し、ピーピー口笛を鳴らし、今度は、どのような羞かしめを受けるのだろうか、身体を乗り出して来る群衆も、あちこちに見受けられた。

陽は夕方、西にまわり、急速に、陰<sup>かげ</sup>つて来た。もう誰かれの選別もなく、例の丘の上の控え場では数人の係員が素早く馳けめぐって日本婦人達の、ふくら結びの帯や、お太鼓結びの帯、さては出の衣裳に垂らした博多献上帯を締めた芸妓を邪慳に小突きながら、どんな解いて行き、色取りどりの振袖、訪問着やお座敷着を一斉に脱がせると、息もつかせず長襦袢まで剥ぎ取ってしまった……。

ピンク色の蹴出しをお腰の上に巻いていた者が数人、あとは真紅のメリンスの腰巻を、じかに締めており、即刻姓名が呼ばれ、改めて本人であることが確かめられた。



幸か不幸か、今回の処刑に立ち合った一僧侶のメモ帳に依ると、いわゆる紅布（腰巻のこと）一枚で処刑された十人の日本婦人の職業と名前は一応、次のようになっている。

シライ珠枝（食堂事務員）、ツチダかおる（百貨店販売員）、シマズ君江（商社会社秘書）ヒラタ絹子、（料亭待月の娘）、ノ 奴（置屋沢本の抱え芸者）、玉菊（置屋沢源の舞妓）、タテバヤシ朱美（和洋裁縫師）、キリシマ雪路（バスガイド）、ハラ亜紗子（お琴の師匠）、サツキみどり（某高官の令嬢）

処刑担当官として、たびたび処刑の方法が変更して時間的にも多大の迷惑をかけたことをお詫びするが、直ちに前行通り刑を執行する。十人の日本婦人は、特に連縛しない代わりに上半身を緊縛し、一列縦隊で仕置場へ曳き出せッ……という指揮官の命令で、今度はふっくらとした乳房も露わな上半身を、長襦袢一枚の時と同じように後手に縛り、特に菱形に縛ったり、腹部を三巻きも四巻きも、ぐるぐる巻いて締めあげるなど、縛り方にも色々変わった方法をことさらに採っていた。

文字通り、赤い腰巻一つの十人の女が仕置場に到着した時には、どの女も玉のような汗が顔を伝わり、捻じあげられるように高く後

ろ手に縛られたその痛さと肉に喰い込む縄目で、口紅を塗った唇も半ば開いて、吐く呼吸も切なく胸をひどく震わせていた。

一番目のシライ珠枝さんが、薙の上へペタンと坐らされた。乱れた髪の毛を前へ梳いて白い襟足を思い切り充分、露出させる。垂れ下がったお腰の紐の先を紐の中に藏い、海老のように曲線を描いて珠枝さんの上半身を前の方へと屈曲させながら倒していく。

あえなく珠枝さんの、みどりの黒髪は穴の中へ落ちて行った。

ここでよい、手間が省けてよいではないか早く始末しろ……という周りの係員の叱咤の声で、業者達は壕の中へ入るまでもなく、蹴込まれる直前の珠枝さんの胴体から、真赤な腰巻と白足袋を剥ぎ取り、衣類のセリ市へ向けパタパタと馳け出して行った。

以下、九人の女性も全く同じような方法で処刑されて、身にまもっていたお腰と足袋をその場で剥がされ、素裸のまま壕の中へと放り込まれた。その中に前後二人ばかり、目も覚めるようなピンク色の月経帯を締めていた女性が交じっていた。当初、いぶかしげに眺めていた男達も、それとなく経血がしみ出ていることからメンスバンドだと判り、金めに

なるならと、早速これも剥ぎ取って、一緒にセリ市へ持って行った。

ところが控場に残った最後の五人ばかりの女と例の逃亡しようとして捕まった二人の女達は勿論、腰巻一つで前の組と同様仕置場に曳き出されて来たが、何を思ったか、まだ薙の上へ坐らされる前に係員が寄ってたかって女の赤い腰巻をひったくるように剥ぎ取ってしまった。

しかし白足袋の方は左程、魅力がないと見えて、そのままにして、係員から薄暮に艶めかしく移り香を放つ真紅の腰巻をポンポン手渡された業者達は早速、拡げたり、匂いを嗅いだり、たたんだりした挙句、これも群衆が待っているセリ市へと運んで行った。

いよいよ、大詰めである。七人の裸身は、最後の見せしめにと、仕置場周辺の観衆の前を、ゆっくりと歩かされ、どっと嘲笑を浴びた後、一人宛、仕置場の薙の上へ坐ったのである……」

「ところで、少しばかり滑稽なのは、きものや下着類の前代未聞のセリ市なのね。もともと異国人の衣類や慣習的な下着などに馴染みの薄いことは私達にも判るけど、一事が万事識らぬが仏式で、安く手に入れた振袖を、さ



も識ったかぶりに左前に着てみたり、長い高価な袋帯を割かんで買って二つにチョン切ってみたり、中でも一番哄笑を博したのは、労務者風の男が襟巻代わりに総絞り紅縮緬の帯揚げを首に巻き、竹の棹の先に労働旗のように真赤なお腰を、お腰の紐で、じかに結びつけて振り廻し、得意満面、狂声を挙げていたことでした。総じて、染色も優れ柄模様も織細で美しい振袖や、一越風の訪問着は文句なしに早い者勝ちで奪い合うように買って行きました。肌着やお腰、蹴出し、小物類の腰紐、伊達締、伊達巻、帯揚げ、帯締め、帯枕、帯板、白足袋、さては、べっ甲や銀細工のかんざし、宝石指輪、経血のついたメンスバンドといった付属品は玄人筋の業者が散々買い漁ったあとに、興味本位な連中が珍奇な土産物代わりに、残らず買い求めたようでした。

この処刑につながるセリ市の模様を、外国人カメラマンはアペンディックスな、ご愛嬌のしるしとばかり割方、面白く撮っているわネ。ホラ、玄人の連中は指輪だの腕時計など比較的、高価なものをセッているのに対し、ズブの素人の群衆は、赤や黄色など目立ってしかも多少、刺激的な色気物に人気が集まっていたようよ。だから、日本人であればそれ

も当時の婦人なら、口にするのも羞かしい真赤なメリンスのお腰巻や赤い縮緬の長襦袢などを、特に値段の安い点もあろうが、喜んでどんどん買い求めて行った。カメラマンの手記に依ると、この処刑が終わり、およそ一カ月を経過した頃に、その附近の部落を歩くと土塀や樹の枝に、処刑された当時、日本婦人達が着用していたものと思われる振袖や長襦袢、真紅の腰巻などが、おっぴらに懸けてあったという。もう一つ、手記の追加みたいなことになるけど、収容所から若い日本婦人ばかり連れ出して処刑したあとに残った比較的年配層の婦人達は、その後、釈放され、専ら雑役婦として使われたというお話でした。

何だか私、すっかり男まさりの男性になったような口のきき方で大変、失礼しましたけど、最後に一糸まとわず白い裸身を晒して処刑される時に、空がぐっと暗くなり、ポツリポツリと大粒の雨が降って来たでしょう。もうあと二、三人だという頃には、雨足が一層ひどくなつて身体を伝わり、女の髪の毛から雨の滴が丸で流のように落ちていましたね。後ろ手や上半身の紐は、ますます締まってさぞや痛かったでしょうに……。女性、それも若くて美しい女性ばかりが、一方的に後ろ

手に縛られ残酷な目に逢わされ、挙句の果てに、こんな風に処刑されるなんて、敵さんばかりでなく男性というけだものは、すべて皆んな大なり小なり同じような考え方を持っているんじゃないか？」

「そりや、皆目、判らんよ。その意味からいえば、いわゆる処刑篇としてのこの映画は、一応これで THE END となるんだが、カメラマンは更に続篇があると見えて、敢えて、CONTINUE と、うたっている。

ただ、そのつなぎとして裸身の女の最後の一人が、降りしきる雨の中を白く尾を曳いて壕の中へ落ちて行く処でフェードアウトにしたりや間を置いてフェードインとなつて、今度は明るく処刑日に見た周辺の景色がパンで映り、今は誰もおらない丘陵、確かにテントがここに建てられ、あのあたりが仕置場で、そういうえば幾分、新しく盛土となつてこの下には……しかし、あたりはシーンとして万余の群衆の影とてなく、僅かに供養の木片が一つ土中に挿し込んであったという……このカットを、ちよっぴり添えて乞後篇、ご期待をというつもりなのだろう。

何ども前から繰り返すようだけど、アマチュアか玄人か一向に判らぬこのカメラマンは



要所所で実にうまい手法を使っている。例えば、壕の中へ、みどりの黒髪がバツさり落とされて行くところは、初めからスローモーションになるように撮っている。また強風に吹かれて、きものや下着の裾が舞い上がる時手の自由が奪われ、かくすすべもなく遂に人目に晒すところは、特別に SECRET 物として別巻に編集されている。カットされた残りを観ていても、少しも不自然な気を起こさせない。早くいえば、あぶな絵の手法で実に綺麗に逃げている。また、アングルも奇抜であった。処刑者の真正面に坐り込んで正攻法を採り、白足袋から裾、裾から股、股からふくらと出た腹部、腹部から帯、帯揚げ、胸部襟、口元から白い目かくしにされた部分、そして最後に、みどりの黒髪を撮影。同様に女の真横を、下から上部へとパンニングし、中でも真後ろから撮ったものは、固く縛られた後ろ手の処でズームアップし、そのまま胸高に締めた、ふくら雀結びの帯にレンズを移動やや間を置いて思い切りズームダウンをするといった寸法である。

話が細くなるが、戦前の女性は腰巻の締め方一つにしても誠に上手であった。洋服で育ち年に一、二回位しか和服を着ない近代女

性の取ってつけたような巻き方は、この映画では少しも見られない。そんな処を忠実にキヤッチしている綿密さには本当に感服する。それと共に映画のラストシーンに短くスーパードポーズされたタイトルが一抹の哀愁を誘い、心を打つものがある。

曰く

へ赤い衣を剥がれ、荒涼の野末に消えし

桜花 いつの日か春来りなば 永久に

芽生えせむ この丘に……

といったような意味なんだが、現地の今はどうなっているのかなア。相交わず、この時のように砂塵が吹きすさんでいるんじゃないだろうか。いずれにしても、真偽に拘らず戦争の犠牲者、かくされた敗戦哀話といっても過言ではないと思うんだ」

「そうねえ……でも、こんな映画を今、仮に新婚早々の夫婦者に観せたら、どうなるでしょうねえ？」

撥ねかえってくる処が大きいかな知ら？

逆効果になったら悪いけど、却って夫婦間の愛情を高める素材になるなら、かまわないんじゃないかな知ら？ 一対一でお粗末だけどさしあたり旦那さまが指揮官で奥様が処刑者何処かの山の中で、この映画のように胸高帯

の振袖を着たり、長襦袢一枚に剥がれて山道をとぼとぼと歩かされたり、はては、真赤なお腰で、やがて蹴落とされる壕の中や外周りを自分の目で確かめたりするナンて、すごく娛しいんじゃない？

やがて、あたしの方が、赤いお腰の方も無残に剥ぎ取られて、羞かしい素ツ裸となり、前よりも一層ひどく後手に縛りあげられて、荒庭の上へ坐らされる。勝ち誇った貴方は、壕を越えて向こう側に竹の棒を二本、離して土中に突き刺し、それに今の今まで腰に巻いていた、あたしの真紅のお腰を、ひき幕のようにピンと張る。ハタハタとお腰が鳴って一寸、色っぽいけど即席の刑場のつもりよ」

「おいおいッ。まるで漫画雑誌のアニメーションじゃないか。おまけに、いつの間にやら何処かの新婚夫婦者が、即ち、お前と俺とにすり替えられるナンて迷惑な話じゃないか。

新婚生活も誰だってそういつ迄も、いちやいちやは、されないだろうから、そろそろ二人で考えて何かをやらかすのは仰せの通り大変、結構だけど、いつの世でも処刑ごっこは第一、道具が要り過ぎる。折角、演出するのなら、せめて8ミリ位には撮って置きたいだろうし、この映画のように、敗残風景日本の



なら、面倒な着物も、またゾロ着なくちゃならん。凝れば凝る程、幾ら人里離れた山の中でも人目につくことだってあり得るぜ……」

「大丈夫……クルマで運んで、あッという間に短時間で撮影完了。きもの着付教室を卒業した、あたしですもの、素早く扮装して御覧に入れますわよ。それにこの間、この話を日頃、暇を持て余している団地の奥様方に持ち出したら、即座に賛成しそうな人が五、六人出て来たわよ。ご主人の方は浮動票で判つきりした処は判らないけど、恐らく撮影位なら結構つき合つて呉れると思うわ。皆んな、それとなく刺激を求めたがっている連中なんですもの……それに、どうせ大人の遊戯として

演るンなら、敗戦！ 襲撃！ 逮捕！ 連行

！ 拘置！ 処刑ETC・のうち、せめて襲撃あたりから、やっさもっさ撮られてみたいわねえ。ホッホッホ……あたしって、このところ、誰かさんに、すっかり飼育されて本格的なマゾ女房になった見たい……」

「貴方好みの女」が一人、ここに目出度く誕生したっていう訳だナ……。まあ大いに演るさ。それが女性に取っても耐えられぬ程の快楽であり、かつ、また相対する男性方の唯一の渴望を慰やすものであるならば、たとえそれが一〇〇パーセント空想的な噴飯ものであろうとも、何ら臆せず、猪突邁進すべきではなからうか……てナことを、そろそろ結び

### 【伝言板】

○分譲品総目録は作成が大変遅延しておりますが出来次第発送申上げます故、今暫くお待ち下さるようお願いいたします。尚、フォトのお申込みは、大阪阿倍野郵便局私書箱第十四号天星社内箕田京二宛に願います。○御送金は、現金書留、小為替、振替（切手代用は一割増）にてお願いいたします。普通郵便に現金の封入は違法です故、現金の場合は必ず現金書留（封筒は郵便局で売っています）にて御送金下さい。○既

刊の臨時増刊号「花と蛇」第一回分（前篇写真と絵画特集）第二回分（続篇小説絵画特集）第三回分（前篇続篇収録小説特集）のいずれも売切れにて在庫がありません。○旧号に広告してありましたも最近号に掲載してないものは在庫のないものがありますので、旧号に依つてのご注文は一応在庫の有無を御照会下さい。○雑誌の予約とお申込は大阪住吉局私書箱第四十一号曉出版株式会社へ願います。

の言葉として皆さんともお別れしようか」

「おっと、あなた一人で別れちゃ駄目よ。やっと二周年経った今日が、別れる処か私達の華やかな結婚記念日じゃありませんか。だからホッホッホッ、そろそろ始めなくっちゃ」「おあいにくさま。本日は天気晴朗なれども風塵舞い立たず。残念でした……」  
「お馬鹿さんねえ。それはそれ、これはこれなのよ。ホッホッホッ……」

\* \* \* \* \*

「……という或る日の或る新婚夫婦者を介してのこの一編……ドラマにならないか知ら？ 貴方の仕込みで一生懸命、考えてみたの」

「またかい？ この間も一杯、喰ったばかりだぜ。それじゃ、初めから、これ全部、嘘なの？ 無責任にも俺を散々喋らせやがって……第一、あの頃、そうやたらにカラーなてものはなかった筈だぜ。荒原に晴着の日本婦人を処刑する、このアイデアは悪かあない。脚色次第でサドマゾの白眉ともなるだろう。

ただ、それに時代離れた和服をからませたところが今回の味噌なんだな。まあお前にこんな風に正攻法で切りこまれちゃ背を向けて逃げる訳にも行かない。早速、山の中で着物を剥いで、赤い腰巻一枚にひんむくか」



## 連載 M 小説

## 則 天 武 后

②

真 砂 十 四 郎



4

女御様<sup>にょご</sup>に第二子がお生まれになりました。

女のお子様でございます。お育て係りの乳母が、ご保育にあたって、すすすくとお育ちになり、一カ月たちました。

そのとき、女御様のお屋敷へ、思いもかけず王皇后様がお見えになったのです。

「赤ちゃんを拝見に来たのよ。もう、さぞかし大きくなって可愛いくなっていることでしょうね」

「これはまあ、おそれいます。わざわざお越しただいて……」

女御様も表面は愛嬌をふりまいて王皇后を

歓迎しました。王皇后も、ご自分にお子様がないところから、半分はうらやましいような気持と、半分は武昭儀様の子ながら高宗帝の子でもあるためのお見舞いをかねて、自ら女御様のお屋敷へお越しになったものと思われ

ます。しかし、このとき、思いもかけぬことが、おこりました。

女御様と乳母とが王皇后を送りだしたあと部屋へ引き返したところが、お子様は、息を

していなかったのです。すでに死んでいたのです。

お屋敷中、大騒動になりました。お子様は蒲団に口をふさがれて、窒息死していたので

すが、私の想像では、皇后がお帰りになるの

で、あわてて乳母も皇后のあとに従って、お

見送りました。そのとき乳母のあやまちによつて掛蒲団がお子様の口の上をふさいだ。手ではねのけることのできない赤児は、そのまま息が止まって死んでしまった……と思うので

す。乳母は、おろおろしていました。

「そのとき、お前は赤ちゃんの様子を、よく見なかったのだね」

「はい、皇后様がお帰りになると仰有いますので、急いでこのことをお供の人に知らせるため、私は先に玄関へ走りしました。そのあとゆっくり皇后様が、お部屋からお出ましになりました」

「すると一ばんあとから部屋を出たのは、王



皇后……というのだね」

「は、はい……」

乳母はもう、どうなることかと、顔色もありませんでした。

「もし、あとから人にきかれたら、お前は、その通り、答えるのだよ」

「はい……」

乳母の方は気も転倒していましたが、女御様の方はキッとお口を結んで立ちつくしていられました。

普通の女では、こういう、しっかりした態度は、とてもとれるものではありません。死んだ子にとりすがって、おいおい泣きわめくのが、せいぜいです。女御様は、お子様を抱きかかえませんでした。

この出来事をきかれて驚いてかけつけられた高宗帝に、女御様は、きっぱりと仰有いました。

「あなたとわたしの間の、この子を殺したの  
は王皇后です」

「なんということを言うのだ。王皇后が、そんなことをする筈がない」

「いいえ、一ばんあとから、この部屋を出たのは皇后です。蒲団で赤ちゃんの口をふさいで、息の絶えるのを見てから帰ったのです。

わたしたちのいる間は、赤ちゃんは元気でした。そのあと、皇后が一人、残りました。そして、そのあとに、わたしや乳母が、この部屋へ戻ったときは、もう赤ちゃんは死んでいたのです」

帝は、黙ってしまいました。お心の中では（とても考えられない。信じられない）と、お思いになっていたのでしょう。それでも黙ってしまいました。女御様にうながされて、乳母が、皇后、女御様、乳母の三人の出入りした模様を、ふたたび帝の前で繰りかえし話しました。

「皇后は、あの子が憎かったのです。あなたと、わたしの間に出来た子……と思うと、憎悪の炎が胸にもえたのです。そして殺してしまったのです」

「ふーむ……」

帝は腕を、こまねきました。もう「それは違う」と女御様の前で言えなくなってしまったのです。

この事件は、皇后様も「絶対に、そんなことをした覚えがない」と強く否定なさいますし、結局、証拠がないということと、相手が皇后様だということから、終局まで究明はされませんでした。しかし、この事件から女御

様の皇后様に対する戦いが始まったといっているでしょう。

帝は御寝室内で女御様に、ああしろ、こうしろと、うながされて「うんうん」と、うなずいていられますが、昼間、重臣たちとの会議の間では、ご自分から、はっきり「こうする」と仰有れない方でした。重臣の誰かが申し上げたことを「うん、それはよい、そうしよう」とは仰有るのですが、重臣たちが反対していることを押しきって命令することは出来ない方でした。

このご性格の弱さは太宗帝も、よくご存知だったので、特に遺言して長孫無忌、柳積など、唐朝に対して忠節無比の国士を重臣として新帝のおそばにつけられたのですが、このへんの事情を女御様も次第に心得てくるようになられました。女御様の前では、「そうする」と仰有っても、いざとなると、なかなかそう出来ない皇帝に対して、女御様はお心の中で（ほんとに、じれったい。あたしが会議に出たら、真っ向から重臣たちを叱りつけてあたしの命令に従わせるのに）と思っただけです。後宮の昭儀の位では、そこまで、お手がとどきません。女御様が齒がゆく思っただけのお心が、おのずから



ご態度にあらわれて、帝もしばしば、女御様の前で身をちぢめていらっしやいますし、私がお風呂やお厠で、ちょっと不手際などありまして、お詫びする私の頭の上を、おみ足で強く踏みにじられてお叱りになられます。女御様を天女様として仰ぎ奉っている私はよいとして、高宗様は、あれではお可哀そうときどき、ご同情申しあげるときもございますが、それでも帝は女御様がお好きなのでしょう。他の者なら首をかしげることでしょうが、しかし私には帝のお心のうちが分かりません。高宗様も、あれで満足なのだ……と、私なればこそ、ご推察できるのです。

## 5

中書省の役人に李義府という男がおりました。何の件によってか、四川の僻地、司香へ追いやられることに決まったのですが、どう手をまわされたのでしょうか、李義府は出発に先立ってある日、女御様のお屋敷に伺候して参りました。

女御様のお部屋で長い間、話しあっていられたようですが、女御様は突然、手をたたいて数人の侍女たちに命じて李義府を縛りあげ

てしまいました。

「あたしの命に服さない者は、どういうことになるか見せてやるからね。お前をあたしの牢獄に入れてやる。そこでもう一ぺん、よく考えて、私に返事をおし」

強いお言葉で、こう仰有って、李義府を牢獄へひきたてました。あとは御命令で私も手伝いましたので、その後の経過を知っているのは私だけなのですが、牢獄というのは女御様ご専用のお厠の中なのです。お厠の下は深く掘下げた石の穴で、その穴の中へ李義府は落としてまわってしまったのです。石の穴は方三尺ほどの広さで高さは一丈以上あります。

この穴の中へ落とされたら、穴の中で動きまわれることは出来ても、上へあがってくることは絶対に不可能です。李義府の朝夕は、北方の辺地にあらずして、この穴の中でおくることになったのでした。

縄はとかれていきますので、手足を動かすのは自由ですし、眠るときは石穴の中に腰をすえて、穴の横石に背をもたせて眠ることができますが、昼も夜も女御様の御浄水のよどみの中で暮さなければならぬのは、いかにもつらい、お仕置きでした。

食物は与えよ。そのかわり、水は一さい飲

ましてはいけない……とのご命令で、食物の運び役は私が、あたることになりました。細い紐につるした小さな籠に食物をいれて下へおろします。李義府は最初は籠に手もふれず顔をそむけていましたが、二日たち、三日たちますと、遂には手にとって食べるようになりました。

「いっさい、水を与えてはいけない」という女御様のご命令が靦面に効いて、李義府は私が食物をおろすたびに「水をくれ、水を！」と叫ぶようになったのです。その様子を女御様におつたえしますと、女御様はにっこりお笑いになって

「では、あたしが見てこよう。お前もついておいで」

と私をお供にして、お厠にお入りになりました。お厠は方一丈ほどの広いお厠なので、私もおそばにいつも仕向して、いろいろの御用をおつとめしているのですが、女御様はいつものご姿勢をおとりになってから、穴の下の李義府を見おろしました。

「どう？ いいかげんに私の命令に従うと言ったらどう？ そうしたら、すぐここから出して、お前を元の役にもどしてやる。いや、もっともっと上の役につかせてやる。従わな



いのなら、死ぬまでここにいろがいい」

女御様がこう仰有るのですが、下の李義府は、じっと黙っています。

「まあ……お前は高官の位置よりも、この暮しの方が好きとみえるのね。いいわ、それならそれでいいんだから……」

女御様は、おからかいになるように、李義府にお言葉をかけます。

「それよりも水だ。……水をくれ、水を。水がなければ、私は死んでしまふ。ああ……水がほしい」

李義府の声は、呻き声にかわっています。

「あら水がほしい？ いつも水は、たくさんあるじゃないの。毎日、香りたかいお浄水がお前の頭の上に落ちてくるじゃないの。それを戴いていないのかい、お前は。上をふり仰いで、大きな口をあけていてごらん。あたたかい聖茶のお恵みがいつもあるじゃないか。さ、落ちるわよ、お浄水が……まあ、飲まないの？ バカねえ、お前も。頭からかかるばかりで、口の中へ、はいつていないのじゃないの」

私がお始末したあと、女御様はお笑いになりながら、お厠をおでましになってしまいました。あとには李義府の呻き声が、か細く、

きこえるばかりでした。

女御様は、お厠におはいりになるたびに、

李義府に話しかけていられました。それから二日たった、まひるどき、李義府は遂に大きな口をあけて、落ちるお浄水をゴクゴクと飲みこんだのです。まさに天妙の美味、ここにいたって極まる……と、おそばの私も思わずゴクリと喉をなりましたが、下からふりしぼるような李義府の声が、上に伝わってきました。

「武昭儀様、仰せのようにいたします。私を……私を……武昭儀様の股肱の一員にお加え下さい」

「ほほほほ……」

女御様も思わず、ご満足そうにお笑いになりました。

「そう……それで決まった。お前は、きょうから、あたしの腹心よ。ここにいろ沓、これも、あたしの腹心だけど、この男は所詮は奴仕。お前は違うんだよ。これから宮廷の高官になる男。あたしにたてをつく高官たちが何人いようと、あたしは平気よ。お前のようなあたしに忠義をつくす男が、これからいくらかでも、ふえてくるんだから……。あたしの力が、どのくらい強いのか、おいおい見せてやる

からね。楽しみにして、あたしへの忠勤をばげむのよ」

こう仰有って女御様は、おでましになりました。それから直ぐ李義府は穴の中から引きあげられ、私たちの入る浴槽につかって身体

の汚れを洗いおとしたのでした。

それから、五、六日たって、李義府は中書省に復職しました。しかも以前の中書舎人より何階級もあがった、中書侍郎としての復職だったのです。

こうして女御様は少しずつ、お味方をふやしていきました。金を欲する者には金を、地位を欲する者には地位を、頭を横にふる者には鞭を、それでもきかぬ者は辟地への左遷を……。罷免、転任などの命令は高宗帝から発せられるのですが、もちろん李義府が起草した文章を、女御様が高宗帝におわたしになって押印された勅令であることは言うまでもありません。

しかし重臣の、たとえば長孫無忌、柳積、門下侍中の韓瑗、中書令の来濟といった人々については、どういうわけか女御様は知らぬ顔でおすごしになっており、これに対して、どうしようというような様子は、まったくありませんでした。私などの考えでは、女御



様から高宗帝に進言して、こういう人々を宮廷から除いてしまわないと、ご計画が滑らかに、はかどらないのではないかと思うのですが、しかし、お伶俐な女御様のことです。私などの、うかがい知れぬ、ご深謀が含まれているのかもしれませんが。

それは、ともかくとして、月日のたつと同時に、女御様のお味方は、どんどんふえてゆきました。李義府のほか、礼部尚書の許敬宗、御史大夫崔義玄、御史中丞袁公瑜などの方々は次々と女御様のお味方になられた模様で、よくはわからぬながらも、私なども女御様が日に日にご気嫌うるわしくおなりになるご様子を拝して、ひそかに喜び申し上げておりました。

## 6

それから、三、四カ月ほどもたってからのことです。

宮廷内の御寝台……これは高宗様のための御寝台として設けられてある御寝室のものですが、その御寝台の下から小さな木の人形が発見されました。お掃除の侍女が見つけたものですが、普通の人形ではありませんで

した。

その人形の背中には高宗皇帝の名と生まれ年の星が刻みこまれ、人形の胸には一本の釘が打ちこまれている人形だったのです。

「王皇后以外に考えようありませんわ。皇后が、あなたを憎むあまりに、呪詛の人形をつかって祈り殺そうとしたのです」

女御様は高宗帝にこう強く仰有いました。

「あの寝室内で何かすることができる者は、あなた以外には王皇后、お二人のほかは侍女しかありません。あなたが、ご自分で、こんな真似をなさるわけはありませんわね。また侍女が、どうしてこんなことをするか、想像もできませんわ。だったら、王皇后よりほかに考えようがないじゃありませんか」

「ふーむ」

帝は考えこんでしまいました。

「あるいは……？」

「そうよ。あなたを、殺そうとしたのです。去年の殺された子ときも、そうでしたわ。相手が皇后様ですから、わたしも我慢して、強く追求しませんでした。今度は赤児ではなく、あなたご自身のことです。あなたを愛するわたしとしては今度こそ強く追求せずにはおられません。あなたも手を拱いていては

いけません。今度こそは、ご自分で捜査に乗りだしていただかないと……」

「うん、それはもちろんだ」

「皇帝を殺そうとすることは、最も深い大罪です。そんな者が皇后の地位にあることは断じて許せませんわ。あなたは、どうお思いになつて……？」

「もちろん、皇后としておいておくことは出来ません」

「それならば、これからあなたがどうしなければならぬか、おわかりでしょう。普通のこととは違います」

「今度こそ徹底的に調べてやる。放っておくわけにはいけません」

「お調べになると、蕭淑妃のことも忘れてはダメよ。あの人は、いつも皇后と一緒に何か、ひそひそと相談していましたからね。この際、思いきって一ぺんに禍根をたつてしまわないと、これからあなたは再び、同じような目にお会いになりますわよ」

「皇后と、蕭淑妃と……まず、どうして調べよう……」

「それは、礼部尚書の許敬宗にきくことですわ。あの人は今度の事件について、一ばん詳しく調査した人です。許の報告をきくのが、



真相を知る最良の方法よ」

帝は許敬宗をお居間に呼びました。許の報告は武昭儀様のお言葉とまったく同一で「やはり、皇后と淑妃の仕業か」と、帝はじつと下を向いて考えこまれてしまいました。

「王を皇后にしておくわけにはいかない」

反応はどうかと、上目づかいに帝のご様子をつぶやきになっていました。

その翌日、皇帝の命令で王皇后と蕭淑妃は犯人として捕えられ、二人は宮廷内の牢獄に監禁されてしまったのです。

皇后と淑妃が謀って、皇帝を呪い殺す「厭勝」をした……というのが逮捕の理由です。

それによって皇后を退位させるということになるのですが、私は、ひそかに思いました。

皇帝とても人形の呪詛を皇后の仕業と果して真底からお信じになったかどうか？ お心の中では皇后がやる筈はないとお思いになっていたかもしれないのです。しかしこの際、皇后の叛逆が判明して……とでもいう理由がなければ、到底、皇后を退位させることが出来ないのです。宮廷の重臣たちは殆ど王皇后の味方であり、先帝がおきめになった貞節淑徳の皇后を、なんのあやまちもない皇后を退位

させることは、自分が皇帝といえども至難の業だ……と高宗様は、お考えになったのではないのでしょうか。何故、退位させなければならぬのか……？ 言うまでもなく、武昭儀様のおためなのです。新しく宸妃の位置を設けようとなさっても、重臣一同の反対にあつて実現できなかった武昭儀様を、皇后の座におすえになるためには、王皇后がおられるかぎり、絶対出来ない相談なのでした。女御様に、ご満足の笑みを投げかけていただくためには、どうしたらいいか……高宗帝には、わかりすぎるほどわかっていた宿題なのです。

（人形の呪詛を私が怒って……という理由があれば、皇后の廃位も大義明分がたつ。私の威信も失われることなく、王皇后を廃して武昭儀を皇后になおせる）高宗帝は内心、こうお考えになったのではないのでしょうか。

皇后様と蕭淑妃様が逮捕されて牢獄に監禁された……という話を私が侍女たちから聞いたのは一、二日後のことでしたが、私はぞくぞくと身が震えて、思わず、からだのひきしまるのを覚えました。それは「ああ、女御様が、いよいよ皇后様におなりになる」と思う感激の身の震えだったのです。

もちろん、宮廷内は大騒ぎになりました。

三日後に高官会議が開かれるというのです。会議の内容は、皇后の廃位と、次の皇后の問題であることは言うまでもありません。重臣たちは皇帝にどういう意見を具申するか？ 事はもう始まった、出発の号砲は鳴ったのだとは、ぞを固められた皇帝も、さすがに心配でした。その夜、女御様は御寝室内で高宗帝と長い間、話しあっておられました。

その翌日、三公大尉長孫無忌の邸宅に、思ひもかけぬ皇帝の訪問がありました。皇帝と女御お揃いでの訪問です。皇帝が臣下の屋敷を訪れることは、いままでも殆ど例のなかったことです。

「非公式の訪問なのよ。だから正式な、もてなしなどは、もちろん必要なし。奥さんやお子さんもよんで、みんなで家族的にお茶でも飲みましようよ」

武昭儀様はニコニコお笑いになりながら、こう仰有いました。

「そのとおり。私も個人的な私事として訪問しただけだ。遠慮は無用だよ」

帝もニコニコして、昭儀様のお言葉につけ添えました。長孫大尉も、そう言われれば断わるわけにもいきません。夫人も四人の子供もよんで、気候の話とか花の話など、とりと



めもない話をかわされたのです。

無忌の四人の子のうち、長男だけは、すでに秘書省の官についていましたが、下の三人は、まだ任官していませんでした。

「それはいかな。なぜ早く、言ってくれなかったのだ。よろしい、今日から三人とも大夫の職に任じよう」

帝は早速、無忌に言いました。

「それはいけません。三人とも、まだ若すぎます」

「まあまあ、そんなおかたいことを仰有らず……。あなたは唐朝に一ばん功勞をつくした長老ではありませんか。陛下が、せっかく、ああ仰有るのですから、これはお受けしなければいけませんわ」

昭儀様も、かたわらから言い添えました。ここにおいて無忌も断わるわけにもいかず、感謝してお受けすることになり、四人の息子を引き下がらせたのです。

夫人が席をはずしたとき、高宗帝は、なにげない様子で無忌に話しかけました。

「王皇后のことだが、あの人形のことでは、私もずいぶん悩ませられた。人形も人形だがあれと私の間には子供がない。皇后に子が生まれぬということは、唐朝の将来にとっても

重大な問題だと思ふのだ。それに今度の事件だ。この際、思いきって王皇后を退位させる……ということは……どうだろう？……それな

たは、どう思う？」  
無忌は、いよいよ目的の話にふれてきたな……と思いましたが、もう老人ですから、むやみに感動に走るような態度はとりませんでした。

「これは仰せのとおり重大問題です。こういうことは慎重を期さなければいけません。すぐに、どうこうと、お答えできる問題ではありませんから……そうすな、いろいろと考

えなければいけません。とにかく重大問題ですから……」  
うやむやに答えて、問題の焦点をぼかしてしまいました。無忌は元来、地味な人で、何かにつけても人の表面に立つのを好まないお方でした。

高宗帝も、わきから黙って様子を見られていた女御様も、期待した応答に接することができませんでしたが、それ以上、話のつぎほもなく、やがて暇をつげて、お帰りになりましたが、女御様は、お心のうちで（あからさまに答えぬまでも、あの様子では無忌は賛成にまわってくれるとは思えない。だけど、そ

れがどうしたというのさ。三公大尉がなんだというの。いずれ、あたしの家来になる男じやないか。いまに見ているがいい。思いしらせてやるから……）と、お考えになりながら御帰館あそばしたのです。

さて、その次の日の夜。御前會議を明日にひかえて、長孫無忌は、ひそかに、わが家へ會議に出席する侍中韓瑗、中書令来済、吏部尚書柳積、左僕射遂良の四人をよんで密議をこらしました。皇帝の動議に対して、どう返答をするか五人で額をあつめたのです。

無忌は黙っていました。最も強硬に皇后退位を反対したのは柳積でした。

「よし、わしが言おう。理をつくして陛下に直言すれば、あるいは陛下もわかつて下さるかもしれない」

こうして翌日の重臣會議が開かれました。

高宗帝が玉座に座をしめ、一段低いところに卓をかこんで長孫無忌、韓瑗、来済、柳積猪逐良などが座につきました。

皇帝は例の厭勝の人形をとりだして一同に見せました。

「これは、王皇后が私の寝台の下に、かくし入れた人形だ。このような悪質の陰謀をはかる者が私の身边にいることは、断じて許して



おけないことである。詮議の結果、この人形を、ひそかに私の寝台に封じこみ、私を殺そうと謀った犯人は王皇后と判明した。王を皇后の地位においてはおけない……」

帝は居並ぶ重臣たちを納得させようとして多々ます弁じようとなさったとき、

「帝よ、お待ちください」

と一人が、その言葉を、さえぎりました。

吏部尚書柳積でした。

「帝は、その人形を王皇后の陰謀と仰有いますが、王皇后がなさったことと、どうしてご判断なさったのですか。ご詮議したと仰有いますが、果して、どれだけのご詮議をなさったのでしょうか。その人形は、もとより王皇后がご自分でお作りになったものではございません。誰かが呪術師に命じて作らせたものです。また、人形の背に刻みこまれている帝の御名と御生年の星も呪術師が刻みこんだものです。これらの作業を誰が呪術師に命じたか、もっと詳しく調査する必要があります。それまでは軽々しく事をお決めになってはいけません」

帝も、ぐっと言葉がつまっておしまいになりました。他の重臣たちを見まわしても、誰も発言する者もなく「もっともだ」というか

のように、うなずいているばかりでした。

これでは会議もつづけられません。こういう雰囲気になりますと、高宗帝は強引に、ご自分の意志を重臣たちに押しかぶせるという力強さを持っている皇帝ではございません。数刻の、しらせきった空気のうち、

「きょうの会議は、これで散会する。また数日後、開くことにするから……」

と仰有って、帝はそのまま奥へ引き下がってしまいました。

その夜、女御様とのご寝内で帝は女御様から、さんざんお叱りをうけておられました。

「ほんとに、じれったいったら、ありゃしない。あたしだったら柳積や無忌が何を言おうと一ぺんにおさえつけてやるだけど……」

と、お心のうちで、どんなにか、はがゆくお思いになっていられたことでしょう。

「柳積は、王の伯父にあたる者ですよ。縁につながる者を助けようと思って、皇后の味方をするのは当り前じゃありませんか。あんな男が帝のおそばに重臣としていることは、これからも、あなたの御政治をますます、やりにくくするばかりですわ。君側の奸は一刻も早く除いてしまわなければいけません」

女御様は、長い間、思い迷ったり、ご躊躇

なさったりするお方ではありません。その断のお早いことは、まったく驚くばかりでございます。女御様は、お枕もとの鈴を鳴らして私をお呼びになりました。次の間に控えていた私が早速、伺候いたしますと、

「沓。お前、これから李義府のところへ行つて、すぐここへ連れてきておくれ」

と、お命じになりました。

時をうつさず馳せつけた李義府に女御様は早速、お命じになりました。

「柳積を罷免するからね。吏部尚書の職を解いて、遠くへ……何処でもいいから都から遠く離れたところへ追いやってしまおうから、何処がいいか、お前、考えておくれ」

「そうでございますな。目下、榮州の刺史に一人、空席がございます」

「では、そこへ転任の令書を、お前、書いておくれ。陛下の署名をいただくから……」

李義府が急いで書きあげた令書を、女御様はご寝台にお横になったままお受けとりになって、おそばの帝から御署名をうけました。

翌日、出勤した柳積は寝耳に水のこの令書を手渡され、顔蒼ざめて退廷したのです。

それから二日後、無忌らは再び会議が開かれる旨の示達を受けました。



（これは、いよいよ大へんなことになってきたぞ。あの日、諫言した柳積は翌日、たちまち罷免になっている。こんど諫言すれば、また、その諫言した者が罷免されることは間違いない。といって、重臣として唐朝の危機を目の前にして手を拱いて見ているわけにはいかないが、これは困ったことになったわい）

さて、どうしたものか？ 無忌らは額をあとめて相談しました。

「よし、わしが言おう……」と意を決した韓瑗を、猪逐良が押しとめました。

「いや私が言いましょう。韓瑗様は門下侍中来済様は中書令、無忌様は三公大尉です。どのお一人が欠けても唐朝のご政治は危くなります。そこへゆくと私は右僕射です。たとえ私一人が遠くに流されたところで、たいしたことはありません。私が、まず諫言いたしますから、皆様方は、その様子を見てから、事をお考えになって下さい」

一同は不本意ながらも、ひとまず猪逐良の言葉に従うことになりました。

一方、高宗帝の方も女御様から、さんざんお叱りをうけているのですから、今度という今度は相当、強い態度で、おのぞみになることは間違いありません。

その当日。発会の合図とともに高宗帝も無忌、韓瑗ら高官も、おのおの黙々として席につきました。一同は紙をピンと張りつめた床に坐している思いで、誰かが一本の小さな針を落としても、そこから紙の床がビリッと破れさけるかと思わすような緊張感に満ちておりました。

高宗帝が発言されました。

「孟子の言葉に『百千の不孝のうち、子なきは最大の不孝なり』とある。王皇后には子が出来ない。私は今まで何回か躊躇したが、今日はその覚悟をきめてきた。王皇后を廃して武を皇后にしようと思う」

高宗帝は遂に、はっきりと意志表示をなされたのです。

「そうよ、その調子よ……。それで押しきつたらいいのよ」

女御様が、ご列席なさっていたら、こう言っ、おほめになるところでしょうが、帝のご意志は、再び家臣によって押しとめられてしまいました。猪逐良が席を立てて玉座の前に至り、ひれ伏したのです。

「陛下よ、私は陛下の忠良なる家臣の一人として、その御処置に反対を申し上げる義務があると存じまして、今ここに反対の言葉を述べさせていただきます。王皇后は陛下のお父君、太宗先帝がお選びになり、お決めになった皇后様です。先帝陛下ご崩御のおり、先帝は私の手をおとりになって、息子と嫁を、よろしく頼む、と仰せられました。このことはおそばにいられた陛下も、お忘れになつてはならぬでしょう。陛下は充分、調査もせぬ人形の事件をご理由に王皇后を廃そうとなさ

いますが、しかもそのあとの皇后に武昭儀をお立てになろうとしています。武昭儀は并州文水の商人の娘というだけで、そのほか詳しい素性もわからぬ女ではありませんか。ことに武昭儀は先帝の才人として妃嬪の中に入っていた女です。こんな女を今ふたたび陛下の皇后になさることは、国民が心の中で思うか、陛下はおわかりになりませんか。また陛下が子なきを理由に皇后をおかえになるというのでしたら、あるいはそれは理なきにしてもあらずです。しかるべき人物、真に皇后にふさわしい人物をお選び下さるのなら、私たちも納得いたします。先帝の才人で、しかも一度、尼寺へ入った女を皇后になさることは絶対、許されることではございません」

充分、覚悟してきているとはいえ、猪逐良の態度は、まったく不遜でした。



「なに！……」

帝の顔もお怒りのため青くなりましたが、逐良の顔も血の色はありません。しかし逐良は、なおも言葉をつづけました。

「しかし、私がこうまで申し上げても、武昭儀を皇后になさるというのでしたら、陛下は皇帝です。今さら私が何をか言いましょう。私はこの笏<sup>しやく</sup>を陛下にお返しいたします。この笏は先帝陛下からいただいたものですが、ふたたび、この笏を私が用いることはないでしょうから……」

この象牙の笏は皇帝に拝謁の際、必ず持つことになっているもので、逐良が笏を高宗帝に返上したことは、もう再び陛下の前へは出ない、という意志をあらわしたもので、逐良の覚悟のほどが、よくわかります。そして逐良は玉座の前の階段<sup>きざはし</sup>にゴツン、ゴツンと自分

の頭を強く打ちつけました。逐良の額は破れて、真っ青な顔の目の上を、口の上を真っ赤な鮮血が、たらたらと流れおちたのです。

「この男を退らせろ！」

無忌が、なにやら口添えしたようですが、もちろん、帝のお耳に入りません。帝は緊張に身をかたくしたまま、奥へ入られてしまいました。

こうしてこの会議も、また流会に終わったのです。

腹心の者の報告で、女御様はもちろん、この場の模様をお知りになっていましたが、猪逐良の横車で、帝もあれ以上、会議を進めることが出来なかったことを、ご諒承なされたでしょう。前回ほど、帝をお叱りになりませんでした。ただし、猪逐良の左遷は、これはもう敏速、矢のような御処置で、その日のうちに潭州へ流されることが決まってしまうました。猪逐良はその後、さらに桂州へ流され、愛州へ流され、遂に都長安には帰ってこれず、四千七百里離れた愛州の僻地で死亡しました。これはまあ後の話でございます。

こんな具合で、会議がまったく進行せず、皇帝も困りはてていられたようですが、天は決して女御様を空しく放っておくようなこと

はしませんでした。女御様にとって思いがけぬ幸運な事態が発生して……といって女御様のことでずから、こんなことが起きなくてもそれは時間の問題だったのですが、しかし、これが事の進行の速度を早めてくれたことは事実でしょう。

ずっと都を留守にしていた李関が、派遣地から、たまたま都へ帰ってきたのです。李関は三公の一人、司空の位にある重臣の一人ですが、武人で高句麗征討のため長い間、都をはなれており、ちょうど一年ぶりの帰還でした。この李関は別に女御様のお味方というわけではありませんでしたが、宮廷へ参内拝謁のとき、帝が皇后問題について李関の意見をおききになったのです。帝としては相手は武人でもあり、別にこれという期待をお持ちになつていたわけではなかったようですが、李関は思いもかけぬ意見を帝に答えたのです。

「陛下が皇后を選ばれることは、陛下の家事でございます。他の者の意見をきく必要もないことで、陛下ご自身で選ばれたらよいでしょう」

これを聞いた高宗帝は、お胸の中の黒い雲が一時に吹きとんだ思い……ではなかったでしょうか。

——ご投稿下さる方へお願い——

各種原稿募集に対しての応募は歓迎致しますが、作品に住所、氏名を書かずに送付されると、稿料送呈その他で整理がつかかねる場合が生じますので、投稿作品には必ず一作（イメーヅ画も）毎に、住所、氏名、ペンネーム附記を、原稿用紙使用、縦書きと共にお願い致します。



「うーむ、そうか……ふーむ」と何度も何度も、うなずいておられました。しかし一見柳積や韓瑗より、はるかに硬骨漢かたぶつとしか見えない李関が、何故、どう決めようと陛下のご勝手だ」といった、自分の責任逃れのようにもみえる答申を、帝にお返ししたのでしょうか？ 李関に対しては女御様のお手がまわっているということは考えられません。おそばにいる私などにも一向に、そんな気配は感じられませんでしたから、畢竟、これは李関が自分だけの意見として答えたものにほかなりませんが、李関については以前、こういう話をきかされたことがあります。李関は先帝陛下のときから忠義一徹の男として知られていました。先帝が高宗様を皇太子にお立てになるとき、高宗様にこう仰有ったそうです。

「無忌や韓瑗なら新帝に忠節をつくすことは即ち、わしに忠義をつくすことだと考えるが李関は、そうはいくまい。わしから与えられた恩義を感じて、わしのためなら水火も辞さぬが、お前に対しても同じように考えているとは思えない。そこで、わしは李関を地方へ左遷してやった。わしは彼が素直に任地へ行けばよし、もし不満を抱いて行かないときは殺してしまおうと思っていたが、彼は黙って任地へ赴任して実直に勤めている。そこで私は、そのままにしておいてあるが、お前が皇帝になったとき、お前が勅を発して彼を都へよびもどし、高官の地位を与えてやれ。そうすれば李関は、お前の恩義に感じて必ず忠節をつくすだろう」

そこで高宗帝は父帝の教訓どおり、李関を呼び戻して三公の地位を与えたのでした。この恩恵によって高宗帝が困っていられることを知った李関は、帝に味方する意見を、こんなふうに述べたのでしょうか？

いや、或は一度、試ためされた人間として、人生の冷酷無情さを感じた結果、どっちへ転んでも損はないというふうな、責任をかぶらない処世態度をとるような男になってしまった。「どちらでも、ご勝手に」という返事をしたのでしょうか？ 或はまた、もう一つ考えられることは、文官の勢力でかたまっている現在の高官陣営の中の唯一の武官派として、文官側への反発として、文官の意見と反対の意見を述べた……ということも考えられます。

李関の心の奥底はわかりませんが、いずれにしても李関のこの答申は、高宗帝のお胸の中の暗雲を一挙に吹き払ってくれました。李義府や許敬宗は「武昭義様を皇后に……」と

言うてはおりますものの、残念ながら無忌や韓瑗のような譜代の重臣とでは、その重さの上で同一には論じられません。ご自分一人では押しきれず、重臣のうち誰か一人でも、自分の意見を支持してくれる者がいたら……というのが高宗帝の切なる願いだったので、そのため女御様にうながされてとはいえ、会議前に、わざわざ長孫無忌の屋敷へまで訪れてそれとなく頼んだのですが、その、誰も支援者のいないお悲しみを、重臣中の重臣、長孫無忌と匹敵する三公司空の李関が高宗帝側に

ついてくれたのです。

「私の心は決まった——」

その翌日、高宗帝は晴ればれとして、王皇后廢位、武皇后立後の詔を内外に発したのでした。

それから一カ月後、永徽六年十月十日、過去の歴代唐帝の、どの例にも見ないほどの華やかな武皇后様の御即位式が都長安の大極宮において挙行されたのでした。

女御様が高宗帝に迎えられて宮廷へ入られてから、まる四年目。武皇后陛下様、このとき御年二十七才でございました。



— (告 白) —

## 奴隷牝みさ子の過去

佐 野 み さ 子



い肉体になってしまいました。谷山久美子さんのような強烈なプレイを、もっています。太いローソクの人間燭台などみさ子の一番、好むプレイです。又縛られたまま複数の男性から凌辱されるといふ『強姦プレイ』もやってみたいと思っています。

それと申しますのは二十一の時、みさ子は田舎から横浜に出てまいりました。そしてみさ子は日の出町のパチンコ店に

住み込み(女店員)として働きました。身元保証人のない女が、すぐに働ける所と云えばバーかパチンコ店くらいなものです。

そこで知り合った男性が実は不良青年だったのです。始めのうちは、とてもやさしく、「お金がいる時は、いつでも都合つけてやる

よ」と云っていたので、つい私はそれにつられて三万円をかりてしまったのでした。

それがまちがいのもとでした。月三割の利子の取り立てはきびしく、利子のお金がない時は、仕事が終わってから私は彼に呼び出されてアパートに連れ込まれました。

「利子が払えないのなら、お前の身体で払ってもらおう」と云って無理やり三人の青年のセックスの相手をさせられました。その時、彼等は私に「あばれられては困る」といって裸の私をロープで縛りあげたのでした。

その時は、三人の男性のセックスの相手を(しかも縛られて)するのですから、苦痛を感じましたが、今思えば何のことはない、SM乱交プレイです。裸で縛られたのは、それが始めてでしたが、それ以来、みさ子は縛られる事にすばらしい肉体的なよろこびを感じたのでした。

又、奇クを知ったのも、やはりその頃でした。今日、みさ子のMが、これほどまでに進んでいると云うことは、一つにはタイミングのせいでもありました。その後、私は二回も利子が払えなくて彼等のいいなりになりました。二回目の時は私の方から「縛って!」とたのんだくらい、縛られて肉体を攻略され

みなさまの牝犬みさ子は、昭和十七年の生まれです。今年で二十九才です。あと一年で三十才になります。責められるよろこびを知ったのが二十一才の時ですから、SMの味をしめて、もうかれこれ八年になります。

今では普通のプレイでは、あまり満足しな



ることに、すばらしい肉体的快感を感じました。

その青年達とは、やがて店の主人に中に入ってもらい、借りたお金もかえして手を切る事が出来ましたが、ホッとした反面、少しがっかりもしました。

まもなくパチンコ屋の店員をやめた私はバーのホステスになりました。理由は収入が良かったからです。そのバーのある所は横浜でも有名な元赤線のあった真金町<sup>まがね</sup>にあってホステスに自由恋愛というかたちで肉体を売らせているバーの多い所でした。もちろん私の勤めたバーも例外ではありません。

経営者は第三国人で町の顔役でもありました。親が病気とかで二十万円もかりたホステス<sup>ホステス</sup>が、それをふみたおして別の店に勤めていたのが見つかり連れもどされて酒倉で、ものすごい私刑<sup>リンチ</sup>を受けるのを私らにも見せられました。お金をかりて逃げたら、こうなるのだと見せしめの為だったと思います。

二十五、六のそのホステスは、全裸にされ後手に縛られていました。やがて二人の若い男に両足首をつかまれ、ぎりぎりまで開かされると、主人<sup>マスター</sup>の手によって恥毛をむしり取られた上に酢酸<sup>さくさん</sup>を流され、又むしられては流さ

れる、という事を失神するまでくりかえされていました。

もちろん、さるぐつわをきつくしめられているので声は一言も立てる事は出来ません。

「あまりやると、使いものにならなくなる」と云って次におこなわれたのはビニールホースによる、むち打ちでした。これは、さかさ

に吊り下げての乱打ですから、半死半生の私刑と云えるでしょう。

とにかくこういう世界での不義理に対する私刑のものすごさは、今私がやっているSMプレイとは、くらべものにならないくらいひどいものでした。しかしお金さえ借りてなければ、いつでも自由に店をやめる事も出来、春を売る事も本人の自由であります。お金がほしい人のみが主人にたのめば、お客を紹介してくれる、しくみになっておりました。

みさ子もパチンコ屋以来、セックスの味を知り肉体が男性を求めていますので、月に三、四回男性を世話してもらいました。三分



の一はお店に出すのですが、それでもいい小遣かせぎになりました。

毎月一回、私の肉体を求めてくるお客にやはり奇ク<sup>キョク</sup>のファンがいて「金をたっぷり、はずむから、縛らせてくれ」と云う、町工場の経営者がおりました。私にとっては、願ってもない事です。Mの気分を味わった上に、お金も余分にもらえるのですから、私はすぐにOKしました。

その人は私を全裸にするとまず後手に縛り両足を左右別々にベッドの両足に縛り私を人の字型にした上で私を求めてきました。パチンコ屋の事件以来、みさ子が久しく待ちのぞ





んでいた快感でした。その時、私は二十三才でありました。毎月一回、その人は必ず現われ、みさ子をM女として、飼育してくれました。その人からは自分の二号になってはくれまいかと云われましたが、まだ私は若かったし、その上もっと多くの男性と遊びたかったので、ことわりしましたが、今思うと、誠に正しい事をしたと思います。

なんでもアパートをかりて月々十万円の手当を出してくれると云っていたのですが本当に残念でなりません。今、そのような人がみさ子の前にあらわれたら、みさ子は主人や子供と別れてすぐにでもその方の奴隷牝にさせていただきます。そのようなお方がおられまし

たら私に呼びかけて下さい。そしてこのグラマーな肉体を、思いのままセックスの奴隷として扱って下さってもかまいません。飼育いかによっては、谷山久美子さん並のM女に成れるとみさ子は思います。

尚、その他の私の職歴？ をかいつまんで申しますと、トルコ風呂と、中小企業の会社に勤めました。トルコ娘になったのは、その仕事面白そうでもあり、毎日男性の身体にふれる事が出来るからです。おかげで私のスペシャルサービスのうではナンバーワンでした。気に入ったお客にはお金を取らず全裸でお相手をした事もあります。もっともマネージャーにはしかられましたけどとにかく楽しい仕事でした。不満を云えばM気がぜんぜんなかった事です。

次の中小企業の事務員であります。一応みさ子も女ですから、それに高校も出ていたのでBG生活もやって見たいと思っただけです。谷山久美子さん（この頃私は自分のヌードをセルフタイマーで写して城山ほずみのペンネームで『奇クサロン』に発表させていただきました）

現在の私の夫は、その会社で私の上役だった人です。年は中年を過ぎていて、人間的にはやさしくて申しぶんないのですがセックスの方が弱く月に三回ぐらしか私の相手をしてくれないのです。現在はフリーセックスの時代でもあり、SM的乱交プレイを求めるみさ子には、どうしてもがまん出来ません。『奇クサロン』では夫婦交換希望の方がふえています。夫にぜんぜんその気がないので私にとっては他の世界の出来事ではあります。最近の『奇クサロン』には阪東太郎さん、紀川正信さん、今田雄三さん各氏がそれぞれ夫人の縛り写真を発表されておられ、みさ子は、ひじょうにうらやましく思っています。阪東太郎さんの責めはみさ子好みのようなのでチャンスがありましたら、私も奥様といっしょに縛っていただきたいと思っています。（もし奥様の許可があれば阪東さんの牝犬にして下さってもかまいません）とにかく現在のみさ子はすばらしい男性の奴隷女にしたい。谷山久美子さんのような責めを受けたいのぞんでいます。どうか、このあわれな牝犬みさ子を飼育して下さい。その方のお出でをお待ちしています。



カット・小川茂正



# 花<sup>はな</sup>の蕾<sup>つぼみ</sup>の散<sup>ち</sup>るとき

□ 水田真紀子習作シリーズ □

水<sup>みづ</sup>田<sup>た</sup>真<sup>ま</sup>紀<sup>き</sup>子<sup>こ</sup>

「そいじゃ、おとっつあん！」

ふりかえった娘が、名残りおしそうに、あ  
いさつを送るのを、

「体に気をつけてな。宿下りを待ってるぜ」

親父の吾平は、じっと見送るのでした。こ  
こから先は、実の親でも、もう入ることがで  
きないのです。

こうして娘のお加代は、両側から女中に抱  
きかえられる様にして、城の中へ消えまし  
た。乾門がギイツと、しまります。高い高い  
石垣、大きな、いかつい門の扉。これが城と  
外界を、しっかりと、さえぎっております。

娘のお加代は、近所でも評判のきりようよ

しでした。親父の吾平は、娘ざかりの十八の  
初々しく育ったお加代を、目の中に入れても  
痛くないように、可愛がってきたのです。そ  
れが、殿様のお耳に入り、このように、お城  
へ奉公に上ることになって、ここで見送る運  
命になってしまったのでした。

閉じられた大きな門。その中へ消えて行っ  
た娘のお加代。その後ろ姿が、いつまでも吾  
平の目に焼きついて、果たしてお加代は、お  
城に召されて幸せになるのだろうか、今に  
なっても不安な気持ちが去らないのでした。

「吾平さん、でかしたぞ。お加代さんが殿様  
のもとへ、ご奉公にあがるんだって？」

「うらやましいなあ。これでうまくいけば、  
お部屋様だ」

「なあに、あんな美しいお加代ちゃんのこと  
だ。もう出世は、きまったようなものさ」

みんな口をそろえて、そう言ってくれたの  
です。真実うらやましがられたのでした。し  
かし、最愛の娘を手放すのです。殿様から白  
羽の矢をたてられては、いやと言えないのは  
分かりきっているのですが、吾平には、それ  
が皆のように喜べないのでした。

「それじゃ、おとっつあん！」

そう言って、ふりかえったお加代の顔が、  
いつまでも目に残ります。ハラハラとお城の



桜が散る中を、吾平はひとり引き返すのでしたが、何度も何度も後ろをふり向くのです。

五層の天守閣が、和らかい春の日ざしの中に、誰も寄せつけないように厳然とそびえ、満々と水を湛えた大きなお堀がめぐっているこのお城の中へ、娘をひとり置いてくる哀しさに、吾平は胸が痛むのでした。

お加代も、生まれて初めて足をふみ入れたお城の中の、あまりの広さに驚くのでした。

何度も門をくぐって、そこでまた新しい迎えの者に引きつがれ、だんだんと足をふみ入れる度に、もう外界と全く異った世界に次第に入れられる運命に不安を覚えるのでした。

大きな玄関から屋敷の中へ入っても、長い廊下や、いくつもある部屋の前を通って進むのです。ご殿女中というのでしょうか、幾人もの女がいる中を通して、案内の者が、ある部屋の前まで、くると

「申し上げます。只今、お加代と申す女、召しつれましてござります」

坐って、そう言うのです。

「お、参ったか。これへ」

中から声があり、ふすまが両側からあけられると三、四人の腰元を左右に控えた老女がきちんと正面を向いて坐っているのが、お加

代にも見えました。

「これ、頭が高い」

案内の者に言われて、あわてて平伏するお加代です。

「ホホホ、無理もない。お加代と申す女は、その方か。よいよい、これへ参るがよい。妾が綱島じゃ」

老女の声が、お加代には聞きなれない言葉に思えるのを

「これ、入るがよい」

言われて初めて、おずおずと部屋の中へ入ります。

「ほほう、聞きしにまさる美形じゃなあ。殿が、ご執心なさるのも無理はない。けど、これでは、さぞお万の方さまが……」

ニヤツと意味ありげに笑うのでした。お加代は、何が何だか分からず、あまりの固苦しさに小さくなって、ただ、頭をさげております。

「そちや、いくつになる？」

「はい、十八でございます」

「ほう、若いものよ。さて、若い娘というものは、うらやましいもの。して、そちはまだ娘か？」

「ハ？」

問われた意味が分かりかねて首をかしげるのを、

「イヤサ、まだ男を知らぬのかと、申したのじゃ」

と言われると、それだけでもう赤くなって

「いえ、そのような」

顔を伏せるお加代でした。

「言いかわした男も、ないと申すのか」

「はい」

「ホホホホ」

老女は笑って、一人の腰元に

「それでは支度を」

と、うながすのです。言われた女と、その横にいた二人が「ハハッ」と平伏してから、

「お加代様、それでは、こうおいでなさります」

案内されて連れてこられたところは、風呂のようです。

「あの、お湯へ入るのですか」

「そうじゃ。そして着更えをなさるのです」

二人の腰元のうち一人が、籠に入れた絹も

を持っています。

「はい。それでは入らせていただきますのでお引き取りを」

お加代は、着物を脱ぐので二人に部屋を出



で行ってもらおうとしたのですが、

「なんの、二人で流させていただきますゆえお召しかえなさいませ」

立ち去ろうとしないのです。

家にいるときは、親にだって入浴するとき裸をみせたことはありません。それなのにこの二人は一しよに風呂の中まで入ってこようとしているのです。

「さ、お脱ぎなさいませ」

裾を捲って、たすきまでかけて、どうしてもお加代を流さずには置かない様子です。

「あたし、ひとりで入ります」

言ったって聞かないで、とうとう二人して帯をとかれ、いや応なしに風呂に入れられるお加代でした。

「もう、いいんです」

体を曲げて小さくなっているお加代の全身を洗いたてたのでした。お加代にとって、これは苦痛でした。いくら風呂の中とはいえ、全裸の素肌を二人して手とり足とり、たんねんに流されるのですから、その羞かしさに消えいりそうになって悶えたのです。

そのあげく、腰のものに柔らかい絹地をつけられ、薄いえんじの長襦袢を着せられ、この二人が紅、白粉で、ていねいに、お加代の

化粧までさせたのです。

「ほう、これは見違えるばかりじゃ」

いつの間にか、老女の綱島が後ろに立っています。

「あ！」

長襦袢だけの姿をみられて、お加代が身を固くするのを、

「美事なものじゃのう」

近よってくるではありませんか。思わず胸を抱いて、ちぢまります。その様を、何度もうなずきながら老女は、

「さ、お万の方さまが、お待ちかねじゃ。すぐにお連れするのじゃ」

と、うながせるのです。

「はい、早速」

二人の腰元は、お加代の両手をとって後ろへ回そうとするので、

「あら、これは？」

いぶかるお加代は、そのまま後ろで手首を合わされて、くくられてしまったのです。

「どうして、あたしは、こんなにされるのです。ほどいて下さい」

縛られた不安に手首を、ほどこうとしますが、細い紐でくくられたお加代の手首は、もう抜けませんでした。

「これ、おとなしくするのじゃ。これから奥方さまに拝謁するのである」

老女はピシッと一声。

「でも、どうしてあたしは縛られたりして」

お加代は悶えるのですが、もうどうしようもありません。長襦袢のまま、後ろ手に縛られて、その上から、うちかけをかけられるとそれで歩かされます。

お加代は、こうして奥方の前へ連れてゆかれました。左右に何十人という腰元の居並ぶ大広間の正面には、正室お万の方さまが一段高く脇息にもたれて、じっとお加代たちが入ってくるのを見ています。

その場の、あまりのもののしさに、そして自分が長襦袢一枚で後ろ手に縛られているということが、尚のこと羞かしくて足がふるえるのでした。老女がお加代の後ろから押してゆくように連れて、中央にひきすえます。

「お加代と申すのは、その方か。苦しゅうない、面をおあげ」

言われても、うつむくお加代ですが、老女にぐいと、あごを起こされます。そのお加代の顔を見つめて、お万の方は声もありませんでした。これから殿に差し出す女、それが美しければ美しいほど、殿はこの女をひきつけ



で、それだけ、正室の自分がうとまれるのです。いわば敵となる女です。その女が目の前にいます。そして、それが女の身でさえ息がつまるくらい美しい顔だちをしているのに驚くのでした。

入念に化粧されたお加代の美しさは、居並ぶ女たちでさえ、目を見張ったほどです。湯上りの匂うような肌に化粧は一段と映えて、若い素肌が輝いているのです。つばらな目、可愛い形の鼻。そして男ごころをそるような唇、のどの一つをみても、完全に初々しい若さに溢れ、憎いほどの美しさがあるのでした。

うすものの長襦袢だけしか、まもっていませんので、はちきれるような若い肉体の線がそのままみられるのです。後ろ手にされているので胸乳の円いふくらみまでが、正室お万の方には一層の憎悪を感じられるのでした。この肉体が、殿にいじめられて悶えてゆくのか。そのあげく、殿の寵愛を受けてのたうってゆくのかと思うと、もうどうしても我慢がならないのです。

「綱島、そのお加代と申す女の乳房を見せるのじゃ」

後ろから老女が、襟元をおしひろげようと

します。

「あっ、おゆるしを」

あまりのことに、お加代は身をくねらせるのでしたが、後ろ手にされて坐らされていてはどうにもなりません。胸もとは大きく左右にひろげられ、円いふくよかなお加代の乳房は、あわれもなくなくむき出しにされ、顔をねじってこの羞かしさに耐えようとするのを殊更に胸を張らせて晒すのです。

「うむ、見事なものよう」

お腕を伏せたような、若い娘の張りつめたふくらみは、ほんとうに見事なものです。もうお万の方にはみられない若さが、そこにうずいているのでした。

この女が、今夜から殿の心を奪ってゆくのかと思うと、たまりません。どうしても、この女を、もっと辱かしめてやりたくなってくるのでした。そこで綱島に合図します。お加代は、そのまま中央に仰向けに寝かされまです。そして綱島が両足を持つと大きく上へもちあげるのでした。

「あっ、いやッ」

お加代の悲鳴があがります。持ちあげられると、お加代の裾が割れて白い足が宙に舞うのです。それを、ぐうっと前へまげて、両の

爪先がお加代の仰向いた顔の両側の畳にくつつくまで、ひざをまげさせていくのです。

「う、う、う」

胸をつぶされるようになって、息をつまらせるような悲鳴。完全にお加代の下半身は捲られ、あられもない姿態にされました。

長襦袢一枚で、後ろ手にされているお加代の体は、こうして仰向けに寝かされたまま、その顔の両側に足を開いて、えびのように丸く曲げられてしまったのです。そして、こんな姿勢にされて押さえつけられたまま、長襦袢の裾をくるりと捲られてしまったのです。

「あっ、あ」

お加代の、むっちりとした柔らかくふくらんだお尻が、その白い丘を大きく持ちあげられたまま、素肌を晒されたのです。その羞かしさに、お加代は全身に紅を散らせて、もがくのですが、こんな姿勢にされては身動きもできず、ただ「う、う、う」と消えいりそうな呻き声を洩らすだけなのです。

両足を開かされて、腰を思いきり曲げられているのですから、羞かしいところを、いやでも、のぞきこまされるような姿になっているのです。

お万の方さまが、近づいて参りました。



「ホホ、あでやかな姿じゃのう」

お加代の、上を向いた股間をのぞきこまれるのでした。はちきれそうな弾力のある太腿の丸い肉が、惜しげもなく宙にあげられたまま、ふるえているのです。その太腿のつけ根の内側の柔らかい部分を奥方が、さぞ憎らしいように、つねったのでした。

「あっ！ 痛っ！」

焼け火箸を当てられたような痛みが全身に走ります。女だけが持つ嫉妬の炎が今、メラメラと奥方の全身にもえてきているのです。う。むりやりに剥き身にされたお加代の、処女の匂いのする、肌のふくらみ。それをつまみながら、

「憎いような手ざわりよのう」

クリクリと、もんでみたりするのでした。

「あ、あ、そのような」

お加代は羞かしさに身をよじるのですが、奥方の指先は、しつように、つまみ続けられその柔肌の手ざわりに意地の悪い笑みをうかべながらときどき、ぎゅっと力を入れます。

「う、うっ！」

その度に、お加代が呻きます。それを腰元一同は息をつめて眺めているのでした。あられもない恰好にされた同性が、このように羞

かしめられているのを、半ば同情をもって、また半ば興味をもって眺めているのでした。

剥き身にされたお尻の二つの丸い丘が、あからさまに上に向けられて、白い肌を晒しています。そして痛々しく無理に仰向いて胸につかえるまで曲げられた素足を無残に開かされて、その柔らかい弾力のあるふくらみを、こうして、つねり続けられました。

「う、う、うっ！」

その羞かしさと痛さを、身動きもできない姿勢のまま、じっと受けなければならぬ、お加代でした。花羞かしい年頃の、まして、いくら同性とはいえ、腰元の居並ぶところでそれだけに言いも得ぬ羞恥に、ただ全身を真っ赤にそめて悶えるのです。

「これ、お加代とやら。どうせ今宵は殿のおん前でヒイヒイ言いながら、もがくのじゃ。少しは、わらわの前でも、その様を見せたまれ」

そう言って、責められるのでした。と言っても、これから殿にお目見えする体、きずがつくようなことは控えられましたが、それでも女が知る女の責め、乳房や、そのほかの処を思いきり羞かしめ、いたぶるのでした。

「あ、あ、あっ！」

そのたびに、お加代のせつない悲鳴が、辺りを震わせて、それが、いよいよ女の神経をたかぶらせるのです。両手の自由を奪われたまま、羞かしい裸体をこづかれ、ひきまわされ、足を拡げさせられたり、お万の方に足のうらで乳房を踏みもまれたり、ありとあらゆる羞かしめを受けのでした。

ぐったりなったお加代は、改めて風呂に入られ、今度は本格的に化粧され、若い肉体は、もうそれだけで一段と、あでやかによみがえって、いよいよ殿の伽にまわされることになりました。

その頃には、もうすっかり夜のとりどりが辺りを包み、長廊下を三、四人の腰元に連れられてゆく途中の、灯に淡く照らされている夜桜の花びらが、ヒラヒラと舞い落ちる風情もひとしお哀れでした。

というのは、殿の伽にこうして廻されときも、長襦袢一枚にされた身を後ろ手に縛られているのです。まるで罪人がひかれるように後ろ手のお加代は、うなだれて運命の身を運ぶ他はありませんでした。

いくつも、お廊下を曲って、お城の奥に近い部屋へ通されます。百目蟬燭の明るい、部屋の中央に、お加代は坐らされました。腰元



の一人に縄尻をとられたまま、正座させられたのです。

正面の一段、高いところには、深々とみすが下がっていて、その向こう側は見る事ができませんでしたが、

「シュー！」

けいひつの方がかかって、腰元らが平伏する中を、そのみすの向こう側に衣ずれの音がするのでした。お加代も縛られたままで頭を下げさされていましたが、そのうちに腰元に縄尻をつかんで、ひき起こされます。

傍にいる腰元は、そのお加代のおごをグイと上向けて、正面を向け、殊更にそのみすの向こう側へしっかりと見せるようにします。

お加代の方からは見えませんが、お加代の姿は、はっきりと向こう側から見られているのでした。

「この者に間違いないとの、おおせである」  
みすの向こう側の右寄りから、透き通る様な声がしました。多分、小姓の声でしょう。

「ハハア！」

腰元たちは、恐れ入って平伏するのです。

お加代は、高貴な方の前に出されているというだけで、もう全身が固くなって後ろ手にされたままの身を小さくさせるのでした。

「始めるがよいとの、おおせである」

再び小姓の音が、とおります。それを合図に腰元たちは左右から、お加代の胸もとを拡げ、長襦袢を肩から外しました。

「あっ！」

小さな声が、お加代の口からもれます。しかし動くこともできず、お加代は上半身の素肌を惜しげもなく剥き出しにさせられるのでした。円い肩、後ろ手にされているだけに、かくしも出来ない乳房が、そのふくらみを、すっかり正面に晒します。

まだ娘のままの、はちきれそうな円みをもった両の乳房が、まぶしいばかりに投げ出されます。思わず顔をそむけて、この羞恥に耐えるお加代でしたが、どうすることも出来ないのです。その胸を、腰元が柔らかい絹のしごきのようなもので、二の腕にかけて縛ろうとしました。

「待て」

その時、小姓の音がして、みすの中で何か二言三言、小声で話し合う音があってから

「殿の所望である」

改めて、透き通るような小姓の音がして、「その女の肌は一段と美しいゆえ、その肌が荒縄の中で、もがくところが見たいとの仰せ

である」

腰元が驚きました。いつもにないことなのです。

「恐れながら菊丸さまに申しあげます」

菊丸とは多分、小姓の名でしょう。

「荒縄では、この者の肌が痛みます。それではこのあとの伽に恐れ多いかと存じます」  
しかし、その申し入れは

「苦しゅうない」

太い声で、みすの向こうから今度は、殿じきじきの声なのです。

「ハハア！」

腰元たちは鶴のひと声、平伏してしまう他はありません。

「至急、用意して参りますゆえ、暫時おゆるしを」

用意をしていない荒縄をとり一人の腰元が恐れ入って下がってゆきます。この鶴のひと声のために、お加代は可哀想に素肌に直接荒縄を喰ひこませて、もがく羽目になっていくのです。そんな運命を、裸にされたまま、じっと待っているお加代の、この時の想いはどんなだったでしょう。

やがて用意された荒縄が、容赦なく後ろからお加代の白い素肌にかけられました。乳房



だけは避けて、その上部に三巻き、下部に二巻き、二の腕にかけてグルグル廻されていくのです。

「遠慮致すでない。力の限り締めあげよとの仰せであるぞ」

「ハハァ！」

そうなる、ただ殿の意に従うため、腰元たちは必死になって、このか細い、お加代の素肌をグイグイと締めあげてゆくのです。

「うっ！ うっ！」

もらすまいとしてもお加代は、その痛さ、ひしひしと締めあげられる息苦しさに呻いています。柔らかい二の腕に荒縄が痛々しく喰いこんでいき、お加代は身をくねらせて、この痛みに耐えていくばかりでした。

乳房を剥き出しにされた女体に荒縄が無残に喰いこんでいくさまは、何ともいえぬ妖しさがみられます。二の腕を締めあげられて余計に円くもり上った白い肩に顔を埋めるように曲げて

「ウッ！ ウッ！」

と悶えているお加代の姿は、みすの向こう側の殿にも、それが痛々しいだけに一段と満足されるのであろうと、腰元たちも必死なのです。あまりきつく締めあげたために円い

ふくよかな乳房までが変形していくのを、腰元が器用に土下の縄の間から引き出します。

そうなる、今度は逆に、まわりが締めあげられているだけに、そのふくらみが、いよいよ大きくなって荒縄の間で、はちきれそうにふくらんで、可愛い形の乳首までがピンと上を向くのでした。そんなにされて、お加代は胸を張らされ、後ろから一人の腰元に、しっかりと肩をつかまれたまま、左右から二人の腰元に乳房をいじられ始めたのです。

これは、ひどい責めでした。いや、責めというより、こんなにして乳房をもてあそばれたのは生まれて初めての経験でした。腰元たちの指先は、馴れたものを扱うように器用に動きます。その指の中で、お加代のふくらみが柔らかい弾力ではずんで、正面のみすの中から、その姿態が、まともに見られるのです。こうして、お加代の女としての感度を、ためされているのです。その時のお加代の動き、顔の表情、それらを、つぶさに殿がのぞいているのでした。

ひしひしと締めあげられて、後ろ手のお加代は殿の前で腰元たちにいじめられて、その羞かしさに、そうはなるまいと身をちぢめてもそこは女体の悲しさ。ジーンとしたうずき

が全身に走って、初めて味あう妖しげな心地に思わずせつない声をあげ始めるのでした。ひざが割れ、もすその間から白い素肌が、のぞくようになっていくのに、お加代は気がつきませんでした。

「むううッ！」

いい加減、お加代を悶えさせて置いて腰元は器用に手を引きます。しかし、この寸前まで悶えさせられたお加代は、すっかり興奮して、のけぞるように身をもたせかけてくるのを腰元は支えかけて、ふるえている素肌を、そっと正面を向かせるのでした。

そのあげく、お加代は殿のみにている前で、裾をまくられて雪のように白い太腿を、すっかり、つけ根までみせられたのです。その太腿のつけ根の中でも一ばん柔らかい部分を、腰元たちにしごきで別々にくぐられました。今度は荒縄とちがって柔らかいしごきでしたが、柔らかい素肌の処ですから、締めあげられると、本来のふくらみのみが乳房と同じ様に丸く突き出す恰好になっているのです。

「まる裸が見たいとの仰せである」

お加代は、もう今となっては、身にまとっている長襦袢の上も下も、すっかり捲られて裸も同然です。しかし、改めて腰元たちに腰



ひもをほどいて、ほんとうに一糸もつけない裸にむかれますと、羞かしさは一段とつのでした。

今はもう、あられもなく丸裸にむかれて、左右に抗げられた太腿のつけ根には、しごきが喰いこんで、両手は自由を奪われ、手首は後ろで合わされて動かすこともできません。胸から二の腕にかけては更に、痛々しく荒縄が玉のような素肌を喰いこんで、完全に意志と行動を失った生きた女体として引き据えら

## 新発足 懸賞／告白、手記、体験／原稿募集

### ☆賞金☆

優作	一篇につき	参万円
秀作	一篇につき	五千元
佳作	一篇につき	三千元

### ☆規定☆

一、本誌の内容刷新、充実を期して、ここに新しく、「告白、手記、体験」の原稿を広く懸賞募集いたします。

一、従来、「告白」の分野で文献味豊かな告白特集を度々刊行して、輝やかしい金字塔をうち樹てた本誌が、あらゆる傾向の告白をもって誌面を飾る考えであります。

一、真実味溢れる告白、万人の共感を得る

れています。これから、どんなことをされようと、それを拒むことも出来ず思いのままに、もてあそぶことの出来る可愛い玩具でした。

この頃の、封建時代の領主と一農民の格差は、このようにされても仕方のないことなのでしょうが、これはあまりむごい仕打ちです。花羞かしい娘の身で、人前で素肌をみられるだけでも羞かしいのに、こうして一糸まとわぬ全裸に剥かれた上、身動きも出来ず縛られていのですからお加代にとっては、も

手記、数奇な体験、どうしても誌上に発表したいという熱意のこもった原稿を求めます。どうか奮って御応募下さい。

一、文章の巧みさとか、表現や描写のうまさは求めませんから、実際に体験されたもの、事実の裏付のあるものが大切だと思います。従って必ず自作の未発表のものに限ります。

一、枚数に制限はありませんが、一回の掲載分としては、三十枚乃至五十枚が適当です。用紙はなるべく原稿用紙をご使用下さい。締切日は毎月十日。翌月号より発表。

一、入選作には掲載誌発売後賞金をお送りいたします。応募原稿は読者原稿と区別するため「告白懸賞」とお書き下さい。

うこれだけで死ぬよりも辛い責め苦でした。しかし、そうされても、あきらめるよりない、この時代の社会感覚が、かろうじて、お加代の生命を支えているのです。この上は、ぶたれてヒイヒイ言わされようと、意のままに花のつぼみを摘まれようと、もうされるままなのです。

ただ顔をそむけて死んだようにうなだれているお加代は、みすの向こうからの指図によって、今度はそのまま立たされます。まだ坐らされている時の方が、ましでした。足を伸ばして、まともに正面を向いて立たされますと腰が伸びて一層羞かしい姿になるのです。更に腰元が、そんなお加代の後ろから、組み合わされて縛られて動けない手首の指と指の間へ、固い火箸をはさみこんで指全体を、ぐうっと握っていったのです。灼きつくような疼痛が全身に走ります。

「あっ！」

その痛みに思わずのけぞるお加代でした。白魚のような指先から痛みが走るのです。少しゆるめでは、ぐっと力を加えられますと、たまりません。同じ指ばかり責めていると、きずが残りますので、指を替えていきます。薬指から小指へと移るに従って、痛みが倍加



するのです。

「ううう」

声をもらすまいと悶えるお加代の、のけぞってゆく顔の表情が、何とも言えません。その上に、更に別の腰元が、震えているお加代の乳房に再び掌をすべらせていくのでした。責められる痛み、乳房をもみ込まれる、あやしい快感。その二つが、同時にお加代に加えられ始めたのです。

残酷な拷問でした。じっと立ち続けることができないような痛さと、うずきが、お加代の裸身をいやが上にも、くねらせて、悶えるような曲線を、惜しげもなくみせているのです。こうして責め抜かれて、崩れるように縛られた裸身を投げ出された時には、もうお加代は身を世もなく失神しているようでした。

みすをくぐって小姓が出て参りました。水のしたたるような美しい小姓でした。小姓は「殿、もうこの辺でよろしいかと存じよす」

正面を向いて頭を下げるのでした。そこでようやくお加代は二の腕を縛った荒縄を解かれました。太腿を締めあげてあった、しごきも解かれます。そうして改めて、柔らかな別のしごきのようなもので形式的に、胸もとを二巻きされました。

お加代は、そんなにされるのを半ば無意識のまま感じました。しかし、もう体を動かす元気もないのです。それに背中で後ろ手にさされているところは、そのままでしたから、やはりされるままなのでした。荒縄は解かれても今までひしひしと締めあげられていた痕が二の腕の白い素肌に赤く筋が残っています。くくり直されたお加代は、腰元たちに抱えあげられ、次の間に持ちこまれたのです。そこには絹の夜具が準備されてありました。その上に、縛られたままのお加代は寝かされて置かれたのでした。さんざん責めぬかれた肉体に、夜具の柔らかさは快く感じられました。が、締めあげられた肉の痛み、クリクリともてあそばれた乳首のうずき。それらは、まだお加代の感覚から去りません。不自由な手首の固さ、そして指の一本一本に痛みが残っているのです。

その身を、こうして夜具の中に横たえられているのは、これから、このままの状態で殿の慾望を処理される道具に供されていることは間違いないのです。裸にひきむかれて羞恥の限りを晒されて、男心をいやが上にも燃えあがらせたお加代の努めは、これから、その本番にまわされたのです。

縛られていますから、抵抗のしようもありません。裸にされていますから、身を守ることもできません。お加代の若い、美しい肉体は、やがて本格的に呻き声をあげさせられました。夜具の中で乳房をもまれます。乳首をつねられます。今度は男の手でした。声もなくもがいたあげく夜具は無雑作にめくられて自由なままの下肢は殿のされるままに躍るのです。

「ういやつじゃのう」

殿は、お加代の肌を荒々しく、まさぐるのでした。

「ウ、ウッ」

きれいな眉をひそめて、声をこらしてもがくばかりで、殿の意にさからうこわさに、じっとされるままにしていようとしますが、処女の本能が、それを避けようとくねるのです。しかし、どうしようもありません。お加代の両ひざは曲げられて、大きく左右に押し拡げられます。

こうして全裸のまま、後ろ手に縛られてお加代は花のつぼみを散らされたのでした。ぐいぐいと、こねられるその痛みに、お加代の肉体は、しごきをひきしぼって悶えてゆくのでした。

(終)



作六鬼団



決定版

●瞠目のサディズム小説総集篇遂に成る!!

—— 巻号『花決定版』—— 定価一、〇〇〇円（送200円）——

昭和37年8月号に端を発してより絶讃を博し続ける「花と蛇」の文字通りの決定版が堂々八百有余頁の超豪華本として完成致しました。驚異的な人気を生み出したこの長篇サディズム小説は、現在尚『奇譚クラブ』誌上に連載中でありましたが、過去四回の特集にも拘らず数多くの要望にお応えして、今回の総集篇発刊となつた訳であります。八カ年の集積を味読して下さい。

△内容主要見出し一覧▽

第一章 発端 第二章 人探しの場 第三章 麗人を探し 第四章 援者の来 第五章 救者の来 第六章 餓魔の好 第七章 悪魔の地 第八章 恐怖の地 第九章 淫弄される美 第十章 色事姉妹の執 第十一章 美事姉妹の執 第十二章 津事姉妹の執 第十三章 落室の秘密 第十四章 密走の秘密 第十五章 脱走の秘密 第十六章 華やか宴 第十七章 地獄屋敷へ 第十八章 翻弄される 第十九章 一千万円の身代金

第二十二章 身代金奪取の失敗 第二十三章 涙の宣誓 第二十四章 連命の逆転 第二十五章 奇妙な三々九度 第二十六章 飼育される白い動物 第二十七章 悪魔と悪女の悪業 第二十八章 屈辱の地獄 第二十九章 逃走の恐怖と失敗の結末 第三十章 悪鬼達の残忍な所業 第三十一章 落花無残の修羅場 第三十二章 淫らな美女の調教 第三十三章 すさまじいショーの展開 第三十四章 汚水にまみれた宝石 第三十五章 華々しき美女の屈伏 第三十六章 対峙する美女と美女 第三十七章 あくどい陥穽 第三十八章 羞恥図絵の展開 第三十九章 清純な令嬢の屈辱 第四十章 人身御供の令夫人 第四十一章 深窓の美少女とズベ公 第四十二章 小夜子への執拗な調教 第四十三章 変性色事師の登場

第四十四章 生れかわるスター京子 第四十五章 激しいスターへの訓練 第四十六章 低脳男と令夫人の結婚 第四十七章 愛弟子を調教する静子夫人 第四十八章 羞恥と屈辱の日本舞踊 第四十九章 悪魔たちの哄笑 第五十章 地下室の羞恥と汚辱地獄 第五十一章 珍芸を開陳する令夫人 第五十二章 淫靡な時代劇ショー 第五十三章 華々しきショーの展開 第五十四章 野卑な妾二人のいたぶり 第五十五章 ズベ公達の邪悪な責め 第五十六章 屈辱の中に泳ぐ奴隷たち 第五十七章 悪党の執拗ないたぶり 第五十八章 文夫と小夜子の屈辱的対面 第五十九章 勝ち誇る悪党一味 第六十章 中国伝来の秘法 第六十一章 緊縛された美女の泣き 第六十二章 新しい餌食への触手 第六十三章 苦痛と屈辱の生地獄 第六十四章 恐怖の責め続く 第六十五章 結末なき責めの結末 第六十六章 甘美な拷問に悶える夫人 第六十七章 新しい獲物の到来と静子の狂態 第六十八章 あくなく汚辱に泣く美女 第六十九章 ニューフェイスに飼育開始 第七十章 肉体の悪魔に魅せられた女 第七十一章 熱気を帯びたマゾの競演 第七十二章 女盛りの妖美な肉体 第七十三章 優雅な木馬夫人の崩壊 第七十四章 美女と野獣の奇妙な闘争

お申込は大阪市住吉郵便局私書函第41号。 558 暁出版株式会社宛



△ 告 白 △



# おむつ・おしめ

## の 社 会 性

前提としての実体把握の一方法

岩 手 信 夫

### 一、社会性獲得への道

何が何だか分からずに「おむつ」や「おしめ」に惹かれる時期の苦しさは、本誌の通信欄などで「マニア」という文字を見つけたこととで終止符を打つことができる。そのあと、マニアの自覚のもとに安定した「おむつ・おしめ」利用ができる。ところが独身青年の場合、間もなく結婚の問題にぶつかる。この時、愛用の品はどうすべきか。

マニアであることを諦めることは不可能で

ある。不可能という意味は、それを諦めることができる状況というのは他のすべての意欲を失った状況にほかならないからである。積極的に生きようとするほど、マニアたる領域へも精神的エネルギーが注がれ、ますます強化される。だから何としても使い続けなければならぬ。

女子の場合は夫に知られないように、あるいは知られても大事に至らせないようにすることが可能である。しかし、男子の場合は十

二月号、安田氏のように自宅外に限りて使用する場合はともかく、自宅での使用は妻の承認なしには不可能である。妻の承認とは、それを取り巻く数人の人々の、承認をも意味する。同じ十二月号の井上氏は、これを社会性という言葉で表現しておられる。

承認を得るには、第一に、自分が承認してもらいたいものは何であるか、確実に把握することである。第二は、説得力のある理論を持つことである。第三は、自分が自分で信ずることである。そして、誇りを持つことである。

今や、おしめマニアと、おむつマニアを混同しては議論が進まない。おしめマニアも分類しなければならぬ。これら微妙な相違点のなかに、真の姿が含まれているのである。

### 二、「おむつ」と「おしめ」

我々が口にする「おむつ」とは、正式な言葉としては「おむき」となる。これは古い言葉であって、平安時代・鎌倉時代の文学にも登場する。辞書によると、今日のうぶぎの意に用いた例が多いが、ふんどしの意味に用いられた例もある。これら二種類の意味に共通したイメージは、素裸のことを「生まれたま



「まの姿」と表現する日本的発想である。だから古語においては「祝いにおむきを差し上げる」と言うときはうぶぎ一式を意味し、「赤いむつきをつけた男たち」というときは、ふんどしを意味するものと使い分けられた。現代語の「おむつ」の持つ意味は、古語の持つ二つの意味の結合によって限定された意味にほかならない。それは「うぶぎのように赤ちゃん着用するもので、ふんどしのような部位につける肌着」である。

一方、「おしめ」は正式には「湿し」であって、意味は昔も今も同じである。吸水性を論じられる布は広い意味で、おしめと呼べないこともない。肌着として好適な材料は、そのまま、おしめとしても好適とされている。紙綿製の「ナプキン」もまた、おしめの一種であるというて良い。

同じ肌に着けるものという意味でも、おむつは衣裳の末席につらなるものであり、おしめは手拭いやタオルに連なるものである。おむつをつけることにより、赤ちゃんは姿として、まとまるが、おしめをつけただけでは見られた姿ではない。おしめは衣裳としての、まとまりを示さないからである。おむつとは赤ちゃんが腰につけるものの、外側までを含

む総称である。

実に、赤ちゃんらしくない、おしめの例は女の人の生理帯である。病人のおしめは世話になるという点で、大人らしい使い方のおしめではない。おしめマニアが一時的に生理帯に傾斜するのは、赤ちゃん風でない、真に大人っぽいおしめの原形を、そこに発見するからであって、女性下着という点にはない。

今は思い出話になったが、終戦直後の混雑をきわめた長距離列車に乗る人は、出発地から目的地まで排泄をこらえなければならなかったが、それでも男や子供には抜け道もあった。しかし女の人は肉体の構造の差異もさることながら、心理的抵抗もあってそれが許されなかった。男の人が自分の状態から判断し女が辛抱強いのに驚いたという話をよくすることがあったが、実は生活の知恵として、おしめを使用していたのである。これこそ一枚上手の抜け道といえるのではないか。

最近では勤務形態によって右と似た状況にさらされる人が増えており、そのなかには、おしめを使用する人が男女を通じて多くあることが、ニューポート社の大人用ゴムカバー（赤ちゃん風を完全に拒否した、働きやすいもの）の效能書きから窺われる。

### 三、おむつカバーとおしめカバー

おむつ自体が衣裳であるから、おむつカバーも衣裳として設計されなければならない。それは赤ちゃんの服装として優美でなければならない。材料は織物または編物で、普通に衣料として用いるものが利用可能である。目的は、おしめが外観上に現われないようにすることであるから、透いて見えるものであってはならない。色や柄や形は、上半身の衣裳にマッチしなければならぬ。

おしめカバーは、汚物で濡れたおしめの水分が他に附着しないようにするもので、雨合羽と同じ考え方で設計される。材料は、医療用薄ゴムシート、今ならビニールが主体である。透けて見えることは一向に差支えない。

日本工業規格（JIS）には、繊維の項に繊維製オシメカバーと題する規格があり、両者が重複しないようになっている。両者は全く異なる項目の評価が適用される。たとえば、オシメカバーは、その防水膜の材料が如何に安心できるかを知れるような試験をされる。一方おむつカバーは洩れに関する指定は一言もない。あくまでも衣料品としての検査だけである。

オシメカバーに対しては、布が補強材と考



えられていて、それが、どんな布であろうと規格には、無関係である。一方、おむつカバーの内側に、ビニールなどを張ることも認められているが、張ったからと言って、その検査をされるわけではない。おしめは股が真先に濡れるので、これのカバーを考えると、股幅を指定するのが常識であり、オシメカバーの規格には、それが指定されているが、おむつカバーには何の指定もない。

ところで、布や編物のうらにビニールなどを張ったものは、どちらに属するかという問題が生ずる。これは、手に取って見れば直ぐわかる。着せてそのままお客様の前に出してよい外観ならば、おむつカバーとして作られたものであり、それ以外は、おしめカバーとすべきである。赤ちゃんが誰でも、おしめをしており、今、目の前にいるその子が、あるいは抱いてやっているその子が、すでに濡らしているかも知れないのだ、ということはお客様だって考えている。そんな気持ちが、ふと消えてしまうような外観こそ、おむつカバーに相応しいものである。

おむつカバーの外観は、子供っぽい可愛げのあるものが好まれるが、赤ちゃん以外のおしめカバーは、却ってそれを拒否する。赤ち

ゃん風の模様のついたものに反撥する年令に達した子ども、大体四、五歳ごろの子供向けに売られてるカバーは大人用の素気ないデザインであって、可愛気の一片もない。つまりおむつカバーには決して見えないカバーこそ赤ちゃん以外の人々が使い得るカバーなのである。

#### 四、赤ちゃん連想との対決

おしめが大人の間に普及しない原因も、使っている人が秘密にしたがる原因も、赤ちゃん連想である。「赤ちゃんみたい」な気がして羞かしいからである。

普通の日には、便所や便器を人の介助のもとに使っている病人が時々失禁する場合、家族は大いに迷惑を蒙る。だからといって、おしめに切り替えることは病人の抵抗があつて困難である。失禁してもこれだから、そうでない場合は、たとえば家族が夜は、ぐっすり寝たいからというように説いても、おしめを受け入れさせることは困難である。

夜尿症の場合に粗相を防ぐために特殊なシートやパンツが考案されているが、着用感や性能や後始末まで考えると、どう見てもおしめの足もとにも及ばない品々である。これらが売れるのもおしめが羞かしいからである。

意外な感じだが、おしめマニアが羞かしがる理由も赤ちゃんの連想である。おむつマニアは赤ちゃん連想を目的としながら、これを羞かしがる。数年前の本誌における「おしめ・おむつ」論は、この羞かしさを喜びの源泉と考え「羞恥に悶える」ことがマニアのマゾ的快感だと説いていた。

ところが昨年十二月号の安田氏の記事、および井上氏の記事は、いずれも新しい方向を指向している。一方は赤ちゃん連想を払拭して、その気羞かしさを超越し、一方は、それを肯定し強化して、その法悦に浸るのである。これらを名付けて「おしめ路線」「おむつ路線」と呼べば、今まで明らかでなかった「おしめ・おむつ」マニアの実体が少しは解明されて来るように思う。それらは互いに対照的といつてよい程の相違点を持っている。

#### 五、おしめ路線とおむつ路線

##### (一)カバーに対する好み

おしめ路線のカバーは、洩らないカバーであつて、具体的には感覚的理由から総ゴム製が第一というか、唯一である。カバーの代役となり補佐役となるのは、洩らないゴム製品としてのゴムパンツ類である。毛糸編のおむつカバーなどは、関心外である。



おむつ路線のカバーは前述したように赤ちゃんらしい、もちろん大きさは大人向きに作るが、可愛気のあるもので、ゴム製は避けたのである。おむつカバーの効果を高めるものは、哺乳ビンや、よだれかけの類である。

## (二)排泄およびその結果に対して

おしめ派は感覚的な理由で必ず排泄するが排泄に伴う感覚を味わうとともに、その結果の皮膚感覚も満足の源泉となる。濡れたおしめを外して放置し、冷えたころそのまま再び着用することは、おしめ路線特有の快感をもたらす。排泄内容は長時間着用にも不快でないことが望ましいので便よりも尿が主役となる。

おむつ路線は排泄そのものは第二義的である。しかし、する時は情緒的な理由から無差別に尿便を出してしまう。便は臭気、その他衛生的理由で不快であることは知っていてもそれ故、手加減して排泄し分けるといふ分別くさは、一段と不快だからである。汚したあとは、直ぐにでも取り替えてもらいたい。汚れたまま放置されたら泣きたくなる。まして、一旦、外したのを、また当てるなどは言語道断である。

## (三)対人関係と満足度と愛の心理

おしめ派は自分で当てればよいので、実行は容易である。しかし自分が自分に提供し得る満足は、それほど強くはない。心理的には孤独を好み、自己愛型である。揮マニアや女装マニアの心理と共通点がある。

おむつ派は人に当ててもらうことが満足の源泉なので相手がいなければ実行できない。しかし実行できた時の喜びは強烈である。心理的には孤独に耐えず、受身の愛であるマゾに通じる。

## (四)共通点

おしめを当てる点は共通しているが、これを取り巻く精神的背景が全く異なるので、共通点としても単なる外観に過ぎない。内面的な共通点は、おそらく幼少期に何か大きな精神的な外傷を蒙ったらしいことである。また、おしめ、おむつに対して理性的な好みを示すというのではなく、体全体からにじみ出るような切ない感情に動かされて、矢も楯もたまらず手が出る傾向がある。

## 六、おむつマニアの成立起源

おしめ、おむつ欲求は如何に形成されたかという問題は、まだ解明されていないようである。一つの有力な説は、幼児願望から来たとする説であるが、その願望を満たす手段が

他にいくつもあるので、因果関係の必然性が欠けているし、幼児願望と関係のない、おしめマニアも存在するので、すべてを説明できる説とは言えない。ここに私が提出する仮説は成立の起源というよりは、発達の形態に重点を置いて現状を説明しようとするもので、実用性を狙ったものである。

まず第一は、おしめへのほのかな愛着というものが多くの幼児に存在するものと仮定する。これは単に、自分の使いなれた物に愛着を覚えるという意味のそれである。自分の垢で汚れた寝具が寝心地がよいと思う気持と同じで、哺乳動物の本能といえるものである。

第二に、欲求や願望は多種多様で、それらの間に、激しい生存競争があると仮定する。一つの欲求を満たすのに専念すると、他の欲求が弱まることは日常経験する通りであるから、仮定に無理はないと思われる。

第三に、欲求や願望は静態的(ステイック)に保存したり成長させたりできるものでなくて、動物的(ダイナミック)にそうなるものであるという仮定。丁度、噂とか民謡とか、伝説のように、人から人へ語り伝えるその過程で保存され、発達すると考えるのである。



第四に多種多様な願望のなかには、おしめへの愛着と気脈の通じ合うものが存在し得るという仮定。たとえば赤ちゃんでありたいという願望が、それである。そして何かの体験がそれらを結び合わせ、ここに欲求・願望の連合体が形成されると、以後それらが互いに強めあって、人格の中に大きな割合を占めるに至る。もし、それが形成されなければ、いずれの願望・欲求も新しいエネルギーを補給されることなく、弱まって絶えてしまう。

私が右の仮説を提出するのは、マニアの成立を説明するためだけでなく、マニアが必要とする最小限度が、どの方向にあるかを見究めるためである。したがって仮設の第四項が質的に重要な意味を持つ。第一項から第四項までを総合してマニアの成立を説明すれば次のようになる。

マニアでない大衆は、乳児期のおむつ愛着が成長につれて他の欲求に圧倒されて消失してしまったものと考えられ、マニアは、ある種の願望が何らかの動機で、おむつ愛着に結びつき、そこに心的エネルギーが注入されて両者が互いに投射し合いながら自己増殖した結果である。したがって、極端な執着を持つマニアと無関心な大衆とが存在するだけで、

中間層が存在しないことになる。さらに、年長になるほど執着が強くなるという現象も説明できる。

おしめという、使い馴れ親しんだ布切れに対する愛着が、赤ちゃんになりたい願望と連合したものが、おむつマニアの心理であることは、十二月号の井上氏の論文からも明らかである。おしめを、おむつとして用いることは赤ちゃん願望を満たすことになり、快い解放感を味わうであろう。また赤ちゃん願望を何か他の手段で満たすことにより、おむつへの欲求も、ある程度、満たされよう。しかし排泄を伴う行為である、おむつ使用ほど完全な満足は他に考えられない。井上氏のいう哺乳ビンや、よだれかけの類は、おむつの代用にはならないであろうか。それともおむつの効果を高めたり雑念を遮断して、おむつの心境に入りやすくするための補助用具なのだろうか。多分、後者であろう。

それにしても赤ちゃん願望という美しい願望を旗印にすれば、おむつを着用して尿や便を洩らすのを許してくれる母性的女性を見つけて引き止めることは困難でないと思う。そして説得には黙って十二月号、井上氏の論文を読ませるだけで済むのではなからうか。

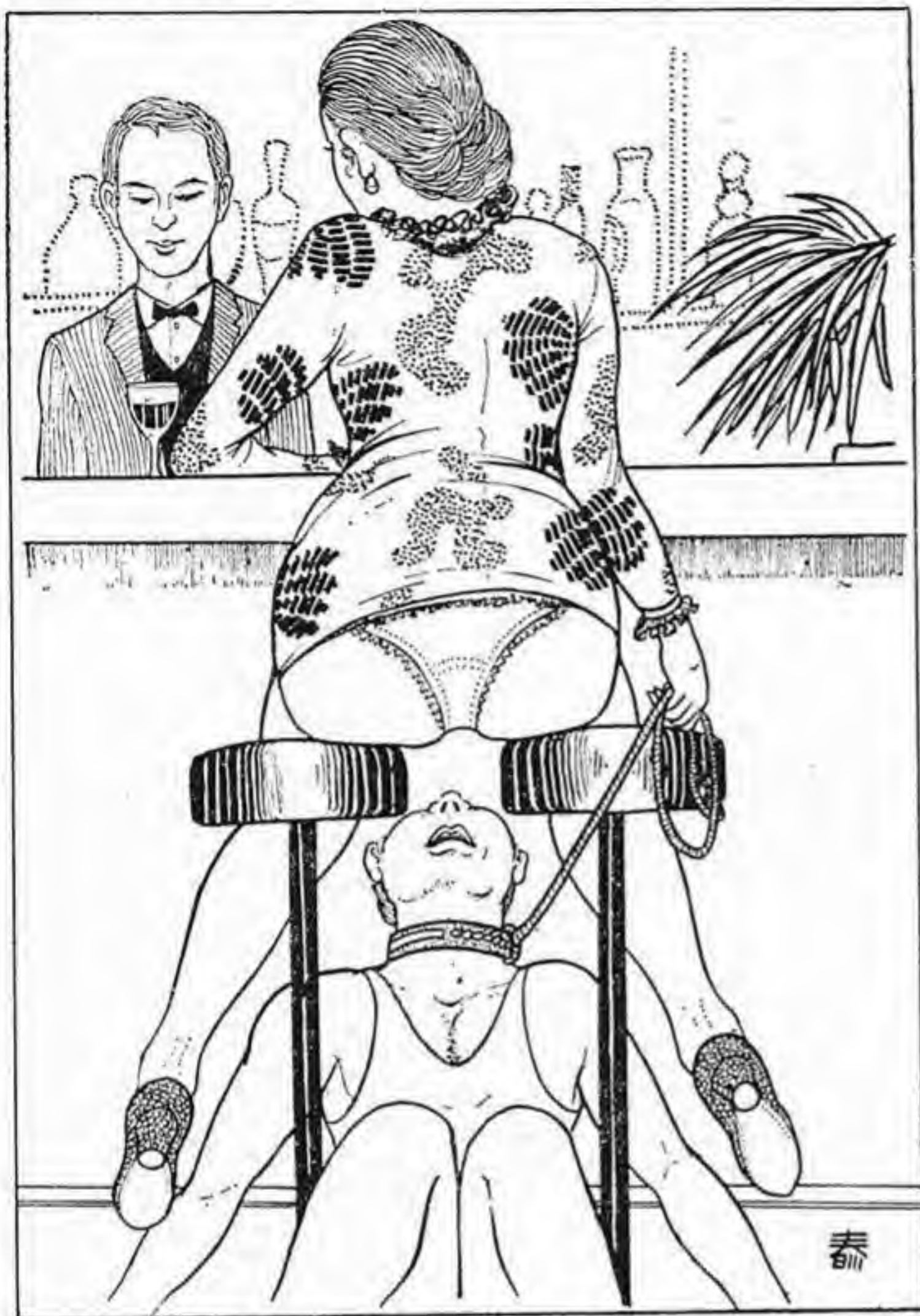
## 七、おしめマニアとしての私の場合

特に「私の場合」と限定する理由は、今のところ、おしめマニア一般に通用する理論が得られていないからである。したがって以下の文中で単に「マニア」といえば、私というおしめマニアのことである。

私は、おしめをつけないと眠れない。おしめを愛用しているうちに、そうなったのでなくて、昔からそうだったのである。今、おしめをつけた時の心境を知って、そのことが対照的に強く感じられることは否定しないが、注意して観察すると昔から眠れなかったのである。マンガの題材にサラリーマンの遅刻が取り上げられることがあるが、その時、登場人物は朝のまどろみを永久に続けたいと切望しているように見える。この、夢とも現ともつかぬ心境は甘美なものであるだけでなく、精神が休息するのは、まさにこの時であるとされている。私にはこのような経験がなかった。夜なかなの物音や地震には、まるで醒めている人のように直ちに応答し、起こされれば人の気配だけで起き目覚し時計は不要であった。これは便利な習慣であったが、本人は大いに不満であった。眠った気が全くしないからである。もちろん肉体の疲労回復に必要な



## 読者ギャラリー『お流れは?』春川 ナミオ



短時間の無意識の睡眠には事欠かなかったが夢を見ている状態すなわち大脳が休む状態を継続することができないため、精神的には睡眠不足に悩まされていたのである。

右の状態は「眠ってしまうと大変だ」という恐怖に捉われた状態である。この状態では尿意を感じやすく、無理してこらえている時に似た苦痛がある。当然のことながら夜間の

方が尿意頻数となる。原因は幼児期の躰にあることは疑いない。私の記憶の中に、幼い時オネショしたという印象がないことと、躰が成功したと母が語ったことは、その躰の強しさの傍証と考えられる。この躰の原動力は、母の粗相嫌いにあったらしい。何故ならば、弟の場合には、躰の効果が思わしくないと見とおしめを毎晩、当てる方針に転向したから

である。

おしめに愛着を覚えてその臭いを嗅いだり身に着けて感触を楽しむことは物心ついたときからあったが、これが夜尿と結びついたのは弟の実況を見ていたからである。それは赤ちゃんがあったので「おむつ」風情は極力排除されたのであろう。おしめと赤ちゃん願望の結びつきは私の場合、形成されることが遂になかった。それよりも、おしめを当てて寝る素晴らしさを空想し、洩らしちゃったと正直に告げる心のゆとりを切望する気持が支配的になった。私は粗相しても正直にいうことができず、見つけられてから叱られるのが常であったが、弟は「夜尿症」だから洩らすのが当たり前で、粗相がないようにおしめを使うのだという説明に守られて、安らかな眠りが保証されていた。まるで毎晩、洩らすのを楽しんでいるように見えた。

右の説明から、私の夜尿願望の正体が夜尿の不安からの逃避願望であることが明らかにになった。これは一見奇異であるが、死の恐怖が死の願望に通じるのと同様である。逃避は一般に排斥されるが、死の恐怖のような本質的なものは別として、雑念に近い種類の恐怖などは逃避で片づけてよいのではないか。



おしめへの愛着がなかったら夜尿恐怖は決して願望に転化しなかったであろう。夜尿恐怖は大人になるほど強くなり、大人になって始まる夜尿の原因は大抵これであるとされている。そして夜尿は「失敗」であり一層恐怖を深刻化するというのが普通の筋道である。

十二歳ごろから身の回りのことに自由が利くようになり、おしめへの愛着が行為として実現できるようになった。それまでの恐怖は願望の姿となり、時々起こるオネショを「失敗」から「充足」に格上げした。それが、おしめへの愛着を偏執、つまりマニアの域にまで強化した。おしめから足を洗おうとして廃棄処分すると、夜尿が頻発して粗相をさせられた。これには身振いするような満足があった。私は、おしめによって粗相と対決する決意をした。オネショする時の心境を、かぎりないものとするためには、粗相の不安が大敵である。こうして夜尿不安は粗相不安の形で処理され、それをおしめが受け持つことになった。今や、おしめを当てた状態で粗相することは年来、皆無となり、当ててしまえば願望が不安の重荷なしに自由に、かけめぐるようになった。

夜尿症になる可能性は、今のところ、おし

めによって条件反射的に洩れるに過ぎないので、それほど高くないと思う。しかし夢のなかにおしめが登場すると、抑制どころか挑発されてしまうので、当てていてもいなくても出てしまう。にもかかわらず、おしめの夢を期待することから推測すると、夜尿願望は夜尿症願望と同じことになるらしい。私が夜尿症になるのを恐れないことが、思い切った行為を可能にしているといつてよい。

### 八、おしめ使用者としての自信

夜、おしめを当てる人の中には私と同じような心境の人も多いに違いない。おしめを当てることを羞かしいとする社会通念に迎合して、自分のすることを「プレイ」などと表現することもあるが、実態はもっと深刻であって、それに救いを見出しているに近い。もしそうであれば、羞かしいという気持は捨てて自信を持ってもよいのではないか。

おしめという何の変哲もない布を当てるだけで、大の男がオネショする心境になれることは素晴らしいことである。しかし、誰でもおしめを当てるだけで、この法悦に入れるわけではない。私の場合も、日によって不同がある。尿量が多ければオネショするというのはない。やはり安らぎが得られるか否かが決

め手のようである。粗相の不安は大敵であるが、これ以外の気遣いも、すべてオネショを阻止してしまう。用心のために当てるおしめでは雰囲気を整わないので出ないのである。

テクニクとしては、昼間の無意識のこらえ癖を寝床の中に持ちこまないコツがある。おしめを当てたら、まず放尿してしまうと大抵うまく行く。濡れたら気持が悪いのは事実である。しかし、それに耐えて寝るのを繰り返すうちに、おしめの交換が十分でなかった子供が夜尿症になる話のように、濡れていることに平気になり放尿に平気になってしまふ。濡れた感触に心の安らぎを見出すようになると、最初に濡らす時のためらいもなくなり、当てるだけで洩れてしまうようになる。雑念は、おしめに預けて本人が、ぐっすりおやすみになれるというのは、この段階まで進んだ時である。尿が洩れるのは熟睡中でなくて意識があるときである点は特筆しておきたい。厳密な意味では、その都度わざと洩らしているのである。馴れるにつれて「わざと」する感じが弱まり、ひとりでに洩れるような感じになる。さらに、洩らしたことの記憶が残らないようになり、朝の濡れ具合に驚くようになる。また、醒めた時、尿が殆ど貯まってい



ないようになる。

おしめマニアが「夜尿症」になったと驚くのは、右のように「夜尿」ができる境地に達したことを意味する。これは夜尿「症」という語の誤用であるが、他に適当な語がないので仕方あるまい。しかし、この状態になることを恐れていたなら、夜おしめをつけて寝た姿勢で放尿することなどできないであろう。思うに、これは状態を恐れるのではなく、症というコトバを恐れているに違いない。たしかに世間で使う「夜尿症」というコトバには、「羞かしい」という、しかも「幼稚な」イメージが付きまとう。そして、本人の問題として語られることは少なく、周囲の人たちが話題として「気楽に」騒ぎ立てる連想がある。この点は、おしめマニアが慎重さを必要とする点である。つまり、おむつマニアの「赤ちゃん願望」のような、旗印になり得る願望とは異なるのである。赤ちゃんになりたい気持は人の共感を呼ぶので、それが人並み外れて強いということ、おしめ（おむつ）の必要性に話を繋ぐことができる。ところが、夜尿症は同情か、軽蔑か、治療か、からかいなどの対象にしかない。夜尿症だから、おしめを使ったという説明も、おしめを使ったから

夜尿症になったという説明も、世間には通じない。夜尿症というコトバは、状態を表現するのに便利だから使うことにすれば、その状態こそ、自分がなりたいた状態であるという、即ち、夜尿願望を旗印にすべきである。これが赤ちゃん願望のように人の共感を呼ぶことはあるまいが、しかし同情や治療の対象にされないだけでも立派なものである。奇妙な好みがあるものだ、と人が思ってくれたとしたら、そこまでが得られる最高の理解であるといわなければならない。どちらが原因であっても、おしめマニアと夜尿症は関係がある。もし、夜尿願望がなかったら、おしめマニアそのものが成立しないのでないか。おしめはもし「症」故に使うのなら必要に過ぎず、使った故に「症」になったのなら悪習に過ぎない。

どうやら実体と、行くべき道が、明らかに違ったようである。私が「夜尿願望のない人は真のおしめマニアではない」と以前、述べたことは、おむつマニア、および昼間だけのおしめ使用者を除いて夜間放尿するおしめだけに限定すれば、真理として生き残れると思う。夜おしめを当てなければ、そして、それに洩らさなければ眠れない（広い意味では精

神的に安定しない）という状態を人に説明するために、その現象面だけに注目し、一時の恥を忍んで、「私は夜尿症」だと告げよう。ただしそれは、おしめが大好き、オネショが大好きという私が長い間、根気よく習慣づけて漸くに実現した「症」である。おしめがなると寝られないという自覚は満足感をもたらす。当てる作業は楽しいし、洩れる時の心境を思うと早く当てようと気がはやる。当て終わると、ついジーンと来て洩らしてしまう。その後は大舟に乗った気持で洩らしながら眠る。朝は濡れた、おしめを開いて濡れ具合を確かめることが日課の第一歩である。ぐっしより濡れていると、その日は快調だ。何かの間違いで濡れていないと、気にかかる。なにしろ好きでなった夜尿症は、旅行のときなど洩れないから都合である。しかし、用心のために、おしめは当てなければならない。なぜなら、万一の場合ということもあり、粗相したら、みっともないからだ。いや、ほんとうは、おしめを当てないと眠れないのだ。社会的承認の第一歩は本人が自信を持つことである。健康な体を、自分の好みで夜尿症に仕立てたのだという誇りが、今の私の自信である。

（以上）





### 台湾へSMの夢をのせて――

黄昏の午後六時半、大阪国際空港を飛立った、日航七〇三便は、茫々模糊の雲上を台湾に向かって正確に近づいている。

ファーストクラスは、私とドクター氏の二人を除いた八人は、すべて外人であった。

TV『アテンションプリーズ』でお馴染みの服装の、センスに溢れた、美しいスチュアーデスが、救命具の着装をポイントマイムで示し、快適のシートのベルトを外す頃、おしぼり、のみもの、オードブル、料理のフルコ

SMカメラ・ハント(海外版)

苑 恵 栄 の 巻

# 台北小姐很好！

辻 村 隆

ースを、次々と順序よく運び始めていた。

エコノミークラスにくらべて、ファースト

クラスは、酒、料理の注文は自由であった。

幾分の優越感を味わいながら、最上のワイン

を汲みかわして、遂に実現した今宵に私達は

祝盃をあげ、男性天国といわれる台北でのハ

プニングに、あれやこれやと思いを駆せて、

念願の夢が現実の空を飛ぶ時、私の血はいっ

しか熱く騒ぐのであった。

SMのカメラ・ハントに錦上華を添えるべく、かねてからの懸案であっても、いざとな

ると台湾独り旅は、やはりいささか心細い。

それが、どちらから言い出すともなく、ド

クター氏との間に話が熟し始めて、思いもか

けず急速に実現したのは、三月が気候的に、

最も快適だからと知ったからであった。

三月中旬の好日に目標をおいて、慌しく旅

券申請、予防接種、ビザの申請などでトラベ

ルサービスの係員と打合わせの日が続いた。

好都合なことに、昨年十二月から、数次旅

券が五カ年有効とあって、今後の海外旅行

にも誠に便利である。



一切の手続きは、トラベルサービス係員が手際よく運んでくれて、私は前後二回、管轄府県の広報課に、印判をもって顔を出すだけでよかった。

海外といっても、伊丹空港を飛び立って、台北市の松山飛行場へは、二時間かっきりで到着する。新幹線で、大阪―東京間を往復するよりも早い。

ドクター氏の診療の都合や、私の仕事の関係もあって、日程は、金曜日の夕方出発して日曜日の夜帰国するという、慌しいスケジュールに落ちついてしまった。

私にとって、戦後初の海外旅行である。台湾から香港、そして帰りには沖縄へも寄りたかったが、余りスケジュールを膨らませ過ぎると、うわべだけの観光に終わってしまった。目的であるカメラ・ハントの方が空振りに終わってしまいそうな危惧があった。ドクター氏の意見もあって、勿体ないようでも、台北一本槍に絞ることに腹をきめたのである。

香港は香港で、又別の機会に行こうじゃないかと言う彼の提案は、もっともである。悠張って、二兎を追って一兎も得られなかったら、結局元も子もないよといわれ、それもそうだと思い直し、台北での丸二日間をフルに

活用して、私は私なりの手段でぶつかってみる気になったのである。

台北では、お互いの行動を束縛せず自由に振舞い、連絡だけは密にするようにして、のびのびと快楽を満喫し、SMのハント合戦でもしようじゃないかということに話はきまっていた。

「奇譚三十九夜物語」以前からの同好の士ドクター氏は、お互いに最も心の許し合ったふんけいの友である。彼は私のハント達成のために物心両面で、最大の協力を惜しまなかった。それだけに、私にとっても、ドクター氏の台湾旅行が、より一層嬉しいものでありたいと切望してやまなかったのである。

私には、戦前、満洲奉天で三年間、中国人と接した経験があつて、もう三十年近く使うことのなかった中国語も、郷にいてその気になれば、逐次憶い出すであろうし、若干の日用会話程度なら、今も口から出る自信があった。多感な青年時代、満洲の沃野に雄飛を夢みて、単独渡満した頃が、しきりに懐かしく偲ばれて、三十年振りで使える北京官語に甘いノスタルジャすら覚えるのであった。

中華民國の政治の中心が、台湾省に移って以来、市民は、福建、廈門語の所謂台湾語。

桃園、新竹、屏東など一部地区での、香港客家語の外に、中国の正統語といわれる、北京語が、標準語として採り入れられていた。しかも、三十才以上の市民には、日本語も十分に通用する便利さであった。

今私達弥次喜多コンビは、エコノミーとファーストの、クラスの差をしみじみかみしめながら、静かに飲食する外人乗客の中で、かなり傍若無人に、SM的ガールハントの手段方法を論じ、大声で喋っては美酒を口に運び分厚いビフテキにかぶりついていた。少なくとも客観的にみて、我々は余り品の良い客ではなかったようである。

ドクター氏の友人の医師が、数カ月前に渡台して、新北投温泉の待応生（芸者、ホステス）と愛情を交歓し、その彼の連絡で松山飛行場まで、友人の彼女が出迎えにくる手筈になっていた。日本語が堪能だという彼女の案内で、すぐさま夜の台北市内を、獵奇を求めて彷徨しようと、一応段取りはきめてあったのである。

宿泊にしても、一流の大飯店（ホテル）は幾分格式もあって堅苦しいと聞き、国賓大飯店（アンバサダーホテル）という、デラックスな高級ホテルに予約しておいたが、出発ぎ



りぎり急遽予定を変更して、トラベルサービス係員の紹介で、観光案内にも記載されていない、いわば二流のC・A大飯店に変更したのであった。未だ最近、建ったとかで室内調度はすべて新しい上、地の理も得ている様で、勿論このホテルの最高級の、スイートルームを頼んである。

機中の二時間は、忽ちのうちに過ぎて、早くも窓際の眼下に、台北の灯が、星を撒きちらしたように燦き始めていた。

私達の荷物は、それぞれショルダーバッグ一個だけの軽装である。下着類はすべて新しく取替えてきたので、着換類は一切なく、携帯用の洗面、男性化粧用具の外は、キャノンカメラ一台に、ストロボ、十二折三脚、数個のカラーフィルムだけであった。いや厳密に言えばもう一つ、秘かに忍ばせているのは細紐状の縄一筋と、緊縛フォトをキャビネ判にベタ焼付したもの一枚。それがSMカメラハント実現に要する最少限の準備品であった。

日台両税関の検査を考慮して、沢山の縄や、大人の玩具類は到底不可能である。出発前小型のバイブレーターを、幾度かショルダーバッグに入れさせたが、遂に観念しておいてきたのだった。一条の細縄、一枚のフォト

が精一杯の必需品なのである。

そのショルダーバッグを肩にかけ、外人と並んで、静止した機内の前方から、私達は初めて台北の地に降り立った。

日本の三月は台北の五月頃だと聞かされ、合服を身につけてきたが、暗い台北の空港の風は予想外に冷たく、ひえびえと私の体内を吹き抜けていった。

「これが出迎えの女性の写真だ。みつかるだろうか——」

ドクター氏は、一葉のフォトを背広の胸ポケットからとり出し、私に示した。

ピントの甘い、中国風の小姐の姿が、ほの暗い構内の灯の下で、心もとなげに揺れている。

「さあ、どうでしょうね」

当てにしない方がいいような口吻で、私は漠然と辺りを見廻す。彼は写真をしまい込むと、

「まあいいや、その時はその時のことさ」

と、あっさり諦めた表情で出口に向かって歩を運んでいった。到着の観光客、商用者、団体さんを出迎える人の渦の中を、自由気儘な弥次喜多旅の私達は、さっさと人浪をかきわけてゆく。それでも二人は、やはり一抹の

未練気もあって、キョロキョロと左右を見廻してゆくが、女性の姿はチラホラすれど、目指すフォトの女性の姿は見当たらなかった。

「迎えに来ていないようですね、どうやら」

「仕方ないさ、まず第一の子定は狂ったよ。ともかくホテルに行くとしても、全然言葉が通じんからね——。あんた、少しは喋るんだろう」

「その氣でいるんですが、相手次第ですよ。まあ何とかなるでしょう」

その場に数分、立ち止まっていたが諦めて私達はタクシー乗場の方へ近づいていった。

その時である。傍から、一人のデブプリ太った中年の男が、つつと近寄り、

「失礼ですが、——さん、ツジムラさんと違いますか」

と、ドクター氏と私の名を連呼して一片のメモを差し出してきた。いきなり名前を呼ばれてドキリとし私はそのメモに目を落とす。

ツジムラを彼等に分かる漢字で振りがなしその下にローマ字で、H・T・SUJIMURAと記してある。並んでドクター氏の氏名とローマ字。

「誰方ですか？」

どうやら日本語が話せる様子なので、その



俾、問いかける。

「私、C・A大飯店の迎えの者です。Nトラベルサービスより連絡がありまして、あなた方をお出迎えにきました」

傍のドクター氏の表情に、何がなしホッとした安堵の色が、浮かぶ。初めて異国の土地を踏んだ者共通の、知己と遭遇した安堵である。

「我々がよく分かったね」

ドクター氏は、迎えにきた大飯店の二人に微笑を送って、ねぎらいの言葉をかけた。

「それ商売です、カンで分かります」

快心の笑みを浮かべて、二人は名刺をとり出す。太い中年の方は、ホテルの社長の親戚で、送迎車の運転手と、客案内をかねる邸（チヨウ）さんという人。もう一人の、若い三十才前後の方は、許（コウ）さんといって、大飯店の旅客主任の肩書のある名刺を私達に差し出した。邸さんの日本語は堪能で、許さんの方はかなりアヤしげであるが、何とか意味は分かる。

「実は新北投の小姐が迎えにくることになってるんだが、見当たらないんだ」

ドクター氏は、幾分の心残りを、二人に向かって言った。

「そうですか。でも新北投の待応生、口がう



まくても余り当てにならないデス。どんな女の人ですか？」

邸さんに訊ねられて、ドクター氏は彼女のフォトを見せた。

顔を寄せて二人は凝っとフォトをみていたが、うなずくと、もう既にかなり散り始めた出迎人の群れの中を遊弋していった。間もなく戻ってくると、

「見当たりませんネ。これおそらくダメと思

います」

と、ドクター氏にフォトを返す。

「Nのやつ、絶対迎えにくるからと自信たっぷりに言ってたくせに、当てにならないや。まあいい、兎も角ホテルへ落着くことにするか。ハプニングの話はそれからだ」

彼は、仲間の医師の、当てにならぬのにガツカリした口調だったが、私は、それはN医師の責任でも、麗芳と呼ぶその女性の不信でもないと感じた。

かつての日本の赤線地帯に似た、新北投温泉の待応生と、唯一夜の契りを結んだとて、そのゆきずりの繋がりだけで一時間以上もかかる空港まで、N医師自身でもない我々を迎えに来させようとする方が、虫が好いような気がした。況してや、夜毎変わる酔客の、枕床にはべる女性なれば、昼間なら兎も角、夜を迎えた今、早くも客の相手をしていて、好意的に考えると、出ようにも出られなかったのかも知れない。

送迎車に乗り込むと、台北郊外の松山飛行場は、忽ち背後の暗いとぼりの中へ消えてゆく。私達は一時間時計の短針を元に戻した。日台間の一時間の時差である。飛行時間は二時間かかったが、伊丹を六時半に出発して、



台北に七時半に到着したことになる、時差のお蔭で、貴重な台北の夜を、一時間儲けたような錯覚にとらわれるのであった。帰国の時は、一時間針を進めて三時間かかることになるが、内地ではもう幾ら遅くなっても関係のないことであろう。

車中で、私と彼は改めて計画を練り直していた。今宵一夜台北市内の酒家や沙竜を歩みし、明日は新北投温泉で待応生と戯れる予定を立てたものの、それもこれからキャッチする女性次第で、どう変更するかは、私達にも皆目、見当がつかなかった。すべては未知のハントへの挑戦である。

車は既に繁華な街並を走っている。赤々と輝く街の灯下に、西瓜の切売りを並べ、かき氷の器械がおかれてある飲食店を数多くみとめ、私は南国を感じた。市電はないがバス、タクシーの往来は激しく、道行く人々の服装や容貌は、日本人と全然変わらない。

漢語のコカコーラ、アリナミン、森永ミルク、ナショナル電機、その他日本製品の、五彩のネオンが、いたるところで眼につく。経済大国日本の商品は、中国市民の生活に、深く根をおろしているようである。

長安西路の大通りに面して、C・Aホテル

は六階建てで堂々と聳えている。二流とはいっても、一流に近いホテルに属するのではなからうか。

喰い放題、飲み放題の機内で、鱈腹つめこんだので満腹である。通されたシングルルームにバッグを投げ出して、ベッドにどっかりと腰をおろし、

「さあ、どうする、ツジムラはん？」

ドクター氏はニヤリと笑って、私をみつめた。

「早速、出掛けましょうや、酒家へ——時間が勿体ない」

「ハント精神旺盛だな。よからう、すぐ行こう。しかし弱ったな、もう腹一杯でこれ以上喰えないぜ」

「酒の肴でもとって、喰わしてやるより仕方がないでしょう」

訊ねるまでもなく、邸さんは私達の会話を傍で聞いていて、ニコニコしながら、

「この近く、いいところあります。すぐ出掛けましょう」

と許さんに目配せする。

私はフロントで、第一夜分にと二〇〇ドルを台湾貨に交換してもらう。日本円—ドル—台湾貨と交換したが、ドルも日本円も通用す

る。二〇〇ドルで台幣百円札を八千円受取ったが、これは、日本貨の七万二千円に該当する。台貨一円が日貨九円だから、すっかり頭の中で勘定しないと、うっかり払い過ぎたりすることがある。

到着して十分後、私達は二人の案内で、夜の巷へと飛び出していったのであった。

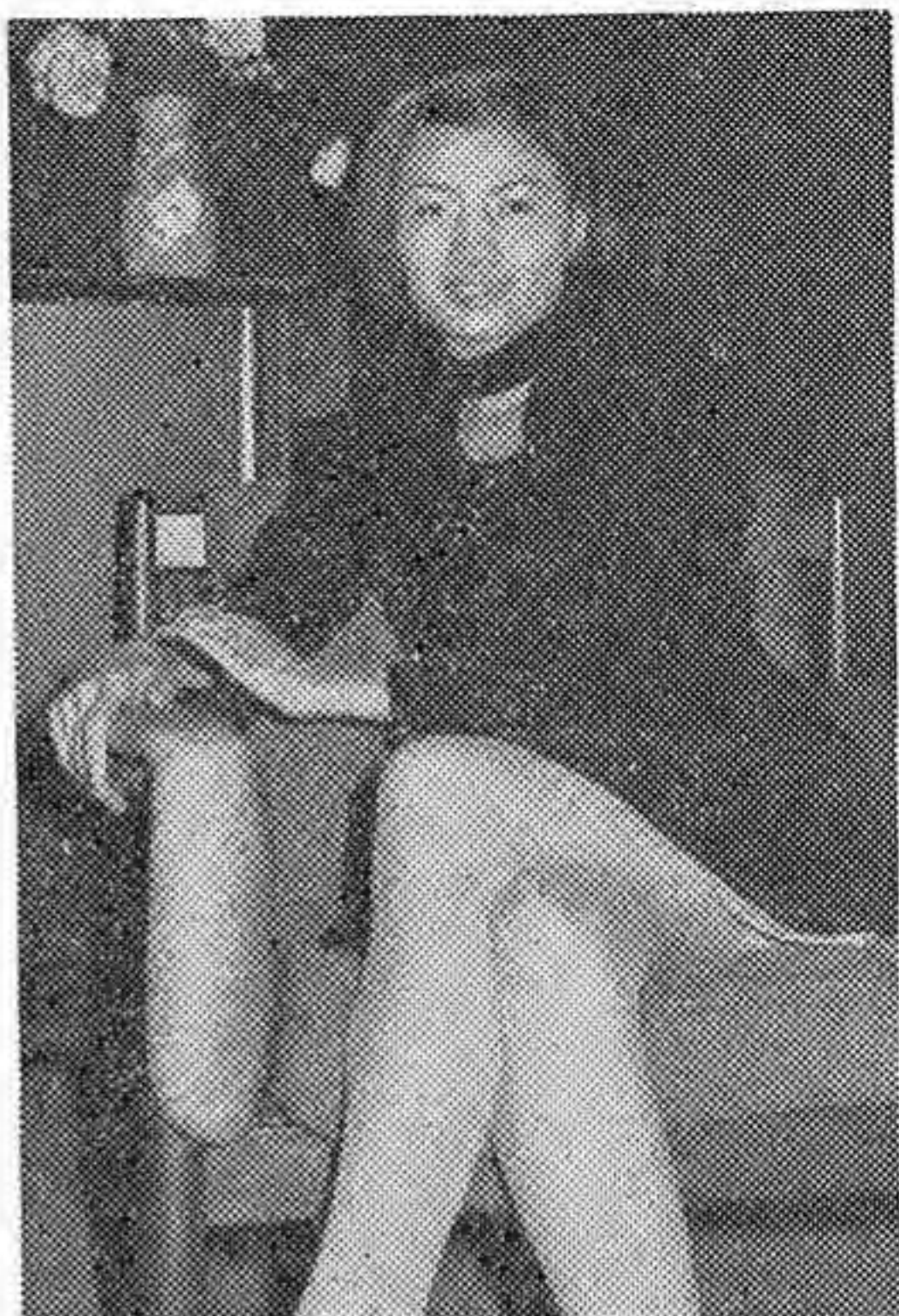
### 夜の巷に小姐を求めて——

酒家は、日本で謂うキャバレー、アルサロと料理屋を一緒くたにしたようなところで、小姐と呼ばれる女性が、食事や酒をサービスし遊興接待をしてくれる。日本でも知名の酒家は、東雲閣、五月花、黒美人などあるが、邸さんの案内したところは、余り日本人の来そうにもない三流クラスのSという酒家で、ホテルから五分とは離れていないところにあった。

かつて若かりし頃、満洲で過ごした私にとって、酒家は懐かしい想い出を呼び起こす場所であった。僅かの金を握って、酒家の姑娘を、口説きに通ったのも、今は遠い憶い出の一コマにつながっていた。

簡単な間仕切りの一室に納まると、忽ち数人の小姐が、私とドクター氏を取り囲む。





満腹で何も喰べられないと告げると、それでは一品料理でもと、待つ間もなく大皿一杯に山盛りした、カラスミを運んできた。一口摘んでみたが、満腹のセイもあってかどうも口に合わない。南瓜のタネを噛りながら、すめられる俚に紹興酒<sup>サンシンチウ</sup>をあける。ジョニーウオーカーによく似た瓶の高級焼酎で、街では一本台貨四十二円ぐらいで売っているが、ここでは数倍になっていることだろう。焼酎にしては、案外口当たりのよい方であった。

円卓を囲んで待る数人の小姐を、一人一人観察してみたが、私の心を走らせるような女性は見当たらなかった。

紅樓夢の、朱色に彩色された、五彩の色と香の丹房の中に、羞雲羞雨、恰怜鶯声、艷然と微笑む中国美人を想像する私にとって、殺伐な部屋の雰囲気と現代的服装の小姐との感覚のズレは余りにも大きい。しかしそれは、躍進台湾の現代に、それを望む私の方が無理であることは分かっていた。

尻を据えて、両側に待る小

姐と簡単な会話を交すうち、いつしか私は酒家の雰囲気<sup>タイタイ</sup>に溶け込んでいった。

夫婦の、流しの歌手が入ってくると、太々(妻)は、いい声で「何日君再来」「支那の夜」「夜来香」など既にスタンダードナンバー的な歌を唄い、替わって夫は、ハリのある逞しい声音で、アコーディオンを奏でながら「骨まで愛して」「星影のワルツ」「港町ブルース」「柔」などを正確な発声で唄った。

許さん<sup>コウ</sup>に持たせていたカメラを受取り、ストロボを装填すると、早速この風景に、数枚閃光を放つ。

「ツジムラさん、わたし、あなたを撮りました。」

よう

許さんが立上ってきて、カメラを受取る。「撮れるのかい？ 你<sup>ニイ</sup>(あなた)カメラ知道<sup>チトウ</sup>麼？(知ってるか?)」

チャンポンの、あやしげな言葉で訊ねると「是<sup>スー</sup>——(ハイ)大丈夫よ。わたし少し分かります。これ窓のぞく、二つの影合えばいいのでしょ」

連動距離計のファインダーのことを知っているのだ。旅客主任なら、それも当然のことかも知れない。ここへ歩いて来た道路に面して、明るいウインドウのカメラ店の店頭<sup>ニ</sup>に、キャノンを始め、オリンパス、ミノルタ、ペトリ、フジカ、ヤシカなどの中級品がズラリと並び、フィルムも付属品も、殆どが日本製といつてよかった。台湾での上級クラスから徐々に、一般にもカメラは普及している様であった。

彼は結構いい構えで、私を中心に、両側に待る小姐を入れて、数枚撮ってくれた。カメラを私に返しに来て、彼はそっと私の耳許で囁く。

「誰か気に入ったありますか？」  
「不是、我不要(ダメだ私は要らない)」  
中国人が日本語で訊ね、日本人がタドタド



しい北京官語で応答する。それがお互いの意志を通じる最良の方法であった。彼に中国語や台湾語をペラペラやられたのでは、私には解らない。私が日本語（関西弁の）で訊ねても返事をして、彼は相当諒解に苦しむだろう。その結果、期せずして、私はなるべく知識の枠内で中国語で返事し、彼はボキャブラリーを傾けて、考え考え日本語を使って、意志の疎通を計ろうとしていた。酒家も亦、日本のキャバレーと何ら変わらぬシステムらしく、小姐達は、入れ替わり立ち替わり、部屋を出たり入ったりして、めまぐるしかった。

經理担当の中国人が入って来て、私に恭々しく名刺を差し出し中国語で歓迎の挨拶をしたが、意味は判然せぬものの、大体の見当はつき、私は応揚にうなずいていた。

許さんに、ホステスは何人ぐらいいるのだと問わせると、十七、八人だという返事がかえる。大皿に盛って出された、ポンカンのような柑橘類は、経理自身の奢りだといっていると、許さんが「謝々と」といったが、勘定に入っているのも分からない。  
チエガチユウチヤ リーベンレンライラマ  
「這個迅家、日本人来了麼？（この酒家、日本人来るのか？）」

間違っているかも知れない中国語で、そん

な意味のことを訊ねると通じたのか、許さんは、

「ハイ少ない、日本人余り知らないです。觀光の人、皆、大きい東雲閣、<sup>トシユエンクオ</sup>黒美人など行きます。しかし、大きい酒家の小姐、みな日本人に狎れて、近頃少しサービス悪いです。お金沢山とること考えます。これ酒家小さい。しかし小姐みな優しい、親切。もっと呼びます。少し待って下さい」

これだけ喋るのに、許さんは汗を拭き拭き説明した。勿論客をつれてくることによってリパートがあるに違いなく、相互扶助は、日本以上に常識的のようであった。しかし彼の言葉にも一理あるようで、確かに一流酒家の小姐は日本人狎れして、金儲け主義に徹しているかも知れない。いずこも同じホステス稼業で、何もこれは台北のみとは限らない。日本のホステスなども、相当あくどい稼ぎを平気でやる近頃の御時世である。

言葉が分からぬ俣、両側の小姐と戯れているドクター氏も、邸さんの巧みな日本語の介添でいつしか雰囲気になれたらしかったが、どうやら私同様、氣にいった女性はいないようであった。

「ツジムラの旦那——どうだい、気に入った

「の見たか？」

大きな円卓の向こうから声をかける彼に、私は笑って首を振る。

「先生は？」

「あかんわ。日本語の通じる小姐おらへんがな。一対一になったらサッパリや。どうや、場所を変えようか」

「それもいいかも知れませんね」

めまぐるしく交替する小姐達に辟易して、これはダメだと、ハント女性のメドすら擱めぬ失望に、私は半ばあきらめ、その氣になつて腰を浮かしかけた。刻々と経過してゆく時間  
間が惜しいのである。

許さんが気配で察して、あわてて引き留め立ち上ると経理の耳許で早口に囁いた。うなずいて経理が出ていったあと、

「ツジムラさん待って下さい。今すぐ美しい人來ます、本当です」

と私の肩を押さえて真剣な顔付になった。

苦笑して浮かせた腰をもう一度落とす。私も  
ドクター氏も、全然手をつけないカラスミを  
邸さん、許さんはせわしくなく口に運び、ガ  
ブガブと紹興酒をのみつづけていた。出され  
たものは平らげねばソンだという、経済観念  
からであるらしい。



待つ程もなく、經理に伴われて、若々しい二人の小姐が現われ、私とドクター氏の、傍の腰掛けに、そつてはべつて、会釈をした。一目惚れとは、このようなことを言うのである。私は傍に坐った小姐を一目で気に入ってしまった。さてこそ、待てば海路の日和である。

芳紀まさに十九かハタチ、夜の牡丹花のような秀麗の横顔が、愁いを帯びて紅燈にかけり、窈窕の物腰、蠱惑の麗容、宝石の皓齒輝く——と、そんな中国風の形容で賞美してもいいような、美しい八頭身の美人であった。耳許でカールした、淑やかな黒髪の間から覗く耳朶の、針の先で突いたような穿孔には耳輪もなく、清楚そのものである。次々現われては消えた、小姐達に比して、それは抜群の美しさで、かくも瑕瑾なき玉が、何を誤って風塵花柳の酒家に落在したのかと、私はしばし心を奪われて、うっとりと思惚れていたのであった。

「いかがですか、この小姐ハタチです。お気にいりますか」

「是——很好! (ウン、すごく気に入った)」

「いいです、わたし任せて下さい」

私は大きくうなずいた。彼女をハントした



い意慾が、メラメラと燎原の火の如く燃え上ってきた。

「你姓什麼? (君の名は?)」

「我姓惠榮 (私の名は惠榮です)」

「好娜——你是很好的小姐 (素晴らしい。君は、すごくいい女性だよ)」

「哎呀! 謝々 (まあ、有難う) あなた北京語きれいです」

「惠榮はたどたどしいながら、判っきりした日本語で応えた。私は俄然、嬉しくなる。」

「頼むよ」

「你是日本語明白麼? (日本語分かる?)」

「ハイ、少し。タクサン分かりません」

「好呵! (そりゃいい)」

私は許さんに目くばせした。酔顔に頬を赤くテラテラとはてらせた彼は、私達の会話をニヤニヤして聞いていたらしい。我が意を得たという顔付である。

「頼むよ」

「いいです、任して下さい」

許さんと惠榮の間に、ペラペラと、全然不理解的の台湾語が往復する。彼女は、堰をきったように、何事か喋っているが、悲しいかな私には分からない。どうやらハント女性の見込みが立ってくると、三十年の空白で、殆ど忘失した中国語の、ボキャブラリーの乏しさが悔まれてくる。簡単な会話以外、どうも私の口からは出てきそうにもなかった。

「いいそうです、これからですか?」

「そうだよ、今、彼女は何を喋っていたのだい?」

「肝臓を悪くしたあとで、やせている。それ羞かしいと言います。日本人のお客始めて。二人になると言葉分からない言いました。この酒家に勤めて五日目、それまで百貨公司、デパートですね。そこに勤めていました。病



氣して止めて家苦しい。それで勤めました。私の意味よく分かりますか？」

「明白了ミンバイラ（分かったよ）是非たのむといつてくれ」

「是非？」

「ああ、絶対にだ」

是非も、絶対も一寸理解出来ぬらしい。首をひねっているの、こちらももどかしくなる。何と強調したら分かるだろうと考えて、「恵栄一人、きつと、きつとだ。分かるか」

「ああ、氣に入ったね」

私は大きくうなづく。許さんと恵栄の短い会話がつづく。

「構わないそうです。ツジムラさんの朋友ボシユどうしますか？」

ドクター氏のことらしい。私は彼に声をかける。

「どう、先生。きまりましたか？」

「ウンだめだ。全然言葉が通じんよ。今、邸さんに、日本語のよく分かるいい娘を世話してくれといつてるところだ。あんたは、どうやらその子が氣に入ったらしいね」

「ああ氣に入りましたよ。いいでしょう、彼女——」

「まあネ。でも少し細いんじゃないかい。勿

論好きだろうけどさ。それでハントのネタになりそうなのかい」

「それは、これからの腕次第。何とか口説き落としてみせますよ」

「じゃあ、ここを出ようか。オレはちつとも面白くねえ」

機上での数杯の水割りと、酒家での紹興酒で、酒に強い彼も、かなり酩酊しているようであった。ヨロヨロ立ち上ると、今覚えたばかりのホヤホヤの中国語で、

「おうクーニャン、再見ツァイチエン（さよなら）再見」

と手を振って、邸さんに抱えられるようにして出ていったのであった。勘定は彼が済ましてくれた。そのあとを追って、許さんは慌てて出ていったが、すぐに戻ってきて、

「朋友ボシユ帰ります。いいですか」ときく。

「いいんだ、別行動だから」

「ハア、何？」

別行動の意味が分からぬらしい。中国語の会話を、ひとつひとつ考えるのが面倒くさくて、私はいつしか地金を出して、日本語とのチャンポンで喋っていた。

「離別リービエ分かる？ターファンテンチンイェ大飯店で今夜会う、それでいいんだ」

「ああ明白ミンバイ、分かります。朋友ボシユと別々ね。私彼女に交渉した、オーケイです。ミンテンシャールバン（明日は二部交替の休日）明日都合いい休みます。明天ミンテン四時まで構わない。彼女、今服かえる。すぐここへ来ます」

そして彼は、恵栄との一夜の快樂料を私に告げた。經理に、ボーイに、楽団にあれこれチップを請求される俛、私は潔ぎよく支払った。どうせ遊ぶ氣で溜めた遊興金である。ここでケチっては、すべてがパーになりそうである。さつぱらを切るとまではゆかないが、少しはいいところを見せねばならない。

待つ程もなく、自服に変えた恵栄が婉然と微笑んで現われると私に両手を差し出した。抱いてくれというのであろうか。差し出した両手を握ると、ヒンヤリと冷たい。細っそりした白指の感触が私の胸をジーンと熱くし、ぐっと力を籠めて握りしめると、ほてった私の掌中で、消えも入りたげに、たおやかに慄えた。

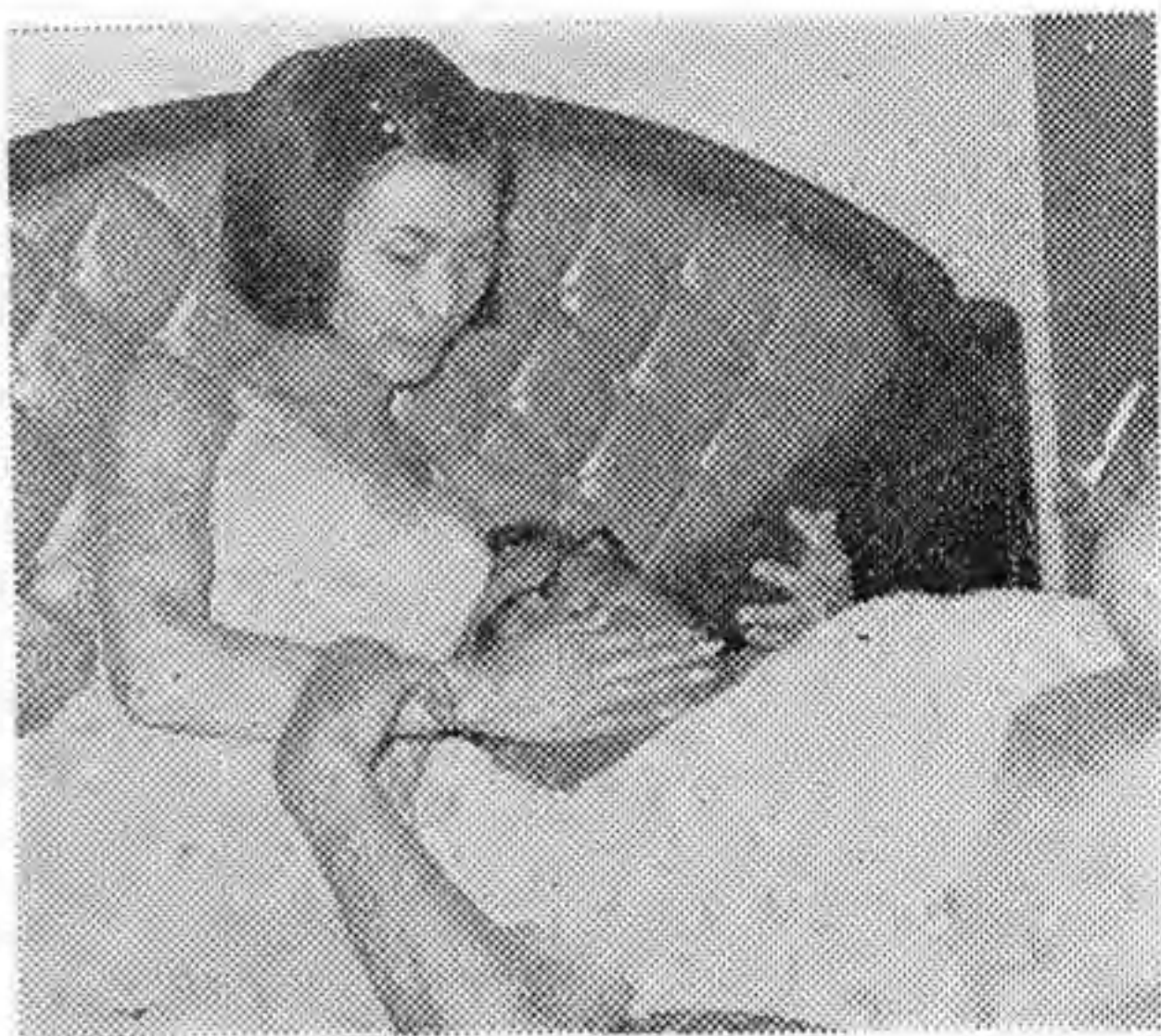
酒家の玄関を出ると、既にドクター氏と邸さんの姿はなかった。単独の別行動は既に始まっている。既に大飯店ターファンテン（ホテル）の六階にある最上級のスイートルーム（特別室）を、私と彼とでそれぞれ占有しているから、この



尽真すぐホテルへ直行してもよかったが、春宵一刻価千金の現在を、このままむざむざホテルへ帰るのも惜しく思われた。

時計を見ると、針が十時を指している。準戦時体制ときいていたこの台北の夜の、何処に、その体制のかげりがあるというのだろうか——。街は活気に溢れ、アベックの若い男女は腕を組み、誰もが愉しげに歩いていた。豚を丸茹でした、生臭い匂いの漂う飲食店には、道路までハミ出して、食慾旺盛な人々が群れ集まって、しきりにパクついていた。街並をそぞろ歩きする私達に、誰一人としてエトランゼを感じないかのようであった。唯、時に振り返る若者は、長身端麗な恵栄の楚々たる容姿に、チラリと憧憬の眼を投げかけてゆくだけであった。その眼は私への羨望に光っていた。

東洋人種の、同型の血のつながりを、私はありありと街に見た。女性の服装に、裾の割れたチャイナ服は全然みかけず、娘達は等しくミニの颯爽たる姿で闊歩し、青年達はそれぞれ彼等にふさわしい流行の姿をしていた。服装はすべてもう日本人と同様で、喋らなければ、誰が日本人で、誰が中国人か、それはもう見分けすらつけようのない相似性に、私



はフト日本の下街にいるような、奇妙な錯覚にすら捉われるのであった。

隘巷の路地の奥に、底辺で暗く蠢く人々の群れに、異臭を放つ牛豚の臓物を旨そうに啖う、うらぶれた人々に、カンテラの仄暗い燈下で、物売りする露天商人などに異種は感じても、一たび堂々たるメインストリートに出ると、もうそこには日本も中国もなく、一樣に類型化された東洋人種が、往来しているに過ぎなかった。

あちこちに建築中の、広層建物の大きな影

も黒々と、新時代を目指して、大きく羽ばたいているようであった。

酒家を出てもう三十分近く、許さんの先導で、私と恵栄は腕を組んで、夜の台北の繁華街を歩き続けた。恵栄が、何事か前を歩む許さんに声をかける。うなずいて彼は私に歩を合わせると、

「彼女言うのはですね、明日の四時まで帰れないということ、家の人に話しておくといひます。電話ありますが、少し用事あります。それ構わないかといっています」

「ああいいとも、じゃあ家までタクシーにのるとするかね」

「そうしましょう」

許さんは直ちに歩道へ身をのり出すと、手を挙げた。忽ち一台のタクシーが近づいて止まる。どこでも、いつでも数多いタクシーが自在に走り廻っていて、人口百八十八万人の台北の足を一手に引き受けていた。ここでは乗車拒否など見たくもなかった。

「对不起（すみません）」

恵栄は私の眼に軽く頭を下げると、ポンコツに近い車に乗り込んだ。シートは破れ、内装の損傷は、新車に乗り馴れた日本人にとつては想像以上である。そんな車でも、運転手



は狎れた手付で車をあやつって、右側通行の道路を、五十キロぐらいのスピードで走っていた。タクシーは殆どが、トヨタ、ニッサンなどの日本車のセコで、右側通行の関係上ハンドルはすべて左側に着け換えてある。運転手に訊ねると、どういう経済機構になっているのか、カローラクラスの小型の新車で一台十五万円するという。日本円の一三五万円に相当するとなると、ちっとやそっとでは、手の出ない道理で、物価の高いもの、安いもののヒズミが激しかった。

車は大通りから狭い横道に外れた。もう私にとっては迷路そのものである。車一台がやっと通れそうな隘路を、運転手は巧みにユルユルと運転し、恵栄の命ずる俚に辿っていた。果物売り、子供相手の一文菓子屋、肉団子屋、ホルモン焼きなどの屋台の並ぶ暗い露路を抜けて、一見アパートらしい建物の前で彼女は車を止めさせると、そそくさと二階へと消えていった。案外がっしりとした建築のアパートで、モルタル、安ぶしんの日本のアパートより、しっかりしている。

「彼女の生活、いいです。このアパート上等です」

許さんは、タクシーの中から、アパートを

みあげて、呟くように言った。大通りに近くて便利だから家賃も高いだろうと彼はいう。まさに掃き溜に鶴の感である。

数分、経って降りてきた彼女は、毛の襟巻のついた外套を羽織って、再び私の傍に坐った。

「すみません、謝々ね」  
シエシエ

彼女はチャンポンで礼をいい、そっと感謝のしるしか、冷たい指先を私の掌にのせた。

「これからどこへゆきますか？」

許さんが聞く。

「さあ、どうしようかなあ」

「ナイトクラブ、ダンスホールあります。ゆきますか？ それともホテル帰りますか？」

彼の言葉に私はしばし迷った。夜庁と呼ばれるナイトクラブは、サービス女性がいないので、パートナー同伴でいいし、舞庁というダンスホールは十二時まで営業していて、新加坡、国際など、大きなホールもあるという話であった。珈琲店の名の喫茶店もあるが、今更入って、徒らに時間を過ごすのも惜しかった。正直いって、私はいつときも早く、恵

栄と二人切りになりたがっていたのである。そうになると、許さんの存在は、便利でもある反面、邪魔者でもあった。

「ホテルに帰るよ。我累了（私は疲れた）」  
ウオレイラ  
「そう、それ一番いいね。台湾おみやげどうします？ 買うなら安い店知ってます。その店のすぐ近く。わたし一緒に行く、負けてくれます」

「じゃあ行くよ」

懼らくその店も、許さんがコネをつけて、客を呼ぶとりべートを貰う仕組みになっているのだろう。どうせ手ぶらでも帰れない台湾なら、少しは買い求めておくもよしと、その気になって、すぐ近くというのに五分ぐらい乗って、既にシャッターの閉じかけた土産物店の前で降りる。タクシーの基本料金は安く一キロ四円（日貨三十六円）で、五百米増しで二円ずつ上がっていった。相当乗ってもチップを含めて、十円紙幣二、三枚で走り廻れる気易さである。

日本語の達者な女店員が、大歓迎であれこれとすすめる。烏来の高砂族が彫るという素朴な木彫人形、置物、旗袍と呼び、彩色の中国服の人形など、奨められる俚に買い求め、台湾行を寛大に許容した家内の為にも、サンゴと翡翠の指輪を買い求めた。

恵栄はその間、私に寄り添い、黙って、指輪やペンダント、イヤリングの並べられたケ





ースを覗きこんでいた。何か買ってやりたくなつたが、咄嗟に「買ってあげよう」という言葉が出てこない。心には、ハントに対する一つの布石を感じていた。

「惠栄——你要麼？（要るか）」

と、怪しげな言葉で聞くと、

「我？ 私に？」

と、驚いたように彼女は自分の胸を指でさし、パツと眼を輝かせて、途端に喰い入るように指輪をみつめながら、

「你的（貴方の敬称）紀念——好、請等一会（あなたの紀念品ね、嬉しいわ。一寸待って

潔く買ってやる。

淡紅のサンゴの指輪を嵌めた指をかざし、婉然と微笑む惠栄の嬉しげなる素振りに、私は自分の心を納得させ乍ら、土産代占めて四千円を支払い、既に懷中は乏しく、八千円の台貨は淡雪の如く消えていった。

再びタクシーを呼んで一路引き返す。私の肩に顔をもたせかけ、惠栄は許さんの手前、声を忍ばせて、謝々ね、多謝ねと、しきりに感謝の言葉を繰り返していた。

戦後の日本で、アメリカ人が、パンパンやオンリイなどに、土産や装身具を気前よく買

下さい」

と、女店員にあれこれと出させた。やっと気に入ったらしく、指に嵌めた花模様のサンゴの指輪を嬉しげにみつめ、謝々を繰り返すのであった。値段をみると千円（日貨約九千円）である。未知に対しての高いプレゼントだが、こちらから言い出してしまった手前、

ってやり、女がベタベタくっついてくるのに屈辱的不快を感じたが、いつしか私自身、そうした思ひ上がった同じような行為に走ってはいなかったかと気付き、フト反省めいた思いにかられたものの、一目惚れの小姐に買ひ与えた、その反応の期待の方が大きかった。サンゴの指輪の手前でもオレは彼女をハントしてみせる——。私は内心、秘かに期するところがあつた。

しなやかな惠栄の指が、いつしか胸に忍びより、胸を撫でながら、一方の指は、堅く私の指を握って離さなかった。既に艶然たる媚態が彼女の全身に漲り、ハントの機は、急速に熟しつつあつた。

### 快樂の初夜は更けて——

隣室を訪れると、既にドクター氏は戻っていた。邸氏と二人、ポツネンとソファに凭れた彼の表情は心なしに、心細げに見えた。

「どうしたの？ 相手は、まだ？」

「邸さんが手配してくれた。珈琲店の娘らしい。期待しているんだが、もう来る筈だ。あなたの方は？」

「S酒家の、あの娘だよ」

「頂好な小姐だよ、あの娘は」



「おや、覚えましたね、北京語を」

「ハハ、邸さんから教えて貰いたてのホヤホヤさ。オレの小姐が来ると、こう云えとさ」

「彼女独りで放つてあるから戻りますよ」

「許さん一緒だろ、まだ……。いいから呼んでこいよ、ここへ」

私独りいい目をしているようで心苦しく、  
「じゃあ」

とうなずいて部屋に戻ると、許さんと惠榮は、早口のテンポで、しきりに何か喋っていた。

「朋友が来いってさ」

「あなたの朋友、今一人ですか？」

「珈琲店の小姐が来るそうだが、未だ見えな  
いようだ。没法子（仕方がない）だ、ゆくこ  
とにしよう」

うなずいて、許さんと惠榮はソファから立  
ち上がると私について来た。プチネック付の  
黒いミニの姿が、よく似合う惠榮であった。

「ツジムラさん、近頃台湾で没法子（仕方  
がない）の語、余り使わない。これ諦めネ。今  
の中国前進だけで、あきらめないです」

「是——明白了。（よし、分かった）私が大  
陸にいた頃、中国人は何か言うと、没法子と  
いったものでね、つい出たのだよ」

「悪い意味でない没法子（メイファーズ）かまいません」

ドクター氏は、小姐のこない暫しの間に、  
大阪空港で買った黒ラベルのジョニーウオー  
カーを、既に半分ぐらいのみ乾して、酒につ  
ぐ酒で、相当に酔っているようであった。私  
達に眼を据えて、ジロリと見廻し、

「オレは邸さんの案内で、万華（マンホワ）を覗きにいつ  
た。彼は台北の恥部だというが、なる程すご  
いところだ。必要悪かも知れんが、日本人は  
一寸近寄れんぞ。怖いアンちゃんがウヨウヨ  
していて、ウカウカ女達にふざけると、身ぐ  
るみ脱がされそうだ。台湾の人でもいい家庭  
の人間は近づかないというが、昔の日本の遊  
廓その倅なんだな。それも三流以下の、底辺  
に生きる人が対象らしい：ウーイ」

既に酔顔朦朧とした彼の眸は濁っていた。  
毎日が多忙な病院長の、職業の煩わしさを、  
何もかも綺麗さっぱり忘れ果てて、刹那の快  
楽と酒の酔いの中に、ズルズルとのめりこん  
でゆこうとしているかのようであった。

「オイッ、ツジムラさんよう、あんたも呑め  
よ。なに？ 呑み過ぎると何も出来ない？  
ええやないか——。オレは女体の奥など、ゲ  
ップが出るほど毎日見ているんだ。それでも  
どうや。尚且オレはやるぞう」

最早、ロレッツの廻らなくなった口調になっ  
て、彼はジョニーウオーカーを、私にガボガ  
ボとついでよこす。じっと彼をみつめる惠榮  
に、一瞬チラリと顰蹙の眉が動いた。

その時、待ちかねていた彼の小姐が現われ  
た。惠榮とは対照的に、目鼻だちのくっきり  
とした、肉感的な女性で、官能の靡れをそこ  
はかとなく感じさせた。小姐は妹雲（メイユン）と名乗っ  
た。

「おう、頂好小姐来了（テンホウシヤオチエライラ）（素晴らしい別嬪がき  
たか）」

彼は声高々に、邸氏に教えられた通りに叫  
んだ。妹雲の粉黛は濃く、艶色を撒きちらし  
て、彼女はドクター氏の上げた腕の中へ、身  
体をめりこませていった。

「おい、ツジムラのオッサンよ、もう帰れ。  
オレはオレ、あんたはあんた。今夜は好きな  
ように我が道をゆくさ。邸さんよ、あんたも  
帰ってくれ」

ドクター氏は、嬉しくなると言葉がわざと  
乱暴になる。心得ているから、何といわれて  
も一向気にならない。彼の酔顔に期待の色が  
流れ、案外しっかりした口調で、  
「フエフエッ、小姐さんよ、あんばい頼んま  
っせ」



と、ぐいと肩を抱きしめ、私にチラリと片眼をつぶって、我が意を得たりの合図を送ってきた。

「じゃあ戻るよ。明日の朝、八時に電話しますからね」

「ウン、いいよ。しかしオレは眠っているかもしれない」

「その時はその時——、<sup>フエイルンライバ</sup>惠栄来罷！（来るんだ）」

私は惠栄の手をとって部屋に戻った。許さんはノコノコと憶面もなく、又ぞろ部屋へ入ってくる。彼の今夜の労力のねぎらいに、かなりの額のチップを握らせると、

「ありがとう」

と答えて、彼はニコリと眼を細め、

「明日どうしますか？」

ときく。

<sup>ミンツアオバーテンチンナアツアオツアンタオ</sup>「明早八点請拿早餐到、我房間来」<sup>ウオフアンシエ</sup>

私は台湾観光案内書を開き、ホテルで最小限必要な現地語の一つを、そっくりその倅喋った。明朝八時に、朝食を部屋に持って来てくれという意味である。

「よく分かりました。それではお休みなさい」

夜の午前一時まで、徹底的にサービスをし、て、やっと許さんは消えていった。



始めて私達は二人きりになれた。

<sup>シエンザイウオスルイラ</sup>「現在我是累了（私は疲れたよ）」

そういつてソファに深々と身を沈めると、

惠栄は矢庭に私の膝に体ごと投げ出し、首に両手を巻くと、いきなり激しく私の唇を吸った。甘く柔らかい惠栄の口腔の奥に中国人特有のニンニクの香がしみこんでいたが、その香すらも蜜の味となって、堅く惠栄を抱きしめると、甘い露に酔い痴れていった。

まるで制御する知能が欠けたように、長いときが経過していった。

やっと唇を離すと彼女はハンドバッグから小瓶をとり出して軽く舐めった。小瓶に「ピオ」という品名が書かれ、日本のT製薬の口臭消去液であった。激しいくちづけを続ける度に、惠栄は折々にピオを口辺にひたし、薄荷の強い香で、微かに臭う尼久の口臭を消そうと、いじらしい努力をしていた。

お互いに言葉の通じぬもどかしさに、唯心のみが激しく燃えて、海棠の花に似た女人は只管に体ごとぶつけてくるのであった。

やっと思い切って立ち上ると、バスの湯栓を一杯に開いて部屋に戻る。

ツインベッドの一つに寝そべると、寄り添うように惠栄は、私の胸中に身をゆだね、指先で文字を書くそぶりをした。彼女は筆談に頼ろうと考えたのであろうか。

ポケットの手帖をとり出して、ボールペンを手渡すと、漢文調の質問が始まる。大体意味が分からぬでもないが、中国特有の熟語に私はしばしば首をひねった。スラスラと、惠栄の走る字は達筆で、そこにも彼女の教養が偲ばれるようであった。

私の姓は、中国読みの出来ない姓である。

「辻」という字は、日本の国字であって、中国では読めず、強いて読むとすればシンニユ





ました。つじむら、いい？」  
と、可憐なまなざしをあげて、  
きくのであった。

筆談を交した結果分かった事は  
この台湾へ、戦後大陸から渡って  
来た純中国女性と、本来の台湾女  
性の二系統のうち、彼女は福建生  
れで、後者に属していること。

父が事業に失敗し、現在病いに  
苦しんでいる。妹二人、第一人と  
母を抱え、五人の生活は、すべて  
自分の肩にかかっている。『我生  
来苦命』（私は生まれつき、苦し  
い運命のもとにあるという意か）  
であること。

以前百貨店に勤めていたが肝臓  
を悪くしてやめ、チオクタンをのんで少しよ  
くなつてから、一流酒家の月世界へ勤めたが  
又肝臓の病いがぶり返して二カ月間でやめた  
こと。

まだはっきりと体はよくなるが、生活  
が出来ないので、今のS酒家のような三流に  
五日前からつとめたが、胃腸が弱く、段々と  
痩せてゆくことなど、綿々と書き綴って、私  
の明白（分かった）を認めては愁いの眉をか

げらせて、ヒソと微笑むのであった。

私の応答する漢語は誠に日本的であるが、  
フーミンバイ（分からぬ）という、あれこれ考え  
て書き直し、何とか納得させていった。その  
たどたどしい会話の中に二人のほのぼのとし  
た愛情の交錯を感じて、私の胸はうれしい期待  
にときめくのであった。

恵栄はツト起き上ってバスを覗きに行き、  
湯が一杯になったことを知らせた。

ベッドの上で下着を脱ぎ、全裸になってバ  
スに向かう。真紅のシュミーズ一枚になった  
彼女は、黙って私の背に回ると、洋式バスの  
中で石鹸の泡を立て、柔らかに背をこすり、  
肩や二の腕を揉み始めた。一緒に入ろうとい  
う言葉が言えず、脱いで入れとしぐさで示す  
と、そつとうなずいて、扉の外で裸になる気  
配がし、やがて羞恥を頬に泛かべて、彼女は  
胸から下をバスタオルで巻いて入って来た。

その初々しさに眼を瞠る思いで、酒家の小姐  
と承知しながらも、私には、もぎ立ての新鮮  
な堅い果実を想像させるのであった。

長く底の浅い楕円形のバスは、二人入ると  
半分ぐらい湯が溢れて流れた。

背後から抱くようにして身を沈めさせよう  
としても、ツルツルすべる底浅のバスでは所

ウを外して「十」（スイ）と発音し、「村」  
（ツオン）であるから、スイツオンというこ  
とになるのだろうか。

彼女はツジムラという日本読みに、真剣に  
取組み、中国漢字を当て嵌めてゆく。私が恵  
栄の字の横に「フエイルン」と仮名書きする  
如く、辻村と書いた字の横に「出字木了」と

漢字で読めるように書き込み、  
「貴姓明白了、出字木了」是？（お名前分り



詮無理である。恵栄は私の為すが俚になってはいるものの、洗面所、便器、バスが一式に揃ったこの洋式は、何とも勝手が悪かった。

男性を愛すること、そして男性に愛されることがすべてと心得て、献身的に奉仕する恵栄に、私は永年忘れていた女性の真髓を発見した思いにかられた。さればこそ男性天国と呼ばれる所以であろうか。

四千年の歴史を持つ、男尊女卑の中国思想は、戦後の日本のような極端な女権の拡大もなく、ましてやウーマンリブなど、思いもよらぬ観念で「女論語」の描く女性像、温良、貞淑、忍従、勤勉の美德が、今も尚脈々と息づいているかのようである。

それが男性天国の所以であるとすれば、女は矢張りこの美德こそ、永遠に男にとって、最も魅力を感じるのではなからうか――。

私は恵栄の背後に回り、黙って肩を流してやった。その行為にビクツとしたように、彼女は肩をすくめ、恐懼の念を全身に現わし乍らも、私のなすが俚になっていた。

窈窕の柳腰、すらりと均整のとれた細身の美人だけに、乳房のふくらみは薄かったが、反ってそれが楚々とした美しさをもたらしていた。

バスから上ると、私はカメラにストロボを装填した。構えた私に、湯上りの全裸の恵栄は、あわててバスの中へ隠れ、首だけのぞかして、しきりに何か訴えていた。懼らくダメだといっているであろう。

やっと真紅のシユミーズをつけ終わり、恵栄は、おそろおそろ私に近づく。

私は筆談で、記念に撮りたいと懇願し、どうやら彼女は納得したらしく、微かにうなずいた。これも緊縛フォトへの布石と、私は半裸の彼女に焦点を合わせる。一緒に撮りたいと書く愧かしげに笑って身をくねらせた。

三脚を引き伸ばしカメラをセルフタイマーにしてポーズをかえては彼女を抱擁し、くちづけしたカラーフォトを撮り続けた。ベッドに呼ぶと素直に近づく。搔き抱いて、その刹那の痴態をカメラに納めてゆく。恵栄とのSMのカメラ・ハントの第一歩は、こんな形で始まったのであった。それもこれも根気のいる緊縛への道程である。せいてはことを



仕損じる。ましてや相手は、言葉の相通じぬ異国人同志。一夜の欲を通じても、愛情が伴わなければ、信頼は生まれてこない。どこの何者とも分からぬ一日本人に自由に女体を束縛させる女性には、金の草鞋を履いて探してもそうそうあっさり見つかるものではなかった。況してや私達は、初めて出会って、未だ数時間も経ってはいないのである。今、恵栄が、私とのあらねなきベッドシーンを撮ることに協力していることすら、常識では考えられない大いなる譲歩ではなかったろうか。私は彼女の好意に応えて、尚もこの相互の信頼



を深めさせるべく、敢えて急がなかった。

明日という日があるではないか。私は例によって筆談で、明日の夜も、こうして二人きりでいたいと切望した。新北投温泉の待応生のところへ行くのではなかったのかと彼女は半信半疑の面持ちで書き綴る。話せる可能の言葉を混え、行かない——私は恵栄が好きだと書くと、彼女の表情に激しい欲喜が泛かび上り、眸としがみついて、私の小さい豆粒程の乳首に齒を立ててくるのであった。男性でも乳首に性感の感じる者もあるが、生憎と私にとっては、唯操ったいただけであった。しかし恵栄にとって、その行為が、男性を欲ばせる手段だと信じて疑わぬのか、激しく繰り返して、私の欲喜を只管に燃え立たせようと努力していた。恵栄は自から真紅のシユミーズを剥ぎ、桃色のパンティを脱ぎ捨て、挑むような色気を見せて、私の下着を脱がしにかかっていた。熱い燃えるような眸が私をじっと咫尺の間にみつめ、愛撫の繊細な指先が、私の頬をいとおしげに撫でさすっていた。華奢な女体は一糸もなく、息を嚙む大胆さで、ほの暗い燈下のもとに開いている。撮りたい慾望にかられて、自動シャッターにセットしようとしてベッドを降りかける私に、恵栄は眸とか

らみつき激しくイヤイヤとかぶりを振った。情感の断絶と、羞恥の裸身をカメラに納める不安が交錯して、彼女は精一杯の力で引き留めるのであった。私はあきらめた。いや既に私自身、いちいちベッドを降りる煩雑さを厭うて、カメラを放棄する気持になっていたのである。

鴛鴦戯の情感は昂まり、既に桃源の秘境は開かれていた。何を好んでカメラに心を走らせ、魅惑の花園への誘いを中絶する必要があるうか。

甘い蜜の味を求めて、私の体は徐々に蠱惑の淵へと溺れこんでゆく。異国の初夜に相逢うた、羞花閉月の佳人の、胸のふくらみに唇をあて、桃源の秘果を探って、静かに彷徨をはじめていた。

恵栄は吸り泣くようにたどたどしく、この期に及んで、鶯声息を殺して唄を口哈んだ。  
「骨まで……骨まで……骨まで愛してほしいのよ……」

唄が途切れ、尼久の香の漂う吐息と共に  
「我愛你……我愛你（アイラブユー）」

と、呟くように口許でささやき、白魚の指で私の鼻を押えながら、  
「ワタクシ、ニホンヒトハジメテ……ヤサシ

イ。アナタスキ。アナタ、ワタシスキ？」  
と、たどたどしく愛の告白をするのであった。

貧乏で苦しいとも言い、日本人始めてとも言う——或いはそれは、台北の小姐の、誰しもが言うかも知れぬ、常套的な偽りの告白であったとしても、私は恵栄の言葉のみは信じなかった。甘い奴だといわれればそれまでであつても、私は所詮はロマンチスト。

嘘だろうときめつけてみても、それが何になろう。甘く欺されてやってもいいではないか。それが私の年輪の才覚でもあつた。五十男とハタチの女——。そのギャップは、いかにうまく欺されてやるか、ということであつた。そして、最後に笑う者は外ならぬ私自身ではなかったらうか。

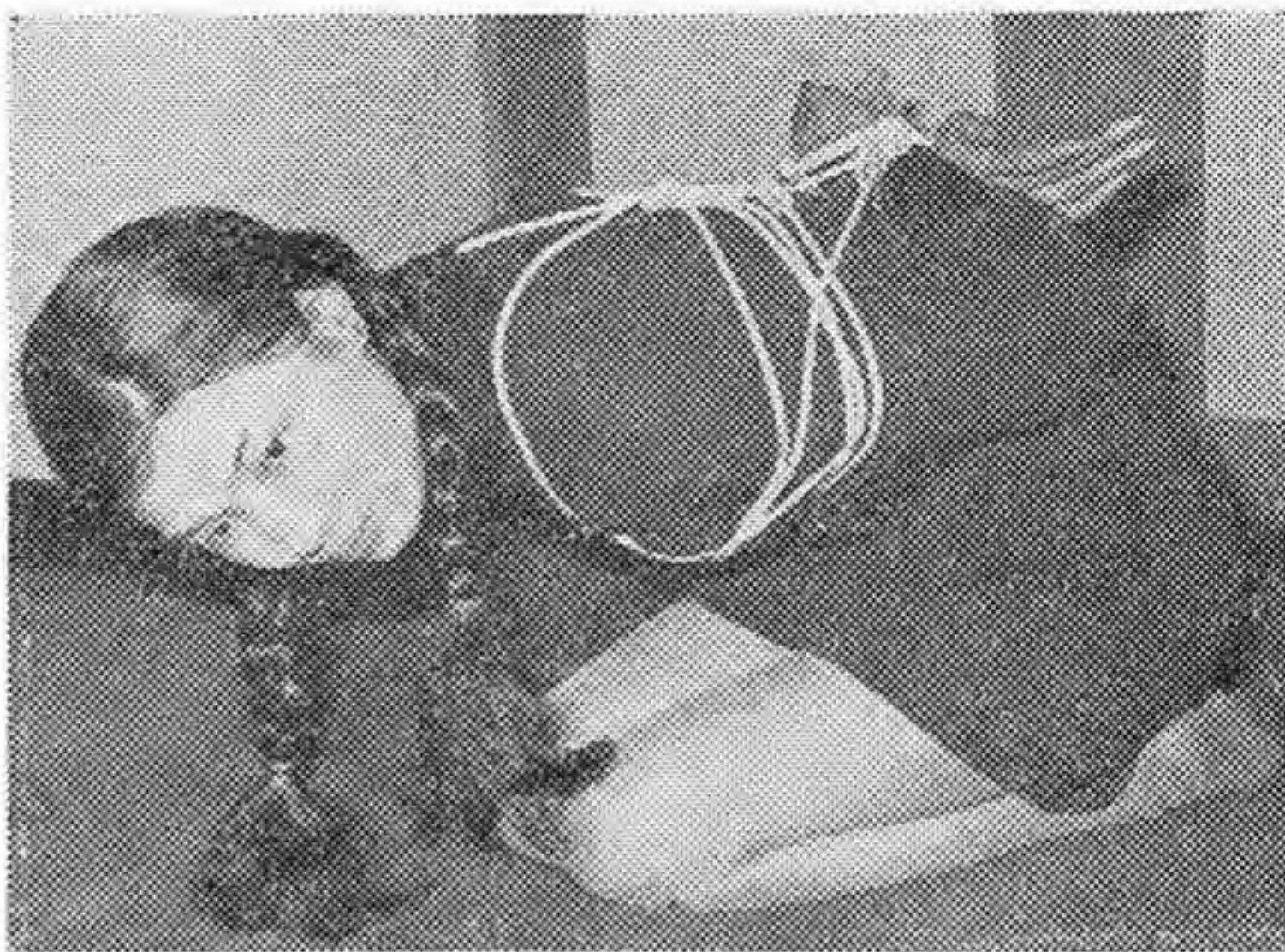
我愛你——と囁かれ、私も亦我愛你と囁きかえして、甘い愛撫のくりかえしの中に、私の大脳神経は、やがて潑刺と疼き始めた。熱い血潮は充満し、爛熟の時は近づいていた。

恵栄の指が巧みに私を昇進させる。時に到って、咄嗟の現実に戻り、予防に身構えて、持参したものを装填しようとした私の手を、

彼女は激しく拒んだ。

「不是、這個不要、不好呀（いや、これは要





らないわ、よくないもの……」

激しく心を燃焼させて、韓と絡みつく女体に、詭くも私の警戒心は崩れその尽深淵の仙境へと一気に埋没していったのであった。

皓齒をかんで身をくねらせ、海棠の花一輪純情、素朴に歓喜の呻きをあげていた。

……………

二人で堅く抱き合って寝ても、ツインベッ

ドの一つでは狭く、窮屈であった。激しい昂ぶりが尾を曳いて、私はいつまでも寝つかれなかった。輾転反側の度毎に、惠榮はかすかに瞼を開き、

「現在我要休息了（私は休みたいのです）」

と夢うつつに呟いていた。眠れぬ倦、飽く

ことなくまさぐる私の手を厭わず、半睡半醒の惠榮は、私の執拗さにたえていた。眠らね

ば体にこたえるらしく、彼女はしばしば、

「我現在想睡觉就好（私は今、眠ることが一番いいことと思います）」

と、懇願するようにいうのであった。うな

ずいて手を引っこめ、私は同意する。そのく

せ、傍の女体に思いをはせると、こらえよう

もなく、又モゾモゾと手が伸びて行くのを、

どうしようもなかった。やっと夜明け前、ウ

トウトと浅い睡りにつき、二時間たらずで眼

がさめてしまった。もう眠れない。敏感にな

った心裡を、惠榮のことのみで占有されてい

ることを、私は、ありありと感じた。傍で私

の胸に顔を埋め、スヤスヤと軽い寝息を立て

る惠榮をそっと抱きしめ、私はその尽、刻の

経つのを待った。窓のカーテン越しに、夜明

けのしらみが、暗い部屋の中へ、微かな明り

を投げかけてきた。

その時、静寂を切裂くように、枕頭の受話器がけたたましく鳴り響く。受話器をとるとドクター氏の醉声がとどく。

「おい、オレや。どや、ちっとは眠ったか」

「ウーンまあね。今頃どうしたの」

「オレは又、酔い出した。こっちへ来いよ。

女の子をつれて……」

「未だ夜明けの五時だよ」

「いいやないか、五時でも」

「ウン、仕方がない。行くよ」

傍の惠榮は、うつすらと眼を開いている。寝不足のせいか、憔悴の色が濃かった。

「什麼？（どうしたの）」

「朋友打电话、叫一塊兒来罷（友達からの電話だ、一諸に来いって）」

「朋友不是（友達じゃない）」

「没法子（仕方がない）」

ノロノロ起き上って、下着をつけるのを、

ジッとみつめていた彼女は、あきらめたよう

に、眠く疲れた体を従順に起こすと、紅いシ

ユミーズの上からオーバーを引っ掛けた。

二人で夜明けの冷気の廊下に出て、隣室の

扉を叩く。鈍い返事があって、しばらくして

妹雲がドアを開いた。

彼は朦朧とした表情で、私達をみつめ、片



手を差し出した。

「どうしたの、今頃」

「ウーン、顔がみたくなった」

「それだけ」

「この横で一緒に寝よう」

彼も亦、酔心の余情の中に、異国でのノスタルジャを覚え、どうしても眠れぬ俚、つい私に助けを求めて、我俚を言いたくなった様であった。

後ろに寄り添う恵栄が、私の肌着の端を引っ張る。視線を振り向けると、ダメという風に首を振った。強い絆で結ばれた男同志の友情は、恵栄に説明しても分かつる筈もない。ドクター氏と相容れるか、恵栄を探るか、フト迷ったが、妹雲の困惑の表情につき当たり「この娘が眠いんだって……。又、八時頃、会おうしようよ」

それに返事はなく、彼は頭をたゆたわせて軽いいびきを洩らしている。はれぼったい顔で妹雲は、背後の恵栄に何か二言三言、声をかけた。彼女は首を振ってダメという様に、目で出てゆくことを奨めた。全裸で寝ていて慌ててバスタオルだけを腰に巻きつけた姿はあられもなかった。

戻ったものの、すっかり眠気のとれた私は

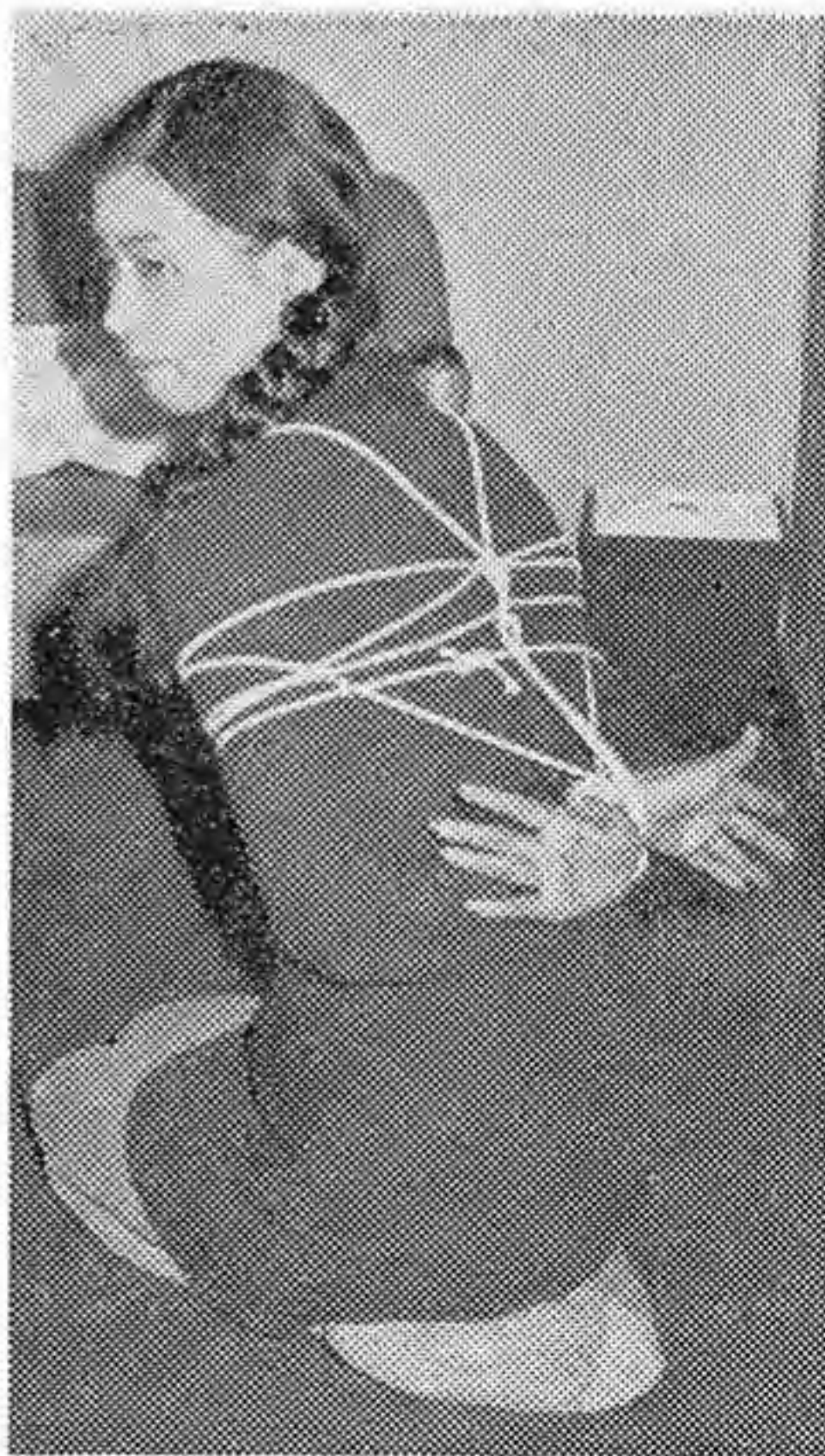
冷えた体をベッドに横たえると、矢庭に恵栄を求めた。美德の温良貞淑さは、ここでも遺憾なく発揮されて、彼女は逆らわず私のなすが俚になっていった。私の勝手気俚の横暴にたえて、微かに哀歎の呻きを洩らし、悲しいさが、私の体を心労の影を落としつつも、まさぐっていた。挑んだそのくせ、寝不足の疲労が私を萎えさせ、未遂の混濁した全身に、その時、激しい昏迷が襲ってきた。手足がけだるく、開こうとする隙が、おのずから閉ざされていった。女体を微かに意識し乍ら……。

### 両手に花で遺跡をたずねて——

深淵から私を呼び醒す、恵栄の声がきこえる。

「現在八点鐘、早餐来了（今八時です。朝御飯が来ましたよ）」

あれから三時間ばかり、ぐっすり眠ったらしい。物憂げに手を振って、



「現在不要、九点来罷（今要らない、九時に来てくれ）」

と夢心地で、私は恵栄に背を向けた。彼女は、そっと起き出した気配であった。扉のポリーに告げる声を夢心地できいて、再び今度判っきりと目をさましたのは、もう九時半過であった。

朝食の味噌汁も漬物も中国風で、とても口に合わない。恵栄は私につき合って同様に味噌汁をとったが不味そうに口に運んでいた。トーストとコーヒを持って来させて、簡単な朝食をすませる。

許さんは約束の八時からやって来て、廊下の長椅子に凭れ、私の起床を待っていたらし



かった。

約束の時間を<sup>たが</sup>違えて気の毒になり早速、彼を呼び込む。恵栄は朝の化粧に余念がない。

鏡にうつる顔に、やつれが目立っていた。

「ツジムラさん、今日何処ゆきますか？」

「台北市内の名所を見たあと、碧潭<sup>ビータン</sup>と烏来<sup>ウーライ</sup>へ行ってみたい」

「それ一日かかりますね。タクシーの車よくないです。私の友達に、いい車あります。すぐ電話します」

「ああ、よろしく頼むよ」

北京語をいちいち考えるのがうるさいから日本語で応答する。

許さんは車の手配をするため出ていった。  
「你睡覺睡覺好呵現在シンドイカ？（あなた

よく眠れてよかった、今シンドイカ）」

私は恵栄の言葉に思わず頬を綻ばせた。独り言で、よくシンドイ（関西弁の疲れたという意）とか、ああシンドとか言うものだから恵栄に訊ねられ、日本語のシンドイは「我是<sup>ウオスー</sup>累了」の意味だと教えてやったのである。恵栄はそれを覚えていて、疲れている？ ときいてくれたのであろう。

「シンドイ不是<sup>フーシ</sup>（シンドイない）」

「我是少々シンドイ（私は少し疲れている）」

恵栄は真面目な表情で、シンドイを連発する。私は鏡台に坐った彼女を背後から羽搔いじめに抱きしめてやった。

筆談で、台北市内の名所旧跡を廻ると告げると、うなずき、友達を呼んだらいかがかとい

って、三人の女性の名前を書き、「結拜」とかく。結拜の意味が分からぬが、或いは親友とでもいう意味だろうか——。恵栄は電話をかけ、三人の小姐のうち、秀麗という小姐が来ることを告げた。

一時間後、車が到着

する。支度してホテルを出ると道路に面して

シボレーが一台止まっている。二〇〇〇ccの大型で六三年型の骨董ものであるが、タクシーよりは遥かにましであった。夕方四時までの約束で紙幣を渡し車に乗り込んで、もう家を出たという秀麗を待つ。

タクシーがホテルの前で止まり、一人の小姐が降りてきて、それに向かって恵栄が手を振った。車が動き出すと、許さんが訊ねた。

「朋友ねていますか？」

「ああ独りでね。妹雲という小姐は朝の九時に帰ったそうだよ」

「独りで放っておいていいですか？」

「邱さんが、又別の小姐をつれて来るそうだよ」

許さんは軽く笑って、微かに首を振った。今日は朝から別行動である。新しく現われる小姐を連れて、彼は淡水へゴルフに行くといっていたが、私は私なりのスケジュールで、夕方までを観光に費す気であった。

空は晴れたり曇ったり、定まらぬ日和であった。朝の光でみる街並はエキゾチックで物珍しく、二人の小姐に挟まれて右顧左眄<sup>ベン</sup>して、しきりに秀麗に訊ねた。恵栄にくらべて容貌は劣るが、彼女は日本語がかなり喋れる





方で、その点、観光のガイドには都合がよかった。私と秀麗の会話を、恵栄は嬉しそうに聞いている。言葉の分かる友達を紹介したことが、私に対する感謝の現われのようであった。彼女はサンゴの指輪を得々と秀麗にひけらかし、しきりに私の事を告げていた。

「貴方恵栄に指輪記念に買いました。恵栄とても嬉しい言ってます。私も買って欲しいです」

「ああ、いいよ」

無難作に応えたものの、観光案内程度の小姐に、高価な品を買い与える気はなかった。

秀麗は、しかしサービス精神旺盛で、

「私、日本の唄うたいます」

といっっては次々と流暢な日本の流行歌をきかせてくれるのであった。

車は台北市郊外の陽明山に向かって走って

いる。道路は殆ど舗装が行き届いていた。

途中で国立故宮博物館によったが、膨大な陶磁器、名墨、絵画も、私には余り関心がなかった。

両手に花の美女を抱えたポーズを、許さんは快く、何枚も何枚も撮ってくれた。陽明山に近づくと、横なぐりの激しい雨が降り始めた。桜、桃は早や散り始め、つつじが全山に咲き乱れて、台湾の春は今が盛りである。

降りて散策したかったが、雨に祟られて、車窓から眺めるだけで、紅緑一入映える山をぐるりと一周し、その戻り道、日本人なら必ず訪れるという男性天国、新北投温泉で車をとめる。下山すると雨も上がっていて、薄陽が射していた。

一服しようと新北投駅前の喫茶店に入っていたら、ドヤドヤと五、六人の小姐が入って

きた。一見して新北投の女性であることが分かった。朝の客を送り出して夕方までのくつろぎのひとつときではあろうが、タオルの寝巻や浴衣がけ、着崩れたミニの常着のこの女性達を瞥見して、私はやはり新北投へ泊まらないうでよかったと思った。

化粧の剥げ落ちた、荒れた皮膚の、蒼白い女達をみた時、それはかつて日本の三流赤線地帯の、あばずれた女達の姿と何ら変わらないうことを、この眼で判っきりと確かめたからである。夜毎変わる蕩客に春をひさぐ女達のどことなく、うらぶれた佻しい姿に、一抹のあわれさすら覚えるのであった。

「新北投温泉、近頃、余りお湯出ないです。女、悪い病氣持つ人多い、怖いです。酒家の小姐上品、安心出来る女多いです」

許さんは、同国の女性達の、疲れ果て、淫靡の漂う姿を苦々しくみつめて、吐き捨てるようにいった。

「日本人が悪くしたんだろう、きっと」

「どちらもないです。しかし、新北投にも、沢山いい小姐もいます。すべて悪くないです」

「そうだろう、何処も同じだ。それは日本でもいえることだよ。さあ、それじゃポツポツ





出発するか」

許さんと喋りながら、私は先程より恵栄の体の調子が悪いことが、ひどく気掛かりになって来た。

朝の無理して喰べた味噌汁が口に合わなかったのか、それとも車酔いしたのか、或いは不眠の疲労からだろうか。

彼女は努めてさりげなく振舞いながらも、もう三度も吐き気を催して、車が止まると、目立たぬ片隅に走っては苦しげに吐き続けた。蛾のように白く蒼褪めた顔はやつれ、私に心配させぬよう、表面元気そうに振舞っているものの、苦しげであった。

「恵栄が苦しそうだ。碧潭と烏来へ行くのをやめるよ」

「それいけないです、約束です」

「でもこれでは無理だよ」

「無理仕方ないです。少し困ったことです」

許さんは恵栄に、厳しい眼で何か言っていたが、私に向かい、

「恵栄構わない、行くといひます」

私はそこに、はしなくも男尊女卑の様相をみた。時間が約束の四時までなら、少々苦しくても辛くても、契約を遂行させずにはおかぬ強さを感じたのであった。

「いやいけない、私がチャーターした車だから、私がどうしようと私の自由だ。勿論約束の四時までの報酬は渡す。しかしもう引き返して、恵栄を少し休ませてやりたい」

「ツジムラさん、女に親切です」

皮肉をこめて、許さんはこれ以上いっても無駄とばかり口をつぐむ。私は苦笑して、テーブルを隔て恵栄に近づき、筆談で、これからホテルに戻るから、ゆっくり休むようにと書いた。

彼女は大きく眼を見開き、蒼白い頬に血の気をのぼせて、約束は守らねばいけない、私のことは心配ないと書くのであった。

秀麗に訊ねさせると、

「心配いりません、恵栄辛抱づよい。苦しん

で帰ること、あなたに悪いといひます」私の肚はきまった。不服そうな許さんをせかせて、一路市内への道を引き返させる。

「ここ寶石つくる工場、よって行きましょ」

秀麗は、たくらみがあるのか、途中の北投中央南路にある中国寶石股份有限公司に、さっさと車を取り入れてしまった。工場内は見学自由らしく、広い売場には、夥しい加工品が陳列され、サンゴ、ヒスイなどを研磨する人々の仕事振りに興味を惹かれた。卒然と佇む恵栄の肩を抱いて売場に廻り、私は穿孔された唇の、空白の耳朶を指さして耳輪を買えと奨めた。彼女はいらないと微かに首を振る。そうされれば尚更買ってやりたくなる男の心理である。指輪と同じ色のサンゴの耳輪をケー





スから採り出させて、私は自らの手で、二つに分けた耳輪の針先を、耳朶に挿し込み、耳たぶの裏で止めてやった。熱い感激のまなざしで、恵栄は私の眼を凝視していた。小さい金台の耳輪が、ポツンと淡紅色に耳朶に妖しく映える。

彼女は強く私の手を握りしめたが、口には出さなかった。既に心が通じ合った今、私の心づかいが痛いように分かるであろう。

秀麗が指輪をあこれとり出しては、私に買ってくれという。一八〇〇円（日貨一六二〇〇円）の値札がついている。私をカモにしようとする気持にいや気がさし、何をもって恵栄以上の指輪を買う必要があるかと、ダメだと素気なく断わってしまった。

車中で恵栄は手帖に書いて私に示した「拿錢妹自己去買」（妹は自分で買うから錢をやってくれ）と言う語に苦笑し、姉妹分の恵栄の顔を立てて恵栄に買ってやった指輪と同額を手渡してやる。秀麗には既に、許さんを通じて、今日一日のガイド代が渡っている筈であった。

秀麗は用事があるといって、車が台北市内へ入るとさっさと降りてしまった。所詮小姐といってもこんなものかと私は慨嘆たる思い

で、移り行く街並を漠然とみつめていた。秀麗は台北市内の、五指に入る日本人向酒家の小姐である。昨夜許さんが言った、一流酒家の小姐はかなり悪ずれしているという言葉が改めて思い出されてくるのであった。

恵栄は最早、シートに坐っていることすら苦しそうであった。後部シートは、二人になってゆったりしている。私は体をぐっとかたえによせ、恵栄の頭を膝にのせて、そっと横たわらせた。もう遠慮する気概もなく、恵栄はされるが俚に膝枕して苦しげに眼を瞑っていた。甘い——という表情で、助手席から許さんは私をみつめ、黙って前方を向いた。

昼食しようとの許さんの提案で、車に任せて或る店の前で止まったが、よろめいて舗道に出た恵栄は、そこで又しても激しく吐瀉した。私にしても食慾はない。一刻も早くホテルへ戻りたい気持で一杯である。激しくえずく恵栄の背を撫でさすり乍ら、押付けのサービス過剰に、ムラムラと反撥すら感じて、私は強い口調で帰ることを命じた。

苦しげにぐったりした恵栄をやさしくいたわり、ゆっくり寝かせてやりたかった。彼女の激しい吐瀉の原因の一半が、私にもあるように思えたからである。

抱きかかえるようにしてエレベーターで六階の部屋に辿りつき、閨房の扉を開くと、彼女はそのまま倒れ込むようにベッドに伏した。服をそっと脱がせて、毛布をかけてやる。

眼に一杯涙を浮かべ、恵栄は激しい感激の面眸を私の顔に凝固させた。唇を近づけるとそっと掌で蔽い、ダメだと堅く唇を噛んだ。吐瀉のあとの口臭を懼れて近づけなかったのであろう。顔をそむけた俚、ひしと私の首に縋りつき、力の限り強く締めつけてくるのであった。

「謝々、謝々、您是很好（有難う、あなたはとてもいい人ですわ）」

きれぎれ叫ぶ恵栄の、頬に伝う涙が、私の口辺を生あたたく濡らした。

「你是多々のシンDOI、休息休息」

毛布を肩まで引き上げ、その上からそっと軽く叩いて、扉でもう一度振り返り、私は閨房から消えた。

次の間に許さんが待っていた。

「どうですか彼女？」

「寝ているよ。さあ遅くなった、ホテルの下のレストランで食事しよう」

「彼女、少しあなたに甘えている、ぜいたくです」





「いいじゃないか、私は恵栄が好きだ」  
確かに恵栄の、突発的なことで、私は残る  
貴重な数時間を棒に振らねばならなかった。  
親切な自家用運転手と三人で、ホテル直営  
のレストランで食事をし、許さんに犒いの気  
持で紹興酒を次々とすすめたが、私自身殆ど  
のむ気もなく、政府専売になっているビール  
一本を辛うじてあけただけであった。出され  
た豪華な中華料理も余り口にせず、二人が綺  
麗に平らげてくれた。私の心は、今頃独りで  
眠る恵栄にのみ、ひたすら想いを馳せていた

からであった。

運転手を帰したあとも、

許さんは私の観光中止を気の毒がり、しきりに行くことを奨めた。熱意に負けて彼と二人でタクシーを拾い総統府、台北公園、竜山寺台北駅など廻ったが、心は一向に弾まない。早く済ませて帰りたく、心も上の空で彼の説明をきいていた。竜山寺でバッテリーとドクター氏と出会う。淡水ゴルフ場へ行くのを、雨で中止し

て観光に廻っているのだといい、彼は得々として連れの女人をこれ見よがしにみせつけ、  
「おうおう可哀想に……あんた一人で。一体  
どうなったんだい、彼女？」

と聞くから、斯々如々と答えると、

「ああ、ツジムラはんは甘い甘い。そんな犠牲に巻きこまれることないがな。さっさと帰せばええやないか。幾らでも小姐はいるんだぞ。元気なピチピチした小姐をたのんだらええのに」

と、こともなげに言うのであった。フエミ

ニストと言われても私にはそれが出来ない。

確かに彼の謂う通り、恵栄はどことなく弱々しい蒲柳のたちのようである。そのため、折角の短時日の観光に、私は払わずもがなの犠牲を払っていた。しかし、物質では割り切れない、温かい意志の疎通が、私と恵栄の間に介在しているように思えるのである。或いはそれが、余りにも甘っちょろい感傷主義者として、人は笑うかも知れないが――。

「すきずきさ。私は私のやり方でゆくよ。これから目的があるからね。きっと口説き落としてみせるから」

暗にSMのハントを仄めかすと

「そのうちといっても、明日はもう帰るんだぜ。今夜口説くつもりだろうが、半病人が、シンドイ言うて帰ってしもうたら、それでパ―やで」

「その時はその時のことやわ」

「まあ、せえだいやりなはれ」

ドクター氏は私の心を深く知ってい乍ら、口先ではケチをつけて、私のロマンの心を笑って、からかっているようであった。何しろ同好十八年のつきあいである。お互いの心の隅々まで知っている仲である。私もいわれたからといって怒る気にもならない。徹底して





隅々にも、明日の台湾を象徴するかのようによに老若男女は、忙しげに往来していた。

### 緊縛の望み遂に

### 果たして——

一時間ばかり独り歩いて、再び部屋に戻ってくると、恵栄は既に身支度を整えて、私を待っていた。拡げて伏

せてある鏡台上の手帖を私につきつけ、<sup>ミンバイラマ</sup>「明白了麼？」（分かりますか）と体を寄せてきた。

「お腹の調子が悪く、ひもじいから家へお粥をたべに帰ります。自分は今夜、S酒家は勤務あけで体が空いている。健康でなく病いのある自分のようなものでもよかったら呼んで下さい。私はあなたの優しさと親切が永久に忘れられません。私はあなたに深く愛情を覚えています。あなたが私を呼んで下さる事を信じて——」

多少の誤りもあろうが、大体そうした意味が理解出来た。勿論、私に異存のあろう筈はない。

必ず来て欲しいと書くと、一寸意味に途迷ったようだが、数回漢字の配列を並べ替えて、私の意を懸命に伝達すると、分かったのか夕顔のような清冽な笑顔を浮かべて、恵栄は自から唇を求めて近よせてきた。独特の匂いはなく、ピオの香が強く私の鼻をついた。

私は又しても午後七時過ぎまで、独りきりで過ごさねばならない。その事をペンにすると、恵栄は悲しげな困惑の表情でうなずき、<sup>カキ</sup>「電影院（映画）か戯劇（芝居）を、その間みてくるよう、すすめるのであった。

私は、タクシーで恵栄を家まで送っていった。散漫なよろめく足どりで、彼女は二樓へと消えていった。そのタクシーで、すぐ引き返したものの、夕方の七時まで、私は何もすることがなく所在なかった。しかし、台北へ到着した一時間後から、この今の時間まで殆ど小一日、恵栄は私と行動を共にしていたこととなる。そして二時間後には、再び相まみえる筈であった。

ドクター氏は、未だ帰らず、私は仕方なく独りで部屋のベッドに転り、しきりに恵栄に心をはせた。彼女がいろいろと書きしるしていった手帖を拡げ、彼女を偲んで字義を検討してみるのであった。ドクター氏を評して、

すべてを忘れて遊ぼうという彼もよし、その考えは否定はしない。しかし、憂愁に閉ざされ、憔悴し、心労でやつれたあの恵栄を、あつさり捨てるには忍びなかった。

三時過ぎ、私と許さんはホテルに戻った。

恵栄はまだ昏々と眠っている。そっとその俤にして、再び未知の街に、唯一人ブラリと出る。許さんは手持無沙汰そうであったが、今の私にはもう用はない。孤独を独り愉しみながら、エトランゼはひたすらに恵栄の恢復を祈りながら、喧燥渦巻く大都会を、あてもなく放浪した。誰一人、この孤独の日本人を振り返る者もなく、街並は活気に溢れ、陋巷の



「這種人不好、不老實、不滿足」とあり、大體の意味は分かる。

「你的身長幾許」と書いた私の字の横に「五尺四寸（一六二センチ）」と並べて書き、私に便りを呉れといったは、封筒を書き、惠榮自身の住所宛名など、私にも分かるように書いてあるのも、私にはすべてが思い出の一夜のよすがに繋がっていた。

手帖を抱いた俤、いつしかウトウトと仮寝の夢を結んでいたらしい。

電話のベルで起こされ、相手はいわずと知れたドクター氏であった。ホテルの食事が口に合わないから、日本料理をたべに出ようという誘いであった。

彼はホテルへ戻ってから竜山寺で出会ったあの小姐と、うたかたの情事を結んだといい今帰ったところだといった。夜は新たな小姐を呼ぶが、あんた何してるんだと聞くから、粥をたべに帰る惠榮を送り、独りでベッドに転がって、うとうととしていたと思ったら、大きく笑った。私のロマンチスト振りが、面白くて堪まらぬらしい。

日本料理店へ、邸氏、許氏の二人は、いわずもがな随いてくる。現地産の醤油、油、味付に、刺身、蒲焼、天婦羅、にぎり寿司をた

べても何処かに異和感があった。

市の中央にある円環公園（通称マル公園）

へ立ち寄り、見ている前で若い女が、注文の蛇をびーっと裂いて料理する物凄さに、食後だけにゲゲツとなり、匆々に退散してホテルへ戻ったら既に八時を廻っていた。てっきり私に二度も電話があったとボーイが告げる。まぎれもなく惠榮に違いなかった。

ボーイに電話番号を知らせると、ベッドの横のベルが、忽ちに私と惠榮をつなぐ。

「你上那兒去！（あなたは、どこへ行つたの）」

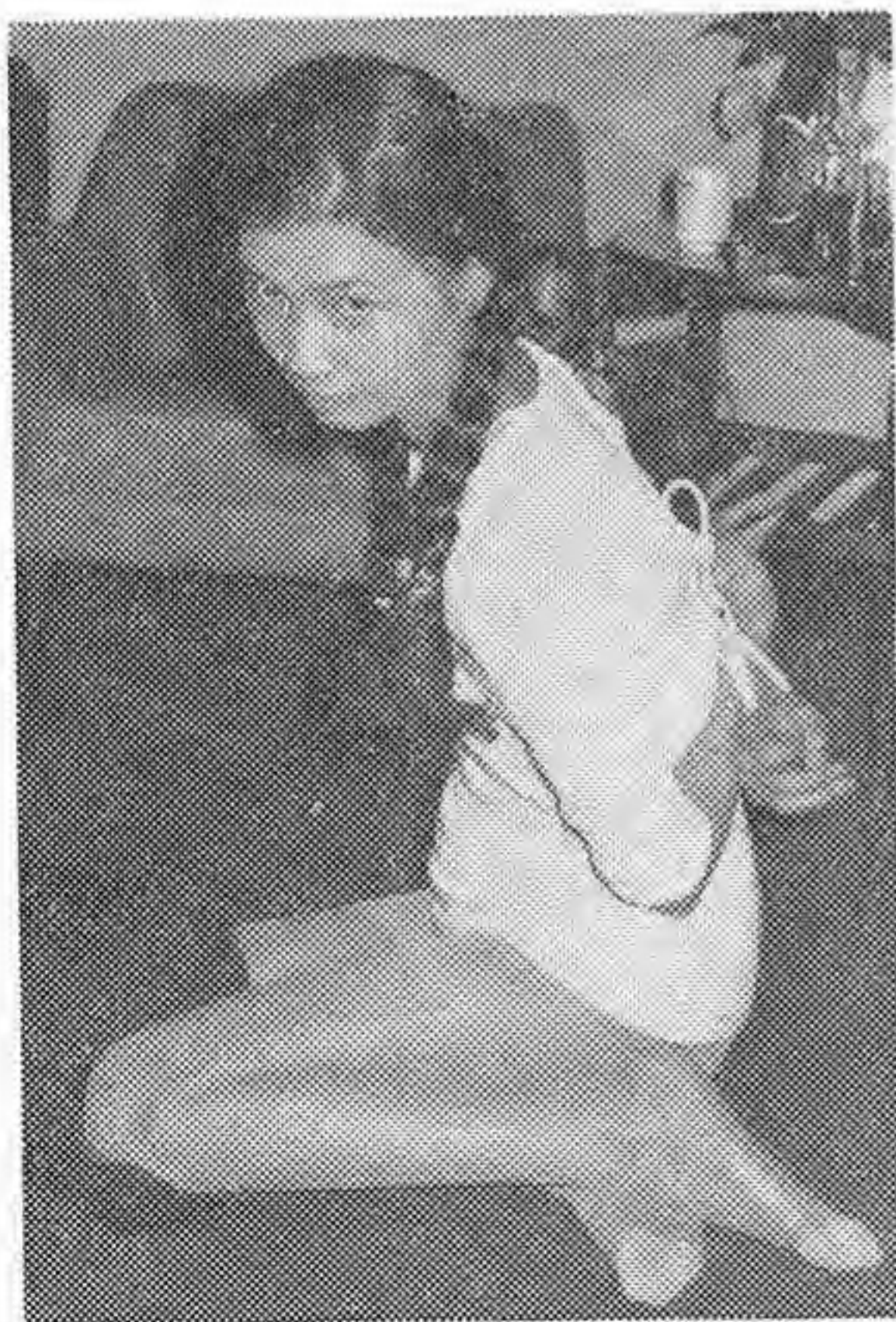
驚声は、詰問していた。私の不在に、不安の胸を震わしていたのである。たどたどしく日本料理をたべに出て、ぶらぶらしていたと応え、すぐ来るようにと、あやしい北京語で伝えるのであった。

十数分後、惠榮の姿が部屋に現われた時、どちらからともなく駆けよって、忽ち熱いく

ちづけの数分が経っていった。

頬紅染めて、お下げに編んだ髪かたちに驚き、お下げ髪を引っ張るとホンモノである。と、昨夜は、巧みに短く、髪を整えていたのであろうか。お下げ髪の惠榮は、あどけなく若やいでみえた。緑衣のミニを纏い、変身した彼女に、私は別人のような新たな興味を覚えずにはいらなかった。

時間は宵のうちであるが、もう今更部屋を出る気はサラサラない。許さんが夜の遊びをしきりに奨めるが、私は断乎と辞退し、紙幣を握らせて引き退ってもらうことにした。残







「私は、こうした写真を、恵栄で撮ってみたい」

「それは非常に羞恥なことです。待応生なら分かりませんが、私は生まれて以来全裸の写真など一度も撮られたことがありません」

「私は恵栄を愛している。だから一生の記念として撮りたいのだ」

「では愛しているのに、どうしてこんな残酷な縛ったことをするのですか？」

「これは全裸の写真に飽いた、風流な遊戯である」

「縛ることが、どうして、風流でしょうか？」

「それは、性を独占する一つの手段である。風流の遊戯によって自分の心は激しく情熱を燃やし、征服されることによって、女性はいよいよ快楽的になって、歓喜を覚える」

「貴方は日本の女性を、沢山縛りますか」

「その通り、台湾へ来た目的の中にそれがある」

「写真の現像はどうするのですか」

「自分でやる。但しこれは色彩だから、信じている朋友に依頼する。絶対安心だ」

「あなたの奥さんが怒るでしょう、嫉妬するでしょう？」

「妻はすべてを理解している」

「信じられない」

「日本は現在全裸女性の写真は、沢山の雑誌などに掲載されて自由だ。そして緊縛女性の写真も又自由である」

「台湾ではこうした写真は許されない」

「しかし、昨夜、縛らないが、裸身は撮らしたではないか？」

「貴方が好きだからです」

「私も恵栄が好きだ。そして女性を縛るのは風流な私の趣味である。だから尚更撮ってみたい。私は本に文を書き、テレビや映画も少し関係している。或る一部の人々の間では知名である。そして同じ趣味の人々は、私の風流の結実を愉しみに待っている」

「分かりました。しかし私は痩せて細く、余り体はよくない。病後で顔もやつれている。裸では私も羞恥だし、風流の同好はがっかりするでしょう。しかし服をつけてなら、縛ること諒承しましょう」

「それでいい、私は残念ながら縄は一本しかない。これがすべてである。神に誓って縛った尽で乱暴はしない。信じてくれ」

された貴重な一夜、徒らに紅灯の巷を徘徊して無駄に費やしたくはなかった。

しばしの熱い抱擁のつづいたあと、私はおもむろに、そこで始めて、持参したベタ焼きの、キャビネのフォトをみせて、恵栄の反響を窺った。みつめる彼女の芙蓉のかんばせに驚愕と激しい羞恥が交錯し、赤らめた顔を伏せて、あわてて私に押し返した。

筆談が始まり、その往復が激しくなる。



「私はすべて信じます。愛する人の喜ぶことの為、快く協力します。唯一つ、疑問があります」

「どういうこと」

「縛ること、この国では罪人しかしない。それに幾らか心の抵抗を感じます」

「それが風流の遊戯につながるのだ」

「よくは分かりません、風流の意味が……」

しかし私は愛する人のために恥を忍んで縛られます」

書けばこれだけのものであるが、延々筆談は二時間に及び、愛撫やくちづけを断続しながら苦心惨胆、やっとのことで理解して貰えたのである。謂わば、戦前思想の若い日本女性を口説いている感じに、やや似ていた。

SMに対しての余りに大きな心の隔りも、相互信頼の心の触れ合いによって、何とか融和したもようであった。

障壁をのりこえ、やったッ、遂にやったッと、私は内心躍り出したい気持を押さえて、いそいそとカメラの装備にかかった。

一本の縄と着衣——それは凡そ、緊縛という字義からは縁の遠いものであろう。しかし日本での、これからの、どの様な強烈な緊縛にも況して、この一縛は価値あるものであつ

た。愛情と信頼は国籍を超越して、遂に私はこの窮窳蒲柳の美女を口説き落としたのである。すべてを諒解して、快い協力の上でないと私には意味がなかった。脅迫、強制、さつびらきってのプレイはしたくない。そして今私は判っきりと恵栄の快諾を得たのである。彼女の眼前で私は、持参したキャビネ判のベタ焼きをズタズタに裂き切って、ライターの火を点じた。半焼けで灰皿で燻るフォートを、恵栄は静かにみつめていた。

風邪気味だという彼女は、昨夜の真紅のシユミーズ一枚にくらべて、今宵は下着を多く着込んで来たという。それもよし、私は次第に徐々に、脱がせてゆく腹つもりであった。

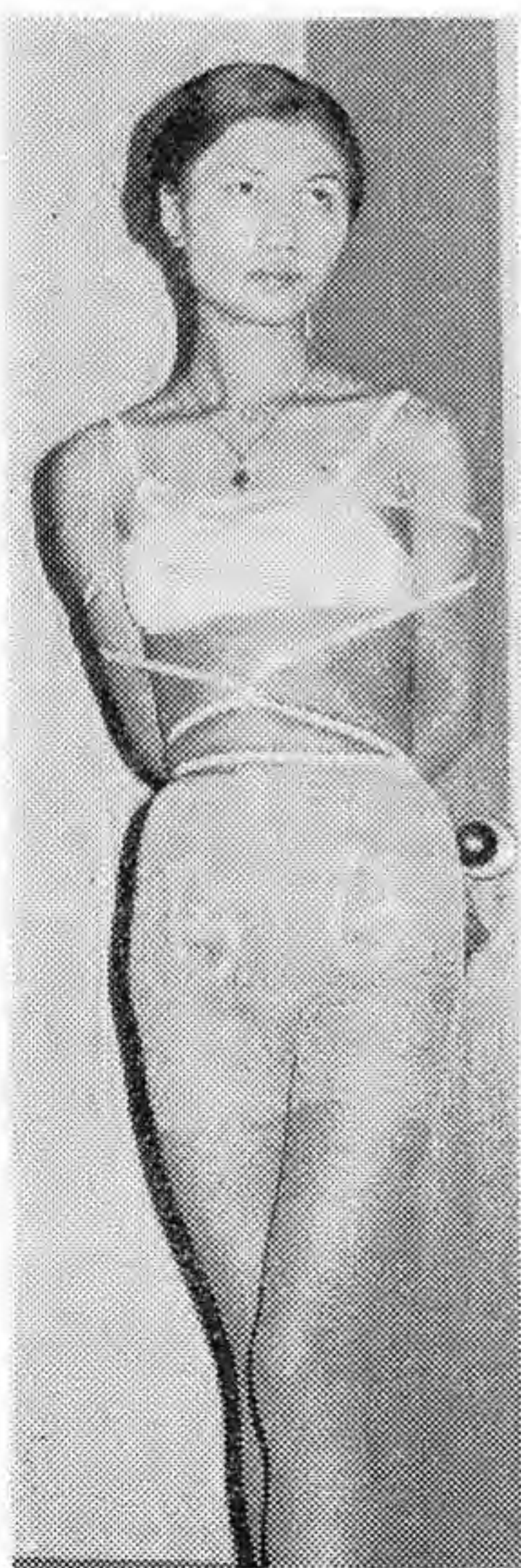
細紐をしいて、異国の地で異国の佳人に縄をかける感激は、私の終生忘れ得ぬもので

あった。

素直に恵栄は両手を背後に回す。胸を弾ませて、緑衣の上から簡単に胸縄をかけ、軽く両手を背後で縛って、手早くポーズは完成した。既に昨夜激しい交歓に愉悦し、嬌声をあげのたうった恵栄である。肉体の交渉にくらべれば、着衣の尽の簡単な後手縛りなど、ものの数でもなさそうに見えても、それはSMプレイの欲びを知らない人の言である。肉の交渉にくらべ、SMプレイが如何に困難なものであるかは、恵栄の謂う、風流な遊戯に円熟した人程理解出来る行為であった。

私は恵栄目掛けて忽ちのうちに数回の閃光を走らせていた。

縄一本では所詮どうしようもない、緊縛とは凡そ縁遠い初步の縛りも、私にとっては、





さながら羽化登仙に遊ぶ心地で、夢中でポーズをかえては撮りまくった。

膝を揃えての前手縛り、応接間と閨房の境の両手吊りなど、次々と一本縄の可能性を試みては、私の胸は熱く疼いていった。

緑衣を脱がすと、成程彼女が先刻いった通り、真紅のシュミーズに比して、これは又何と素朴な、胸で紐を結ぶ下着と、長めの厚いパンティを穿いていた。小姐らしからぬその素朴な下着に、私という人間を信頼しきった気易さがあった。長いパンティは流石に野暮ったいので脱いでもらい、下着の尽で後手縛りにし、時には三脚を使って、私自身を入れて撮りまくる。ついでベッドで俯伏せにして両手足を背後で縛ってつなぐ。これらの一連の手馴れた緊縛行為に、恵栄は眼を瞠りながら、今はむしろ愉しげに、私の言うが儘にいろいろのポーズをとってくれた。

次第に私は脱がせてゆく。恵栄の女体は、ブラジャーと薄いパンティ・ストッキング、その下にクリーム色のパンティだけの姿になる。風邪を引いている彼女に、気の毒と思いつつも、裸身に近い甘い肌に縄をしめ、立位座位、膝位転倒など、一つの縛りに数ポーズをつけて、カラーフィルムは次々と回転して

いった。

カメラの構図に心を奪われて、さまざまポーズをつけ、真剣にファインダーを覗く私を恵栄は感嘆したような瞳でみつめていた。確かに緊縛フォトを撮る私の、その時の行動は発刺とし、いきいきしていたに違いない。この僅かの時間のために、私はどれだけ苦心したことであろうか。コネもない異国に、ドクター氏と二人フラリと訪れ、未知の世界に飛び込んで、遂にモノにした喜びは、それを遂行した者でないと分らない感激である。

今、甘い果実は掌中にある。私は更にブラジャーをとり、黙々とパンティ・ストッキングをぬがし、更にはパンティをも剥ぎとろうとした。彼女はまるで魂を奪われたかのように易々として私の為すが儘になっている。

全裸の恵栄に非情の縄は絡みつく。果てしなき夢の又夢が実現し、私の嗜虐心は一抛に急上昇しつつあった。

素直に縛らせていた恵栄が、カメラを構えた私に、ハッとしたように

「ダメ、ソレイケナイ、ダメ——」

と叫んで、首を振った。仕ぐさを混えて、どうしてダメだと聞き返すと

「ハダカ、ダメ、ダメ」

という。恵栄はヘタヘタと坐り込み、哀願するように数度頭を下げ、拝むようにして私をみつめた。強行すればこの儘、いくらでも撮れる。しかし私の心はハタと途惑った。彼女の懇願を無視して強行すべきか、将又、信義と約束に基づいて中止すべきか——。

恵栄はしきりに筆談を求めた。やや強ばった表情で、緊縛の裸身に近づくと、私は彼女の縄をスルスルと解いた。

風邪気味というのに全裸の儘、恵栄はポールペンをとり上げ、漢字の羅列を始めた。

要約すれば、

「あなたが私を縛るのが好きであれば、私は寛大に許容します。しかし写真撮る事は許されない。私はあなたを信じているから、あなたも私を信じて下さい」

「どうしてもいけないか」

「それは非常に猥らな行為である。日本へ帰国してから、若し私の写真が第三者に見られた時、私のメンズは潰れる。写真をとらない約束で縛り、私を種々あなたの好きなようにしてくれることを望む」

「よく分かった、そうしよう。風邪は大丈夫なのか」

「それはあなたに関係ない。私の体の心配は





無用である」

ただとどしく、廻りくどい筆談の結果、私は遂に、潔く諦めざるを得なかった。日本のM女性においても、SMプレイはしたし、されどフォトは困る、というのが沢山いるし、ミュージック劇場に於いても、ストリップパーは、開陳してもフォトは撮らせなかった。どこか万国共通の一脈相通ずる、女性保身の心理であるようであった。

得難いコレクトとして筐底深く眠る筈の、彼女の露出フォトは、こうして不発に終わったのである。彼女は知っていたのだ、カラーフォトが、私の手によってDPE出来ないことを。それだけに尚更、他人の目に触れる可

能性を懼れたのであった。或いはモノクロであったならば自家現像を強調して成功していたかも知れなかった。

とあれ私は諒承してカメラを三脚から外すとソファに投げ出し、最早これ以上撮る意志のないことを示して安心させ、改めて一本の

縄をフルに活用して恵栄の上半身を始めてきつく緊縛状態に縛り上げた。ハント向きのフォトのプレイは一巻の終わりを告げ、これから真実のSMプレイが始まろうとしていた。

強烈な後手縛りに、眉をしかめ乍らも、彼女は無言でこの緊縛に耐えていた。縄尻をとってぐいと押し、荒々しくベッドへ投げ出すように横たえろと恵栄はハツとした顔で私を見た。強烈——粗暴と、急に豹変した私の態度に、無抵抗の恵栄は、咄嗟に不安を抱いたに違いなかった。その行為は、私の嗜虐心の昂まりの発露である。荒々しくしたい慾望は所詮恵栄に伝えようもない、心理的な推移である。私の眼前に、おびえた様な恵栄の顔が

蒼褪めて強ばっていた。

抵抗の出来ぬ女体に、私の唇と両手がフルに活動を始めた。激しく荒々しく吸いながら私は恵栄の口許で、喘ぐように、「我愛你」を繰り返し、貧るように、舌根も抜けんばかりに激しく吸った。

強烈な愛情の発露と知って、恵栄の怯えの表情は須臾にして変わり、甘い悦楽の呻きが恵栄の唇から徐々に、そしてやがて激しくほとばしり始めた。

無我の境地で恵栄は歓喜に呻く。深淵を這い、桃園の甘い果実を追って遊弋する指が、こらえようもなく、彼女の発声を更に昂めていった。

窈窕の美女は儚ならぬ女体を悶えさせ、柳腰は妖しくくねり、甘い蜜を求めて這う私の唇に、恍惚の嬌声が吐き出されていった。

不安と戦慄と快楽の交錯が女体を貫き、初体験のショックにキリキリと歯がきしみ、絢爛たる緊縛の鴛鴦戯の果てに、蠱惑の響聲に打ちひしがれて、恵栄の紅唇から、思わず知らず、

「呀、好……很好、我愛你」

の、夢中の呟きが洩れていった。たまゆらの熱き血潮を燃え立たせて、その



果てに訪れる羞恥に、惠栄は我にもあらず双頬を紅潮させ、艶冶な<sup>なが</sup>眇し目で、かくも快樂に酔い痴れさせた私を怨ずるように、なまめかしくみつめた。

縛った俵バスへといざない、既に陶磁のバスを溢れこす湯に縄のままでザブリとつけ、どっと足許に流れる湯に快く両足をひたし乍ら、さながら貴重品を扱うかのように柔軟に石鹼の泡を立てていった。

彼女は早口に何かを訴えるが分からない。

身振り口振りで、縄をといてくれといってるらしかった。うなずいて、湯でしまって堅くなった縛り目をやっとなぐると、かぼそい指が矢庭に私の首をしめ、尖った銀色の長爪が、キリキリと私の肌に喰い込んで、昂進した感情の起伏を、激しいむせび泣くような吐息が如実に物語っていた。

その夜の愛の激しさ——もうそれは蛇足であろう。

前夜は私が彼女をリードし、今宵は惠栄が積極的に私をリードしていった。

高唐賦にある「巫山の夢」を結んで、私と惠栄は、判つきり対等のヒューマンとして、プレイに耽溺したのであった。

歡樂のうたげ果てて、私の眠りを誘うよう

に惠栄は、それが得意の「何日君再来」を、静かに私の耳許で、囁き泣くように唄った。

……愁<sup>チヨウ</sup>堆<sup>ウタイ</sup>解<sup>チエ</sup>笑<sup>シヨウ</sup>眉<sup>メイ</sup> 淚<sup>ルイ</sup>酒<sup>シヨウ</sup>想<sup>シヤン</sup>思<sup>ス</sup>帶<sup>タイ</sup>  
今宵離別後 何日君再来……  
今宵離別後 何日君再来……

(重なる悲しみを笑顔の眉で解くが、あなたを想えば、涙は流れて帯のように長い。今宵別れてのち、あなたはいつの日再び来るのでしょうか)

この二小節は、まるで、私と惠栄の為にある様に思えた。意味を深く噛みしめ、私は惠栄に和して合唱した。

惠栄の眼尻から、スーッと熱い一しずくが伝って流れた。

松山空港で惠栄と再会を約して——

二日目の朝が訪れた。欲望を存分にみたした飽和状態が、私を朝の九時まで、ぐっすりと熟睡させた。目ざめた私をまじまじとみつめる惠栄の眼瞼のふちには、ありありと疲労のかげりが、くまをつくっていた。

激しい恍惚と陶酔の重複に、初夜に比して眠れなかったのは惠栄の方ではなかっただろうか——。

愧らみを泛かべて、眼覚めた私に顔を寄せ別れの近づく淋しさに、彼女は私さえその気

になれば、果てしなく体を投げ出したがっているようであった。

ホテル備えつけの便箋をそっと差し出し、読んでくれという。私の眠っている間に、綿々と書き綴ったものらしかった。

『回到日本写信給我、平安貴地、一路順風、最後祝你。你為人很好、我会永生難忘你、你回日本会想我嗎、別離——心裏多難過、我很快樂、但總要在這短短二天你快樂嗎、雖是萍水相逢』

私には読めない字もある。しかし意味は再読、三読して徐々によく分かった。

(日本へ帰ったら、写真と便りを、私に下さ。貴方が無事に帰られることを祈っております。あなたはとてもいい人でした。私はあなたに出会ったことを永久に忘れはしないでしょう。あなたは日本へ帰っても、私のことを想い出してくれるでしょうか。別れることはつらいですが、私はとても楽しかった。唯ここにいて、すべてに要した日は本当に短く二日間でしたが、あなたは楽しかったでしょう。遙か遠く隔たっていても、心はお互いに出合っています)

恐らくそんな意味の語に違いない。熟読するうち、私の胸はジーンと熱く疼いた。



短短二天——たしかに短い二日間であったが、心と心を通じた今、私達にとって別離はこよなく淋しく悲しいものであった。

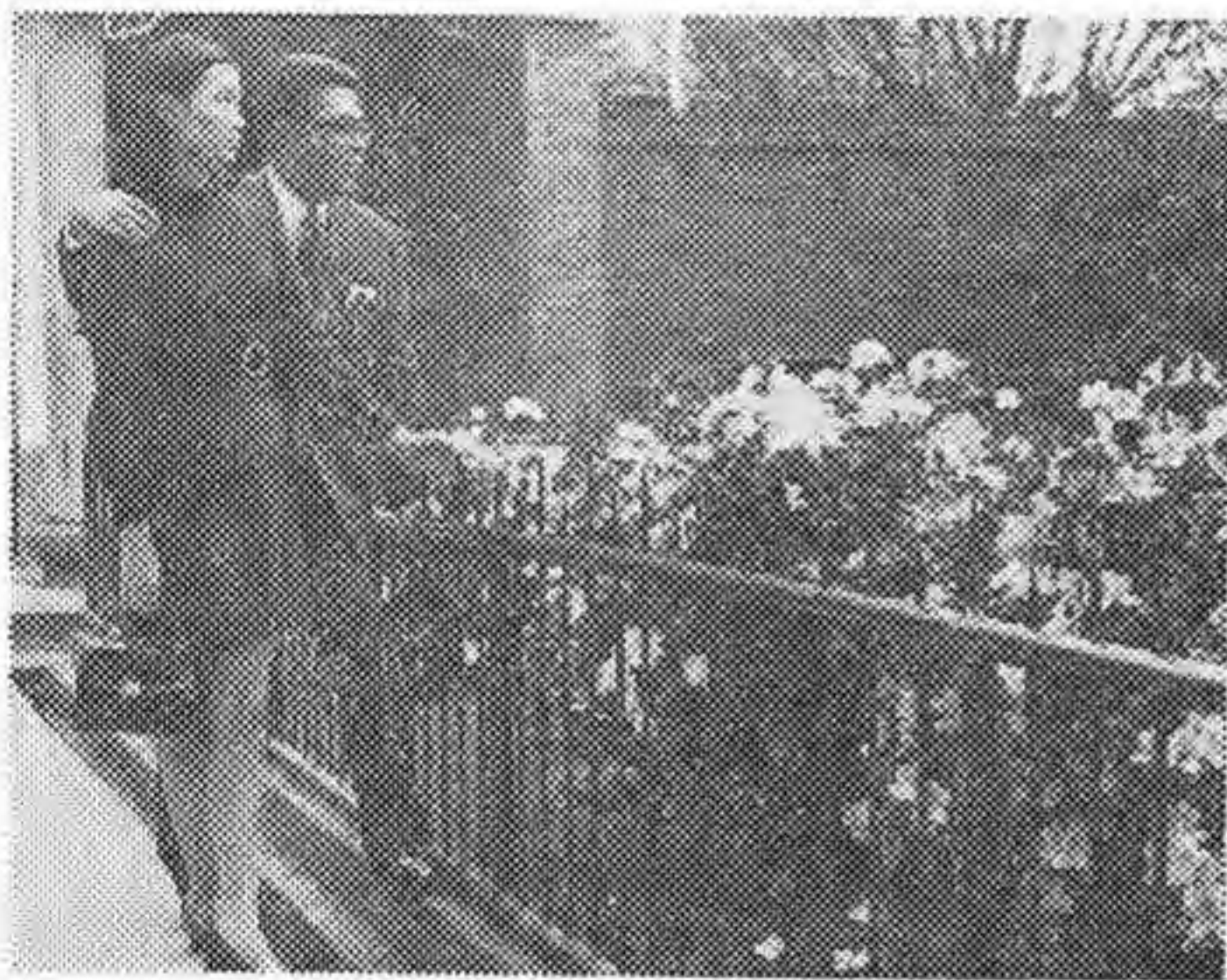
私達は思わずしつかりと抱擁した。そして……私の体は又しても、熱く疼き始めるのであった。

……………

夜から朝にかけて、再び妹雲がドクター氏の世話をしていた。次々変えるといった彼が結局二人、そして私は恵栄唯一人以外ついに目もくれなかった。

訪台前の多情な欲望とは、こと茲に到ってすっかり変わっていた。

ホテルの出発は午後三時の予定である。残された時間は少ない。私と恵栄は最後のひとときを過ごすべく、許さんをうまくマイて二人切りでタクシーに乗ると、昨日彼と二人で廻った総督府、台北公園へ。更に最后に見落とした孔子廟へ足を伸ばして、三脚で二人を撮って歩いた。私にとっては心ゆい廻遊のひとつときであつても、肝臓を悪くし、胃腸をこわし、しかも風邪気味の恵栄にとって、苦しい同伴であつたことだろう。にもかかわらず彼女は最後の最後まで、己れの苦しみをこらえて、実によく尽してくれた。



恵栄唯一人の為に、私の台湾の印象はすぐよかった。台湾万才！ 中国万才！ と叫びたい気持は、裏返せば男性天国万才の、恵栄の献身的な愛情につながっているようであった。昼食の粥を喰べに帰るといふ恵栄を家まで送ったのは、既に一時半。三時の出発には再び見送りに行くと言って、彼女は手を振ってアパートの二階へ消えた。

ホテルへ戻ると私は、訪台中精一杯協力し

てくれた許さんの為、昼餐一席を設け、私達は紹興酒で乾盃した。許さんは再度台北への来訪を切実に希んでいた。私も誠に便利であったし、恵栄との出会いも、許さんの尽力に負うところが多かったが、彼にとつても私という旅人は上客に違いなかった。

何ぞあとできく——。ドクター氏が私の為に、秘かに許氏に手渡した多額のチップが、私をこの上なく快適に扱ってくれていたのである。そんなところに、思いがけぬドクター氏の温かい厚意が光っていた。

三時の出発にタクシーが来ても、恵栄は姿をみせず、私をやきもきさせた。

「唯今女に電話しましたら、妹が電話に出まして、非道く疲れたといつて寝ているそうです。どうしますか」

「電話をきったの？」

「いえ、その儘です」

「よかった、私が出る——」

今一目会い度い気が、私を焦立たせた。無理を承知で、恵栄に代わってもらおう。待つこと数分——鶯声に力がなかった。

「待っている、来て欲しい。これが最後だから……きつとだよ」

激しい口調の口早では、恵栄に通じる筈も



ない。焦燥が私の心に渦を巻く。

「許さん言ってくれ。恵栄が来るまでは、いつまでもホテルで待っているって——」

彼は伝えてくれた。うなずいて、

「体少し熱ありますが、これから行くそうです」

「よかった」

一時に体の力がぬけて、私はソファにドサリと坐り込んだ。

邸さんは親戚の祝事で姿をみせず、許さん一人、慌しく出発準備にかけ廻ってくれた。

五時十五分発の日航機の、税関等出航手続きもあって、一足先に、ドクター氏、妹雲、許さんの三人は松山空港へ向かった。

妹雲も又、精一杯彼に尽したのか、ドクター氏の顔は晴々と輝き、台北での丸二日間の遊興を、心より満喫したようであった。

彼は彼なりに、私は私なりに、お互いの自由を拘束せず、のびのびと振舞った。それでいいのだ。すべて世の中はかくありたいものと、彼の満足感を心より喜び乍ら、私はしばしば腕時計を覗いた。

三時四十分——タクシーがホテルの前で止まり、恵栄が窓から顔をのぞかせた。手で制止して、私はすぐさまかたえに乗り込み、松

山空港へ直行を命じた。

運転手に見えぬ様、彼女の帽子で隠して、軽いくちづけをする。女の吐く息に熱があった。頭を押さえてやると、あつい。

無理をいったことが、しみじみと分かり、うるんだ臉の恵栄に謝々を繰り返す私であった。彼女はズボンを穿いていて、差し出した手帖に、

「媽媽(母)が、風邪だから、これを穿いてゆけと言った」と書いた。

その心づかいが嬉しく、私の胸にジーンと熱いものがよぎっていった。

恵栄は熱情をこめて、冷たい手で私の手を握りしめた後、放さなかった。

あわただしく待合室にかけつける。ドクター氏が逸早く、私をみとめ、傍の彼女に目をやって軽く頭を下げると、

「よかったなあ」

と言葉少なに私の肩を叩いた。私の心をすべて知っている彼である。その一言に真の男の友情がこもっていた。

空港の喧噪——もうそこに、二人きりの甘さは求められない。

私達は出航の手続きに追われ、慌しくて、

ロクロク彼女と筆談を交す暇もない。

淋しい影を宿す海棠の花一輪、窈窕の中国美人恵栄は、両手に土産をぶら下げた私の腕をとり、万感の思いを眼にこめて、何もいわなかった。

私のハントの足跡に、錦上華を添えてくれた恵栄との思い出は、恐らく永久に私の脳裡から忘却することはなからう。

「明年三月再来罷、再見、再見(来年三月再びくるよ、さようなら、さようなら)」

叫んで、空港入口で振り返る。

ハンケチも振らず、恵栄は独り離れて、スラリとした長身を佇ませて私をじっと見送っていた。

機会があつて、来年三月訪れた時、恐らく私は脇目も振らず、恵栄のもとへ直行するに違いなかった。

さらば台北よ、恵栄よ。

元気でいたまえ。

今日の空港の空は飽くまで青い——。私とドクター氏は、万魁の思いを残して、足早に税関の通路へと向かった。

——(終)——



春川ナミオ・画



— おお！ ウーマン・リブ —

## アブ的記事スクラップ

虹 丸 虹 吉

『奪ってリンチ—』

## 女だけの番長グループ

— ヤクザ顔負けの、女だけの番長グループ  
二つが、警視庁少年一課と東京都内五署が協力して行なった非行グループ解体作戦で補導された。「最近急にめだってきた」というが「〇〇女番長」などという映画の影響か、女性上位、ウーマン・リブの一断面か。

蒲田署に補導されたのは、大田区内の私立高校三年A子(17)をリーダーとする、女子高校生ばかり35人のグループ。「なわばり」は東急池上線。1月26日午後3時ごろ、A子ら4人が、電車で通学途中の都立高校三年生(18)を国鉄五反田駅前の喫茶店に呼び出し

「金を出せ」と二千五百円をまき上げた。そればかりか、近くの墓地に連れ出して、殴る蹴る、たばこの火を手の甲に押しつけ、さらにその火を顔に突きつけ、「もっと出さないと顔にヤケドの跡がつくわよ」と五千円をおどし取った。A子らは日頃は喫茶店にたむろし、ボンド遊びや異性との不純行為をしながら、二、四人の小グループに分かれては電車内や喫茶店で、同じ年ごろの女子高校生から金をまき上げていた。このほか、西銀座デパートや目蒲線武蔵小山駅前商店街で、パンタロン、ブラウス、ブーツなどを万引、駅のロッカーなどに預けていた。わかっただけでも一月から恐かつ三件、無銭飲食一件、万引六

件の犯行をかさねていた。

又、赤羽署が摘発した別の「女番長グループ」4人は、下校中の女高生を赤羽駅のトイレに連れこんで、殴る、蹴るの乱暴をしたうえ、スカートをぬがせて土下座させ、現金をおどし取るというのが常習手口。長年、不良グループの補導にあたってきた同署の係員も「金をおどし取るのは少年グループと同じだが、トイレのなかで土下座させるなどという手口は聞いたことがない。女のほうが残虐なんですかねえ」と言っていた。——(M新聞 3月16日夕刊)

まったくもって物騒、かつ、アブチックな世の中になったものである。



これを読んで、ずっと以前の奇ク誌に載った大中忠氏の作品の不良女学生ものなどをすぐに思い出したし、よくあるSM小説そっくりみたいな気がして、驚き、かつ、吹き出しちまっていた。

なんたって、「女高生ばかり35人のグループ」なんてのはオソレ入っちゃうし、「トイレで土下座させる」については、補導係員氏の述懐と全く同感である、というほかはないが、それにしても何ともSM的、アブ的現象といわざるを得ない。

私は「A子ら4人が、電車で通学中の……」という辺りを、入念に、何べんもくりかえして熟読し、判断しようと試みたけれど、どうしてもわからなかった。何をもって、A子らが金をまき上げた相手の高校生というのが、いったい女なのか男なのか、ということである。「都立高校三年生」とだけあって、どういうわけかこだけ「女」をつけてないからなのである。

「顔にヤケドの跡がつくわよ」とA子らが脅かしているところを見ると、まさか相手は男性ではなかったのだろう……なんて思ってみたり、たとえ男性相手の脅し文句にしても少しもおかしなセリフじゃないじゃんか……な

んて思い直してみたりしているうちに、どうぞ男性であってくれますように、と祈りたいような気もしてきたりして、何となくこっけいなような、又、奇妙な気分になっちゃったりしたのである。

もし、私の祈り通りに被害者が男性であったとすれば……私を含めてM的男性にとつては何ともエキサイティングななしというほかはないと思う。

又、「トイレで土下座させる」というほうは、私にとってはブラック・ユーモア的な感じというほかなく、欲をいうと、トイレでの行状をもう少しでいいから詳しく報道してくれたら……と思うのだが、残念がながらも私らしく、又は私好みにあれこれと想像してみた末に、なまじ詳報のないほうが楽しいじゃないか……なんて考えたりもして、しまいに、こちらのほうはちゃんと被害者を「女高生」と明記してあるのがいささか残念、だなんて恨みなくなっちゃったんだから、どうにも始末がわるいんだが、ともあれ、M的を自認する私にとって、このような事件が起こる世の中の現象には思わずニヤリとせざるを得ないというほかないのである。だがしかし、楽しいのは第三者的想像範囲だけのことで

実際の犯罪的行動者に出会ったら……やはり何とも物騒な世の中といわざるを得ない。

ところで同じウーマン・リブ？ でも、米国のスケールが大きいらしい。

#### 『胸押えられ 元西独国防相』

——ニューヨーク市ではこのところ、街の女の暴力ザタがふえており、15日には西独バリエルン・キリスト教社会同盟の指導者シュトラウス元国防相が、金をふんだくられるという事件が起こった。シュトラウス氏がホテルから散歩に出たところ、街頭の女が話しかけ、相手にしなかったところ、別の二人が自動車で現われ、90キロの巨体の同氏を車に押しつけ、二百三十ドル相当の金のはいたサIFを奪って逃げた。リンゼイ市長はただちにシュトラウス事件の調査を命じたが、西ドイツ三軍を指揮した元国防相にしては、なんともしまらない話。——（共同）（3月17日 海外こぼれ話欄）

というわけで、早速、女暴力団あちら版が載っていて笑ってしまったが、こういうものかこの事件のほうが日本版より楽しい気分になせられちゃったのである。

#### 『大変！ カギがない』

——58才になる農家の男が、急に腹痛を起こ



し、病院にかつぎこまれた。医師の診断で盲腸炎とわかり、手術にとりかかったのだが、なんと、男の下腹部にはガッチリと貞操帯がはめられているのだ。手おくれになってはと医師はカギ屋を呼んだけれど、あいにく合のカギがない。仕方なしにノコギリで貞操帯を切断し、やっとのことで手術をすませた。このか弱き男の告白によると、女房が夫の浮気を封じるために貞操帯をかけて、カギを持ったまま外出したのだという。事実を知った女房は、手術によってこわされた貞操帯を弁償してほしいと病院に訴えているそう。チリのある農村での話。——(AFP) (某地方紙Sの海外トピックス欄)

私はこの勇敢なる女房どのに、激励の電報でも打ちたくなっちゃった。いわゆる犯罪的ブラック要素がないだけに、心から拍手を送りたい気分になされたが、SM小説に出てきそうな貞操帯が男性側に装着という点がなかなかイカス。東西を問わず人間の考えることは共通点があるらしい……なんて感心。

### 『心臓えぐる宗教』

——一家の主人が息子と共謀して、妻と二人の娘の心臓をえぐり取るという、恐るべき事件が、二十一日ハンブルグで明るみに出た。

この惨劇はスペインに住むドイツ人の家庭で起きたもので、動機が宗教上のものとみられるところから、警察当局とともに心理学者も調査にのり出した。事件の舞台は、スペイン直轄領カナリヤ諸島のサンタクルス・デ・テネリフェに住むアレクサンダー一家。十八日この家でアレクサンダー夫人とその娘マリナーさん(18)ペトラさん(15)の三人が、全身に切り傷を受けて死んでいるのが発見された。しかも三人とも心臓をすっぽりとえぐり取られており、スペイン警察はその日のうちに夫のダグマル(41)とその息子を容疑者として逮捕した。警察の調べでは、アレクサンダー一家が四月まで住んでいたハンブルグの宗教団体「月桂冠協会」分派の信者であることが判明、しかもこの惨劇が宗教上の理由によるものとみて同協会の調査を始めたが、この団体は無害の宗教とみられているため、裏付け捜査は難行している。——(一九七〇年12月22日付M新聞夕刊。ハンブルグ21日DP AII時事)

となると恐ろしい。私好みの小説の中にはよく似たことも出てきて、ゾクゾクさせられることも多いんだが、現実の事件となるとゾクゾクの性質が違ふ……といわざるを得ない

のだが、どうもユーモア抜きのブラックというヤツは陰惨すぎるようだ。

事件報道ではないが、昔の医者で診断の大家と呼ばれた人の話がある。

医療器具未発達の時代には、後の世から考えると珍妙というほかないような方法で、病気の診断をせねばならなかった……なんてなことが実際にあったことと想像されるが、江戸時代に、炎症診断治療では右に出るものなしというユニークな名医がいたという。この名医、膿とみれば直ちに口で吸いとり、その味によって診断、治療の方法をたちどころに判別したというんだから、なんとも大した舌の持主で、かつ、マゾフィスティックな名医といわざるを得ない。何故といって患部は必ずしもカッコイイ場所ばかりとは限らないであらうことは容易に想像出来るからである。

患者が美女……でなくても女性である場合には、いかなる部位の疾患といえども……なんてM男性なら考えそうだが、患者もまた女性のみとは限らないわけで、その気のない私なんぞは生理的にとても……なんて自然考察されちゃうのである。いともシビアなる名医にして診断の大家たるもの、又、難しという次第か。







の始末までして下さるお兄さん方に感謝のキッスをして頂こうか」

清次は五郎と三郎に笑いながら眼くばせするのだ。

「違うよ。しゃぶって頂くんのだ」

へえ、と頓狂な顔をした五郎は、次にニヤニヤ口元を歪めて

「大丈夫ですかね、兄貴。噛み切られたら大変だが」

「もうそんな考えはすっかり捨てた筈だ。女らしい女になると本人は何度も誓ってるじゃねえか」

春太郎と夏次郎は五郎がバンドをゆるめ始めるのを見て、キヤツキヤツと笑い出した。

「さ、京子姐さん。五郎さんと三郎さんにもう一度心からお詫びして、優しくおしゃぶりしてあげるのよ」

春太郎は楽しそうにそう云って、京子の形のいい鼻をつつくのだ。

五郎が舌で唇をなめながら近づいて来ると京子は朱に染まった頬を硬直させ、さっと反対に顔をねじった。

「ちよいと、女らしい女になったという証拠を見せなきゃ駄目じゃないの。それに五郎さん達は、あんたの汚いものまで、始末して下

さるのよ。さあ、感謝の気持をはっきり示して頂戴」

笠にかかって春太郎は、京子の柔軟な肩のあたりを揺さぶるのだった。

「何もそう照れる事はないじゃない。美津子を許して下さったお兄さん方に、それ位のサービスしてあげるのは当然じゃないの、京子姐さん」

そんなシスターボーイ達のねばりつくような言葉に京子は屈伏し、赤く強張った顔を正面に戻すと、固く眼を閉ざしながら、

「五郎さん、先程の事、京子は心から謝りますわ」

そして、そっと眼を開いた京子は、面白がってその端正な頬へ押しつけてくる五郎を濡れた美しい黒眼で、そっと見上げる。

「そら、遠慮するなよ」

五郎はニヤニヤしながら、京子の紅唇を狙った。

困惑と羞恥の色を顔面一杯に浮かべながら京子は固く強張った頬をひくひくと二、三度ひきつらせたが、次にそっと紅唇を突き出すようにしたのだ。

「駄目よ、もっと情熱をこめなきゃ」

春太郎と夏次郎は、さも楽しそうに京子の

左右に身をかがめる。

清次も三郎と顔を見合わせて哄笑し、そつと舌をのぞかせて柔らかに愛撫し始めた京子を凝視するのだ。

もっと激しく、もっと強く、と春太郎達に叱咤された形で、京子は次第に男の妖氣にむせたように、閉じ合わせた切れ長の眼尻より涙の滴をしたたかせながら、ふと、熱をこめていくのだ。

熱い鼻息を浴びせながら甘い柔らかい舌で撫でさすり、やがて、紅唇を開き始めると、男達はどっと嘸し立てる。

「どうだ、五郎。これで腹の虫がいくらかさまったろう」

魂も溶けるような気分浸っている五郎の肩をたたいた清次は

「よし、三郎と交代しな」

「もう少し、いいじゃねえか、兄貴」

「またあとの楽しみってこともあるさ」

清次は、ポンと五郎を押しやって、三郎を招き寄せた。

京子は上気した顔を三郎の方に起こし、とろりと潤んだ美しい眼を向けるのだ。情感の迫った媚を含んだ声音で

「ねえ、三郎さんも京子の事は許して下さい



ますわね」

そう云った京子は、ためらわず押しつけて来た三郎に唇をまといつかせたのである。

柔らかく舌で愛撫しながら、軽く歯を当てるなど、京子の媚を含んだ接吻に三郎も全身を痺れさせていく。

「京子は、ほんとに心を入れかえるわ。女らしくしますわ」

そつと唇を離して、甘い鼻息と共にそうささやきかけ、また、くすぐるように舌で愛撫しながら、ぴったりと唇を押しつける京子を眺めていると清次は、これですっかり京子の魂を打ち砕いてやったという快感が胸にこみ上がってくる。

いじらしい位に柔順な一人の女に変貌した京子を感じた清次は、よし、とうなずいて三郎を押しつけた。

「兄貴、蛇の生殺しはひでえよ」

「何もそうあわてる事はねえ。それより、可哀そうに京子姐さんのお腹がゴロゴロ鳴ってるじゃねえか。一度すっきりさしてやんな」

清次にそう云うと、また浣腸器を取上げ、洗面器の中の溶液をたっぷりとそれへ注ぎこんだ。

「さて、最後のとどめを打ってやんな」

清次は五郎へ注射器を渡し、その場に腰をすえて、ゆっくりと煙草を口にする。

「もう、もう充分よ。ねえ、もうそれは勘忍して——」

五郎と三郎が再びもぞもぞと近よってくる、京子はすねたように鼻を鳴らし、なやなよ双臀をもじつかせながら消極的な甘い拒否を示すのだ。

「今のサービスに対するお返しさ。遠慮するねえ」

京子は、諦めたようにもう悶えも見せず、男達のするがままに任せてしまう。

上へ吊られている滑らかでムチムチした太腿を五郎と三郎が片手で抱きこむようにしながら、そつと嘴管を近づけると、京子は、甘ったるい声でささやくように云うのだ。

「ねえ、それがすんだら、すぐにおまるを使わせて。もうじらしたりしちゃう嫌よ」

「よし、わかった。心配するねえ」

嘴管の攻撃に、京子は白い歯をかちかち噛み合わせながら、むっと白いうなじをのけぞらせた。

「男三人を蹴り飛ばした鉄火娘がよ、こんなに柔らけえとは信じられねえな」

五郎と三郎はゆっくりとポンプを押しなが

ら笑った。

「もう、そんな事、云わないで。お願い」

溶液をゆっくりと注ぎこまれていく京子は甘いすすり泣きの声を洩らしながら唇を慄わせた。

「そろ、たっぷり注いでやったぜ」

男二人は空になった浣腸器を投げ捨てて哄笑した。

「ねえ、早く、ねえったら」

京子は、べっとり脂汗を額に浮かべ、あと一步のところを必死にこらえるようにして、哀しげな声を出すのだ。

「もういいでしょう。早く、おまるを、ああもう気が狂いそうだわ」

緊縛された上半身を揺さぶり、吊られた二肢をブルブル慄わせる京子を見た五郎と三郎は、わざとゆっくり便器を取り上げた。

「さて、男勝りの京子姐さんは、どんな色のものをお出しになるかな」

「空手蹴りを喰わした男達に手伝わして流し出すなんて、いい気なもんだぜ」

二人が双臀の下あたりに便器を当てようとした時、清次がゆっくり近づいてくる。

「じゃ、京子。男達にこんな世話までやかせるんだ。すっきりした気分になったら美津子



と仲のいいショーを演じて俺達を楽しませくれなきゃ駄目だぜ」

清次は狡猾な顔をして、せせら笑うのだ。

「な、なんですってっ」

辛うじて、ぎりぎり堪えていた京子は、清次のその言葉に慄然として云った。

「そ、それは、どういう事ですの」

限界にきた生理の苦痛をぐっとこらえながら、京子は頬を硬化させて血走った眼を清次に向けるのだ。

これが清次達の陰險な罠であった。

「腹にたまったものを吐き出させてやるというのが手前に対する復讐になると思ってやるのかい。そいつをあと二十分位、こらえてみな。そうすりゃ美津子の方は許してやる」

ギリギリの所まで京子を追い詰め、もし、排泄すれば美津子を最初の計画通り京子とコンビを組ませるというのだ。何という卑劣な男達——京子の恐怖に見開いた瞳の中に反撥と敵意の色が惨み出てくる。

「何でい、その顔。女らしくなますと誓っておきながら、なんておっかねえ顔しやがるんだ」

と五郎が口をとがらすと、三郎が

「俺達の眼にそんな恰好を晒しながら、凄ん

で見せたって、さまにやならねえよ」

どっと笑い合った男達は、ぴったりと京子の双臀の下に便器を当てたのである。

京子はその瞬間、再び、吊られた二肢を揺さぶらせ、真っ赤に上気した顔を左右に揺すって昂ぶった声を張り上げた。

「卑怯だわっ。あ、あんまりです」

京子は熱い頬に大粒の涙を流しながら便器を押しつけられた双臀を揺さぶらせるのだ。

可愛く秘められた京子の菊の個所まで、思ひなしか憤辱に震えているように男達の眼に映じるのである。

「ブツブツ云わずに始めたらどうだ。あとの始末は俺達が引き受けてやるからよ」

「美津子とのショーを見せて頂くん。出したものの後始末ぐらいはさせて頂きますよ、京子姐さん」

五郎と三郎は、泣きじゃくる京子を見て何ともいえない楽しい気分に浸っている。

「兄貴、どうやら京子姐さん、二十分の試練に耐えるつもりらしいぜ」

「よし、そりゃ面白い」

清次は棚の上の置時計を取り、わざとらしく、それを上気している京子の顔の近くへ置いた。

「それじゃ、今から二十分、我慢してみな。がんばり通したなら美津子とコンビを組むのは勘弁してやる」

清次はせせら笑って置時計の針を廻した。こんな愉快な拷問はねえな、と男達は揃って引き下がり、畳の上へあぐらを組んで坐ると酒を飲み始めるのだ。

全身に脂汗をねっとり浮かべて苦痛と戦う京子の周りを春太郎と夏次郎が土人の祈禱師みたいに、うろろ歩き廻っている。

「ねえ、京子さん、そんなに苦しいのなら、一思いにすませてしまいなさいよ。いいじゃないの、美津子とコンビを組む事ぐらい」

などと、齒をカチカチ鳴らせて耐え続ける京子を、からかうのだった。

「ねえ、京子姐さんたら」

夏次郎がしなだれるように量感のある京子の双臀へぴったりと身を寄せ、便器を押し当てると、

「やめてっ」

京子は苦痛に喘ぎながらも怒ったような声を出した。

「二十分間と戦っているのよ。京子の気を碎くような事はしないで頂戴」

京子は憎悪のこもった眼差しでキラリと夏



次郎を睨むようにすると、再び、固く眼を閉ざし、固く唇を噛みしめるのだ。

清次達は離れた所から、京子と夏次郎のそんなやりとりを面白そうに眺めている。

「命がけでがんばってるんだ。下手にお節介をやくと噛みつかれるぜ」

男達は、酒を注ぎ合いながら、大笑いしている。

紅潮していた京子の顔が次第に蒼ざめ、凍りついたように硬くなっていく。

「妙に顔が青ざめてきたじゃない。大丈夫かしら」

春太郎と夏次郎は顔を見合わせた。

「あと、あと、何分ですの、教えて」

京子は固く眼を閉ざしながら唇だけを小さく慄わせた。

「あと、十分ね。どう、がまん出来る？ 京子姐さん」

京子は、さも苦しげに眉根を寄せながら小さくうなずいて見せ、キリキリと再び激しい勢いでこみあげて来た便意を、うっと呻いて耐えているのだ。

「あと五分よ、随分がまんをし通したわね」

春太郎は置時計を見て、次に酒を飲む清次の方に眼を向けた。

この調子なら二十分の耐久時間を京子は通

過してしまうかも知れない、という春太郎の顔を読んだ清次達は、隠微な微笑を口元に浮かべて立ち上がって来たのである。

何としても、その時間内に京子を崩潰させねば面白くないのだ。

「へへへ、京子姐さん、よくそこまでがんばったもんだ。おめえの妹思いには、ほんと感心したぜ」

五郎はそう云って、落ちていた浣腸器を拾い上げ、三郎と一緒に再び、たっぷり溶液を注ぎ入れる。

「だがな、世の中ってものは、そう甘くはねえのだ。よく覚えておきな」

京子はそっと眼を開き、浣腸器に液を含ませている五郎と三郎を見た。その刹那、蒼ざめた京子の顔に、戦慄めいたものが、さっと掠める。

「そら、ここでもう一つ御馳走してやるぜ」

二人が京子の下半身の方へ廻っていくと、「な、なにをするのっ。これ以上まだ、そんな事をする気なの。や、やめて、後生です」

蒼白い頬をわなわな慄わせて昂ぶった声を出す京子だったが、それをなだめるように春太郎と夏次郎が左右から京子の顔へにじり寄

るのだ。

「もう諦めるのよ、京子姐さん。いくら意地をはったって、この人達に勝てる筈はないじゃないの」

「この人達は、どうしても京子姐さんと美津子をコンビにしようとしているのよ。私だって美しい姉と妹のコンビが誕生すれば、どんなに素敵だろうと前から思っていたのよ。だから、ね、もうこれ以上、駄々をこねないで新しく生まれ変わって頂戴」

因果を含めるように、二人のシスターボーイは、京子の頬へ鼻をすりつけるようにして云うのだ。

京子の黒眼勝ちの美しい眼の中に、もうどうにもならないといった悲しい諦めの色が滲み出す。

ハラハラと、幾筋もの涙を頬へ流した京子は、その哀しさを湛えた瞳をゆっくりと閉じ合わせていくのだった。

京子の双臀の方をゆっくり攻撃する五郎と三郎は、京子がもうすっかり諦めムードに浸り、反撥の意志を完全に喪失した事を知って悦びに胸をときめかしながら

「おめえが美津子とコンビを組んで、お座敷ショーのスターになってくれりゃ、俺達はお



う安心してものだ。今までの恨みは一切、水に流してやるぜ」

と云い、優しさをこめて追い打ちをかけるのだ。

京子は、先程までとは打ってかわったように、しっとりした身悶えを見せながら、

「負、負けたわ。もうどうにでもして——」

と、甘美な呻きと共に女らしい涕泣を洩らし始めたのである。

「よし、いい子だ、いい子だ」

と、五郎と三郎は嘴管をゆっくりと太腿に滑らせた。

京子は息苦しいばかりにムチムチとした官能味豊かな太腿や腰のあたりをうねらせてそれに反応を示したが、薄く眼を閉ざした京子の上気した顔には一切の希望を捨てたというような端正な美しさが滲み出ている。

五郎や三郎達の手で続々と溶液が送りこまれていくと、ああ、と切なげに艶々したうなじをくっきり浮き立たせ、房々した黒髪を振りつづけるのだった。

五度目の浣腸を甘受した京子は、今はもう周囲に陣どる悪魔達に魂の皮まですっかり剥ぎ取られてしまったように柔媚さまでが加わって、白く輝く緊縛された美しい裸身をベッ

ドの上でうねらせている。

「それじゃ京子姐さん、おまるを使うかね」  
嘴管の攻撃を加えたあとに、脱脂綿を軽く押しつけていた五郎は云った。

京子は甘えるように小さくうなずいて見せた。

「それじゃ、これでお前は美津子とコンビを組む事に決定だ。いいな」

清次は京子の顎に手をかけ、勝利の快感に酔い痺れたような顔つきになって云う。

「さ、はっきり返事しな。そうすりゃおまるをしっかりと当ててやるぜ」

清次は京子の鼻をはじき、耳をひっぱり、口元を意地悪く歪めてせせら笑うのだった。

「美津子とコンビを組んでくれるわね、京子姐さん」

春太郎は縄に緊め上げられた京子の形のいい乳房に頬ずりせんばかりにしながら、清次と調子を合わせて云った。

「わ、わかったわ。美津子とコンビを組みます」

京子が繊細なすすり泣きの声と共に、はっきり口に出して云うと、清次も五郎も歓声を上げた。

「よし、わかった。五郎、京子姐さんにおま

るを使わせてあげな」

清次に云われた五郎と三郎は、小児用のおまるを再び取り上げて京子の双臀の下へぴたり当てつけた。

「長い間、おあずけ喰わせて、すまなかったなあ。もう遠慮はいらねえぜ。さ、のびのびとすましな」

むせ返るように悩ましい量感のある双臀に五郎達は軽く接吻まで注ぎながら云うのだ。

憎い悪魔達の手で、排泄まで始末されるという屈辱感、もう京子の脳裡から消え失せて、ただこの、すでに限界を通り過ぎた苦痛から解放されたいという、血走った思いがあるだけである。

「ねえ、もう少し、下の方へ当てて」  
京子は含羞みの色を顔一面に浮かべて甘くささやくような声を出すのだ。

「これでいいかい。京子姐さん」

五郎と三郎は、身を乗り出して云った。  
「それじゃ私達もお手伝いしましょうか」

春太郎と夏次郎はポケットからチリ紙を出して五郎達の傍へ寄って行った。

「しても、してもいいのね」  
男達の食するような視線の集中を受けながら

京子は、自分に決心を強いるような口調で、



はつきり云った。

「さあどうぞ。空手二段の鉄火姐さんが縛り上げられた素っ裸のまま、どんな顔つきでお始めになるか、こいつばかりは少々くさくても、ゆっくり見物させて頂きましょう」

清次はギラギラした眼つきになって云い、次に春太郎に向かって云った。

「京子が終わリや、すぐにここへ美津子連れて来な。京子の気が変わらねえ内、二人を結ばせてしまふんだ」

「わかったわ。お道具の方の仕度もちゃんと出来ているのよ。でも、お兄さん、何もかもうまくいったじゃない」

と春太郎は、しなを使って清次の腕をたたくのだ。

「さ、京子姐さん。お腹に溜まったものを、すっかり流し出しゃ、すぐに美津子とからんで頂きますからね。ぐずぐずせず始めて頂きやしょうか」

五郎は便器で京子の双臀をゆさゆさと揺さぶった。

「美、美津子。姉さんを許して——」

京子はかすれた声で祈るようにそう云うと充血した顔を、さっと横へ伏せた。

身も心も微塵に打砕くばかりに京子はぐっ

と下半身を伸ばすようにすると、こらえにこらえていた緊張を解いた。

京子の排泄が始まると、男達は大仰な声をあげて笑いこけた。

「まあ、すごいわねえ」

春太郎も小さな便器の底へ次々と浴びせかけていく京子のそれを見て、ハンカチで口を覆いながら笑い出す。

「空手で蹴り倒した男達の手でこんなものを始末させようというんだからな。いよいよ、恥知らずな女だぜ」

清次は大きく口を開けて笑いながら、すさまじい水しぶきと共に黄金の山を築いていく京子の羞恥ののたうちを凝視しているのだ。

発作は次々と起こり、吊られた優美な二肢や腰の辺りをブルブル痙攣させながら京子は獣のような呻きと共に五郎の持つ便器にどつと浴びせかけ、羞恥と屈辱の折り混じった狂おしいばかりの身悶えを見せた。

「全くいい気なもんだ。随分と派手にやらかすじゃねえか」

ようやく発作がおさまった京子は、火のように熱くなった顔を横へねじって激しく涕泣する。

「もういいの、京子姐さん」

春太郎と夏次郎が便器を引上げた五郎と交代して京子に寄り添い、優しさをこめて後始末にかかり出した。

「いいのよ。そんなに羞かしがらなくても私達がきれいにお掃除してあげるわ」

丹念に拭いながら春太郎は、もう涙も涸れ果てたように潤んだ瞳を哀しげにしばたたき始めた京子を見て、

「ね、これでさっぱりしたでしょう。もう京子姐さんは、清次さん達に頭は上がらないわね。とんでもないものまで見せてしまったのだもの」

と、クスクス笑うのだ。

すっかり後始末された京子は全身から力が抜けてしまったように、うっすらと気弱な眼を見開いている。

「じゃ、美津子を連れて来な。約束は早いとこ果たしてもらった方がいい」

清次はそう云って、吊り上げている京子の二肢の縄を解いた。

どさりとベッドの上へ優美な京子の両足は投げ出されたが、放心してしまった表情の京子は、もうどうする元氣もなく、投げ出された両腿をそのまま放置している。

「そら、起きるんだ」



五郎と三郎はベッドの縄を解き、京子の上半身を起こさせた。

「早速だが仕度にかかってもらうぜ」

清次は道具を持ち出して京子の鼻先へ突きつけた。

京子はもうすっかり覚悟をきめたのか狼狽は示さず、艶々しい黒髪を顔半分にもつらせたまま、静かに顔を伏せている。

五郎と三郎は手ぎわよく、京子をもう一度後手にキリキリ縛り上げていく。

「へへへ、もう桶をつく元氣は完全になくなったようだな。これだけのものを俺達に始末させたんだ。いいか、よく見ておけ」

京子をつちりと後手に縛り上げた五郎はベッドの下の変器を取り上げて蓋を開けた。身も心もどろどろに溶かされたように深くうなだれている京子は、その変器を鼻先に近

づけられると、ふと狼狽の色を見せ、哀しげに眼をそらせる。

「見るんだ。手前はこんなものを俺達の手で始末させたんだぞ。よく覚えておきやがれ」

五郎は京子の髪の毛を驚づかみにして、ぐいと顔をそれに向けさせた。

「おめえのように綺麗な顔をした女が、こんなものを流し出すなんて信じられねえな。さあ、大きく眼を開いて、はっきり見ろ」

男達はゲラゲラ笑いながら、哀しげな視線をそれに注ぎ始めた京子の熱い頬を指で突くのだ。

「それじゃ春太郎、京子にそいつを取りつけてくれ」

「あいよ。京子姐さん、ベッドから降りて頂戴な」

春太郎は京子の縄尻をとってベッドから引き下ろした。

数度の流腸を受けた京子は体の重心がとれず、すぐに腰が砕けてその場に坐りこんでしまったのだが、「しっかりしてよ」と春太郎は京子のふくよかな白い肩に手をかけてその場へ立上らせる。

「これで美津子と心だけではなく体まで一つになれるのよ。私が取りつけてあげるわ」

夏次郎は、ビニールの紐がついた奇妙な代物を持って、京子の腰のあたりに身をかがませた。

## 妖美夫人

伊沢は寢床の中で、ゆっくり煙草を吸っている。

もうすっかり夜は明けたようだ。

昨夜は三時間から四時間もかけて伊沢は静子夫人の柔軟で官能味豊かな肢体より情欲を満喫させたのだ。

伊沢は肘枕をしながら、隣でかすかな寢息をたてている静子夫人の横顔を見つめた。

艶々しい長い黒髪を端正な片頬に柔らかなくもつらせている夫人の寝顔は、世にも美しいものに伊沢には思えてくる。

伊沢は夜具をそっと剥いで、もう一度夫人の寝顔を惚れ惚れと眺めた。

雪のように白い夫人のうなじから肩を伊沢は眼を細めて眺める。

一糸まとわぬ素っ裸のままの静子夫人は、伊沢に耳のあたりをくすぐられて軽く寝返りを打った。陶器のようにスベスベした背中、優美な曲線を描く腰部、そして、たくましく

## 四馬孝画秀麗口絵八葉が巻頭を彩る 団鬼六作『花と蛇』特集第四弾

本誌S42/1よりS44/4までの連載分を収録し、四馬画伯の華麗なる口絵を附した集大成ですが、重版刊行は致しませんでした。只今、若干在庫がありまゝので、未入手の向はお早めには是非蔵書の一部にお加え下さい。申込は大阪市住吉郵便局私書箱第41号 暁出版株式会社へ。  
略号『花』 定価五〇〇円



盛り上がった美しい双臀——伊沢は引き寄せられるように夫人にまといつき、柔媚なうなじから肩のあたりに口を押しつけた。

昨夜の夫人の火のような一心さに伊沢は完全に痺れきり、その悦楽の残り火の中を未だに、さ迷っていたのである。

このように天使のような美貌を持つ女が、あのような男の官能の芯まで痺らせる技巧を持っているとは——伊沢は一寸、信じられなかった。

縄を解いてやった夫人の、フランス式体位というのを思い出しても伊沢は全身が揉み抜かれるような痺れを感じてしまうのだ。

夫人の舌は、この世のものではないような陶酔を伊沢に与えたのである。

お笑いにならないでね、これも鬼源さんから教わった事ですのよ、と情感に溶けそうになった美しい瞳で仇っぽく笑いかけ、甘い舌の先端で万遍なく愛撫して、ねえ、これ、イタリヤ式というのですってよ。お気に召して——と夫人は更に、大胆に舌を差し入れてくる。伊沢は完全に痺れて、自分の方はもう為す術もなく遂に自失してしまったのだ。

感覚が完全に酔い痺れてしまったのだが、ふと、薄眼を開けて眺めると、夫人はまるで

生血を吸った魔女のように、ふと凄惨な表情を見せ、頬の辺りを手の甲で拭いながら、再び火のように熱い接吻を注ぎかけるだった。

やがて元気を回復した伊沢の挑戦に応じ、求められるままに伊沢の膝で見せた夫人の甘い身悶えや艶めかしい動き、そして、伊沢の心を溶かすようなハスキーな夫人の涕泣など——伊沢は、夫人の美しい寝顔をしげしげと見つめながら、昨夜の情事を熱っぽく思い出しているのだ。

ふっと夫人は眼を開いた。

伊沢と視線が合うと夫人はハッとしたが、すぐに思い出したように白く冴えた頬に微笑を浮かべて、伊沢の胸に甘えかかるように額を押し当てた。

「昨夜は凄かったね。あんな濃厚なセックスは、生まれて始めてだよ。奥さんのすばらしさに、僕は完全に痺れたね」

「嫌々。朝からそんなお話はなさらないで」

静子夫人は、翳の深い潤んだ瞳ですべるように伊沢を見上げ、体を小さく縮めるのだ。そんな夫人がいじらしく思えて昨夜、嫌がるのに無理やり菊花責めなど加えていじめ抜いた事がふと後悔めいた気分になってくる。夫人はそっと布団から出ると片手で乳房を

覆い、片手で前を隠しながら、体をくの字に曲げて鏡台のある所まで行くのだ。

「でも、こんな暖いお布団でゆっくり眠らせてもらったのは久しぶりですわ。いつも、薄暗い地下室の冷たい布団で寝ていますのよ」

静子夫人はブラッシをとって豊かな黒髪をとき、優雅でしなやかな手つきで朝の化粧をしていくのだ。

「いつも、そうして素っ裸にされたままなのかい」

夜具の中から伊沢が聞くと夫人は象牙色の美しい頬に淋しげな微笑を浮かべるのだ。

「ええ、いつもこうして生まれたままの姿、縄を解いてもらえることなんて、滅多にありませんわ」

「そりゃ一寸、可哀そうだな」

伊沢は立上って夫人の背中へ寝巻を着せかけてやる。

「すみません」

静子夫人は翳った美しい瞳を伊沢に注ぎかけ、再び、鏡の方を向いて、そっと口紅をひくのだった。

こうして鏡に向かい化粧する何分かが安らぎを覚える一時である。夫人は丹念に化粧すると、情緒的な柔らかい視線を伊沢の方に向



けて

「これでお別れですわね。もうすぐ千代さん達が私を迎えに来る筈ですわ」

と云う。

その言葉が終わらぬ内、ドアが開いて千代が、川田と吉沢をうしろに従えるようにして入って来た。

「如何が、伊沢先生、今朝の御気分は——」

千代は含み笑いで夫人の横にあぐらを組む伊沢の顔を見た。

「静子が何か失礼な態度をとったりはしなかったですか、先生」

千代は、その場に膝を折ると煙草を取り出して口にした。

「いや、堪能させて頂きましたよ。こんな楽しい思いをしたのは生まれて始めてかも知れないな」

「そうですか、そりゃよかった」

川田と吉沢は綺麗に化粧した静子夫人の横顔を満足げに眺めて、

「それじゃ奥さん、調教室へ入る時間だよ。行こうぜ」

と、つめ寄るのだ。

「一寸、待って下さいまし。今、すぐ参りますから」

夫人が立ち上り、部屋についている手洗所の方へ急ごうとすると、千代がさっとその前に立ちはだかった。

「どこへ行くつもりなの、もう時間がないのよ。今朝は特別にゆっくり朝の時間をとらせてあげた筈でしょ」

「でも、お手洗に行くだけです」

「ブツブツ云わず、その浴衣をお脱ぎ。何時ものように素っ裸になるのよ」

千代は、蛇のような陰険な眼つきになって夫人を睨むのだ。

静子夫人は、陰影の深い眼を哀しげにしばらくたたかせながら浴衣の紐を解く。

静かに浴衣を肩から脱いで全裸になった夫人は腰をかがめて丁寧になんか、まぶしい位だわ。つくりと立ち上り、乳房と前を両の手で隠しながら千代の方へ冷たく整った顔を向けるのだった。

「ほんとに、見れば見るほど綺麗な体をしてるわね。色の白さなんか、まぶしい位だわ。黒人とのシヨ―はきつとすばらしいものになると思うわ」

静子夫人はハツとした表情になる。

黒人のシヨ―がここへやって来たのだろうか。覚悟していた事だが、急に胸が動悸し、

静子夫人の美しい頬には、かすかに血の気が浮かび出す。

「シヨ―に連絡がとれたんだ。奴は、仲間の一人と明後日、ここへ来る事になっている。しっかり頼むぜ、奥さん。なにしろこのシヨ―は、これから、うちの看板になるものだからな」

川田と吉沢は麻縄をたぐりながら夫人のうしろに回った。

ボンと背をつかれた夫人は、象牙色の優雅な容貌を強張らせながら静かに両手を背後に回すのだ。

乳色の滑らかな背の中程に交錯した夫人の華奢な両手首を、川田と吉沢は素早く縄がけし、余った縄尻を前へ二巻三巻と回して豊かな両乳房の上下をかたく締め上げていく。

美しい顔を斜めに伏せて、柔らかい睫毛を揺らせて、されるままになっている静子夫人を、かっちり後手に縛り上げた川田と吉沢は縄尻を手にして、

「さ、歩きな」

と、その柔軟な肩を手で押した。

「一寸、待ってよ」

千代は、床の間の柱を指さした。ここへ一旦、縛りつけて頂戴、と千代に云



われて川田と吉沢は夫人を押し立て、床の間の柱を夫人の背に当て、キリキリと縛りつけるのだ。

「あと三十分ばかり、伊沢先生と水入らずでお名残りを惜しませてあげることにするわ。今日からニグロとショーをするための激しい調教に入るのだからね。もう当分、伊沢先生と逢えないのだから、うんと先生に甘えるがいいわよ」

千代は片頬を歪めて笑うと、床の間の花瓶を取って伊沢に手渡した。

「これで奥様の欲求を受けてあげてね。いいでしょ」

千代は、川田や吉沢に眼くばせして、しばらく私達、遠慮しようじゃないの、と表へ出て行くのだ。

伊沢はその意味がわかって花瓶を、ぴったりに揃えている夫人の足首の前に置く。

ふと、それを眼にした夫人は自嘲的な微笑を口元に浮かべて、情感にねっとり潤む瞳を伊沢に注いだ。

「キッスして。お別れのキッスよ、ねえ、伊沢先生」

伊沢は夫人のどこか暗い翳りを含んだ媚態に妖しく胸をときめかしながら、吸い寄せら

れるように夫人に近づくのだ。

伊沢の押しつけて来た唇にぴったり紅唇を当てた夫人は、しっとり濡れた舌先を伊沢の口の中に入れて甘く柔らかく愛撫し充分に吸わせてから、次に優しく吸った。

そつと伊沢から唇を離れた静子夫人は伊沢の頬に熱い頬をゆっくりと摺りつけながら、「させて下さる？ ねえ、先生——」

と、色っぽさを溶けるように含んだ流し眼で伊沢を見るのだった。

「いいとも、任しておき給え」

伊沢はホクホクした顔つきで、花瓶を夫人の爪先のあたりに置き、

「これぐらいでいいだろう。ここにいるのは僕一人だけだ。さ、羞かしがらずに始めてごらん」

夫人は、なよなよと朱に染まった美しい顔を左右に振って、

「このままで、その花瓶の中に入れろとおっしゃるの。そんなの無理ですわ」と鼻を鳴らすのだ。

「もう奥さんは立ったままで用をすまず事が出来る筈だろう。さ、男の子のように始めてごらんよ」

「ひ、ひどいわ。静子は女ですもの」

夫人はくなくと、さも羞かしげに身をねらせるのだ。

「ぐずぐずすると、千代さん達がやってくるよ。さ、今、ここですまさないで、もっと辛い思いをしなくちゃならないんだぜ」

伊沢が痺れるような思いになって、そう云うと、静子夫人は、

「そのかわり、お笑いになっちゃ嫌よ、伊沢先生」

と、翳った美しい瞳をねっとり潤ませながら伊沢に云い、ぴったり閉じ合わせている息苦しいばかりに緊まった優美な太腿を静かに左右へ割り始めたのである。

「駄目々々、もっと大きく開いて」

「うん。また静子を、笑いものになさる気なのね」

静子夫人は、媚を含んだ声で伊沢に云うと更に露にむっちりした乳色の太腿を切り開いていく。

「ねえ、瓶が遠いわ。もっと前へ、ねえ、お願い」

夫人は色っぽくすねて、横に立つ伊沢へ甘えかかるように、額を押しつけるのだった。



△告 白△

妄<sup>もう</sup>想<sup>そう</sup>の

自<sup>じ</sup>画<sup>が</sup>像<sup>ぞう</sup>

高<sup>たか</sup>村<sup>むら</sup>浩<sup>ひろ</sup>子<sup>こ</sup>



すすめられるまま、拙い文章を書き綴ってほんとうにお恥かしいです。

でも、不思議なもので、活字になった自分の文章を読んでもみるとまるで他人のことのようで、こんなだったなら、もっともっと書けそうに思えました。自分のことをありのまま書くのは、大変恥かしいからです。

今晚も仕事を終わって自分の部屋へ戻って、奇クの五月号をゆっくり読みかえしてみるともう一度書いてみたいという気が起きてきたのでペンをとってみました。

一つには編集部の方から、強くすすめられたからであります、私の心の奥底に巣喰っている妄想の虫が、もぞもぞと動き出し、「書け、書け、お前の今まで考えていたことや、してきたことを嘘いつわりなく、ありのまま書いて奇クの読者の方に読んでもらえ」と、そうそのかすのです。

中学校しか出ていないから文章

が書けないとは思いますが、字や言葉や文句などそう沢山知りませんので、書こう書こうと思っても、もどかしさが先に立ってペンは中々思うように先に進みません。

編集部の方は「思いのまま、喋っている通り書けばいいのだよ」と言ってお下さいますので、私の独り言をそのまま書き綴ってみたいと思います。読み苦しい点は、中学校しか出ていない小娘に免じてどうかお許し下さい。

自縛<sup>じばく</sup>のことと空想癖<sup>くせ</sup>のことは、この前もお話ししました。

胸に紐を巻きつけて、その紐の余りを後手にした掌<sup>て</sup>の中に握っているだけでも、私の空想は、異性からひどいいじめられ方をされているように感じました。勿論、実際に他人の手できつく麻縄なんかで縛られたら最高でしょうけれど、それは又恐怖心の方が先に立ってしまうのでした。

足首を揃えて紐を巻き、巻いた紐に鉛筆を通して、くるくると捻<sup>ね</sup>じてゆきますと、紐がだんだん足首に喰い込んでゆきます。

このプレイは自分で痛さに応じて加減出来ますので、私はその時によって強く締めつけたり、時には鉛筆なんかより、もっと太いハタキの柄を使ったりします。



お風呂へ入るとき裸になるのは、なんでもないので、お部屋で素裸になると私は興奮してしまいます。無理矢理、誰かの手でそうされる自分を想像するからでしょうか。

寒い時など、部屋を少し温めておいて、裸で何分ぐらい辛抱できるかなどと考えて、自分の全裸を鏡にうつしたりしましたが、興奮しているせいか、案外寒く感じないのですが、温度が低ければ低いほど、自分には刺戟が強いような気がします。部屋の真中で素裸になって突っ立っていますと、自分が周囲の人達からじろじろと眺められているようで、思わず胸が熱くなって両手で抱えてしまいます。

私のプレイは、自縛と全裸になること、それに奇クなどの雑誌から空想のタネを仕入れることです。例えば八花と蛇Vの小説の主人公である静子夫人や小夜子さんを自分に置きかえてみるのです。でも、これらは皆どちらかといえばパントマイムです。

私は自分で実際に声を立ててみて、一層全身が燃えるような、たかまりを感じることを知ったのです。

「いやいや、もう許して」とか、「もう勘忍私、裸になんかなれないわ」「どうか、それだけは許して、貴方のおっしゃることだった

ら、なんでも、お聞きしますから」とか、もっともっと恥かしい言葉を、実際に口に出して言ってみるのです。

こんなことを書きますと、私が四六時中、いつもいつも、被虐の妄想にとりつかれているみたいですが、そんなことはありません。

現在は、編物と人形、それに刺繡を習っており、将来は洋裁も習いたいと思っています。

人形の方は始めその気はなかったのですが、編物教室の横に人形教室があって、出来上がった作品の藤娘の余りの美しさに魅せられて自分も、あんな人形を作ってみたいという気持ちから、つい習うようになってしまったのです。編物や刺繡に、こつこつと熱中することは大好きなのです。

私はどちらかといえば、大勢の人々と交際したり人前に立ってすることは苦手です。自発的にそういうことは決して望んでいませんが、でも、無理にそうされたら、とそう考えると興奮してしまいます。恥かしくて嫌なんだけれど、無理じいされている自分を想像す



ると一種の快感を覚えます。

昔、外国であったという奴隷のせり売り。そんな場面で、私が素裸で台上に立たされ、大勢のお客の見ている中で、せり売りされていると想像するだけで身の置きどころのない快感に襲われるのです。

最初、私は緊縛モデルを志望したとき、プレイだけで誌上に写真を載せないで下さい。とお願ひしましたが、背面からのだけだったら、ということと、五月号に三枚ばかり写真を載せて頂きました。

自分の縛られた姿を沢山の人達、殊に奇クファンの方々に眺めてほしいという自分の





気持が、これで或る程度満足させられました  
が、もっともっと、あからさまな自分の写真  
を見られたいという気持が強く起こってくる  
のを、どうすることも出来ません。

現在の私には異性のお友達是一人もありま  
せん。無口で交際下手の私ですから、お友達  
が出来ないのも当然ですが、若しお友達が出  
来たとしても、こんな空想癖が強い娘ですか  
ら、私をよくよく理解してくれていないこと  
には、きっと手こずることでしょう。

若し私の心のツボを心得た人がいて、編棒  
の先でそこを突いたとしたら、私は忽ち心と  
身体の鍵を開放して、その人の言いなりにな

ってしまうことでしょう。その反面、そのツ  
ボを知らなかったら、カキのように閉ざした  
私の心は、冷たい不感症の娘としかわかって  
もらえないと思います。

平常の私は、無口で生真面目<sup>きまじめ</sup>で、勤勉な娘  
です。読書好きですが、流行歌を唄ったり、  
ダンスを踊ったりすることは余り好きではあ  
りません。映画館のような人混みへ出ることも  
好みません。ひとり静かに物思いに耽って  
いるといった、こんなタイプの私ですから。

でも、いいのです。私を理解し、こんな私  
でもいいから愛してくれる男性が、世界の中  
でたった一人あれば、いいのです。

せり売り台に立った女奴隷の  
私を、せり落としてくれる一人  
の素晴らしい男性があったら、と  
そんな夢を私は抱いています。

そうしたら私は、一生その方  
の女奴隷として奉仕するのに、  
と考えたり、家庭的な私がその  
方の身の周りのお世話をするの  
を、楽しく思い浮かべたりしま  
す。私の考えでは、男女同権で  
あってはいけないのです。あく  
までも私は女奴隷であり、相手

の方は御主人様でなければなりません。そう  
でないと、私の心が燃え上がらないのです。  
縛られるというのは大好きです。でも、そ  
れは私の心の中の気持を外にあらわした方法  
が、それであって、本当は、やはり慕わしい  
男性に身も心も捧げつくすという女心にある  
ような気がします。ただそれが、男と女とい  
う対等のつきあいではなくて、私の方がいつ  
も下にあり、そして言いなりになっていると  
いう間柄なのです。

ですから、人縛られるVということも、私  
が相手の方に全面的に従うという一つの方  
便に過ぎないものなのです。私は余り言葉を知  
りませんので、自分の思っていることを、よ  
く文章に書きあらわせないのですが――。

第一回目に縛られて写真を撮られたとき、  
私はとり乱してしまつて、無我夢中だったの  
ですが、家へ帰って落着いてみますと、やは  
り楽しかったと思ひ出されるのです。今まで  
空想だけで考えていたことが現実となつて、  
自分の身体に加えられたのですから、余程刺  
戟がきつかった筈ですが、それが、そのとき  
にはではなく、後になつて甘美な思ひ出として  
残っているのですから、そのときは、きつと  
私は余り嬉しい顔をしていなかったのかもし



れません。

でも、あの日から二週間たってみると、今度はもっと本格的に縛りあげていじめてほしいと思うようになりました。いや、今度は前と違って、きつとひどいじめられ方をされるのだと思い込むようになりました。

そう思い込んでからの毎晩の空想は本当に楽しいものでした。私が沢山の緊縛ファンの見守る中で全裸で縛り上げられている場面を想像したり、その見物の人達の中から選ばれた選手の方が私をモデルにして得意の縛り方を披露するといった場面を想像するのです。

実際に、そんなことが行われたら、どんなに素晴らしいことでしょう。沢山の人達に穴のあくほど見られ、いじめられ、弄ばれることを考えただけでも胸が熱くなります。また、一人の男性に薄暗い密室でネチネチと羞恥責めにされるのも素晴らしいことです。

△花と蛇△には、そんな私の心を見抜くように、いろいろの場面が展開していますが、それがそのまま私の願望でもあるのです。

夢のような私の願望、他愛のない空想でしかなかった私の夜毎の願いが、ひょっとしたら実現するのではないか——。そう考えると私の心の泡立ちは一層はげしくなるのです。

私の心は動揺しました。

妄想や空想の間はよかったのですが、ひょっとしたら実現できるのではないかと考えると、あわてました。

強い吸引力と誘惑。

私は郵便局へお使いに行った足でとうとう電話してしまいました。自分の願望をああも言いたい、こうも言いたいと思っていましたのに、いざ電話口へ出てしまうと

「あの、次のお休みは明後日なんですけど、御都合は如何でしょうか」

と、事務的な口調になってしまふのです。

その日は、春とはいえ、毎日毎日寒い日の続く中でも、お天気もよく陽ざしも春めいて少し暖かく感じる日でした。

室内は暖房がよくきいていて、セーターを着たままでは汗ばむくらいでした。だから、着ているものを全部脱がされてしまっても少しも寒いなんて感じないのですが、それでも私は膝のあたりが、がくがくするような気持ちでした。

自分がひとりで部屋で裸になっているときとは比べものにならないほどの素晴らしい刺激だったのです。

——異性の眼の前で素裸にされている——

そう考えただけでも胸がわくわくするのに今は、実際に裸にされているのです。

私は寒くはないのに、二の腕のあたりに鳥肌が立ち、太股や脇腹の筋肉がピクピクとけいれんするのでした。

今日こそ自分のMの程度を試してみたいと考えていた私なのですが、まだ縛られない前から、この状態ですから、あとはもう無我夢中になるのではないかと不安でした。

外から見たならば、ただ寒そうにして立っているように見えたかもしれませんが、私の心の中は早くも燃えたぎっていたのです。自分でも、こんなに早く昂奮状態になるなんて考えられませんでした。

膝のあたりが、がくがくしていたのが、やがて慄えがきて、私は立っているのが苦痛になるくらいでした。

「早く縛ってほしい。きつく縛って——」

そういう思いがしました。しかし、口に出して、よう言いませんでした。

そのとき、ふと、自分がモデル志望の手紙を編集部へ出したとき、自分の身体の特徴や状態を、必要以上に詳しく書いたことを思い出していました。

今、まさに素裸で縛られようとしていると





き何故、そんなことを考えたのか不思議ですが、実際の私よりも、美化し誇張して書いたように思っ、恥かしかったのです。

縄が肌に、ぎゅっと締まってきました。

両腕が背中の方で縛られて自由がきかなくなるなんて、なんと素晴らしいことでしょう。

全裸にされただけで燃えあがっていた私は両手首をうしろで縛られてしまうと、全く無

防備になった体を空気に晒すことでパツと火がついたように燃えたぎりでした。

人一倍大きい私の乳房の間に縄が掛かって締めつけられます。縄の荒い感触を乳首の先に感じて、私はビクツとしました。身ぶるいするようなショックです。

ピンと張りつめていた私の神経に、例えば、お琴の絃を爪先で弾くように、縄というバチが当たるのですから、私の全身が甲高い音を立てるのも無理はないでしょう。

私はもう、この神経の緊張に耐えられなかったのです。くたくたと、膝のあたりからくずれて尻もちをついてしまったのです。

「おい、おい、どうしたんだい？」

と抱き起こされました私の身体は、こわれた人形のように、くたくたになって、足にも力が入らないのです。

もう、それからの私は、夢遊病者のように縛られる方の思いのままになっていました。

全身の力が抜けて虚脱状態になっているのですから、粘土細工をこねるように、片足を持ち上げたり、赤ン坊をオシッコさせるときのように吊ったりしても、好きなようになって

ているのです。

でも、私の心は煮えていました。頭の中はからっぽなのに、このように胸がわくわくするのは何故なのでしょう。

思考力や理性がすっかり影をひそめて、ただ快適な気分だけが全身を貫いていました。

ふわふわと全身が宙に浮く、これが天国というのでしょうか。

美しい花や匂いのよい花が咲き乱れ、蝶々が舞っている春の花園に遊んでいるような気持です。子供の頃、遊んだ女木島の故郷にもこんなところがあったっけ、と私は夢の中で思い出していました。

縄目の痛さというものは感じません。いや痛いとは感じないで、気持よいと感じるので。足の指先からジーンと伝わってくる痺れのようなものが、全身へ、そして、やがて私の身体の中心部へと集中するのです。

その中心部を見られたいという強い執着の反面、そこだけが私の心の窓だから、そこを見られるということは、私の本当の心を見すかされることになるのだという羞かしさが、私を躊躇させました。

私の心の奥底を見すかされてしまったら、そう考えただけで、私は一層興奮してしまう



のでした。

どんな縛り方をされて、どんなポーズをとらされたのか、私には下手な文章でそれを再現することは出来ません。もっと冷静にしていれば或はそれも可能だったかもしれませんが、そのときの私に、それを要求されても無理だと思っています。

部屋中が、むんむんとする熱気に包まれ、まばゆいくらい照らしている電気の光が、私には、まるで催眠術の触手のようでした。私は麻酔されたことは一度もありませんが、麻酔薬を注射されたら、このようになるのではないのでしょうか。

足先をピンと反りかえらせたり、声を出したりしたように思うのですが、はっきりとは覚えていないのです。

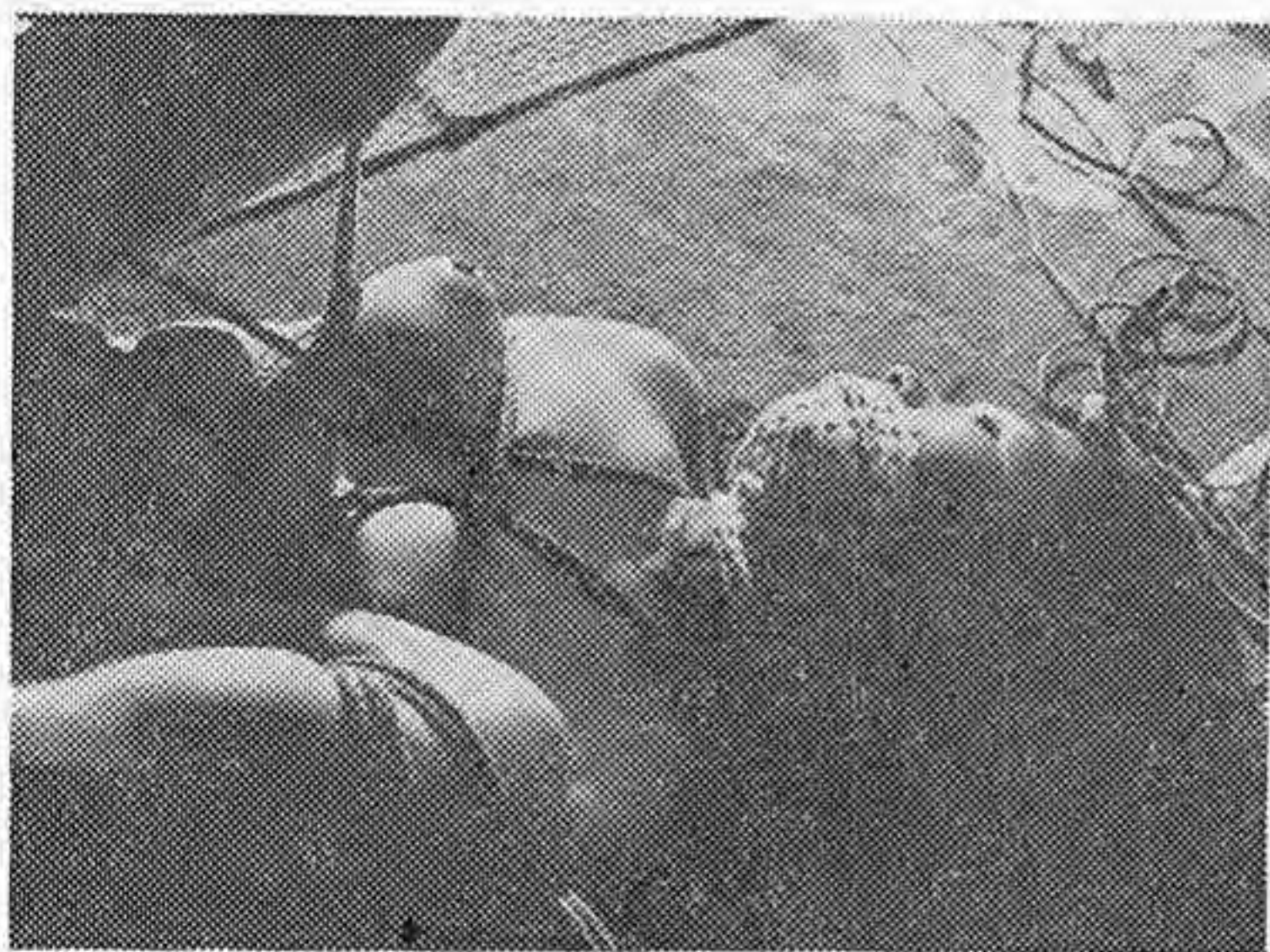
途中で何回も休憩したように思うのですが私はぐったりとのびて、夢遊状態にいたので無責任のようですが何も知らないのです。

こんな文章を書くのだったら、もっと詳しく観察しておいたら、よかったのですが、そのときは、ただ縄の感触を楽しむことに熱中というより没入してしまっていたのです。

この世に若し天国というものがあったとしたら、このときの状態ではないのでしょうか。

マゾの女だけが、この世の天国を味わい経験することが出来るのではないのかと、私は思います。

あとで、お風呂へ入ったとき、調べてみましたら、二の腕や胸、それに太股に縄のあとが赤く残っていましたから、きっと大分きつく縛られたり吊られたりしたのだと思います。が、どのような責められ方をしたのか、今、



はっきりとは思いつけないのです。

なんとかして、そのときのことを、目の前に思い浮かべたいと必死になって考えるのですが、駄目です。それでいて、空想だけは翼をのびた鳥のように、自由に大空を飛びまわるのです。ああもされたのだろう、こうもされたのだろうと甘い追憶として残ってきます。

そして、独り静かに自分の部屋で実感として、そのときのことを肌身でひしひしと考えてみると、改めて、もう一度縛られたい、責められたいという気持ちが湧いてきます。

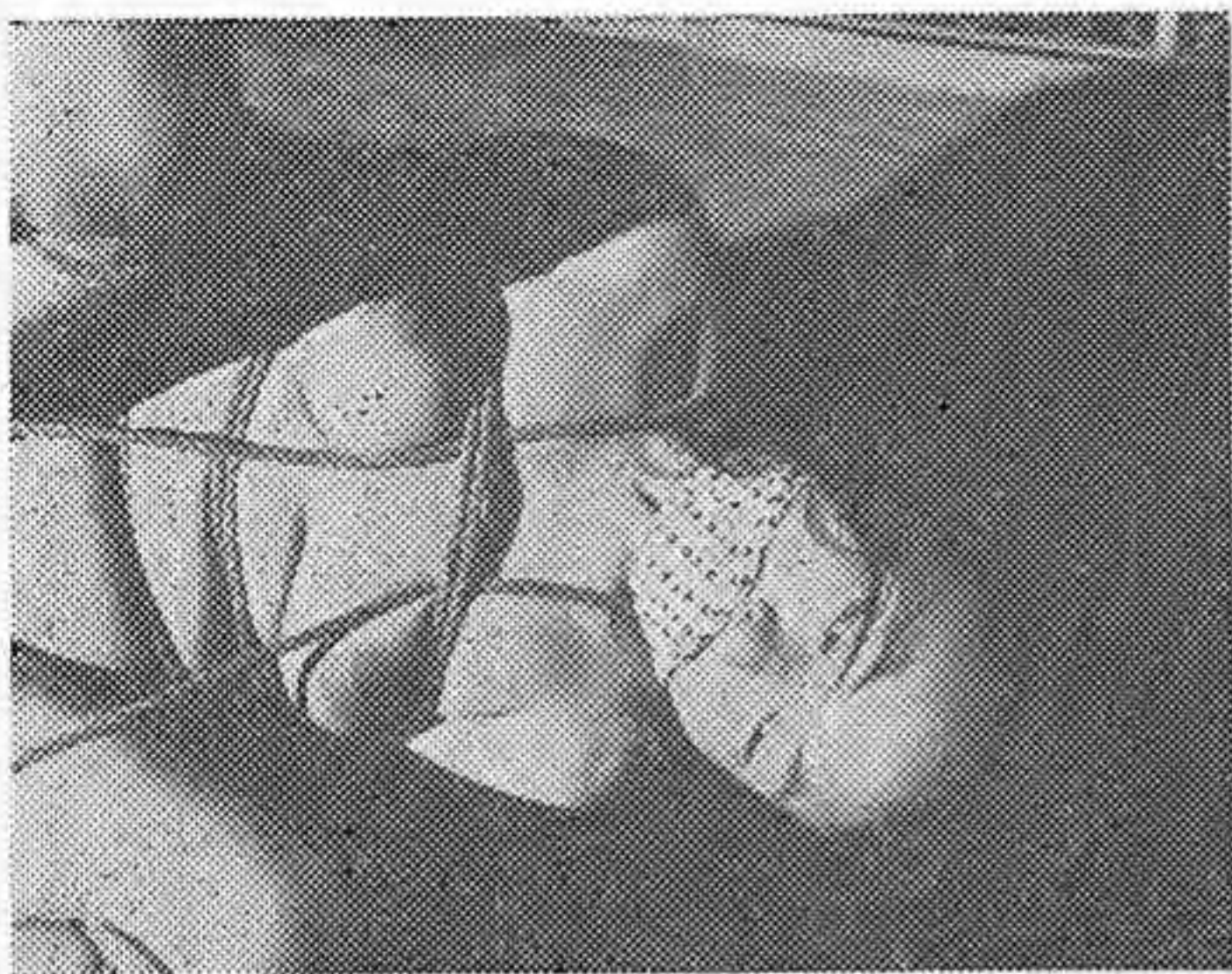
私を『花と蛇』の小夜子のように責めてくれる人があったら、私はこの身を投げうってその人の足もとにひれ伏したい気持ちです。

そんな素敵な方っていないかしら？

私が故郷の女木島の空から、海の彼方を眺めて女心に「幸い住むという」都会の空に思い馳せた、あの気持が、いま、この大都会の一隅で、はっきりと形をあらわして、私を責めてくれるS男性を恋慕しているのを知って、びっくりしました。

私は今、雑誌で知り合ってペンフレンドとして文通している方は七、八人いますが、休みの日に一緒に散歩したりするお友達もボー





イフレンドもありません。私が内気で交際家でないし、お休みも一定していませんので、そのせいかもしれません。

文通している方の中には、是非逢いたいとおっしゃる方もありますが、お逢いしたいと思う方はありません。過去に文通した方の数は相当になります。私と違って、高校を卒業されたり大学に通っていらっしゃる方々でしたがその方達の手紙を読んで、私はいつも失望し

てしまいました。

誤字やあて字が多いのに驚きます。本当に真剣に手紙を書いているのかと疑うようなデタラメを書いてこられるのには、私は悲しくなって、折角の気持が少しも湧いてこないのです。

私は自分で独習でペン習字をやっています。投げやりな文字や下手くそな文字を書かれる方が多いのにも、私はその方達が学校を出ていられるだけに驚いています。

△文は人なり▽と申しますが、その方達は何故もっと文章を大事にされないのかと不思議に思います。その点、私は奇巧に作品を発表されている方々には、ぐっと参っています。

どうか、私の胸をぐっと掴んで放さないような文章を私のためにお寄せ下さるようお願い致します。そのかわり、私はその方の胸へ全身をゆだねることを心からお誓いします。

書きたいことが沢山あるような気がして、そのもやもやが、胸につかえているようですが、悲しいかなペンの方が言うことをきいてくれません。辞書を片手に書いているので、思うことの何分の一も書けません。

プレイの経験も積み、文章を書く勉強もして、また告白を書かして頂きます。

いま、暇をみて、「花と蛇」の文章を原稿用紙に書き写したり、自分なりに抜き書きしたりしています。活字になっているものを自分で原稿用紙に書いてみるのは、文章を書くのに、よい勉強になります。

でも、私は決して小説家になりたいなどという、大それた気持は抱いておりません。やはり、責められる可愛い女でいたいのです。

私は誌上に自分のあられもない縛られた姿を載せてほしいと願う反面、或る種のためらいも感じます。それで、私は編集部の先生にお願いしたのです。

私に対して、お便りを下さった愛読者の方々に、私の責められている、あられもない、顔のはっきり写った写真を焼増して頂いてお送りするということです。

そして文通した上で、私がこの人こそ、と思った方に実際に責められた上で、私がそのときの告白を書いてもいいし、若しそのS男性の方が体験談を書かれるのだったら、それでもいいのです。

こんな我儘をきいてもらえるのでしたら、よろしく願います。



創作連載

幻

想

帝

国

(三)

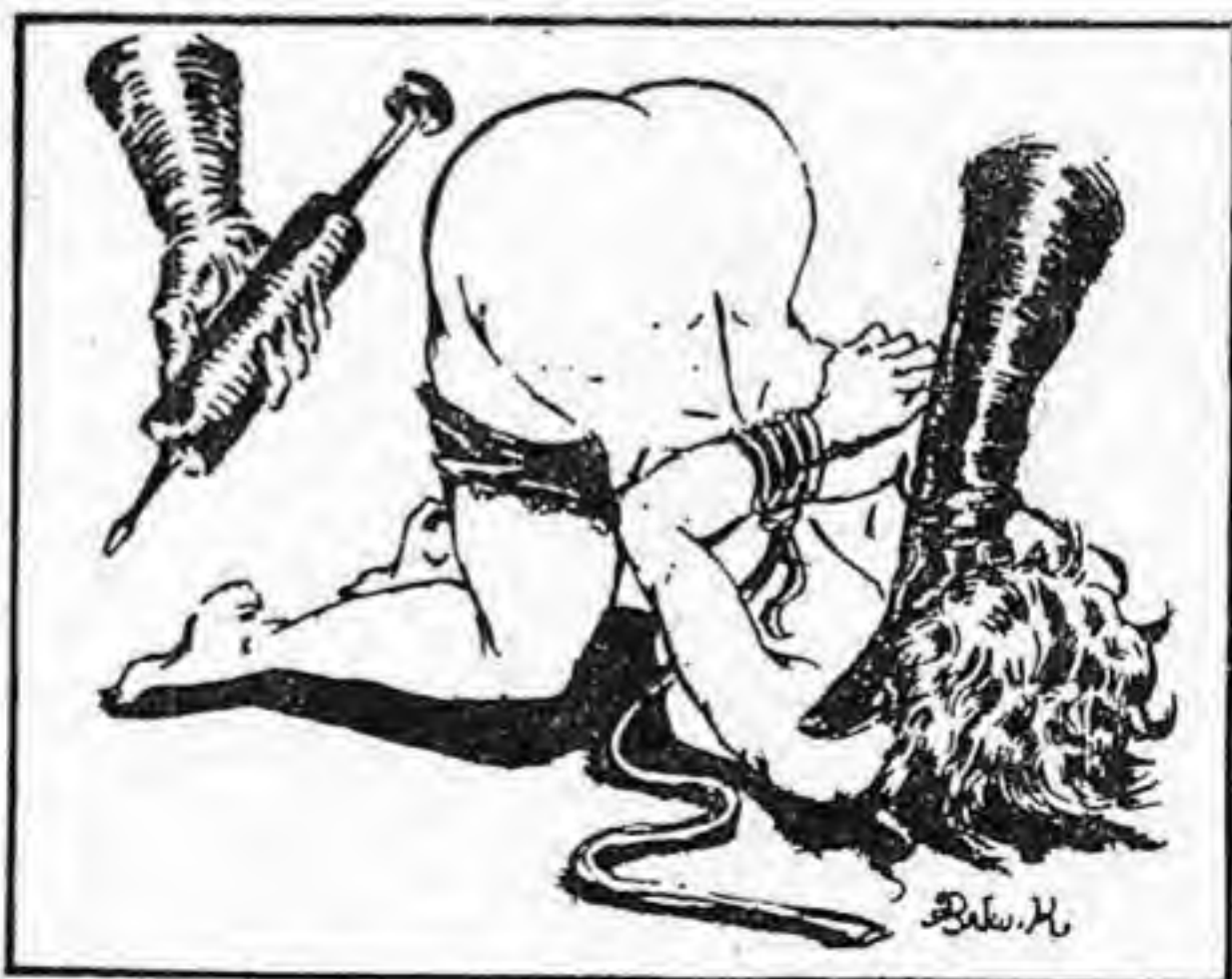
花 影 叢

早春の日中をフルに取材に使っているシカゴ・トリヴューン紙のフランク・ドウナン記者は、ようやく疲れて来た足をホテルにむける前に、労務者がいつも群れている駅近くの小路を、たどった。家がまえば赤灰色の、ロシアではいくらでも見られる造作のならばだったが、開かれた玄関先が異様であった。日の丸を飾り、クリスマスのデコレーションのようにこしらえている。家とのバランスは、おかしいが、たしかにこの雰囲気はドウナンは知っていた。

『日本人はどこへ行っても、まず娼婦の街をつくる』とドウナンは苦笑して思った。ゲイシャガールより、安直な気のおけないやり方の通用する女たちの街だ。考えてみれ

ば西部劇が、まずバーの場面から、はじまるようなものである。道徳的な非難は見当ちがいとして、何かその辺に日本人という無表情な一見、愚鈍そうに見えながら、実にすばしい民族の特性があらわれている、とドウナンは見た。そうして見ると、小鳥のようにカン高い声をもつ、小さな脂粉にぬりこめられた女たちと、滑稽にいばりくさったガニ股のトッチャン坊やの男たちのかもす猥雑な空気も、興味をもって吸える。

街は、しかし本格立な営業に入っていないようであった。女たちのチラリ見える動作もにぶい。日本人より、やや扁平な頬高の顔を彼女たちは持っている。どうやら満洲のいたるところにもいた、朝鮮を故郷にもつ女たち



カ ッ ト ・ 黒 田 縛

らしい——一軒の家の入口でドウナンは、のぞきこむ恰好になると、電灯もついていない奥から、ちょうど一人の女が出てきた。大柄な姿にドウナンは、ちよつとギョツとした。明らかに白人の女だからだ。ぶあつい胸と腰薄い色の毛髪。やがて納得がいった。ロシア人だ。それも派手な化粧ぶりから、市の住民ではなく、白系露人であることがわかる。「ハロー」立ち直ったドウナンは、反射的に職業的なインタビュウの姿勢をとり、卒直な呼びかけを浴びせた。



「チャーミングな奥さん」

それから英語、わずかな単語しか知らない日本語、上海じこみの支那官語を速射した。はじめ警戒して、かげった暗い表情でドウナをみつめた女も、支那語で応酬してきた。東北の訛りの勝った語調だが、極めて流暢に喋る。気のいいロシア女らしく、いったん心を赦すと、都合のいい、お喋りだ。

と、そこへロシア男が現われた、外から帰宅したようすだ。二人は夫婦者に見える。そこでドウナンも気軽に話しかけようとする。男が、ななめの肩越しに鋭い一瞥をくれた。

ドウナンが、はっとして思わず口をつぐんでしまうほど、男の目には陰惨な冷たい兇器の刃のような輝きがあった。が、それは一瞬のきらめきで、男は如才ない笑いを片頬にかペロシア語で何かいった。これはドウナンにも通じない。女が奥へ行ってしまった。男はドウナンに向いていたが、言葉はどうやら女に、いわれたものらしい。

「オオ、ノウ」

と男はいった。何を否定しているか、わからない。「オオ、ノウ」を連発しながら後ずさりし、微笑している。それから、気になる一瞥。

少し追って行きたいところだが、家のなかに踏みこむことは、ためらわれた。ドーナンは通りからもう一度、その家を眺め、周囲の家と特に変わった点は発見できないまま、思いついて、きびすを返した。

それから考えこみながら歩き、気がついたことがあった。この市では連邦が古い街の外郭へ建てたのだろう、同じような造りの高層アパート群がある。日本軍が接收、使用しているのは、そこと公共建物のみで、古い街には、元の住民が住み手つかずになっていた。

調べたところでは日本軍が計画して占拠したのではなく、ソ連側であらかじめ予期したように建物を明けておいたということだ。変な話だが、住民に対する余計な摩擦を防ぐ目的でそうしたというなら、この市政府も、なかなか賢い。スボボドヌイの旧人口約八万。旧市街に五万ほどの人が、まだ住んでいるはずだった。古い街は人口密になり、新しい設備のところでは日本軍と使役の労務者が入っても余裕がある印象だった。その古い街へわざわざ娼婦街を持って来た。その住民はどうしたのか？……

移したのか？ どこへ？ 移すにしてもどこかにその波紋の残りはあるはずだ。ドウナ

ンは通り抜けてきた路の長さを思いだしながら、そう考えた。よし、ひとつ調べてやる。妙におさまり返っている日本軍政の方針が、そこから、ほどけてくるかもしれない……

イワノフはバーになっている部屋に女の後ろを追って入り、女にいった。

「お喋りめ。あいつはアメリカ人の新聞記者だぞ」

「あんたに、そんなことをいわれる筋合いはないよ」

「馬鹿め、お前のためにいってるんだ。ここじゃ日本人の目がうるさい。お前がヤンキーと親しように喋っていたとでも憲兵隊に告げられてみる。うるさいことになるぜ。ここはハルピンじゃないんだ。お前も商売するつもりだったら気をつけるんだな」

「そんなことは知っている。昨日今日はじめた稼業じゃないからね。あのひとは、うちの客になる人だよ。新聞記者だって物をたずねているばかりじゃない。酒も飲もうし、女だって抱くさね」

「そいつは駄目だ。とにかく奴は、この街じや憲兵隊ご指定の要注意人物だからな」

「へえ、注意人物ね。そうは見えなかったね



え。ポウツと、丈だけ育ちまった坊やみたいだったけど。あんたとは大分、違うね」

「まあ憲兵にひつくられて、裸の尻へ馬の鞭をくらって泣かないことだな」

「鞭好きは憲兵じゃなく、お前さんだろ。プリプリした娘っ子を沢山つかまえて、ご気嫌じゃないか」

「それが仕事では面白くもない。鞭など使わず尻の×へ、やきごてを突っこんで腸を、<sup>はらわた</sup>かき廻してやる。お前だって引っぱられれば、まず女の体じゃ戻れないぜ」

「人をおどすつもりかい。悪になったね、アントモ。ハルピンへ来た当時は、ひよろひよろと背が高いだけで顔が青くって、ちょっと肺病病みの文学青年みたいだったけどね」

「お前さん方にしこまれたからな」

「女の臀をたたいたり焼いたりまでは教えませんよ。まったく今じゃ女の敵、だからね」

「……………」

「そうそう。二階の娘ね。いい加減にうちに下げておくれよ。女のこが足らなくて困ってるんだから。二階の子じゃなくとも、多少で面相はまずくともいいから回しておくれよ。」

他の店へばかり色目を使わないでさ。まったく日本軍の将校も、もの好きなんだから。口

シア娘を奴隷にして裸おどりでもさせてやると、他愛がないンだから」

二階の娘——もと中学校の体操教師、ディネーラ・スローヴィンは、けものが捕えられたように、檻のなかで飼われていた。

部屋は寝室で、特に飾りたてもないロシア風のもので、大きなベッドが壁際にあり、窓の下に鉄製のスチームが据えられ、檻はそのわきにおかれていた。大型の犬か、けものの生けどり用に使うくらいの大きさで、中人間ひとりが楽に寝られる。しかし高さは一メートル余りしかないから、なかのネーラは立つことはできない。

薄暗がりのなかで見ると、檻のなかに本物の獣がいるように見える。もさもさと毛の生えたようにみえるのは、しかしコートで、腰まで、かろうじて隠しているが、下肢は剃きだしで動くとき白い肌が見え隠れする。

憲兵事務所の地下室から檻に入れられたまま、荷物のように造られて、この家の二階へ運びいれられた。それから食事は、いやらしい濃化粧をした、ひとりの中年女が運んでくる。アルミニウムミニウムの椀に入れられたシチューが主だが、栄養はあるようで一応、胃は満

足する。食事は朝夕の二回。夜になると、男——ネーラの現在の絶対者、主人、飼主ともいふべき白露スパイのイワノフが帰る。

イワノフはネーラの見るところでは、いつも酔っている。日本人憲兵の前では、それでも態度に酔態はなかった。アルコールくさい臭いがぶんぶんふんぶんと舞いたつ動きは、足どりもしっかりしていて精力的であった。

この部屋では制約する者がいないせいにか、その動きは、いたって気まぐれだった。

帰ってきててもネーラにはかまわず、ベッドにドタリと服のまま落ちこむように寝入ってしまうこともある。するとネーラも安心してその夜は眠れるわけだ。

夜がふけた感じは窓でわかる。そうなるも帰ってこない時は、ひとりの夜が貴重な時はずなのに、考えることも尽きてみると急にいらいらし、いっくもこの状態が我慢できない切羽つまった気持がこみあげてくる。

そうになると、イワノフがあらわれて暴逆の鞭をふるってくれた方が何も考えずにすみ、助かるような気さえするのだ。

空気を切り裂く恐ろしい音。しかし痛みになれる事はできなくとも、音の恐ろしさに鈍くなることはできる。痛みが襲えば、それか



ら跳ねかえって泣き喚いてもおそくはない。そう感じがつかめたことだけでも、ずいぶん楽になった。慣れた、という事か。

憲兵隊の取り調べで本格的に拷問された。お臀をびしりびしり皮鞭でうたれるくらいは序の口で、そのうち、火を使いだす。ライター、煙草の火、草の腐ったものを肌で焼いたり、蠟燭……

主に、やはり臀部がねらわれた。それから乳房、乳頭、腹部、へそ。脐窩に山もりになるくらい草の塊（もぐさ）を盛られて、煙がもうもうとたつのを見せつけられた。

一糸まとわぬ姿で、台の上に大の字にしばらくつけられたままだ。腹が燃える。はじめは恐ろしいが熱くはない。やがてチツと熱点が鋭く刺してくる。一点にからだ収斂する。

「うあ、う、あう、ぎゃあ」

思いだしても汗がべっとり出る。

ひらかれた四肢をそばだたせて、叫び、悶絶！ すればよいのだが、感覚はまだ意識にしがみついている。しがみつかれた手を振りはなさんばかりに、ぶるぶる震え、喚く。

気が狂うばかりに長い時間。しかし気もふれず、気がついてみると煙はたえて、火が消えているのだ。腹はしかし火ぶくれて、後で

水泡ができ、皮がむけ、痕がのこった。

傷のあと。しかし、人間の回復力というのは何と強靱なものか。自分のからだながら、殺しても死なない。肉の一片になっても生きてびくびく動いている変な気持のわるい生物に思える。

鞭のあとも、ひどかった。腰全体が二倍ぐらいにふくれあがったように鬱血し、臀部が酔いくされた肥った男の顔のようになった。まったく酔い痴れてくたくたと崩れ、ドブにでもどこへでも、はまりそうだ。こんな表現は、しかし後になってこそできるので、その時の悪酔いは、しぶとく苦しい。それでも腹れが一夜たつと、目に見えてひいた。

赤い酔いどれが、宿酔いで血の気もひき、紫色にちぢかんで臆病者にかえっていた。

女のどうしようもないポイントを責めてくるのには、まったくどうしようもない。情ない。イワノフという男は、その点ネーラの状況をよくつかんで来て、押してだめとなると左右からゆすぶり、強く痛みつけるより、かからうように颯々してくる。日本人の憲兵はその点、どこか人間的な欠陥、デリカシーを解さない白痴のようで、拷問者としては組しやすい相手だが、拷問以上に簡単に人を殺して

しまう人間かもしれない。人を調べるなどという能はないが先天的な殺人者だ。

イワノフがいけない間に意馬心猿にかられて下手な失敗の後、腹をたてて無闇にかためたこぶしで頭をなぐってきた。その機械的に力をふるうやり方が、男の性格であった。ゴツンゴツンとやたらに固い打撃をうちこむ。

ゴツンゴツン！

よく脳内出血をおこさなかったものだ。皮下は破れてコブだらけになった。それから事あるごとになぐりつける。ボクサーのように襲うという感じはなく、ヒステリー男が机をたたくような調子なのだ。机に血が通っていれば最後には机の方で頭を突きだすだろう。

もっとも、拷問する、される関係に人間感情などは、いらぬ。その点では憲兵の方がより割り切れている男で、こちらとしても殺されたら殺されてもいいという場合、かえってサバサバしていいのかもしれない。

イワノフは、いやらしい。ねちっこい。やはりロシア人だ。ネーラとしても、つい感情に火がつく。感情などがあると、かえってよくないことに気がついたので、努めて相手を何とも思わない。ただの人を責める器械だと思ってもうとするのだが、ネーラのわずかな



情動の隙をよくとらえて、つけいってくる。

「憎め、憎め！ どうだ憎いか。憎かろうなさぞ。憎かったら憎め。わめけ。泣け！ それ、お前の××チャンだ」

そんな無言のロシヤ語が伝わってくる。

辺りをうかがいながら忍びこむ、もの慣れた常習姦通者のように、裏口をねらってくるのだ。うしろから攻めてくる。

変にくすぐったい微妙な感じがあるなど、ネーラは気がついてみなかった。たぶん、人間にまだ尻尾があったところに発達した感情表現の残りの余韻が、その辺りをくすぐられると、ひきずりだされるのだろう。白日のもとでは、もう羞かしくて溶けいるほかはない春の淡雪のような情感。

何をされたのか、見えない位置のことで、初めは見当がつかなかった。細い金属製の棒状のものが予告もなく、からだの内部を責めてくる。とまどうほかはない。冷たい小さいしかも小意地の悪い小悪魔のかけたような呪文。火照りにほてった臀部のぶあつい存在感とは、まるであいれないが、それが加わったことで、鈍い重い痛みが気がぬけたように軽くなったのは妙であった。

次にネーラにおとずれてきた気持は、困惑

であった。あたらしい異物感をおぼえる箇所がどこであるか、はっきり判ると、脳天に細い棒の先端が突きとおったように、その感覚がネーラの脳の、もっともひ弱なところを、うち震わせたのである。

「な、なに」

何をするの！ といいかけた。

台の上にうち伏し、四肢を台の足にそれぞれ固定されて、台が馬であれば、ちょうど体を伏せて疾走にかかった時のような恰好をさせられている事自体、どうにもならない羞恥の極みだが、拷問の雰囲気、さらに捕えられた時から過度の緊張感によるものか、裸にされたり罵られたりすることに普通の時の羞恥感は薄かった。それが救いでもあった。相手をけだもの、いや機械だと思えば、痛みを与えられることは別として、こちらの自尊心、女としての自意識は、さして傷つかない。裸にされれば本能的に身がすくみ、変な泣き声をたててしまうが、すぐ石みたいに肌がこわばり、妙な感じは、うけつけまいとする。それが一応、成功してきた。

地下室に連れこまれ、イワノフに身体検査をされた時が、今までもっともいやな感じを残している。台に固定された形のように、や

はり四ツ這いにされて、うしろから検べられた。おぞましさに毛穴がとがり、逆だつ。

その時のつづきが、今やってきた。拷問にうちのめされ、ほとんど無感覚になってしまったような肌が、まだ生きていて、とたんに敏感になった。針にちよつと突かれても、とびあがりそうになった。

石で鎧った肌も、そこには最後の縫い目が集まっていたらしく、もろくも、冷たい細い棒に突破されたのである。

金属棒は、やがて瘦せっぽちの無頼漢のように、しつこくネーラにからみはじめた。「ネエちゃん。おい、なんとかいえよ。口があるんだろ。黙っていちゃわからねえぞ。それとも言わぬが承知ってやつかな。承知なら承知でうけたまわってやるぜ。どうだい、これは。こいつは、どうだい。喋らなくても、目は口ほどにモノをいう。そろそろ目をむきだしたぜ、オー凄エ」

卑猥なロシヤ語が耳に吹きこまれ、ネーラを、しだいにかき乱していったのである。

○

廊下をイワノフの足音が部屋に向かって近づいてくる。

大男の癖に足音は、いつも忍びやかだ。猫



のように、しなやかな腰つきを想わせる。また密偵という仕事がいワノフに性格を与えたのかいワノフが生来、持っている性質が如何にも密偵に似つかわしい者であった、というべきか——弁証法で行くと前者だが、いワノフ自身を知るためには後者も考えなくてはならない——檻の中の単調な動物的なこの日頃ネーラの重な関心をひいているのは、もっぱらいワノフという、かつてネーラの経験の中では登場してこなかった一人の男に占められていた。

不思議に昔？ のことは、思いださない。つい一週間、いや一カ月ぐらいだろうか、前までの昔。

イワン・カスターネヴェツチ・レーヴィン——なつかしい人。あれほど、いつも近くにいると思った人も、何か昔、感激したスクリーン上の映像の様に少しぼけてさえ見える。彼の兄、同志レーヴィン。実際上の党活動の指導者であり、職場では直接の上司であった、謹直な感じの人間的な欠点の極端に少ない人。戦争。パルチザン。日本軍。掠奪者の劫火！ あれらはどこへ行ってしまったのだろうか。

拷問のとき、日本人憲兵に頭を妙な風に打

たれたせいか、まるで頭がバカになってしまったようになり、まとまった事が何ひとつ考えられないのだ。

足音がドアの外でとまった。鍵穴に鍵をつっこんで廻す音がする。

ドアがあいた。部屋は厚いマットが敷かれているので足音が消え、そのかわりに男物のロシア風のオーバーシューズが視界に現われ汚悪な存在を見せつけるように迫ってくる。

日本軍人は将校は長靴、兵は編上げ靴をはいていた。食事を持ってくる女は兎の毛皮の裏うちしてある室内ばきのスリッパをはき、自堕落なひきずる音をたてる。いワノフの上靴はゴムで、ソヴェート製の物らしい。氷の上を走っても滑らない底の造りになっているのだ。ネーラも使いよいのでいつも男物を使っていた。そんな点、いワノフという男はシベリヤを、よく心得ているといえる。しかし、近々と迫られるとゴムの黒い肌は薄気味わるいほどにグロテスクな精気を放つ。

その靴の先は兎器だ。ネーラの腰をうしろから、よほど慣れているに違いないやり方で正確に尾底骨の下に靴先を打ちこまれると、我慢も何もない蛙のように跳びあがってしまった。後に、いやな鈍痛がいつまでも残る。

が、靴は視野から去ってしまった。檻と隣にあったベッドのきしみが伝わる。今日もこのまま寝てくれるのだろうか？ それがはっきりすれば、ネーラも寝られる。この頃では眠りだけが、夢がストーリーをなさず、遠くぼんやりと流れて行く印象の眠りだけがネーラの自己の世界で、ひとつの救いなのだ。それが得られるとなったら、いワノフの小型の長靴のようなグロテスクな代物に、うやうやしく接吻したっていい。

ベッドがギイギイと神経を逆なでする音をたてて、しきりにきしむ。

上靴をとり、衣服をぬいでいるらしい。

と突然、奇怪な円柱が、檻の柵の前に降りてきた。人間の男の足であることにネーラは少しの間、気がつかず、ただおぞましさにそそけだつて、その癖、そのモノから視線をはずせず、魅いられたように、からだも顔も釘づけになっていた。

靴の形はしているが、肌というより一皮むいた巨大な動物の冷凍の臓物のようなものだった。モヤモヤとまといっている一本の太いちぢれ毛がまた凄まじい。いワノフの足は、この頃、見つけているが、そんなふうなあらわれ方をした事はないし、これは



ど近々と見せられたこともない。

今度は手が降りてきて南京錠をつかみ、ガチャガチャいわせて、あけた。柵が向こう側にひらかれた。

「出てこい」

鎖がたちまち引かれ、首筋につけられている犬用の首輪が皮膚に喰いこみ、変なふうにこすれて焼けた。どうしようもなく、引っぱられるままに首を伸ばす。うつぶせに寝る恰好になっていて、背中であ手首が手錠でとめられているのだから、引かれてもそう簡単に上体が起きない。引く方は容赦しない。

「出てこい。ぐずめ」

口ぎたなくののしられると反射的に眼頭が熱くなる。ぼっと視界がかすむ。神経がぼろぼろに風化して、もろくなっているのだ。

足から動かして腰を立て、這うようにして進む。しかし首をひかれると前へ突ンのめりかける。這いたくない。このまま倒れてしまいたい。絶望感が薄っぺらなままに、やたらにせつなく、こみあげる。

しかし引く方も強引だが要領をこころえている。箱の天井の方へ引く。突ンのめると首が吊られるのが丁度、みあっている。

三、四歩、膝を進めると、やっと全身が

檻から出て、腰がつかえなくなった。イワノフの全身が見えた。腰にバス・タオルを巻いているほか、何もまとっていない。片手に鞭片手にネーラの首からつながっている鎖の先をにぎっている。

思わずイワノフの顔を見つめてしまった。と片手が鋭く振られて、鞭がとんできた。

「あ、は」

ネーラは身をよじった。しかし鞭は避けられない。すると黒い目なしの蛇のようにしなやかな鞭がはしってくる、と思う間もなく、横腹から背にまわって、バシッといぶ音をたてて、そこから輪切りに切断されたような熱線が、からだを、ひと巻きした。

鞭にひき据えられてネーラは起こした上体をかがめた。頭をさげて、小さくなった。

「そうそう、そうすりゃ鞭など喰わずにすむ

——だいたいお前は物おぼえが鈍すぎる。小学校の教師といやア一応のインテリゲンチヤだろ。その上党員だとかいってえらくエリートぶっておったが、全然にぶいじゃないか。女としての感度もまるで駄目だな。どこか柄

ばかりニューとふやけて、育ちそこなったところがあるんじゃないか。え。丸裸で縛られてノソっとしてやがる。チットは娘らしく恥

じらうところがねエのかい」

こうるさい女の腐ったようなモノのいい方のイワノフの小言をネーラは聞くまいとするが、鈍いといわれると、やはりそんな事はない、やはり羞かしい、と変ないいわけをしよう。

「とにかく、まだわかっていないようだな。

いいか。俺はお前の主人、だ。主人に対しては腰から上は見てはならん、こいつは支那でも日本でもそうだ。ここはロシアだといったいのだろうが、ロシアなどという国土は、もはや地上には存在しない。共産党もスターリンもない。現にお前は檻のなかで飼われ、誰も助けにきてくれんではないか。そのお前ときたらコートひとつ持たない、生まれた時のマンマだけだ。ほうり出されたら裸でそれこそ野良犬のように街をほつき歩かにゃならん。今はこれも日本人の町だから、だれも丸裸のロシア人に、服や食物など恵んではくれない。せいぜい色狂いの娘とか思われ見世物にでもなるところだ。お前をそうしたのは俺だお前が怨むのは勝手だが、おれが主人だから、そうできたわけだ。主人でいる限りお前はおれのモノだ。飼いだと同じだ。主人に吠えついたり歯をむいたりする犬は、遠慮なく



鞭でうち殺してやる。おれにはおれの、主人としてのやり方がある。逃げたけりゃ逃げるのもお前の能力だが、逃げるまでは俺が主人だ。わからなきゃわからせてやるのが、俺のやり方ってわけだ」

立ちはだかって演説をぶった。ネーラは頭をさげたまま、イワノフの言葉の終わるのをじっと待つばかりにない。

「わかったか。牝犬め！ わかったらケツをあげろ」

ネーラは、とまどった。もじもじした。

「まだ呑みこめないのか、ノロマ。犬の尻ツ尾の振り方は、この前に教えたる。ケツをおったてて振るんだ」

ネーラは、かたくなった。とてもお尻などは上げられない。まして尻っ尾を振るようにしろ、などと……。

「鞭がほしいらしいな。犬め、は」

ネーラのまわりをイワノフは廻って歩く。鞭の先をネーラに見えるようにチラチラさせる。猫が捕えてきた鼠をなぶる。

ピンと鞭の先が腰にはじけた。短くもってじゃれつくようにしたのだが、敏感になっていたネーラの肌は電流をうけて、さざ波をうった。自然に尻が少し持ちあがった。

ピン！  
ピン！

とくる度にク、クツと尻があがる。

やがて高々と、これ見よがしに、ネーラのなめらかな、ふたつの円形は天井をむいて、そそりたった。

一度あげると、その形に筋肉がかたまってもうおろす事ができない。

「よしよし。立てようとすればチャンと立つ

——何もたいしたこっちゃない。ファイファイ教のお祈りをしていると思えば、うやうやしい気持ちにさえなれるってものだ。ご主人さまはアラアの神だ。神は牝犬のツルツルした丸っこいところが大好きだ。棒げられた物は聖水をそそいで愛でられる」

とがった皮膚感をその時、脂っこいイワノフのてのひらが、つつんだ。

上体を床にささえているネーラのひしゃげた顔が、なおも歪んだ。泣いたのだ。泣きだすと鳴咽がつづく。しゃくりあげてくるものが止まらない。

おぞましきの奥に、チラリと影がさした。喉に無理やり突っこまれた、にがい味の中にどこか一点の甘味がある。イワノフに棒げた肉塊をなでられて、急にさそわれたように涙

がやってきたのである。

「悲しい、か。けっこう、けっこう。アラア

の神はお見通しじゃ。甘ったれンのもよいが尻っ尾をふり忘れてるぞ。これ牝犬」

などといわれても動かない。痺れている。

「振れ、といっても尻っ尾がないか。よしよし」

イワノフは立って行き、小机のひきだしをあけてかき廻し、何かをとってきた。

臀肉がつかまれ、木の細長い棒のようなものが、ぐいっと攻めたててくる。

ネーラは、この感覚に慣れることはできない。歯医者が口をひろげるため匙状の器具を使うが、目的はあるとしても理不尽な感じがする。感じというより舌や口腔粘膜が直接、味わうといった方がいい。その味。ただの異物感とは違う、石を含ませられる様な感じ。

細いものはそれでも済む。が、無理を承知でぐりぐりとやってこられると、触れられたところがそのまま火炎を噴きだす。イワノフにそんな拷問を受けたのだ。太い蠟燭が襲ってきたばかりか、それに火を点された。今のようにお尻を立てた姿勢で、灼けた蠟涙が流れおちて肌、靴先で蹴られるクボミを伝わった。蠟涙そのものは肉を焼くほどの熱がない



ことを後で知ったが、はじめは溶かした銅でも傷口に流されるような、切迫した恐怖をおぼえ絶叫したのだ。

私の反応——、それまで比較は正確にはできないが初歩的な拷問で、石になってどうにか耐え、責め手に鈍いという印象をあたえていた——が急変し、動かない手足が、ちぎれそうにぶるぶる震え、そのあたりから、われを忘れたのだったが、憲兵があきらかに面白がって、竹製の棒（竹刀）を使ってきた。

竹の先を無茶苦茶に動かし、それでも足りず、その痛みの附近を棒でバチンバチンたたいてくるのだった。失心し、よみがえり、痛みの頂点で脳細胞がどこか変質したように、ネーラにとって過去はすべて切実でないもの現在の感覚もどこか悪夢のなかで行なわれてゐることで、これは醒めないだろうが、やはり夢なのだ、と一部で納得しているような気持、というより、状態そのものになってしまったのだ。

その状態に、また落ちこもうとする作用がネーラにはたらき、

「尻を振れ」

といわれると、ネーラはもう反抗出来なかった。そして無器用に動く尻と同時に、なな

めになった鉛筆が上下左右にピコピコと滑稽なでたらめの線をえがきはじめたのである。

「そのまま振りつづける。仕置してやる。いつも檻を出てくる時は這いつくばったまま、上体をおこすのは赦された時だけだ。犬が年中チンチンをしているものか。チンチンといわれた時だけすればいいのだ。ふだんは後手でも四ツ足の気持で這え。いいな。主人を睨んだ罰を与えてやる」

声が降ってくる、なぜか自動的にコックをひねられたように胸がせつなくなる。涙がポロポロ出る。頬をつとはしりマットに吸われてしまう。はかない涙。自己を憐みはじめたのであろうか、ネーラは？

尻振りを止めるといわれないので、まだ振っている。と、ヒューと空気を裂いて鞭が襲った。身をちぢめる隙もない。

バシリ！

突きたてられた先をとって、ちぎるように鞭がまきついた。しめつけて、つるっとほどけ、また次の飛翔にかかる。

打たれた、あと。

「ヒーツ」

ずれた間隔をおいてネーラは悲鳴ともいえない、かすれた声で、部屋をふるわせた。

鞭のお仕置のあと、ネーラは浴室に連れこまれて器具を使った浣腸をうけた。

「お前、この一週間ぐらい、つまっているっというじゃないか。まったく世話のやける奴だ——自分のものぐらい、自分で考えてやったらどうだ」

などと始末してやることに恩を着せたふうというイワノフだが、便器の上でネーラを身もだえさせながら、突っついたりして、さんざんからかって、ネーラに一週間分ぐらいもひねり出させては、また口ぎたなくさげすむのだった。それから二度も腸を洗われ、ようやくパスから解放された。

檻のなかには支那人の使うような桶がいられてあり、食事のさしいれ毎に女が持っていく、始末してくれるが、とても固まったものを、さし出す気にはなれない。

以前のネーラは健康で、便通などは数えもしないが、きまった時間にはちゃんとあったものだ。憲兵事務所の箱檻のなかで一度こまって冷汗をかいだ。それから拷問。腰の抜けるほどうちたたかれると、変なヒモのように出してしまうのだったが、これはネーラとしては殆ど意識にない。

ここに移されて五回目の食事のあと、猛烈



に腹が痛み、どうしようもなく桶を使った。固い抵抗のあと、形をなさない大量が腸からしぼり出された。

次の食事どきまで処置に困惑し、せまい檻のなかで、うろうろした。臭いが部屋中にもった。女がやって来て、部屋に入るなり、明からさまに鼻をしかめた。桶をとった時、ネーラをいやな目で、じろっと見やった。ネーラはあやまろうとしたが、身も口もすくんだ。檻の奥で小さくなり、女には見えなかった。火のように紅くなっていた。

女には他にも困る事がある。

考えても仕方がない。まったく仕方がない——女に便所へ連れて行ってくれ、とか、いざという時の手当てを頼んでおきたいのだが、どういう女なのか——白系露人に違いはないと思えるのだが——ネーラの、かつて接触した事もないタイプの得体の知れない中年女で目つきも、こちらをいまわしい動物を見るようにしか見ない、冷たい以上のもので、口をきこうにも、ひるんでしまう。

ネーラは裸で、やはり、いまわしい動物そのままに檻の中で飼われている。そういう意識を、したたかに思い知らせる女の一瞥であった。その点では、やはりイワノフと同じ世

界に住む人間どうしに見える。

女の密偵、と思えるが、イワノフのように職業的な物腰が、ほの見えない。ずんたらしい、不健康な日常を送っているような腐敗の臭いが、きつい。

イワノフは、味方するわけではないがあれでロシア語の語彙も豊かだし、乱暴な下品な口こそきいているが、それで水準以上の知識を持った頭も、なかなか鋭い男であることはたやすくわかる。それ故に、スパイとしての手ごわさも大きいだろう。いくら共産党でも、やはりいやなタイプという男はいるもので、やり手だがエゴイストで出世主義者の男にイワノフのようなタイプがいる。どうやら階段をはじめから踏みはずしたようなイワノフだけに陰影が複雑で濃い。

女には、もっと退廃したものがある。モスクワやペトログラードの貴族専制時代に、奴隸的な娼婦の巢にいて陰険な策動をこととした、アイマイ屋のおかみといったところだがそれほど張りもない、空気の抜けかけた風船の様な醜悪さばかりが目だって、よどんだ感じの、お白粉べたべたの「女」であった。ベッドの上で、おのれの快楽をしあげたあと、イワノフは、

「俺はちょっと出かけてくるからな。留守の間はカチューシャ（あの女の名前！）に預けておく。今までのように檻のなかにいっぱなしではなく、カチューシャの用を足すんだ。あの女が仮の主人だ、いいな。だが本物の主人は、やはり俺だ。その点、よくわきまえておけよ。お前のことは、おれが一生、面倒みてやる。お前の前の主人の共産党もロシアもいまはないのだから、よく心得ておけ」と威張ったあと、ネーラを檻に追いこみ、錠をちゃんとかけて、ベッドにふんぞり返りやがて寝息をたてはじめた。

いよいよ、老醜のカチューシャに娼婦にされてしまうのか、とネーラは思った。が、その思いには現在より救いの、ほの見える一筋の光明がさしている気がする。カチューシャという女がイワノフより抜目がないとは思えない。それに娼婦にされるとしたら人と接触するだろうし、街へ出られるキッカケをつかめないとは断言できない。スボボドヌイ！やはり日本人に占領されてはいるのだろうか、——このところ、ずっと遠のいていた街の姿が、いま、檻の柵を越した向こうに鮮かにネーラのまぶたに、うかびあがってきた。



カット・須坂 旭



# 忘れぬ被縛女体

青 井 松 造

私の独身時代……といっても、つい四年ばかり以前のことですが、ある事件？ がありました。もちろん、大したことではないのですが私には終生、忘れられないことです。

あの夜、私は気疲れの多い会社上得意接待の雑用係として追い使われ、夜半近くになって帰ったばかりでした。

アパートの一室、四畳半一間が私のネグラでしたが、今まで居た立派な料亭の座敷とは大違いの古畳にひっくり返ってホッとしたとたん、ノックもなしにとび込んできたのが隣部屋の「キヨちゃん」でした。

本人がそう呼べというから、私は素直にキヨちゃんと呼んではいましたが、彼女は当時二十六か七の結婚失敗者ということで、私より二つか三つは年上です。さして美人ではなかったのですが、独り者の私には目の毒といえるくらいの色っぽさの持ち主で、けっ

……／＼セ ミ 告白／＼……

こう美女としての印象を受けていたのです。

フックラした腕や、白い素肌をのぞかせた衿元、それに連なる豊胸の盛り上りなどが悩ましく、度々野心をかき立てられて、思い止まるのに苦労したものでしたが、オナペットにしたことは数えきれない覚えはあるのです。

「ねえ青井さん、相談にのってよ」

キヨちゃんは、私の前にペタッと坐りこむと、そういいました。私の帰るのを持っていたようだったのです。

「わたし、今日、セールス中に襲われたの」

彼女が、どこかのベッド会社の営業部に勤めていることは聞いていましたが、襲われたとは、おだやかではありません。

「ううん、ちょうど遠くから見ていた人がいて、駆けつけてくれたもんだから、ワンピースを破られたのと、ちよっとすり傷が出来たぐらいで、被害らしいのはなかったの。ソイ

ッ？ 逃げたわ」

いいながらキヨちゃんは、浴衣の衿元をちよっと捻げてみせました。覗かせた胸、いかにも柔らかそうなフックラした感じを受ける白肌に、喉の下辺りから、ほんの少し顔を出している小山の麓にかけて、二筋ばかり薄紅色になっている条が走り下りていました。彼女のいうすり傷ではなく、明らかにヒツカいた傷です。服を引き裂く男の爪の名残りに違はなく、それがとてもエロチックに見えて、私は目を奪われたものです。多分、生ツバを呑みこんだことでしょう。

「警察？ もちろん届けるもんですか。被害らしいものはないし、だいいち、届けたら何やかやとウルサイでしょう」

彼女は、胸の柔肌につけられた傷を被害とは思っていないらしいのでした。

「で、のって欲しい相談というのはネ……」

それまで、危く痴漢の餌食になろうとした女とは思えないほど、明るく流暢に話していたキヨちゃんが、そこで始めていい難くそうに言葉を切って、もじもじし始めたのです。

それがまた、なんともいえぬ艶っぽい仕草に見えて、私の心身をかき乱すのでした。

私は、辛じて自分を制しながら、話の続きを急かせましたが、キヨちゃんは、薄紫の浴衣帯に片手をちよっと差し入れて、いいかげては止め、思い切ったように上気した顔をサ



ツと挙げては、すぐまた、うつ向いてしまう  
 ということを、何度か繰り返していました。

だが、じれったくなかった私の強い急かせか  
 たに、ビクツと顔を挙げたキヨちゃんは、い  
 きなりパツと私に抱きついてきたのでした。

「犯して。ネ、犯して欲しいの！」

私は、突然にすがりつかれた上に、柔らか  
 い頬をメチャメチャにすりつけられて、あれ  
 ほど自分から手出ししたい気持を感じていた  
 にも拘らず、どぎまぎしてしまいました。し  
 かし、とてもものこと、腕の中で狂おしく身悶  
 えする弾力ある重量体を、突き離してしまう  
 だけの男らしさは持ち合わせておりません。  
 そのままで、突き上がる衝動の渦に巻きこま  
 れ、溺れこんでしまったのでした。

甘美な忘我の境を彷徨していた私の耳に、  
 意外に強いキヨちゃんの語調が吹きこまれて  
 きました。

「わたし、犯して欲しかったのよ。今のじゃ  
 あ、まるで、わたしのほうが、あんたを犯し  
 たみたいじゃない」

なるほど、その通りでした。

「わたしね、こんなにして欲しかったのよ」

彼女はツと起き上ると、辛うじて肌にまつ  
 わりついているだけという状態の浴衣を、乳  
 房の下で巻き留めている帯の間から小さな紙  
 包み出して拡げました。先程、もじもじしな  
 がら帯へ手を掛けていたのは、これを取り出

すかどうかで迷っていたらしいのです。

「ね。これ、わたしのよ。こうしてよ」

突きつけられたのは、三葉の手札型の小さ  
 な写真でした。私は無意識に受取ってびっく  
 りしました。そこに、極めてハレンチで、極  
 めて無残で、極めてエロチックで、極めて魅  
 力的な、後ろ手に縛り上げられた全裸女体の  
 三態の被虐ポーズを見たからです。

当時の私は、漠然としたSMムード願望は  
 持っていたのですが、深く考えたことも  
 具体的夢想したこともなく、もちろん現在の  
 ようにハッキリした形でのSM愛好者を自認  
 するところまでは行っていなかったのです。

「これがキヨちゃんだったって？」と信じられな  
 い気持で彼女に目を移すと、キヨちゃんは、  
 着ているとはいえなかったにしろ、一応はま  
 とっていた浴衣を脱ぎ捨て、全裸の肌をまぶ  
 しく輝かせていて、再び私に息を寄せたの  
 でした。しかも多分、帯の下にでも巻いてい  
 たのでしよう、色模様のついた細紐を二本、  
 ムッチリした太腿の上でまさぐりながら、え  
 もいわれぬアダな上目使いで、私の反応を窺  
 っていたのでした。

私はランニングシャツ一枚きりというヘン  
 チクリンな格好のまま、彼女に改めて向かい  
 合い、この縛られている女が本当にキヨちゃ  
 んか？ とか、どうしてこんな写真を撮った  
 のか？ などと、くどくど尋ね始めました。

すると彼女は、何も答えずに細紐を私に押し  
 つけて、くると背を向け、

「とにかく縛ってよ。白状するから」

と、両手を背中に組み合わせるのでした。

どういふ種類の慄えかわかりませんが、私  
 は、ブルブル小刻みに慄えながら、どうやら  
 彼女を後ろ手に縛りましたが、細紐を胸に廻  
 すときに触れた乳房の、びっくりするほどの  
 微妙な柔らかさには、思わずポーツとなった  
 ものでしたし、縛られた肢体で演じた彼女の  
 形容し難いそれからの媚態には、全く魂を宙  
 にとばされたものでした。現在、私が探り求  
 めているものは、正にこの時の彼女の艶姿で  
 あると思うのです。

「縛られたら白状する」といいながら、結局  
 彼女は何も話さず、私もまた、詮索心などケ  
 シとんで、再び欲望だけの徒になりました。

翌日、私が会社から帰ってみると、キヨち  
 ゃんの部屋は引き払われていました。管理人  
 は、夫婦のヨリが戻ったらしい、とってい  
 ました。

現在、回想して憶測すれば、ある程度の想  
 像はつく思いますが、たった一夜の艶夢にあ  
 れほど強烈に苦しめられ、悩まされたことは  
 ありませんし、未だに、妻の被縛体からは見  
 出せないあの艶姿を、恋い憧れているという  
 のが正直な気持なのです。



カット・岡 たちし



A

青春の陥穽(16)

## 二つの鍵

芳野眉美

の目はくつついて、開けられなかった。

誰かが庭から家の中を覗いている。

そんな気配がわかると同時に、勇は、首をやわらかなもので圧し潰されて、おもわず呻いた。それが葉子のお尻であるらしいと感じたが、勇ははねのける意識もなかった。

何をされても、半分、眠っている勇は、まったくの無防備であった。

「勇」

葉子は、うしろを振り返った。

「勇ったら」

「う、うん」

生返事が返ってくる。

「チエツ」

と葉子は舌打ちすると、

「いいかい。おいしいものをあげるから、口を開けて、待っているんだよ」

「う、うん」

何をされても、夢遊病者のようなもので、勇は、とろとろと夢の中にいた。

勇が発熱したときに、ぽとぽと小便の雫を勇の口にしたたらせ、下熱剤だと飲ませたことがあつたが、固形物をしたことはない。

どうせ死人と同じなんだからと、葉子が思

下半身がくすぐったくて、勇は、もぞもぞと身体を動かした。なにかぬめぬめしたものが、ゆっくりと這いまわっているのだが、とにかく眠くて、目があかないのである。

「三田さん」

と男の声がしたと思ったが、それでも、勇



ったかどうかはわからないが、その時、葉子の腹が、ごろごろしていたのが、勇にとっては不運であった。

隣家の、大崎夫人のアヌス拡張器を知って以来、どういうわけか、葉子も敏感に感じるようになってきたのである。

大崎夫人のことが、しゃくだったのかもしれない。

二月号の相馬盆児氏の「A感覚、浣腸、肛交」を見ると、相馬御夫妻は、普通の人より二倍も三倍も、夫婦生活を楽しんでいることになる。

「妻は浣腸器を見ただけで凄くエキサイトする」という一節は、名文ですね。

しかし葉子のA感覚は、浣腸という、被虐的なスタイルはとらない。

排泄という、誰もが知っているA感覚に、排泄物を、夫の三田や、燕の勇に、たべさせたり、飲ませたりする、加虐的な快楽にエキサイトする方法をとった。

「勇」

と葉子は、また、うしろを振り返った。

勇が本当に眠ってしまったら、何もならない。半分、眠っていて、半分は葉子の命令に従わないと、つまらないのである。

夢遊病者を相手にするのだから、これほどむずかしいことはない。だが、夢うつつの状態こそ、快楽を最高にエキサイトさせる条件なのである。

「葉子さん」

と、また男の声がした。今度は、三田とは呼ばず、葉子と呼んでいる。

かなり息の乱れた男の声であった。

聞こえないのか、聞いても無視しているのか、葉子は、庭を振り向きもしない。

「いいかい、勇」

「う、うん」

返事をする勇の目は、まだ開いていない。

「オシッコじゃないんだよ」

「う、うん」

「わかっていのかねえ」

久し振りに、一月の末、新宿のS女王のところに私（芳野）は飲みに行った。

ほかの客がごったがえしていて、女王様とよくお話ができなかったのは残念だったが、顔だけ拝見して満足し、終電の前に、バーをしようとしたが、女王様が見送ってくれて

「馬鹿だねえ」

と私の顔を見ていった。

「今、たまっているのだよ」  
きゅっと胸がつまった。  
神酒拝受のことではない。

「わかっていのかねえ」

と葉子は不安そうに溜息をついた。

「いいよ、しても」

と勇はいった。

寝言で返答するのと同じ状態であった。

「ようし」

排泄されたものがのどにつかえ、勇が窒息しよう、そんなことはどうでもよかった。

排泄物の悪息で、勇が嘔吐しても、そんなことはどうでもよいことであった。

とにかく、葉子は脱糞したくてうずうずしているのである。この一瞬に於いては、勇の口に脱糞することが、葉子のSEXであるともいえた。

「葉子さん」

三度目の声は、かなりはっきりと葉子の耳にとどき、ちらっと庭のほうを見た。

障子の中のガラスから、隣家の大崎の頭が見えた。大崎は、葉子の痴態を、かなり前から見ていたことになる。

だが、葉子は、大崎を無視した。



次の瞬間、勇が激しくむせて、勇の身体から、葉子が転がり落ちた。

「馬鹿っ」

起きようとする勇の髪をつかみ、葉子は布団に勇をおさえつけた。

春川ナミオ画伯よりいただいた手紙の中にこのようなシーンのデッサンがあり、コーフンして、一度はこんな光景を、一息に書いてみたいと思っていたのである。

「そんなところから覗いていないで、ふいてちょうだい」

と、葉子は庭に声をかけた。

「お、おくさん」

大崎は、あわてて部屋に、おどりこんだ。

「紙ではないでしょうね」

意地悪そうに、葉子は大崎にいった。

「えっ」

「勇は、いつも舐めてくれるの」

大崎は、三田や勇のようなM的性格ではない。

「な、なめますよ」

大崎は四つ這いになった。

葉子は、ふくみ笑いをして、大崎を見た。

「苦いわよ」

「いや、おくさんのなら、甘い」

「そうかしら」

「そうにきまっている」

葉子は、四つ這いになった、大崎の顔に、ニヤリと笑いかけた。

勇が、のろのろと起き上った。嘔吐を、こらえているようだった。

「しっかりッ！」

葉子が大崎を叱責した。

「は、はい」

「きれいにしないと、承知しないよ」

## B

飛入りの大崎にあと始末をさせた葉子は、勇が便所に飛び込んで出てこないのも別に気にもせず、のうのうと布団に横たわって、背のびをした。

台所でうがいをしてもどってきた大崎が、

「おや、御主人は」

と不審そうに聞いた。

「隣に寝ているだろう」

のんびりと葉子は答えた。

「いえ、寝ていませんよ」

「おや、もうでかけたのかしら」

「車は庭にありますよ」

「そうお」

葉子も不思議そうな顔をした。

「どこにいったのだろう、スケベエジジイ」  
「三田さんの車を、チャーターしようと思っ  
て、うかがったのですが……」

と大崎は、葉子と勇の情事（といえるかどうかは分からないが）を覗いてしまったことのべんかいをした。

葉子と大崎は、せまい家を、きよろきよろと見わたした。

便所からでて、洗顔した勇が、ようやく生気をとりもどしたらしく、水をがぶがぶ飲んで  
いた。

情事のあとは、のどがかわくものであるらしい。

「勇、主人を知らない？」

と葉子は、あどけない声をだした。

「えっ」

勇は驚いたように叫び、四畳半に敷かれた三田の布団の上で足踏みした。

「この下ですよ」

「床下？」

と大崎が叫んだ。

「そうだわ」

びっくりしたような大声を葉子はあげた。

「スケベエジジイを、穴の中に突き落として



おいたことを、すっかり忘れていたわ」

「忘れていた？」

大崎は、また大声をだした。

勇が、ぱたぱたと三田の布団をかたづけ、

大崎が足の下の畳をあげた。

勇が穴の中に閉じ込められているのを、大崎は葉子に見せられているから、床下の防空壕あとの穴を、大崎は知っていたのである。

床板をとる。

「あっ」

穴を覗いて、大崎は絶句した。

顔をがんにがらめに縄で巻かれ、後手に縛られた三田が、穴の中に、逆さまに落ち込んでいたのである。

「これは」

大崎の言葉は途中で切れてしまう。

逆さまに穴の中に突き落とされた三田だが腰のあたりで屈折していて、縛られた足だけが上を向き、上体は穴の底に平担に寝ていたから、危険はないようであった。

「これはこれは」

と大崎は、またいった。

どうもうまく言葉にならないらしかった。

「だしておやり」

と葉子は長襦袢をひっかけながら、勇に

つた。

「大崎さんが、車に乗るのですって」

「えっ」

驚いて大崎は葉子を振り返った。

「三田さんを休ませないのですか」

「そんなチンケな身体じゃないわよ」

穴の中に閉じ込めておいて、朝になったら仕事にださせるのである。

少々、葉子は乱暴すぎる。

穴の中に飛び込んだ勇が、足の縄を切り、両手の縄を切って、三田を自由にしたが、手足が、だらんと穴の中で、のびた。

「大丈夫かな」

心配そうに大崎は、いった。

「大丈夫よ」

穴のふちにかがみ、だらしなく長襦袢の裾をはだけて、葉子は穴を覗いていた。

勇が、がんにがらめに三田の顔を縛っていた縄をほどいた。三田の口の中から、べとべとになった、葉子の汚れたパンティが吐き出され、

「ふう」

と大きく息を吐いた。

「どう、気がついた？」

と葉子は、自分が穴の中に閉じこめておい

た夫にいった。三田は、うなずいた。

「穴の中は、よくねむれたでしょう」

と葉子は笑いながらいった。

「おかげで、勇と二人だけで、安心して、寝ることができたよ」

三田は、うなずいた。

別に、うなずくところではないと大崎は思うのだが、三田は、かなり、ふらふらのようであった。

「しばらく休ませて下さい」

と大崎は葉子にいった。

「事故にあったら大変ですから」

「死んでもいいのよ」

と葉子は、すましていった。

「そのほうが、保険がガツポリはいるわ」

「まさか」

「でも、大崎さんは、まだ殺せないから、スケベジジイを、少し休ませてやるわ」

「そうして下さい」

ぐったりしている三田を穴の中から助け上げ、大崎と勇は、二人がかりで、三田を布団に横たえた。

「運転は無理だな」

と心配そうに大崎はいった。

「大丈夫です」



と意外にしっかりした声で三田が答えた。  
「少し横になっていれば、すぐ直ります」  
かなりタフな身体のもようであった。

「いや、無理をしなくてもいいですよ」  
「無理じゃない。どっちみち、葉子に追い出されますから、待っていて下さい」  
「そうですか」

大崎は三田の側に坐り、三田の顔に残っている縄のあとを、早く消すために、タオルをしぼってあてがった。

「親切ね」

と葉子が大崎にいった。

「御主人を床下に閉じ込めておいて、忘れてしまふなんて、ひどいですよ」

にやにやしながら大崎は葉子にいった。

「そうかしら」

「おそろしい人だ」

「そうかしら」

「だから魅力があるのかもしれない」

「そうかしら」

大崎は身体全体が、むずむずしてきた。

「大崎さん」

と葉子がいった。

「勇が朝御飯の仕度をするまで、葉子と寝ていましょうか」

夜具の上で膝を立て、長襦袢の裾を乱してまっ白な、ふとももの内側を見せた。

勇の口に脱糞してエクスタシーを感じ取っても、やはりとどめをされないと、葉子の慾望は消えないようであった。

「ねえ、大崎さん」

あくことのない性慾であった。

「でも」

と大崎は、口ごもった。

勇が台所で朝の仕度をしているのも気になるが、穴から助け出した、ぐったりと横たわっている三田も気になった。

「あら、奥さまとだけで充分なの？」

「ちがいますよ」

あわてて大崎は、いった。

「そんなことはありません」

「じゃ、抱いて」

と葉子は胸をひろげた。

「奥さん」

大崎が裸になった。

「待って」

やんわりと葉子は大崎をおしとどめた。

「四つ這いになって」

と大崎に命令した。

「犬のように鼻を鳴らして、葉子の匂いをか

いでちょうだい」

「そんなこと」

「いやなの」

S的傾向の性格の強い大崎を、三田や勇のように、雄犬のように使おうとしているのである。

「いやなの」

葉子の声が荒くなった。

「いえ、いやではないけど」

「それなら、早く、鼻を鳴らすのよ」

四つ這いになった大崎が、立て膝した葉子の、長襦袢の裾に顔を寄せた。

くんくんと鼻を鳴らした。

「どう、いい匂いでしょう」

「――」

「犬のように、舐めてもいいのよ」

笑いながら葉子は、いった。

A感覚でエクスタシーを得たから、今度はじっくりと、大崎を使って、本番を楽しもうというのである。

これではなくては、二つの感帯を持つ意味がない。

大崎の首が葉子の内股にはさまれて、動かなくなった。

台所にいる勇も、すぐ側で横になっている



読者ギャラリー『給食水』春川ナミオ

葉子の夫の三田も、ときたま、ちらっと葉子と大崎の痴態を盗み見していた。顔を上げた大崎が、猛然と葉子に襲いかかった。

C

三田が洗顔をすませ、穴の中でついた泥を落としている間、勇はせせと、営業用の三田の車を洗っていた。

「大崎さんにチャーターされたのだから勇、おまえ、車を洗っておいで」

という葉子の鶴の一声であった。

「いいよ、勇さん」

一晩中、穴の中に閉じ込められ、骨の節々が痛いのか、肩を上下し、首をまわし、腰をもんでいた三田は、人の良さそうな顔をして勇にいった。

「わたしが洗うから」

「おだまり」

葉子は、大崎にしがみつくようにしながら勇と夫の三田に叫んだ。

「車を勇が洗っている間に、スケベジジイは早く朝食をすませておしまい。大崎さんを待たせたら失礼だよ」

「は、はい」

二人の男の、同じような返事が、同じようにもどってきた。

「いいですよ、奥さん」

葉子にがちり、はがいじめされたまま、

大崎はいった。

「そんなにいそぎませんから」

「うそ」

「うそじゃありません」

「うそよ。早く葉子から逃げたがっているくせに」

葉子は、大崎の顔をこづいた。

「無理ですよ」

「きつと奥様を可愛がってきたばかりなのでしょう」

「それは、まあ……」

「くやしい」

「うっ」

肩を噛まれて、大崎は呻いた。

サディスティックな葉子には、いくらサディストを自認する大崎も、かなわない。

「車、洗いました」





庭から、のんびりした勇の声が、はいりこんできた。

食事を終わった三田が、仕度をして、庭に出た。勇は、いつになく、三田の顔を見られないようであった。

妙にテレていた。

葉子は、三田の妻である。

勇は、葉子の燕であり、居候である。

大崎は、隣家の住人だが、葉子と関係がある。

その男三人が、こうして一堂に会し、葉子に罵られている。勇が、葉子の夫の三田に、テレるのも無理はない。

こんな妙な複雑な関係になると、男というものは、なんとなく、テレたり、羞かしがったりするものなのである。

「勇、こっちにおいで」

と葉子が呼んだ。

ようやく、大崎が、葉子から脱出したらしかった。

勇が、あわててとんでゆく。

今度は、勇を相手に楽しむつもりらしかった。

三田の車の助手席に坐った大崎は、三田と顔を見合わせて、首をすくめた。

「殺されてしまう」

と三田が笑いながらいった。

「生きてるのが不思議です」

と大崎は、まじめに答えた。

「好きなんですえ、奥さん」

「寝るのがね」

「寝るだけじゃない」

「そう」

「責めて、責めて、責めまわるといった感じですね」

感心したように大崎はいった。

「それにしても、御主人を床下に閉じ込めておいて、居候の勇君と寝るとは、ちょっといきすぎじゃありませんか」

「そう思いますか」

にやにやしながら三田はいった。

「そう思われても仕方ありませんね」

「そうですよ。奥さんも、ちょっと度がすぎます」

「度がすぎる、ね」

「何事にも、限度というものがあります」

自分が、三田の妻と寝ておいて、限度もへたくれもないと思うのだが、こんなことをいいだしたのも、大崎のテレかもしれない。

「それはそうでしょうけど」

大崎に妻を寝取られている三田は、別にそんなことを少しも気にしていない様子で、ここにこと大崎に答えている。

「勇君が居候になってくれて、本当はホッとしているですよ」

「えっ」

意外な三田の言葉であった。

「また、どうして」

「おかしいですか」

「おかしいって、そうでしょう。目の前で、奥さんが浮気をしているってわけじゃありませんか」

「浮気ね」

と三田は苦笑した。

「大崎さんとも浮気している」

「それは、いわないで下さい。三田さんにも妻を紹介した」

「わたしは、大崎さんの奥さんとは関係していませんよ」

「えっ」

大崎は、まじまじと三田の顔を見た。

三田夫妻、大崎夫妻、それに勇も加わって五人のSMプレイプラス乱交ごっこをやったのは確かだったが、

「そうだ、三田さんは、妻と関係していません」



んね」

思い出したように大崎は、いった。

「ええ、無関係です」

「それはそれは」

おかしい会話であった。

夫婦交換なら話もわかるが、乱交は一方的であった。

「三田さんのかわりに、勇君が妻と寝たわけだ」

「そうですよ」

「それはそれは」

と大崎は、またいった。

「それは失礼」

「いえ、別にかまいませんけど」

「話をもどしますけど」

と大崎は三田にいった。

「なんで、勇君が居候になって、助かるのですか」

「ああ、それね」

さもうれしそうに、三田はいった。

「妻妾同居という男は、めずらしくありませんね」

「ええ、ええ」

大崎の趣味にぴったりのことであった。

「その反対ですよ」

「夫燕同居ですか」

「年下の愛人に、妻を寝取られている。そう思っただけで、マゾヒスティックな、わたしは、ぞくぞくしてくるのですよ」

「寝取られているのではなく、奥さんの場合は、男を犯してしまうのですよ」

「そのほうが、かえって興奮する」

「なるほどねえ」

庭に車が止まったまま、なかなか動きそうになかった。

葉子に責められている勇が、死にそうな声をだして、わめいていた。

「助けて。そう毎日じゃ、ミイラになっちゃうよ」

「いくじなし」

「ねっ」

と三田が大崎にいった。

「わたし一人だったら、とっくに、妻に精気を吸いとられて、ミイラになっていますよ」

ミイラにならないための防波堤として、三田にとって、勇は絶対必要だったのである。

「そうすると」

と大崎が、まじめな顔でいった。

「わたしも、その防波堤ですか」

「そうかもしれませんよ」

「助けてくれ」

ミイラにされそうになっている勇が、庭に向かって叫んだ。

「死んでしまう」

「死ね」

葉子は、勇の鼻と口を尻に敷いて窒息させる、つもりらしかった。

「逃げましょう」

と大崎が三田にいった。

ようやく、車が庭を出た。

「どこにいらっしゃるのですか」

と三田が大崎にきいた。

「その前に、妻を乗せて下さい」

意味ありげに、大崎は三田にいった。

三田は車を大崎の家の前にとめた。

大崎が妻を呼んだ。

大崎夫人は、まるで人が違っていた。

三田には、それが大崎夫人、絵里子であるとは思えなかった。

まるで竜宮の乙姫様のような髪型であり、スタイルであった。純白のパンタロンドレス

は、若い新妻の絵里子には、よく似合う。

「これはこれは」

と三田は唸った。

絵里子夫人の人間便器にされたプレイの思



い出が、三田を、ぞくぞくさせた。

夫婦交換プレイは、勇に代役をされてしまったが、三田は、たつぷりと、絵里子夫人の排泄物を口中にさせられただけに親しみは持てた。

「お二人で、ドライブですか」

「ええ、まあ」

と大崎は口を、にこした。

大崎は、都心の、有名なホテルの名を、三田に告げた。

## D

髪のを型を変えただけで、こんなに人が変わるものかと三田は目を見張った。

かつらなのかもしれないが、見事な黒髪がふっくらと両頬をかくし、絵里子夫人の目鼻立ちをくっきりと浮かびあがらせている。とともに、微笑を含んだ唇に、黒髪が触れるのも悩ましい。

華麗なる変身であった。

三田は、運転しながら、うしろが気になって仕方がない。

大崎の恰好は、いつもと変わっていない。

サラリーマン・スタイルである。

それにひきかえ、絵里子夫人の純白のパン

タロン・ドレスは、イブニング・ドレスのような感じをあたえている。シルクシフォンの薄ものかもしれない。

車内の採光の関係で、絵里子夫人の乳房が生のままに、薄もののドレスに浮かびあがってくる。青い固い果実のような乳房も、夫に飼育され、夫に内緒で勇と関係したりしたため成熟して、ふっくらと盛り上がってきたようであった。

テレビのSEX体操で有名なタレントが、男と関係すると乳房が大きくなり、しばらく関係しないと、いや、関係する数を少なくすると、乳房が小さくなると、いったとか、いわないとか、週刊誌で読んだことがある。

それだけ、女の乳房は、男に敏感なのかもしれない。

絵里子夫人の、まん丸い綺麗な乳房は、シルクシフォンの純白のやわらかなドレスに包まれて、ブラジャーをしていないようであった。

「おや」

と三田は思った。

ブラジャーではないが、細い鎖のネックレスのようなものが、パンタロン・ドレスの胸のあたりに、すけて見える。

首からさげたものではない。

その細い金色の鎖は、絵里子夫人のまん丸い乳房と乳房の間に、吊り橋のように飾られているように思えた。

はっきりとは、わからない。

三田は、むずむずしてきた。

大崎の家で全裸にされ、レザー・サポーターをつけられたり、全頭式皮マスクをすっぱり頭からかぶされたSMプレイが、急激によみがえってくるのである。

犬の首輪をはめられ、丸い鉄の玉のついた足枷まではめられて、三田は、絵里子夫人の足下に寝かせられた。

全頭式皮マスクにつけられた口チャックがはずされ、金属性の開口器が三田の口にはめられた。三田は、こうして、浣腸された絵里子夫人の、人間便器にされたのである。

浣腸されたあとの、水のような排泄物などとても口で受けられるものではない。

強制的だとはいえ、それができたのは、束縛に使った、いろいろな責め具に興奮したからかもしれないが新妻の、新鮮な絵里夫人の体内から排泄されたものだからであった。

許されるならば、竜宮の乙姫様のようなスタイルのシルクシフォンのパンタロン・ドレ



スの絵里子夫人に踏んづけられて、人間便器にされたいと思った。

三田の目の前で、大崎が妻の葉子を抱いてきたばかりなのだから、交換に、そのくらいのことをしてくれてもいいと、三田は甘く考えるのである。

「奥さんは美しい」

と三田は感嘆の声をあげた。

大崎夫妻は顔を見合わせたようであった。

「うちの葉子とは、くらべものにならない」

「あら、奥様にいいつけますわよ」

と可愛い声で、羞かしそうに絵里子がいっ  
た。

「いや、本当だから仕方がない」

「いいのですか、そんなことをいって。三田さん」

大崎も少々テレたようだが、本心は満足していることは確かであった。

水商売の葉子は、絵里子とくらべれば年を取っていたし、それに、だらしがなく、なんとなく、やぼったいところがあった。

「奥様だって、とてもお綺麗ですわ」

と絵里子が、お世辞をいった。

「もう一度、ゆっくりと絵里子さんの……」

といって三田は口を閉じた。

車を運転していても勝手が違うのか、ちょっといいだせなかったらしい。

「なんですよ」

と絵里子がきいた。

「いや……」

「えんりよしくなくてもいいですよ、三田さん。われわれの関係は、特別ですから」

にやにやしながら、大崎がいった。

特別すぎて、他人には話せない。

「もし、奥さんが、トイレに行くようなのだしたら……」

と三田は、もごもごといった。

「ああ」

大崎は、うなずいた。

「わかりました。いいですとも」

「なあに、あなた」

と、けげんそうな顔をして絵里子夫人がきいた。

「いや、三田さんがね、絵里子の便器になりたいのだって」

「いやだわ」

夫にいわれて、絵里子夫人は真赤になってうつむいた。

車の中では、寝室と違って、こんな会話でも刺激が強すぎるようであった。

「ホテルに着いたら、さしあげましょう」

まるでお茶かコーヒーでも飲むように、大崎はいった。

「それは有難い」

にこにこして三田は、いった。急に元気がでたようであった。

「あなたったら」

「いいじゃないか、絵里子。はじめてでもあるまいし」

「だって」

「三田さんは、絵里子が排泄したものを、たべたり飲んだりしているんだよ」

「知りません」

絵里子夫人が羞かしそうに顔をかくして、奇妙な約束は成立した。

「ホテルで、新婚旅行をまたするのですか」と三田が大崎にきいた。

「いや、ビジネスです」

「ビジネス」

「ええ」

すまして大崎は答えた。

「ちょっとした大きな取引があるので、妻に助けてもらおうと思って」

「ほほう、奥さんに」

「そのつもりで妻を飼育しましたからね」



意味深なことを大崎は、いった。

絵里子夫人の顔が、一瞬こわばったようであった。

ホテルに着くと、フロントから鍵を受け取り、大崎は、三田と絵里子夫人を連れて、エレベーターにのった。

「九階ですから」

自動で、エレベーターには三人しか乗っていない。

「奥さん」

と、やにわに三田が床に寝ころんだ。

「着くまで、ブーツの底で顔を踏んずけていて下さい」

返事をしないのに、三田の両手が、絵里子夫人のロングブーツをかかえていた。

「見つかるわ」

と心配そうに絵里子夫人が大崎を見た。

「大丈夫だよ。九階まで、ノンストップだから」

面白がって、大崎は妻にいった。

絵里子夫人は、ロングブーツの底で、三田の顔を、希望通りに、ぎゅっと踏んずけた。

「これでいいかしら」

三田の顔がひしゃげて、よだれがブーツについた。

「三田さんにとって、こんなこと、ちょっとした遊びだな」

妻のブーツの底を舐めている三田を見下ろして、大崎はいった。

「あなた、キスして」

顔を上気させて、絵里子夫人が夫にキスをねだった。

絵里子夫人は、完全に、三田の顔と胸に乗っかっていた。大崎は片足を三田の腹にのせ妻を抱くようにして接吻した。

絵里子夫人のロングブーツの先が、三田の口をこじあげ、厚い皮が、がつがつと三田の歯にあたる音がした。

ホテルの廊下に敷きつめられた、部厚いカーペットが三人の足音を消し、ダブル・ベッドが置いてある豪華な一室に、大崎は三田と妻を連れて入った。

ビジネスに、ダブル・ベッドの部屋とは、ちょっと、ひっかかった。ホテルのロビーで客に会うものとばかり、三田は思っていたのである。

部屋に入るなり、  
「パンタロンを脱いでごらん」

と大崎は絵里子夫人にいった。

「さつきの約束をごちそうしてあげなさい」

「でないわ」

と絵里子夫人が、いった。

「でなくても、ださせるから心配は、いらない」

三田は、まごまごしながら大崎夫婦の話を心配そうに、きいていた。

「三田さん」

と大崎がいった。

「妻のオシッコを飲んだら、もう一度、車を使わせて下さい」

「ええ、ええ、いいですとも」

と三田は、うなずいた。

見事な変身をとげた絵里子夫人から、小水を飲ませてもらえば、二人をホテルに送って来た甲斐があるというものである。

絵里子夫人がパンタロンをとった。

「あっ」

と三田が叫んだ。

パリのポアティ博物館にある、十五世紀の鉄製の貞操帯によく似た、シンプルで美しいアクセサリー・ベルトが、パンタロンを脱いだ絵里子夫人の華麗な腰に、ぴっちりとしめられていた。

金銀をちりばめた美しい貞操帯に、カギ穴がサディスティックであった。



「アヌス拡張器と、貞操帯をミックスしたもので、新しくつくったアクセサリベルトですよ」

満足そうに大崎はいった。華奢なからだつきだが、腰から太腿が意外にむっちり肉づいて、男を知ってふくよかになっていく新妻の過程を、端的に物語っていた。

「ソファァーに腰をかけて、よく見えるようにひろげてごらん」

と大崎は妻に命令した。太腿のつけ根まである、皮膚のようにうすいストッキングブルーツが、また、三田を異常に興奮させた。

## ☆奇クサロン☆原稿募集

一、大好評の「奇クサロン」の掲載に適した短文、写真、絵画を求めます。

一、内容は本誌の編集方針にふさわしいもので、寄稿家編集者執筆者に対する呼びかけ、読後感、感想、批評、映画鑑賞、短信往来、SM時評、図書雑誌紹介、見聞記、詩、歌、川柳、漫画、諷刺、などなど。

一、投稿には必ず「奇クサロン原稿」と明記して下さい。誌上の匿名は御自由ですからペンネーム（筆名）を添記して下さい。

一、採用の可否に拘らず応募下さった方全員に対して編集部作成のフォトを贈呈いたします。

絵里子夫人は、貞操帯をはめたまま、ストッキング・ブーツに包まれた両脚を上げた。

「このアクセサリベルトは、オシッコ用の穴だけは、あけてあります」

と大崎は三田に説明した。

「いいですか」

大崎はカテーテルを持ち出すと、三田を妻の両脚の間に正座させ、

「カテーテルから、こぼれるのを飲んで下さい」

と、貞操帯に手をかけた。

「ああっ」

す。贈呈フォトの枚数は作品の出来に従って増減いたします故御承知下さい。

一、誌上に掲載しました作品に對しましては枚数に應じて稿料又は謝礼を呈します。

一、奇クサロンに掲載可能な絵画、写真、映画スチール、イラスト、漫画などに對しましても応募者全員に編集部作成のフォトを贈呈いたします。優秀な作品は誌上に発表の上、画料をお支払い致します。

一、編集参考資料の提供に對しましては、出来るだけ高価に購入したいと思しますので、お手放し可能の方は内容の詳細に希望価格を附してお申込み下されば、折返しお返事差上げます。

と絵里子夫人が叫んだ。

「痛い」

絵里子夫人は、うなずいた。

「いいですよ、三田さん」

三田は、あわてて口を大きく開いた。

絵里子夫人がカテーテルを持ち、大崎が、

三田の口の中に、したたせした。

「でないなんて、よくでるじゃないか」

「ああっ」

と、また絵里子夫人が叫んだ。

絵里子夫人を部屋に残し、鍵を外からかけると、大崎は三田を促した。

「客を迎えに行ってください」

と近くの別のホテルに車をいそがせた。

ホテルの前に三田を待たせ大崎は直ぐ客を連れてもどってきた。日本人ではなかった。

中年の背の高い男だが、外国人であった。

その男を三田の車に乗せ、大崎は二つの鍵をだして男にわたした。

「これが部屋の鍵で、これがシークレットの鍵です」

男は満足そうに、うなずいた。

「妻が待っています」

と大崎は、しゃあしゃあとした顔付きで、

外国の男にいったのである。

（続く）





## S M に対する情念 小杉 千恵

私は最近になって初めて S M に興味を持ちはじめたわけではございません。短いながら S M 的体験を持ち合せている二十六才の女性です。でも、その耽美性は求めれば求めるほど深いものであることが、どうやら今日の頃になってわかってきたような心持でございます。

S M に対する見方や感じ方は、じかに自分の眼で見、心、肌で感じたりすることが最善の方法であることは当然です。生まれたままの姿にされて大の字に緊縛拘束の上、その両肢の間に迫ってくるガラス製のシリンドラーを意識するといったシーンは、しばしば形容される場面ですが、M 女と自覚していても、そうたやすく、受け入れることの可能な筈がありません。そこに至るまでに種々の事情や過程こそあれ、やはり受け手の女

性の承諾がなんらかの形で必要でしょう。S M を求めながら、なお躊躇している同性の多いことを想像して、勇気を出し戸を叩きなさいと申し上げたいと思います。

勿論、少しでも S M っ気のある女性にしか申しませんが、裸にされ縛られた際の一種不思議な情感は自分の女性であることへの意識と申しましょうか、痺れるようなめくるめく感情に恍惚とさせられるものです。それは人間が本能的に裸体美に対する讃仰と性的な欲求の入り混じった不思議な感情を保持しているからでしょう。

私をはじめ、或る男性に半分だまされ、半分承諾のような状態で S M プレイを施された時のあの感激は忘れられない想出でございます。パンティが体を離れる頃までは、まだ自分を意識しておりまして。でも、相手がうまかったと

云いましょうか、そのあとは、その男性のペースにのった形で、まるでフワフワと桃源境を羽化して飛ぶような心地でした。

「もともと全裸は極く自然の人間のフォルムで、裸体そのものはなんといいものでもない。今から演ずる S M こそ、未来の性意識を先どりした感覚と情感なのだ」と彼は申しました。それから快感は性に大なり小なり関係する想像力が何処からくるかと云えば、「……をしてはいけない」という禁圧、或いは私の心に定着してしまっただブーの意識からくるのであるから、それを演ずることによって、最大の快美感を生むものだよ、と申しました。

私は仰向けにされて、両肢は左右に開かして頭上に向かって丁度臀部が少し反転して明からさまな状態になるよう吊りあげられました。私の足首を縛った紐が白色だったことを、はつきりと覚えております。既に私は S M に関する本は耽読済みでしたが、鼻から何か得体の知れないキナ臭い匂いがつき抜けるようなへんな気持で、その羞恥を感じとったのでした。

私のあらわな羞恥の感情を彼は確認しながら、もぎたての白桃の

ような私の肌の滑めらかさをたしかめ、先ずはむんむんと発散する私の体臭を求めたのです。私はまるでほじくりつつ、柔肌にかくされた恥垢をあばき、嗅ぐが如き彼の振舞いに、もう自失寸前の羞恥にもだえました。

最後の施術はお小水でした。首にからませた縄の一端を両足首につなぎ止め、お尻だけで体を支える不安定な状態で、しかも胸を締めあげた縄がうしろ手をくくりあげ、もうどうしようもない無防備の姿勢で私は彼に、その行為を強要されました。

もしも私が彼の求めに応じないなら、彼は行為を強制するためそのひどい恰好のまま私に浣腸するとおどかしました。そして本当に、とっても大きなビニールの風呂敷をしいて私のお尻の下にもそれをひき込み洗面器に石鹼を溶かし始めました。

私はとうとう自分から死ぬほど恥かしいことをしてみせる約束をしてしまいました。彼がビールの大ジョッキを手に私の正面に坐った時、私は全身が痙攣するのを覚ええました。お恥かしいことですが生まれて初めての絶頂を味わいました。



## 愛妻こそ無二のプレイメイト

小田原 一郎



ての投稿だったのですが、正直いって、こんなに早く活字になろうとは思ってもいかなかったのです。

われながら稚拙だと思いがらの投稿でもあったし、ボツにはならなくても、手直しは必要だろうから、採用されるところたら相当に先のことだろうと思いきや、こんでいたのです。……編集部のご配慮に感謝すると共に、大いに気をよくして、投稿意欲がますます嵩じてきたという次第です。

去年の暮、新年もおし迫って忙しい所用に追われていて、とても書店などに立ち寄る状態ではなかったにもかかわらず、通りがかりにふと眼についた奇ク二月号。何気なく手にとってパラパラとやってみて、そこに拙稿が採り上げられていたのを発見したときにはほんとうに目を疑いました。

が、状況が状況だっただけに、呼び寄せられたようでは何か不思議な感じがして仕方ありませんでした。改めて見直してみたが、確かに私の投稿したものには違いありません。もちろん採用されることを目標にし



二月号の辻村氏の「カメラ・ハント」―山谷久美子の巻―を読んだ、まことに壮烈ともいふべきハントぶりにドギモを抜かれましたが、同好の一員として、このよう

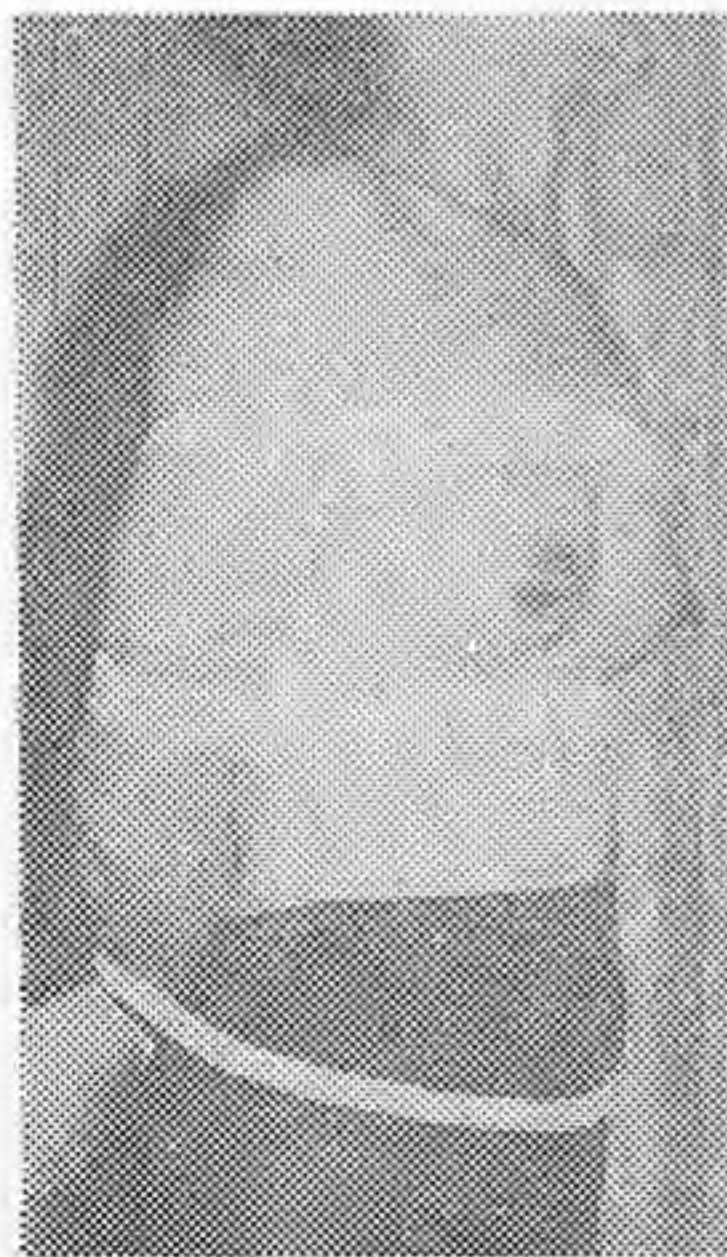


な強烈きわまるプレイを憶える気持ちもなくはないのですが、実際としては危険感のほうが先に立ち

ドクター氏のような、いざという時に頼れる協力者でもない限り、とても実行してみようというような勇氣はありません。

このハント記事に限らず、辻村塚本両氏の活躍に成る記事は、いつも楽しく読ませてもらい、啓発される点も多い

のに違いはないことは事実なのですが、帰するところ私のプレイ相手は妻以外には考えられず、他の女性とのプレイなどは夢物語で、望み得ら



一人として、ぜひ参加させてもらいたいと思っています。

同封の写真は、妻の妊娠時のものです。タイツ着用のは四カ月の始め、他は八カ月の終わり頃のものですが現在には出産も済み、育児の間をみてプレイを楽しむという生活です。出産後、ぐっと円みを増した妻の体は、弾力的な緊縛美を感じさせてくれます。

れまいと思うのです。それに引きかえ、福井、阪東両氏には、純然たるアマチュアとしての近親感を強く覚ええます。阪東氏提案の「夫婦プレイ特集」の如き企画があれば、妻相手のプレイ愛好者の





## —＜第八十四回＞—

辻 村 隆

三月は身辺に何かと変化の多い月であった。週刊サンケイの異能人間に、台湾のカメラ・ハントに姫路市への夫婦プレイの取材にとバタバタと駆け廻り、その間、ハントの記事や、DPEに時間を割いて、肝心の本職の方は半分、放ったらかしである。それでもよくしたもので、年間を通じて、三月が私の仕事の一番、暇な時であるから、世の中は都合よく出来ている。かてて加えて絹吹悠紀夫氏が早くから、私宅への来訪を希望されていたが諸種の事情で四月匆匆になった。毎月、私を分析して、好意以上に書いて戴く方だから、こちらにも精一杯の歓待をするつもりであるが、その反面、週刊サンケイに私の記事が出てから、どう伝手を辿って探るのか、突然、見知らぬ人の来訪や電話で驚かされ

ることが、しばしばである。

わが身の保全からか、自分の素姓をつまびらかにせず、いろいろと私から聞き出して、あわよくばSMカメラ・ハント女性の、氷山の一角の沈潜した部分の方を、しきりに懇望するのである。同好の方々なら博愛主義で交際したいが一方的に來られては甚だ困却するばかりで、そんな人に限って又、礼儀を知らない。私は或る程度の衣食は足っているから、今の処、物質には不自由しないが、始めての私を訪問するのに、手ぶらで来て、そのくせ、求める者は貪婪である。初の訪問には、やはりおのずから、そこに儀礼的にしろ、礼儀というものがあるのではなからうか。

映画館に於いて、一旦、作製されたフィルムは、それを百人観覧

しても、千人観覧しても、フィルムの賃貸の価格は変わらないにしても、ロハで何人に見せるといふわけのものではなく、電車は十人乗せて走っても、百人乗せても消耗電力は、さして変わらないが、しかしタダではのせてくれない。これが世の中である。その自明の理の分からぬ輩の来訪には、つくづく頭を悩ませている。

× × ×

三月中旬、台湾の台北市に飛び欲楽の二夜を過ごしたが、SMのカメラ・ハント可否については未知であったし、事実それは不毛の地でもあった。幸い窈窕の美女、惠栄（フィリピン）の献身的な協力で、兎も角もモノにして帰国したが、私には、も一つの大きい賭けがあったのである。訪台するにあたり、既に彼の地を訪れた人達や、博識の人から種々聞き習っていたが、異口同音に口にするのは、女性との交渉の危険さであった。新北投温泉の半ば公娼的な場所は勿論のこと、台北市内に数多、点在する酒家の小姐にしても、政府に鑑札の登録は、はなはだ高いということであった。

台北滞在中、殆ど行動を共にした、惠栄小姐も又、御多聞に洩れ

ず酒家の女性である。日本人は私が始めてだと言ひ、種々プライバシーな面迄、打ち明けてくれたがそれを全面的に信用するか否かは私の採量一つである。酔客に対する手練手管といえればそれまでだが私は甘ちゃんになって信用した。欲楽の夜のひととき、私はいよいよという時になって、かねて用意のゴム製品を装填しようとしたら

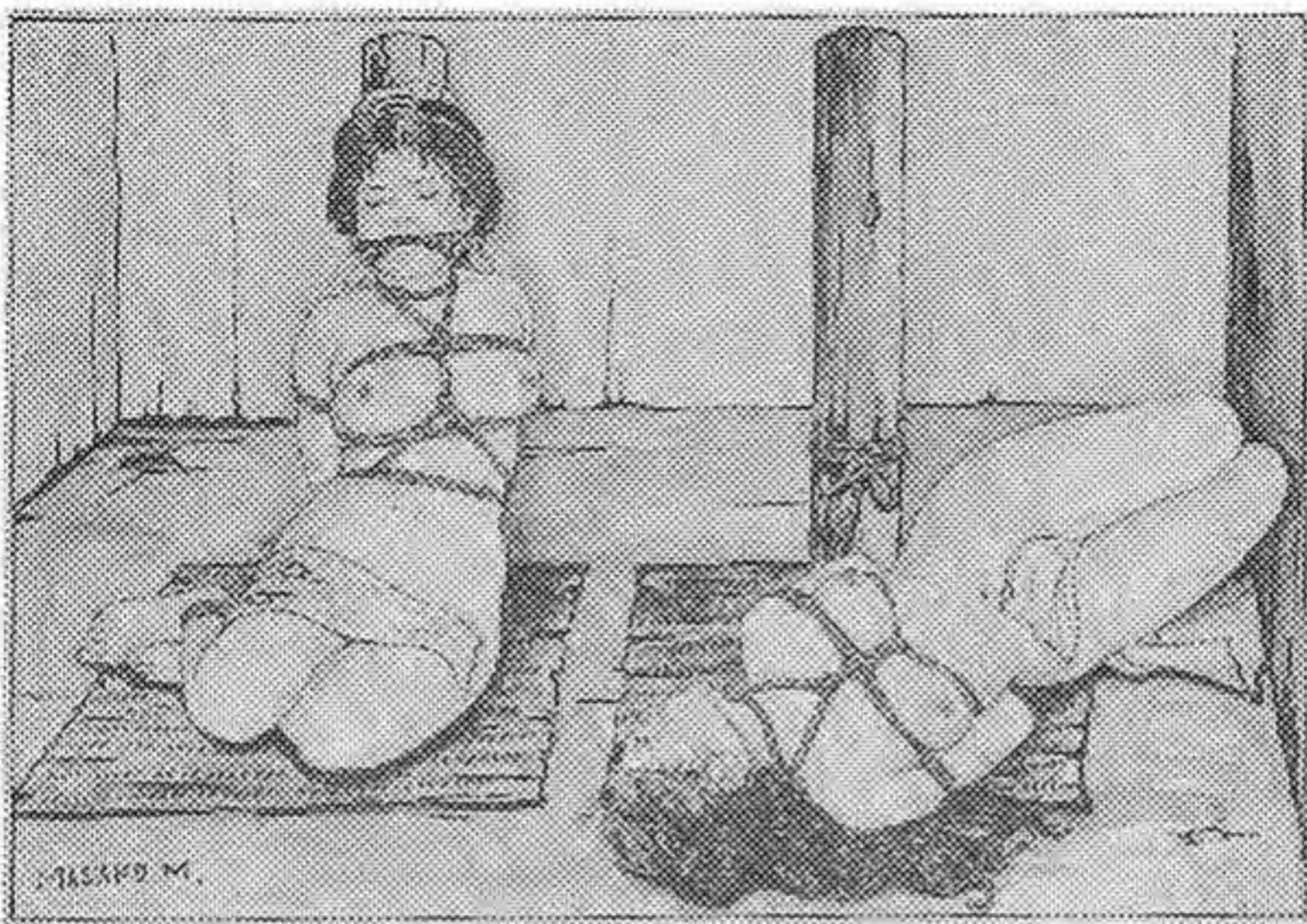
「這個不要、不好」と、それを拒み、必要ないという。咄嗟の判断で、さて如何にすべきかと迷ったが、ええい俤よ、それで若し罹ったら、同行のドクター氏もいることだし、直ちに治療するに如かずと、腹を据えて遂に使用せず、陶醉に陥っていったのである。

帰国して数日、正直いって内心は不安であった。惠栄の言葉に賭けたものの、やはり一抹の危惧は去らなかつた。

既に半月を経過した三月末日の今、私の肉体の一部に何ら異常は認めない。危惧は危惧に終わったことにホッとすると同時に、あの時、惠栄が強く言い切った言葉には、私に対する信頼があった事を今にして悟ったのであった。若し私が性病を保有していた場合、罹患するのは反対に、彼女の方であ



## 『招待客室』宮城昌子



る。その未知の私を信じ、判つき  
り不要といいい切った恵栄に、私は  
日と俱に愛情を覚えぬには、いら  
れなかった。散々頭を絞った、拙  
い中国語の一文と共に、彼女と撮  
った台北公園、孔子廟、ホテルの  
応接間などでの、思い出多きカラ

ーフォト六葉をエヤーメールに托  
し、乞信給我と追伸したが、数日  
後、それを受け取って、信頼に応  
えたそのフォトに、彼女はどの様  
な感慨をもって眺めるであろうか  
と、遥かに彼地に夢をはせて心を  
熱くする私は、やはり絹吹氏のい  
う通り、いつまで経っ  
ても根っからのロマン  
チストであるらしい。

× × ×  
「女体の苦悶を、追い  
求める『縛り』の完成  
者」と題して、異能人  
間シリーズに紹介され  
た戯作文を読んで思わ  
ず苦笑が走る。約束通  
り、住所、本職は伏せ  
てくれたがどうも田中  
陽造氏の愉しげな戯作  
文の方が本筋で、前後  
六、七時間に亘って喋  
った、SMの本質の方  
は、色が薄れている。

「緊縛に魅せられ、今  
は伊藤晴雨の後継者と  
称せられている」とサ  
ブタイトルがついてい  
るが、それがどうも面  
映ゆく、仲々もって晴  
雨氏の足許にも及ばな

いのにと、独りで恥かしがって  
る。況してや、江戸川乱歩、谷崎  
潤一郎の両巨匠お二人に対し、少  
女趣味という失礼なことを申し上  
げた覚えはないが、私が言ったの  
は、お二人は文芸派で想像上の産  
物は多かるうが、生の女性とのプ  
レイは、懼らくあまり御経験ない  
のではないかと、有りの俚、感じ  
たことは、口走っていた。それも  
或いは時代の流れで、今この両巨  
匠、若かりせば、実行派になられ  
ていたかも知れない。すべては泰  
平の世の有難さである。

異能人間として処女にのった私  
自身に関しては、深く追求するの  
を避けて、可もなく不可もなく結  
構であったが、同好者との電話や  
家内との話の隙間に、息子と娘が  
耳に入れていて私に内緒で週刊誌  
を買い求めオヤジである私の正体  
を判っきり知ったのは弱った。  
今年高校卒業の、潔癖多感な末娘  
どう出てくるかと内心ヒヤヒヤし  
ていたら、案外、泰然自若として  
「時々、知らない人が訪ねてくる  
と思ったら、これやったんやね。  
でもお父ちゃんのこと、余んまり  
自慢して、友達に週刊誌、見せら  
れへんわ。ウチはええけど……」  
と、のたもつた。既に薄々は知

っていたのであろうが、近頃の娘  
の割り切り振りには、内心ホッと  
すると共に少々怖くなってきた。

× × ×

二度ばかり本誌にレズ小説を発  
表した清原麻耶さんから、ヒョッ  
コリ電話がかかってきて、これも  
週刊誌で、私を思い出した口であ  
る。数年前に出会ったきり、その  
後、消息もなかったが、彼女は根  
っからの真性レスビアンであるだ  
けに、男の私には、SMカメラ・  
ハントを書く辻村という人間への  
興味以外には何ものもなく、以前  
別れる時、そのうち、レズのSM  
プレイの対象になる女性を連れて  
くるといって、その俚になっ  
たのであった。

訪れて来た目的が、SMスナッ  
クか、SMクラブを開業したいが  
力になってくれと、チャンと趣意  
書まで御持参で、土産も抜けめな  
く、四十八手を図案に散らした紙  
財布十個を手土産と云って差し出  
す抜け目なさである。いつか京都  
の魔子が私に洩らした計画と全く  
の同一に、思わず微笑が頬をよ  
ぎった。

SMクラブ賛助御芳名録には、  
私と出会うことを、あらかじめ予  
定していたのか、その筆頭に辻村



隆と書き、続いて団鬼六、箕田京二、石井輝男など羅列し、風奇、裏窓の編集人を始め、映画俳優、歌舞伎役者、落語家の氏名など、少なくとも、幾分はSM気ありと思われる知名人の氏名が、敬称略と書いて、ズラリ列記してある。

驚いて、この人達に皆、諒解を得たの？ と訊ねると、洒々として意見を聞いた上、私が諒承したら次々と訪問してお願ひするのだとあっさり言つてのけた。さてSMクラブの当のホステスの当てはあ

るのかと聞くと、私のハントした女性を紹介してもらうつもりだといわれ、二の句がつけなかった。しかし彼女は悪戯ではなく真剣に考えているらしく、東京には、家畜人やプーの館や、鬼六氏経営のSMスナックはあるが、関西には今の処、その様なクラブはないので、人がやらない前に、先鞭をつけて稼ぐのだと、イトも真面目であった。

前後二回、掲載された、自己のレズ小説だけを切り抜き、かなり手垢に汚れて草臥れた、ホッチキス止めの、その切り抜きを、さも後生大事に、持ち歩いているのであった。

会員制度で入会金が二十万円。

一カ月会費十万円。クラブ内の飲食は普通のクラブの価格に準じ月二乃至三回ショウを催すとある。

SMショウは、どの程度までやるのかと尋ねたら、彼女、堂々と胸を張って、勿論ズバリのスゴイのをやるつもりですと答えた。

露出でやったら、忽ち警察に目をつけられ、ワイセツ物陳列罪でシヨツ引かれるが、それを承知なのかと聞いたら、アラ、いけな

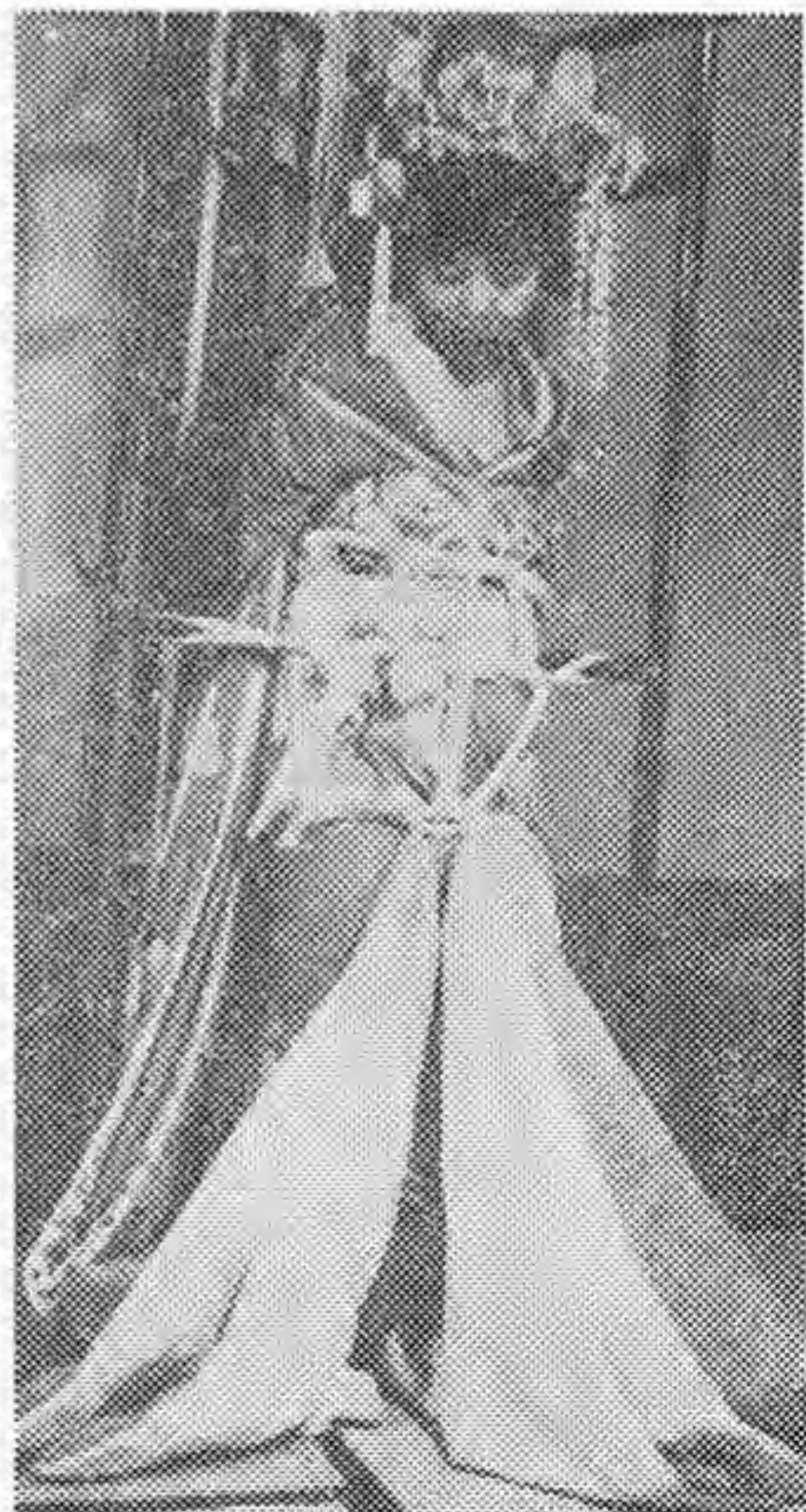
いんですか、でもヌード劇場じゃ堂々とお客さんの前で見せてるじゃありませんか」と意外といった顔付だった。日本でも既に許容済

とでも簡単に思っていたらしい。懇々と説明してやったら、やっと納得したらしかったが、何とも脳細胞が単純に思えるのである。

警察にゆくのはイヤだから、じゃあ露出しないうわというから、それで、入会金共で三十万円も出して、海のものとも、山のものとも分らない、無名のクラブへ同好

の客が集まると思ふかねといつてやったら、すっかり考え込んでしまった。どうやら彼女も又、SMブームに目をつけて、一旗あげたい組のようであった。計画が幼稚で、私達一連の名を借りて、他人の輝で角力をとるようなものだ

## 捕えられた花嫁の哀美——山本五郎



キめつけ、第一そんな危険なクラブの賛助はお断わりだ、万一の折参考人として呼ばれるのすら叶わ

んからね、と言いつけてやった。第一、諒解も求めず、賛助会員の

名を列記するなんて怪しからんじやないかと、熱をさましてやった

ら、来た時の勢いはどこへやら、折角ビルの一室まで借りる手配し

たんだけど、もう一度よく考え直しますわと、スゴスゴ帰っていった。ブームに乗って、一つの事業

を考へるには、余りにも幼稚すぎ

単純すぎて、話にもならない。調子のいい奴の口車にのって欺され

ないようにと、別れに言った私の言葉は、せめてもの彼女に対する思いやりであった。

薊魔子と謂いこの清原麻耶とい

い、S的女性の、手っ取り早く儲けたがる道は不思議に軌を一にしている。世のSにしる、Mにしる

男性たるもの、さてこそ斯様に甘くない事を、よく知悉すべきである。

真のSMプレイヤーは、むしろ

そうしたエセSMクラブへは却って出掛けない。若し行くとすれば

何も知らない興味本位の輩ばかりではなからうか——。



# 短 信 往 来

おめでとう

みさ子さん

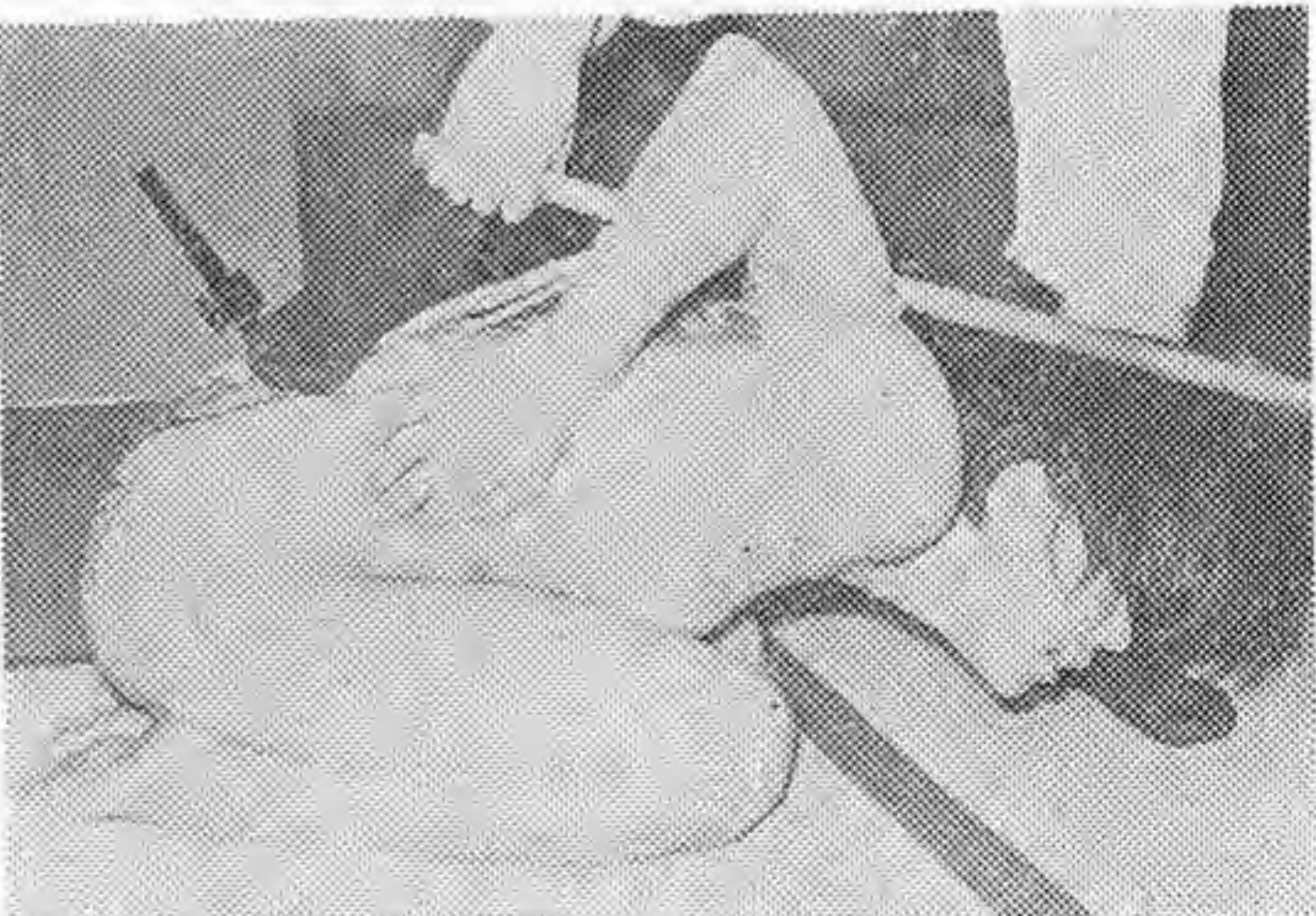
中 宮 栄

昨年十一月下旬、無事御出産のこと……同じ二世誕生を経験した者として心からお慶び申し上げます。私の方は分娩予定日が過ぎても、母の胎内の方が快適らしく一向に「今日は」をしてくれず、遂には惧れた帝王切開という手段での誕生になりました。医学的な原因は母胎の方にあったのですが陣痛と手術の痛みを一度に味あわ



された家内は、今のところ妊娠はもうふるふる御免蒙ると云っています。子供は一人で結構というのが私の自論でしたし、結果的に意見の一致を見たわけで、五体満足成長順調な吾が子を愛でつつ「お母ちゃんのお腹にキズつけやがって、コイツメ！」と思う反面感謝するという滑稽な気分です。私にとってもまさか妻が……という異常な事態で、精々産湯ぐらいから記録撮りしようと準備したカメラを、医院側の格別な好意で手術室に持ち込み、逐一手術経過を記録出来たことは実に貴重なシャッターチャンスに恵まれたわけです。さて、三月号誌上での貴女は出産後一ト月で再び恍惚を求めてプレイに興じられた由、横溢した願望に、いささか驚愕を覚えます。

とは云え実際は云うに云われぬ安堵を感じているのです。育児に忙殺され誌上から姿を消したままになるのではないかと思っていただけに、「健在」を知って快哉を叫びたい位です。貴女は読者からの声、反響を心待ちにしておられや期待外れのようにも思っておられるかもしれませんが貴女の奴隷願望宣言はセンサーションをまき起こしたに違いないのです。か



く申す私も昨年提言を投稿しましたが、まだ陽の目を見るに至らず妙なもので独り切歯扼腕しつつ今日に至りました。旧稿はお蔵入りではあっても、貴女が存在を注目しつつづけている者がいることは御記憶に留めておいて戴きたいと思えます。

今回も種々関心希求の事柄を列記しておられました。が単なる夢想に終わらず現実化を期待します。

赤ちゃんを姉上に預けても、という積極性は心情上、賞讃の立場をとります。貴女の行動によってもたらされる実感感想のつぶやきは様々な形で知識となり情報となって読者に活かされているものと思われれます。

子供が呼んでいる……と流れる乳を見ながら思っても、没我耽溺の欲求による自らの桎梏に喘ぐ被虐酔態は現在の貴女ならではの独壇場です。乳児を配しての構図では「当局の好ましからざる図書に於て云々」の忌避に拍車をかけることに益するだけかもしれないませんが、マニア垂涎の描写になることは間違いありません。（鎖に繋がれた女奴隷の授乳シーンなどを云うのであって乳児虐待まで含めてはいませんか、為念）ともかく「御出産おめでとう」と改めて申し上げます。

○  
写真はボディペインティングした女体緊縛を撮影する予定が塗料が間に合わずマジックインキのシニールな線描きだけにおわり、期待程に成果が挙げられなかった時の作品から一部抜萃したもの。



# 懐かしの一駒、早木夢二の菱縄フォト

奇クとの永いつき合いで、菱縄マニアの私にとって忘れられない二つのフォトがある。

四月号の「SM写真構成家としての辻村隆」を読んで、昭和二十八年七月号「緊縛女体の一表情―猿ぐつわ五態」の項に至って、なつかしい高瀬忍さんの菱縄フォトを思い出した。

同文によると、秀作の二枚目の写真として説明してある。私の記憶の中では、それが菱縄フォトであつたように思っていたが、これは、私の記憶違いかも知れない。猿ぐつわをはめられて、全裸の女体に本格的な菱縄を打ったそのフォトが、永い年月を隔てた今でもありありと私の頭の中に残っている。それとともに、絹吹さんのいうように、その後、フォトにはお目にかかれなくて「惜しい存在」

であつたと私も思っている彼女の何か愁わしげなフォトが、なつかしくなってくる。

高瀬さんは猿ぐつわの好きな女性だったそうだが「縛られた女ばかりの座談会」の中だったかに、「素っ裸でいるより、縄をかけられていると、何か纏っているという感じで好ましい」と言っていたのを讀んだ記憶がある。

私は慶子と縛りのプレイをしている時、その言葉を思い出しては糸纏わない慶子の全裸を縛っている後ろめたさを、つぐなっているような気になったものだ。

もう一枚の菱縄フォトは、それからしばらく後の伊吹真砂子さんの「縄の四十八手」である。緊縛者（辻村氏）の話によると「ちょっと、きばって……」というように自ら評していたが、前のみ

## 最近のニュースから

奈生介

◎入院の少女変死・精神病院

「縛られ・あばれ・窒息？」

【大阪】八日夜・大阪府富田林市伏見堂町九五・汐の宮精神病院の

泰忠世院長（36）から富田林署へ

「女子寮保護室で入院患者のT子さん（19）が変死した」と届け出があつた。



『調教師ご入来』志羽利也

後ろのみ、前後と、柱の菱縄姿を克明に見せてくれていた。

ちょうど私は、ある女と一緒に本屋に寄って奇クをめくると、直ぐそのフォトに目を奪われた。傍に立っている女に、そつと示すと女は嫌々ともいうように顔を赤くしてソツポを向いてしまった。その女を初めて菱縄縛りにした時、女はそのフォトを憶えていたと見えて、縛り終わって私に抱かれると、耳元で、そのことをささやいた。

その当時、この女が縛りに応じてくれるかどうか自信のなかった私たちの間にとって、それは一つ

の踏み切り台となつたのかもしれない。私には、そのフォトにならって、女にさまざまな縛りを行ない、切りとって保存していたフォトをとり出しては、見比べてみたりするのだった。

二枚の菱縄フォトとも、何度かの引越しの、どさくさに紛れて失ってしまった。失ってしまったけど、その二枚のフォトは、私の目の底に、まざまざと灼きつけられていて、私の菱縄人生の中で折にふれて、くっきりと浮かび上がっては私の菱縄への、やるせないノスタルジヤを慰めてくれる。





同署で調べたところ、T子さんは二月八日精神分裂症で入院したが、ベッドのシーツを破るなどしてあばれるので、三日前から保護室に入れられていた。ところが同室でもあばれるため、八日午後五時ごろ・同病院のS看護婦(20)が、T子さんにテント地の保護衣を着せ、両手を後ろ手に縛ってそのひもの先を鉄格子にくくりつけた。その後急に静かになったので同七時ごろ、S看護婦が見に行ったらところ、T子さんは前かがみになって死んでいた。T子さんは縛られたあとあばれたため、保護衣のえりで首を絞めつけて窒息死したらしい。同署は一応事故死と

幸福なる白馬を羨望する 佐野 寿

みて調べているが、患者の取り扱いに行き過ぎがあったかどうか、関係者から事情を聞いています。

右記は46年3月9日の時事通信発のマスメディア向けの原稿を、原文のまま書いてみたものであるが、どういう訳かこの事件は、ある一部の新聞を除いて、結局、マスコミに取りあげられなかったもようである。

精神病院という特殊な環境のもたらす看護婦と患者の関係は想像するべくもないが、いささか興味をそえられる事件ではあった。その後の経過については、私は知らない。

ショート・ショート 小倉 幸男  
スト・ペードの5

市内引きまわしのうえ、斬罪、

梟首梟胴という極刑を宣せられた雅美は、若さと美ぼうに自信があるだけに、一糸もまとわぬまま、堂々と胸をはって行進していたため、つい看板屋のバケツをけとばしてしまい、中身のコールタールがどつと流れ、両足首を汚したただけでなく、思わずついた両手首をも真黒に染めてしまった。

「あまりいばって歩くからだ」さすがの雅美も、これにはヘキエキ

「あの——このまま死ぬの？」これ位で同情するようでは刑事はつとまらない。

「そうだよ。往生際の悪い子だ」刑場には、二本の横木をX字に組み合わせた晒し台がおかれてあった。刑事は雅美の四肢をひろげて大の字に縛りつけ、首の下に台をおくや、首すじめがけて斧をハッシとふりおろす。ただ一撃で、

十九才の若い生命は簡単に消えてしまった。重刑の場合、首と胴を晒すことになっている。刑事は胴と別々に晒す生首を拾い、高々とさししめしてバイクの荷台にのせ

反対側にある獄門台へ運ぶ。

いっぽう胴体は晒し台に固定したまま逆さに立てかける。雪の如き肢体だけに、両手両足首が黒く染まっているのが強く目を射た。

翌日、雅美の晒し胴の傍に高札が立ち、それには誰のいたずらか「スピードの5」

と書かれてあった。

次に梟首梟胴刑に処せられた美女があったとき、念のいったことに彼女の両手両足にタールがぬられ、同様スピードの5とかかれてあった。これは非常なる喝采を博し、遂には「梟首梟胴刑」はあらかじめ手足を黒くぬることとなり「スピードの5刑」と呼ばれることとなった。

某日、この刑を宣告された美女は、とたんに顔蒼ざめ、火あぶりでもいいから晒し胴はやめてくれと願ったが、きき入れられるわけはなく、手足をぬられ首の座へ。処刑は簡単にすみ、胴体は晒し場に梟けられたが、黒山の見物人のなかから、こんな声がもれた。「なんだ。スピードの4じゃないかよう」



## スワッピングとSMプレイ

野村

忠

複婚論、ワイフスワッピング、トロイズム、スイング等々、妻以外の女性、夫以外の男性との関係が世にかまびすしい。唯、此処に私達の云うプレイなるものを含んだ関係が、余り見られないのが残念。単なる複数の男女の関係であれば、世に言う三角、四角関係で以前からあった事で、別に珍しい事でもあるまいが、米国の複数プレイの同好誌であるスイング誌等に書かれている経験者の告白には、むしろ、ノーマルな（此の言葉には少なからず抵抗を感じるのだが）セックスでないと、次からのパートナーを求めにくいとされている。

しかし私としては、世人が心秘

かに願望し乍らも、表面上はアブとして白眼視するSMプレイなしの複数プレイは、ワサビのない刺身のようなもので、是を別箇に切離して考えるという事は出来ないように思う。愛する妻や恋人が、唯単に自分以外の他の男性と交るだけならば、世間ざらにある浮気の一種に過ぎず、公認か非公認かの違いにしか過ぎないのではあるまいか。

愛妻を他の男性のSMプレイメイトに提供するのには、果してSだろうか、Mだろうか？

辻村氏が、Sを自認し乍らも、魔子の魅力に負けたのかM的プレイにハッスルし、心ならずもかどうかは知らないが、或る種の興味

を持たれた事は、二度にわたる魔子とのカメラハントからも窺われる。Sを自認する私の心奥にも、M的快感を欲する何かがあるのであるまいか。愛する妻が、他の男性のプレイメイトとして辱かしめられ虐められ、或いは犯される事をイメージに画き、又、目のあたりにする事により、秘やかな悦びを感じるのはM性の悦び以外の何者でもあるまい。

複数プレイは、こうして妻が責められて行く過程の中にM的悦びを味わい、更にその男性の妻を私が責める事により自らS的悦びを味わい、相手の男性と女性にM的悦びを与えるのではあるまいか。勿論、妻と他人とのプレイから得るものがM的悦びであると断じる訳ではない。それ等のプレイの中には、妻自身全く見も知らぬ男性に責められ、辱かしめられる苦痛と昇華された悦びを、強制的に味あわせる支配者としてのSは存在するであろう。

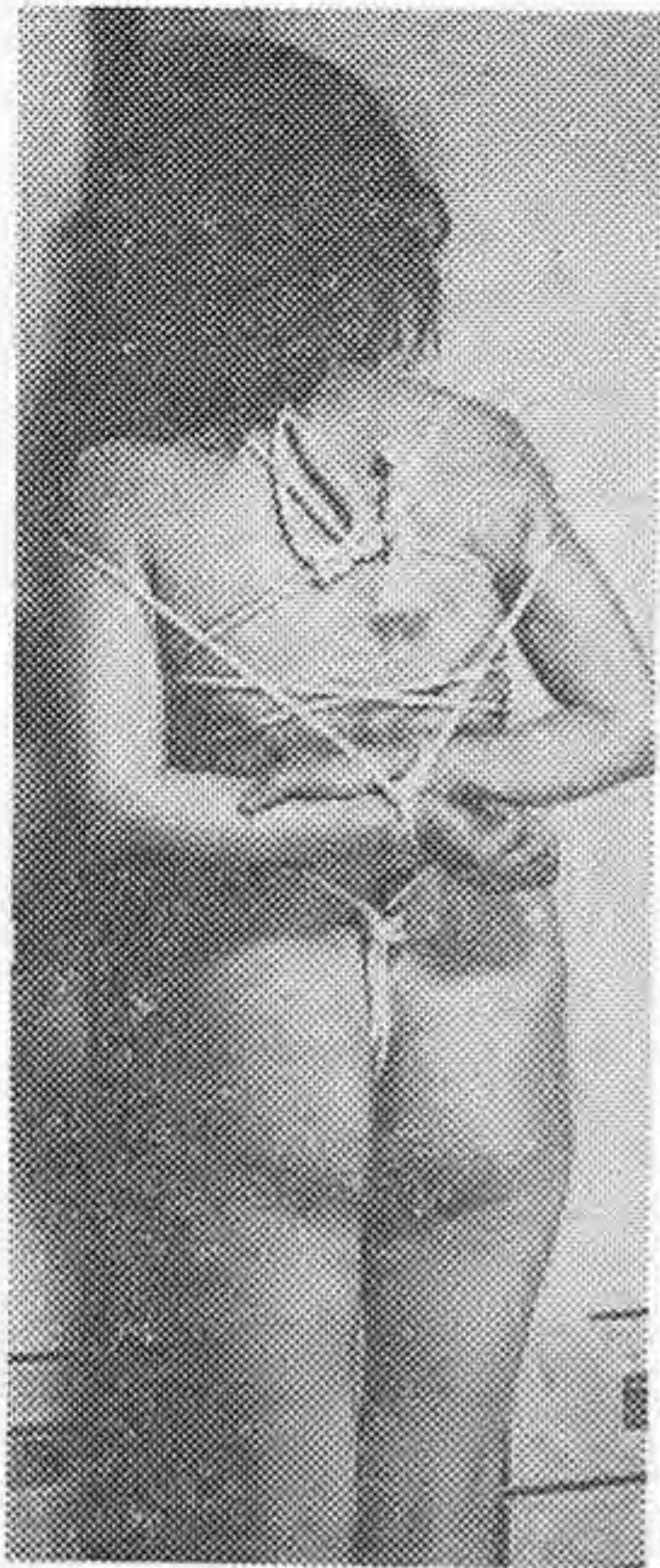
是が、私達同好者の複数プレイに見られる複雑な感情の起伏ではないだろうか。否、このプレイによつてのみ知る事の出来る桃源境ではあるまいか。嗚呼、しかし此の様な事は私にとって、飽くまで

## 編集部だより

○辻村隆氏の台湾ハント旅行にて取材した原稿を貰ったので六月号で印刷を予定していた原稿と急遽入れ替えをした。国際色豊かなカメラハント台湾紀行を十分お楽しみ頂きたい。尚、先月号と今月号に告白を寄せられた高村浩子さんも近々カメラハントに登場する予定である。

○高村浩子さんといえば、前田真知子さんは久々に東京より来阪され再び緊縛フォトのカラーとモノクロの撮影を実施した。告白文を依頼中なので何れ誌上に掲載されることになるだろう。全国からモデル志願者が次々と応募されるのは心強いかぎりである。プレイバシーは厳重に守ります故、遠近に拘らず御照会下されば折返し詳細お返事を差し上げる。

○結婚後半年にしてご主人を交通事故で亡くされた荒尾慶子さんといわれる未亡人からモデル志望の便りを貰った。今年二十三才という美貌で能筆達文の持主。体験文を頼んでいるので、誌上で皆様の前に姿を現わされることだろう。





も憧憬的色彩の濃い幻想的産物にしか過ぎない。今迄も何度か、誌上で呼びかけ合い求め合い乍ら何の結果も得る事なく、魔子云うところの精神的オナニーを繰り返しているに過ぎない。

○ 奇クは原則として紹介や郵便物の転送等を行っていないとの事です。一般刊行誌としての生命を保つ上で、権力に弱味を握られない為にも已むを得ない事だとは思

自 慰 夢 想 椿

雄二郎

四月号を読んで

△花転々△の時代背景は、私は終戦後の生まれでわかりませんが、敗戦後の混乱で食べていけない女性の悲劇を、SMにたくして書かれたのでしょうか？興味深く読みました。

△狂気と天才△で、素裸にすることしか考えられないのでは、只の凡人、色キチガイでしかない。逆に着せることを考えるのが、奇くらしい考え方であろうと書かれ、それを具体的に示されていますが私は、やはり全裸の方がよい。これは、その人、その人の、感じ方受け取り方です。又、縛るにして

いますが、奇クなればこそと信じて投稿する読者も多いでしょうし何とかならないものかと、もどかしくも悲しく思います。

一つ提案があります。読者通信の頁をさいて戴き、心から感謝している者ですが、文筆の才に恵まれない者が或る程度の文章を綴るという事は、有能な人からは想像もつかぬ難事業なのです。故にその半頁程を、単なる呼びかけ合い又は特定のパートナーへの連絡の

も、ロープと決めることではないと書かれています。これには私も賛成です。そうです、自由を奪いさえすればいいのです。これは私が同月号で書いたことと矛盾しているようですが、静子の場合も自由Mになってしまったので、自由な手足のまま演技させたほうが、羞恥も増すし、精神的に自由を奪うということなのです。

△SMカメラハント△の薊魔子さん、すばらしい女性です。でも、全編を魔子さんが男をいじめるスタイルにしてほしかったです。辻村さんが、おいやなら、他のM男

コーナーとして設けて戴く訳にはいかないでしょうか。これだけなら一人五行もあれば済むし、多数が利用出来、又、頭を抱えて悪文をひねり出さずとも済むと思います。編集子の御賢察を乞います。最後にになりましたが、北九州市の今田雄三氏、呼びかけ有難う御座居ます。何とか文通だけでもしたいものです。貴方の素晴らしきパートナーである美しき夫人に宜しくお伝え下さい。

性をS女性がはじめ、それを辻村さんが撮影したものを登場させて下さい。

△辻村隆研究△はよく調べて書いてあります。しかも、それが正確な評価です。この熱心さには感心します。

△花と蛇△に、ついに京子登場ですね。大西弘明氏が、団先生がいかに受取られるかは想像の域を出ないが、このような読者の姦しい声が、SM大河文学を形成しつつあると信じたいたと私は思う、と書かれています。私もこれと同意見です。これからも、よい意見だと思われることは、どしどし採用して下さい。

自分の思いつくままに……。

○夫婦プレイの文章や写真が引続いて送稿されてくるのには読者の皆様と共に大いに喜びたい。既に誌上に発表された方は勿論のこと新しい方々もどしどし御投稿下されば幸いである。尚、写真の撮影或はハントを御希望される方は編集部宛御照会いただきたい。

○投稿はすべてペンネーム(筆名或いは匿名)で結構、ご自分にて手紙に筆名が見つからないときは編集部にて適当に作成する故その旨添記下さればよいし、住所本名を明らかにされることを好まれない方は無記名にても差支えない。

○本誌の読後感、アイデア、或は△奇クサロン△向原稿の投稿者には引続いて採否に拘らず緊縛フォトの贈呈を行なっているので巧拙長短に拘らず送稿をお待ちする。

○臨時増刊号△写真集△第二集の企画は新しい緊縛美人の写真撮影を行なうと着々と準備を進めているので何れ詳細決定すれば誌上にて広告したいと思っている。

○先月号より本文の紙質を一割分と厚いものにした。従って一冊分とすれば従来より若干厚くなったし写真の裏うつりもなくなり印刷効果も格段により読み易くなったものと自負している。



## 千代奥様への手紙

北川まりこ

夫婦プレイでは、いつも「花と蛇」の静子の役を演じております。まりこも、まだ一度も同性の方に虐められたことがございません。静子のように千代様をはじめ、葉子様、和枝様の前に一糸纏わぬ女体のすべてを曝して、あくどい羞恥責めをお受けする場面を想像しては、一人で胸を躍らせております。今日は、静子になりましたこの私から千代様にお手紙を差し上げたいと存じます。

『千代奥様』。女奴隷の静子から直接お手紙を差上げる無様をお許し下さいませ。悦子様から紙と筆をお借りして、地下牢の暗い電灯の下で認めましたこの手紙、さぞかしお読みづらいことと存じます。

貴方様をはじめ、川田様、鬼源様達の御熱心な調教により静子はすっかりマゾ女に生れ変わる事ができました。今では遠山家のことが遠い遠い夢のような気が致しますし、あの頃の豪華な生活よりも、森田組のお座敷ショーの実演スターとして、衆人環視の中で生れたままの丸裸を曝しての数々の珍芸や、捨太郎様との実演を御披

露する現在の生活の方が幸せに存じております。いいえ嘘は申しません。本当に心の底から幸せに思っております。自分自身でも気が付かずにおりましたのですが、もともと静子の体の中にはマゾ女の血が流れておりましたのです。その素質を引出して、マゾの世界に目覚めさせて頂き、静子は貴方様に心から感謝しております。

今の静子は、財産も家柄も教養もありません。マゾ女の私には、文字通り素裸の性の奴隷としての生活が一番似合っております。千代奥様、静子は遠山夫人の座を失い莫大な財産や宝石をとり上げられましたことについて、何一つお恨み申し上げません。最低のパン助よりも劣る今の生活、犬猫にも劣る浅ましい数々の羞恥責め、これが森田組の性の奴隷静子に一番ふさわしいのです。

以前は昔の身分にこだわり、貴方様に虐めて頂くことに反抗したり致しまして、本当に申し訳なく存じております。それに、女奴隷の分際で、自由が欲しいとか、身を隠す一片の布切れも欲しいとか、

## 深夜の奴隷犬

犬畜生



隣家から微かにポピュラー音楽が流れてくるのは深夜放送でしょうか？ それを聞いている隣人はこうして首輪、手足錠、鼻、腰鎖の全裸で、掃除を命じられていた奴隷犬の私のことを想像出来るでしょうか？ しかし、現実はこの

奴隷犬は、自ら人間の資格を放棄して、ひたすら御主人の命に従って奉仕し、御褒美の神酒と鞭に甘美な期待を寄せて胸ふるわせながら、深夜の冷たい床板に這いつくばって、この上ない幸福感に酔い痴れているのです。

## 五月号読後感想

乃美対造

五月号益々好調感激。「パノラマ島秘譚」美香のオシッコを主題とする一行為だけでも、ねちねちと六頁余に亘って、羞恥責めに表現するねばっことは往年の「花と蛇」の静子夫人排尿シーンを彷彿とさせ耽美につきる。そしてまた

「花と蛇」の方も、京子ファンが随喜の涙を流すに違いない貫録充分。憎い程の甘く繊細な表現が、私をいつもながら魅了しつくす。辻村隆研究の絹吹氏の讚美そのままに、辻村氏の爛熟期を象徴するが如きカメラ・ハント・富田



身の程をわきまえないことを口走り、本当に申し訳ございません。心から後悔しております。

ただ静子にとって心残りのことは、気の狂いました元の主人遠山のことでございます。どうか千代奥様、遠山のことは呉々もよろしくお願い申し上げます。そのことだけを貴方様にお願ひすれば、私は捨太郎様の妻江川静子に生れ変わり、夫と名コンビを組んで数々の浅ましい写真や映画フィルムを撮って頂き、また貴方様がすでに計画中の黒人の方とも、またシンガポール仕込みとかの牡犬とも気を合わせて、お座敷ショーに出演をさせて頂き、御恩になりました森

田組の資金獲得に協力させて頂きます。

それに、いつかの岩崎の親分のときのように、森田組の大切なお客様の接待にも、是非、この静子の体を使わせて下さいませ。いろいろの芸を覚えさせて頂き、今ではどんなパン助も顔負けするサービスができます。

千代奥様、どうか静子を女奴隷としていつまでもこのお邸に囲って下さいませ。どうか静子をいつも丸裸にして、殿方の笑い物にして下さいませ。どうか静子が死にたくなる程の羞かしい責め、淫らな責めをお考え下さいませ。  
千代奥様へ しず子



『空気を裂く唸り』川口たえこ

由美子編。特に縛られたままの全裸の身を妊婦特有の激しい尿意に迫られて、洋式便器にお尻を載せようとした瞬間、きらめく閃光とシャッター音に獲えられ、演技にあらざる羞恥の表情を撮影されたあどけなきニンフの美しさは、絶句もの。

夫婦SMプレイフォトは常にマニヤの注目事。本号も伊達一也氏の美しい若妻雪江が万丈の気を吐いて、純粋な人妻の羞恥美を飾ってくれたが、サロン欄で国川栄一氏が語った通り、まことに夫婦プレイに不思議と便器が現われぬのは淋しき限り。

志羽利也氏のイメージ画「川路叢子恥態の図」はモデルを模してのアイデアを高く評価したい。次は金原奈加子か渡部好美かと欲望を憶ゆ。写真に表現できないたわごとを耽美絵にて表現して欲しいと願って止まぬ。透明コップに溜まった奈加子のももの。挿入便器に横たわる好美の羞恥と屈辱の結果も、絵ならば美しく描ける筈。かくなる夢を追うのは私だけか？

懸賞入選作品「変身」内海実氏のマニヤならではの筆運び、単なる賞金目当の作詩作曲にあらざる甘美の旋律に我が琴線はかきたて

られ、美しき姉妹の遊戯に我を忘れて感嘆しつつ、私の書き送った数多き懸賞応募作がオクラ入りしたのも当然と、うれしいような、悲しいような複雑な気持。「花と蛇」の京子対美津子の実姉妹ショーに対して、近親相姦だのグロだのと騒いだ御人も多かったが、やはり「変身」を読み、ぜひ実現させたく思う。

最後に想うは読者通信欄の女性達。人間お手洗を利用したいとの曾根初美、Mを求めて悶え続ける小杉千恵、可愛い女の子を、夫婦で責めたいと云う文子、鞭打たれ浣腸を求めて信頼できる人を求める折原千鶴子。夢なき現世の御仏か、無為に流棄され給う甘露の滴もったいなさ。一滴も余さず拝受したてまつり、唇にて清拭するものをと夢をみる。本欄にて聞きしに及ぶ、数組の男女が知遇を得て結ばれたとか。特におしめ愛好の一女性、二度三度と機遇をえて云々と、つい最近の辻村回顧録で読み知り、もしやと、はかなき夢を託すのみ。

この善良な一市民に、SMの御仏が、いつかは御恵みの水滴を垂れ給うと信じつつ、今日もまた五月号を再読している次第。



わ が 毒 舌 山 川 清

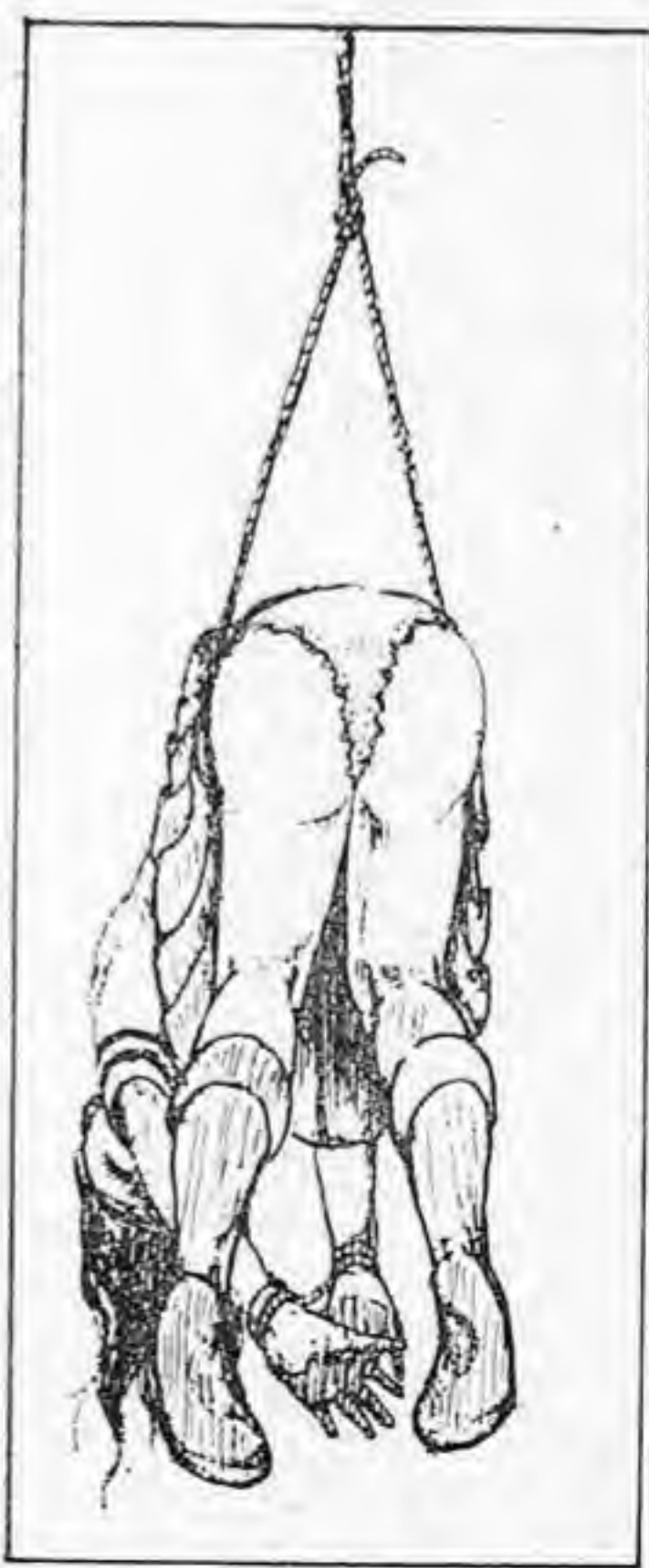
# SMはイメージの世界

三月号のセト・ヨシヤ氏のご意見、非常に興味深く読ませていただきました。半ば反語的感意での『SMマニヤこそ最高の不具者』という言葉、自然に笑いが湧き起こって来ました。ぼくは約半世紀年下のはずですが、氏の文意に全く同感です。ヒトラーになる度胸のない人間が（それは同時にサドを真に理解しえないことでもありましょうが）自分こそSMに対してハイブローな認識を有する異端的存在である、などと大きな口を利かない方がいいでしょう。

ぼくは学生時代から、奇クをはじめとする種々のSM雑誌を断片的、断続的に読んで来ました。しかしSMに関する好奇心のレベルは依然として、SFやミステリーに對するそれと同程度です。SMはあくまでもイメージの世界の幻想の美であって、現実の世界では後に空しい倦怠感が残るだけでしょう。初めて異性を縛る時に感じた胸の高鳴りも、自分の眼前に横たわる相手を冷静な視線で観察した時、どうしようもない自己嫌悪に転じました。イメージの世界では完全な美の具象であつたはずの女体が、現実の世界では醜惡な物体としか見えません。SM小説の中に登場するような深窓の令嬢が現実の世界においても、刑法に触れることなく、ぼくの好奇心を満足させる状況になるならば問題はありませんが、それは空しい願望にすぎないでしょう。現代において、（あるいは古今東西においても）縛られ、ムチ打たれ、忘我の状態においてさえ、品の良さを失わぬ女性はいないと思います。

SMにおいて、征服される人間（ぼくの場合は女性）は、あくまでも終始人間であらねばならず、夫婦フォトとかに登場する倦怠期のお二人の『SMプレイ』とかには、何の関心も持ちえません。また、日頃は上品な女の子が歓喜の内に見せる表情も、ノーマルなセックスにおいては楽しいことですが、SMのイメージには合いません。SMとは征服者と抵抗者とのランションが生み出す金属的な白色の輝きですから。

だから奇クで言われているようなSMプレイに對する願望は、ぼくの場合ほとんどありません。しかし、ぼくはSMファンです。それも相当重症の。ぼくは仲間達とSMについて語ります。時には女の子とも。ちょうどヴェトナムを語り、未来を語り、ジャズを語ると同様に。SMを愛の一形態として、未だ人類が到達していない段階における、一個の愛の変形として。（但しSMを語り合う女の子とも、行き着く先は通常ノーマルなものです）



『ブランコって楽しいでしょう?』 緑 JOE

「紳士たちのための人間浄瑠璃」の類のごく少数で、いわゆるSM小説の類は酒を飲んだ夜にSFと一緒に読む暇つぶしの材料です。そして告白等々はマンガの代用品です。（マンガより奇クの方が安上がりです）

そこでインテリSMファンの方々にお願いします。マンガの代用品は豊富にあります。活字に焦点を合せねばならないような論文の類はめったにありません。暇でかつ自分こそ真のSMistだと自負なさっておられる方、どなたかSMプレイ願望と関係なく、純然なるSMの心理的社会的歴史的考察の論文を発表していただけないでしょうか。ぜひ読んでみたいものです。



## 交換SMプレイ初歩者の願い

兵庫 H・H

長年の愛読者ですが、投稿するのは初めてです。最近の夫婦プレイに関する数多くの記事に、同好者の一人として参加させて頂きたくなり、思いきってこのフォトをお送りする次第です。

私は、もちろんずっと以前よりSMプレイについて強い興味を持っておったのですが、妻は、まだ

若いこともあってか、いくら水を向けてもあまり乗気にはなれないようであったのです。

しかし、最近になって、ようやく少し興味がわいてきたらしく、カメラ・ハントなどを読み出していたのですが、急に、一度経験してみたくなったといい出しましたので、早速プレイを始めたようなわけです。

しかし、いくら以前からSMプレイに憧れていたからといって、実際には女性を縛ったことのない私ですから、なかなか思うようにはゆかず、縛り方にしても、責めかたにしても、ただ形だけの真似事に過ぎません。

それでも、ローソク責めぐらいはやれるようになっていきます。初めは妻もだいぶ苦しそうでしたが、二度三度とやっていく内に少し

お互いに慣れてきて、今では何とかうまくゆくようになってきているのです。もちろん、妻もそれほど嫌がらないところを見ると、M的なところがあるのでしょう。とにかく楽しくSMプレイが出来るようになっていく私達夫婦です。

それに、私達は、最近とくにやかましく云われ始めた夫婦の交換プレイを実行致しました。

相手は知り合いのご夫婦だったのですが、このご夫婦がまた、私達と余り交わらぬ初歩的な方ですので、どうもうまくゆかず、どう見

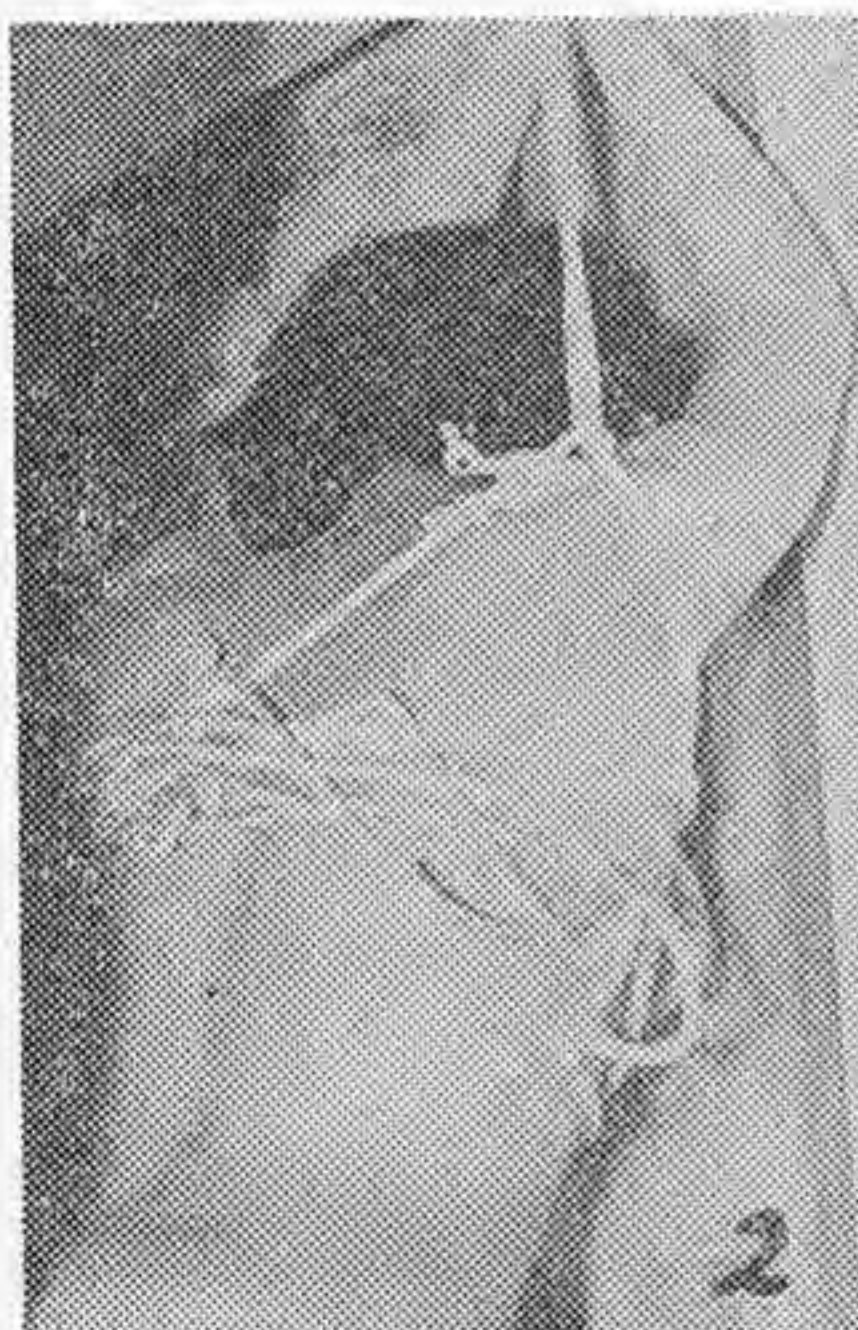
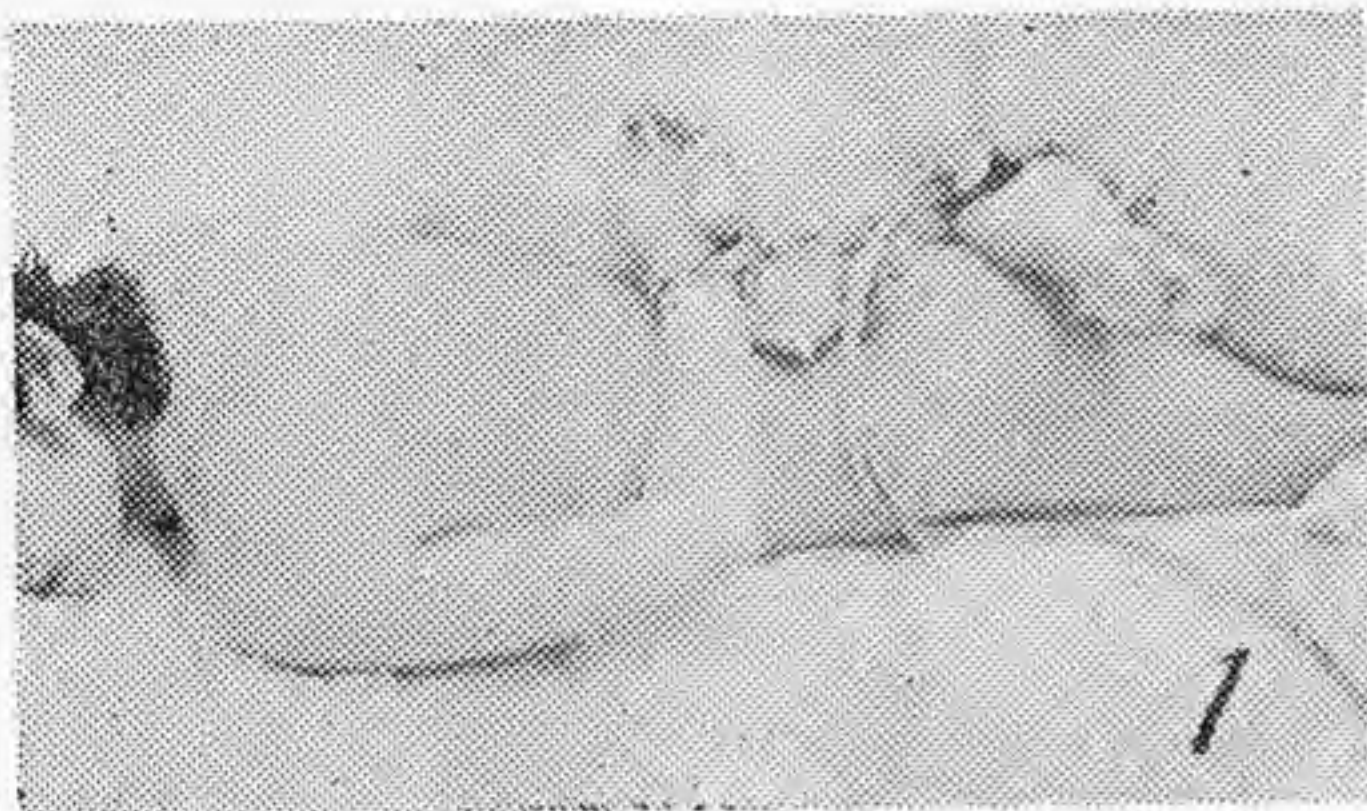


てもとうてい見事だとはいえそうもない、ヘンな縛りかたばかりになってしまいましたが、考えかたによって両方が同程度の初心者だから、これからは楽しみだといえないこともないので、その時の写真が同封のものです。

(1)と(2)が私の妻で、(3)が先方の奥様なのですが、こうして写真で見るとどちらもよく似た体付きで、実際に向かい合った感じとは違うように思えるのが不思議なほどです。

しかし、私には大変楽しい交換プレイでしたし、妻も、先方のご夫婦も、再会を約束したぐらいです。それからまんざらでもなかったことと思っています。ご主人とは、お互いに縛り方などの研究をし合おうと話合ったことでした。

そんなわけで、北九州地方の今田雄三様、野村忠、麻子様、ご夫妻などのご指導が頂けたら、などと考えていますが、いかがでしょうか。





## SMいろは唄ごよみ

峰 真琴

い||牝犬にされ、夫を背にのせ  
よつん這い。ろ||ローソクの、炎に双臀  
汗をかき。は||ハイド氏も、裸足で逃げる  
マゾヒスト。に||新妻を、しばる夫の  
手がふるえ。ほ||豊満な、乳房とアヌス  
同時責め。へ||下手な縄、掛けてよろこぶ  
初しぼり。と||とこぼしら、背負いて裸女は  
立ち縛り。ち||遅刻して、スパンキングの  
仕おきされ。り||臨月の、腹いたわりつつ  
縄を掛け。ぬ||脱がされた、パンティ啜え  
ひとまわり。る||ルリ子より、マリより好きな  
佐野みさ子。を||老いてなお、SMプレイ  
数知れず。わ||若はだは、縄目のあとも  
すぐに消え。か||可愛いと、剃毛のあとを  
ほめそやす。よ||夜になり、奴隷タイムの  
幕が開き。た||縦縄を、しごかれ落とす  
ひとしずく。れ||連縛の、むら子と好美  
にらみ合い。そ||ソロバンも、責めの道具に  
早がわり。つ||つねられて、肌に咲いたる  
あかい花。ね||ネチネチと、責めに責めぬく  
花と蛇。な||仲間たち、読者サロンに  
全員集合。ら||ラブプレイ、いつかSM  
はいり込み。む||ムチの雨、受けて富佐子は  
むせび泣き。う||裏まちを、人目のんで  
引きまわし。の||のぞまれる、妻は妻でも  
奴隷妻。お||おさげ髪、たづな代わりの  
馬にされ。く||首なわを、ひかれて座敷を  
這いまわり。や||柔はだを、裂かれて木馬の  
背をぬらし。

『わが妻ゆう子』新田英雄

ま||マニアには、夢の恋人  
静子夫人。け||けんたいき、夫婦プレイの  
あじけなさ。ふ||舞台には、ローズ秋山  
いのち賭け。こ||こんなにも、愛しているよと  
神酒受け。え||エビになり、イノシシになり  
イヌになり。て||適当に、ごまかす責めに  
妻は拗ね。あ||足吊りで、ひそかに咲いた  
可憐花。さ||逆さ吊り、アニマル久美子  
狂い咲き。

き||奇クサロン、夫婦プレイの

花ざかり。

ゆ||ゆるし乞う、声もはかなし  
さるぐつわ。み||ミミズばれ、さらして食事  
作りたる。し||しりを立て、浣腸を待つ  
ドレイ妻。ひ||ひたむきな、安井喜久子は  
今いずこ。も||もうヨシと、云われてトイレ  
に走りこみ。せ||全身を、さらして受ける  
身体検査。す||すすり泣く、尻に名残りの  
ムチの痕。(作中で、お名前を無断借用致し  
ました方々に、お詫びします)





奇ク四月号で、久しぶりに牧高志先生の『晴着奇譚・乱調の美』に接し、なんだか時代劇映画でも見る想いで楽しく、昔の女優さんが縛られた場面が懐かしく思い出され、数年前の時代劇映画はなやかなりし頃、夢中になって見て廻ったことが想い浮かびました。私は昔の髪形や衣裳がとても好

きで、特にそんな美女が縛られた姿には、最高のよろこびを感じたものですが、それが病みつきになって、何によらず日本調一辺倒というのが現状です。しかし、近頃のものはやたらにアチラ風が採り入れられて日本調がぐっと少なくなつたようで残念です。つい何年か以前までは、新東宝辺りで、よく時代調の女優さんを縛って見せてくれたものですが……。

去年、東映で「伊藤晴雨一代記」の映画化が決定したとか聞きましたし奇クでも読んだ覚えがあるのですが、以後一向に封切り広告などにお目にかかりませんが、どうなつたのでしょうか。期待し

## よみがえれ

### SM時代劇映画

末 広 平 三



ていた私の首は伸びっぱなしで終わるのでしょ

うか。以前、奇クに載っていた鳴山能平氏の「時代劇映画に見る猿ぐつわのシチュエーション」は今でも思い出す

ほど楽しいものでしたが、山本五郎氏の発表される日本調盛装縛り写真も素晴らしいものです。山本氏に私が同好者として認めてもらえたことは嬉しいと思います。私は私なりに「縛り日本調」のブックを作成しておりますが、もちろん山本氏の花嫁縛りの写真も大切に帖らせてもらっています。

山本氏を始め同好者の皆さんに

私の8ミリ映画を見て頂きたいと思えますし、予算の関係で思うようには行きませんが、今、マネキン人形に七変化（姫、奥女中、武家娘、下町娘、芸妓、花嫁、おいらん）させて写真を撮りたいと考えています。ビデオテープが一般化すれば、人形も動くように撮れるのではないかと思ったりして、いろいろ計画はあるのです。





最新撮影総天然色  
カラー・プリント写真

両手吊りに悶える女

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
大塚 啓子 略号八てき

後手裸身柱縛り

大手札四枚一組 略号一二〇〇円  
大塚 啓子 略号八てか

縄目にあえぐ裸女

大手札四枚一組 略号一二〇〇円  
大塚 啓子 略号八てく

豊麗な裸身をくびる縄目

大手札四枚一組 略号一二〇〇円  
大塚 啓子 略号八てこ

後手高手小手縛り

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
大塚 啓子 略号八てま

長襦袢の緊縛色模様

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
東浦 ひとる 略号八てみ

緋の腰巻緊縛色模様

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
東浦 ひとる 略号八てむ

猿ぐつわに呻く女

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
東浦 ひとる 略号八てめ

柱宙吊り強烈縛り

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
東浦 ひとる 略号八ても

ポリウムを縛りあげる

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
東浦 ひとる 略号八てん

縄に苦悶する裸女を狙う

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
東浦 ひとる 略号八てる

真紅の腰巻着崩し姿態

大手札二枚一組 略号八〇〇円  
大塚 啓子 略号八うお

縄に悶える緊縛色模様

大手札二枚一組 略号八〇〇円  
東浦・大塚 略号八うて

真紅の腰巻着崩し縛り

大手札四枚一組 略号一二〇〇円  
大塚 啓子 略号八うこ

華麗なる緊縛裸身

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
一宮百合子 略号八るむ

みだらな開股縛り

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
一宮百合子 略号八るの

責めに疲れた諦観

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
一宮百合子 略号八るお

真紅の腰巻姿で緊縛

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
一宮百合子 略号八るま

羞らひの真正面縛り

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
一宮百合子 略号八るけ

若肌に喰い込む縄目

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
一宮百合子 略号八るふ

高手小手後手縛り

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
一宮百合子 略号八るや

股間縛りの開股姿態

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
中河 恵子 略号八れよ

羞らひの股間縛り

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
中河 恵子 略号八れに

双胎臨月蛙腹鮮烈写真

大手札六枚一組 略号二〇〇〇円  
増田みゆき 略号八れや

双胎臨月腹強烈縛り

大手札六枚一組 略号二〇〇〇円  
増田みゆき 略号八れゆ

臨月腹裸身の媚態

大手札六枚一組 略号二〇〇〇円  
増田みゆき 略号八れえ

黒縄縦縛りの媚態

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
中河 恵子 略号八れぬ

立縛りにあうの裸女

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
木村 洋子 略号八れね

開股された股間縛り

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
木村 洋子 略号八れの

豆絞りの猿ぐつわ縛り

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
木村 洋子 略号八れむ

柱宙縛りに喘ぐ刺青女

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
山原 清子 略号八やか

高手小手に悶える全裸

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
山原 清子 略号八やき

緊縛に映える入墨の肌

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
山原 清子 略号八やく

脱がされた緊縛刺青女体

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
山原 清子 略号八やも

縄にのたうつ入墨裸身

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
山原 清子 略号八やし

腰巻一つで縛られる刺青女

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
山原 清子 略号八やみ

女相撲迫力投業連続動作

大手札十二枚一組 略号五〇〇〇円  
大塚・東浦 略号八なる

恵子の妊孕美観賞

大手札四枚一組 略号一二〇〇円  
中河 恵子 略号八ぬめ

孕み若妻の羞らひ

大手札四枚一組 略号一二〇〇円  
中河 恵子 略号八ぬね

八の字の開股責め

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
愛知 葉子 略号八しい

足枷強制開股責め

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
愛知 葉子 略号八しみ

全裸強烈逆エビ責め

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
愛知 葉子 略号八しけ

両手吊り足枷責め

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
愛知 葉子 略号八しこ

両腕逆手吊り責め

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
愛知 葉子 略号八しら

豊満なる臀部責め

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
愛知 葉子 略号八しれ

大の字縛りと足挙げ責め

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
愛知 葉子 略号八しわお申込みは大阪阿倍野局私書箱  
第14号天星社宛へ願います。



「最新版」 美貌女体緊縛写真コレクト集

X組百態 大手札型印画紙 (9×13 ㎝) 極鮮明焼付

各組 一組一枚 (送料共)

四組四枚 五〇〇円  
十組十枚 一〇〇〇円  
二十組二十枚 一八〇〇円  
五十組五十枚 四〇〇〇円  
百組百枚 七〇〇〇円

郵便番号 545-91

最近撮影の新しいモデルの緊縛写真の中で一粒選りの美しいものばかりを集めました。各組一枚です。お好きなものをお求め下さい。御注文の際の御指定はX組の何番とお書き願います。

☆

1 正面強烈亀甲縛 (大島 照代)  
2 美貌は鞭に泣く (関谷富佐子)  
3 襲う影に慄く (佐々木真弓)  
4 弾む裸身に縄目 (佐々木真弓)  
5 柱縛りで鞭打ち (関谷富佐子)  
6 縛られて困るわ (金原奈加子)  
7 私を襲わないで (左近麻里子)  
8 縛られて嬉しい (中河 恵子)  
9 麗わしの縛女体 (中河 恵子)  
10 蒲団の上に狂う (関谷富佐子)  
11 豊満女体の縄目 (大島 照代)

12 二つ折りの裸身 (川越美佐子)  
13 痛打に哭く美貌 (関谷富佐子)  
14 長身の脚を伸す (佐々木真弓)  
15 若肌は縄に美し (長井葉津子)  
16 恥らいの女体美 (中河 恵子)  
17 何故私を縛るの (金原奈加子)  
18 感泣する胸縛り (ローズ秋山)  
19 猿ぐつわの悦虐 (関谷富佐子)  
20 荷造り縛りの女 (中河 恵子)  
21 足指はく字に (佐々木真弓)  
22 麻縄の柔肌責め (金原奈加子)  
23 美しき亀甲縛り (左近麻里子)  
24 柱縛りの隙間見 (長井葉津子)  
25 緊縛全裸の極美 (左近麻里子)  
26 海老責めの苦悶 (佐々木真弓)  
27 全裸の縄は輝く (佐々木真弓)  
28 猿轡と縄に泣く (川越美佐子)  
29 縄に喘いだ童顔 (長井葉津子)  
30 出臍を晒す縛り (佐々木真弓)  
31 後手吊りの全裸 (長井葉津子)  
32 首膝縄にあえぐ (長井葉津子)  
33 大の字で晒す裸 (関谷富佐子)  
34 全裸緊縛の哀愁 (佐々木真弓)  
35 高手小手の全裸 (佐々木真弓)  
36 真迫の縛プレイ (ローズ秋山)  
37 豊満な裸身縛り (左近麻里子)

38 竹棒責めに悩む (大島 照代)  
39 亀甲縛りで寝る (左近麻里子)  
40 縄目に喘ぐ表情 (中河 恵子)  
41 開股縛りの正面 (中河 恵子)  
42 猿轡に喘ぐ緊縛 (左近麻里子)  
43 縛りの肌を見て (金原奈加子)  
44 私は縛りが好き (金原奈加子)  
45 強烈縛りを味う (金原奈加子)  
46 麗身を横たえて (左近麻里子)  
47 二つ折に弾む胸 (佐々木真弓)  
48 柔肌に縄は厳し (長井葉津子)  
49 柔肌に痛む麻縄 (左近麻里子)  
50 全裸の女体引廻 (中河 恵子)  
51 開股縛りを諦観 (左近麻里子)  
52 突き出した尻 (中河 恵子)  
53 あどけなき緊縛 (金原奈加子)  
54 首縄股間縛の女 (長井葉津子)  
55 強烈後手で括る (佐々木真弓)  
56 恥しい縛り初め (金原奈加子)  
57 海老縛りで悶ゆ (関谷富佐子)  
58 翻られる緊縛女 (長井葉津子)  
59 豆絞りの猿轡で (金原奈加子)  
60 もう虐めないで (金原奈加子)  
61 畳に転す股間縛 (金原奈加子)  
62 女体は縄に映ゆ (左近麻里子)  
63 全裸の縛を見て (長井葉津子)  
64 答は柔肌を乱打 (関谷富佐子)  
65 臀部に答は炸裂 (関谷富佐子)  
66 この裸身を捧ぐ (佐々木真弓)  
67 諦観の縛り表情 (長井葉津子)  
68 足吊りで晒す肌 (長井葉津子)

69 美体は縄に映る (中河 恵子)  
70 逞ましき臀部晒 (左近麻里子)  
71 両手吊りに喘ぐ (長井葉津子)  
72 左近麻里子の裸 (左近麻里子)  
73 開股縛りの羞恥 (中河 恵子)  
74 捧げられる女体 (中河 恵子)  
75 鉄砲責めの女体 (左近麻里子)  
76 麗わしの肌を縄 (佐々木真弓)  
77 後手縛りの連続 (ローズ秋山)  
78 開股の股間縛り (大島 照代)  
79 強烈な縄目の女 (川越美佐子)  
80 逆エビ責め地獄 (ローズ秋山)  
81 豊麗な裸身の美 (関谷富佐子)  
82 羞らいの流し目 (佐々木真弓)  
83 肌を喰い込む縄 (長井葉津子)  
84 胴締縛りと猿轡 (長井葉津子)  
85 投げ出された裸 (金原奈加子)  
86 正面の亀甲縛り (左近麻里子)  
87 開股縛りの女体 (左近麻里子)  
88 後手縛りの全裸 (中河 恵子)  
89 柱に晒す強烈縛 (長井葉津子)  
90 羞恥の脚挙げ姿 (佐々木真弓)  
91 豊かな乳房誇示 (佐々木真弓)  
92 美しい女の縛り (佐々木真弓)  
93 股間縛りに羞う (長井葉津子)  
94 ホステスの緊縛 (佐々木真弓)  
95 椅子坐開股縛り (中河 恵子)  
96 無防備な両手吊 (関谷富佐子)  
97 息づまる猿轡 (川越美佐子)  
98 人身御供の乙女 (長井葉津子)  
99 両手吊で晒す肌 (金原奈加子)  
100 爪先立つ強烈縛 (ローズ秋山)



〔優秀緊縛写真特選集〕

〔光沢印画紙極鮮明焼付〕

緊縛女体撮影風景

大手札四枚一組 略号 (むら) 五〇〇円

足挙げ開股責め

大手札三枚一組 略号 (あけ) 四〇〇円

猪 吊り三態

梨花悠紀子 略号 (いの) 四〇〇円

責め衣縛り

大手札三枚一組 略号 (せめ) 四〇〇円

強 烈エビ責め

大手札三枚一組 略号 (ねむ) 四〇〇円

後 手首の高縛り

玉田美佐子 略号 (ねへ) 四〇〇円

椅子またぎの責め

大手札三枚一組 略号 (ねと) 四〇〇円

全 裸脚挙げ縛り

大手札三枚一組 略号 (てい) 四〇〇円

全 裸アグラ縛り

長野 良子 略号 (てへ) 四〇〇円

全 裸屈伸縛り

大手札三枚一組 略号 (てほ) 四〇〇円

強 烈エビ責め

松本アサ子 略号 (まと) 四〇〇円

吊り打ち

大手札三枚一組 略号 (やり) 四〇〇円

股間縛り法悦境

大手札三枚一組 略号 (ぬこ) 四〇〇円

踊り子緊縛

大手札三枚一組 略号 (りこ) 四〇〇円

月経帯のまま縛り

遠藤百合子 略号 (ゆす) 四〇〇円

縄目に悶える夫人

髪を引き回される夫人

膨満正面縛り

長野 良子 略号 (へな) 四〇〇円

マニヤ全裸緊縛フォト

栗本ミチ子 略号 (いな) 四〇〇円

強 烈エビ縛り

乳 房責めの苦悶

全 裸ムチ打ち

強 打に泣く裸身

関谷富佐子 略号 (もち) 五〇〇円

関谷富佐子 略号 (もち) 五〇〇円

関谷富佐子 略号 (もち) 五〇〇円

関谷富佐子 略号 (もち) 五〇〇円

関谷富佐子 略号 (もち) 五〇〇円

関谷富佐子 略号 (もち) 五〇〇円

裸身の晒し

全 裸股間縛

双胸の強調縛り

動感海老責地獄

色 禪の開股縛り

鼻 責めのアップ

鼻 責めと緊縛

乳 房しばり

鼻 責めと緊縛

木 馬責三態

椅子責めの果て

檻に入れた女

浴室の全裸刺青

鼻 いじめ三態

鼻 責め万華鏡

碧 玉裸身緊縛

くすくす責め地獄

灼熱の蠟涙責め

豊満な乳房を責める

女 奴隷を飼育する

凌辱されるマソ女

鼻 責め悦楽

全 裸強烈羞恥縛り

猿ぐつわにあえぐ裸女

遠藤百合子 略号 (ゆり) 五〇〇円



## M資料分譲品一覧

## ○新人S女性出現○

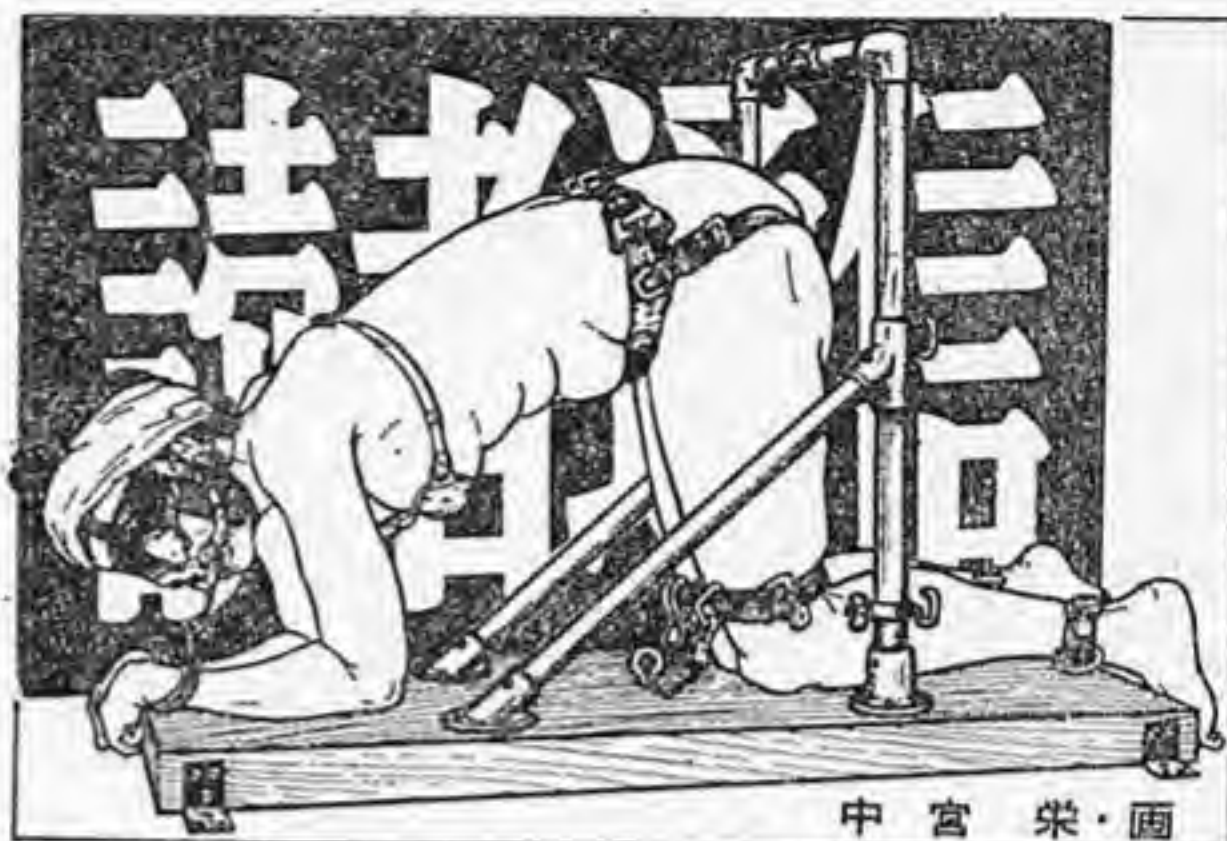
- 遅ましき股に挟まる  
大手札四枚一組 略号(あとお) 一〇〇〇円
- 素足の脂がべっとり  
大手札五枚一組 略号(あて) 一〇〇〇円
- 縛った男をムチで料理  
大手札十枚一組 略号(あさ) 二〇〇〇円
- 女王様の人間便器になる  
大手札十枚一組 略号(あす) 二〇〇〇円
- 蟻涙の雨を全身に浴びる  
大手札四枚一組 略号(あせ) 一〇〇〇円
- 尻の下につぶされた男  
大手札二枚一組 略号(あた) 六〇〇円
- エビ責めに弄ぶ女  
大手札六枚一組 略号(あそ) 一四〇〇円
- 神酒を与える女神  
大手札六枚一組 略号(あち) 一四〇〇円
- 咽喉輪を股責極楽  
大手札四枚一組 略号(あつ) 一〇〇〇円
- 素足の足舐と嗅香  
大手札五枚一組 略号(あこ) 一〇〇〇円
- M男性を尻に敷く

- 大手札六枚一組 略号(まく) 一〇〇〇円
- 人間犬の芸仕込み  
大手札十枚一組 略号(あえ) 二〇〇〇円
- 女の尻に顔がつぶれる  
大手札三枚一組 略号(あく) 八〇〇円
- 足指に挟んだ菓子  
大手札二枚一組 略号(あの) 六〇〇円
- 男を縛って弄ぶ女  
大手札十枚一組 略号(あに) 二〇〇〇円
- 尻責めと股責め  
大手札十枚一組 略号(あぬ) 二〇〇〇円
- 大男の訓練風景  
大手札十枚一組 略号(みら) 二〇〇〇円
- 男を刺し殺す美女  
大手札十枚一組 略号(みむ) 二〇〇〇円
- 男を尻の下に敷く  
大手札十枚一組 略号(みう) 二〇〇〇円
- 女の足下にうごめく顔  
大手札六枚一組 略号(みれ) 一四〇〇円
- 汚物を戴く男  
大手札六枚一組 略号(みわ) 一四〇〇円
- 男を馬にする美女  
大手札五枚一組 略号(みか) 一〇〇〇円

- 人間椅子の御褒美  
大手札五枚一組 略号(みお) 一〇〇〇円
- 飼犬に餌を与える  
大手札四枚一組 略号(みた) 一〇〇〇円
- 浣腸器で男を弄ぶ女  
大手札三枚一組 略号(みつ) 八〇〇円
- 股で絞められる首  
大手札三枚一組 略号(みね) 八〇〇円
- 芳香を嗅がす尻  
大手札二枚一組 略号(みな) 六〇〇円
- 人間馬の調教ブレイ  
大手札三枚一組 略号(まの) 八〇〇円
- 足舐めの奉仕と強制  
大手札三枚一組 略号(まわ) 八〇〇円
- 股責めにあう男の顔  
大手札三枚一組 略号(また) 八〇〇円
- 女に縛られて弄られる  
大手札三枚一組 略号(まひ) 八〇〇円
- 踏みにじられる顔面  
大手札三枚一組 略号(まな) 八〇〇円
- 肩車に奉仕する青年  
大手札三枚一組 略号(まは) 八〇〇円

- 男を縛って玩具にする  
大手札三枚一組 略号(まて) 八〇〇円
- 首を太股で絞めあげる  
大手札三枚一組 略号(まや) 八〇〇円
- 灰皿にされた男  
大手札四枚一組 略号(そほ) 一〇〇〇円
- 裸女の長靴に悶ゆ  
大手札四枚一組 略号(そに) 一〇〇〇円
- 美女に飼われる犬の生態  
大手札三枚一組 略号(そろ) 八〇〇円
- 美女の手で縛られる過程  
大手札四枚一組 略号(そと) 一〇〇〇円
- 女御主人に使役される男  
大手札四枚一組 略号(そち) 一〇〇〇円
- 美女のおいしい足を戴く  
大手札四枚一組 略号(そぬ) 一〇〇〇円
- むしゃぶりつく素足の味  
大手札三枚一組 略号(そは) 八〇〇円
- 凌辱と美女のなぶり者  
大手札五枚一組 略号(そり) 一〇〇〇円
- 素足を舐める構図  
大手札四枚一組 略号(そへ) 一〇〇〇円





中宮・画

高によいと、お思いになりませんか。ぜひ通信欄でお返事下さい。

(京都市・S見習生)

四月号で「奴隷牝への憧れ」の手記を寄せられた佐野みさ子様。私は貴女の文章を拝見し、大変興味を抱きました。御主人の留守に生後間もない子供を姉さんに預けSMプレイに浸る貴女の心境に、私は何かしら心に感じるものがありました。貴女のプレイ・フォトを拝見している中に、現在まで十年間、使いなれた十五種類に及ぶプレイ用具をフルに使って、貴女が心から満足するようなプレイをしたいと願っております。

(名古屋・松永好夫)

残酷なグロの映画などを見ますと気分があまりよくないのですがなぜかSMには引きつけられるのです。まだ経験は一度もないのですが、ぜひMの女性と会ってみたいのです。深田菊子さん、あなたよりは、少し若いのですが、ぜひ一度会ってプレイをしませんか。又、よく誌上で名前を見るので他人とは思えない小杉千恵さんにも会って責めてみたいです。年下の者に責められる羞恥責めなど、最

私は十年ほど前、二、三冊の奇クを読んだことがあるが、内容が余りにも専門的で、ついて行くことができなかった。しかし三年ほど前、再び読んだとき、何の抵抗もなく理解でき、今では毎月の発売日が待ち遠しく感じるほどになった。さて今回、発売された写真集は全篇全く迫力があり、まさにSM芸術美の最高峰を行き、見る者をして感嘆させないでおかなかった。なぜこのように私を魅了す

るのだろうか。緊縛の大先生、辻村師範、塚本練士が自ら緊縛されモデルの被虐性、羞恥感、そして陶酔へと追いやられる牝犬の豹変を魅力的に記録され、巧みな文章で書き綴られている為、我々ファンはモデルのM性を熟知し、感興が一段と強くなっているところが他誌と違うところではないだろうか。写真集を、カメラ・ハント、カメラ・ルポと一緒に見ると、まさに分厚いビブテキに、ごつてりと味つけをして食べたような満腹感を得て、白日夢の如しで、この写真集は常日頃の奇ク読者へのサービスといえよう。

(東京・九条夏春)

私は奇クを知って以来、四年ほどになりますが、今まで空想によってSMプレイを楽しんでおりました。しかし最近では空想だけでは物足りなくなり、同好の女性の方々と、ぜひプレイをやってみたくてペンをとりました。勿論、プレイというよりもSMごっこといった方がいかもしれません。私は二十四才の男性で、M女性に対する羞恥プレイを好みます。しかし余り強い責めは好みません。奇クを読んでもおりますと色々な羞恥

プレイを見る事ができます。その中でもSMごっこの的なものに魅力を感じております。自分達でストリーを考えてプレイをやってみるのも楽しいものだと思います。また見せたい、見られたいという露出欲に悩んでおられる女性の方々と友達になれたらと思います。理解ある女性の方々のお便りをお待ちしております。

(大阪・時山 忠)

初めてお便りを出します。毎回読者の方の経験談を読者通信、サロンなどで拝見させていただいていますが、私も一度プレイしてみたいと思います。私は二十四才で、体格は良い方です。どなたか私と同じように、プレイの経験のない方、お便り下さい。室井繁二様、まだ写真については余り経験はないようですね。私は写真については或る程度、自信を持っています。貴方は二日ばかりで撮影したそうですが、さぞ大変だったと思います。そのフィルムは、どうやって現像されたのでしょうか。御自分でなされたのですか。よろしかったら今後は私が御引き受けしてもよいと思っておりますが如何でしょうか。



(東京・高田 初)

○ 今、先日入手いたしました臨時増刊の写真集を見ながら書いています。私が奇クを知ってから久しくなりますが、グラビヤ頁がなくなつてからは、とても淋しく思ひ他の社から出されている装丁の立派なものも何冊か求めました。それらと奇ク増刊号を比較するわけではありませんが、奇クは表紙より内容に力を注がれていることだけは、はっきり言えます。最近号は夫婦プレイやM女性の勇敢な呼びかけが多いですが、写真集にも人妻スター関谷富佐子さんを始め金原奈加子さん、川路叢子さん、渡部好美さん、三浦純子さんらの皆さんが登場して、鮮明な美体を見せて下さっていて、非常に嬉しく思いました。カラーの前田真知子さんは、可愛らしい現代っ子で

# 〓御送金についてのお願ひ〓

現金を普通郵便物に封入することは、郵便法によって禁止されています。現金での御送金の場合は必ず「現金書留」でお願い致します。他に、振替等の方法もありますので、ご利用下さい。尚、便宜上「切手代用」にてお願い致しますが、必ず「割増」にてお願い致します。

すばらしいし、中河恵子さんの強烈なプレイ・フォトのすばらしさは……などと書いていたら、キリがない。私には、すべての写真が気に入ったのですから……。辻村隆氏のカメラ・ハント楽我記は、初めて知るような裏話で、奇クをより身近かに感じました。特にSMのプロみたいだに思っていた辻村氏が、一奇クファンであったに過ぎないということなど、一層の親しみを感じたものです。観る方としては、発表されたフォトの白線がどうの、ライティングがこうのと、気楽に言えるが、モデル探しや飼育の苦労話を読むと、改めて大変だなあ、と思います。この文中で、古くからの読者である私などには懐かしい川端、杉、伊吹、村田、坂口などというモデルさんの名が出てきて、以前からグラビヤだけのスクラップをしていたがら引越しの折に処分してしまつたことを、今更のように残念に思わされました。昔の人の写真集も欲しいものです。次回の折にはカメラ・ハント特集や、夫婦プレイ特集というような企画をお願いできたらと思います。もちろん、その時々のお話やら、モデルや御夫婦の打ち明け話などが一緒なら

とても、すばらしいでしょう。今度の写真集が、とても気に入って欲が出たのですが、写真集そのものは当然ながら、普通号のカメラハントだけでも増刊号なみの良質紙を使って貰えないでしょうか。辻村氏の苦勞なされたハント写真も、増刊号ぐらいの鮮明さがあれば、いちだんと、はえると思えます。すばらしい写真集を作つて下さった辻村氏、塚本氏、編集部に感謝するとともに、今後も更に続刊されることを期待します。

(群馬県・仏山逸富)

○ SM界に真の浣腸作家があられないのでしょうか。団鬼六、辻村隆氏等、数人のSM作家はおられるが、浣腸専門の作家ではありません。浣腸マニアでなければ表わせないことが多々あることと思います。今、浣腸はSMブームの中の最大の隠れたブームでありますので、ぜひ浣腸専門の作家が現われるよう祈っています。五月号の「粘膜被虐症の女」を書かれた長谷良子さん。今より、もっともつと強烈なアヌス責めを御希望のようですが、私のアヌス責めは日本一強烈と自負しております。一例をあげますと、私の使う浣腸器は

二百CCの特大で、これを口の部分だけ差し込むのではなく、三分の二ぐらいを差し込みます。そうすると腸の奥まで浣腸液が行き届き、本当に腸をしぼるような便意に襲われます。しかも使う浣腸液はグリセリンとドナンの原液を混ぜ、それに食用酢と塩を混ぜると注入の途中から即効のため便意がきて注入が終わった頃はもはや今にも便がとび出そうな感じですが、そこで、すばやく貴女がいておられるような栓をするのです。腸内はグリセリンとドナン、酢、塩の混ざった効果で、どんでん返りの油汗がジットリとにじみ出て、失心しそうになります。その上に、腹を揉むか、尻を揉みつけると、苦しさは一段と増し、如何にアヌス責めになれた気の強い人でも、ヒーヒーと悲鳴をあげます。貴女は、この強烈なアヌス責めを受けますか。極意を極めようとしてくれる私に挑戦して下さい。最高の喜びを与えて差し上げます。

(東京・浣腸キチ)

○ ぼくは、都会の立ち並ぶビルの間、板垣いの中の土木建築工事場で肉体労働に従事しているヤクザっぽいリーゼント刈りの独身青



年です。作業服の下にはブリーフパンツなどはかずに、サラシの六尺フンドシだけを尻に喰い込むほどキリキリと締めています。こうして、重そうな木材、土砂などをモッコで運びながら、高い足場の上へのぼって歩くと、何とも言えない緊張した、いい気分になります。昨年の夏は、六尺フンドシ一本のハダカでよく働き、全身を真黒に焼いて、フンドシのあとだけが白く、くっきり残りました。こんな汗のおう、土くさいフンドシ男だなんて、若い女性たちに嫌われると思います。しかしぼくは、今のカッコいいフンドシ一本の姿を、将来の思い出に写真にとっておきたいと思っています。どなたか、ぼくの願いをかなえてやろうという方がおられましたら、ぜひ、お願いします。

○ (東京・小島弘治)

ぼくは、姉があわてて上がっていったお風呂に入った。姉はデーの時間が気になっていたのか、脱いだばかりの白いパンティを、隅の洗濯機の上に丸めて置いていた。お風呂場は、化粧品の匂いと姉の体臭がムンムンと漂っているように思った。気がついたら、ぼ

くの手は自然にパンティに伸びてそれを払っていた。白い布切れは一番ぼくの注意をひく個所に、かすかに黄色いシミがついていた。ぼくは無我夢中で、やわらかい姉のパンティに顔を埋めていた。それから女性のパンティに異常な興味を示す男に、ぼくは変わっていった。近頃になって、やっと、ぼくのような男をフェチということを知った。奇巧もフェチ向きの文献を多く掲載してほしい。

○ (神戸・苦木桃太郎)

ぼくは東京在住の二十一才になる学生です。時々ぼくは、自分の中にあるのは何であるかと考えることがあります。金原さんみたいな可愛い人を、思いつき虐めてみたいと思う反面、とっても優しく美しい方になぐさめてもらいたいと思うことがあります。自分としてはSの傾向が強いと思います。が、換言してみれば、女性の美しい体に対する憧憬と言ったようなものでしょうか。ぼくはプレイの経験はありません。でも興味もありますし、機会があれば、やってみたいと思っています。

○ (東京・加藤)

安井・中川・金原緊縛写真

大手札印面紙極鮮明焼付フोट

開股羞恥責めの姿態

大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
安井喜久子 略号 八しうV

髪吊りで強烈ムチ打ち

大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
安井喜久子 略号 八したV

片足首引きつけ縛り

大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
安井喜久子 略号 八しちV

尻立て鞭打ち艶姿

大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
安井喜久子 略号 八しつV

柔肌に炸裂するムチ

大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
安井喜久子 略号 八してV

エビ縛りの鞭打ち

大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
安井喜久子 略号 八しとV

貞操帯着用鞭打ち

大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
安井喜久子 略号 八しやV

痛打にもかく美女体

大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
安井喜久子 略号 八しゆV

あぐら縛りの羞恥責

大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
安井喜久子 略号 八しよV

片脚挙げで晒す裸身

大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
中河 恵子 略号 八とはV

強烈エビ縛りで苦悶

大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
中河 恵子 略号 八とにV

膝頭縛り開股竹棒責め

大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
中河 恵子 略号 八とほV

竹棒開股足首縛り

大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
中河 恵子 略号 八とへV

股間縛りの裸身表情

大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
中河 恵子 略号 八とちV

菱縄縛り猿ぐつわの表情

大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
中河 恵子 略号 八とりV

乱痴戯騒ぎの結末

大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
中河 恵子 略号 八とぬV

菱縄縛りで床に喘ぐ

大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
中河 恵子 略号 八とるV

浣腸責めの甘い恐怖

大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
中河 恵子 略号 八とかV

浣腸液の注入直後

大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
中河 恵子 略号 八とまV

強制浣腸の各姿態

大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
中河 恵子 略号 八とみV

浣腸責めの美態開陳

大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
中河 恵子 略号 八とめV

浣腸を待つポーズ

大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
中河 恵子 略号 八ともV



Sの女王、薊魔子の美しさに呆然と致しました。趣味の方が主体の筈の辻村隆氏のことですから、四月号のお話は真実と思いますが女王様のそれを私も飲みたいと思います。そして、活火山の溶岩のように憤出してくる茶褐色の女王様の産物をも直接、口に当てがい呑み込み、私はそのMの一瞬に総てをかけたかと思えます。美しい美しいマコ女王様のお手紙をお待ち致します。(兵庫・マコの奴隷)

○ 奇ク四月号は益々さえを發揮、感謝感激しました。座頭氏の「花転々」の流麗な文章。共感を呼ぶ随想「狂気と天才」。水田真紀子の女流SMマニヤならではの習作シリーズ「女子大学生」の甘美の極致。絹吹悠紀夫氏の「辻村隆研究」は驚嘆に価するマニヤの業。渡部光雄氏の夫婦SMプレイ雑感、近代夫婦の潜在心理の表出の代弁。京子ファン待望の京子浣腸寸前の「花と蛇」。大鏡の前に並べられた、ろうそくの火をオシッコで消していく美香……「パノラマ島秘譚」のアイデアの卓拔さ。四月号の良さは枚挙にいとまがないようですが、やはりカメラ・ハントはモデルの良さから、特に珠

玉の名品でした。全裸のみを縛るのは、単なる肉体の梱包で、十年以上の昔ならいざ知らず、新しいセンスのためのSM誌への脱皮を企てる今の奇クでは、女性に全裸以上の羞恥を着せる必要があります。魔子ハントでは、それが見事に実現しました。43年8月号の魔子と較べてみますと、一段とSM女性ぶりがエスカレートしたらしい美しさが伺えました。私は、新人女性の登場よりも、むしろ評判の良かったハント女性の再登場の方が親近感を憶え喜んでいます。これは私だけではないと思いますので、出来る限り続・続の巻をハント願いたいと思います。

(神戸・山根清雄)

○ 待望の増刊号を受けとり、早鐘のように打ち続ける心を無理に落ちつかせ、早速パラパラと頁をめくっていった。今までのカメラ・ハントでは見られなかった写真もあり、買ってよかったというのが私の素直な感想だった。私も長い間、奇クとつき合いフォトを見てきたが、こんなにすばらしいものは今までになかったと思う。編集部は苦勞が充分、感じられる。その上、今までの特集号に出てくる

可憐表情の全裸縛り

大手札四枚一組 五〇〇円  
金原奈加子 略号△ゆめV

立縛り正面裸晒し

大手札四枚一組 五〇〇円  
金原奈加子 略号△ゆえV

両手吊り全裸晒し

大手札四枚一組 五〇〇円  
金原奈加子 略号△ゆひV

雁字搦目後手縛り

大手札四枚一組 五〇〇円  
金原奈加子 略号△ゆあV

股間縛り柔肌責め

大手札四枚一組 五〇〇円  
金原奈加子 略号△ゆもV

猿ぐつわ開股責め

大手札四枚一組 五〇〇円  
金原奈加子 略号△ゆにV

豊満な臀部強烈責め

大手札四枚一組 五〇〇円  
金原奈加子 略号△ゆほV

強制全裸開股責め

大手札四枚一組 五〇〇円  
金原奈加子 略号△ゆみV

股間縛り悶える

大手札四枚一組 五〇〇円  
金原奈加子 略号△ゆるV

全裸縛りに羞らう

大手札三枚一組 四〇〇円  
金原奈加子 略号△ゆへV

私の妊娠腹を見てね

大手札四枚一組 五〇〇円  
中河 恵子 略号△ゆわV

縛られた妊婦横臥す

大手札四枚一組 五〇〇円  
中河 恵子 略号△ゆよV

被虐に燃える全裸妊婦

大手札四枚一組 五〇〇円  
中河 恵子 略号△ゆぬV

尚も見せたい妊婦腹

大手札四枚一組 五〇〇円  
中河 恵子 略号△ゆるV

股間縛り首縄正面

大手札三枚一組 四〇〇円  
長井葉津子 略号△よれV

両手吊り正面晒し

大手札三枚一組 四〇〇円  
長井葉津子 略号△よそV

全裸高小手の麗身

大手札三枚一組 四〇〇円  
長井葉津子 略号△よのV

全裸股間縛りの媚態

大手札三枚一組 四〇〇円  
長井葉津子 略号△よやV

強烈な変型エビ縛り

大手札三枚一組 四〇〇円  
長井葉津子 略号△よいV

正座猿ぐつわの仕置

大手札三枚一組 四〇〇円  
長井葉津子 略号△よふV

凄絶海老責め地獄

大手札三枚一組 四〇〇円  
長井葉津子 略号△よえV

女体二つ折り縛り

大手札三枚一組 四〇〇円  
長井葉津子 略号△よぬV

あぐら縛り全裸晒し

大手札三枚一組 四〇〇円  
長井葉津子 略号△よあV

イルリの浣腸責め

大手札三枚一組 四〇〇円  
長井葉津子 略号△よたV



写真は、単に縛りを表面から、きれいに見せていた逃げの写真が多かったが、今回は正面から、縛りを追求しているのである。この増刊号の中には、読みものが二つある。辻村氏と塚本氏の体験談である。どちらも事実であるので迫力がものすごく、私自身が撮影の場所へ引きずりこまれ、自分で縄をしっかりと握り、モデルを踏みつけ縛っていたのだった。辻村氏の縛りの歴史も興味深い。警察での取り調べ、最初の縛り写真の作成。その中で最も心を奪われたのは、私自身、愛情を感じフォトも特別に集めていた梨花嬢との出会い。そして何も知らないウブな彼女をマゾに飼育していく過程が伊吹真砂子を仲にいれて生々と流れていく。カットとして入れている二人のフォトの中でも、二人が抱き合っている、梨花が縛られた伊吹を自由な両手で背中を抱きしめており、伊吹は股間縛りの縄が深々と尻に喰い込みながらも、片足をあげて梨花にからませている。すばらしいの一言につきる。その他、つぎつぎと辻村氏の前に現われては裸に剥かれ、プレイにフォトに浮沈し中には浣腸プレイ等で名をあげた

東浦ひかる。オシメカパーと放尿で印象の深い竹野ひろ子。その他モデルとの出会いが続く。辻村氏の緊縛歴史が一目で分かるよう配慮して載せてあり、長年の読者には感深いものがある。塚本氏も古い読者には、おなじみのグラビアの花であった絹川文代や大塚啓子等の話があり、新しいところでは一月号初出場の前田真知子の話。二人の体験談を読んできて、なつかしいモデルが続々でてきてその当時の自分のことにも、なつかしい思いが浮かんできた。こうして、あらためてモデルをみつめていくと、奇巧のモデルは体の美しい人が多かったなあと、つくづく考えさせられる。こんな美人モデルの滑るような女体の隅々まで観察したり、縛ったり、はては浣腸までして、なんと二人が羨ましいことか。(宇都宮・梶 美尾)

大阪の中川様。BGからホステスになられ、現在二十八才とのことですが、今が一番、脂の乗り切った頃で、SMの感知が伺われます。貴女は縛りに大変、興味をお持ちの御様子。でも始めからプレイは出来ないことです。先ず、見

## ☆浣腸関連資料の部☆

## 只今浣腸実施中

大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
東浦ひかる 略号 (かみ)

## 強制 空 気 浣 腸

大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
東浦ひかる 略号 (かく)

## 百CCのポンプ浣腸

大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
東浦ひかる 略号 (かな)

## 浣 腸 責 の 極 致

大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
東浦ひかる 略号 (かむ)

## 女体浣腸シリーズ

大手札十二枚一組 略号 一五〇〇円  
梨花悠紀子 略号 (れち)

## 強制 女体浣腸三態

大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
絹川 文代 略号 (きか)

## イルリガートル浣腸

大手札十二枚一組 略号 一五〇〇円  
梨花悠紀子 略号 (いるり)

## 太い浣腸器で浣腸

大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
東浦ひかる 略号 (かふ)

## 自分で浣腸をする女

大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
遠藤百合子 略号 (ゆか)

## 浣 腸 器 と 女

大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
絹川 文代 略号 (ほの)

## エネマ・シリーズ

大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
大塚 啓子 略号 (るい)

## イルリの嘴管挿入

大手札五枚一組 略号 六〇〇円  
大塚 啓子 略号 (るは)

## 女体浣腸プレイ

大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
大塚 啓子 略号 (ほは)

## 進ばしる浣腸液

大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
大塚 啓子 略号 (ほい)

## 浣 腸 後 の 排 便

大手札五枚一組 略号 六〇〇円  
大塚 啓子 略号 (へき)

## 便意に苦悶する女体

大手札五枚一組 略号 六〇〇円  
大塚 啓子 略号 (へか)

## 浣 腸 さ れ る 清 子

大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
山原 清子 略号 (かる)

## 浣 腸 に 興 ず る 女

大手札八枚一組 略号 一三〇〇円  
山原 清子 略号 (かへ)

## 浣 腸 に 悶 える 女

大手札七枚一組 略号 一二〇〇円  
山原 清子 略号 (かに)

## イルリガートル

大手札十枚一組 略号 一五〇〇円  
山原・東浦 略号 (かも)

## グリセリン溶液注腸

大手札六枚一組 略号 一〇〇〇円  
山原・東浦 略号 (かて)



て、聞いて充分のみこまれてから  
実際に行なわねばなりません。小  
生が初歩よりお話をさせて頂きま  
すから、御安心しておまかせ下さ  
い。  
(大阪市・原浩)

○

貴誌、益々御隆盛、大慶に存じ  
ます。さて思案熟考の上、勇気を  
奮って、ここにペンを取ります。  
正直に、一般常識の社会環境で人  
並の生活を平々凡々と送るべきか  
？ 所詮、男女の世の中なれば、  
美人にかしずいて家族や友を捨て  
ても喜びを得るべきか？ それと  
も一生、この孤独な中で悶々と毎  
日を過ごすべきか、と迷い続けま  
した。現在は世間一般の社会では  
他人の幸福の追求等、非常に困難  
な時世故に、私のように社会から  
の逃避を望むのか？ あるいは真  
に己のみの満足の追求心からなの  
か……？ 欧米滞在中の二年間を  
除けば、貴誌愛読期間は六年以上  
になります。SMプレイは殆ど  
未経験ながら、奴隷志願を致しま  
す。魔子女王様、東区的女王様、  
絹川文代女王様、山原清子女王様  
その他、女王様の御照会を切にお  
願い致します。もちろん奴隷とな  
るからには覚悟致しております。  
人間便器、犬、浣腸、舌による御

奉仕、モルモット、男性自身を輪  
ゴムで強くとめての、タバコによ  
る灸等々。あるいは複数女性環境  
の中での恥辱や、人間便器への強  
制。その他、如何なる凌辱をも喜  
々として行ない得るよう、御飼育  
下さい。また、女王様の黄金の宝  
物をも喜んで食べ、見世物の商品  
として顧客にサービスし、一生、  
奴隷として飼育可能かどうかテス  
トを致して下さるようお願い申し  
上げます。

(徳島市・神酒 望)

○

平凡で静かな二人だけの幸せを  
夢見ながらも、願望に悩む夫婦で  
す。夫36才、妻35才で一女があり  
ます。双方とも再婚。私は堅実な  
小企業者で、二年前、現在の妻と  
結ばれ、以後、他との交渉は全く  
ありません。また私は青春期に同  
性にアヌス提供の経験永く、現在  
は心情的M過大です。妻は、この  
上なく心優しい淑かな性格ですが  
その反面、気の若い情熱的なところ  
があります。器量は、かなり良  
い方です。粘っこい情熱的な肌は  
生々とし、お色気たっぷりです。  
誰が見ても30代には見えません。  
また妻が外出すると、どこに目を  
つけられるのか、私がついていて

浣腸と便意の苦悶

大手札三枚一組 四〇〇〇円  
遠藤百合子 略号(のけ)

高圧空気浣腸

大手札三枚一組 四〇〇〇円  
大塚 啓子 略号(むい)

浣腸場面大写真

大手札三枚一組 四〇〇〇円  
大塚 啓子 略号(むは)

施される浣腸

大手札三枚一組 四〇〇〇円  
大塚 啓子 略号(むろ)

浣腸をする女

大手札三枚一組 四〇〇〇円  
遠藤百合子 略号(ゆか)

自ら施す浣腸

大手札三枚一組 四〇〇〇円  
大塚 啓子 略号(ちぬ)

浣腸器を弄ぶ女

大手札三枚一組 四〇〇〇円  
大塚 啓子 略号(ちり)

浣腸を施される女

大手札三枚一組 四〇〇〇円  
大塚 啓子 略号(ちら)

浣腸後介添排便

大手札六枚一組 一〇〇〇〇円  
山原・東浦 略号(かね)

さえ、いたずらされたいときがな  
いぐらいで、遂には妻自身、露出  
の遊びを世間から教えられた形で

シリンドーにて浣腸

大手札六枚一組 一〇〇〇〇円  
山原・東浦 略号(かた)

イルリガートル嘴管挿入

大手札六枚一組 一〇〇〇〇円  
山原・東浦 略号(かち)

アヌス浣腸補助

大手札四枚一組 七〇〇〇円  
山原・東浦 略号(かの)

浣腸に興ずる清子

大手札四枚一組 五〇〇〇円  
山原 清子 略号(うも)

浣腸される浣腸マニア

大手札四枚一組 五〇〇〇円  
山原 清子 略号(うわ)

浣腸悦楽独りプレイ

大手札五枚一組 六〇〇〇円  
美木乃々子 略号(ぬる)

施される浣腸の美味

大手札五枚一組 六〇〇〇円  
美木乃々子 略号(ぬか)

挿入された嘴管

大手札四枚一組 五〇〇〇円  
大塚 啓子 略号(るて)

襲いくる浣腸器

大手札二枚一組 三〇〇〇円  
大塚 啓子 略号(るち)

女体浣腸独り遊び

大手札三枚一組 四〇〇〇円  
大塚 啓子 略号(ると)

す。必要もないのに頼まれてパー  
トに出て行く毎朝の通勤バスでも  
長時間、背後から下半身を押しつ



けて来る特定の若い人がいるそうです。その素直な告白を聞くとき何と心の安まることでしょう。怒るより男好きのする生まれつきの不幸に同情し、熱狂と恥辱の夢うつつをさまよって一層固く結びついていきます。私は妻のミニの似合う後姿を見送るとき、この多難妻を心底から愛して一生を送るのかと思うと、甘い悲しみが胸にこみ上げてくるのです。妻の受ける欲びは私の欲びと、新境地を拓きたいと願う私達は、迎え入れて下さる多くの港を予見しています。それこそ私の望んでいた最大の苦痛の一つでなくて何でしょう。

(京都市・小幡希実男)

KK誌益々発展のようす、ご同慶のいたりです。しばらく御無沙汰しました。45年3月号で、体験手記「飼育の難しさ」そして5月号で「拝啓、編集部殿」を発表以来、毎月読後感を纏めて編集部へ一筆をと思いつつも、ついつい筆が重く、お便りできないまま、歳月は流れてしまいました。私が発表しました丁度その頃、時を同じくして浅田守様が調教の近況を発表しておられ、良い意味でのライバル意識にかられておりましたが

どうされたのでしょうか。私と同様、一年以上も御名前が拝見できないのはKK誌一ファンとして寂しく感じられます。しかし私は、丁度その間、一年。プレイだけはまじめに？ 続けてきており、彼女も月に二度、三度の会う瀬を待つように育ちました。プレイフトもフィルムにして30本ぐらい、ベタで600駒ぐらいになりました。しかし当時の手記で「私はゴム、浣腸責めなどは今のところ余り興味湧きません(いずれは、やってみるかも知れませんが)」と述べているとおり、縄のみを用いた女体の美しいフォームが主で数回、金属製のネックレスやアクセサリーベルト等を一緒に買いに行き、それらを添品して扱ったのみでした。が、今年のはじめ頃、彼女が便秘性なので、時々背中や腰が痛いという話から、イチジクを入れたら、それから縄のみのプレイ飼育の時に相当の日数を要したのに比べて、最近私よりそれを待つようで、言葉で表わさなくても態度でそれが十分にわかるようになり、なるほど！ 私は私なりで彼女をみていたけれど一方的だったのだなあと、ひとり、ほくそ笑んだり反省もしました。い

〔異色緊縛 女性フォト集〕

△光沢印画紙極鮮明焼付▽

首縄高小手全裸縛り

大手札三枚一組 五〇〇円  
シーラ・ケニー略号△いき▽

縄の痛さに耐える表情

大手札三枚一組 五〇〇円  
シーラ・ケニー略号△いめ▽

股間縛りは凄く締まる

大手札三枚一組 五〇〇円  
シーラ・ケニー略号△いあ▽

卓上の緊縛裸身は躍る

大手札三枚一組 五〇〇円  
シーラ・ケニー略号△いて▽

両手吊りの全裸体縛り

大手札三枚一組 五〇〇円  
シーラ・ケニー略号△いた▽

投げだした被縛女体

大手札三枚一組 五〇〇円  
シーラ・ケニー略号△いま▽

麻縄は白人の女体を裂く

大手札三枚一組 五〇〇円  
シーラ・ケニー略号△いゆ▽

縛られるのいや!

大手札三枚一組 五〇〇円  
シーラ・ケニー略号△いせ▽

私の裸をジロジロ見ないで

大手札三枚一組 五〇〇円  
シーラ・ケニー略号△いし▽

日本式後手縛りの痛さ

大手札三枚一組 五〇〇円  
シーラ・ケニー略号△いそ▽

白人女性をいたぶる魔

大手札三枚一組 五〇〇円  
シーラ・ケニー略号△いや▽

金髪美女も縛られて台なし

大手札三枚一組 五〇〇円  
シーラ・ケニー略号△いも▽

異国女性の被虐の表情を狙う

大手札三枚一組 五〇〇円  
シーラ・ケニー略号△いむ▽

美しい白人緊縛の姿態

大手札三枚一組 五〇〇円  
シーラ・ケニー略号△いけ▽

逆エビ責めの外人女性

大手札三枚一組 五〇〇円  
シーラ・ケニー略号△いひ▽

雁字搦目で椅子に縛る

大手札三枚一組 五〇〇円  
シーラ・ケニー略号△いえ▽

落花狼籍のしとねの上で

大手札三枚一組 五〇〇円  
シーラ・ケニー略号△いう▽

妖艶な縛られぶりの沖縄美人

大手札三枚一組 四〇〇円  
座間 明子 略号△ほけ▽

股間縛りの痛さに開股か

大手札三枚一組 四〇〇円  
座間 明子 略号△ほへ▽

悶える厳しい縛りの明子

大手札三枚一組 四〇〇円  
座間 明子 略号△ほて▽

椅子で演ずる明子の痴態

大手札三枚一組 四〇〇円  
座間 明子 略号△ほと▽

観念して縄に身を任す

大手札三枚一組 四〇〇円  
座間 明子 略号△ほあ▽

縄は豊満な柔肌をくびる

大手札三枚一組 四〇〇円  
座間 明子 略号△ほさ▽



ずれ、また焼増して誌上に発表するつもりです。なお今後は、私が彼女にイチジク挿入の飼育？をされた浣腸責めについて少し研究し、フォトをまとめてみたいと思っている次第です。読者の皆さん方から、それらに用いる責め具、及び方法の知識を得たいと願っております。小出香子様。私も最近まで下町におりましたので港区と聞いただけで、お近づきを感じました。ひとりでプレイを楽しまずに連絡をして下さい。大阪北区の堀井真佐夫様、東京都の石田剛一様。近況とフォトを手記にして発表して下さい。品川区の室生繁二様、結婚してまだ二年というのに今から縄を使うなんて、奥様もさぞ、びっくりした事でしょう。プレイとキャメラマンは、なかなか両立し難いことです。頑張ってください。(神奈川・東一男)

○ 緊縛美の粹を集めた臨時増刊号を拝見しまして大変、心を打たれました。私はゴム責めに興味を持っていました。現在、それらの責め写真の分譲を行っていない様子なので、一度、貴誌においてゴムマニアの特集か臨時増刊を発売して下さる様おねがいします。

(熱烈なゴムマニアの一青年)

○ 大阪女の深田菊子様、貴女の好きな単語、そして言葉、拝見いたしました。貴女は、多分にナルシストだと思ふのは、私の間違いでしょうか。人間誰しも、そういう一面はありますが、しかし、貴女の好きな単語、言葉からの第一印象が、それだったのです。間違っていたら失礼。でも貴女を満足させてみたいと思っている私です。貴誌を知った時の驚きと胸の高鳴り、今も忘れる事はできないものです。まあ残念ながら、我家族は、正常(?)なる人種ばかりなので、今もって自分一人の楽しみとしておりますが……。しかし正常なる人種という俗物達の、快樂の世界が、いかに狭い事か。でき得ることなら、この甘美なる世界を、全ての人々に知らしめたいと思ふのは、私だけでしょうか、反面、知らない者、知ろうとしない者が、存在するが故に、一層、甘美なる世界なのかも知れませんが……。サディズム、マゾヒズムそして、それに附随する諸々の世界は、野蛮、無知なる人達には、理解できない崇高な快樂の園なのだと思います。乱筆にて御免。

美しき抜群の正面を晒す

大手札三枚一組 略号△ほゆ▽ 四〇〇円

悦庵にむせぶ美貌のひと

大手札三枚一組 略号△ほし▽ 四〇〇円

責められて恍惚境をさまよう

大手札三枚一組 略号△ほひ▽ 四〇〇円

足挙げ縛りと開股縛り

大手札三枚一組 略号△ほも▽ 四〇〇円

超羞恥責めの極致

大手札三枚一組 略号△ほせ▽ 四〇〇円

編集諸氏の御健勝と、貴誌の益々の発展を祈ります。

(大阪・豊中トシハル)

○ 大阪市北区の深田菊子様。奇譚クラブ五月号で拝見、早速お便り申上げる次第です。私は三十九才のS・M両趣味の男性で、奇譚クラブを創刊号より愛読しておりますが、一人子だったためか気が弱く、今までに数回、Mを体験しましたが、それも、ほんとうの初歩だけです。S・Mに対しては、人に負けないぐらい関心はあるのですが、貴方様も経験はなく関心が非常に、おありのようです。ぜひ一度、同じような初歩人同志で勉

股縄は何んでも知っている

大手札三枚一組 略号△ほす▽ 四〇〇円

鼻責めの悦楽境地

大手札三枚一組 略号△ほめ▽ 四〇〇円

鼻を愛撫する責め

大手札三枚一組 略号△ほみ▽ 四〇〇円

蠟燭責めと臀部打ち

大手札三枚一組 略号△ほに▽ 四〇〇円

喰い込む股間縛り

大手札三枚一組 略号△ほん▽ 四〇〇円

強し、又時には揃ってS・Mの先輩の御指導を、うけようではありませんか。ぜひ一度お会いしたく存じます。(京都市・高辻清生)

○ 小杉千恵様。5月号にて久し振りの貴女のお便りを拝見し、私はますます本当の貴女を知りたくなくなりました。甘い薄紫色のフィリリングを感じさせるような貴女を想像しながら、今日もSMへの限りない欲望と快樂とを感じております。しかしSMとは所詮は、もつと生々しい赤裸々な所業のようです。申すまでもなく、アブノーマルの世界を追い求める私達にとつては、その生々しい現実こそが夢



であり、陶醉であり、生き甲斐でもあるのです。そういう意味では貴女のお便りにありました、御主人に対する御不満も私には、よく解ります。私も又、貴女と同じ悩みや欲求を九年近くも抱いて来たS的な人間の一人なのです。あまりにもノーマルな人間には、SMという世界には、とてもついて来れないのが当然なことかも知れませんが……。それだけに人一倍、私のSMに対する執着も根強く心の奥底で、うず巻いているのでしようか、しかしSMの世界を切り離して自分の人生を考えたくありません。私は今、自分をS的な人間と申しましたが、S九十パーセントM十パーセントぐらいでしょう。そして決して、やみくもに苦痛のみを与えて欲びに浸る粗暴なSではなく、どちらかといえば羞恥責めや欲喜責めを好む淫蕩派の人間といった方が適切かも知れません。SMプレイを行なうにしても、苦痛や羞恥のうちに、必ずそれ以上の甘美さを伴っていることが大切だと思っております。そしてプレイをすることに依って、SもMもお互いがより高め、昇華させ、精神的、肉体的に深い欲びを感じとることが出来るのではな

いでしょうか。いろいろ勝手なことを書き並べました。是非一度、逢ってSMの話を心ゆくまで交し楽しいひと時を過ごしたいと思ひます。

(大阪市東成区・大木 喬)

○ 大阪市北区の深田菊子様。五月号で、貴女のお便り拝見させて、いただききました。私も二十二才になる独身の平凡な会社員です。貴女を、知ることが出来、たいへんうれしく、幸せに思います。ぜひ友達になって下さい。お願いいたします。私も経験はありません。しかし、貴女の心を満足させる自信はあります。貴女は文を書くのが苦手と書いておられますが私も得意ではありません。でも今、真剣に貴女のことを思っています。どうか私の心をくみていていただき、夢を実現させて下さい。一日も早く貴女と会う日が来ることを心からお待ちいたしております。

(三重県・西田生)

○ 五月号の東京の折原様の投稿を拝見し、私も思い切ってペンを持ちました。折原様は、Sの男性をお求めのようですが、私は出来ることなら、Mの男性と結婚したい

編集部特写緊縛女体資料

逆さ吊りの臨月妊婦

大手札三枚一組 略号△さめ 五〇〇円

金原奈加子

両手吊りの臨月妊婦

大手札三枚一組 略号△さめ 四〇〇円

金原奈加子

若妻初妊娠の哀歎

大手札三枚一組 略号△さい 四〇〇円

金原奈加子

妊婦の全裸縛り全身

大手札三枚一組 略号△さみ 四〇〇円

金原奈加子

妊婦腹の緊縛側面

大手札三枚一組 略号△さる 四〇〇円

金原奈加子

強烈縛り妊婦責め

大手札三枚一組 略号△さま 四〇〇円

金原奈加子

見てほしい臨月腹

大手札三枚一組 略号△さと 四〇〇円

金原奈加子

妊婦全裸の全身肢体

大手札三枚一組 略号△ささ 四〇〇円

金原奈加子

全裸正面の縄掛け

大手札三枚一組 略号△れろ 四〇〇円

小池美喜

柔肌の高手小手縛り

大手札三枚一組 略号△れほ 四〇〇円

小池美喜

後手首を縛られた少女

大手札三枚一組 略号△れと 四〇〇円

小池美喜

飼育された美少女縛り

大手札三枚一組 略号△とそ 四〇〇円

小池・松山二嬢

全裸の美女を連縛する

大手札三枚一組 略号△とれ 四〇〇円

小池・松山二嬢

白肌に喰い込む縄目

大手札三枚一組 略号△とわ 四〇〇円

松山真樹子

一糸まとわぬ柔肌縛り

大手札三枚一組 略号△とら 四〇〇円

松山真樹子

開陳した華麗縛り肢体

大手札三枚一組 略号△とゆ 四〇〇円

松山真樹子

縄に喘ぐ諦観の相

大手札三枚一組 略号△とえ 四〇〇円

松山真樹子

松山真樹子

松山真樹子

松山真樹子

松山真樹子

松山真樹子



と考えております。私は現在26才で、ある商事会社に勤めております。ぐずぐずしていたら婚期を逃がしてしまふ、ということでも周囲も、やっきになつて私の所に縁談を持ち込んで下さるのですが、私は全くその気になれません。といひますのは、学生時代に同じ研究室の男子学生にSMプレイを教えられ、その男性から「女王様」として、あがめられた甘美な生活が忘れられません。その男性とは、一年程で別れSMプレイもそれ以来、今日まで私の身辺から消えてしまいました。でも時折、買い求める奇クを読むたびに、楽しかった彼との生活が、まざまざと記憶によみがえるのです。柔らかに、私の素足にからみつく彼の舌。人の肌にもチをふるうことの、何ともいえない快感。初めてネクタイルという言葉を見た時の驚きと羞かしさ。社会人として結婚する以上、学生時代の遊びとは違う事は良く理解しているつもりです。毎日毎日、日常の生活で、Sとしてのふるまいをしようとは毛頭、考えておりません。月に何度か、一定の日を定めて思う存分、私のS性を満たして頂きたいのです。血を見るようなことは好きであり

ません。肌が赤らむ程度のムチ打ち、人間便器、それに続く舌のサ―ビス等が、私の好きなプレイです。私は身長158センチ、体重46キロ、バスト80、ウエスト60、ヒップ88、男の人から美人だといわれたことが何度かあります。全国のM男性からのお便りをお待ちしております。(北海道・山本頼子)

○

以前にも、どなたかいていたことであるが、昨今の奇クを読んで感ずるのは、夫婦プレイが大手をふつてまかり通つていふことではないかと思う。我ら独身者にとつては、まことに羨ましい限りである。写真や短文で誌上に発表してくださる人々に対し、羨ましいと思う心の一方では、それぞれの生活の一片を多数の目の前に表わしてくれる気持ちに対し、頭の下がるのみである。ふり返つてみれば、今までも、かなりの夫婦プレイが現われ、今なお続いている人や、いつのまにか春の雪のように我々の心の片隅に小さな思い出を残して消え去った人々等、多数の御夫婦の人達が、独身者の夢と、憧れであるのは今も昔も変わりないと思う。今日のように、SMが一種の商品のようになって

SとMの甘い一瞬

大手札三枚一組 四〇〇円  
松山・小池二嬢 略号△とさ▽

縄に通う愛情の焰

大手札三枚一組 四〇〇円  
マキとミキ 略号△とけ▽

相愛の極致を描く二女

大手札三枚一組 四〇〇円  
マキとミキ 略号△とな▽

鞭に狂う悦虐表情

大手札三枚一組 四〇〇円  
関谷富佐子 略号△らて▽

鞭打ちにうねる肢体

大手札三枚一組 四〇〇円  
関谷富佐子 略号△らあ▽

足吊りの被虐肢体

大手札三枚一組 四〇〇円  
関谷富佐子 略号△らえ▽

美しきマソの境地

大手札三枚一組 四〇〇円  
関谷富佐子 略号△らせ▽

裸後手柔肌縛り

大手札三枚一組 四〇〇円  
佐々木真弓 略号△こよ▽

乳房強烈膨隆責め

大手札三枚一組 四〇〇円  
佐々木真弓 略号△こわ▽

海老責めに苦悶する

大手札三枚一組 四〇〇円  
佐々木真弓 略号△こお▽

全裸の緊縛全身晒し

大手札三枚一組 四〇〇円  
佐々木真弓 略号△こる▽

煙草責めに喘ぐ女

大手札三枚一組 三〇〇円  
佐々木真弓 略号△こぬ▽

抱擁する美女二人

大手札三枚一組 四〇〇円  
ミキとマキ 略号△とや▽

柔肌と柔肌のレス狂態

大手札三枚一組 四〇〇円  
ミキとマキ 略号△とよ▽

緊縛麗姿に映えるライト

大手札三枚一組 四〇〇円  
佐々木真弓 略号△こほ▽

臀部強調後手縛り

大手札三枚一組 四〇〇円  
佐々木真弓 略号△こる▽

羞恥に悶える全裸緊縛

大手札三枚一組 四〇〇円  
佐々木真弓 略号△こに▽

ホステスの緊縛姿態

大手札三枚一組 四〇〇円  
佐々木真弓 略号△こち▽

二つ折りで責める女体

大手札三枚一組 四〇〇円  
佐々木真弓 略号△こへ▽

脈打つ全裸の臨月腹

大手札三枚一組 四〇〇円  
中河恵子 略号△こふ▽

臨月腹の草紐股間縛り

大手札三枚一組 四〇〇円  
中河恵子 略号△こや▽

猿轡の臨月妊婦腹縛り

大手札三枚一組 四〇〇円  
中河恵子 略号△この▽

卓上の股間縛り狂態

大手札三枚一組 四〇〇円  
長井葉津子 略号△こそ▽

羞恥の足挙げ責め

大手札三枚一組 四〇〇円  
長井葉津子 略号△これ▽



## 次号(七月号)は五月二十五日に発売いたします

しまい、皆がSMに一樣は興味を示すが、平凡な結婚をして子供を産み、その成長に生甲斐を感じて一生を終わるのが正常なのだという道徳が支配している現在の社会において、結婚後もそれぞれ良きパートナーとして、プレーを楽しんでいる人達は非常に幸福だと思う。広い日本の中には良き理解者を求めている人が多数いるのではないだろうか。フリーセックスの時代といわれる、今日においてすら、SMを話し合うということがいまだに異端視されている。自由自由と叫ばれていて、少しでも社会一般の枠からはみ出すと異常な者として見つめるのが、今の現実である。そんな中において、良き理解者であり、協力者を見出した人達は大変幸せだといえるのではないだろうか。とりとめのないことをいってしまったが、夫婦プレーは我々独身者にとって素晴らしい夢であり、大きな憧れである。この夢が、いつの日にか現実のものとなることを願ってペンを置きます。

(東京都大田区・今世独人)

## ○

大阪市の深田菊子様。五月号で貴方のお便り拝見しました。私は三十五才になる飲食店主です。貴女のような方とお友達になれたならとペンを取りました。私は、かなりなSだと思っております。責具もいろいろ持っておりますが、未だ、すてきなパートナーに逢えません。私のような者でもよろしければ、お連絡くだされば幸いです。又、秘密は絶対守ります。

(名古屋市守山区・責 大造)

## ○

本誌を読み始めて約五年になりますが投稿するのは初めてです。最近若い女性の投稿も多くなりうれしく思っております。当方、毎日大阪まで通勤している、二十三才の会社員です。五月号の深田菊子様、小杉千恵様。いかがですか。僕とプレイしませんか。以前にも女性を縛った経験もありますし、色々な恥かしいポーズに縛りつけ思いきり責めてみたいと考えっております。きつと満足してもらえますでしょう。それから上田市の

南山孝子様。時々信州に旅行します。今度そちらに行きました時は「被虐の旅シリーズ」のようなプレイしたいです。気の多い者と思われませんが、どなたか、よろしく頼みます。(奈良市・はっとり)

## ○

五月号の長谷良子さんの投稿を拝見。Aマニアの一人として非常にうれしく思いました。小生もA責めについては、いままで、いろんな方法を試みてきました。その一つとして長谷さん同様、腔鏡を利用したこともあります。経産婦用の大型ではなく、未産婦用のもっとも小型のものを使用したのですが、それでさえあまりに激しく苦痛を訴えますので、止むなく断念せざるを得ませんでした。『涙のランウェイ』(四十五年十一月号)はそうした小生の満たされなかった思いを創作のうえで果たしたものですが、奇しくも長谷さんが同じ方法で拡張を強制されておられるのを知り、その苦痛に耐えておられる長谷さんの、がまん強さに驚嘆すると同時に、そこまで長谷さんを調教し尽した男性に限りない、せん望の思いを抱く次第です。小生の場合は直経四・五センチ、四センチ、三・五センチ

の硬質ゴム棒を、それぞれ長さ八センチに切り、先端をグラインダーでけずって丸くした上、根本にゴムの鐙をはめた三種の自家製の拡張棒を使用しています。ただあまりに広く拡張してしまいますと、責めでは満足できてもあの甘美な醍醐味を損うおそれがでてきます。広くも狭くもない——つまり状態にAを保っておくのは、なかなか難かしいですが、小生の経験ではAを使用する数時間前にワセリンをたっぷり塗った上で中型(四センチ)の拡張棒を挿入しアヌバンドでしっかりと固定します。そうしておきますと自然に括約筋が弛緩し、まるで軟体動物の様に柔らかくなつてすばらしい緊迫力と吸引力をみせてくれます。むろん使用する直前に高圧浣腸を施し、もっとも太い12号直腸ブジーで入念にマッサージをくり返します。小生は「ダブルウェイ」を愛好していますが、長谷さんはどうでしょうか。いずれにしてもあなたの豊かな体験記に、お目にかかれる日を、楽しみにしています。(西宮市・長谷田亀治)

## ○

最初のころは、奇クを買うのが







# 編集後記

○「不可解な女性」の媚に惑わされ「二度目の」女房と別れたが「深夜の下着」を抱きしめて「甘いゲーム」を思い出し悔ゆる気持の「大噴火」。「SM界の女帝」とは「浣腸プレイに魅せられ」た彼女のことでと気がつけど、もはや通じぬ「四月」バカ。

○勝手なときだけ思い出す「M派」の友を訪ねたが、己れが壊した「瓦礫の塔」しっかり「輝」締めこんで「パノラマ島」の端にでも建て直せよとわらわれて「ヨンボリ帰る」「下宿」部屋、見上げる天井に浮び出る「吊るし責め」した思い出や「赤ちゃん責めの構想」もホゾ囓む念を増すばかり。

○「女体拷問」甘受して「無残の刑」をもネ

ダツたに、いつしか変りてウーマンリブ「則天武后」の影響か？ 彼女の示せしマゾ性の「奴隷牝」たるよろこびは「花の蕾の散る」ように、Sの女王に変化して「おむつ・おしめ」を振りかざし、捌く縄目の見事さよ。思わぬ甘美にとまどって、舌を噛むよなテレ隠し「シャオオチェンハオ」なんて云い「アブ的記事」のそのままに「花と蛇」の「妄想」を、もろくも捨てて酔い痴れしオンナ上位の「幻想帝国」。

○されどときたま思い出す「被縛女体」の悩ましさ、Sの女王にいい兼ねて、酒場の秋波についてフラリ「二つの鍵」を持ったのが、このわびしさのとなりし。……とまあ、苦しまぎれの本号目次綴り方のオソマツ、題して「浮気」……いえ、体験ではありません。

## 懸賞原稿募集

### 体験、告白、手記

読者の皆さまが自分で親しく体験されたことや、かくされた性癖や性向について語ってみたいと思われたこと、或はこれだけはどうしても書き残しておきたいと考えられ、た事を大胆にお寄せ下さい。採用しました原稿には三千元以上の賞金を贈呈します。

### 創作、小説、物語

本誌の編集内容に適した特異な素材を駆使した力作をお待ちします。すべて自作の未

発表作品に限ります。これはと思う作品は必ず誌上に取ります。腕試しの意味で奮って御投稿願います。採用篇には賞金十万元返贈呈。

### 感想、論評、批判

本誌に関連したものでしたら話題の内容は問いません。忌弾なき皆さまの御意見をお待ちします。採用篇には二千元以上の賞金を呈します。

### 映画、雑誌、通信

映画、雑誌、演劇、新聞、単行本或はその他見聞などで特に興味をお持ちになった事項の通信をお待ちします。出

### 読者通信原稿

巻末の通信欄は読者の皆さま方のための公共の広場として開放しています。御遠慮なくお寄せ下さい。

## ☆ 本誌御購読の葉 ☆

予約に限り  
一月分(1冊)三五〇円(送20円)  
三月分(3冊)一〇五〇円(送共)  
半年分(6冊)二一〇〇円(送共)

本誌は毎月二十五日に全国各地の有名書店にて一斉に発売いたしますが、入手困難の方は直接代金御送付の上、御予約下さい。重包装して確実に発送申し上げます。局留の方々は二十五日頃受領して下さい。

## 奇譚クラブ 定価 三五〇円

### 六月号

(第二十五巻第六号)  
(通刊第二百八十号)

昭和四十六年五月二十日 印刷  
昭和四十六年六月一日 発行

編集人 杉原 虹児  
発行人 吉田 稔  
印刷人 北村 俊夫

大阪市住吉郵便局私書函第四十一号

## 発行所 暁出版株式会社

〒558 振替口座大阪四二七八三番  
(昭和三十一年四月二〇日第三種郵便物認可)  
(昭和四十二年四月二一日)  
国鉄大局特別取扱承認雑誌第二一〇号

## ☆ 書店の皆様方へお願い ☆

○本誌は口絵、グラビア写真の廃止、挿絵の削減、内容の改訂等につとめ、青少年の健全なる育成に努めることといたしております。いような充分に注意して編集いたしました。りますが、本来成人向として発行を企図しており、下す関係上、十八才未満の方には絶対お願い申上げます。特にくれぐれもお願